
魔法先生ネギま ～ 幻想に生きる者

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 〜幻想に生きる者

【Nコード】

N86750

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

ある目的を持って、兄妹は転生する。いずれ、自分達のいた世界で起きるであろう悲劇を食い止めるために……………。

この作品は「魔法先生ネギま！」と「東方Project」の二次創作作品です。

さらにこの作品には、転生、アンチ、原作改変、キャラ崩壊、多数のネタバレなどの要素が含まれます。このような要素が嫌いな方は、今すぐ回れ右してください。

なお、読者さんからの指摘で……極めて強いアンチ要素が含まれている事が発覚しました。原作好きな方、ネギファンの皆さんは回れ右した方がいいかもです。

第1話：まだ始まらない物語（前書き）

というわけで……他の方のネギま小説を読む内に、何だか書きたくなってきたので……。

「リリカルワールドの破壊者たち」を中心にやるので、更新は不定期になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

……ネギまの小説を書くの久しぶりだから、緊張するなあ。

第1話：まだ始まらない物語

俺、風峰陸斗は普通とは違う人生を歩んでいる。

まず……ぶっちゃけると俺は“魔法使い”と呼ばれる者達に当てはまる。

……いや、この言い方は正確じゃない。あくまで勢力としての魔法使いであって、本当の魔法使いではない。
何せ、俺は魔法を使えないのだから。

「風峰さん、どうかしましたか？」

「……いや、何でもない」

同僚の瀬流彦がそう声をかけてくる。

この線の細い優男も魔法使い……いや、日本において西洋魔術師達の一大拠点である、麻帆良学園都市では“魔法先生”と呼称される存在だ。

明治時代中期に創設され、幼等部から大学部までのあらゆる教育機関が集まり、作られた都市が麻帆良である。

街の中心には「世界樹」と呼ばれる大樹がそびえ立っており、この世界樹：正式名称を「神木・蟠桃」といい、膨大な魔力を秘める霊木の一種だ。

実際にはこの世界樹を中心とし、麻帆良が作られた。……麻帆良全域を覆う“学園結界”も、世界樹から魔力を供給し、展開されている（管理自体は学園の中枢であるホストコンピュータを使用しているらしいが）。

……おっと、話がそれたな。

普通とは違う人生と言ったが、それは魔法使いである事だけではない。

と言うのも、この俺、風峰陸斗は前世の記憶を持ったまま生まれてきた……所謂「転生者」と呼ばれる存在だからだ。

事の始まりは、俺たちが前世で死ぬ事になった理由から……。

ぶっちゃけると、職務上のトラブルかららしい。

え？ 誰のだって？ そりゃあ、人の生死を決めるんだから、神様に決まってるだろ。

正確には、人間の生死にを管理する「運命科」と呼ばれる部署で、度重なる労働によってスタッフが1人倒れた。

それだけならまだよかった。

問題は、スタッフが倒れた際に、インクを溢して書類数枚がダメになっちゃったとか。

「運命科」の書類は、人間の生まれてから死ぬまでの「運命」が記載されており、それを改竄すれば、運命その物も改竄される。

例えば……生まれてから死ぬまで金持ちのヤツの書類に、「死ぬまで貧乏」と書き込めばその通りとなる。

で、書類がダメになれば、その人間その物もダメになる……まあ、要するに存在その物が消えてしまう。

……察しのいいヤツならもう気づいてるだろ？ その数枚の中に、俺と俺の妹の書類があっただよ……。

「休日くらい買い物に付き合ってください」と、うちの妹……玲夜と買い物に出かけた帰り道、家に入ったと思ったら見知らぬ建物の中だった。

いや、あれには面食らったな。……で、すぐに運命科のスタッフが俺たちに事情を説明して……うん、驚いた。

『本当に、申し訳ありませんでした!!』

……まあ、原因が原因だけに、あまり怒る気にもなれなかったし……。

元々、あまり休みが取れない上、度重なる資料請求に送られてくる書類の処理……倒れてもおかしくない。

それ聞いて玲夜が「まるで某KYと某淫獣のやり取りみたいですね……」とか言ってたけど、どういう意味なんだ、あれ。

とりあえず、話を元に戻そう。

存在が消えたとはいえ、書類を作り直しさえすれば元に戻る。そう聞いたので、大人しく待っていたんだが……問題が起きた。問題を起こしたのが、俺たちと同じく“不備”でこっちへ来ていた

男達数名。

最初は大人しくしてたんだが、じっとしているのがつまらなくなったらしく、運命科の中をうろつきだした。

元々、運命科の不備で消えてしまったのだから、向こうとしてもあまり強く出る事が出来なかったので「ちよつとした社会見学」という事で納得しようとしていた。

……………で、問題が起きた。

「暇だな」

「そうですねぇ……………」

待合室で椅子に座り、ぼくとする俺たち。

最初はイラッと来たけど、向こうにも同情すべき点があるんだし、そこはまあ……………納得する事にした。

新しい書類さえ出来れば、元の生活に戻れるのだから。

「でも、これも1つの新体験ですね」

「……………まあ、世界から消えるなんて普通は体験しないと思うぞ」

それでも経緯から考えるに、同じ目に遭った人間は他にいそうだけど。

「…………あれ？ 何か騒がしくくないですか？」

ん？ そう言われてみれば…………。

待合室から出て、声のする方へと向かってみると…………倉庫のような場所に、スタッフらしき人達が集まっていた。

妙に深刻そうな顔をしている気がするのは気のせいかな？

その中に見知った顔…………俺たちがここへ来た時、土下座して事情を説明した男性がいたので、話しかけてみる。

「どうかしたんですか？」

「ああ、君たちか。とんでもない事になったよ、まったく！」

やや上げ上がり気味な頭をかきむしりつつ、苛立ち混じりにそう答えてくれる。

…………いい予感はない。むしろ、悪い予感しかないんだけど。

「君たちと同じく、ここへ来た連中があれの封印を解いてしまったんだよ！」

と、指さしたのは…………割れたビン？

封印を解いたって事は、あの中に何か入っていたのか？

「どういう事ですか？」

「…………あの中にはね、何ともはた迷惑な女神が入っていたんだよ」

「は、はた迷惑な女神？」

うわあ、明らかに嫌な予感しかないんだけど。

「要するに、私たちの昔のボスなんだが…………昔、人間を無差別に殺して、別の世界へと転生させてはその様子を見て楽しんでいたんだ

よ」

「……………なんですか、それ。最悪じゃないですか」

確かに運命科のボスって事は、人の生き死にを自由に決める事が出来るって事だよな。

それを利用して自由に殺し、自由に転生……………って、どこの二次小説だよ。

「ああ、最悪だったんだ。評議会……………まあ、運命科を含む全ての部署の頂点に立つ、所謂1番偉い人達も、あまりにもやり過ぎたと判断し、封印という処置が下ったんだ」

それでビンの中に封印……………でも、他の連中がビンを割って、その封印を解いてしまった、と。

「おそらく、彼らに念話か何かで話しかけて、言葉巧みに誘導したんだろうね。『私は悪い人達に閉じ込められた女神です。お願いです、助けてください！』とか」

「何ですか、それ」

「いや、実際に昔あったんだよ。その時は未遂で済んだんだが」

未遂で済んだんなら、その時にもっと管理を厳重にしておけばよかったんじゃない……………。

見たところ、ごく普通の倉庫みたいだし、ここなら入るのもそんなに難しくはない。

「それで……………その女神様とやらはどこへ行っただんですか？」

玲夜が、至極当たり前のように尋ねる。

確かに封印されていたのなら、いつまでもここへ留まっているはず

もないし、封印を解いた連中の姿が見えないのも気になる。

「どうやら、既に下界へと逃げたようだね。……完全にしてやられたようだ」

「主任！ 評議会の方がいらつしやいました！」

「よし、お通ししろ！」

道が割れ、奥から何だか偉そうな女性が歩いてきた。

純白のローブに身を包んだ、いかにも上品な女性だ。

……ふと立ち止まり、俺と玲夜を興味深そうに眺めるが、すぐに現場へと視線を移す。

「危惧していた事が起きてしまったようですね」

「も、申し訳ありません！」

「いえ、私たちにも落ち度があります。……移送を早めるべきでした」

悔しそうに顔を歪ませる女性。

……つまり、移送する計画はあったけれども、その前にこの事態が起きてしまった、というわけか。

もしかしたら……封印されていた女神とやはらは、移送計画を聞いて焦っていて、それで今回起きた“不備”に目を付けたのかもしれない。

「……ところで、彼らは？」

と、俺たちの方へと視線を移す。

「はい、例の不備の被害者です。なお、彼らは今回の事態とは無関係です」

「そうですか。……今回は申し訳ありません。私たちの落ち度でご迷惑をかけてしまい……………」

すつ、と頭を下げ始めたので、慌ててそれを制止する。

いや………… さつき散々謝ってもらったし、今更頭下げられても困るし。玲夜も俺と同意見らしく、困った様な顔をしている。

「すぐに書類も出来上がるでしょうし、問題はありません。彼女や封印を解いた者達も、捕まるのは時間の問題でしょうし……………」

「大変です！ ヤツが降りたと思われる世界に“封鎖領域”が展開されました！」

スタッフの言葉に一同に動揺が走る。

どうやらその“封鎖領域”というものは相当ヤバイものらしい。俺たちに語りかけていた女性も、青い顔になっている。

「あの、封鎖領域って？」

「一種の境界みたいなもので、それを展開されると……………こちら側から世界に干渉する事が不可能になるんだ」

例のおじさんがそう説明してくれる。

つまり、完全にしてやられた……………って事か？

「こうなってしまった以上、我々には手出しできません……………」

「くっ……………」

……………ふと、女性が俺たちを見た。

そして何やら悩み出したのだが、意を決したように口を開く。

「あの……………よろしければ、協力していただけませんか？」

「「え？」」

「人間に協力……ファイネル議員、まさか！」

なるほど、この人ファイネルって名前なのか。

いや、そうじゃなくて……協力って何さ。

「今の話から分かるかもしれませんが、既に事態は私たちの手の及ばないところへと進んでしまっています。無理を承知でお願いします。私たちに協力していただけませんか？」

……協力って言われても……。

思わず玲夜と顔を見合わせる。うん、ここも同じ考えだったらしい。まあ、確かに放っておくとヤバそうだし、協力するのは吝かでは無いけれども……。

「俺たちが協力する事によって、俺たち側にデメリットは生じるのか？」

「……おそらく、あなた方は元いた世界に戻れなくなります。他の世界へ転生する事になりますから……」

元の世界、か。……正直な話、あまり未練は無い。

俺たち兄妹に両親はいない。未練と言うと……玲夜くらいだな。

転生って……ようするに、赤ん坊からやり直し？

「兄さん、どうします？」

「どうしますって……お前はどうしたいんだ？」

とは言ったが、玲夜の答えはだいたい分かっている。

玲夜は基本的に「優しい」子だ。また、目の前で起きている理不尽を見過ごせない性分でもある。

「私は……出来れば協力したいです。このまま放っておけば、他の人がどんな目に遭うかわかりませんし……」

確かにその通りだ。

話からするに、昔と同じ事……無差別に殺しては転生させる、という凶行を起こしかねない。

殺される側からしてみれば、そんな理不尽はあっていいはずがない。我が妹はいつも、自分の事よりも他人の事を考えてしまうようだ。

「……ま、そーゆートコが好きなんだけどさ」

「え？」

「何でもない。……で、転生してどうすればいいんだ？」

そう言うと、何故か驚かれた。……なんですさ。

「兄さん……いいんですか？」

「少なくとも、見て見ぬ振りするつてのは出来そうに無いんでな。それに……お前だけを行かせると心配で眠れん」

「そ、それどういう意味ですか！」

そんなこんなで転生したわけだが……どうやら、俺と玲夜の転生先にズレが生じてしまったらしく、まったく違う場所、違う時代に生まれてしまったらしい。

本当は双子として生まれるはずだったが、封鎖領域の影響が魂の転生にも影響を及ぼしたと、フィアネルも言っていた。

……正直な話、俺が生まれてから600年近く経つが、未だに玲夜とは会えていない。

「……アイツ、いつたい何処にいるんだ？」

どこに生まれたのかが分からんだけに、会いにも行けない。既に500年以上探し続けているが、未だに見つからない。時たまフィアネルから連絡が来るが、どうも分からないらしい。

「あら、アイツって誰の事かしら？」

……聞き覚えのある声に、ため息をつきつつも振り返る。

案の定、見覚えのある女性の姿があった。日笠を差した、艶やかな印象を与える金髪の美女。

何でここに來てるんだ、来るなど言ったのに……。

「何でいるわけ？」

「あら、育ての親がわざわざ会いに來たのに……とんだ言い草ね」

「生憎だが、俺はお前に育てられた覚えは無いぞ」

主に世話になったのは、お前の式の狐にだ。

むしろお前は世話された方だろうに。冬眠中の結界補修、面倒事の
後片付け、e t c , e t c ……。

「それで、本当に何しに来たんだ」

「私はただ、女子中学生の担任になった息子に会いに来ただけよ？」

……………おい、ちょっと待て。

「……………どこから聞いた？」

「おほほほほほほ」

「『おほほほ』じゃ無いわ、この老婆！」

ピシッ……………。

明らかに空気が凍り付いた。

ああ、わかっているさ。この言葉はコイツに対して禁句だという事は。

「……………今、ちょっと聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだけど……………」

「歳の取りすぎで耳が遠くなったか？ 随分と遅い更年期だな」

「……………ちよつと来なさい、陸斗。久しぶりに『お話』しましょう」
「上等だ、紫」

ちゃんと業務は終えてある。今は見回り中だし、後で業務日誌に「問題無し」とでもしとけば問題ないだろ。

俺が転生したのは、普通の人間ではなかった。

さっき600年近く生きていると言ったが、それは間違いではない。
俺は……妖怪として転生したのだから。

第1話：まだ始まらない物語（後書き）

というわけで、ネギまの二次創作……書いちゃいました。

私のもう1つの作品である「リリカルワールドの破壊者たち」と同じキャラ名ですが、彼らのEFストーリーでもあります。

……まあ、キャラは大きく違ってるかもなんですけどね。

私が二次小説を書き始めたのが中学生の頃なので……もう6年近く経ちます。

その頃の原作がネギまでした。……まあ、当時の腕はもうボロボロ。今読み返すと恥ずかしいくらいですけどね。

そんなわけで、ネギまは随分久しぶりになります。

原作のちょっと前から始まっていますが、しばらくは原作通りに進みます。

陸斗がどのようにして生まれ、これまでを過ごしてきたかは……その内、過去編みたいところで明らかにするかと思います。

……もしかしたら、魔法世界編までお預けになったりするかも。

玲夜「ところで……私の出番は？」

うーん……原作が始まるまで無いかも。

第2話：予測不能の可能性

アラルブラ
“紅き翼”

魔法使い達の中で、知らぬ者はいないとされる一団。パーティ……かつての大戦で世界を存亡の危機から救った英雄達。

紅き翼のリーダーであり、千の魔法を操ったとされる最強の魔法使い“千の術の男”ナギ・スプリングフィールド。
サウザンドマスター

旧世界出身の神鳴流剣士。剣技では無双の強さを誇ったとされるサムライマスター、近衛（旧姓・青山）詠春。

かつては奴隷剣士の身から帝国拳闘界の頂点へと上り詰め、解放奴隷となった最強の傭兵。“千の刃の男”ジャック・ラカン。

この3人を始め、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ、アルビレオ・イマなど、最上級の強さを持つ戦士によって構成された紅き翼。しかし、もう1人……忘れてはならぬ男がいる。

初めて歴史の表舞台にその姿を現したのは、“紅き翼”の名を一躍広める事となった『グレートブリッジ奪還戦』。
帝国第三皇女テオドラが個人的に雇った傭兵として姿を現し、帝国兵の撤退が終わるまでの20分間、彼らの猛攻をたった1人で食い止めた功績を持つ。

プライベートについて、旧世界の出身で、近衛詠春とは旧知の仲である事以外は一切の謎に包まれている。

また、敵対関係にあった彼が、どのような経緯で紅き翼の一員となつたのかも不明。

彼の名は、風峰陸斗。

「ロード・オブ・ゼロ 虚無の王」、オリジネーター “虚空の勝利者” とも呼ばれた、異端の存在である。

「引き分けね」

「……………チッ」

その言葉に、顔先に突きつけていたブレードを消す。同時に、紫も俺の首筋から傘をよける。

計18532戦0勝0敗18532引き分け。……………初めて出会ってから、未だに決着は付かない。

まあ本気で殺り合っても、紫と俺の能力では千日手だし、決着が付くはずもないのだが。

「今更だけど、街中で派手にやり合っても大丈夫だったのか？」

俺たちの周囲に人影は無かったが、建物とかほとんど見る影もない。これ、直すとしても結構苦勞しそうなんだけど。

「問題無いわ。ちゃんと本来の空間から切り取ってあるし、接合すればこの惨状も……この通り」

紫がパチン、と指を鳴らすと、荒れ地が見慣れたそれへと元に戻る。……相変わらず便利だな、その能力。応用力ありすぎだろ。

「あら、直接的な攻撃力ならあなたの方が上よ。本当にチートだもの」

「……お前にだけはチートと呼ばれたくないぞ」

紫の能力の名は「境界を操る程度の能力」。

結界のような「物理的な境界」はもちろん、夢と現実などの「概念的な境界」、物体が個として存在するための「自分とそれ以外を分ける境界」にまで及ぶ。

万物の創造と破壊を司る、カミサマにも匹敵するほどおつかない能力だ。

……これってチートだよな、うん間違いなくチートだ。

「生憎、俺の力は“壊す”事しか出来ない。壊しても……創る事は出来ないんでな」

「……相変わらず、不器用ね」

「つつさい」

適当にベンチに腰掛け、ふと空を見る。

……あの頃からずっと変わらぬ空の色。この世界に生まれ落ちた時も、この色だった。

「それで、女子校の教師になった気分はどうかしら？」

「……まだ、なったわけじゃない。出張の多いタカミチと交代するって話だ。正式に担当するのは来月から」

「タカミチ？ ……ああ、あの“紅き翼”の坊やね」

タカミチ・Ｔ・高畑。麻帆良の魔法先生の中でも、学園長に次ぐ実力の持ち主であり、かつての“紅き翼”の一員でもあった。

もともと、先天的に「呪文詠唱が出来ない」というハンデを抱えており、魔法使いとしては落ちこぼれ。紅き翼の１人、ガトウに師事し、無音拳……いわゆる「居合い拳」と「咸卦法」を会得した。

……尤も、最上位難度を誇る「気と魔力の合一」……咸卦法については、会得に至るまで数年の歳月を必要としたらしい。

「紫、アイツももう三十路だぞ。明らかに坊やじゃない」

実際、時間の流れが緩やかなダイオラマ魔法球での修行を行ったため、実年齢よりも老けている。アスナ曰く「ハードボイルドなオジサマ」だな、あれ。

「あら、私やあなたに比べれば、充分に坊やよ」

「念のために言っておくが今の発言、自分は三十路よりずっと上ですって言ってるようなものだぞ」

そう言うと、紫はふっと顔をそらす。……見る限り「しまった」と思ってるらしいな。

「まあ、それはともかく……例の情報、やっぱり本当らしいわよ」
「…………マジかよ」

はあ、とため息をつく。

紫に頼んだ調べ物。それは、ナギの子供達についての事。

数年前に詠春から聞いた程度なので詳しくは知らなかったのだが、9年ほど前、ナギに双子の子供が生まれたらしい。

英雄の子供であると同時に、ある要因を含んでいるため、子供達に対しては嚴重に情報が守られている。だから俺も詳しくは知らない。現に数年前、狙われた事があった。

現在はウェールズのメルディアナ魔法学校に在学中らしく、数ヶ月後に卒業し、修行に出るのが決定しているのだとか。

「じゃあ、こつちの情報。ヤバイ具合に都合ぴったりだ」

で、こつちは1年ほど前にタカミチから相談された事。

10年前に移り住み、修行も見たり、色々と付き合いが長いので、公私共に相談される事がよくある。

その中でも、ぶつちぎりで「ヤバイ」と感じた事。それが、タカミチが担任を務めるクラス「2-A」が、どうも作為的に構成されているようなのだ。

魔法生徒数名に、裏の関係者、魔法教師の子供、拳げ句の果てには元賞金首の悪の魔法使い“闇の福音”とその従者。他にも、特出した身体能力の持ち主がいたりとか。

相談された当初は「単に監視しやすいよう一箇所に集めただけじゃないのか？」と返したが……何ヶ月か前に、ある不安な噂が耳に飛び込んで来た。

「英雄の子供達の修行内容が、日本で先生をする事らしい」と。

掲示板などで見られる、何の変哲もない情報だったが……これを聞

いたときの、俺とタカミチの反応は想像しやすいはず。まさかとは思いつつも念のため、紫を始めとする個人的な伝手で調査を頼んだのだが……今聞いたとおり、結果は真っ黒。

「……で、その子供達はどんなだった？」

「ん〜、一応顔だけは見てきたわ。お兄さんの方は鳥頭そっくりね。一途に父親を慕う、健気な男の子よ。この辺りはお母さん似かしら」

……それ、最悪な化学反応じゃないか？
せめて逆であって欲しかった。その方がずっとマシだ。

「妹の方は……顔はお母さんそっくり。中身は……よくわからない」
「よくわからないって……」

「よくわからないのよ。自分を出さない子だったから。……隠れ里だから、聞き込みも出来ないし」

まあ、それは当たり前だな。

数年前の事件で、向こうとしても双子の周囲には警戒せざるを得ないだろうし、紫のように得体の知れない存在が聞き込みをしたら、怪しまれるのは目に見えている。

「能力は？」

「同年代と比べて、2人とも優秀。兄が上の下で、妹が中の上かしら」

なるほど、な。

「それでどうするの？ 修業先の変更はもう不可能よ」

「……その辺りは、アスナと相談してみない事には何とも言えない。こっちの魔法先生はちよつと偏った考え方がいるから」

例を挙げると、ガンドルフィー二とか、古矢とか。

決して悪いヤツじゃ無いんだが……ちよつとばかり頭が固いんだよな、エヴァに対してでも懐疑的だし。

明石教授や式集院さん達はまだマシだ。成長に期待はするだろうけど、あくまで教育者としての本分は忘れないだろうし。

……ただ、古矢についてはかなりヤバイ。

「古矢忠通。……確か、連合派の魔法使い達の筆頭で、あなたの事を目の仇にしていなかった？」

「帝国の傭兵だった俺が嫌いなんだろ？ 西……というか、詠春とも懇意にしてるし」

おまけに、西の打倒やエヴァ排除を長年にわたって訴え続けている

……。

教師としては古株なので、無下にするわけにもいかず、さすがの学園長も古矢に対しては頭を悩ませている。

偏った思考の“立派な魔法使い”としての典型的な例だな、あれは。

「とりあえず、私は用事が終わったから帰るわね。そろそろ帰らないと、藍や橙も心配するし」

「よし帰れ。二度とこっち来るな」

お前が麻帆良に来ると、厄介な事この上ない。

……以前、コイツが引き起こした珍騒動の後始末に、俺たちがどれだけ苦労させられた事か……。

4年前の「ダンゴムシ事件」とか、この前の麻帆良祭の「パンツマン事件」なんていい例だ。……タカミチなんて泣いてたぞ。

「それじゃあ、あなたがこっち来なさいよ。……寂しがってるわよ、

みんな」

「……………」

まあ確かに……もう10年近く帰ってないからな、幻想郷に。

教師の仕事とか、タカミチの修行とか、アスナの世話とかで忙しかったし……。

「霊夢だって大きくなったわよ。ずっと会ってないでしょ？ 今ではもう立派に巫女よ」

最後に会ったのは……10年前だな。麻帆良で教師の仕事に就く前。母親の後ろに隠れてるような子が、当代・博麗の巫女か。……早いもんだな。

「……纏まって休みが取れたら、考えとく」

「はいはい」

職員室で業務日誌を書き終えて、周囲に誰もいないのを確認し、念

のために俺自身が認識されないようにしてから電話をかける。
数回のコール音の後に、その相手は電話に出た。

『もしもし?』

「アスナ、俺だ」

『あら珍しいじゃない。どうしたの?』

電話の相手は神楽坂明日菜。元の名はアスナ・ウェスピーリーナ・テ
オタナシア・エンテオフュシア。

……まあ、結構複雑な事情持ちの、昔なじみとでも言うておこう。
現在は麻帆良学園女子中等部2 - Aに在籍中。ぶっちゃけると、今
度から俺の生徒になる。というか俺が担任になる。

「ちょっと報告。紫からの情報で、こっち来るのは確定らしい」

『……………ねえ、それマジ?』

「残念ながらマジだ」

電話の向こうで、深くため息をつく声が聞こえる。

そりゃあ、10歳の子供が自分達の担任になると聞いて、普通なら
こういう反応だぞ?

『ほんと転校していい? いくらエスカレーターで高校まで行ける
からって、それは無いでしょ?』

「多分無理だろうな。満員とか適当な理由で握りつぶされるのがオ
チだ。諦めろ」

常識的に考えると、ナギの子供達が日本へ来るのが今年度末、つま
り……2月か3月頃。

そしてアスナ達は来年、中学3年生。高校受験を控えた年になる。
麻帆良学園は基本的に、幼等部から高等部までエスカレーター式で、

特別な学校以外は入学試験無しで進学が可能となっている。

もちろん生徒達の中には、外部の学校や、受験が必要な学校を狙う生徒もいるだろうし、真面目に勉学に励む者も少なくない。

優秀だと聞くと、頭はいいだろう。しかし、頭がいい＝教師の器とはなり得ない。

『そのナギの子供ってどんな子？　せめて常識的なら助かるんだけど……』

「双子らしい。兄の方は顔はナギで中身がアリカ。父親に憧れる男の子だとか」

『……………』

……撃沈したな、これは。

せめて、顔がアリカで中身がナギならまだよかった。……いや、それでも教師としては最悪かもしれないが。

「で、妹の方が……顔はアリカらしいが、中身がよくわからん」

『……期待していいと思う？』

「期待し過ぎないほにな」

『うつ……あり得ないでしょ、10歳のガキが教師なんて』

麻帆良ならあり得るんだな、それが。とりあえず学園長には、労働基準法について今度しっかり聞いてみたい。

……労働基準法第56条「最低年齢」。内容を簡潔に要約すると「15歳以下の子供を働かせちゃいけません」だ。

例外として、子供に対して悪影響が無く軽易な仕事で、特別な許可さえ下りれば働く事も可能だが……これが適応されるのは13歳から。

映画製作や演劇事業なら、13歳未満の子供も同様。TV見てても子役とかいるしな。

「最悪、担任になるのだけは防ぐ。その辺りは一般教師……新田さんや他の人も巻き込めばどうにかなる」

『あー、そりゃあ新田先生はそーゆーの厳しいしね』

新田先生……通称“鬼の新田”。

麻帆良学園中等部の教員で、学園広域生活指導員。なお異名通り、かなり厳しい。

しかしその実、真面目に生徒の事を思いやる、数少ない「本物の教師」であり、俺が教師になってからも度々お世話になっている。

今回の件、「10歳の子供が教師になる」を聞いて、彼がどんな反応をするかは……目に見えている。

さすがの学園長も、裏の事情を知らない教師陣を相手に、強硬姿勢を取るわけにはいかんだろ。

「まあ、そっちの話題は置いて……クラスはどうだ？」

『……………聞きたい？』

「やめとく」

……1年前、タカミチから相談を受けてからも、度々A組には注目していたが……あれは酷い、うんマジで。

大きな問題として、ひたすらハイテンション。不真面目というわけではないのだが、ノリが良すぎるため、時には授業が進まない事もしばしば。まさしく、最初から最後までクライマックスだ。……いや、最後を越えてもクライマックスかも。

その悪影響がモロに出ており、成績は全クラス最下位。学年トップクラスの成績優良者が数名いるのだが、成績最底辺を独走する“バカレンジャー”なる5人組もいるとかいないとか……。

その辺りはアスナを見習って欲しい。新聞配達のバイトをしながらも、しっかり勉学は両立させている。おかげでクラスでも成績はい

い方だ。

「しかし……本気でどうしよう。俺、来月から担任なんだけど」

『あ、やっぱりそれ本当なんだ』

「本当なんだって……タカミチから何も聞いてないのか？」

『聞けるはずないでしょ。タカミチ、学園にはほとんどいないんだもの』

そうなんだよなあ……。

元々、俺が担任になる事になったのも、タカミチが“悠久の風”の仕事などで海外出張が多く、これでは生徒の教育上よくないと本人が学園長に直訴し、代わりとして俺を推薦したとか。……面倒事ばかり押しつけやがって。

……というより学園長も、あれだけ揃ってるクラスに、一般人を担任にするのはマズイと考えたんだろう。悩んだらしいが、結局OK出たし。

『とりあえず、公私の区別付けて、しっかり先生やれば大丈夫とは思うけど？ 別にみんな不真面目ってわけじゃないんだし』

「……一応、了解」

うつ……まだ初秋もだつてのに、随分と寒いんだけど。

身体とかじゃなくて、主に心が。

携帯を置き、一息つく。

……ナギと姉様の子供、ねえ。会いたいような会いたくないような……。

「アスナ、電話終わったん？」

と、ルームメイトの近衛木乃香がそう尋ねてくる。
ちよつと内容的にマズいものも含まれるので、わざわざ木乃香に出
てもらっていたのだ。

「終わったわよ。ありがと、わざわざ出でて」

「ええつて。……電話、陸斗さんからなんやる？」

「まあね」

木乃香は学園長の孫で、詠春の娘ではあるけれど、裏の世界につい
ては何も知らない。

西の総本山……近衛家の純血統であるために、木乃香は生まれつい
てナギ以上の膨大な魔力を宿している。

西洋魔術師の拠点たる麻帆良に、詠春が娘^{このか}を送ったのも、西で木乃
香を利用しようとする一派から守るため。……尤も、本人は下を抑
え込むのに四苦八苦しているようだ。

……人の家の教育方針に口を出すつもりは無いけど、いずれは木乃
香もこちら側へと巻き込まれる。学園長がわざわざ私と同室にした
のも、私の“魔法無効化”で木乃香にかけられる呪いをシャットア
ウトするためだ。そう考えると……無駄だと思っただけ。

「最近どうかって事と、来月担任になるからって」

「あゝ、やっぱり陸斗さんが担任なるんか」

10年前、私はまあ……海外で色々あって、陸斗とタカミチに連れられて麻帆良へ来た。

私は小学校に入って、2人は教師になって……寮に入るまでは陸斗と一緒に暮らしていた。タカミチは海外出張が多いから、あまり一緒にはいらなかったけど。

中学に進学して木乃香と同室になってからも、陸斗とはちよくちよく会っていたし、その関係で木乃香共々、ご飯奢ってもらったりもしてたっけ。

……ああ見えて、結構面倒見のいい性格なので、木乃香の相談にも乗ってたわね。主に桜咲さんについてとか。

「ああ、そうそう。木乃香、桜咲さんとは？」

「あ……ん……まだ、やな」

桜咲さんってのは、うちのクラスの桜咲刹那さん。詠春と同じ神鳴流剣士で、木乃香の幼なじみ。

木乃香がまだ京都の方にいた頃に仲良くなったらしいけど、麻帆良に進学してからはすっかり疎遠になってしまって、今はあまり話もしてくれないらしい。

「けど、ウチ諦めへん！　いつか絶対せつちゃんともっぺん仲良くなるんや！」

いきなり立ち上がり、ググツと腕を突き上げ、宣言する木乃香。

陸斗から聞いたんだけど、桜咲さんは木乃香の護衛なんだって。だから敢えて、木乃香とは一定の距離を取っている……って事みたい。

……大丈夫、かな。前に、木乃香に絡んできたチンピラを半殺しにしたっていう話も聞いたし……。

陸斗、木乃香と仲いいからすっごい不安なんだけど。

第2話：予測不能の可能性（後書き）

アスナはもう別人です。

この理由については……まあ、次回明らかになると思います。

第3話：誤解だらけのラブソング（前書き）

ウィーゼルは、皆様の感想をお待ちしています。

どういふところが悪いとか、どういふところがいいとか聞かせていただけると嬉しいです。

……あ、誤字の報告もあつたらお願いします。

第3話：誤解だらけのラブソディ

—— 10年前

〔Side Rikuto〕

「……すまない、来るのが遅すぎた」

「いえ………」

小屋の中で、俺とタカミチは向かい合っていた。
腕を三角巾でつり上げ、頭に包帯を巻いたタカミチは、暗い顔のまま俯いている。

「アスナは大丈夫なのか？」

「はい。……師匠が、守ってくれましたから」

「………そうか」

タカミチの師匠、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。
連中からアスナとタカミチを逃がすため、自ら囷となって……今はもういない。

ガトウと別れた後、アスナを連れたタカミチはどうにか逃げ延び、
つい3時間ほど前に俺と合流した。……俺が、もっと早く来ていれば……！

「それで、これからどうするつもりだ？」

「麻帆良へ………行きます。既に学園長とは話が付いていますから」

学園長、ねえ……。

俺の目が自然と細まる。

あの狸とは、あまり関わり合いになりたくないんだが。

「確かに、アスナを守るのなら麻帆良が最適だろうな。あそこは連合とはある意味独立してるし。……最悪の場合は幻想郷で匿うつもりだったが」

「…………あの、陸斗さん。実は師匠から言いつけられた事があるんです」

「なんだ？」

タカミチは少し言いにくそうにしていたが、意を決して口を開いた。

「アスナちゃんの記憶……特に、自分のところは念入りに、全部消せて」

「なっ……………！」

あ、あのバカ…………何考えてやがる！

アスナの記憶消せて、それナギやアリカの事も全部消せて事だろっ！？

「これまでのアスナを全部否定して…………殺すつもりかよ！？」

「でも、師匠の言う事も分かるんです。…………これまでのアスナちゃんの人生は、決して恵まれたものでは無かったから…………」

…………確かに、な。

“黄昏の姫巫女”と呼ばれ、ただ奪い奪われるだけの日々。

俺も初めて会った頃は…………まだ感情らしいものも無く、人形その物だった。

「タカミチ本人としては、どうなんだ？」

「…………俺は、反対です。師匠と別れる前、アスナちゃん…………泣いてたんです」

それには素直に驚いた。

“紅き翼”と行動するようになって、感情表現こそ希薄だが、普通に話したりするようになったが……涙を見せた事は無かった。

「……………昨日までの記憶全て、必要と分かる日が来るはず」

「え？」

「アスナ自身に選ばせよう。記憶を消すか、消さないか。本当に忘れる事をアスナが選ぶのなら……それでいいさ」

タカミチは少し迷ったようだが、それが1番いいと考えたらしく、おもむろに頷く。

そして、アスナは選んだ。……………決して忘れないという道を。

確かにアスナの歩んできた道は、辛いものだった。けれど、ナギやガトウ達と出会ってから今日まで歩いてきた道は、光に溢れていた。忘れなかったのが正しいのかどうかは……俺には分からない。いや、正しいとかそういう問題じゃないのかもしれない。

…………ガトウ、お前の守ったアスナは、元気で頑張ってるぞ。

そして現代にて。

「……なあ、本気で逃げていい？」
「ダメですよ」

2・Aの教室の前で、俺は本日何度目になるか分からないため息をついた。

現在俺の前にいるのは、指導教員の源しずな。1番の特徴といえば、99cmの巨大なバストだろう。

……もうやだ、すっごい嫌なんだけど。

「ほら、クラス名簿」

「はあ……」

何気なしにクラス名簿を開く。

……いるわいるわ、アスナに木乃香、神鳴流剣士に幽霊、武闘家に忍者、吸血鬼と挙げ句にはロボ……タカミチじゃなくても普通に怖くなるわ、これ。

アスナから愚痴混じりによく聞いてるけど……うん、すっごい濃いやな、このクラス。

「高畑先生だつて、あなただから後を任せたのよ」

「……その期待、余計なまでにいらないんだけど」

ま、しっかりやらないとタカミチにも悪いよな。

引き戸の前に立つと、大きく息を吸い込み……扉を開けた。

[Side Eva]

今日、新しい担任が来るらしい。

というのも、タカミチは海外出張が多いので、担任が教壇に立てないのはよくないと言って、無理に担任を交代したとか。

……まあ私には、至極どうでもいい事だが。

「マスター、どうやらいらっしゃったようです」

「そうか」

茶々丸がそう、私に告げる。

……どうせ、そこらのくだらん魔法先生だろうに。

そう考えるのと同時に、がらがらと引き戸が開き……定番トラップ

「黒板消し」が落下する。

しかし、標的に当たることなくそのまま地面へと落下した。今「チッ」とかいう舌打ち声が聞こえたな。

「ほっ………」

廊下から姿を現したそいつは、地面に落ちた黒板消しを拾うと、そのまま黒板へと戻す。

……なかなか出来るようだな。少なくともそこいらの魔法使いのレベルでは無い。

セミショートぐらいの長さで切りそろえられた黒髪に、深みのある新緑の瞳。その顔立ちが端正で、どこか思わせるものがある。……年齢で言えば20代初めか？

ヤツの姿を見たクラスの脳天気共も、完全に毒気を抜かれたのか、呆然としている。……いや、神楽坂明日菜と近衛木乃香は平然としているな。

そのままチョークを取ると、流暢な筆記体でアルファベットを書く、その下に日本語で自分の名前を書いていく。

「高畑先生に代わり、今日からこのクラスを受け持つ事になった、風峰陸斗だ。よろしく頼む」

ほう、風峰というのか。面白そうな男じゃないか。

(……………ん？ 待てよ)

風峰陸斗？ ……………風峰だと！？

思わず立ち上がり、ヤツの顔を凝視する。実際に会った事はないが、間違いない。

かつての“紅き翼”の一員、“虚無の王”風峰陸斗。ヤツならば…

…私にかけられた呪いを解けるかもしれない。

ナギのバカにかけられた、このバカバカしい“登校地獄”の呪いを！

[Side Out]

「Side Asuna」

「「「「「か……………」」」」」」

「か？」

「「「「カッコイイ

——ッッ！！」「」「」

あーあ、やっぱりこうなったか。

ま、確かに陸斗は確実にカッコイイ部類に入るけど。

「1時限目はオリエンテーション……………ま、俺への質問を受け持つ事にしよう。何か聞きたい事はあるか？」

「はい！」

「はい！」

「はい！」

「はい！」

……………いや、至少くらい落ち着きなさいよ、アンタ達。
木乃香、アンタも落ち着きなさい。

「えゝ、でも」

ていうか、アンタ確実にアイツとは付き合いあるでしょ。何聞きたいのよ。

「はいはいゝ、ここは学園報道部突撃班にして2・A公式カメラマン、朝倉和美にお任せあれ！ とりあえず、質問は順番にねゝ」

そう、朝倉が全員を仕切り始める。

……色々と問題のあるヤツだけど、こういう時には頼りになるのよね。

とりあえず、最初の質問は右斜め前の春日美空から……。

「じゃあ風峰先生、最初の質問ですが……出身は？」

「よく覚えていない。あっちこっち旅していたからな」

らしいわね。そもそも、本人どうやって生まれたかも知らないらしいし。

生まれてからしばらくは、紫さん藍さんに連れられて、あちこち旅してたって聞いている。

「担当教科は？」

「英語だ。……その気になれば、フランス語、ポルトガル語、ギリシャ語、ラテン語……何でも行けるぞ」

「武術か何かやってるでござるか？」

「自己流だが、それなりにな」

「恋人はいますか？」

「いない。そんなの作る時間も無かった」

「じゃあ……このクラスで気になる女の子はいますか？」

柿崎、
アンタ何聞いてるのよ。

思い切りクラス中が注目し始めたじゃない。……まあ、好みのタイプは気になるけど。

「気になる」の意味は違うと思うが、神楽坂明日菜と近衛木乃香、
「だな」

その瞬間、ほぼ全員の視線が私と木乃香に集中した。
 つて、何言ってるのよ！ てゆーか、桜咲さん怖いから殺気放つのやめて！

「えーっと、何でアスナと木乃香なんです？」

「10年前、麻帆良に来てからしばらくの間、神楽坂の世話をしてきた。近衛については神楽坂繋がりでちょっとな」

ちよつと陸斗、そんな事言っちゃっていいの？

「なんかみんなザワザワしだしたし。……」「10年前?」「てか何歳?」とか。

「あの……失礼ですが、おいくつですか？」

[illegible]

あゝあ、やっぱりこうなつたか。

見た目こそあんだけど、実年齢は百単位だからな、アイツ。

確か……紫さんが言っていた話だと、600歳近くだったわけ？……

…そうなる、紫さんって何歳なんだろう？

それから、様々な質問に答えながらも、今日の授業は過ぎていつ

た……。てゅーか朝倉、マイク向けないでくれる？

[Side Out]

[Side Rikuto]

放課後、「スターブックス」にて。

「睨まれてたわね、見事に」

「うるさい」

アスナをあしらいつつ、珈琲を口に運ぶ。

……授業中、気の休まる時間が無かった。主に2人の視線に晒されて。

1人はエヴァンジェリン。……タカミチの話によると、ナギのバカが15年ほど前に呪いをかけて、ほったからしにしたとか。俺なら呪いを解けるかもしれないって考えてるんだろっな、きつと。

そしてもう1人、桜咲刹那。学園長の話によると、木乃香の護衛らしいし、木乃香に近づく怪しい男とでも認識されたんだろ。

エヴァンジェリンからは興味津々な視線、桜咲刹那からは殺気の込められた視線が向けられて……はつきり言って心臓に悪い、特に後者。

「エヴァンジェリンや桜咲さん、あんたの事知らないの？」

「知らないと思うぞ。俺、魔法先生の集会とかほとんど参加してないし」

「あー、そういえばそうだった」

主にめんどくさいから。……いや、正直な話、本当にめんどくさいんだって。

“紅き翼”の一員だった事は、よく悪くも大きな影響を周囲に与えている。

好奇の視線に晒されるのは好きじゃない。元々、帝国側にいた事も影響して、一部の魔法使い達にはいい顔をされていない。古矢なんてその典型的な例だ。

最初に顔を合わせた時も、そうだったのがあったから……。それ以来、ほとんど参加してない。

だから、魔法先生はもちろん、新顔の魔法生徒とは面識は無い。

エヴァンジェリンについては……魔法先生と関わろうとしていなかったんだろ。悪の魔法使いは排除せよって考えてるのもいるみたいだし。

「……………ていうか、あれ何とかならないか？」

実際、今監視されている。その桜咲に。

建物の影に隠れて、こっちをちらちら見ている。……向こうは気づかれていないと思ってるんだろが、丸わかりだ。

俺が何者とか知らないんだろう。知ってたらこんな事しないだろうし。

「無理よ。私、桜咲さんと話した事ほとんどないもの。何なら、木乃香にどうにかしてもらったら？」

「あ、それいいな」

今なら部活かな。今日は確か、占い研究会の方だし大丈夫だろう。携帯の電話帳から「近衛木乃香」を選び、発信する。……お、出た出た。

「もしもし、俺だが？」

『あれ、陸斗さん？ どないしたん？』

「お前の幼なじみに監視されている。何とかしてくれ」

そう言うと、木乃香は無言になった。

……いや、この沈黙……どこかで覚えがあるんだが。

『……今、どこ？』

「スターブックス。向かいの本屋の影から見張られてる」

『わかった。すぐ行く！』

そう言うと、プツツと通話が切れた。

……数分後、笑顔の木乃香に桜咲が捕まっていた。

「……あ、桜咲が青くなってるな」

「……めちゃくちゃ怒られてるわね。あの木乃香、すっごい怖いんだけど」

「……項垂れてるな。かなりショック受けてるみたいだな」

「……あ、解放された。こっち来るわよ」

跪いた桜咲はほったらかしに、木乃香がこつちへととて歩いてきた。

「陸斗さん、ごめんな。せつちゃんが迷惑かけて……」

「いや、いいのか……あれ」

「ええんや！ せつちゃん好きやけど、陸斗さんに迷惑かけるんはダメや！」

ぷいつ、とそつぽ向く木乃香。

……いや、桜咲がマジで可哀想になってきたんだけど。

「じゃ、担任就任祝いに1杯やつかな。たまには奢^{チャ}ってやるよ。超^{オバオス}包子でいいか？」

「わ、やった」

そつして、未だショックから立ち直れない桜咲を尻目に、俺たちは歩き出すのであった。

第4話：意外に早い正体バレ

「Side Setsuna」

あの男は危険だ。

私自身、人でないモノの血を半分引いているため、複雑ではあるが、同じような存在の気配を幾分か感じ取る事が出来る。

……あの男を見た瞬間に、本能がこう叫んでいた。

——ヤツを敵に回すな、逃げろ……と。

単に担任ただけなら、接触を最低限にすればいい。

しかし、このちゃ……お嬢様と既に接触していただど!?

危険だ。もしや、お嬢様を亡き者にと目論む輩かもしれない。実力差はあれど、必ずやヤツを排除しなければ……。

放課後、ヤツの後を付けると……同じクラスの神楽坂さんと接触した。

そういえば、神楽坂さんとは旧知の仲だと言っていたな。考えたくはないが、神楽坂さんもヤツの仲間かもしれない。

お嬢様と同室になったのは、学園長がそう手配したからと聞いていたが……わからない。

しかし、わざわざお嬢様と同室なのにも理由があると見ていいはず。

(……喫茶店に入ったか)

物陰に隠れ、店内の様子をうかがう。……気づかれていないはずだ。ヤツは神楽坂さんと談笑しながら、懷から携帯を取り出すと、何やら電話をかけ始める。……なんとやっているかは分からない。龍宮

辺りなら、読唇術で唇の動きを読み取れるかもしれないが……。
……ヤツが携帯を置く。それほど動きは無いな……。

「……………何しとるん、せつちゃん？」

背後から聞こえたその声に、思わず身を震わせる。

その声は普段から聞き覚えのあるものだっただけに、震えが大きくなった。

「あ、い、いえ……その……………」

何故だ。何故、私はここまで震えている。震えを止める事が出来ない。

そして何故振り向けない。本能が「振り向けば後悔する」と言っているのは何故だ。

「何しとるんって聞いとるんやけど？」

お嬢様の平坦な声が、余計に私の中の感情を抑えつけていく。

……怖い。そうだ、この感情の名は「怖い」だ。

「わ、私は……………その、別に……………」

「ふーん……………陸斗さんやアスナの事、見張っとったん違うん？」

「ッ！？ な、何故それを……………！」

口に出して、後悔した。……………言ってしまった、と。

同時に理解した。先ほど風峰が電話をかけていたのは、お嬢様だったのだと。

……ヤツめ、お嬢様を顎で使つなど……………！

「アスナはウチのルームメイトやし、陸斗さんはいつもお世話になつとる。……せつちゃん、そんなウチの恩人に失礼な事しとったやろ？」

「い、いえ！ そんなつもりは………」

見張っていたのは事実なため、弁解する事は出来ない。

だが、ヤツが危険な存在である事は変わりない。どうにかして理解してもらわなければ……！

「……………せつちゃん、嫌いや」

「なあっ……………！」

「嫌い」、その言葉が私の耳に届き、力が抜けて思わず崩れ落ちる。覚悟はしていた。いずれは、そう言われるのではないかという事はしかし、それがここまで……………ここまで辛いものだとはッ……………！！お嬢様は既に私の前からいなくなっており、もう弁解する事など出来ない。

「……………何をしている、桜咲刹那」

しばらくの間、私はそのままの状態で呆然としていたのだが……………ふと、誰かがそう声をかけてきた。

顔を上げると、そこには絡繰茶々丸さんを携えた、クラスメイトのエヴァンジェリンさんの姿があった。

“闇の福音”の名で広く知られる、悪の大魔法使い。噂によると、かの英雄“千の呪文の男”サウザンドマスターに敗れ、学園に封じられたという。

……………そんな人が、いったい何故？

「お前がそこで頂垂れているのはどうでもいい。それより、風峰陸斗を知らないか？」

「え……………」

エヴァンジェリンさんのその言葉に、思わず喫茶店の店内を覗き込む。

……神楽坂さん共々、既にヤツの姿は消えていた。しまった、お嬢様も……………！

「……先ほどまで、喫茶店の中で神楽坂さんと談笑していたのですが……………」

「神楽坂明日菜とだと？ ……ふん、まあいい。大方お前が沈んでいたのは、近衛木乃香にでもキツく言われたのだろう」

「うつ……………」

……凶星だ。その通りである以上、何も反論できない。

「じじいの話だと、教員寮に暮らしているらしいが……………私はあそこへ近づきたくないからな」

憎々しげに言い放つエヴァンジェリンさん。

無理もない。魔法先生や魔法生徒の中には、悪の魔法使いであるエヴァンジェリンさんに対し、敵意を抱く人達もいる。

もちろん、そういった人達ばかりではないが……………それでも彼女に好意的な魔法先生は、高畑先生や学園長のように、ごく少数だろう。

「ところで桜咲刹那、貴様……………ヤツが何者か知らんのか？」

そういえば……………個人情報類は一切知らない。

「1つ言っておく。ヤツが近衛木乃香を害する事はあり得ん」

「……………何故、ですか？」

「簡単だ。かつての戦友の娘を傷つける男などいない」

戦友の、娘……………？

「ついでに教えてやろう。風峰陸斗はかつての“アラルツラ紅き翼”の一員。つまり、“千の呪文の男”や、近衛詠春の戦友という事になる」

「なっ……………！？」

今、エヴァンジェリンさんの言った名前……………近衛詠春とは、お嬢様のお父上の事だ。

現在の西の総本山……………関西呪術協会の長に当たる人物で、同じ神鳴流剣士としては遙か雲の上の存在でもある。

確かに……………ヤツ、いや風峰先生が長の戦友なら、お嬢様を亡き者にとは考えるはずがない。

「しかし、何故エヴァンジェリンさんは風峰先生に？」

「マスターは、自分にかけられた呪いが、風峰先生なら解けるかもしれない、そうお考えなのです」

「茶々丸、余計な事を言うな！」

呪い……………“千の術の男”に敗れ、学園に括られた際の呪いの事か？最強クラスの魔法使いである、エヴァンジェリンさんにも解けない呪い。風峰先生に解けるのか……………？

「仕方ない、教員寮の前で待ち伏せる事にするか」

そう言い、とぼとぼと歩き始めるエヴァンジェリンさん。

……………私も風峰先生には聞きたいことがある。エヴァンジェリンさんに……………一緒させてもらおう。

[Side Out]

[Side Rikuto]

「食い過ぎだろ、アイツら……………」

チャオバオス
超包子で1杯奢ってやるとは言ったが、食い過ぎだろくに。特にアスナ。

おかげで財布の中身はすつからかん。…………まあ、金に困っているわけではないし、別にいいんだが。

いや、よくないな。アイツには節度というものを教える必要がありそうだな。…………この辺りはナギの悪影響かもしれない。

「待っていたぞ、風峰陸斗」
「ん？」

教員寮に入ろうとしていた俺に、何者かが声をかけた。

振り向くと、そこには偉そうに仁王立ちしている金髪幼女に、それに付き従うロボ、そして……桜咲の姿があった。

木乃香に叱られてから何かあったのか、桜咲の目に敵意のようなものはない。……まあ楽だからいいのだが。

「何のようだ、マクダウエル。子供は帰って寝る時間だ」

「貴様に用があつて会いに来た、“虚無の王”よ」

……つまり学校云々ではなく、裏関係の話って事か。

「……立ち話も何だ、どこか落ち着いて話が出来る場所に移るぞ」

教員寮だと、他の魔法先生が煩いので、とりあえずエヴァンジェリンの家に移動する事となった。

……人形やら色々飾られており、思ったよりファンシーだな。

適当に腰掛けると、エヴァンジェリンが向かいに座り、要件を話し出した。

「単刀直入に言おう。私にかけられた呪いを解いてもらいたい」

「……ああ、“登校地獄”の呪いか」

15年ほど前に、ナギのバカがかけた、とか。

タカミチも詳しく知らないらしく、俺もその辺りは聞いていない。

「あの、風峰先生。その“登校地獄”とは何なのですか？」

と、恐る恐る桜咲が手を上げ、そう質問してくる。

……驚くほどに素直だな。まあ、俺としてもその方が心臓にいいし、大歓迎なのだが。

「昔、不登校の児童に対して用いられた呪いでな、かけられると強制的に登校……つまり学校に行かなくてはならなくなる」

まあ、大昔の呪いだし、内容もかなり問題があるから、今ではほとんど使われていない。

……ナギ、いくら相手が悪の魔法使いだからって、登校地獄は無いだろう？

「確認しておくが……お前が呪いをかけられたのは？」

「15年前だ。一応言っておくが、呪いがかけられてから3年後にナギが解呪しに来るはずだった」

「あ……それは、そのスマン」

忘れたんだろうな、きっと。

あのいい加減さはラカンとタメを張れるな。……いなくなる前に矯正しとくべきだったな。

しかし……15年間かけられっぱなしって事は、卒業できずに3年生終わると同時にリセットされて繰り返しか。……それは辛いな。

「ナギとの契約が既に終わっている以上、解呪しても問題ないだろう。……ちょっと失礼」

そう前置きしてから、エヴァンジェリンの額に指を振れ、目を閉じる。

瞬間、彼女の身体を複雑に縛り上げる“鎖”のようなものが、頭の中に浮かび上がる。

これが、彼女を学園に縛り付けている“登校地獄”の呪い。……しかし、もう1つ……別の封印が魔力を抑え込んでいるな。

「……何か別の封印のようなものが、魔力を抑え付けている。心当たりはあるか？」

「別の封印だと？ ……チツ、やはり学園結界か」

ああ、学園結界が魔力を抑え込んでいたのか。

という事は誰かが意図的に、エヴァンジェリンの身体に「学園結界を介して魔力を抑制する」封印術式を刻んだ事になる。……尤も、そんな事出来るのは1人ぐらいだが。

ま、それは置いておくとして、俺はエヴァンジェリンを抑え付けている鎖の分析を続ける。

……しかし、なんつう強引な術式……無理矢理術式を構成してるから、身体に悪影響を与えてるぞ。

「ちよつと失礼」

ぱちん、と指を鳴らす。

外見的には何も変わらないが、エヴァンジェリンの家の中だけを外界から切り離れた。

ちなみにこれ、紫から教わった……というより、盗んだ技の1つでもある。

「念のため、家の中を切り離れた。これで学園側には感知されなくなる」

「ほう……高等結界術か。やるな」

エヴァンジェリンの感嘆を受けつつも、分析をさらに続ける。

……登校地獄の方は問題無い。元々、ナギは呪いとかそういうのは向いてないし、解こうと思えばすぐにでも解ける。

だが、問題は魔力を抑え込んでいる、封印術式の方だ。

「登校地獄は解けるが、魔力封印は難しいな」
「どういう事だ？」

怪訝そうな顔になるエヴァンジェリンと桜咲。……絡繰は、あまり変わらない。
とりあえず、説明してやるか。

「いいか？　まず、お前の身体に施された封印は2種類ある」

どこから運んできたのか俺にも分からないが……ホワイトボードに、デフォルメした人間の身体へ2本の線を書き込む。

1本は太い赤でもう1本は細い青。この場合、赤が登校地獄で、青が魔力封印となる。

「登校地獄はナギが馬鹿魔力で無理矢理組んだけだが、魔力封印の方はかなり細かく構成されてる。これはパズルみたいに順序よく解呪しないと、何が起こるか分からない」

最悪の場合、構成の中に毒が仕込まれていたとしたら……解呪中にそれが発動して死に至る危険性もあり得る。

それに正直な話、俺は解呪に特化してるとかそういうわけじゃない。登校地獄はデタラメな構成だから、俺も力技で解呪できる。それだけだ。

「もし解呪できたとしても、うまくやらなければ学園側に気づかれる恐れがある。それはお前も望まないだろう？」

「む……………」

学園側に知られた場合、当然エヴァンジェリンは「お礼参り」した後で速攻で逃げるだろうが、それでも魔法使い達の間にはすぐ「闇

の福音復活」が知れ渡る事となる。

そうなれば、エヴァンジェリンには不利な状況ともなり得る。当分は逃げ続ける事になるのは目に見えている。

「ま、そっちについては知り合いに専門家がいる。折を見て話を通しておいてやる」

「そうか、ありがたい」

紫なら、この程度の呪いくらいどうとでも出来るだろう。

……後でどんな対価を要求されるかが怖い。うん、その辺りはジジイにでも丸投げしよう。俺は知らん。

「じゃあ、とりあえず……ほれ」

ぴん、と軽くおでこを弾く。妖力を込めてナギの呪いを引きちぎった。

最初は戸惑っていたようだが、少しして身体の変化に気づいたのか、エヴァンジェリンが緩慢ながらも身体を動かす。

……そして、自分の身体の状態を把握し、にやりと笑みを浮かべる。

「ふ、ふははは……ふはははははははははは！　解けた、この忌々しい呪いが解けたぞ！！」

そのまま高笑いし続けるエヴァンジェリン。

登校地獄の呪いは解いたので、授業に出なければならぬ、という事は無くなる。……担任教師としてはしっかり出席してもらいたいが。

とりあえず、これで学園の外にも出られる。外に出れば学園結界の影響も受けず、魔力の抑制も受けなくなる。修学旅行も行けるようになるはず。

「当分は解呪された事は隠してくれ。解呪された事がバレると、お前にとつても俺にとつても悪影響しかない」

「確かにそうだな。礼を言うぞ、風峰陸斗」

笑みを浮かべたまま、そう告げるエヴァンジェリン。

……ところで桜咲、お前は俺に何の用だ？

「あ、その……先生にお聞きしたい事があつて……」

「何だ？」

「先生はこのちゃ……木乃香お嬢様とはどのようなご関係なのか？」

……要するに、木乃香に危害を加えるか否かつて事を聞きたいのか。正直な話、そういうつもりは無い。

木乃香に出会ったのもアスナ繋がりで偶然だし、会ってから詠春の娘だと知ったくらいだし……。

まあ、初遭遇後に詠春へ電話をかけたところ「娘をよろしくお願いします」と言われたくらいだな。

「教師と生徒。個人的に飯を奢ったりするくらいだ」

「そう、ですか……」

「……安心しろ。俺はむしろ“守る側”だ」

そう言うと、刹那がハツとなって俺の方を見る。
軽く微笑みながら、さらに続ける。

「教師は生徒を守るもの、だろう？ だからそう気を張るな」
「………はい」

どうやら安心してくれたようだな。

「あと、木乃香の事が心配なのは分かるが、きちんと授業には集中しろ。でないと、また成績が落ちるぞ、バカホワイト」

「そ、その名前で呼ばないでください！」

……そう、桜咲の成績は2 - Aでも最底辺に近づいている。

最近では、2 - Aの“バカレンジャー最低成績5人組”の1人、バカホワイトとしてノミネートされているほどだ。

大方、木乃香の護衛に気を取られすぎて、勉強に身が入らないんだろぅが……さすがに教師としては見過ごせない。

「そうそう、木乃香に勉強教えてもらったらどうだ？ アイツはあ見えて頭いいし、側にいるんだから護衛にもなる」

「い、いえ、私は影ながら護衛できればそれで充分ですので！」

ふうん……？

ま、いいけどさ。

「……あと、お前達に1つ言っておいた方がいい事がある」

ちよつとだけ真剣な顔で、俺は全員に向き直る。

エヴァンジェリンは「何だ？」とばかりに俺を睨み、桜咲も「？」を浮かべている。……絡繰はいつも通りだ。

「おそらく、今年度の2月から3月辺りに……ナギの子供達が麻帆良へ教師として赴任してくる」

「何………？」

エヴァの目が細まる。まあ、自分を封じた相手の子供だ。興味はあ

るだろう。

桜咲は……まだ疑問が残った顔だな。

「ナギの子供だと？　どんなガキだ、母親は誰だ？」

「10歳で男女の双子。母親は……ちよつと言えない」

言ったら、間違いなく学園から出て行って引き裂きにかかりそうだから。

それもあるけど……やはり、アリカの名前をここで出すのはちよつとマズイ。

エヴァンジェリンだけならともかく、桜咲の耳に入れると後々騒動になるのは目に見えている。

……とりあえず、その殺気は抑えてくれ。心臓に悪いし、桜咲が青い顔してる。

（後で説明するから、とりあえず抑えてくれ）

（む………わかった）

殺気が納まると、桜咲もふう、と安堵の息を吐く。

「おそらく、うちのクラスを受け持つ事になるだろうな」

「「はあ!？」」

うん、これが正常な判断力を持つ者の反応だよ。

きつと大半の2-Aの生徒は、最初から最後までクライマックスなノリで、大歓迎するに違いないから。特に雪広、あれがダントツに

「ど、どうしてですか？　英雄の子供とはいえ、10歳の子供が教師だなんて……それに何故、2-Aだうちのクラスと？」

「“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になるための修行だ。

それと、質問の後者についてだが……桜咲、2 - Aについておかしいと思った事は無いか？」

「え？」

そう言うとき桜咲は、面食らった様な顔になったが、すぐ顎に手を当てて思案し始める。

……少しして、納得したのか頷く。

「言われてみれば……確かに」

「1年前、タカミチと俺も同じ感想を抱いたよ。最初は監視しやすいように一箇所に集めたのかと思ったんだが……」

これはあまり考えなくなかった推測だが、充分に現実味がある。

しかし、これが真実だったら……学園長、アンタ教育者として最低だよ。

「もしも2 - Aが『英雄の子供を育てるために組織された』クラスだったとしたら……？」

「なっ………！？」

桜咲は驚愕しているが、対照的にエヴァンジェリンは憎々しげな顔で無言を貫いている。

………どうやら「おかしい」と言った時点で、俺と同じ考えに至っていたようだな。

「ナギとも因縁深いエヴァンジェリンを始め、魔法生徒に裏の関係者……さらには才能に特化した生徒も数名見受けられる。……大方、未来の英雄のパートナーとして選別されたんだろう」

「し、しかし……お嬢様はどうなのですか！？」

……そこなんだよな、1番引つかかっているのは。

木乃香と桜咲をセットにしたのは護衛できるようにだが、それならアスナと同室にする必要は無い。……“魔法無効化”で呪詛を防いでいるのも考えた。

しかし、こう考えると全てが納得いく答えになる。

「学園長は、木乃香に魔法の事を隠すつもりは無いのかもしれない。むしろ……未来の英雄のパートナーとして期待しているかも」

詠春は木乃香に対して、魔法の事は触れない教育方針を採っている。やはり、陰謀渦巻く世界に身を投じているだけに、娘がそういった危険な目に遭わないよう考慮した結果なのだろう。

……詠春、よその家庭の教育方針に口を出すつもりは無いが、個人的には無理があると思うぞ。

「り、理由は!？」

「……これ、他言厳禁だぞ。アスナ、うちの関係者だから」

その言葉に、桜咲だけでなく、エヴァンジェリンも狐に包まれた表情になる。

あまり言いたくない事ではあるが……この際仕方がない。エヴァンジェリンはもちろん、桜咲も口は硬いだろう。

「つまり……“紅き翼”の関係者だよ」

「……な、何だと!？」

「麻帆良に来る前に、表向きは当時の記憶が封印されてるって事になってるが、実際はそんな事はない」

それはタカミチと相談して決めた事なんだが……麻帆良学園はメガロメセンブリアの直属組織だ。

昔のように……“黄昏の姫巫女”の力を狙うスパイが、学園内に潜んでいないとは言いい切れない。

そこで、アスナの記憶は「封印されている」事にしてある。この事は、俺とタカミチと当人しか知らない。世間一般で言う「敵の目を欺くには、まず味方から」というヤツだ。

「エヴァンジェリン。もしかしたら……修行の一環として、ナギの子供達と戦って学園長に言われるかもしれない」

「……なるほどな。私がその事を知らなければ、スプリングフィールドの血で解呪を試みた可能性があり得る。それでガキ共に経験を積ませよう、という魂胆か」

吐き捨てるように言い放つエヴァンジェリン。……無理もない、駒として利用される可能性が高いのだ。

エヴァンジェリンが行動を起こさなければ、何らかの対価と引き替えに、子供達と戦えという依頼が来るかもしれない。

……そう考えると、やはり仮契約のパートナーが必要となる。狙いはそこか。

「とにかく、今日話した事は誰にも話さないように。……それ云々については、何か分かったらまた話す」

「ああ、わかった」

「……………」

暗い顔で俯く桜咲。

まあ腕が立つとはいえ、14歳の女子中学生には少し重すぎる話だったかな。

「……何か聞きたい事、相談したい事があるなら……アスナに話してみるというだろう」

「え……………」

「俺相手には話にくい事も、同年代のアスナなら話しやすいかもしれない。……あれはああ見えて、話の聞き方がうまい」

聞くところによると、部活だけでなく、他校の生徒の相談事にも乗っているとか。

……さすがは“紅き翼”という濃い面々と行動を共にしていただけある。

「もちろん、俺も出来る限りの力にはなる。一応担任だからな」
「……………」
「ありがとうございます」

第4話：意外に早い正体バレ（後書き）

あまり知られていないかと思いますが……刹那の成績って、かなり下な
んですよね。

不真面目ってわけでもないし、特別頭が悪いつてわけでもないと思
うので、やっぱり木乃香関連で気を張りすぎていて、勉強を疎かに
しているっていうのが打倒かな、と。

……実際、不真面目なエヴァンジェリンと、それに合わせているで
あろう茶々丸も同じぐらいのラインですし。

というわけで、アスナの代わりに刹那がバカレンジャー入りです。

アスナは……頭悪くないというか、こつちだと寧ろいい方です。木
乃香のちよい下ぐらいかな？

記憶を持ったまま成長した事で、その後の性格形成にも変化が現れ
ており、それが思考や行動にも大きく影響を与えています。……も
うこの辺りだけでも原作ブレイクですね。

まず、激情家であるのは変わりないですが、脳筋じゃ無くなってま
す。冷静に物事を判断する思考があります。

ま、いいんちょと気が合わないのは変わりないですが。

……なお、刹那がバカレンジャーから脱退できるかは、今後次第で
す（笑）。

その辺りは学期末試験で描かれる事になるかと。

第5話：薬味襲来あとちょっと（前書き）

今回、オリキャラが登場します。

おそらくですが、そのオリキャラによってネギの活躍は“ほぼ”奪われる事になるかと。

第5話：薬味襲来あとちょっと

〔Side Eva〕

桜咲刹那が寮へ戻っていった後、風峰は改めて結界を張った。

「随分と警戒しているな」

「当たり前だ。……それだけ、アスナの事は重要なんだ」

神楽坂明日菜、か。

じじいがわざわざ孫娘（近衛木乃香）と住まわせているぐらいだ。やはり只者では無かったか。

しかし……私が見立てた限り、ヤツは強い魔力を持っているわけでは無かったが……？

「普段は特殊な呪符を身につけて、魔力を感知されないようにしている。……どこにスパイが潜んでいるか分からんからな」

「……………なるほど」

「さて、何から聞きたい？」

神楽坂明日菜の事は気になる。しかし、それ以上にナギの子供だな。ヤツめ、子供がいるという事は結婚していた事になる。……………許せん。

「ナギのガキ共の話はどうでもいい。しかし、ヤツの妻とはどんな女だ？」

そう尋ねると、風峰の顔が困惑で染まる。

どうやら、ナギの嫁はあまり口に出せない人物らしい。となると、表に出せない人物か……？

「……耳を貸せ」

「は？」

「いいから」

空間その物から切り離してあるのだし、何もそこまでする必要ないんじゃないか？

よく分からんが……言われた通りにする。

「アリカ、だ」

「む……………」

はて、アリカ……………」？

どこかで聞いたことのあるような名前だな。まあ、それほど珍しい名前でもないし……。

……………待て、表に出せない人物で「アリカ」だと？

「もしや、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアか？」

まさかとは思ひ、尋ねると……風峰は首を縦に振った。

確かに、それなら名前を出すわけにはいかないな。

アリカ・アナルキア・エンテオフユシア。魔法世界の文明発祥の地とされる、ウエスペタルティア王国最後の女王。

20年前の大戦の首謀者だとされ、その数年後に処刑されたと聞くが……。

「……………ナギの仕業、か」

「そう言う事だ」

大方、処刑当日に現場に乱入し、有耶無耶にしてアリカ女王を救出

した、といったところだろう。

それが表沙汰にされていないのは……表沙汰にすれば、何故“紅き翼”がアリカ女王を救出したかという話になり、処刑を企てた輩にとつて都合の悪い事になりかねない。

……となると、その陰謀の首謀者はMM元老院か。

「くだらんな」

ガキ共は10歳という事は、少なくとも10年前までは生存していた事になる。

……今も生きているかは不明だが、ナギのガキ共は王家の魔力を持つている事になる。

麻帆良に来るのは、修行と同時にガキ共を守る事が目的という事か。……じじいめ、確信犯だな。

「ナギの嫁については分かった。それで、神楽坂明日菜はどうなんだ？」

「……そっちについてはあまり言えない」

つまり、神楽坂明日菜の事も、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアと同様に機密扱いという事か。

「1つだけ言えるのは、アスナもまた、狙われる要因を持っているって事だ」

「……ふん、覚えておこう」

[Side Out]

「Side Rikuto」

「つまり、この場合使われるのは過去形であって……」

キンコンカンコン……。む、チャイムが鳴ったな。

「じゃあ、今日の授業はここまで。宿題にプリント配布するから、明日までにちゃんとやってくる事」

「……………はい……………」

「……………なお、春日と鳴滝姉妹はペナルティとして3枚追加だ」
「……………え……………!?」

え、じゃない。

昔のコントみたいな金ダライなんて仕掛けやがって。俺だったから良かったものの、しずな先生とかだったら反応できなかったぞ。

「春日、シスターシャークティに報告されるのとどっちがいい？」

「……………プリントでお願いします」

「よろしい」

温厚そうに見えて、あの人は意外と怖いみたいだからな。

生徒が次々と教室を後にするのを尻目に……ふと、端の席が目に入
った。

どんよりと沈んだ様子の女生徒がいる。そういえば、こっちもどう
にかしないとな……。

「相坂、お前は帰らないのか？」

「……………え？」

今ではもう使われていない古いタイプの制服に、やや透けて見える
半透明な身体……。

俺に声をかけられた事に驚いたのか、慌てつつも応対する。

「あ、あのつ……風峰先生、私の姿……見えるんですか？」

「ああ。最初から見えてたが、こういった種別の幽霊が見極めるの
に時間かかってな。放ったらかししててスマン」

相坂さよ。2 - Aの出席番号1番。……今言った通り、彼女は幽霊

……地縛霊の類に入る。

着任当初から気になっており、古株のエヴァも詳しい事は知らない
らしく、授業の合間を縫って昔の資料や新聞を漁り、こういった存
在かを明らかにした。

……60年ほど前、学園で起きた密室連続殺人事件の被害者の1人
で、この教室で殺害された事から、地縛霊として括られているらし
い。

尤も、事件自体は既に解決しているため、未練は無いはずなのだが
……………。

「お前、どうしてここにいるんだ？」

「それが……………分からないんです」

しくしくと泣きながら、相坂が答える。

……それから語り出した事によると、何年も幽霊をやっているのもう死んだときの事とかも忘れてしまったのだとか。

主に幽霊が成仏出来ない理由として、未練が残っている場合が挙げられる。

しかし、相坂はそれすらも忘れてしまっている。こうなると、成仏するのは極めて難しい。

こうなってしまうているとなると……退魔師が被うしか無い。

「ふむ………」

ぼんぼん、と相坂の頭に触れてみる。

触った感じで分かるが、実体を持っていない。しかも極めて強い認識障害能力を持っている。

……これだと、霊格の高いヤツじゃないと見えないだろうな。

「相坂、普通に実体化してみたいか？」

そう尋ねると、相坂の顔がぱあっと明るくなった。

……俺がこう切り出したのにも理由がある。

当時の在学生にも話を聞いたところ、地縛霊になった当初からずっと、教室に括られているらしい。……つまり、60年間ずっと独りだった。

エヴァでさえ15年だが、相坂の場合その4倍……おまけに誰にも気づかれない。ここまで辛い事はあるだろうか。

同情と言えばそれでおしまいだが、担任としては放っておけない。

「で、出来るんですか!？」

「出来る。ちょっとばかり時間は必要だがな」

冬休みに幻想郷の方に帰る事になるかな。
その辺りは紫や……本職、といったらおかしいかもしれないが、幽
々子辺りが詳しいはず……いや、いつそのこと、相坂も連れて行っ
た方が早いかもしれない。
構成を見た限り、学園との繋がりを解除して、別の物と繋ぎ直せば
大丈夫だと思う。……位牌でも用意するか。

〔Side Arnya〕

「……ねえ、アンタ本当に大丈夫？」

「ええ、まあ泣きたい気分ですよ？ まったくもって」

諦めに似た笑顔で、レイヤはそう言う。

レイヤ・スプリングフィールド。私、アナ・ココロウア……アイ
ニヤの幼なじみの1人で、ボケネギの双子の妹。

腰まで垂らしたままのゆつたりとした金髪に、緑と碧の異色光彩。どこか儚げな印象を受ける美少女。

……うん、私から見ても充分に美少女。最近めつきり「ぐっ」と来るようになったから。

「……あのボケネギも、少しはアンタやネカネお姉ちゃんを見返ればいいのに……」

「いえ、別にいいです。アレはああいうタイプですから」

……あの村での事件から、ネギは変わった。ううん、ネギだけじゃなくレイヤも。

ネギは怖いぐらいに勉強にのめり込むようになって、外で遊ぶような事は無くなった。私たちとも、教室以外ではほとんど顔を合わさない。

レイヤに言わせると「あの雪の夜から逃げてるだけ」らしいけど……。

「それよりアーニヤさん、いつも通り手伝ってもらってもよろしいですか？」

「いいわよ。私だって、早く村のみんなを元に戻してあげたいもの」

今、私たちがいるのは学校の薬剤庫。

本当は子供が入っちゃいけない場所だけど、おじいちゃん……校長の許可をもらって、特別に入れるようにしてもらってる。

……その理由は、悪魔にかけられた石化の呪いを解くため。

『……アーニヤさん、手伝ってください』

ネギやネカネお姉ちゃんと一緒に救助されたレイヤが、目が覚めて閉口一番に言った言葉がそれだ。

まあ、レイヤは昔から身体が弱いから、私も合間を見てちよくちよく手伝ってる。

「……爵位級悪魔の石化を解く手段は、未だに確立されていません」
ぱらぱらと魔導書を眺めながら、レイヤが呟く。

校長や他の大人の人も言ってた。今の魔法使いの力じゃ、元に戻せないって。

爵位級悪魔。簡単に言うと、すっごく強い魔族の力に対抗するには、それ以上の力を持つ魔族の力を使うしかない。

でも、子供が魔族を召喚するなんて以ての外だし、うまく高位魔族が召喚できるかも分からない。

だからこそ、レイヤは正攻法……魔法薬と解呪魔法による石化治療を行おうとしている。

……尤も、成果はあまり芳しくないけど。

「強大な魔力を持つ者が、熟練した技量をもってして治療を行えば……或いは」

「レイヤじゃ、ダメなの？」

「……まずは師と仰ぐべき人物から見つけなければなりませんし、最低でも10年以上かかるかと」

そうよねえ……世界最高クラスの治癒術師ぐらい？

サウザンドマスター

もしかしたら、“千の呪文の男”なら出来たかもしれないって思った事もあったけど……。

『……アレはそこまで万能な英雄じゃありませんよ』

と、レイヤに苦い顔で否定された。

それが気になって、校長や大人の人に聞いて回ったら……出てくる

出てくる、ナギ・スプリングフィールドの“武勇伝”が。

実際には5、6個しか魔法が使えなかったらしく、大呪文と呼ばれる詠唱の長いものに至っては、あんちよこ見ながら詠唱してたとか
在学記録を見たところ、魔法学校も中退。……私たちとそう変わらない歳の時に飛び出していつて、そのまま魔法世界にも行ったとか
……ネギが聞いたらきつと、凄い勢いで否定するでしょうね。

「まあ、地道に行きましょう。日本の諺にもこうあります。……『塵も積もれば山となる』、『千里の道も一歩から』と」

「要するに、回りくどい事するより、地道に頑張りましょうって事
?」

「そう言う事です」

[Side Out]

[Side Rikuto]

……とまあ、なんやかんやで時間は流れ、2003年を迎えた。

新年？ こつちで過ごしましたけど何か？

幻想郷に帰らなかったのか？ …… お前達は、あのどんちゃん騒ぎを知らないからそれが言える。

13年前なんて悲惨だった。酔った鬼が巨大化するわ、天狗がそれを煽るわ、スキマ妖怪がさらに引つかき回すわ…………。

……… 何で最終的に花の妖怪とタイマンする羽目になったんだっけ？ いや、思い出したくない。忘れておこう。うん、そうしよう。

どちらにせよ、春休みにはエヴァと相坂………… さよを連れて帰る予定だし、新年には別にいいだろ。

軽い進展としては、生徒の何人かを名前で呼ぶようになった。さよとか刹那とか…………。もちろんプライベートでだが。

…………… そして今現在、新たな問題に直面している。

「ですから！ 私は反対です！！」

と、新田先生が敢然と訴えている。…………… ぶっちゃけると、職員会議。

正直なところ出たくはなかったのだが、何しろ話題の中心となりそうなのが2-A^{うちのクラス}だし、一般教師へフォローくらいはしないとマズイかな、と。

内容は「英雄の子が麻帆良へ来る事について」。要するに、英雄の子供達が日本で修行を行う事に対する説明。

もちろん、英雄云々魔法云々は省かれており、「特別な許可を受けた子供が学園で教鞭を執る」となっている。

……まあ、それでも反対は多い。そりゃそうだよなあ……。

「10歳にも満たない子供を教壇に立たせるとは、学園長！何を考えているのです！！」

「じゃからの……既に決定事項じゃし」

「いつ、どこで決まったのですか！我々にはまた事後報告ですか！？」

新田先生もお冠だな。

いや、新田先生だけじゃない。他の一般教師もこの事については相当怒っている。……何せ、自分達のあずかり知らぬところで勝手に決まったんだからな。

おまけに学園長はこういった独断専行（ま、実際は違うが）が多く、それが溝を生んでいる。

……まあ、魔法関連の事をバラすわけにもいかないだろうし、それは仕方ない。どちらかと言えば、それをしっかり抑えられないじじいの所為ではあるが。

「……まあまあ、新田先生。落ち着いてくださいよ」

と、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべながら、脂ぎった中年教員が新田先生を宥め出す。

……名前だけは聞いたことがあるかもしれないが、そいつが古矢忠通。連合派魔法先生の筆頭だ。

「既に決まった事です。ここで吠えても意味はありませんよ？」

「しかしですね……」

「聞こえませんでしたか？既に決まった事です」

なお、この古矢という男……教師陣からも生徒からも評判が悪い。

優秀なのは違いないが、他者を見下す風潮が強く、それ故に評判は底辺に位置している。

ま、それはともかく……俺からも突っ込ませてもらうとするか。

「……学園長、確認させてもらってもよろしいですか？」

俺がそう尋ねると、周囲の教師からさざめきが漏れる。

……まあ、あまり普段から発言しないタイプだと自覚はしている。

「何かの？」

「その、ネギ・スプリングフィールドという少年ですが、うちのクラスを担当する事は聞きました。……もちろん、最初から正式な教師として採用するわけでは無いのでしょうか？」

「無論じゃ。教育実習生という形になるかの」

まあ、それが妥当だろう。……これで最初から正式とかだったら、暴動が起きかねない。というか、俺もキレる。

教育実習生という事は、何かしらの条件をクリアさせてから、正式に本教師として採用……という形になるはず。

「そうなるのう」

「なら、その条件……2 - A担任教師の自分から出させてもらいたい」

俺の言葉に、周囲のさざめきが大きくなる。

新田先生も驚いたような顔で俺を見ているし……後でちゃんと説明しますってば。

「その条件とは？」

「学期末試験において、2 - Aの成績最下位脱出」

「なぬっ!？」

ジジイが文字通り、吹っ飛んだ。

他の教師にしても「正気か!？」とか「それは無理だろう」「あり得ん」という意見が交わされている。

……とりあえず、うちのクラスにどんなイメージがあるのかを尋ねたい。

「もちろん、私も授業はします。しかし、試験前期間の授業は基本的にネギ少年に任せる。これがベストな形だと思いますが?」

ネギ・スプリングフィールドが授業を行い、最下位脱出という成果を見せれば教師として採用する。

これは俺から出せる破格の条件だ。……尤も、生徒を言い様に使っているという点では、俺もどうこう言えないが。

「そ、それはさすがに……無理があるんじゃないかの?」

「10歳にも満たない子供を教職に就ける事自体、無理があると思いますけど?」

「むっ……!」

悪いが、ここから引くつもりはない。

「風峰先生……いくら何でも、それは問題があるでしょう……?」

「どういう意味でしょうか? 古矢先生」

「2-Aは毎回最下位。それを覆すのはさすがに……」

古矢め、さすがに焦ってるな。

2-Aは新田先生でさえも相当手を焼いたと聞く。タカミチに至っては、まともに授業出来なかったらしい。

俺は……まあ、前向きに頑張ってるよ？ うん。

「別に成績をトップにしろと言っているわけではありません。最下位脱出自体はそこまで難しくないはずですが？」

「む……………」

「最下位を脱出できれば、私は何も言いません。ネギ少年の教師としての器が確かだという事です」

もちろん、試験期間に何か問題を起こした場合、正式採用は見送られる事になる。

例えば、魔法を使ったりして試験の手助けをするとか。

……いや、自分で言ってるんだが、さすがにこれは無いだろう。魔法秘匿は魔法使いとして当然の義務なんだし。

「しかし……………」

「往生際が悪いです。……子供を教職に就ける事自体に無理がある、私は先ほども言ったはずです」

その後も長引く会議に、裁判所に直訴してやろうかと思ったが、学園長の“英断”で俺の条件が受け入れられた。

別に、俺はネギ少年が修行に来る事に反対なわけではない。しかし、中学生の将来を台無しにするかもしれない内容には、断固として反対する。この辺りはタカミチも同意見だ。

もちろん、ネギ少年に教師としての能力が備わっているのなら、文句は言わない。

……言っておくが、これは破格の条件だと思うぞ？ 本当に。

（そう言えば……ネギ・スプリングフィールドの双子の妹について、話に出てこなかったな）

第5話：薬味襲来あとちょっと（後書き）

他の二次小説では、周囲の大人はネギを「ナギ・スプリングフィールドを通して見ている」という設定が多いです。

この辺りは私も同感で、そう考えると周囲の人間もネギに対して甘い気がするんですよね……武装解除とか武装解除とか武装解除とかホレ薬とか（ホレ薬は違法です）。

普通なら強制送還で、下手したらオコジョになってもおかしくないくらいに。

なお、うちの小説では、10年前からタカミチは陸斗と行動を共にしており、ある程度の師事を受けているため、そういった視野の狭まりはありません。

ネギの妹、レイヤ・スプリングフィールド登場。

名前がちよつとは分かります。しかし、彼女はちよつとばかり特殊な立ち位置にあります。

ネギがナギそっくりで、その片方がアリカそっくりというのはテンプレですが……敢えてそれを踏襲します。

魔法が使えない落ちこぼれ、というのは無いです。複雑な事情持ちではありますけど。まあその事情で、ちよつとネギに劣る程度ですかね。

なお、兄妹仲はよくありません。理由はその内明らかになるかと……。

第6話：暗躍する影たち（前書き）

連投です。何だか調子がいいですね。

いや、普段ストレス溜まってるから、こついつの書いてるとスリッします。

第6話：暗躍する影たち

〔Side Rikuto〕

「……すいません、あそこまで譲歩するのが精一杯でした」
「いや、君はよくやったと思うよ」

既に日も暮れかかっており、廊下に生徒らしき姿は見えない。
そんな廊下を、俺と新田先生を始め、一般教師陣がぞろぞろと歩いていた。

「しかし、風峰先生。そのネギ・スプリングフィールド君、でしたっけ？ 本当に教師としてやっていけるのでしょうか？」

「まだ分かりません。何せ、実際に会った事が無いので……高畑先生なら会った事があるそうですが」

4、5年ほど前、仕事の関係でイギリスを訪れた際、会ってきたと言っていた。

ついでに1ヶ月ほど、基本的な戦い方を少しだけ教えて来たとか。それについてどうこう言うつもりは無いが……実際に「居合い拳」で100mの滝を割って見せたのは、明らかに調子に乗りすぎだろ。

「あの2-A相手に10歳にも満たない子供がやっていけるとは思いませんけどねぇ……」

「聞けば、風峰先生も相当苦勞しているそうですし」

「あ、あはは……」

苦笑いするしか出来ない。

最近はマシになったが、着任当初は本っ当に苦勞した。いや、マジ

で。

宮崎や長谷川のように、普通に授業を聞いてくれている生徒はいるのだが、それ以上に佐々木や椎名みたいなハイテンションな生徒が大多数を占めるため、うまく授業が進まない。

…… 10歳児があの子相手になんていけるかと聞かれたら、正直思わない。

「もちろん、出来る限りのサポートには回ります。…… 気が重いですか」

「か、風峰先生…… 気を確かに」

タカミチから後任を引き受けただけなのに、どうしてこうなるわけ？
とりあえず、あの鶏頭^{ナギ}が見つかったら一発殴ろう。経緯はどうあれ、
アイツがきちんと父親しないからこうなったわけだし。
頼むから、妹の方はマトモであって欲しい。

〔Side Out〕

「Side Makie」

「ねーねー、風峰先生ってどう思う？」

「ええ先生やと思うけど？ カッコええし」

うん、それは私も同感。

しっかり授業してくれるし……まあ、それについて行けてるかどうかって聞かれると、微妙なんだけど……。

鬼の新田みたいにすごい厳しいってわけじゃないけど、締めるところはきっちり締める。

「あれで三十路超えて嘘でしょ。明らかに高畑先生より年下じゃん」

「あゝ、それはウチも同感」

高畑先生が……ちょっと老け顔だけど、まだ30代前半だったっけ？でも、あの顔はどう見ても、40代に差し掛かるダンディなオジサマだよ。

「彼女おらんって言うてたけど……どうなんやろ？」

あれ？ 亜子ってばもしかして……？

私の視線に気づいたのか、赤くなった亜子が突然否定し出す。

「ち、違っわ！ その、まあ確かに……ええ人や思うとるけど」

「ふゝん……」

これは、後でゆーなやアキラとも話し合わない。

亜子ってば、ちょっと前にサッカー部の先輩にフラれて、相当落ち込んでたからね。

……そういえばバカリダーが「失恋の痛みを癒すのに最適な方法は、新しい恋愛です」って言ってたっけ。

「だから、違う言ってるやろ……!!!!」

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

どうも初めまして、レイヤ・スプリングフィールドと申します。

……え？ 誰に対して挨拶してるのかって？ まあ、それはいいじゃないですか。

旧世界がイギリス……とある小さな隠れ里で生まれ育ち……色々あって、ここウエルズの山奥に位置する村で今を過ごしています。

本当に色々ありましてね、10歳……数えでなので、まだ9歳ですが……にしては、随分と老けて……いえ、達観していると言われます。

「卒業証書授与。この7年間よく頑張ってきた。だが、これからの修行が本番だ。気を抜くでないぞ」

ああ、そうそう。今は魔法学校の卒業式……ま、私にとってはどうでもいいんですけど。

“立派な魔法使い”^{マジステル・マキ}。確かに、多くの命を救うために力を振るう。その部分是否定しませんよ。

私自身、「命を救う」部分には共感しています。……しかし、どうも大多数の“立派な魔法使い”の方々は、その本来の意義を見失い、迷走しているようですが。

「レイヤ・スプリングフィールド君！」

……ああ、私の番ですか。面倒ですねえ……。
重い身体を動かし、校長の前へと進む。向かい合い、卒業証書を受け取る。

「卒業おめでとう」

「……ありがとうございます」

おっと、まだ開いちやダメなんでしたっけ。

“立派な魔法使い”の最後の試練として、特定の場所で一定の修行期間が設けられ、それをクリアする事で初めて資格が与えられるわけです。

……歴代の卒業生だと、「ロンドンで占い師をやる」とか「遺跡発掘のスタッフとして参加する」があったようです。

と、式が終わり、私たちは長い廊下を歩きつつも談笑します。

「……………レイヤ、あんた本当に大丈夫？」

「……………ええ」

結構、不自由なものですね……………この身体は。

……………私とネギの父・ナギ・スプリングフィールドは、かつての大戦で活躍し、英雄とまで呼ばれた大魔法使い。

確かに、その実力は折り紙付きだったそうです。研究の一環で映像資料を取り寄せてみましたし。

ですが……………本当に父親として相應しいかと聞かれると、些か答えづらいところがあります。

……………私、父親の顔を実際に見たこと、ないんですよ？

英雄とだけあり、様々な書籍に登場していますが、公式記録によると、私たちが生まれる前に謎の死を遂げているとのこと。

……………いえ、どうやら生きています。6年前のあの夜、ネギは父に会ったそうですから。

「……………」

そうそう、身体の説明がまだでしたっけ。

……………私たちの母の名は、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。新世界がウエスペタルティア王国の最後の女王。

表の歴史では、かの大战を引き起こした秘密結社“完全なる世界”

「スモ・エンテレケイア」

の黒幕とされ、18年ほど前に処刑されたはずの人物。もちろん、私たちの母である以上、その処刑は全くの嘘。黒幕云々も、全くの冤罪。

私は……母の事は嫌いではありません。むしろ、好感を持っています。

その理由については……おいおい話すとうしましょう。

私たちには、父親はともかくとして母親の情報は伏せられていました。いえ、ネギには今も伏せられています。……父親ばかり見て、母親には興味無いようですし。

冤罪とは言え、歴史では大罪人として名を残しています。その上、既に滅んだ王国の最後の人間……つまり、私たちも一応、王家の血を引いている事になる。

ウエスペタルティア王家は、新世界の始祖とも呼ばれる人物の血を引いているらしく、それ故に歴史的にも重要な地位にいるとの事。

現在、ウエスペタルティア王国は存在せず、僅かに残った領土がM^{セシブリア}によって統括されている以上、王家の人間が生きていると知られれば、政治の道具として利用される可能性が高い。だからこそ、私たちの母の情報は秘匿されている。

……え？ どうして私が知っているかつて？

普通気づきますよ。私の顔、母にそっくりですから。

元々疑問を持っていました。それについてスタンさん……村で親しくしていたおじいさんに尋ねたところ、教えてくれました。

……『ナギには勿体ないくらいの、いい女じゃった』と。

ただ「今どこにいるのか」という質問には答えてくれませんでした。

「ちょっと、レイヤ。本当に大丈夫なの？」

あ、すみません……。

しかし、それに耐えられるだけの肉体ではなく、どうしても負荷がかかってしまう。

[illegible]

原因は……ネギの卒業証書ですか。修業先と内容は……「A teacher in Japan」……日本で教師をする事……はあ！？

「ね、レイヤ、あんたのは!？」

「今開いてみます」

ネギがこうだと私のも……嫌な予感しかしません。
しゆるしゆると紐解き、卒業証書を開く。……浮かび上がった文字は「A student in Japan」……日本で学生をやる事、ですか。

「教師に比べれば、まだマシですね」

「確かに……じゃないわよ!」

いえ、教師は絶対嫌ですよ? ……まあ、ネギの生徒というのも嫌ですけど。

あ、アーニヤさん引つ張らないでください……私、身体弱いんですから……。

廊下の向こうに長い髭の老人……校長を見つけ、ネカネさんとアーニヤさんが問いました。

「何かの間違いではないのですか!? 10歳で先生など無理です!」

「そうよ! ネギつてば、ただでさえチビでボケだし、レイヤなんて身体弱いし……」

「しかし、卒業証書にそう書いてあるのなら決まった事じゃ。仕方ないのう」

……いえ、仕方ないって……学生はともかく、教師は普通にダメでしょう。

確か日本には……仕事に関する法律があり、私たちの年齢では仕事が無理だったはずですが?

「安心せい。修業先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、がんばりなさい」

いえ、だから人の話を聞いてください。

「ハイ! わかりました!」

だから、「はい」じゃ無いですってば。

「レイヤも安心なさい。日本はいい国だ。それに……………」

そつと校長が私に耳打ちし、何かを呟く。

(…………… お前達の修業先には、『図書館島』と呼ばれる大規模な書庫がある。一般人には秘匿されているが、中には魔法関連の書物もあると聞く)

(……………！！！)

(私から向こうへ打診しておこう。お前の望むものが見つかる事を願うよ)

……………なるほど、そのために学生という形とはいえ日本に、ですか。後は、ネギが暴走しないようお目付役、でしょうかね。

このバカには一般社会の常識が足りてるのか怪しいところがありますし。

「わかりました。やってみましょう」

しかし、日本の学校では学期の問題もあるそうですし、私は4月から日本へ行く事になるようです。

2月から4月までのタイムラグは2ヶ月。……………その間、問題を起こさないでくれればいいんですけど。

〔Side Out〕

「Side Asuna」

「その、このちゃ……お嬢様のご様子にお変わりありませんか？」

硬いわねえ……もっと普通にしていればいいのに。

喫茶店で的一件以降、陸斗と何か話したらしく、桜咲さんがよく木乃香の事について聞いてくるようになった。

「いつも通りよ。というより、教室で顔見てるからわかるでしょ？」

「そ、それは……そうですが」

「それに私に聞くより、直接話したりする方がいいと思うわよ」

木乃香の幼なじみらしいし、木乃香本人も仲良くしたいって言うてるし。

「い、いえ！ 立場の事もありますので………」

「……強情ねえ」

出来れば、早急に何とかしたい。

……正直なところ、「何でアスナがせつちゃんと仲良うしとるん？」って聞かれて怖い。

確実にレベルアップしているあの笑顔が怖い。まだ那波さんには及ばないけど、それでも怖い。

「あの……神楽坂さんは……」

「アスナでいいわよ。呼びにくいでしょ？」

「では、私も名前でお願ひします。……それはともかく、アスナさんは魔法生徒なのですか？」

……ああ、陸斗が話したんだ。

うーん、関係者って言ったらそうだけど、表向きは魔法生徒じゃない。というか、記憶は封印されてるって設定だし。

「陸斗から聞いてない？ 表向きは私、記憶が封印されてるって事になってる」

「……あ、そういえば……」

出来れば、あんまり口に出して欲しくはない。

本当は記憶が封印されてないって事は、“紅き翼”では陸斗とタカミチしか知らないし、外部で知ってるのは紫さんぐらいだ。……あ、そうそう。メガロメセンブリアのあの2人もいたっけ。

……まあ、正直に言えばね、忘れたいとも思ってたわよ。

ナギやガトーさんがいなくなったのは辛かったし、みんなと会う前なんて地獄だった。

でもそれ以上に、みんなと出会って、モノクロだった世界がカラフルになって、忘れたい以上に忘れたくないと思えるようになった。だから、あの時の選択は間違っていないって思ってる。

「でも、トレーニングぐらいはしてるわよ？ 怠けたくないし」

早朝アルバイトの新聞配達では、陸斗に頼んでまほネットで買ってもらった、特注のジャージを着てやってるし。簡易型の重力操作が出来る……所謂、界。星と同じ訓練効果が期待出来るっていう優れたもの。その分値段は張ったけど……。

3倍にも慣れてきたし、明日からは4倍にチャレンジしてみようかな？

後は……咸卦法のトレーニングとか？ タカミチはともかく、まだガトーさんの領域には至らないし。

「まあ、まだ陸斗には遠く及ばないけど」

「そ、そうですか……」

……だって、アレ反則でしょ。

スペルカードだったけ？ 広範囲だし、威力高いし、避けるの厄介だし……。

普通に格闘戦だけでも、チートの代名詞ラカンとタメ張れるほど強いのに、アレを出されたらもう手が付けられない。

「アスナさん、新しく来るとい魔法先生についてどう思いますか？」

「新しく来る魔法先生？」

ああ、ナギの子供の事？

陸斗は、「教師としてやっていけるなら問題無い」って言ってたっけ。

その辺りは私も同意見。しっかり先生出来るんなら何も言わないし、………けど、ナギの子供でしょ？ 変なところばかり似てなきやいいけど。

「かの“千の呪文の男”の直系、魔法使いとして優秀とされますが……」

「刹那さん、その先入観は捨てた方がいいわよ」

「え？」

呆けた顔になる刹那さん。いい機会だから言っておこう。

「誰かの子供だから、とかそういうのは関係ないの。確かに、血筋である程度の才能は受け継がれるけど、それをうまく発揮できるかは環境が重要だから」

「……………確かに」

「タカミ……………高畑先生もそうよ。あの人、呪文詠唱出来ないし」

先天的にそういう身体らしいから、魔法使いとしては落ちこぼれ。

……………ナギとは正反対よね。

ガトーさんの指導を受けて、無音拳と咸卦法を会得。さらに数年間修行を続けて、麻帆良学園N.O.2の実力を身につけた。

「才能はあるかもしれない。でも、所詮は10歳の子供。魔法学校でも基本的なところしか教わっていないだろうし……………過度の期待はしない方がいいわよ」

「そう、ですね」

「ま、それも陸斗に言われた事だけど」

けど、嫌な予感しかないのよね……………もっ、すっごく。

[Side Out]

「Side ???」

「……………どういう意味かしら？」

「……………さあ？」

私たちの前には数枚の書類が置かれており、その内容が私たちを悩ませていた。

私のアーティファクトの結果なんだけど……………すっごく使い勝手が悪い。

まず、1年に1度にしか発動しない。おまけに発動は自動的。勝手にペンが浮かび上がり、さらさらと自動筆記する。

そして、何よりも内容が難解。古代語…それも詩文形式で筆記されるため、その解釈がとても難しい。

「この『賢しき愚者』というのは誰なのかしら？」

「そもそも誰を……………いや、何を中心にしたのかが分からない。いや、この部分から何が中心になるかは予想出来るが……………」

と、彼がその部分に赤線を引いていく。

なお、これはコピーしたもので、何を書き込もうが問題は無い。

「……『新たな世界は終わりを迎える』。これって、つまり……」
「新世界……つまり、魔法世界の崩壊。まず間違いないな」

顔を見合わせ、はあ、とため息をつく。

これの的中率は「よく当たる占い程度」だが、それでも深刻な問題だ。

MM元老院の中でも、その問題が叫ばれている。決して逃れる事の出来ない、未曾有の危機。

「……ねえ、私ちよつと気になつてるところがあるのだけど」
「奇遇だね。僕もだよ」

詩文の中に、ちよくちよく出てくる『王』という単語。

魔法世界に存在する王家とえば、南のヘラス帝国……中心的な物になり得るのは、第3皇女テオドラ。

そしてもう1つ。20年前に滅んだ、ウエスペタルティア王国。

「ナギの子供達だな、ウエスペタルティア王家の血を引いているのは。……そういえば彼らは元々、こちらへ来るはずだったんじゃないか？」

「ええ、苦労したわ」

メルディアナの校長から直接連絡が来て、「どうにかして欲しい」と言われて慌てたわ。

確かに、このアーティファクトのおかげで、元老院でも強い発言力を持つてるけど……その所為で執務官に睨まれてるのよ？ 私。

「どうにか修業先を麻帆良へ移せたわよ。ゲートやら教育機関の問題点をつついて」

「……………麻帆良、か」

ほらほら、苦い顔しないでよ。私だって、あのぬらりひょんは好きじゃないけど…………。

それでも向こうにはタカミチや陸斗、アスナだっているじゃない。

「とりあえず、完全に解読してから向こうへ送っておきましょう?」

「解釈云々は丸投げか。君らしいな」

あら、失礼な事言わないでくれる?

私たちが考えても限界があるから、その辺りは向こうに任せましょうって言うてるの。

第6話：暗躍する影たち（後書き）

もしかしたら、微妙に聞いたことのある単語が飛び交ってるかもしれないですね。

特に最後の2人。片方は原作キャラのあの人ですが、もう1人はオリキャラ……まあ、他作品のキャラですが。

アーティファクトの能力から、それが誰なのかは想像が付くかと思います。

そして、次回からついに原作開始です。

果たして薬味少年は、麻帆良でどのような珍騒動を引き起こすのか……！

第7話：ネギ、来日

〔Side Rikuto〕

ついに、かのナギの息子が麻帆良へやってくる日が訪れた。

職員室に入り、話を聞いてみると……どうやら既に到着しており、今は学園長室にいるらしい。

どちらにせよ顔は見ておく必要があるのだから、学園長室に入ったのだが……。

「……………なんだ、このカオス」

まず、目に入ったのは眼鏡をかけた赤毛の少年。

おそらく、彼がネギ・スプリングフィールドだろう。確かにナギによく似ている。……ただ、真面目そうな印象を受ける辺り、アイツとは正反対だな。

そして次に気になったのがアスナ。何でジャージ姿なんだ？ とい
うか、凄いキレかけてるような気がするんだが…………。

「おお、ちょうどいい。…………ネギ君、彼が君の担当する2-Aの担任教師、風峰君じゃ」

「……………風峰だ。よろしく頼む」

「あ、はい」

手を差し出すと、ぎゅっと握り替えされる。

……やはり小さいな。10歳の子供に何させようとしてるんだか。

「とりあえず、俺は学園長と話があるから…………しずな先生、ネギ先生を教室までお願いします」

「ええ、わかりました」

一礼すると、しずな先生がネギ少年を連れて学園長室を後にする。それに続いて、アスナと木乃香も出ようとするので……とりあえず、気になっている事を念話で聞いてみた。

“アスナ、何があつたんだ？”

“……くしゃみで武装解除されたのよ、そのガキに”

それを聞いて、思わず頭が痛くなった。

くしゃみで武装解除つて……魔力制御出来てないだろ、おい。そんな子供を修行に出すなよ……。

横を見ると、タカミチも苦い顔をしている。どうやら同意見らしい。

“信じられる！？ おまけに最初の発言が「あなた、失恋の想が出てますよ」！？ あり得ないでしょ！！”

“おいおい……”

いや、確かにそれは無い。

初対面の相手……それも女性相手に「失恋」関連はアウトだろう。

まあ、その辺りのデリカシーの無さはナギ似だな。

2人も出て行ったので、改めてぬらりひょんを睨む。

「…………俺が何を言いたいか、分かるな？」

「い、いや……さすがにこれは僕も想定外じゃ」

魔法世界ならともかく、ここは旧世界だ。

魔力制御1つ出来てない子供を修行に出すなと言ってやりたい。おまけに教師だぞ？

「とにかく、俺は最低限のケアしかないからな。あのガキが何しようと俺は知らんぞ」

「う、うむ……………」

何を言っても無駄だと分かったのか、それっきりじじいは黙り込んだ。

ああ、そうそう……………これだけは言っておかないと。

「それと、俺が“紅き翼”……………ナギの関係者だったのは話すなよ」
「何故かの？」

「根掘り葉掘り聞かれるのは御免だ。俺にもプライベートはある」

「……………わかった、ネギ君には黙っておこう」

あの分だと、数日で誰かに魔法バレしそうだな。……………さすがに初日からは無いだろが。

……………しかしその数時間後、俺の想像は脆くも崩れ去る事となる。

[Side Out]

「Side Asuna」

「……あり得ないでしょ、あれ」

……本当に殴りたい。ううん、ガキじゃなかったら殴ってるわね、あれ。

あのガキ……ネギは予想以上に酷かった。
まず、陸斗用に仕掛けられた罠で、最初の黒板消しトラップは風障壁で浮かび上がる。

（そりゃ、エヴァちゃんも呆れるわよね）

さらにぶつちやけると……また脱がされた。
授業中、私に英訳しろっていうのは……まあ、百歩譲っていいでしょう。

けど、その後にまったくしゃみで武装解除……おかげでいいんちよは煩いし、周りからも散々笑われるし（桜咲さんを含む関係者数人が、世にも気の毒そうな目で見ていたのが1番辛かった）。

「……………ん？」

ふと、階段の方を見ると……うちのクラスの本屋ちゃんが、両手に大量の本を抱えて歩いていた。

本屋ちゃん……宮崎のどかって言うんだけど、あだ名通り本好き。可愛いんだけど恥ずかしがり屋で、いつも前髪で顔を隠してる。

てか、あれは危ないでしょ……って、足踏み外した!?

(ここからだと言に合わない!)

距離が離れすぎている。咸卦法使って瞬動でも届くかどうか……。と、その時……本屋ちゃんが地面に激突する寸前で、ふわっと浮いた。

「え……………」

まさかとは思ひ、周りを見渡すと……杖を構えたネギの姿があった。ま、まさかこいつ……魔法使ったわけ!?

いや……本屋ちゃん助けるためだから、それは寧ろいいとして……。そう考えている間にネギは素早く駆け出して、頭から滑りつつも本屋ちゃんをキャッチ!

「アタタタ……だ、大丈夫? 宮崎さん……………」

……………視線が合った。

「あ、い、いえ、あの……………」

周囲に他の人は? ……いない。

目撃者は私だけ? よし、なら大丈夫……………じゃない!

「ちょっとアンタ、こっち来なさい!」

「え、あ、ちよっ……………」

そのままにしておいたら、他の人に何言われるか分からないじゃない!!

ネギの首根っこ掴んで持ち上げると、そのまま木陰の方へ飛び込む。
……後ろで本屋ちゃんが何か言ってるけど無視。
それより、今はこっちが最優先よ。

「アンタ、今の……てか、何やってんのよ!」

「あぶぶぶぶ! ば、僕はその……」

私が事情知ってるからよかったものの、もし本屋ちゃんに気づかれてたら……いや、本屋ちゃんはまだいい。

問題はパール……早乙女ハルナにまで知れ渡った時だ。あれはマズイ。本気でマズイ。間違いなくオコジョが待っている。

「……仕方ありませんね、秘密を知られたからには記憶を消させていただきます!」

「はあっ!?!」

ちよっ……ま、待ちなさいってば!

そりゃあ、魔法無効化で効かないだろうけど、変なところ消されたら……!!

どうにか止めようとするが、既にネギは詠唱を始めている……って、本人に許諾無しで記憶消す事こそ最悪だし!!

「ちよっとパーになるかもですが、許してくださいね」

「ギャー!! ちよっと待っ……」

「消えろ……!!!!!!」

——結論、記憶は消えなかった。代わりに、パンツが消えた。しかも、偶然にも近くにタカミチと陸斗がいた。……最初、難しい顔をしていたので、多分このガキの事を話してたんだと思う。
……見られました、全部。あのガキ、殺していいですか?

[Side Out]

[Side Rikuto]

「.....」
「.....」

いや、どうしろって言っただ、俺に。

正直なところ、俺もタカミチもあそこまで酷いとは思ってなかった。

「.....記憶消すの失敗して、パンツ消すってあり得ないぞ」

いや、どちらにせよ記憶は消えなかったと思うぞ。魔法無効化持ちだし。

魔法その物が無効化されて.....普通なら何も起こらなかったはず。

しかし、パンツが消えた。

要するに、魔法その物が変に構築されて、それであんな風になった……と。

「なあ、タカミチ。……本気で送還しない？ あのカギ」

「う、うーん……難しいと思いますけどね」

いや、ここに置いておいたら正直、アスナに殺されるよ？ きつとエヴァに聞いたところ、授業中にも“武装解除”したらしいし、風障壁も解除忘れてたらしいし。

……メルディアナの連中は何を教えてたんだ。魔法教える前に一般常識教えとけ。

「……それとなんです、ネギ君をアスナ君と同じ部屋に住まわせるつもりらしいです」

「……最早隠すつもりないだろ、あのぬらりひょん」

初日から魔法バレって、酷いだろ。

思えば……学園も全体的に魔法を秘匿するつもりがあるのか……。なあ、知ってるか？ 麻帆良七不思議の1つ「困った時には魔法少女と魔法オヤジが助けしてくれる」っての。

……これ聞いた時の俺の反応分かる？ 辞表出そうって思ったぞ。幻想郷で隠居しようかなって思ったぞ？

「とにかく、その辺りは学園長に直訴だ。どうしても引かなかったら、詠春の事も話に出す」

娘に魔法バレを推奨してない詠春の事を出せば、あの学園長も大人しくなるだろ。
このか

……いや、あれはある意味ナギの息子だわ。究極的な意味で大雑把

だし。

「10歳とはいえ、男性教師を女子寮に住ませるわけにもいかな
だろ」

「そうですね……他の教師や生徒にも示しが付きませんし。ですが、
どこに住ませるんです？」

「……………おい、まさか無いのか？」

いや、さすがにそれは……………何ヶ月も前から決まってたんだぞ？
普通なら、部屋の1つや2つ用意しておくのが当たり前だろ？

……………だがタカミチは無情にも、首を縦に振った。そして2人でため
息をつく。

「あのぬらりひょん、最初からそのつもりだったな」

アスナや木乃香と住ませて、あわよくば仮契約……………といったところ
だろう。

仕方ない。しばらくの間はアスナに我慢してもらうとして、その間
に代わりの物件を探そう。

教員寮を使うにしても手続きやらで時間がかかる。……………最低でも1
ヶ月は無理だな。

「……………アスナ君、すまない」

アスナにかかる気苦労を考え、頭を下げるタカミチ。

俺も、これからも増えるであろうアスナのストレスが、胃潰瘍や円
形脱毛症を引き起こさないでくれと祈る事しか出来なかった。

……………頼むから、春に来るっていう妹も同じ感じじゃないだろうな。

〔Side Out〕

「Side Reiya」

「くしゅんっ！」

「あら、レイヤ。風邪？」

「いえ……誰かに噂されたんでしょうか？」

ああ、ネギとは違って、武装解除したりはしませんよ？

……あの人が、前に街中でネカネさんとアーニヤさん相手に、くしゃみ（武装解除）して大変でしたから。

なお、下着姿のアーニヤさんに蹴り飛ばされたのは言うまでもありません。

（……そういえば、治ってませんでしたね、あれ）

主に風系の魔力が完全に制御されていなくて、くしゃみという生理

反応が原因で漏れ出して武装解除……魔力運用の下手な子供にはよく見られる現象です。

でも普通なら武装解除にはならず、普通に風が起きるだけですよ？火だったら火の粉が飛び散ったり、水は水が飛び散ったりするくらいですし。何で武装解除なんでしょう……？

「それにしても、ネギは大丈夫かしら？」

「……絶対に問題起こしてると思いますけどね」

あれは身内の私から見ても、欠陥だらけでしたから。

確かに魔法使いとしては優秀だと思いますよ？ 同年代では頭1つ抜किन出ましたし。

……ただ、その能力が歪に偏っているように思えましたけど。

「レイヤ、いくら何でもそれは……」

ネカネさん、その原因の一旦が自分にあるとおわかりですか？

もちろん、ネカネさんだけじゃない。魔法学校の教師も、周囲の大人達にも原因はある。

誰も彼も、ネギに対して「甘い」。おまけに、「父親のように立派な魔法使いになれ」といういらぬ期待までかけてくる。

そう思うのは勝手ですが、これでは道を強制しているようにしか思えません。

（ネカネさんなんて、その最たる者ですから）

果てしなく、ネギに対して甘い。本当なら、ネギがバカした時に怒らなくちゃいけない人が、困った様な顔で「ダメよ」と言うくらい。……そう思うと、マシな大人といえばスタンお爺ちゃんと……あと、タカハタさんくらいですかね。

少なくともタカハタさんは、私を「ナギ・スプリングフィールドの子供」というフィルタ越しではなく、「レイヤ・スプリングフィールド」という個人として接してくれましたから。

詳しく話を聞いたところ、タカハタさんには魔法使いとしてハンディキャップを抱えているらしく、それでも努力の末に実力を身につけたという。

（そこは尊敬すべき部分ですね）

才能の上にあぐらを掻いているバカはどこにでもいる。……代表的なところで言うと、ネギだ。

まったく努力していないわけではないが、それでも自分の才能に頼っている……というか少々、天狗になっている部分がある。

首席卒業も、ネギではなくアーニヤさんの方が相応しいと思うんですがね。……え？ 私？ 私、座学はともかくとして、実技はダメですから。

「……あのバカが、日本で迷惑かけてなければいいんですが」

……なお、あの薬味^{バカ}が、私たちの想像の遙か斜め上に行く珍騒動を引き起こしていたとは、思いも寄らなかった。

そして私がそれを知って、あのバカの被害者（主にアスナさん）に土下座で謝る事になるのは……3月の終わり、吸血鬼騒動が起きるちょっと前の事である。

第8話：ストレス続きの日々

「Side Rikuto」

……なあ、もうキレていいか？

いくら何でもアレは無い。……ホレ薬だと、おい。

「か、風峰さん……落ち着いて」

「あ？」

どうやら、殺気が周囲に漏れていたようだな。

振り向くと、瀬流彦が固まっていた。……いや、瀬流彦だけじゃなく、俺の方へ注目していた教師全員。

「……すまん、ちょっと気が立ってた」

「い、いえ。……そこまで酷いんですか？」

ああ、酷いよ。おかげでストレスが溜まる一方だ。同室のアスナなんてもつと酷い。

……なあ、俺最初にぬらりひょんに言っただよな？ 最低限のケアしからないって。何で後始末全部やらされてんの？

「瀬流彦、記憶消されかけてパンツ消される生徒の気持ち、わかるか？」

「……すみませんでした」

渋い顔で頭を下げる瀬流彦。うん、物わかりがよくてよろしい。

なお、今のアスナに「パンツ」とか「パ○パン」とかは禁句だ。それを言った雪広が問答無用で吹っ飛ばされた。

……ネギ坊主もアスナの殺気を感じ取ってるのか、びくびく怯えて

たし。

けど、そのご機嫌取りでホレ薬は……無いだろう？

「それで、どうしたんです？」

「ホレ薬は没収。……が、ネギ坊主にはお咎め無しだ」

アスナ云々を理由にしたが……ダメだった。

何が「子供じゃから、もっと穏便に」だ。迷惑かかるのは生徒なんだぞ？

「瀬流彦、2・Aの担任代わってくれない？」

「絶対嫌です」

「………そうか」

この恨みはナギ相手に晴らすとしよう。見つかったらパンチ一発追加だ。

「うああああああん！ 先生……！！！」

「風峰先生……！！！」

と、うちの生徒が2人、職員室に泣きながら飛び込んで来た。和泉と佐々木だな。どうしたんだ？

「どうしたんだい、君たち？」

「こ、校内で暴行が！」

「上級生にやられました！」

と、佐々木が手の甲を見せてくる。

うーん、何かぶつけられたような痣になってるな。痕は残らないと思うが……。

「何があつた？」

「バレーボールしてたら、いきなりウルスラの人達が絡んできて…」

…」

「ボールぶつけられました！」

また、ウルスラか……。瀬流彦と顔を見合わせ、ため息をつく。

正式名称は、聖ウルスラ女子高等学校。麻帆良中の高校の1つで、所謂「お嬢様学校」だが、如何せんプライドの高い女子が多い。

そのため、こういった問題も時々起きる事があつた。

「わかつた、すぐに行く。場所は？」

「中庭です」

そんなわけで、和泉と佐々木を伴い、中庭に来たんだが……。

多数のウルスラの生徒はいたのだが……何故かネギ坊主が絡まれている。まあ、絡まれているといっても、愛でられてるみたいなもんだが。

で、そんなウルスラの生徒に対し、今にも飛びかからんとしている雪広と、それを抑えているアスナ……やれやれ。

「何をしている、お前ら！！」

鋭い声でそう叱りつけると、全員ビクツとなって固まる。

「大河内、大丈夫か？」

「え、あ……はい」

和泉や佐々木と同じ様に、ボールをぶつけられたみたいだな。痣になってる。

大人げないと言えはそれで終わりだが、さすがにコイツらの担任としては見過ごせない。

「……で、お前らは何をしていたんだ？」

「あ、それは……その……」

リーダー格らしき、少女がしどろもどろになって返答に詰まる。悪いが、今回は恩情無しだ。明らかにそっちに非があるからな。

「内容は大体把握している。ウルスラの2-Dだったな？ この事は新田先生と荒山先生に報告させてもらう」

学年主任の新田先生はともかく、荒山先生というのは、ウルスラの学年主任教師だ。

30代に差し掛かるぐらいの女性教師で、新田先生の女性版といえは大体のイメージは浮かぶだろう。

現に、ウルスラの女生徒は全員青い顔してるし。

「分かったらさっさと行け」

そう言うと、納得はしていない様だが、渋々引き下がっていった。あの分だとまた、何かの形で絡んできそうだな……その内どうにかしないと。

「雪広、お前も落ち着け」

「ですが……………」

てか、こいつはどうしてここまで高ぶってるわけ？
視線を抑え込んでるアスナに向けてみると……。

「アイツらに「ネギ先生を私たちにゆずらない？」って言われたのよ」

ああ、なるほどね。

俺としては「どうぞ」と言いたいが。どうもアスナも同意見らしい。

「向こうから難癖付けてきたのは分かるが、そこでお前が喧嘩を買ったらダメだろ？」

「……………」

「ま、今回の事は厳しく言うておく。それでよしとしろ」

こっちとしても納得はしてないみたいだな。

……で、何でネギ坊主は落ち込んでるんだ？

[Side Out]

「Side A k o」

「ねえねえ、やっぱり風峰先生って凄くない？」

体操服に着替えながら、後ろのゆーな達にそう尋ねる。

あっという間にウルスラの人ら追い返したし……しっかりしてる思
うな。

「……うん」

「確かに頼りにはなるかにゃ」

格好ええし、優しいし、授業もわかりやすいし……ええ先生やな。

「ネギ君はちょっと情けなかったかな？」

「まあ、10歳だから仕方ないじゃ〜ん」

まあ、10歳だし、大人の威厳とかそういうのとは皆無？

ウチも可愛い思っけど、やっぱり風峰先生の方がトータルでは断然上
やな。

「何ですの、皆さんあんなにネギ先生の事可愛がっていたくせに！」

「え〜、でもやっぱさー……」

「10歳だしね〜」

ほらほら、いいんちよ。そんなに怒らない怒らない。
てか、いいんちよみたいな可愛がりようはしてへんで？ だっていいんちよ、明らかにシヨタコンやん。

「もうすぐ期末もあるし、色々相談出来る先生の方が……ねえ？」
「うーん、可愛さを取るか、頼りがいを取るか………」

いいんちよ、睨まんといてな。

まー、このクラスは偏り過ぎとるし、期末もドベなんやろうけど……
それでも風峰先生の方がええかな。

ネギ君の授業は……普通やな。可もなく不可もなくって感じ。これは今後次第。

ま、そんなこんなで屋上に上がっていったら………。

「あら、また会ったわねあんた達。偶然ね」
「な、何であんた達がここにいるのよ!!」

げっ……高等部2-D！ おまけにネギ君捕まっとるし！
………ネギ君、ちよい情けないで………。

「私たち、自習だからレクリエーションでバレーやるのよ。あんた達は？」

「わ、私たちもバレーよ！」
「どうやらダブルブッキングしちゃったようね」

そんなわけ無いやろ！

だいたい、ウルスラの校舎となりやないか！ わざわざ中等部の校舎にまで来るなんて……明らかに嫌がらせやん！
でもそんな言い訳通じんし、また乱闘に………なる寸前やった。

「…………でお前達、また（・・・）か？」

[Side Out]

[Side Rikuto]

バレーの授業はネギ坊主に任せたが、何だか嫌な予感がしたので見に行ってみると…………案の定ウルスラに絡まれていた。

休み時間にちよっかい出してくるならともかく、授業にまで干渉して来るとは…………ちよつとばかりおいたが過ぎるな。

「それで、何してるわけ？」

「じ、自習なのでここでバレーしてるんです」

「ここは中等部の校舎だ。何でわざわざこっちへ来てるんだ？」

じろり、と若干強めに睨み付ける。

……何人が怯えてるな。少し強くなりすぎたか。

「向こうの屋上が既に使われていて……」

「見え透いた嘘をつくな。向こうに確認してやろうか？」

確認などしなくとも、普通に見えるが……この方が効果的だろう。

「あと、学校側からの……停学処分ぐらいは覚悟しておけ」

「そ、そんな！」

「酷い！」

「……酷い、だと？」

気に入くわない云々は構わないが、それでもこれは度を過ぎている。
嫌がらせもほどほどにしないと、俺も本気でキレルぞ？　ただでさえ、最近ストレスが溜まってるとんだ……。

「これは明らかに授業妨害だ。おまけに、休み時間の一件もそつちが最初に手を出したんだろう？　普通に処罰されて当然だ」
「……う………」

とはいえ、処分されたとしても……また争いになるのは目に見えてる。

どうすっかな……うーん……。

「あ、あの！　こうしたらどうでしょうか！？」

と、今まで空気だったネギ坊主が突然口を開いた。

……要するに、両クラス対抗でスポーツ勝負をしろ、と。

まあ、確かにその方が無駄な喧み合いをしなくて済むかもしれない。

子供は子供なりに考えてるって事か。

「そっちはどうだ？」

「……構いません」

「じゃあ、こうしよう。こっちが勝ったら、コートからさっさと出てけ。後、休み時間の干渉も禁止する。……そっちが勝ったら報告はしない。後、ネギ坊主も連れてっていいぞ」

俺の言葉に、ウルスラの生徒は嬉しそうな顔になり、2 - Aからは「何ですって！」という声が聞こえた。

……とりあえず、無視だ無視。

「ちょ、ちよつと待ってください！ 高校生と中学生じゃ体格差があります！」

確かに、バレーボールじゃ勝負にならないな。

いや、一部明らかに高校生以上の体格の生徒がいるけど。……龍宮

とか長瀬とか。

「そうね……じゃあ、バレーじゃなくてドッジボールならどう？」

おまけにハンデもあげるわ。こっちは11人だけど、そっちは倍の22人。どう？」

「受けてたちますわ！！」

気合入ってるな、雪広。……ま、ネギ坊主がかかってるからな。

………ん？ ちよつと待てよ。

「待て。狭いコートに22人もいたら、動きづらくて仕方ない。……ハンデにはならないぞ？」

俺の言葉に「あ…」と呆けた声を上げる2-Aの面々。対照的にウルスラの生徒達は「チッ」と露骨に舌打ちするヤツもいる。やっぱり確信犯か。

下手にハンデを得ても、それが+になるとは言えないし……ここは普通に行くか。

「勝負は1-1対1-1の真剣勝負。公式ルールに遵守する。それでいいな？」

「…………構いません」

「よし、それじゃ2-A全員集まれ」

俺の号令に、2-Aが俺の前に集まる。

とりあえずここから、参加者を募ってみるか。

「まず、ドッジボールに参加したくないヤツは後ろに下がれ」

その声に反応し、何人かが後ろへ下がっていく。

刹那やエヴァは興味無いようだし、「ニンニン」言ってる長瀬も参加しないらしい。鳴滝姉妹もドッジが怖いようだな。

下がるだけ下がって……残ったのは14人か。後は運動能力とかで減らすか。

「宮崎、お前は審判をやってくれ。ルールブック持ってるだろ？」

「は、はい」

しかし、運動能力が底辺の宮崎が参加するとは……意外だな。

宮崎の友人の綾瀬も、同じ様にそれに付いていく。ネギ坊主を入れて残り12人。

「ほな、ウチ下がるわ」

手を上げて、木乃香がすたすたとコートから出て行く。

そのまま歩いて行き、すたと刹那の隣へ座る。……おお、戸惑ってる戸惑ってる。龍宮も面白そうに見てるな。

最終的に残ったのは……アスナ、雪広、和泉、明石、佐々木、大河内、古、超、朝倉、春日……そしてネギ坊主の11人。

「よし、この11人で決定。……あと、今思い出したんだが……アイツら、ドッジ部だから」

「ど、ドッジ部!？」

「ああ。確か……関東大会優勝、だったかな」

事前情報があるのと無いのではだいぶ違う。

チラツと向こうを見ると……また露骨に舌打ちしてるのがいるな。

「……高校生にもなってドッジ部？」

「……小学生ぐらいまでの遊びちゃうの？」

「……関東大会ってあいつらしか出なかったんじゃない？」

ネギ坊主は素直に「すごい」と思ってるらしいが、他の反応はそれだ。

そりゃあ、俺だって高校生でドッジボールはした覚え無いな。せいぜい、バスケとかバレーとか……。

「相手はドッジボールの専門家だが、2-Aはハッキリ言って超人軍団だ。……思い切り行ってこい!!」

「……はい!!」「……」

結果だけ言おう。2 - Aは圧勝した。

ウルスラも相当強かったのだが……それ以上にこっちが強かった。特に、景品にネギ坊主がかかっているので、雪広が凄かった。うん、俺が見ても凄いと思ったぞ、あれは。

「まだロスタイムよ!!」

ん……？ あ、アイツ雪広を狙ってる!?

まあ、雪広が大活躍してたからな……だとしても、これは見過ごせない……。

ばしいいいいっ!!

と、俺が駆け出そうとした時、ネギ坊主が回転のかかった球を片手で受け止める。……おい、回転増してないか？

「こんな事しちゃ……ダメでしょ……!!」

まるで螺。丸のように回転するボールが打ち出され……女生徒はそれを受け止めるが、回転によって服が吹っ飛ばされる。

いや、あれ武装解除だよな？ 一種の。

「あ………」

悲鳴と歓声に包まれ、困惑するネギ坊主。

……ま、生徒を守ったんだし、今回だけは見逃してやろう。

第9話：学生達の試練【前編】（前書き）

期末試験編突入です。

「アンチ分が少ない」と言われていますが……今回は大丈夫です。き
つちりとした処分を下す予定です。

第9話：学生達の試練【前編】

「Side Negi」

僕が麻帆良にやってきてもうすぐ1ヶ月……。

最初の頃は、アスナさん達に迷惑をかけたりしたけど、最近はようやく慣れてきた。

この分で行けば、簡単に“立派な魔法使い”になれるかも……。

「……何か他のクラスの皆さん、ピリピリしてますね」

「あゝ、そだね」

何だか緊張感溢れてるっていうか……頑張ってるっていうか。

「そろそろ中等部の期末テストが近いからね」

「来週の月曜からだよ、ネギ君」

明石さんと椎名さんが答えてくれる。

期末テストですか……って、あれ？

う、うちのクラスも大変じゃないんですか！？

「あはは、ウチの学校エスカレーター式だから、あまり関係ないんだ」

「特に2・Aはずっと学年最下位だけど、大丈夫大丈夫」

いえ、あんまり大丈夫じゃないですよ！？

……ふと、お花みたいなトロフィーが視界に入った。プレートには「1位」って書いてあるけど……。

「あのトロフィーは？」

「……………」

思わず、しずな先生と顔を見合わせる。

まあ、ドラゴン退治はないよね？　ここは普通の人間の学校だもん。

「な、なんだ簡単そうじゃないですか」

「そ、そう？」

うん、これなら何とかなりそうだ。

[Side Out]

[Side Rikuto]

「……ついに期末試験、か」

当初の約束通り、これがネギ坊主の教員採用の試験になる。

この期末試験で2 - Aが最下位から脱出できれば、正式な教員として採用され、2 - A……3 - Aの担任となる。

しかし、最下位脱出出来なかった場合、さらに魔法に頼るなどの問題を起こした場合、それらは取り消され、しばらくは教育実習生として継続される。

「ま、心配はいらんと思うが……」

最下位からは脱出出来るだろう。俺もすっかり指導してきたし、ネギ坊主はそれなりにうまく授業を進めているらしい。

……まあ、魔法で何とかしようとしなければ……うん、大丈夫なはず。

で、授業の様子を見ようと思い、教室まで来たのだが……。

「…………騒がしいな？」

こういう時に限って、嫌な予感しかない。

おそるおそる引き戸を開けると…………。

英単語の書かれたプレートを持つ面々と、その中心には下着姿のバカレンジャーの姿があった。

何これ、こわい。

「……………何やってんだ、お前ら？」

それほど大きくなかったが、俺の声は充分に教室内に響いたらしく、ピシッという擬音が聞こえた。

呆れ顔で一部始終を見ていたであろうアスナに効いてみる。

「これ、何があったんだ？」

「……英単語野球拳だって。それであの5人が重点的に脱がされたの。一応言っておくけど、私は止めたわよ」

なあ、久しぶりに頭痛くなってきたんだが。

最近、ようやくネギ坊主がまともになってきただけに、これはキツイ。

「とりあえず……発案者は誰だ？」

「あ……わ、私です」

おそろおそろと言った様子で、椎名が手を上げる。
なあ……いくら何でも、学校で野球拳は無いだろ？

「椎名、授業が終わったら生徒指導室に直行だ」

[illegible]

えー、じゃない。授業でこんな事やって……下手したら退学ものだぞ？

大人しく新田先生に怒鳴られてこい。俺は知らん。

「……ネギ先生、これはどういう事だ？」

「あ、いや、その……野球拳というだけあって、ベースボールを取り入れた勉強法なのかな……と」

……まあ、こっちはまだいい。野球拳を知らなかったんだから。いや、決してよくはないが。

「とりあえず、バカレンジャーは服着ろ。ネギ先生、普通に授業を」

あはは、なんかすつごい先行き不安なんだが。
まあ、バカレンジャーが暴走しなければ、問題無いだろ。
……その晩、俺は見通しが甘かった事を思い知る事となる。

〔Side Out〕

〔Side Asuna〕

大入浴場にて……私は一日の疲れを癒していた。
ま、最近はずいぶんマシになってきたし、あとちょっとしたら
部屋からも出てくし、もうしばらくの辛抱ね。
……とりあえず、イギリスにいるっていうお姉さんには一言言いた
い。甘やかし過ぎだ、と。
何で毎日毎日のベッドに潜り込んでくるのよ。「お姉ちゃんに似
てるから」じゃないでしょうに。

「アスナー、アスナー、大変や」
「? どうしたの、木乃香」

身体にバスタオルを巻いた木乃香と……本屋ちゃんにパル、夕映ちやんの図書館探検部の4人組がこっちに来る。
何だか、いつものほわわんとした表情じゃなく、真剣なものに見えるけど……。

「実はな、噂なんやけど……次の期末で最下位を取ったクラスは解散やて!」

「はあ!?!」

「詳しい事はわからへんのやけど、何かおじ……学園長が本気で怒つとるらしいんや。ほら、ウチらずつと最下位やし」

まあ、最下位なのは否定しないわよ。やる気のない奴らばっかだし。でも解散は無いでしょ。いくら学園長でも、それしたら非難が集中するし。

「その上、特に悪かった人は留年! どころか小学生からやり直しか!」

「「「え!?!」」」

パル、変な事言わない。バカレンジャーが主に反応してるでしょ? 桜咲さんも……そこまで青ざめなくていいじゃない。解散もそうだけど、小学生からやり直しはあり得ないから。

そつえば、ネギも「大変な事になる」とかどうとか言ってたけど……まさかね。

「……やはりここは、アレを探すしかないかもです」
「アレ?」

夕映ちゃん、とりあえず風呂場に紙パック持ち込んで飲むのはやめましょうね？

いや、それよりも……アレって何？

「図書館島は知ってますよね？ 我が図書館探検部の活動の場ですが……」

「ああ、あの湖に浮いてる大きい建物……」

「実はその図書館島の深部に……読むだけで頭が良くなるという“魔法の本”があるらしいのです」

ま、魔法の本って……いや、それはないか。

陸斗が前に話してくれたんだけど、そういった本は一般人の手に触れないよう、認識阻害の魔法がかけられた上、隔離に近い形で隠されてるとか。

かなり強固に保管されてるらしいから、一般人が読む事は無いらしい。……ていうか夕映ちゃん、その噂どこから出たのよ。

「まあ、大方出来のいい参考書の類とは思っていますが、それでも手に入れば強力な武器になります」

「なるほど……」「でも魔法か」「パチモンじゃないの？」などの言葉が飛び交っている。

でも、一貫してバカレンジャーズの目は同じ色をしている。これだと、ほっといたら図書館島に忍び込みそうだ。

巻き込まれるのは御免だし、釘でも刺しておこう。

「あんた達ねえ……また先生に怒られるわよ？ 『そんなもの探しに行くくらいなら、部屋戻って勉強しろ』って」

ただでさえ、最近はストレスが溜まってる。テスト問題の用意やらでだ。

“魔法の本”を探しに行つて勉強を蔑ろにした、という事が陸斗の耳に入れば、間違いなく溜まりに溜まったストレスが爆発する。

……そうなたらもう手が付けられない。昔、鶏頭ナギと筋肉バカラカンが「生まれてきてごめんなさい」という状態に陥つたのは鮮明に覚えている。

「大丈夫だよ、アスナ。たとい話なんだから」

「そうそう、たとい話たとい話」

「……ならいいけど」

そのまますぐに視線をそらしてしまったので気づかなかった。

……バカレンジャーと図書館島探検部の面々が一瞬、視線を交わし合つた事に。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

「予言が出た？」

『ええ……………』

自室にて、完全防音結界を展開し、その通信を行っていた。

ウィンドウに映し出されているのは女性。ゆつたりとした金髪に柔和な顔立ちの美人……………年齢は20代半ばぐらい。

彼女の名はカリム・グラシア。“紅き翼”に拾われた戦災孤児の1人で、戦後はクルト・ゲーデルと共にMMへと渡り、現在は元老院議員であると同時に、アリアドネー大使を兼任している才女だ。

『一応、翻訳は済んでいるのだけど、私たちだけでは解釈しきれない部分があるから、あなたやタカミチにも見てもらいたいと思って』
「なるほどな。クルトも同意見か？」

『ええ。きちんと相談して決めた事よ。お願い出来るかしら？』
「わかった。送ってくれ」

カリムはタカミチらと同年代だが、その年齢でそれだけの地位にいるにも理由がある。

それは、彼女の所有するアーティファクトが特殊なものだからだ。

……………『予言者の著書』。一種の予言能力を持ったアーティファクトで、元老院もそれには必ず目を通してしている。

ちなみに、彼女が仮契約を交わしたのは15年ほど前。相手は……………俺。

「……………お、来た来た」

部屋のファックスから数枚印刷される。まほネットに繋がっている
ので、魔法世界ともやり取り可能だ。

内容が内容だし、印刷が終わったらメモリは消しておかないと。：

よし、と。

で、内容だが……………なんだこりゃ。

「……………」

『ね、難しいでしょう？』

「とゆーか、これ……………マジ？」

カリムの予言の難点はいくつかある。

まず、年に1度しか使えない。そして、書かれるのは全て死滅した
古代語。さらに翻訳及び解釈が難しい。

それでも、翻訳は全て終わっているので、後は解釈するだけなのだ
が……………。

「……………魔法世界の崩壊。そう遠くないって事か」

『残念だけど、そうみたい。クルトもMM市民6700万人を脱出
させるプランを考えてはいるみたいだけど……………』

「無駄だな」

現在の地球に、6700万人ものMM市民を受け入れるだけの余剰
は無い。

無理矢理にでもそれを実行すれば、間違いなく混乱が起きるし、最
悪は戦争……………。

「そう考えると“完全なる世界”の連中がやろうとしてた事は、必
ずしも間違いつてわけじゃないんだよな」

『……………ええ。でも』

「分かつてる。だからと言っても、肯定するつもりはない」

火星の魔法力の枯渇。それが叫ばれ始めたのがいつか、俺も覚えていない。

魔法世界……新世界は、火星に築かれた人造異界。亜人などは全て、魔法世界と同じモノによって構成されている。

クルトやカリム、タカミチのような純粋な魔法使い市民はともかくとして、魔法力が枯渇すれば、魔法世界に生きる者達は消える。

“完全なる世界”の盟主にして、魔法世界の創造主“造物主”ライフメイカーも、いずれ訪れる結末に絶望し、黄昏の姫巫女の力によって全てを封ずる計画を実行に移したが……それは“紅き翼”によって破られた。その残党も、タカミチやクルトによって掃討されている。

「幸い、まだ時間はある。考えるんだ、世界を救う方法を」

『……………そうね』

「それと、この予言だが……何人が信頼できる相手に見せてもいいか？」

タカミチは元より、エヴァやアスナに見せてみたら、何か新しい発想が出てくるかもしれない。

住む世界や生きてきた時間から、また違った考え方が生まれる可能性だってある。

『あなたが信頼できるのなら……………いいわよ』

「ん、ありがとう」

『それと、たまにはこっちに来たら？』

「あゝ……………それはまあ、今後次第だな」

仕事もあるし、春には幻想郷に帰らないと行けないし……………行くとしたら夏になる。

と、談笑が続いていると、突然携帯が鳴り始めた。着信相手は……
神楽坂明日菜。

「ちょっとスマン。……どうした？ アスナ」

『陸斗、大変！ 木乃香達が図書館島に向かったみたいなの！』

「……………はあ？」

アスナから話を聞いて……………頭痛がぶり返した。

……………魔法の本って、アホだろアイツら。いや、知ってたけどさ。

『どうする？』

「話を聞く限りバカレンジャーがいるんだし、危険は無いだろ」

バカレンジャーは頭が残念なところがある分、身体能力は無駄に高い。
図書館島探検部も図書館島内部には精通しているだろうし、罠に

してもそう簡単に引っかかるとは思えない。

しかし……………ネギ坊主が同行したってのはどうよ。

「……………大方、魔法の本ってところに惹かれたんだろうが……………明らかにダメだろ」

深夜のこんな時間に図書館島に立ち入る。これは明らかに『不法侵入』だし、魔法の本を取ってくるというのも『窃盗罪』だ。

教育実習生とはいえ、本当ならネギ坊主がアイツらを止めなければならぬ立場だというのに……………よし、送還だ。強制送還してやる。

「アスナ、図書館島へ行って別動組捕まえてきてくれ。俺はこれから学園長のところへ直談判しに行く」

『別動組？』

「その魔法の本とやらは相当深いところにあるみたいだからな。図書館の外に2、3人が連絡班として待機してるはずだ」
『わかったわ』

さてと……問題はこつちか。

「カリム、悪いが……」

『ええ、わかってるわ。……それにしても、ネギ少年の世話は大変みたいね』

「くしゃみで脱がすし、記憶消そうとしてパンツ消すようなヤツだぞ。苦労しないわけあるか」

そう言うと、カリムも渋い顔になった。……そりゃあ、同じ女性としては嫌だよな。

学園長め、少しは痛い目見てもらうぞ。

第9話：学生達の試験【前編】（後書き）

というわけで、期末試験突入です。一応、事後処理も含めて残り2話を予定しています。

さて、今回登場したオリキャラ、カリム。……まあ、気づいてると思います。他作品のキャラで、イメージなどはほぼそのまま。能力についても、アーティファクトという形になっております。

彼女は陸斗によって助けられた戦災孤児となっています。この部分もバタフライ効果ですね。

……なお、陸斗の怒りは限りなく最大値に近く、ネギへの評価は限りなく最底辺に落ち込んでいます。

今回の件でそれが爆発する可能性は……高いでしょうね。

第10話：学生達の試練【後編】（前書き）

うーん……「リリカルワールド」はうまく進まないけど、こっちは笑ってしまうほどにまで文字が進む……。

……ちょっとスランプだし、あっちちょっと凍結して、こっちメインでやるのかな？

第10話：学生達の試練【後編】

「Side Ayaka」

「何ですって！ 期末試験で2 - Aが最下位脱出しないとネギ先生がクビ!？」

裕奈さんと桜子さんからその事を聞き出し、思わず声を荒げてしまふ。

いけないいけない……しかし、ネギ先生がクビになるなんて……。

「とにかく皆さん！ テストまでちゃんと勉強して最下位脱出ですよ。その辺の、普段真面目にやってない方々も」

「げっ………」

「仕方ないなあ………」

残る問題はバカレンジャーの皆さんですね。テストを受けてもらって0点だけは防いでもらえば……。

「授業始めるぞ、席に着け」

あら、風峰先生？

確か今日はネギ先生が担当されるはずでは………それに何故、宮崎さんと早乙女さんが後ろから沈んだ顔でついて来てるんでしょうか？

「あの、風峰先生。ネギ先生は？」

「……まずその事について話しておく事がある。ネギ先生はバカレンジャー及び図書館探検部数人と共に、図書館島で勉強合宿中だ」

「……はあ!？」

風峰先生によると、成績の残念なバカレンジャーの皆さんは、図書館島の特別室で集中的な勉強合宿を行っているとの事。
ネギ先生もそれに同行しているとか…………。

「ちょ、ちよつと待つてください！　ネギ先生やバカレンジャーの皆さんはご無事なのですか！？」

「安心しろ。図書館島の司書から『皆さん真面目に勉強しています』という連絡があつた。期末試験に合わせてこちらへ向かわせるそう
だ」

「そ、そうですか……………」

まあ、バカレンジャーの皆さんは真面目に授業を受けて頂くより、ネギ先生に直接教えてもらう方が効率がいいかもしれませんね。

…………　ところで風峰先生、何故そのような怖い顔をなさっているの？

「…………　それはな、あのバカ共が昨夜“魔法の本”を探しに図書館島へ無断侵入したからだよ、雪広」

「ま、魔法の本！？」

まあ、試験を控えているにも関わらず、勉強もせずにそのような事をすれば、先生が怒るのは無理もないかもしれません…………。

…………　ちよつと待つてください、ネギ先生もですか！？

「ああ。魔法の本に興味があつたのか、それともバカレンジャーに強引に連れて行かれたのか分からんがな。…………　少なくとも何の処分も下されない、というのは無い」

「そ、そんな！　何とかならないのですか！？」

「ならん。雪広、分かってるのか？　許可無く本を持ってくる事も、図書館島に無断で忍び込むのも、歴とした犯罪だ」

そ、それは……まあ、確かに。
ですが、決して悪気があってした事では無いはずです！

「悪気がない方が厄介だ。……ほら、席に着け。出席を取るぞ」

[Side Out]

[Side Rikuto]

カリムとの通信を終えて、学園長室へ向かう途中、宮崎と早乙女を連れたアスナと合流した。

俺の顔をモロに見た早乙女は青ざめて震えており、宮崎に至っては気絶寸前。……まあ、今回の事は相当頭に来てるからな。

(あ、アスナ……風峰先生、メチャクチャ怖いんだけど)
(自業自得よ。説教の1つや2つ、覚悟しておきなさい)
(そ、そんな〜!?)

学園長室の前に来たので、アスナにそこで待機しておくよう言いつけて中へ入る。

……そこには泡を食った顔の学園長ぬらりひょんがいた。

「ひょ!?! ど、どうかしたかの、風峰先生」

「……うちのクラスの生徒数名が教育実習生のネギ・スプリングフィールドを連れ、図書館島へ侵入しました。連れ戻しに行きたいので、図書館島へ入る許可を出してください」

俺の表情がそんなにも恐ろしいのか、学園長の顔も青ざめている。
ふっ……ここまでキレてるのはいつ以来だったかな。30年ほど前のパパラッチ天狗の一件以来か?

「いや、その必要はないぞい」

「……理由は?」

「ネギ先生以下、2-Aの生徒じゃが……現在、図書館島の特別室で勉強合宿を行っており。心配いらん、司書からの連絡じゃ」

つまり、今回の一件は全て、この狸の仕業?

……よくよく考えてみると、話がうまく出来過ぎている感がある。
まず、「最下位脱出出来ない小学生からやり直し」という噂。ここ最近のものだとしても、教師の間では全く聞いた事がない。とゆーか、そんな事出来るはずがない。

バカレンジャーは相当焦っていたはずだ。そこへ“魔法の本”の噂。普通なら笑い話で終わるはずだが、追い詰められたバカレンジャーはそれに手を出す……あり得なくは無い。

ここへ来る途中に宮崎と早乙女からも話は聞いたが、「フオフオフオ」という某宇宙忍者のような口調の石像に遭遇して、その後で連絡が取れなくなったとか。

……やっぱり魔法秘匿する気ないだろ、コイツ。

「……………」

「む、無言なのは怖いんじゃないか……………」

「わかりました。それでは、私は明日の授業の準備があるので」

そのまま学園長室を出る。…………要するに、2 - Aが確実に最下位脱出するように手を加えた…………という事だ。

確かに、条件を出す際に「手助けをしてはいけない」とは言わなかった。なるほど、な。

「陸斗、どうだったの？」

心配そうな顔でアスナが尋ねてくる。やはり、クラスメイトの安否が心配らしい。

……宮崎と早乙女は気絶してる。どうやら、学園長室の中から俺が放っていた殺気に当てられたらしい。悪い事したな。

「ぬらりひよんの陰謀だった事が分かった。…………ネギ坊主を教師にさせるための、な」

「げ…………それマジ？」

「残念ながらマジだ」

呆れたような顔になるアスナ。ああ、分かる。その気持ちはよく分かる。

今回の事は俺も相当キレてる。…………ぬらりひよん、貴様の思惑通りに事が進むと思ったたら大間違いだ。

それで具体的に、俺が何をしたかと言うと……翌朝の職員室、教員が集まったのを確認して、その事全部バラした。

妙な噂が流れていた事、魔法の本を求めて無断侵入した事、現在特別室で勉強合宿中の事……全部だ。当然、学園長が絡んでる事も含めて。

一般教員はもちろん、瀬流彦を始めとする中等部の魔法先生も苦い顔になったのは言うまでもない。新田先生なんて、怒りで今にも卒倒しそうだ。

……魔法の本なんてものを求めたアイツらの行動は、学校という場をバカにしている事に他ならない。教師としての俺もキレている。まさかこんな状況になるとは思っていなかったのか、さすがの学園長もとんでもない顔をしていた。……いい気味だ。

「……………時期が時期なので、彼女らの処分は期末試験が終わってか

らにしてもらってもよろしいですか？」

ほぼ全ての教員が、それに頷いたり、肯定的な意見を出す。
古矢や学園長も納得のいかない顔をしているが……言い返せるはずがない。それを見越してここでぶっちゃけたのだ。

魔法先生だけなら「まあ、仕方ないか」という感じで済まされるかもしれないが、一般教員も含めてバラせば、処分無しでは済まされない。そんな事をすれば、ネギ坊主を特別視しているとひんしゅくを買うのは目に見えている。

「学園長も！ 今回の件については、しっかりと報告させてもらいます……！」

「……………う、うむ」

この場合の報告とは、教育委員会ではなく、メガロメセンブリア本国への事だ。
オコジョ刑は無いだろうが、この場合は減給といったところが妥当だろう。何度も言うが、これは自業自得だ。

とゆーか、ぬらりひよんなオコジョなんて見たくない。

「風峰先生、ネギ先生や生徒達は大丈夫なんでしょうか？」

「司書によると「元気に勉強中」との事です……………私が明日、迎えに行きます」

[Side Out]

「Side Konoka」

ん……どこから話せばええやるか……。

まず、ウチらは「読むだけで頭の良くなるまほーの本」ゆーを探しに、図書館島へ入ったんや。

すごい苦労したけど、本は見つかって、ネギ君も興奮しとったな。

「める……何とかの本」やったっけ？

けど、何や聞いたことのある声の石像……「ごーれむ言っらしいんやけど……」に落とされて、図書館島の地下でさっきまで勉強しとったわけや。

ウチとしては、せっちゃんにすっかり勉強教えられたし、楽しかったで……せっちゃんはおどおどしとったり、妙に緊張しとるみたいやったけど。

「……本、捨てちゃったね」

「まあ、仕方ないでござるよ」

今現在、ウチらが居るのはエレベーターの中。

いざ脱出……という時に、またあの「ごーれむ」が出てきて、うまいこと「まほーの本」は手に入れたんやけど、逃げるときに色々あって

結局捨てる事になってんしまったんや。

けど、しっかり勉強できたから、これで試験は大丈夫なはず！

「あ、そろそろ着くですよ」

夕映も言ったように、エレベーターがゆっくりになって……止まった。

チーン、という音がして扉が開くと……鬼がいた。

「…………お帰り、お前達」

「か、風峰先生……………」

笑つとるけど、メチャクチャ怒つとる。

ネギ君なんてガタガタ震えとるし、ウチかて凄い怖い…………な、何でそない怒つとるん？

「…………うちのクラスには、授業サボるバカ共がいたからな。怒りたくもなる」

よ、よくよく考えてみたら…………ウチら、授業サボつとったような…………。

「とりあえず、今日はさつさと寮に戻れ。明日は試験だ」

「あ、はい」

「わ、わかりました」

あれ？ お説教は無し？

覚悟しとったんやけど…………それならそれでよかった…………。

「なお、この事については試験後、きつちりしっかり処分が下る。

……覚悟しておけ」

………うつ、確かにウチらの自業自得やけど………。

[Side Out]

[Side Yukari]

「あらあら………」

どうやら、陸斗も相当お冠のようね。

まあ、そんな事されれば普通なら怒るわよね。

「紫？ 何やってるのよ」

「覗き見よ、陸斗のね」

それにしても、あの2-Aとかいうクラス……見ていて飽きないわね。

鴉天狗にでも見せてみようかしら？　面白い事になるのは見て取れるわ。

「風峰陸斗、ねえ」

「あなたは……覚えてないかしら？」

「なんとなく、そんな感じの男の人がいたような……気がするけど」

うーん、と腕を抱えて悩む霊夢。

そう言われるとちよつと残念ね。あなた、あんなに懐いていたのに。

「そうなの？」

「ええ。まるで親子みたいだったわ」

「………まったく覚えてないんだけど」

無理ないわよね。あの子が幻想郷に帰ってこなくなつて10年だもの。

折を見て春には帰ってくるって言ってたけど………本当に帰ってくるかしら？

「博麗の巫女とは代々縁があるのよ。先代なんて、小さい頃からずっとべつたりだったんだから」

「………そうなんだ」

へー、と感心する霊夢。ちなみに先代っていうのは先代の“博麗の巫女”。つまり霊夢の母親の事。もう何年も前に亡くなったんだけど。

……正直なところ、あなたとも無関係じゃないんだけど………まあ、

今話す事じゃないわね。

「神主様にも会えるといいんだけど」

「神主様？ あの人はいつもいないでしょ。私が留守の時に限って帰ってきてるみたいなんだけど。いつもどこで何してるのか……」

……外の世界で、私たちを基にしたゲーム作ってるなんて、説明しても分からないでしょうね。

キャラ紹介（前書き）

主に主人公やそれを取り巻くオリキャラについて載せていきます。
キャラが増えたり、設定が明らかになったりしたら随時更新するつもりなので。

1 / 1 0 風峰陸斗、レイヤ・スプリングフィールドの情報を更新。
近衛凜音を追加。

1 / 2 5 結崎ゆちるを追加。

2 / 1 6 風峰陸斗、レイヤ・スプリングフィールド、結崎ゆちる
の情報を更新。

キャラ紹介

名前：風峰陸斗

性別：男

種族：妖怪（どんな妖怪かは不明）

容姿

身長170cm 体重65kg

黒髪セミショート・新緑の瞳

固有能力「虚無を司る程度の能力」

麻帆良学園女子中等部2-Aの担任教師。海外出張などで多忙なタカミチから、仕事を引き継ぐ形で担任に就いた。

かつての“紅き翼”の一員で、元々は帝国第三皇女テオドラが個人的に雇った傭兵で、“紅き翼”とも数度に渡り、戦いを繰り広げた。“虚無の王”、“虚空の勝利者”、“空に坐す者”の名で呼ばれる。また、空を支配したとされる大妖怪「ざから」の正体でもある。

600年以上生きる妖怪で、八雲紫に拾われ育てられた（しかし本人によると、主に育てたのは紫の式である八雲藍らしい）。その後、長年にわたって彼女達と行動を共にし、博麗大結界の創建にも力を貸したと言われている。20年ほど前までは幻想郷で生活していたらしいが、大戦の影響がこちらへ飛び火しないかを確認するため旅に出て、それから滅多に帰ってこなくなる。最後に幻想郷を訪れたのは10年ほど前だという。

近衛凜音とは幾度となく殺し合った仲であるが、1度も決着は付かなかったという。

永江衣玖とは夫婦なのだが、10年以上会っていない。しかし「幻想郷に帰ってきた」というウワサが流れた事で、衣玖が紫に直談判

し、麻帆良へとやってくる。夫婦仲は良好。かつて、博麗瑪瑙なる女性と愛し合ったらしいが、詳細は不明。その能力の名は虚無。万物の“終わり”と“始まり”とを司る力。その力は、紫の「境界を操る程度の能力」とは「極めて近く、果てしなく遠い」能力であり、もしも両者が互いに全力戦った場合、概念が崩れ、世界が崩壊する可能性があるという。

イメージC、V 中村悠一さん
「マクロスF」の早乙女アルト
「機動戦士ガンダム00」のグラハム・エーカーなど

名前：レイヤ・スプリングフィールド
性別：女
種族：人間

好きなもの：母、珈琲、甘味
嫌いなもの：父、ネギ、KY（空気が読めない人物）、紅茶（ただし、レモンティーは飲む）

特殊能力：王家の魔力

ネギ・スプリングフィールドの双子の妹。
“立派な魔法使い”の最終試練として「日本で学生をすること」を

引き当てて、麻帆良へやってきた。飛び級という形で麻帆良学園女子中等部3 - Aに転入する。

ネギを大きく上回り、木乃香にも匹敵しうる魔力を持つが、その魔力に耐えられるだけの身体ではないため、全般的に身体が弱い。大規模な魔法を使うと吐血し、場合によっては命にも関わるという致命的なリスクを抱えていたが、修学旅行の一件で木乃香と仮契約を果たし、彼女の魔力の影響で症状が完全回復する。

6年前の悪魔襲撃から、「村のみんなを助ける」目的を抱えており、日々研究を続けている。

陸斗と同様に、前世の記憶を持つ転生者だが、彼女は「ネギま」の世界の記憶を持つ故に記憶が封じられていた。麻帆良祭で電王が登場するのを目撃したのがきっかけで、記憶を取り戻す（しかし、原作知識は完全に失われている）。

イメージC、V ゆかなさん
「コードギアス 反逆のルルーシュ」のC・C・
「魔法少女リリカルなのはStrikerS」のリインフォース？
など

名前：近衛凜音

性別：男

種族：人間（多分）

容姿

銀髪・茶色の瞳

好きなもの：機械いじり

嫌いなもの：ナギ・スプリングフィールド

陸斗の旧友の1人。銀髪である事以外は木乃香に瓜二つの風貌を持つ。

その正体は、関西呪術協会の先々代の長。木乃葉の曾々祖父で、木乃香は彼の玄孫に当たる。ルナティック・シルバー“狂乱の銀”の2つ名を持つ、近衛家歴代最強の陰陽師で、博麗大結界の創建にも携わったとされている“人間の賢者”。御年129歳を迎えたらしい。

陸斗とは幾度となく殺し合った仲だが、1度も決着は付かなかったという。

転生者に関する情報を保有しているが、詳細は不明。また、「時を走る列車」のチケットを所有している。

かつて、ナギ・スプリングフィールドの魔法に巻き込まれた事と、それに対する態度により第一印象は最悪。彼の事を嫌い抜いている。学園長の要請を受け、麻帆良学園魔法先生統括官として赴任する。

イメージC・V 齊藤千和さん

「魔法少女リリカルなのはStrikers」のスバル・ナカジマ「化物語」の戦場ヶ原ひたぎなど

名前：結崎ゆちる

性別：女

種族：不明（半妖？）

容姿

身長163cm 体重51kg

淡い空色の髪・新緑の瞳

好きなもの：心が強い人、利益のある戦い
嫌いなもの：心が弱い人、無益な争い

メイド服の美人。アーニヤの師匠。

本名は風峰結千流。風峰陸斗と博麗瑪瑙の娘で、陸斗の「妖怪」としての部分を多く受け継いで生まれてきた。

タカミチ、クルト、カリムの3人をシゴき上げた張本人らしく、「ケルベラス大渓谷に突き落とす」という荒行の実行犯。

かつてデンライナーに乗車したらしく、彼女の名前を出したただけでモモタロス達を震え上がらせた。

重度のファザコンで、衣玖とは仲が悪い。

第11話：裁きの時間（前書き）

というわけで今回、薬味先生とバカレンジャーズに処分が下ります。中には「ちよつと軽すぎるんじゃないか？」と思う方がいるかもしれませんが、私的にはこんなもんじゃないかな、と。
では、本編へどうぞ。

第11話：裁きの時間

「Side ???」

俺の名は北山史郎！　トラック事故で死んじゃったんだが、女神からチート能力もらって転生したオリ主だ！！

そんな俺が24年前、転生したのは『魔法先生ネギま！』の世界。女神も「好きにしていいいわよ」と言ってたし、遠慮無くハーレムEDと行くぜ！

「まず、あの薬味は飼い殺して方向にするとして……」

俺が死んだとき、まだ「ネギま」は連載中（薬味がデユナミスってローブの魔導士とバトってるところ）だった。

アイツがいなくなると、魔法世界をどうやって救うとか分からなくなるし、それが分かるまでは生かさず殺さず……うまくやろう。消すのはそれを聞き出してからだな。

それで現在、色々あったが……俺は麻帆良学園の魔法先生として就任する事となった。グウレイト！！

時期は期末試験の終わった直後。確か、あの薬味も教師に……………。

「……………なつて、ないな」

確かに、原作通り2-Aは学期末試験でトップとなっている。それはいい。

だが……何でネギ・スプリングフィールドが2-Aの担任教師じゃないんだ？　どうなってるんだ！？

そんな俺の前に現れたのは、黒髪美形の……男、だよな？　なんだこいつ。原作にこんなヤツいたか？

「北山先生ですね、初めまして」

「あ、え……は、はい。あなたは？」

「女子中等部2-Aの担任教師、風峰です」

そう言い、風峰と名乗った教師が頭を下げる。

ま、まさかコイツも転生者か！？ 俺より早く物語に介入して、2-Aの担任なんて美味しいポジションをゲットしやがったのか！？ いや、まだそうと決まったわけじゃない。今は状況を確認しないと……。

「あの……中等部に、10歳の先生がいると聞いたんですが……？」

「……ああ、ネギ・スプリングフィールド先生ですか」

薬味の名前を出した瞬間、風峰の顔が暗いものへと変化した。

それはもう「その名前を出すな」と言わんばかりに……てか、あの薬味、何しやがったんだ？

「……図書館島はご存じですか？」

「ええ、知ってます。それが何か？」

「ある晩、図書館島にあるという“魔法の本”とやらを探しに、生徒と一緒に入り込みまして……まあ、結果としてあの成績を残しましたが行動が問題視され、現在は教育実習生という立場が継続しています」

お、おいおい、おかしいだろ！

そりゃあ原作だと、確かに図書館島に入っただけ問題にはならなかったはずだぞ？

何で問題になってるんだよ。学園長何やってんだよ。

「その件に関して、学園長が首謀者である事も判明し、半年間の減給処分が下されています」

「そ、そうですね……」

くそ、のっけから狂いつばなしじゃねえか。

いや……でもまだ大丈夫だ。まずは“破壊^{ルールブレイカー}すべき全ての符”でエヴァの呪いを解いて……ぐふふふ。

俺のハーレム計画は始まったばかりだ！！

[Side Out]

[Side Rikuto]

試験結果の発表後、俺は職員室にいた。ネギ坊主及び、バカレンジ

ヤーと図書館島探検部の面々を眼前に控えて。

……なお、周囲の教師はネギ坊主達に対し、世にも気の毒そうな視線を送っている。

「……さて、お前達も頑張った結果、2・Aは学年トップになったわけだが……」

そこは喜ぶべき部分だ。俺も評価せざるを得ない。

しかし、今そこは関係ない。問題はコイツらの行動についてだ。

「授業放棄、図書館島への無断侵入、禁止区域への侵入、挙げ句は書物の無断持ち出し……最初はともかくとして、後のは立派な犯罪だな」

問題行動を1つずつ指折りで数えていく度に、ネギ坊主達の顔が青くなっていく。

麻帆良だったら問題にはならないかもしれないが、外だったら間違いない警察沙汰になっている。

ここでしっかり指摘しないと、後のコイツらの為にもならない。

「……お前ら、学校をバカにしてるのか？」

俺もそうだが、教師が1番キレたのが「魔法の本を探しに図書館島へ行った」という部分だ。

そんなものがあれば苦労しない。いや、そんなものを当てにする事自体が、学校という場をバカにしている事に他ならない。

それでも教師という仕事に誇りを持ってやっているだけあり、その行動は決して見過ごせない。

「だいたいよく考えてみる。1クラスを解散させて小学生からやり

直し？ そんな事出来るはずないだろ。もし仮に実行したら学園長に非難が集中するし、下手したら懲戒免職ものだ」

「い、言われてみれば……………」

まあ、この辺りは『10歳の教師ネギ・スプリングフィールド』という特例があるため、あり得ない噂に翻弄されたのだろう。

それに、“英単語野球拳”が行われた時も、ネギ坊主が「最下位になると大変な事になる」と言っていたらしく、それが不安を煽る結果へ繋がったらしい。

……その場合の「大変な事」というのはもちろん「ネギ坊主がクビになる」なのだが。

そもそも、クビになるとは一言も言っていない。正式な教員になれないだけで、ただ実習生としての立場が継続するだけ。ほんと、どうしてこうなったんだか。

「まあ、本格的な説教についてはこの後、新田先生が直々に行ってくれるそうだ。なので俺から説教はやめておこう」

そう言うと、何人かが明らかに倒れそうな気配がしている。

小一時間は怒鳴りつけたい気分なのだが……何故かアスナやタカミチに「あんたがやったら再起不能になりかねない」と言われた。失礼な。

……まあ、俺の怒りは別のところ^{あいつら}にでもぶつける事にして、後の事は新田先生に任せよう。

「さて、お前達の処分についてだが……………まず、ネギ・スプリングフィールド」

名前を呼ぶと、ビクツとネギ坊主の身体が震えた。

「2-Aの最下位脱出という課題はクリア出来た……が、今回の件では、生徒を抑える立場でありながらそれが出来なかった。そのため、正式な教員採用は無し。1学期の間は実習生として継続。1学期の終わりに再び何かしらの課題が出ると思われるが、それに合格すれば正式に教員となれるはずだ」

「そ、そんな！」

「……言っておくが、今回の件で『クビにすべき』という意見も出ている。この処分で済んだのはまだ幸運だと思え」

もうコイツは教師失格だ。俺もクビにするのは大賛成だな。

……が、学園長を始め、一部の魔法先生がそれに反対。最終的にこの処分に納まった。

俺としてもクビに賛成したのだが……ダメだった。学園長の「子供なんじゃし、もつと穏便に」という言葉に、一般教員も少し心揺らいだらしく、その結果に落ち着いた。

……せめて実習生から外せ。それで小学生からやり直させろよ。それが1番いいと思うんだが。

「……は、はい……」

ネギ坊主は『クビにすべき』というのが相当堪えたらしく、涙目で俯いている。

さて、後は生徒達に対してだが……。

「原稿用紙をそれぞれ10枚配布するから、反省文を書いて俺のところへ提出。また、春休みの間はそれぞれ部活動及びアルバイトを禁止する。いいな？」

「……はい……」

「それと、図書館探検部についてはもう一つ」

じろり、と図書館探検部の面々を睨み付ける。
この処分については、ちよつとばかり心が痛むが……それでも仕方がない。

「これから3ヶ月間、図書館探検部は行動を完全に凍結。図書館島にも、司書を含む許可を受けた一部の人間以外の立ち入りを禁止する。なお、生徒は例外なく立ち入り禁止だ」

「え、ええっ!?!」

「な、何故ですか!! 何故そこまで……!!」

その処分に納得いかなかったのか、綾瀬が立ち上がり、涙目で抗議してくる。

ああ、気持ちは分かるよ。お前達個人だけでなく、図書館島探検部全体にも被害が広がったからな。

だが……ある意味、今回の件は起こるべくして起こったとも言えるんだよ。

「図書館島が今回の騒ぎの原因だ。当たり前だろう」

「し、しかし! 私たちは……」

「『図書館探検部だから』という言い訳は通用しないぞ。夜間、それも禁止区域への侵入は立派に違法だ。……それに今回の件で、図書館探検部の問題点が浮き彫りになった。例を挙げると、お前達が夜間に侵入した事から、鍵や地図などの管理体制に不備があるんじゃないか? とかな」

そう言うのと、さすがの綾瀬も反論できないのか、「う……」と言う呻き声と共に俯く。

これまで、あまり図書館探検部について問題点が上がらなかったため、行動内容はもちろん、図書館島自体にもスルーされてきた。しかし、今回の一件がある意味引き金となり、溜まるに溜まった問

題が一気に溢れ出た。「仕掛けられた罠は危険じゃないか？」とか
「書物の窃盗などに対して、本当に大丈夫なのか？」とか。

……いや、だって普通に矢とか飛んでくるし。なあ？

その処分に対し、探検部は断固として反対を示したが……教員の大多数が「図書館島の危険性」を考慮し、処分を下す事を支持したため、この結果となった。

「3ヶ月は調査期間だ。この間に調査等が行われ、「問題無し」という判断が下り次第、図書館島が解放される。……ああ、麻帆良祭もあるし、もしかしたら1ヶ月くらいで終わるかもしれないな」

その言葉に、ほっとしたような表情になる面々。

「念のために言っておくが……今後、無断で図書館島に侵入しようとした場合、この程度の処分では済まされないぞ」

……つまり、2度目はない。

もし仮に、調査期間中にネギ坊主が図書館島に入った場合、強制送還に至る可能性が極めて高い。

また、今回のように図書館探検部が無断で活動を行えば、今度こそ部活動自体が解散させられる事にもなり得る。

そうなったら俺は知らん。コイツらが退学になろうと強制送還されようと、完全に自業自得だ。警告を無視したんだから、一切庇うつもりは無い。

「分かったら、さっさと生徒指導室に行け。新田先生がお待ちかねだ」

……その後、新田先生に相当絞られたらしく、生徒指導室から出てきたネギ坊主達は真っ白になっていた。

ま、お説教タイムは終わった事だし、2-Aの生徒集めて祝杯でも
挙げに行くか。

[Side Out]

[Side Konoe mon]

参ったのう……まさか、風峰君がここまでキツイ手を取って来る
とは……。

おかげでネギ君は正教員にはなれなかったし、ワシも給料大幅ダウ
ン……とほほ。

「……さて」

手元の書類にはもう1人……レイヤ・スプリングフィールドの個人
情報が書かれている。

ネギ君と同じ修行内容では、周囲のひんしゆくを貰うのは目に見えていたからの、レイヤちゃんには学生として麻帆良学園に通つてもらう。

こつちには……まあ、いい顔をしてはおらんかったが、風峰君もうるさくは言わなかった。

「成績は……ネギ君には及ばんが、それでも優秀じゃの」

メルディアナの教員からの評価欄には「薬学・治療魔法に精通。技術・知識は下手な魔法使い以上」とある。

ふむ、この辺りは6年前の事件の影響かの。村の住民の石化を解くために……か。

「身体が弱い」というのは、おそらく王家の魔力の影響かの。詳しい事は本人から聞いてみると分かんが……。

「しかし、この評価は何じゃ？」

備考として「注意、ネギ・スプリングフィールドの尻ぬぐいを任せようとは思わない事」とあるが……どうも、ネギ君とは兄妹仲が良くないようじゃの。

いや、レイヤちゃんの事は風峰君に任せるとして……優先すべき問題は、エヴァンジェリンの事じゃな。

ナギの息子であるネギ君の血を摂取すれば、呪いが解ける。そう吹き込めば間違いなく動く。

ネギ君には悪いが、これも修行の一環じゃ。エヴァンジェリンも、女子供を殺しはせんじゃろ。うむ。

じゃが問題は……風峰君じゃな。

「行動を起こせば、間違いなく疑ってかかるじゃろうし……」

風峰君もバカではない。吸血鬼という単語から、エヴァンジェリンに行き着くのはそう難しくはないはず。

となると、気づかれんようにうまく事を進める必要があるの。

幸い、風峰君はエヴァンジェリンとそれほど接触しとらんようじゃし……。

「許せ2人とも。これもネギ君の修行のためじゃ」

[Side Out]

[Side Eva]

「……なるほど、な」

じじいめ、私をあのぼーやの修行のための駒にしようとは……いい度胸だ。

まさかじじいも、私の力がある程度戻った上、自分が監視されているとは気づいてしまい。この辺りは風峰に感謝だな。

「マスター、どうなさるのですか？」

「まずは、ぼーやの妹やらを見極めてからだ」

ぼーやとは仲が悪いところから、少なくとも甘ったれた思想の持ち主ではないようだ。

面識があるのはタカミチだけか。……アイツはいつ帰ってくるかわからんし、実際に会ってみるしかないな。

あと、じじいや他の連中の思惑通りに進めるつもりはない。

「では、どうなさるのです？」

「決まっている。完膚無きまでに叩きのめす」

大方、私が手加減して負ける……もしくは引き分けるのを想定しているのだろう。

しかし、そのつもりは無い。というより、その方がぼーやの教育のためにもなる。

私がこれでも、悪の大魔法使いであるという自覚はある。そんな私が、ぼーやに負けたとする。これが本当にぼーやにとって+になるだろうか？ 答えは否だ。

それは間違いなく『僕はエヴァンジェリンさんにも勝ったんだ』という慢心を生む。生まなかったとしても、決して+にはならない。

……別にぼーやの教育を行うつもりはない。ただ、あんなガキに負けてやるのは、私のプライドが許さん。

「よろしいのですか？ ネギ先生がそれで再起不能になつては……」
「構わん。ぼーやがどうなろうと私の知った事か。それで潰れるようなら、そこまでの男だったという事だ」

もちろん、女子供は殺さない。……まあ、手足の1本くらいは覚悟してもらうがな。

「……………ナギの息子、か」

……………正直な話、私はもうナギについてはどうでもいい。
陸斗が言うに、少なくとも生きているらしいが……………まあ、それならそれでいい。

ま、顔を合わせる事があつたら一発殴って、それを肴に酒を飲んで笑い合う……………そんな関係で充分だ。

（……………ああ、分かつてはいたさ）

ナギが私の想いを受け入れる事は無い、と。

子供がいるのなら尚更だ。陸斗の話では15年前には既に婚姻していた。最初から靡くはずもない、結果は決まっていた。

（さよならだ、ナギ）

15年前から既に存在していた結果を、私は受け入れた。

第11話：裁きの時間（後書き）

と言うわけで……ネギは先生になれませんでした。

まあ、今回も取り上げたとおり、「魔法の本」を手に入れようとする行動にはかなり問題が多く、それが問題視されての処分です。

図書館島に対しても、処置が下されました。

私から見ても……危ないですよ？ アレ。普通に矢とか飛んできましたし、本棚も崩れましたし。

いくら慣れているといっても、一般的な倫理観からしてみれば、そんな危険な場所に学生を立ち入らせるのはおかしいと思います。これが麻帆良の常識なんでしょうけど……。

まあ、そういうわけで立ち入り不可になりました。多分、麻帆良祭に合わせて解放されるかと思いますね。

……修学旅行後に「オレノテガカリ」を求めて潜るバカ共は……
……どうなっちゃうんでしょう。

あからさまに“痛い”転生者、北山史郎の登場です。

自分の事を「オリ主」と思い込んだ、テンプレ通りの転生者です。

能力も極めて強いんですが……活躍する機会はほとんど無いでしょうね、きっと。

彼のような転生者は今後、ちよくちよく登場すると思いますが、ほとんどは嘸ませ犬になると思います。

あと、感想で「何を目的とした物語か分からない」とありましたが……確かにそうかと思われます。

というよりも実際、陸斗の当初の目的は20年前に果たされていていま

す。それからはのんびり幻想郷で隠居していた、と。
それが何故、今現在麻帆良で教師として働いているか。その鍵は1
0年前にあります。

そして次回はついに、ネギの妹であり真主人公の1人、レイヤが登場します。

彼女はどのような活躍を見せるのか……。

なお、ネギの活躍はほとんど彼女に奪われる予定ですので（笑）

第12話：とある少女の学園来訪

「Side Leiya」

3月、私は日本の麻帆良に来ています。

本当なら、4月からなんですが……修行場所に慣れるため、また円滑な人間関係を築くため、無理を言って早めに日本へ来ました。

「……………しかし、困りました」

私がお世話になるのは……本校の女子中等部。その3年生のクラスだと聞いています。

本当なら14、5歳の年齢でなければなりませんですが……その辺りは飛び級という事でどうにかなっているとの事。

………なんと言いますか、この辺りにも書類の偽造や情報改竄が行われているんでしょうね。

ネギの場合も「オックスフォード卒業」という事になっています。

もちろん、そんな事はありませんよ？ 教員免許も持ってませんし話を元に戻しましょう。……場所が分かりません。

事前情報によると、迎えに来てくれる人がいるそうですが……………。

「……………アリカ？」

え？

その言葉に振り向くと……………そこには、黒髪の男の人が立っていた。

……………綺麗な人、ですね。新緑の瞳がとても印象的で……………女の人みたいな中性的な顔立ちも特徴的です。

いえ、そうじゃなく……………今、私の事を「アリカ」と、母の名で呼びましたよね？

「あの、あなたは……………」

「あ、す、すまない。昔の知り合いに似ていたんでな。……もしかして、メルディアナから来た子？」

「はい。そうです」

昔の知り合い？ もしかすると、母様と知り合いなんでしょうか？
まあ、それは置いておくとして……………今の話し方からするに、まさか私の事を知らなかったのでは……………？

「いや、学園長から『会えば分かる』と言われていてな……………すまない」

「いえ、気にしないでください」

どうやら、母様の知り合いなのは間違いない様子。
ところで……………どちら様なのでしょう？

「ああ、自己紹介がまだだったか。……………麻帆良学園女子中等部2 - Aを担当している、風峰陸斗だ。よろしく頼む」

風峰陸斗……………聞いたことがあります。

かの“^{アラルブラ}紅き翼”の一員にして、「虚無の王」とも呼ばれた英雄の1人……………。それなら確かに、母様とも面識があっても不思議ではありませんね。

「ところで名前は……………」

そういえば、私は名乗ってませんでしたっけ？
私の名前は……………。

「レイヤ、レイヤ・スプリングフィールドです」

[Side Out]

[Side Rikuto]

「なるほどのう……日本で学生とは、大変な課題をもらったものじゃない」

学園長室にて、いつも通りの学園長と……ネギ坊主の妹、レイヤ。確かに、顔を見た時は驚いた。アリカに生き写しだからな……。しかし、レイヤ……か。偶然なのか？

「レイヤちゃん、この修行は大変じゃぞ？ ダメだったら故郷へ帰らなければならん」

「……正直な話、私は“立派な魔法使い”に対して、それほど興味

はありませんので、故郷へ帰れと言っのなら喜んで従いますけど？」

おいおい、最初からこれかよ。学園長も冷や汗掻いてるな。

しかし……どうやらネギ坊主よりマシのようだ。アリカの悪いところばかり似たネギ坊主とは違って、完全にアリカ似のようだな。

「もちろん、修行はきちんとやりますよ」

「う、うむ。……風峰君、レイヤちゃんは君のクラスに入る事になるのじゃが……」

やっぱりか。とゆーか、懲りてないな。

……まあ、俺としてもレイヤには興味があるし……。

「わかりました。……では、彼女の案内があるので……」

「うむ」

レイヤについてくるよう促し、学園長室を後にする。

ネギ坊主もこういう風に学生として来てればいいんだよね。そっちの方がずっと楽だ。

……まあ、武装解除とかホレ薬とかは回避できないんだろうがな。

「あの、風峰先生」

「うん、どうした？」

「……その、うちのネギ^{バカ}がご迷惑をおかけしていませんか？」

……ああ、迷惑ね。ははは。

もう何度クビにしたいと思った事か……いつそ殴りたいと思ったぞ、あれは。

まず武装解除。アスナがその主な被害者だ。

次にホレ薬。後始末に奔走している内にいつの間にか終わっていて、

責任を追及する事も出来なくなっていた（あの時点でクビにすべきだと叫んでおけばよかった）。
そして……この前の期末試験。

「……………その様子だと、相当みたいですな」

「ああ。あれは酷い。子供だと言っても限度を超えてる」

教師をやるって時点で、そういった甘えは全部捨てるべきだ。仮にも生徒達の未来を預かる立場なんだ。

なのに学園長と来たら「子供なんじゃし、もつと優しく」だぞ？

ネギ坊主自身も周囲に甘えている部分が目立つ。

……アスナから「ベッドに潜り込んでくる」と聞いてるしな。

「お聞きしても、いいですか？」

「……………」

少し迷ったが……全部話した。

ネギ坊主の“失態”を事細かに話していく度に、どんどん表情が悪くなっていく。

期末試験での問題行動と、それによる処分を話し終えた時、レイヤは怒りと呆れが入り交じった複雑な顔をしていた。

正直、これには安心している。ネギ坊主の身内だから、アレを無闇に庇ったりするんじゃないかと思っていたんだが……この様子だと、それは無いな。

「……………本当にすみません、あのバカが本当にご迷惑を……………」

「いや、お前の所為じゃない。……なあ、ネギ坊主はどんな教育を受けてきたんだ？」

「あ……………私にも責任はあるんですが……………」

はあ、とため息をつきつつも話してくれた。

……まあ、普通に魔法学校のカリキュラムとしてなら、及第点だ。だが、一般社会でそれが通用するとは思えない。その部分も含めて評価するなら、充分に落第点。

おまけに……叱られた事が無い、か。それは問題だな。

子供ってのは、バカやったりしたら親なり大人に叱られるのが当たり前だ。そうやって学んで大きくなっていく。

……ネギ坊主の場合、バカしても叱ってくれる大人がほとんどいなかったとか。従姉のお姉さんもネギ坊主に甘かったみたいだし……。

「前にも、毘にかかったオコジョ妖精を逃がした事があるんですが……」

「いいんじゃないか？ 優しくて」

「……なお、そのオコジョ妖精は下着ドロの常習犯です。私と幼なアニーヤさんじみの下着にまで手を出したので、呪にかけて引き渡しました」

………「ライ。」

まあ、その淫獣の事は置いとくとして……。

「苦勞、してるんだな」

「………ええ」

しばし見つめ合う。俺たちの間にある視線は、同じ想いを抱える者同士の共感だ。

………もし、これが同性なら熱い抱擁へと発展する。

「………風峰先生、お願いがあるんですが？」

「何だ？」

「麻帆良において、先生が信頼できる魔法先生、魔法生徒を何人か教えてください。あと、知識の豊富な高位の魔法使いも」

……この様子だと、俺が“虚無の王”だと気づかれてるな。
しかし、ネギ坊主が気づかなかった事が疑問なんだが。それで学園
長達に口止めておいたが。

「理由は？」

「……色眼鏡で見られたくありませんから」

ま、確かにな……。

学園長もそうだが、魔法先生はネギ坊主を「才能豊かな英雄の息子」という色眼鏡で見ている。

魔法生徒にも何人かミーハーなのがいるし、レイヤとしてみれば厄介な事この上ないだろう。

「大学の明石教授、小等部の式集院先生、中等部の高畑先生に瀬流彦先生……」

ガンドルフィーニは……ダメだな。

あれはちよつと頭が硬い。悪いヤツじゃないんだが……思想がちよつと傾いてるところがあるし、レイヤにしてみたらアウトだ。

「魔法生徒は、うちのクラスの桜咲に龍宮。後は絡繰だな」

絡繰はああ見えて真面目だし、面倒見がいい。桜咲はともかく……

龍宮は基本的に中立的立場だ。

春日はアウトだ。ちょい不真面目だし、サボり癖がある。

エヴァがちよつと微妙だな。俺的に信頼は出来るが、レイヤが名前を聞いてどう思つか分からんし……。

「一般教師なら、うちの副担任の源しずな先生。それと学年主任の

新田先生。何か悩みがあるならしずな先生に相談するといいし、勉強や学校の事なら新田先生を頼るといい」

特に、しずな先生は大らかな人だし、年齢や性別上、俺に相談出来ない事でも話せるはずだ。

新田先生も……学年主任という立場や、怒鳴り癖から敬遠されがちではあるが、生徒の事を真剣に考えている。現に、進路や勉強の事で相談する生徒も少なくは無い。

そうそう、後で木乃香や明石の事についても話しておかないとな。魔法関連は秘密だと。

「後、うちのクラスに沢ありのヤツがいてな」

「はあ」

「まあ、信頼できる相手ではあるが……ちょっと名前を出しづらいというか……」

……まあ、顔を合わせるなり、名簿見るなりで分かるだろうし……。

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。うちのクラスにいるんだが」

「……あの、それ“闇の福音”ですよ？ 悪の大魔法使いの」
「ああ」

レイヤが思い切り、頭が痛そうな顔をしている。
多分、すぐに察したんだろうな。ナギ（父親）が絡んでるって。

「……何があったかお聞きしても？」

「赤毛のバカにデタラメな呪いかけられて、15年間ずっと学生生活してたらしい」

「……………ああ、謝る相手が増えたんですけど……………」

頭抱えてるな。……………これに関しては、ほんとにスマンとしか言い様がない。

「……………で、ここが教室だ」

既に放課後なので、生徒はいない。

……………いや、1人だけいるな。尤も、レイヤには見えないだろうが……………。

「あ、風峰先生」

ふよふよと、さよがこちらへと近寄ってくる。

……………なお、極めて強い隠密性能（要するに、認識阻害能力）を持っているため、他の生徒や教師には気づかれていない。

うちのクラスで気づいているのは……………アスナと桜咲、龍宮に……………あとエヴァくらいじゃないか？

ネギ坊主も……………ちらちら席の方を見てるが、確実に気づいてるわけじゃないらしいし。

「あれ？ そつちの子は？」

「ああ。4月からうちのクラスの生徒になる、レイヤ・スプリングフィールド。ネギ坊主の双子の妹だ」

とはいっても、レイヤには見えない……………。

「どうも初めまして。レイヤ・スプリングフィールドです」

「……………え？」

普通にさよの方を向いて、ペこりとお辞儀するレイヤ。

いや、もしかしくなくても見えてる？　しっかり視線もさよを捉えてるみたいだし……。

「ちょっと特殊なんです。……母親が母親なので」
「……なるほど、な」

王家の魔力、か。そう言われれば頷ける。現に、俺でもその全てを把握しきれていない。

今の口ぶりだと、アリカの事も知っているようだし……。
どうやらレイヤは、100%純度でアリカの素質を受け継いだらしい。

「じゃ、改めて紹介。こっちは相坂さよ。60年間幽霊やってるベテランだ」

「は、初めまして」

ぎゅっとレイヤの手を握りしめるさよ。

ほうほう、普通に霊体にも触る事が出来るのか……。

「ええ、よろしく願いしますね。さよさん」

「は、はいっ！」

にこやかに挨拶を交わす2人。……この様子だと、思ったより早くクラスに溶け込めそうだな。

尤も、うちのクラスは想像以上に“濃い”し、そう容易くはないが。……ま、問題はこれからだな。

「さて、次に行くぞ」

「次……ですか？」

「ああ」

実を言うと、エヴァから頼まれた事がある。

ネギ坊主の妹に会わせろ、と。……まあ、自分でどんな人間か見極めるつもりなんだろうけど。

レイヤとしても、ナギの代わりにエヴァに謝りたいみたいだし、ちようどいいだろ。

[Side Out]

[Side Asuna]

「ネギ先生の妹、ですか」

「陸斗からのメールだと、いい感じの子みたいよ」

恒例の情報交換……とまでは行かないけど、また木乃香の様子を聞きに、刹那さんが尋ねてきた。

聞けば、図書館島の一件で距離が縮まったみたいだし、それなら木乃香のいる時に来てくれればいいのに。

「あんまり詳しくは書いてないけど、一般常識は兼ね備えてるって」

ふう、と肩をなで下ろす刹那さん。

そう思うのも当然よね。……ネギに常識が備わってるか怪しいし、これで妹も同じだったら、余計に頭が痛くなってくる。

「そういえば、ネギ先生が教員寮に移ったと聞きましたか？」

「ええ。……ふ、ふふふ……ふ……あーっははははは!!」

やっつと、出たのよ！？ 私のストレスの元凶が、頭痛の種が、ようやく！

人の事脱がすわ、ベッドに潜り込んでくるわ……………朝、ベッドに私だけの喜びがやっと帰ってきたのよ！

木乃香は「ちょっと残念や」とか言ってたけど、いない方が負担が小さいに決まってるじゃない。

「あ、アスナさん落ちて着いて……」

「じゅめんなさい」

あ、ちよつと取り乱してたわね。気をつけないと。

「それで、風峰先生は？」

「今、その子連れてエヴァちゃんトコに行くって」

「エヴァンジェリンさん……ですか？」

そ。エヴァちゃんが会いたがってるんだって。

まあ、どんな子が自分の目で確かめたいんじゃないの？ エヴァちゃんって、人伝いの情報は当てにしないタイプだし。

「大丈夫でしょうか……？」

「今頃土下座してるんじゃないの？ 我家のバカがご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません」って風に」

「それはさすがに無いと思いますけど……」

いやいや、充分にあり得るって。

第13話：血の取引

「Side Eva」

「この度は、我が家のバカ共がご迷惑をおかけして……本当に申し訳ありません」

そう言い、いきなり土下座してきたガキが1人……。

どうやらコイツがナギの娘で、あのぼーやの双子の妹だとか。名前はレイヤ・スプリングフィールド。……確かに容姿は、かの“災厄の女王”アリカ・アナルキア・エンテオフュシアに瓜二つだな。しかし……突然の土下座に、思わず面食らってしまった。

「……………何のつもりだ？」

「いえ、15年前に愚父が呪いをかけて放置している事と、ネギの引き起こしているバカ騒動についてです」

……………ほう、なるほど。

謝りにも来ないぼーやとは大違いだな。

「呪いについてはいい。そっちの教師が解呪してくれている。ぼーやの珍騒動も……私に被害が及んでいるわけでもない」

「……………そう、なんですか？」

「ああ。まあ、もう1つの呪いは継続中だがな」

学園結界に作用し、私の魔力を極限まで抑え込む封印……。

私に気づかれずに、こんなものを仕込めるのはじじいじゃない。

……………私の呪いが完全に解けたら、くびり殺してやる。

「……よろしければ、診せていただいてもよろしいですか？」

「構わんが……なんだ？」

「いえ、少し気になる事がありました」

びた、と私の額にレイヤの指が触れる。

む………意外に冷たいな。女は冷え性だと言うが……。

「………この街の結界を介して、魔力を封じ込めるタイプの呪いで
すね」

「！ 分かるのか！？」

これには驚いた。風峰もかなり驚いている。

初見でそこまで見抜けるのは、相当出来る魔法使いくらいだぞ？

「呪いについては勉強してますから。………スラミア式魔力封印に、
東洋呪術の呪縛が重ねがけされてますね」

「そ、そこまで分かるのか！？」

「勉強してますから」

いや、その一言だけでは済まされんと思うが………。

「魔力や、他にかけられていた呪いの所為でしょうか。複雑に絡み
合っています。これでは………並の術者では解呪は難しいと思います」

「ああ。その辺りは大丈夫だ。知り合いに凄いのがいるからな」

確か、風峰の古い知り合いだったか？

ヤクモ・ユカリとかいう妖怪なら、問題無いと言っていたが。

………まあ、どちらにせよコイツが気に負う事ではない。大元の原因
は父親だし、コイツはそれに対して謝罪している。
ナギ

「…………エヴァンジェリンさん、不躰で申し訳ありませんが…………あなたにお願いがあります」

「何だ？」

「あなたの持つ知識と技能…………分けていただけませんか？」

ほう…………？

「目的は何だ？」

「魔法使いとして研鑽を積むため…………では納得していただけませんか？」

なるほど、納得出来る理由ではある。しかし、それだけではあるまい。

「それならば、何故わざわざ私に教えを請う？ 悪の大魔法使いの私に」

「簡単です。それはあなたが現時点の麻帆良において、最高位の魔法使いだからです」

ふむ、確かにその通りだ。

じじいもかなりの高位だが、私には及ばんし、全盛期と比べれば格段に実力が落ちている。

魔法先生でじじいに次ぐ実力者はタカミチだが、ヤツは魔法使いとしては落ちこぼれ…………コイツの求めるものは手に入らない。

そこで私に目を付けた、というわけか。…………しかし、

「それだけではあるまい」

「……………！！」

そう、それだけのはずがない。

タカミチやじじいは気にしないかもしれんが、学園の魔法先生の大
半は、私の事を忌み嫌っている。

“英雄の子供”が“悪の魔法使い”に近づく事を喜ぶと思うか？
いや、思わんだろう。今までのやり取りでコイツもそれが分からん
ほど、愚図には思えん。

私に近づく事はデメリットが大きすぎる。そのデメリットを覚悟す
るまでの理由があるに違いない。

「答える。内容によっては……聞き届けよう」

「……………私の最終的な目的は、石化治療です」

石化治療？ そんなもの、私でなくともいいだろうに。

「6年前、私たちの住んでいた村を悪魔が襲撃しました。……ほと
んどは下級悪魔でしたが、どうやら高位悪魔が紛れ込んでいたら
しく、それにより村人のほぼ全てが石化され、生き残ったのは……私
とネギ、従姉のネカネさんだけです」

「……………その高位悪魔というのは？」

「爵位級悪魔です」

なるほど、爵位級悪魔による石化か。確かにそれでは並大抵の術者
では治せまい。あれは一種の呪いに近い。

よくあるゲームだと、「魔王を倒せば呪いは解ける」というのがあ
るが、現実はその簡単ではない。

例え、石化を施した悪魔を倒しても、呪いは解けるとは限らない。
いや、大抵は呪いが継続する。呪いによつては、死の間際の「恨み」
や「憎しみ」によつて、さらに効果が倍増する可能性もあり得る。

……………まあ、もしかしたらその悪魔当人になら、石化を解けるかもし
れんが……………。

「6年前からずっと、石化を解く研究はしてきましたが……芳しくありません。ですが、600年級の大魔法使いであるあなたなら、現代では死滅してしまった知識や技術をお持ちかと思……」
「……………ふむ」

正直に言えば、私は治癒だの解呪だの、そういった魔法には疎い。不死だからな。

だが、書物や魔法具ならばある。面倒だったから、別荘に纏めて放り込んだままだが。中には現代で再現不可のものもあるだろう。ひよつとしたら……………コイツの研究とやらにも、役立つかもしれん。しかし……………」

「対価は何だ？」

「え？」

「忘れたのか？ 私は“悪い”魔法使いだ。たかが10歳のガキの願いを、無償で聞き入れるような善人ではないぞ？」

「……………」

少し、俯いて悩んでいたようだが、意を決したように顔を上げて口を開いた。

「対価は……………私自身です」

その言葉を聞いた瞬間、ぴくりと風峰の目が動いた。

「何……………？」

「“英雄”ナギ・スプリングフィールドの娘、ウェスペタルティア王家の血脈……………この身に流れる血は極めて稀少なものであると言えます」

ほう……自分自身の“血”を対価として差し出すつもりか。

見た限り、包括している魔力はナギと同等……いや、それ以上。さらに王家の血筋であるならば、その血は研究材料としては喉から手が出るほどの価値がある。

それに私自身、そこまで濃縮された血液にも、吸血鬼としては食指を動かさざるを得ない。

「しかし、分かっているのか？ 吸血鬼に血を与える。それは……」

「吸血鬼の眷属になる。……構いません。私の目的はただ1つ、村人の石化を解く事ですから」

真っ直ぐに私を見つめる目。

……チッ、ほぼ全てが母親似のくせに、そんなところは父親似か。

「……いいだろう。腕を出せ」

「え？」

「前金代わりだ。このくらい構わんだろう？」

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

「あう……………」

「ほら、しっかりしろ」

よろめくレイヤを支えながら、帰路に就いていた。
見ててハラハラしたな。しかも相当血を吸われたみたいだし……。
学園長から見せてもらった書類によれば、身体が弱いらしい。……
あまり過度な吸血はしないよう、エヴァに言っておかないと。

「だが、エヴァに気に入られたみたいだな」

「そ、そうなんですか……………」

「アイツがあそこまで饒舌になるのは珍しい。それに、最終的に弟子入りを受け入れたんだ。気に入られてなきやそうはならん」

しかし、あの覚悟の入れ方といい……………あの頃のアリカを見ているようだな。

ネギ坊主は、ナギとアリカの「よい部分」と「悪い部分」を半々に受け継いでいるようだ、レイヤは100%アリカ似だ。

……………もちろん、いい意味でも悪い意味でも、な。

「あの、ところで……………私はどこに住めば？」

「他の生徒と同じく学生寮になる。魔法生徒は基本的に1人部屋か、同じ魔法生徒と相部屋になるが……………」

レイヤの場合はどうなるか分らないところがある。何せ、ネギという前例があるからだ。

魔法使い……それも未熟すぎる子供を「魔法から遠ざけている」「一般生徒と同居させていた。はつきり言つて、同じ事が繰り返される可能性もあつた。

……まあ、ネギは既に教員寮へ移っているし（アスナが泣いて喜んでいた）、同じ事の繰り返しをさすがの学園長も行いはしないだろ。

（しかし……）

ちら、とレイヤの方を見る。

俺の名前を聞いても特に反応を示さなかったし……単なる偶然か？

「……なあ、俺の事は知ってるんだな？」

「ええ。有名ですから」

何で双子の妹が知っていて、兄貴が知らないんだ？

なんか、それはそれでショックなんだが……。

「仕方ないですよ、あれは6年前からずっと、現実から目を背け続けてます」

「そう、なのか？」

「ええ。ただ“英雄”に憧れるだけの未熟な子供。……比べられるのも不愉快この上ない。まあ、私も同じ年ではありますが」

この言い方……あのネギ坊主を相当嫌ってるみたいだな。

まあ、あの様子なら嫌われてもおかしくは無いが……やはり、周囲には「英雄の子」のネームバリューが大きいという事か。

しかも厄介なのが、ネギ坊主自身がそれを自覚しておらず、ただただ甘えている。……それが自分に対して毒に変わらないものである

のに……。

「一応お聞きしますが、あれに昔の事などは……？」

「話してない。根掘り葉掘り聞かれるのは好きじゃないからな」

「いい判断だと思います。現に、タカハタさんも辟易してましたから」

……そういえば、前に出張から帰ってきたタカミチが、いつも以上に疲れていた事があったような……。

でも、なんか矛盾してるな。父親の事知りたいなら、まほネットで調べれば出てくるし、俺の情報だって普通にでてくるはずだ。

「言いましたよね、6年前からずっと目を背けている、と」

「……なるほどな」

現実には憧れているのに、現実から目を背けている。……これも矛盾だな。

別に“英雄”に憧れるのは悪くないし、未熟なのが悪いわけでもない。

だが、ここは学校でネギ坊主は教師……ネギ坊主の未熟さで被害を受けるのは、自分だけではなく生徒もだ。

「他の修行先はどんなのがあったんだ？」

「そうですね。アーニヤさん……私たちの幼なじみなんですが、アーニヤさんの修行は『ロンドンで占い師』です」

うん、普通だな。

普通に魔法使いらしい修行だし、イギリス自体も魔法使いが多い。修行の場としては最適だ。

「他は詳しく知らないんですが……何でも、『マフィアの用心棒をする』とか『1年間遺跡発掘に従事する』があつたそうです。ですがやはり、日本で修行というのは珍しいようです」

そりゃあ、そうだな。……そう考えると、何で日本なんだ？

知っているヤツもいるかもしれないが、日本における魔法勢力は2分されている。

1つは『関東魔法協会』。

麻帆良を拠点とした西洋魔術師……所謂「魔法使い」達の組織で、麻帆良が創建されたのと同時期に、海外から渡ってきた者達の組織でもある。ちなみに、うちの学園長が理事長を務めている。

そしてもう1つが『関西呪術協会』。

京都の総本山を拠点とした陰陽師達の組織。こっちは日本古来からの能力者達の組織であり、外から入ってきた魔法使い達とは昔から仲が悪いのだが、西の長は詠春が務めているため、現在は均衡した状態にある。

麻帆良学園の修学旅行には、他の学校でもお決まりの『京都・奈良・大阪』もあるが、西の縄張りに入る事で相当モメているらしく、魔法先生が1人増えるだけでも難色を示す事もある。

……あゝ、ネギ坊主いるけど今年はどうなるんだろ。だって“千の呪文の男”の息子だぞ？ 明らかにモメるだろ。

向こうが拒否したら、一昨年みたいにハワイになるのかな。俺的にはそっちの方がいいけど。

「だろうな。………あゝ」

これはカリムから聞いた話なんだが……ネギ坊主達の修業先は、元々MMだったらしい。

それに不服を唱えたメルディアナの校長がカリムに申し立てて、どうか修業先を変更する事に成功した。

それで、どこを修行地にするか話し合われていると、そこに学園長が自ら名乗り出たとか。

……まあ、麻帆良はMMからある意味独立しているとはいえ、下部組織だ。元老院のバカ共も納得して承認したらしい。

(……………どうしょ。話すべきか?)

A組が「英雄の子のために作られたクラス」である事を。

今回、学園長がネギ坊主を、「本来魔法から最も遠ざけなければならない」アスナ達と同室にしたところから、その疑いは濃厚になった。

ネギに対する対処の甘さといい、図書館島での一件といい……………。

「どうしたんですか?」

「いや、何でもない」

とりあえず……………しばらくは黙っておこう。まだ確定したわけじゃないし。

まあ、普通にレイヤがA組の生徒と接触したりすれば、A組の異常性に嫌でも気づくだろう。

それで質問されたら、「こういう可能性もある」と言えればいい。どちみち、レイヤは学園長を信用していないようだし。

「よし、時間的にもそろそろ晩飯時だし……………飯にしよう。うまい店がある」

「いいんですか？」

「ああ。生徒と交流を深めるのも、教師としての仕事だ」

“超包子”なら、四葉や古もいるだろうし……顔合わせをしておくのも悪くない。

それに今の時間なら、新田先生達も来てるだろうし。ネギとは違って、レイヤは極めて常識的だから好感は得られるはずだ。

「ありがとうございます」

「んじゃ、行くか」

俺たちは超包子に向けて歩き出した。

……まだちょっとだけ、よろよるなレイヤを支えながら。

[Side Out]

「Side Negi」

「レイヤが、ですか？」

「うむ。今は風峰君が案内しとるところじゃ」

……僕の双子の妹、レイヤ・スプリングフィールド。

正直に言うと、レイヤとはそれほど仲が良くない。ううん、レイヤが一方的に僕の事を避けてる。

レイヤは僕のことを「6年前からずっと逃げてる」って言ってるけど、そんな事ない。

6年前のあの日、僕らを助けてくれた父さんのような、世のため人のために力を使う“立派な魔法使い”になるんだ！

「聞くところによると……レイヤちゃんとは仲が良くないとか？」

「あ、その……ちょっと色々あって」

僕らを助けてくれたのに、レイヤは父さんの事を嫌ってる。

お姉ちゃんや大人の人はみんな、父さんの事を「英雄だ」「凄い魔法使いだ」って言ってるのに、レイヤはずっと嫌ってる。

それでレイヤと大喧嘩して……それから仲がギクシャクし出した。

アーニヤも、どっちかと言ったらレイヤの味方をしてるから、あまりうまく行かない。

「あまりよろしくないの。……兄妹なんじゃし、仲良くせんと」

「……………はい」

でもやっぱり、レイヤの事は分らないよ。

何で父さんの事を嫌うの？ 何で父さんの事を「父親失格」なんて言うの？ 僕らの父さんなんだよ？

父さんのような“立派な魔法使い”になる。それが、僕らの道なの
に……。

第13話：血の取引（後書き）

というわけで、レイヤ来日編をお送りしました。

一応、弟子入りフラグは立ちましたが……あくまで知識と技術を教わるだけですから、まだ戦闘技能までは行きません。その辺はレイヤの意欲とエヴァの気まぐれ次第ですね。

ネギとレイヤの確執ですが、これが解決する日は来ないでしょう。ネギは父親を妄信的に慕ってますし、レイヤはそんなネギを冷めた目で見ています。

尤も、ネギがそこまで妄信的になる原因は、周囲の大人達に「ナギのような魔法使いになれ」という洗脳にも近い刷り込みが行われたため。しかもそこに悪意が無いのが1番厄介です。

あくまでも希望だと思っけていても、それが強制する結果へと繋がってしまっている……。そう考えると、ネギもレイヤも被害者ではあります。

しかし……普通に考えても、ナギは「父親失格」なんですけどね。どんな理由があったにせよ、子供をほったらかしにしてますし、その子供に対するケアのようなものは全くしていない。遺産のようなものも残していないようですし……。

どうしてネギがナギを、あそこまで慕う事が出来るのか、レイヤには理解出来ない。元々の立ち位置が違うえ、極めて遠いところにあるため、交差する事はまず無いでしょう。

さて、次回はネギ坊主の失態を描きつつ、幻想郷のお話です。陸斗

の“里帰り”ですね。
それが終わってから、
手加減はありません。

吸血鬼編に入ります。
なお、エヴァの慢心や

第14話：おいでませ幻想郷（前書き）

というわけで、里帰り編です。……まあ1話だけですが。

時期的には風神録の前ですね。まだ守矢神社はやってきてません。

ネギま本編終了後に幻想郷編に入ろうかな、と思っていたりいなかったり。

第14話：おいでませ幻想郷

〔Side Rikuto〕

……レイヤが来てから、いろいろな事があった。

まず、終了式の日。「レイヤちゃんいらっしやい、ネギ先生これからもよろしくお願ひします会」という名の宴会が行われた。

まあ、一種の歓迎会だな。レイヤも質問攻めにされたとはいえ、だいぶクラスに打ち解けたみたいだし……。

……長谷川がネギ坊主の被害に遭ったのは、本当に申し訳ないと思っているが（レイヤがあまりのことに倒れそうだった）。

（……今考えてみると、長谷川って認識阻害の効果受けてないみたいなんだよな）

ごく稀にだが、学園結界の認識阻害効果を受けない人間がいる。

うちのクラスの不自然さとか、普通なら疑問に思っべき事が疑問に思われていない事に対し、頭を抱えているようだし……。

ネギ坊主は相変わらず空気を読まないし、担任としてはその内、ケアをすべきかもしれない。……いや、ここは同じ女生徒としてレイヤに任せるべきか？

まあ、それは後で考えるところでしょう。

……ネギ坊主の失態その2。パートナー探して騒ぎが巻き起こった。どうやら、学生寮にネギ坊主宛のエアメールが届いたらしく（差出人の住所に、魔法学校と記載されていたらしい。アスナ達が頭抱えていた）、その事がクラス全体に広まった事で、騒ぎになった。

曰く「ネギ・スプリングフィールドは正体を隠してるが小国の王子で、后候補を探しに日本へやってきた」とか。

……どんな伝言ゲームだ？お見合いこれ。

なお、木乃香が学園長の趣味に振り回されているらしい。……その内、詠春に報告してやる。

「おい陸斗、どうしたんだ？」

「……何でもない」

俺たちは今、麻帆良から離れてる。

同行者はエヴァとさよ。場所が場所なのでレイヤは連れてきていない。茶々丸はメンテナンスがあるらしく、今回は見合わせる事となった。

エヴァに関しては身代わりを用意し、さよは媒介として位牌を用意した。これで一時的とはいえ、遠出できるようになった。

「それで、どこへ向かっている？」

「ん……そろそろ着くはずだが……」

で、現在山の中を進んでいる。

念のために言っておくが、決して迷っているわけではない。ぐるぐる回っているように見えても、遭難しているわけではない。

向こう側から引つ張ってもらわないと、さすがの俺も簡単には向こうへ入れない。

多分、そろそろだと思っただが……。

「……遅かったわね、陸斗」

その声と共に、目の前の空間に切れ込みが入り、そこから女性が現れる。

紫、とりあえずその切れ込みは閉じる。中から見える目玉にさよが怯えてる。

「仕方ないだろ、お前みたいに便利な能力持ってないんだし……いつそのこと、向こうに雇掛けようか」

「あら、それいいわね。私も行き来自在になるし」

やっぱりやめよう。例え設置するとしても、コイツは通れないようにしよう。

「おい、その女は何者だ？」

「……一応、俺の元保護者だよ。紫、早速で悪いけど……」
「分かってるわ。……さ、どうぞ」

再び切れ込みの中へ入り、ちよいちよいと手招きしてくる。

俺は迷わず進むが、エヴァ達はそうも行かない。……普通なら警戒するよな、そりゃあ。

しかし、俺が中へ入ったのを見て、安全だと分かったのか、おそろおそろ着いてくる。

……相変わらず、変な空間だな。

「か、風峰先生……」

「大丈夫だ。あれは一応無害だ」

当然、中にも目玉は無数にあり、それがこっちを見ている。はっきり言って怖い。

俺も……慣れるまで相当かかった気がするな。

「さ、ついたわよ」

その声と同時に、視界がぱあつと広がる。

…… 10年前と変わらない、いや、格段に賑やかさの増した博麗神社の光景が、そこに広がっていた。

見た限り、妖怪や魔法使いも集まっているし、先代の頃とは大違いだな、これ。

と、先代によく似た巫女がこちらへと近寄ってくる。もしかして、コイツが……？

「あら、紫。おかえり。……… そっちは？」

「ええ、前にも話したでしょ。“空に坐す者”風峰陸斗よ」

紫がそう言うのと同時に、ざわめきが広がった。

おいおい、正直その名前で呼んで欲しくないんだが………。

「あら……… 久しぶりね、陸斗」

「ああ、お前も変わってないな。……… 元気そうで何よりだよ、幽々子」

渦巻きのような紋様の入った帽子に、薄い水色の着物を纏った少女

……… 西行寺幽々子。

俺が今回、さよに会わせたかった人物でもある。

「まあ、何はともあれ1杯どうぞ」

「ん」

その場に座り、とくとくと杯に注がれる酒を飲み干す。

幻想郷の酒は、基本的に今の世の中のような大量生産ではなく、全て昔ながらの手作業で作られている。

もちろん、こっちの方が断然美味い。

「お前らも座れ」

「あ、ああ」

エヴァが強ばるのは分かる。ここにいる連中はかなり別枠のが多いからな。

俺に誘われるがままに腰を下ろすと、適当な杯を渡し、酒を注ぐ。

「おい、ここは何なんだ？」

「……………幻想郷。人外の者達が人と共存する、最後の楽園……………」

博麗大結界によって外界と隔絶され、外からは巧妙に隠されているため、滅多に入り込む人間はいない。

だが稀に、結界を越えて来る者もいる。そういった人間は「神隠し」に遭ったとされており、ほとんどは妖怪に食べられたり、妖獣に殺されたり、妖精の悪戯の餌食にあたりと……………口く大な目に遭わない結界が作られたのは確か……………明治17年。もう120年以上も前になるのか……………。

「妙に詳しいな」

「当たり前だ。……………俺も携わったからな」

まあ、俺がやったのはちょこつと手を加えたりしたくらいで、大半は紫と当時の“博麗の巫女”が行った。えつと……………確か、当代から数えると4代前……………だったか。

そーゆーの専門は紫だし、俺は性に合わない。そう思いつつ、杯を傾け、再び酒を流し込んだ。

[Side Out]

「Side Yukari」

「違うわ。もっとう……ばば〜ん、と！」

「ば、ばば〜ん！」

「違う！ こつよ、ばらら〜ん！！！」

「それさっきと明らかに違いますよね！？」

……あつちは何やってるのかしら。

幽々子と一緒に、不可思議なポーズを取っているのは、陸斗が連れてきた幽霊の子。

すっごく影が薄い……ううん、強い認識阻害能力を持ってるみたいね。一部以外は気づいてないみたいだし。

「で、あなたが言ってたのって……この子？」

「ああ。ナギのアホに呪いかけられてた。そっちは解いたんだが、別に魔力を抑え込む封印をかけられた。……何とかなるか？」

金髪の女の子……確か、エヴァンジェリンだったかしら？

レミリアやフランドールと同じ吸血鬼……まあ、あの2人は生まれながらに吸血鬼だったのに対し、この子は後天的要因で吸血鬼になったようだけど。

あらあら、気位が高いのはレミリアと同じね。凄い顔で睨んで来てる。

「ヤクモ……とか言ったな。どうなんだ？ 封印は解けるのか？」

「はいはい、ちよつと待っててね……と」

ふうん……ざつと見た感じ、魔力の源に植物の種のようなものが埋め込まれて、それが根を張り、魔力を抑え込んでいるってところかしら。

尤も、特定の場所にいる時にのみ発動する、一種のアンテナのような役割を果たしているだけで、今は効果を發揮していないようだけど。

……結構複雑に絡み合ってるけど、これなら何とかかなりそうね。

「何とかなるわ。けど、私が今解くと厄介な事にならない？」

「と言うと？」

「『誰が解いたのか』とか『封印にいつ気づいた』とか、そういう問題よ」

話を聞く限り、あの麻帆良の学園長（妖怪じやない事に驚いた）が封印を施したらしいけど、私がここで解いちゃったら、向こうにそれが伝わらないかしら？

そうになると、誰が解いたのかって問題に繋がって……陸斗の責任問題にもなりかねない。

もし、私が解いたって事が発覚したら、昔みたいに魔法使い達が幻想郷に攻め込んで来かねない。

「それなら問題無い。俺たち魔法先生は学園長から、『エヴァンジェリンは“千の呪文の男”の登校地獄の呪いで学園に封じ込められている』と説明されてる」

「……………ああ、なるほど」

「そう言う事だ」

エヴァンジェリンは分かっているみたいだけど、それにはちゃんとした意味がある。

つまり魔法先生は、学園長が魔力封印を施した事を知らない。陸斗も実際に診てみるまで知らなかったわけだし。

だから、学園長は「誰が魔力封印を解いたのか」と問いただす事は出来ない。エヴァンジェリン自身に尋ねてようとしても、本人も知らぬ内を仕掛けられていたものを口に出すわけにはいかない。例えば尋ねられても、封印の存在を知らなかったのだから「知らん」の一言で済ます事が出来る。

登校地獄も、「自分で解いた」や「知らない内に自然な形に戻っていた」とでも説明がつく。……………問題無いわね。

「当分の間は、魔力を隠す装飾具でも付ける。……………近い内に、丁度いい機会が来そうだからな」

「へえ……………何かしら？」

にやにやと笑うエヴァンジェリンに、興味半分で話を聞いてみて……………

呆れた。

……………要するに、修行の一環で悪の魔法使いと英雄の息子を戦わせる？ バカなの？ 死ぬの？

「それって余計に修行にならないんじゃない？」

「だろうな。しかし、じじいはそれに気づいていない」

そうして顔を見合わせて、ため息をつく。

エヴァンジェリンは最強クラスの魔法使いで、ネギ少年とは比べものにならない実力の持ち主。

そんな相手と戦って、普通ならネギ少年は圧倒的な力の差を見せつけられて負ける。そうなたら心が折れる。いや、それをバネにして強く成長出来る。どちらかと言えば、そっちの方が修行のためにはなる。

しかし、望まれているのは「英雄の子が悪の魔法使いを倒す」という結末だ。

そうなれば、周囲に「英雄への第一歩」を踏み出したという事がアピール出来る。要するにエヴァンジェリンを、英雄の子を英雄にするためのエサにしたいって事。

……この子をなんだと思ってるのかしらね。

「で、それを把握してるって事は……」

「ああ。じじいの目論み通り、ぼーやを成長させてやるつもりだ」

“悪い” 笑みを浮かべるエヴァンジェリン。

学園長達の計画は、力を取り戻したエヴァンジェリンの慢心と「格下相手に本気を出すか」というプライドにつけ込み、ネギ少年を勝利させる事。

しかし、それはエヴァンジェリン本人の心掛けだけで脆くも崩れ落ちる。「油断せずに全力で」戦えば、ネギ少年の敗北は見えている。

……つまり、ネギ少年を完膚無きまでに叩きのめす。

「停電の際、私の魔力を抑え込んでいる学園結界は消える。その時を狙い、同時に魔力封印も解けたように振る舞う」

「向こうは焦るでしょうね。封印がいつの間にか消えていて、停電が過ぎても吸血鬼は力を持ったままなのだから」

[Side Out]

[Side Leiya]

『そつか、じゃあ上手くやってるのね』

「ええ。ご心配をおかけして申し訳ありません」

電話の相手はイギリスのアーニヤさん。アーニヤさんも順調に頑張っているとのこと。

現在地は学生寮の、自分にあてがわれた部屋。1人には十分な広さです。

これなら認識阻害の結界を張って、魔法関連の道具を置いておくのも可能ですね。相部屋でもありませんでしたし……。

『いって。私も気になってたから。……で、ネギの事だけど』

高揚していた気分が、ぐつと落ち込む。

……正直な話、話題にも挙げたくないんですけどね……。

『ねえ、そんなに酷いの？ 確かにネギはチビでボケだけど、頭はいいのよ』

「……………酷いです。私もこの前、現場に遭遇しましたが……………」

眼鏡をかけた、比較的大人しめの…………長谷川さんでしたっけ？

まあ、どこにでもクラスに溶け込めない人というのはいますが、そういった人は自分から話してくれたりするのを待つものです。

それに長谷川さんは、溶け込むのを望んでいないみたいですし…………それなら無闇に手を出すのは良くないと思いますが…………あのバカが空気読まずに宴会に連れ出して…………挙げ句にくしゃみです。
武装解除

あれで英国紳士がどうか言ってるんですからね。英国紳士を気取る前に、女性の気持ち分かるようになりなさい。

「教師としては…………うまく授業を進められているので及第点だそうですが、行動なども含めてトータルで判断したら、やはり酷いです」
『…………何やってんのよ、アイツは』

電話の向こうで、アーニヤさんがため息をつくのが聞こえた。

一応メルディアナ時代に、私たちも注意したことはありますよ？

でも、効果は極めて薄い。…………同世代の子供に言われても、反発するのが当たり前ですからね…………。

こついう場合、大人が叱るべきなんですが…………不幸にも、英雄の息子を叱れる大人がいませんでしたから。

いくら6年前の事があるからって、見守るだけじゃダメなんです。

『それで、アンタはどうなの？ 手がかり掴めそう？』

「上々です。いい人達と巡り会えました」

風峰先生が紹介してくれた人達にも会ってみたいが……私の事を「英雄の娘」ではなく「レイヤ・スプリングフィールド」個人で接してくれました。

桜咲さんも穏やかそうな人ですし、龍宮さんは……「報酬次第ではどんな仕事も請け負う」って言うてましたね。初回サービスで安くしてくれるみたいですし、何かしらの情報でも調べてもらいましょうか？

後、なんと言つても……風峰先生とエヴァンジェリンさんの協力を取り付けられたのが何よりです。

『エヴァンジェリンって……それ、悪の大魔法使いじゃない！“

闇の福音”とか“不死の魔法使い”とか呼ばれてる』

「ええ。他にも“ドールマスター人形使い”、“おとずれ悪しき音信”、“禍音の使徒”のエヴァンジェリンさんです」

さすがにアーニヤさんは知ってましたね。

裏の世界でもトップクラスの大悪党で、取り消されたとはいえ60万ドルの賞金首ですから、知らない方がおかしいです。……何でネギは知らないんでしょうか、これ魔法使いの一般常識なのに。

『“千の呪文の男”に倒されたっていう大悪党でしょ！？ そんな人の協力って……』

「うちのバカ父にアホな呪いかけられて、もう15年も学生生活送ってました。あと、私の血が代価ですから大丈夫です」

『血って……このバカ!!』

思いつきり怒鳴られました。……うつ、耳がきーんとする……。

『アンタ、自分の身体の事忘れたの！？ 血なんて抜かれたら、ほんと命にも関わるのよ！？』

この勢いだと……ここにアーニヤさんいたら、問答無用で殴られますね。

「大丈夫ですよ。エヴァンジェリンさんに事情を話したら、吸血もなるべく控えると言ってくれました。増血剤も飲んでますし」

『だからって………』

「私はまだ、死にません」

少しだけ強く、言い放つ。

………そう、私はまだ死ねない。村の人達を石像から解き放つ、その時まで。

私たちを守ってくれた、あの人達を助けるまでは。

『………勝手にしなさい』

プツッ、と通話が切れた。

……怒らせてしまいましたね。後で謝罪しないと……。

[Side Out]

「Side Sayo」

「せーのっ……ばらっんっ!!」

「そうよ、うまく出来たわね」

ぱちぱち、と幽々子さんが拍手してくれる。

……最初は明らかにおかしいな～と思ったんですが、どうやら効果あつたようです。

私に気づかなかった人達が、普通に驚いた顔で私の事見てくれてましたし……。

「それにしても驚いたわね、陸斗が幻想郷に他の子連れて帰ってくるなんてね」

「そ、そうなんですか？」

「ええ。長い付き合いだけど、あの子って人見知り……というより、基本人間嫌いなものよ」

そうなんですか……意外です。でも、そんな人が何で先生やってるんでしょう？

……あれ？ 長い付き合い？

幽々子さんって確か、何百年も亡霊やってるって聞きましたけど……

……その幽々子さんの言う「長い付き合い」？

「あの……風峰先生って、何歳なんですか？」

「うーん……確か幕府が乱れた頃だから……ざっと数えて5、600年かしらね」

ぶ、5600年！？

そんなに長く生きられる人間なんているんですか！？ それって凄
いと思うんですが……。

あれ？ どうして幽々子さん、そんな呆れた顔してるんです？

「……いや、陸斗は人間じゃなくて妖怪よ？　かなり特殊な部類に入るけど」

「え、 えええええええええええええええええええええ
えええええ!!??」

「あら、知らなかったの？」

ええ、初めて知りました。

でも、そう考えてみると、納得のいく部分が出てくるといいますか
.....。

あ、羽生やした記者っぽい人にバックドロップかましてる。

「10年前にね、麻帆良に行ったつきり帰ってこなくなつて……里帰りは10年ぶりのよ」

そういえば、神楽坂さんも風峰先生の関係者みたいですけど、何か関係があるのかな？

10年前って言うたら、神楽坂さんが麻帆良に來た時期ですし。

「おかげで、あの子もずつと機嫌悪いし、放っておいたら幻想郷飛び出して行きそうだったのよね」

「あの子？」

「あ、ううん。こっちの話よ」

慌てて繕う幽々子さん。……怪しい。

「ま、何はともあれ……あの子の事、よろしくね？」

「……はい！」

第15話：誇り高き悪（前書き）

吸血鬼編突入です。

ネギ少年の珍道中をお楽しみください（笑）。

第15話：誇り高き悪

「Side Rikuto」

「じじいが『ネギ君と戦ってくれんかの?』と言ってきた」

「……あゝ、やっぱり来たか」

新学期を迎えるちょっと前、エヴァに呼び出されたので来てみたら……こう切り出された。予想していた通り、「ネギ君の血を吸えば、呪いが解けるかもしれんの」とも言っていたそうだ。

「血を吸ったって意味ないだろうに。ナギの血は半分だけなんだから」

「ああ。レイヤの血を吸ってみて分かった」

まあ、レイヤはアリカの血の方が強いらしいし、参考にはならないかもだけど。

しかし、ネギ坊主の血を吸って呪いが解けるかどうかと言われたら、答えはNoだ。血を吸うならやはり、本人でなければならぬ。^{ナギ}

「それでどうするんだ? 別に無視してもいいんだろう?」

「いや、じじい共の目論みに乗ってやる。幸い、いくつか“強制証文”を書かせた」

なるほどな。

ああ、強制証文ってのは、書いた内容を遵守させる魔法具の一種だ。

「それでちょっと、生徒にちょっとばかり細工する事になるが……」

……」

「おいおい、関係ないヤツに迷惑かけるなよ」

「大丈夫だ。ちょっとした幻術をかけるだけだ」

なるほど、そっち方面か。

そりゃあ推奨したいものじゃないが………はあ。

「……じゃあ、最初の方は弱いフリしとけ。ネギ坊主にも学園側にも「力が封じられてる」って事をアピールしたい方が事を進めやすい」

「そうだな……魔法薬を用意しておこう。レイヤにも手伝わせるか」

そういえばレイヤ、魔法薬やそれ関連に特化してるんだっけな。……俺も今度、調合してもらおうかな。よく効く胃薬でも。

「そうだ、忘れるところだった。陸斗、あの北山とかいう魔法先生は何なんだ？」

「北山？」

ああ、新入りの事か。学園長によると、天才クラスの実力者だとか。確かに妙な視線で見られたんだが……まさか、同性愛者か？

「いきなり私のところへ来て、『呪い解いてやるから俺の物になれ』とか言ってきたぞ。バカか、あれは」

「………なんだ、それ」

「知るか。近くにいた連中にそれを聞かれて、気味悪がられていたからいい気味だ」

[Side Out]

〔Side Asuna〕

ネギにデリカシーが無いのは分かってたけどね……もうちょい考えて発言した方がいいと思うな。

自分が教室の中にいるのに「脱いでください」は無いでしょ。まあ、子供だから仕方ないのかもだけど。

……けど、ネギの発言と同時に、陸斗の額に青筋が浮かんたのは……気のせいだと思いたい、うん。

「あれ？ 今日まきちゃんは？」

「……………さあ？」

「まき絵は今日身体計測アルから、ズル休みしたと違うか？」

あはは……まあ、否定できないけど。

まきちゃんは、スレンダーな体つきだから。……というより、普通に中学生の体型だと思うんだけど。このクラスが規格外なだけで。

「まき絵、胸ぺったんこだからね」

風香ちゃん、あんたに言われたくないと思うわよ。

妹の方が分かってるみたいよ。すっごく悲しい顔してるし。

「ねえねえ、ところでさ。最近寮で流行ってる……あのウワサ、どう思う？」

あのウワサ？ それって何よ。

「ああ、あの『桜通りの吸血鬼』ね」

「えゝ何！？ 何ソレゝ！？」

「何の話や？」

吸血鬼って言うと……もしかして、エヴァちゃん？

いやでも……まさかね。

「何かねゝ、満月の夜になると出るんだって。寮の桜並木に……真つ黒なボロ布に包まれた……血まみれの吸血鬼が……！」

「き、キャゝゝゝゝゝ！！！！？？」

柿崎、無駄に怖いのはいらなから。双子ちゃんが恐がりなの知ってるでしょ？

「まきちゃん、その謎の吸血生物にやられちゃったんじゃないかな？」

「た、確かにまきちゃん美味しそやけど」

いや、吸血生物じゃなくて吸血鬼だから。

それだったらチュパブラじゃない。まったくの別物よ。

『先生！ 先生、大変や！ まき絵が…… まき絵が！』

結論、まきちゃんは桜通りで発見されたい。運び込まれた保健室で、幸せそうに眠っていた。

でも、ほんの僅かに魔法の痕跡を残っていて、ネギもそれを見抜いたらしい。

……ん……なんか気になるな……。

[Side Out]

[Side Eva]

さて、仕込みも上々。佐々木まき絵に残した痕跡に、ぼーやも気づいただろう。

ウワサに痕跡……おそらくこれで今夜、見回りに出てくるはずだ。

「マスター、前方に人影です。……同じクラスの宮崎のどかさんだと思われます」

「ちょうどいい。茶々丸、お前は予定地点に隠れて待機しておけ」
「はい」

茶々丸が飛んでいったのを確認し、私は右人差し指の指輪に軽く触れる。

幻想郷から帰ってきて用意した、魔力封印の指輪。……限定率を自分で設定する事が出来る優れものだ。

今の私は「封印された魔法使い」だからな。あくまで最低限の魔力を……と。

「さて、行くか」

ぱさつと飛び上がり、電灯の上へと降りる。

……ふと、宮崎がこちらを向き、露骨に怯えた表情になる。

「ひ……キヤアアアアアッ！」

さあ、お膳立てはしたぞ。出てこい、ぼーや。

「待てーっ!!」

ふふ、予想通りだ。

おっと、宮崎が気絶したか。まあ、こっちの方が都合だが。

「ラス・テル マ・スキル マギステル……風の精霊11人、縛鎖となりて敵を捕まえろ『魔法の射手・戒めの風矢』!!!」

「『氷楯』……」

魔法薬をビンごと投げ、氷の楯を展開する。

あくまでも魔法薬を触媒としているので、直接的な防御力は高くないが、拘束用の魔法の射手程度なら防ぎきれぬ。

案の定、甲高い音を立てて全ての矢が相殺された。

……しかし、夜中とはいえ杖で飛んでくるのはどうかと思うぞ。私もあまり人の事は言えぬが。

「僕の呪文を全部跳ね返した!？」

「……ほう、やるじゃないか」

発生した強風で帽子が吹き飛ぶ。……まあ、構わぬ。自分で外すつもりだったからな。

ぼーやは私の顔を見て……やはり驚いていた。

「き、君はウチのクラスの……エヴァンジェリンさん!？」

「フフ……新学期に入った事だし、改めて歓迎のご挨拶と行こうか」

ただし、私の歓迎方法は些か荒っぽいかな。

ま、いわゆる通過儀礼というやつだ。悪く思ふな。

「な、何者なんですかあなたはっ！ 僕と同じ魔法使いのくせに、何故こんな事を!？」

……おい、魔法使いのくせに私の顔を知らんのか。それはそれで結構シヨックなんだが……いや、それはまあいい。

「この世には……いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ。……
『氷結・武装解除』！」

今度は2種類の魔法薬を投げ、わざと混じらせる。

対象の武装を凍らせて粉碎する武装解除魔法……だが、今のぼーやでも充分に抵抗^{レジスト}出来るレベルだ。

案の定、手をかざして防御……なあ、片手に宮崎抱えてるの分かってるか？ 思いっきり脱げてるぞ。

「み、宮崎さん大丈夫……ってわあっ！？」

おいおい、今気づいたのか。

「何や今の音！？」

「……あつ、ネギ！？」

チツ、他の奴らが集まってきたか。

声からして……近衛木乃香と神楽坂明日菜。神楽坂明日菜はともかく、近衛木乃香に姿を見られると厄介だな。予定通り、場所を移させてもらおうという。

「ね、ネギ君が吸血鬼やったんか……！？」

「ち、違います、誤解です……！」

……何をやってるんだ、アイツらは。
まあいい。今の内に行こう。

「あつ、待て！」

待てと言われて待つバカはいないよ、ぼーや。

しかし……ヤツの頭はどう捉えているかな。「いい魔法使い」と「悪い魔法使い」に対して。

……ま、どうせ「世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろ」とでも、むくれてるんだろうがな。

「いた！」

む、意外に早いな。

そういえば、ぼーやは風系が得意だったか。

前方の手すりに手をかけ、勢いを付けて飛び立つ。やはりぼーやも杖に乗って追ってくる……。

「待ちなさーい！ エヴァンジェリンさん、どうしてこんな事するんですかー！ 先生としても許しませんよー！！」

別に許さなくてもいい。それに貴様は単なる教育実習生だろうが。

「はっ！ 知りたければ私を捕まえてみるんだな！」

「ラス・テル マ・スキル マギステル 風精召喚！ 剣を執る戦友！ー！」

分身……いや、違う。精霊召喚か。

この詠唱からするに、風の中位精霊による複製。なるほど、見習いにしては中々……。

「捕まえてー！！」

ここで全て避けるのは難しくないが……敢えて魔法薬を投擲する。ちなみに、これは全てレイヤが調合してくれたものだ。思った以上

に効力が強い気がするが……気のせいかな？

薬が爆発する度に複製が消えてゆくが、その内の1体が私のすぐ側で爆散し、一瞬隙が生まれる。……ま、わざと隙を作ったんだが。ここを突けないようなら落第だぞ、ぼーや。

「これで終わりです！ 『風花・武装解除』……！」

ぼーやの武装解除呪文が私に炸裂し、マントが全てコウモリへ戻って飛び去っていく。

そしてそのまま、校舎の屋根上へと降り立つ。……ここまでは計画通りだ。

「ぼ、僕の勝ちです。さあ、何でこんな事をしていたのか教えてもらいますよ」

「……ふつ、その勝ち誇った顔、生き写しだな。……貴様の父“ウザンドマスター千^サの呪文の男”に」

ちよつとからかう程度にナギの名を出してみたが、効果観面だった。

「な、何故あなたが父さんの名前を……」

「昔ちよつとな。どんなヤツだったか知りたいか？ ふふふ……」

「と、とにかく！ 魔力も無く、マントも触媒も無いあなたに勝ち目は無いですよ！ 素直に……」

そう言いかけた時、私の背後に茶々丸が降り立つ。

誰かは分かっているが、ぼーやの緊張感が明らかに増した。

「それで勝ったつもりか？ さあ、お前の得意な呪文を唱えてみる」「っ！？ ラス・テル マ・スキル マギステル……風の精霊11人、縛鎖となりて敵を捕まえろ……」

後方支援型の魔法使いの弱点として、呪文詠唱の際の隙がある。
熟練した使い手ならば、敵の攻撃を捌きながら詠唱出来るが、大抵
の魔法使いは立ち止まって詠唱する。

……ま、ぼーやは言わずもがな、敵の眼前であるにも関わらず、こ
丁寧に立ち止まって詠唱を始めている。
茶々丸、やれ。

びしっ

「サギ……あたっ！？　って、君はウチのクラスの！？」

ようやく茶々丸に気づいたか。まあいい。

「紹介しよう、私のパートナー。3-A出席番号10番“魔法使い^{ミギスナ}
の従者”絡繰茶々丸だ」

「えっ、なっ……ちゃ、茶々丸さんがあなたのパートナー！？」

ふふふ、驚け驚け。もつと驚け。

現代では恋人探しの口実とされているが、本来“魔法使いの従者”
は魔法使いの詠唱の際の隙を守るための存在だ。

「つまり……パートナーのいないぼーやでは、勝ち目は無いという
事だ」

「そ、そんなあああああああ！？」

まあ、例えパートナーがいたとしても、勝ち目は無いがな。

おっと、忘れるところだった。茶々丸、ぼーやをちよつと抑えてろ。

「う、うぐぐぐ………」

「他愛ないな。ヤツの息子とはいえ、所詮は見習いのガキか」

……こんなガキに多くを期待するじじい共は、いったい何を考えるんだか。

「あ、あなたは……父さんを知ってるんですか……？」

「ああ、知ってるよ。15年前、私に世にもバカげた呪いをかけてくれてな。そのおかげで15年間ずっと学生生活だ」

「え……………」

なんだ？ 英雄はそんな事しないとも思っていたのか？

英雄と言っても所詮は戦争の英雄……人殺しだよ。

（さて、ここからどうするか……………）

今回の目的は、ぼーやにある程度の恐怖を刻み込む事。

この辺りはじじいも想定しているだろうが、ここで潰れてくれるなら楽でいい。

……別に血はいらんし、今日はこのくらいにして撤退するか。

「コラ——ッ！！——この変質者ども——っ！！」
「ん？」

何か走って来る。しかもかなり速い。

「子供相手に何してんのよ——ッ！！」

「あ」

「はぶうつ！？」

茶々丸共々蹴られた。そして顔から滑った。

……って、ちょっと待て！ 弱いとはいえ、念のために障壁張っている。それを素通りだと！？ いったい何者だ……って。

「か、神楽坂明日菜！？」

「ん……？ あ、え、エヴァちゃん！？」

な、何故こいつが……いたな、さっき。

いや、そうではなく……待てよ、陸斗は以前「狙われる要因がある」とか言っていたな。

私の障壁を素通りした。破壊ではなく素通り……もしや、魔法無効化か？

“ ちょっとエヴァちゃん！ これどういう事よ！？”

む、念話か。確かに直接声に出せば、ぼーやにも伝わる。それより、陸斗から何も聞いていないのか？ まあ大方、言い忘れたんだろうが……。

“ 一言で言うなら「じじいの悪巧み」だ”

“ ……あゝ、納得したくないけど納得出来ちゃうんだけど”

“ 詳しい事は陸斗かレイヤにでも聞け。私はそろそろ帰る”

さあ、そろそろ退かせてもらう事にしよう。

悪の大魔法使いらしく、華麗にな！

「ふふふ……今日はこのくらいにしておこう。また生徒を襲われたくなければ、タカミチや学園長に助けを求めようなどとは考えない事だな」

そう言い残すと、茶々丸と共に屋根から飛び降りる。

これで明日が楽しみだな。ぼーやがどんな行動に出るか……ふふふ。

「マスター、後ろに手すりが……」

「あぶつ!？」

あ、頭が……!

くっ、これも全部、私に面倒事をやらせようとするじじい共の所為だ。

この15年間、溜まりに溜まった鬱憤は全て、ぼーやにぶつけさせてもらうからな! 覚悟しておけ!!

第16話：淫獣の欲望

〔Side Rikuto〕

明日の授業の準備をしていると、“桜通りの吸血鬼”について聞きたいとアスナから電話がかかってきた。そういえば、今日辺りネギ坊主が出張って来そうだとか言ってたな。と言うことは、アスナも遭遇したのか。黙っておくと後で煩いし、事情を説明したんだが……。

『……ねえ、本気でバカでしょ？ ネギがエヴァちゃんに勝てるはずないじゃん』

「だよな。俺も頭を抱えていた」

計画だと、年に2回のメンテナンスに乗じて行動を起こし、ネギ坊主を完膚無きまでに叩き潰す。

学園長達はおそらく、「エヴァなら格下相手に本気を出さず、ネギ君に合わせしてくれるじゃろ」とでも思ってるはずだ。確かにそれだったら、停電復旧の際に魔力が再び封印され、ネギ坊主が勝つかもしれない。危なくなったら無理矢理復旧させる可能性だってある。しかし、それは以前までのエヴァならの話だ。現在のエヴァは完全に呪いと封印から解放放たれているため、学園結界だろうが何だろうが関係ない。

「それで、ネギ坊主はどうなんだ？」

『大変だったわよ。泣くわ喚くわ……よほどショックだったんでしようね』

「あゝ、なるほどな」

これまで、麻帆良でネギ坊主がやってきた事は主に、教師としての領域。

だけど、今回エヴァと戦った事は……ネギ坊主にとって専門である、魔法使いとしての領域。

首席卒業って聞いているし、やっぱり魔法使いとしては自信があつたんだろう。だが、それで完全に遅れを取ったのだから、自信が粉碎された……か。

『今、泣き疲れて寝付いちゃったから、教員寮連れてくの難しいんだけど』

「そうか。悪いけど、今日だけそっちの部屋で面倒見てくれるか？」

『……しょうがないわね』

ほんと悪いと思ってる。アスナが子供嫌いなのは分かってるけどさ。

『あ、そうそう。さよちゃんから聞いたけど、幻想郷に里帰りしたんだって？』

「ああ。お前も行きたかったか？」

『うつん、私はいいんだけど……それで、あの人にも会ってきたの？』

……あ。

やべ、完全に忘れてた。

「……」

『ねえ、まさか忘れてたわけ？』

「……うつん」

手紙でやり取りしてるとはいえ、もう10年近く顔合わせてない。……これだとナギの事笑えない。

もし、誰かの口からアイツに「幻想郷に来ていた」事が伝わったら、
こっちに飛んで来かねない。

……そうなる前に、紫に釘を刺しておこう。うん。

[Side Out]

[Side Leiya]

「おはようございます、皆さん」

「おはよう、レイヤちゃん」

「おはよ」

私が3 - Aに通い始めて2日目……元々、クラスの皆さんとは春休み中に接していたので、割合早くに溶け込みました。

この「無駄なほどハイテンション」なのは、風峰先生がうまくコン

トロールしていますし……問題ありません。

あのバカネギも、思っていたよりもうまく授業を進めているようですし、これは評価を改める必要があるかもしれません。……それでも昨日のデリカシーの無さはあり得ませんが。

「みんな、おはよう」

「あ、ネギ君、アスナ」

……あの、何でそのバカを肩担ぎにしているわけですか？
なんか凄く嫌がってるように見えるんですが。

「あ、エヴァンジェリンさんがいない……」

それでどうしてエヴァさんがいない事に喜んでるんですか。教師としては最低ですよ。

まあ、エヴァさんはどうせ、いつものようにサボタージュなんですよ。うけど。

“アスナさん、何かあったんですか？”

“エヴァちゃんに負けたのよ。それでずっと行きたくないって言うてるの。”

ああ、そう言えばそんな事言っていましたっけ。

ま、首席卒業だからって天狗になってましたし、いい薬です。どうも魔法に頼りすぎるくらいがありますから。

……で、授業中もずっと上の空で……挙げ句の果て、亜子さんに「10歳の子供をパートナーに選ぶのは嫌ですよね」って……ちゃんと授業してください。

そもそも、魔法使いの従者を一般人から選ぶ事の意味について、ちゃんと分かっているのでしょうか？

メルディアナの授業でもやりましたが、魔法使いを守る存在……つまり、必然的に危険な目に遇う事が多くなるわけです。

例えば、刹那さんや龍宮さんのような関係者ならともかく、魔法のまの字も知らないような一般人から選ぶなんてあり得ません

(……そういえば、おかしいですね)

魔法生徒も多数在籍し、アスナさんや木乃香さんのような“特例”も存在する。おまけに各方面に特化した才能の持ち主もちらほら……。

まるで、意図的に一箇所に集めたようにも思えます。監視のためでしょうか？

……まさか、英雄の子供のパートナーにするため、とか？ いやいや、まさか……。

(……否定しきれないのが1番怖いですね……)

後で風峰先生に聞いてみましょう。……地雷原に踏み出す気分なのが否めませんが。

そんなわけで放課後なんです……いませんね。どこ行ったんですよ。

「レイヤ」

「あら、エヴァさん。どうしたんですか？」

怠そうな顔でこちらへエヴァさんが歩いてきました。茶々丸さんも一緒です。

しかし……何かあったんでしょうか？

「仕事だ」

「仕事……ですか？　ですが、呪いは……」

「……表向きにちゃんとしていないと怪しまれる。面倒な事にな」

まあ、次の満月までの辛抱じゃないですか。

ちょうどメンテナンスの日に重なりますし、その日に行動を起こす
んでしょう？

「それで、何かが結界を越えて学園都市に入り込んだらしい」

「結界を？」

世界樹を中心として、麻帆良全域に張り巡らされた“学園結界”。

麻帆良を外敵から守る役目と同時に、麻帆良の住民に強力な認識阻
害効果を施している。

もちろん、普通に入り込む事は可能ですが、その場合に許可の無い
者が入り込めば結界に反応し、学園側にキャッチされる。それが警
備員や魔法先生に伝わって……というわけです。

「ああ。それほど大きくない。せいぜい、フェレット程度の大きさ
だが」

ふむ……フェレットぐらいの大きさの魔法生物……ケット・シーや
オコジョ妖精ですかね。

……あれ？　オコジョ妖精？　何か凄く嫌な予感がしたんですが
……。

「レイヤ、どうかしたか？」

「……いえ、さすがに気のせいだとは思っていますが……」
「はあ？」

ええ、そんなはずありません。
あの淫獣はすっかり呪いをかけて引き渡しましたし、こんなところへ来るはずがない。

……まあ、念のために後でネカネさん辺りに問い合わせておきましようかね。

[Side Out]

[Side ???]

よし……どうにか潜りこめたぜ。

船に揺られて数日……やっとネギの兄貴がいる麻帆良へとやってきた。

……しかし、あれはほんとに参った。

『…………汚らしい淫獣が』

あの氷点下の目で見られて……マジで死ぬかと思ったな。
おまけに変な呪いかけられるし、俺っちが何したって言うんだよ。
解呪するのに苦労したぜ、まったく。

「さつてと……兄貴はどこにいるのかな？」

むむ？ あつちは……風呂場か？

おお！ 兄貴だけじゃねえ、これは凄い！ これだけいるなら、兄
貴のパートナーもよりどりみどりじゃねえか！！

むふふふ……兄貴にうまく言って仮契約させれば、晴れて俺っちも
無罪放免！

さ、頑張るぞー！

[Side Out]

「Side Asuna」

……何だったのかしらね、さっきの。

ネギがいきなりいなくなるし、何かと思ったらお風呂が騒がしいし、変なネズミは出るし……。

「でも、おかげで元気が出ました」

「……あつそ」

ま、あのまま登校拒否されたらこっちが困るし……由としよう。
それで、教員寮のネギの部屋にまで送ってきたわけだけど……。

「景気悪そうな顔してるじゃんか、大将。助けがいるかい？」

「え？」

「だ、誰!？」

今の声……少なくとも他の先生じゃないわね。
近くにはそれっぽい人はいないし……誰？

「下だよ、下!」

「……あ」

「俺っちだよ、ネギの兄貴。アルベール・カモミール！ 久しぶりさ」

と、さっきのネズミ……じゃなくて、オコジヨが水着を加えて立っていた。

もしかしてコイツ、オコジヨ妖精？ 何でこんなところにいるのよ。

「あゝ！ カモ君!？」

「へへっ、恩を返しに来たぜ、兄貴」

兄貴って……どんな関係なのよ。この2人。
そう尋ねると、カモとか呼ばれたオコジヨ妖精が「運命の出会い」
とやらを話してくれた。

曰く、罨にはまって動けなかったところをネギに助けられ、それ以来「兄貴」と呼んで慕っているのだとか。

「ところで兄貴、ちつとも進んでねえみたいじゃないですか」

「え、何が？」

「パートナー選びっすよ、パートナー選び！ いいパートナー探さないと、“立派な魔法使い”になるにもカッコがつかないでしょ！？」

ちよつと、コイツもネギと同じ考えなわけ？

だいたい一般人を危ない世界に関わらせるなんて、それ教師としてはどうなのよ。

「……………なるほど、それが目的ですか」

と、そのすつごく冷たい声が部屋の中に響いた。……………いや、いつもと同じ声なんだけど、氷点下っていうか凄く寒いつていうか。

振り向くと、そこには私のよく知る……………アリカ姉様によく似た女の子が1人……………。

「れ、レイヤ・スプリングフィールド！？ 何でここにい！？」

「……………お久しぶりですね、アルペール・カモミール淫獣。気になるのですが、何故あなたがここにいますか？」

ああ、レイヤも顔見知りなのは当たり前よね。

ネギと兄妹である以上、出身は同じなんだし。

「そ、そりゃあ兄貴の姉さんに頼まれて助っ人に来たんですよ」
「嘘ですね」

うん、それは私も分かった。
だって……明らかに怪しい。レイヤが来た瞬間、視線も泳いでる上に冷や汗ダラダラ流してるし。

「れ、レイヤ。カモ君に対して酷いよ」
「黙ってなさい。……脱走してきた下着泥棒に対して優しくする義理はありませんが？」

……は？ 下着泥棒？ 脱走してきた？
何ソレ。ネギのお姉さんに頼まれて助っ人しに来たんじゃないの？

「しょ、証拠はあのかよ！ 俺っちはそんな事は……」
「……下着泥棒2千枚、忘れたとは言わせませんよ」

ぴっ

カモが凍り付いたので、レイヤが取り出した手紙を覗き込んでみると……ああ、確かに。

ようするに、悪い事して逃げてきたわけ？
さすがのネギも底いきれないのか、疑いの視線をカモに向けている。

「カモ君……」
「ち、違っんです！ 俺っちには病弱な妹がいて……」
「事情は向こうで話してください。さ、強制送還です」

カモがレイヤに掴まれて、連れて行かれようとしている。

そこに、空気を読まずにネギが待ったをかけた。

「待つて！ た、確かにカモ君のした事は悪い事だけど……ぼ、僕が学園長先生に話して何とかするから……だからカモ君を連れてかないで！」

「……………それ、言ってる意味分かってます？ このオコジヨが何かしらの問題行動を起こした場合、あなたも連帯責任ですよ」
「う、うん！」

レイヤはしばらくネギの方を見ていたけど、突然ため息をつく。
もう、「何でもお人好しなんだか」と言っているように聞こえた。
……………仕方ないと思うけどね、ガキだし。

「……………勝手にしてください。私は知りません」

そう言つて、カモをネギの方へと投げた。

……………絶対何か起こしそうよね、このオコジヨ。お願いだから巻き込まないで欲しいんだけど……………。

[Side Out]

「Side Rikuto」

「まったく！ 学園長は何を考えているんだ！」

「ガンドルフィーニ……飲み過ぎだ。それにお前、酒強くないだろ？」

「大丈夫です！ もう一杯！」

「……ダメだこりゃ。」

瀬流彦も明石教授も苦笑いしてるよ。これ、俺が家まで運ばないとならないんだろな。

ちなみにここは学園都市のとあるバー。魔法先生御用達で、店の関係者も裏の人間なのでオープンで会話している。

「まあ、学園長の独断専行は今に始まった事じゃないけどな」

「今回の事は、僕もどうかと思いますよ」

2時間ほど前に行われた魔法先生だけの会議。

どうやらそこで、「ネギ君とエヴァンジェリンの問題には一切の関与を禁止する」と言われたらしく、相当揉めたとか。

俺？ 出てないぞ。めんどいし。内容もだいたい想像出来てたし。

……どうも、古矢が今回の件に絡んでるらしく、何かと賛成派を煽っていたらしい。

「いくらネギ君に才能があると言って、いきなり“闇の福音”と戦

わせるのはどうかと思うけどね」

苦笑しつつ、明石教授がそう言う。

ちなみにこの人は、式集院先生と同じくネギ坊主の教師就任に「消極的反対」の意志を示していた。

「それで風峰君、ネギ君の様子は？」

「……登校拒否したのを無理矢理引っ張ってきたそうです。授業中も上の空でした」

「……………」

瀬流彦と教授が顔を見合わせ、ため息をつく。
いや、普通こうなるって分かってるよな？

「いくら何でも危険すぎる！ 学園長は、ネギ君を潰すつもりなのか！？」

「……勝って欲しいんだよ。『英雄の息子が悪の魔法使いを倒した』っていう筋書き通りに」

「それは……………」

黙り込む3人。ガンドルフィーニでさえこれだ。

正義感が強いとはいえ、決してバカではない。そうなった場合どうなるか、想像するのは容易だ。

そうなれば、ネギ坊主は英雄への第一歩を歩むと同時に、歪んだ正義を受け入れる事になる。悪い意味で成長するのは目に見えている。

「ああそうそう。俺、エヴァの方に付くから」

「「ええっ!？」」

「か、風峰さん！ 何を考えてるんですか!!」

何考えてるって……そりゃあ、学園長や古矢の思惑に乗るのが嫌だから？

「いえ、そうではなく……英雄のあなたが、“闇の福音”に手を貸すなど……」

「俺は英雄じゃない」

そう言うと、ガンドルフィーニも黙り込む。

英雄って言っても、所詮は人殺し。……ネギ坊主がその辺り分かってるか疑問だが。

「日常で人を殺せば犯罪だが、戦争で人を殺せば英雄になる」とはよく言ったものだ。

「それに、前に言っただろ？ エヴァは確かに悪だが、最高の……誇り高き悪だ」

「……」
「仲良くなれとは言わんさ。アイツもその辺りは分かってる」

悪の対義語は正義じゃない。悪の対義語は善。

……正義に踊らされるな。正義に対義語などない、と。
前に……暴走しそうな気のあった魔法先生を集め、その話をした。全員驚いたような顔してたが……どう届いたかは分らんがな。

「……“闇の福音”とは、相容れません」

「……」
「ですが、3-Aのエヴァンジェリンという女生徒には……まだ、何とも言えません」

そう言い、再びグラスの酒を一気に飲み干すガンドルフィーニ。
素直じゃないねえ……やれやれ。

第17話：明日は荒れ模様になるでしょう

「Side Other」

ここで少し、転生者について解説しておこう。

これは主に、「前世の記憶を持ったまま生まれてくる者達」の事を指す。つまり、生まれ方こそ特殊ではあるが、風峰陸斗も転生者である。

中には、前世の記憶を封印されて生まれてくる者達もいて、そういった場合は「何かしらの違和感」を覚える事が多々あるという。

かつて、封印から逃れた“女神”は、包囲網が敷かれる前に「魔法先生ネギま！」の世界へと降り立った。

基本、彼女たちのような存在は完全な“規格外”なため、そのまゝの状態では作品世界に対して、何かしら直接的な影響を与える事が出来ない。封鎖領域が展開されれば尚更だ。

そのため、運命科の者達も陸斗や玲夜を“転生者”として送り込む他なかったし、“女神”としても世界の変わる様を眺めるためには、他の世界から転生者を引っ張ってくるしかない。

以前のように「生きていても世界に影響を与えない」者達を選別し、無差別な死因で殺した後、魂を呼び寄せ、こう言った。

『あなた達に転生するチャンスをおあげる』

あらゆるチート能力を与えた上で、彼らをバラバラの時間軸で転生させた。

しかし、その大半は己の夢を叶える事無く死んでいった。転生者同士のつぶし合いや、生まれた環境に適合できなかった事によって。

そんな様子を、“女神”は齒痒く見ていた。

——何故だ。昔はもっとすんなりと世界が壊れていったのに。

しかし、そうなるのはある意味当たり前だった。

転生者の大半は「原作知識」を持っていたり、かつての転生者よりもずっと独占欲が強かったりなど、余計な要素を含んでいた。それ故に、足の引っ張り合いや殺し合いが行われていたのだ。

そこで彼女は、ある禁じ手を取る事にした。

自分自身を“転生”させるという禁じ手を行い、自分の持っていた力のほとんどを失う形で「ネギまの世界」の住民となった。

1度住民になってしまえば、直接的に手を下す事が可能となる。本来持っていた力はほとんど無くなったが、それでもこの世界においては限りない上位種といえる。

——この世界を壊してさえしまえば、再び元の存在に戻る事が出来る。

そう高をくくり、彼女は自分の手で世界を壊す事にした。

……しかし20年前、“完全なる世界”が“紅き翼”に敗れた事により、それは敵わなかった。

彼女自身が“空に坐す者”風峰陸斗に敗れ、完全に消え失せた事によって……。

さて、話を現代に戻そう。

ここは麻帆良。女子中等部の制服を着たとある女子生徒を、2つの影がそれぞれ尾行していた。

1つは言わずもがな、子供先生ネギ・スプリングフィールド。その肩にはオコジョ妖精のアルベール・カモミールの姿もある。

そしてもう1つ。新任の魔法先生、北山史郎だ。彼は“千里眼”を使い、ネギよりも若干離れた地点からその様子を観察していた。

彼が女子生徒……絡繰茶々丸と、それを尾行するネギを観察する理由。それは……。

（よし、薬味が茶々丸に魔法の矢を撃ったところを、俺が救出！それで茶々丸のハートは俺のものさ！）

という、わかりやすい欲望のためである。

エヴァに一蹴された挙げ句、3 - Aの女子生徒達からは「キモイ」「うざい」などの評価を得ているため、この辺で1人くらいは攻略

しておきたいと思っているのだ。

そのため、ネギが茶々丸に襲いかかるその時を待っているのだ。

（猫に餌をやった……そろそろのはずだな）

と、カモが何やらネギに囁いており、杖をぐつと握りしめている。

北山がそろそろ出番だ……と思っていたその時だった。

びんぽんぽんぽん

『中等部実習生のネギ・スプリングフィールド君。3-A担任の風峰先生がカンカンです。風峰先生が怖いので、出来るだけ早く中等部職員室まで来てください！ お願いします！』

その放送に、ネギは青ざめて震えだし、慌てて学校の方へと戻っていった。

突然の事に北山も目を見開き、何が起こったのかを考え始める。

（ど、どういう事だ……原作だと、ここで茶々丸襲撃イベントがあったはずだろ？ いや、そもそもこんな放送無かったし、風峰だっ
ていなかった。……どうなってるんだ！？）

混乱する北山だが、これには裏があった。

……事の発端は、カモの「仮契約して茶々丸をボコツちまおう」という提案をアスナが却下した事からである。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

「はあ？ ネギ坊主が茶々丸を狙ってる？」

ある日の放課後、アスナからそれを聞いて……首をかしげた。

「そうなのよ。……聞いてない？ カモってオコジヨ妖精がネギのペットになったって話」

「ああ。学園長からそんな話があったっけな」

言われてみると、ネギ坊主の肩に見慣れないオコジヨがいたが……。

「そいつがネギに『主人と離れた隙を突いてボコツちまおうぜ』って言い出したのよ」

なるほど、各個撃破ってわけか。

……しかし、明らかに前衛タイプの茶々丸を、ネギ坊主1人で倒せ

るのかっていうのは疑問なんだが。

「それで、私に仮契約持ちかけてきたのよ」

「……………ほう」

よし、あのオコジョは。そう。それがいい。

きっとタカミチも同意してくれるはずだ。よりによってアスナには…………。

「あ、もちろん断ったから。…………でも、ネギ相当追い詰められてたし…………もしかしたら力モに唆されて茶々丸さん襲ったりするかも…………」

「…………なるほど」

まず、戦闘者としての意見を言わせてもらうなら…………その案はアリだな。

戦力を分断させて撃破するってのは戦略の基本だし、やりようによつてはネギ坊主でも茶々丸を倒しうる。

しかし…………問題は、ネギ坊主がどんな手段で茶々丸を撃破するか、だ。

「どういう事？」

「俺も把握してるわけじゃないが、ネギ坊主の覚えてる呪文は主に戦闘用…………その中には攻撃性の高いものが多いらしい」

レイヤが前に話してくれたが、ネギ坊主は治療系の魔法は覚えていない。

さらに、「敵を傷つける事なく倒す」方法については、ほとんど勉強していないとのこと。

エヴァとの初戦では、拘束用の「戒めの風矢」を使用したらしいが、

茶々丸に妨害されたって聞いてるし、失敗している以上それを使うとは思えない。

となると……いやゝな予感がしてくる。アスナも俺の言葉にそう感じたのか、俺と同じ様な顔になってきた。

「ちょ、ちよつと待つて。いくら何でもそこまで……」

「あり得ない、とは言えない。ちよつと茶々丸に連絡入れてみる」

懐から携帯電話を取りだし、茶々丸にかける。

ちなみに、3 - Aの生徒の電話番号は全て登録してある。

『もしもし……』

「茶々丸、俺の名前は出すな。後、周囲にネギ坊主がいないか確認してくれ」

そう言うのと、言われた通りに行動してくれたらしく、すぐに返答が来た。

周囲に気づかれないようにか、茶々丸の声はひそひそ声だ。

『……いますね。杖をお持ちのようですし、肩にはオコジョらしき物体が……』

「……やっぱりか。今どこだ？」

『ちょうど、猫に餌をあげに行こうとしていたところです』

となると……人通りが少ないし、最悪の予感があり得る。

ここからだと言に合うかどうか分からん。ネギ坊主を止める手立ては……よし、あれで行こう。

「……茶々丸、悪いが人通りの多い場所を歩いたりして、なるべく時間稼いでくれ」

『わかりました』

一番いいのは、俺がネギ坊主を止めに行く事。

しかし、ここからだいたい距離があるし、間に合うか分からない。さらにネギ坊主は俺が魔法先生だとは知らないし、その事で警戒されたりするとかやこしい事になる。

……ここは、教師としての立場を使わせてもらおう。

「ど、どうするの？」

「放送で呼び出しをかける。……ちょうどアイツ、まだ業務日誌提出してないからな」

後はまあ、エヴァ辺りにでもチクつといて、釘でも刺させれば大丈夫だろう。

……放送部で呼び出しを頼んだところ、朝倉に怯えられたんだが……何でだ？

[Side Out]

「Side Eva」

あつはつはつは……まさかあのぼーやが、そこまで大胆な手を取ってくるとはな。

甘ったれのガキだと思っていたが、これは評価を改める必要があるかもしれん。

「レイヤさん、何も無かったわけですから、そこまで気に病む必要はありません」

「……いえ、まさかあのバカが茶々丸さんに危害を加えようとするとは……」

やれやれ、気にする事は無いんだがな。

私も茶々丸も、ぼーやにとってしてみれば「敵」だ。いつ、どこから攻撃が来てもおかしくはない。

「敵」である以上、教師と生徒の立場がどうこうという筋合いもないしな。

「よし……後でぼーやには釘を刺しておこう。茶々丸、お前もしばらくの間、単独行動は控えろ」

「わかりました」

さて、ぼーやにどういう風に釘を刺すかな。

『私の従者に手を出そうとは……いい度胸だ』とか『気づかないとも思っていたのか』とかか？

ふっふっふ……ぼーやが露骨に怯える様子が容易に想像出来るな。

あーっはっはっは。

「……そういえばレイヤさん、以前から気になっていたのですが、何故ネギ先生の事を「兄」と呼ばないのですか？」

む？ どういう事だ、茶々丸。

「いえ、レイヤさんがネギ先生を呼ぶ際、名前で呼んだり「バカ」や「薬味」などの代名詞で表す事が多いので、少し気になりました」

……言われてみれば、確かにそうだな。

ナギの事を「愚父」とは呼んでいるが、ぼーやの事を「愚兄」のよ
うに兄の字を使って呼んでいない。

「どうなんだ？ その辺り」

「……呼びたくないんです」

まあ、呼びたくないのは分かるんだが……。

「いえ、そういう意味合いも……あるにはあるんですが……」

口籠もるレイヤ。

なんだ、そこまで答えにくい質問だったのか？

「その、いきなりこんな事を言うとは混乱されるかと思いますが……私には、前世の記憶があるんです」

「何？」

「もちろん、完全にではなく、うつすらと……本当に曖昧なくらい。ただその記憶で、私には“兄”がいたんです。顔も名前も思い出せませんが、私にとっては敬愛する……ただ1人の兄です。だから、

あのバカを兄と呼ぶ事だけは出来ません」

……つまり、ぼーやの事を兄と呼びたくないのは、その“兄”と混同してしまうから、か。
ふふ、意外に可愛いところがあるじゃないか。

〔Side Out〕

〔Side Yukari〕

「いや、だから本人も忘れてただけだつて、多分」
「……つまり、私に会いに来るのを忘れ、楽しげにお酒を飲んでいた、と」

ひ、否定できない……。

陸斗もきつと「忘れてた」って気づいてるでしょうね。それで私に釘でも刺しに来るんでしょうが……もう遅い。

……今現在、既に私の前で、その「知られたらマズイ相手」が角を生やしている。笑顔なのが余計に怖い。

（陸斗、恨むわよ）

そう、元々忘れてた陸斗が全部悪い。

10年近く顔を合わせてない上、この前の里帰りで会いに行かなかった……これが最悪。

あの坊や並み……いえ、手紙でやり取りしている分、まだマシなんでしょうけど。

……それでも女性をほったらかしというのはダメダメね。愛想尽かさないこの子も大したものだけど。

「八雲様、幻想郷の外へ出る許可を頂けますか？」

「はあ！？ そんなの出せるわけ……」

「頂けますか？」

……まあ、陸斗が悪いんだもの。うん、問題無いわね。

別にこの子の気迫に怯んだとかそんなのじゃないわよ？ 同じ女としてその気持ちはわかるから。それだけよ。

でも、向こうを放っておいていいの？ あの子、1人になっちゃうわよ。

「いえ、既に許可を頂いておりますので問題ありません」

「……………」

あの子もきつと、今の私と同じ気持ちだったんでしょうね。

今度、夜雀の屋台にでも飲みにも誘おう。仕事ばかりな上、お目付役

がこんな調子で疲れてるでしょうから。

「では、行って参ります」

ふよふよと浮いて、結界の向こう側へと消えていく。

……基本、博麗大結界を行き来できるのは、私だけ。後は私が許可を出した者ぐらいかしらね。

まあ、前に力尽くで結界越えてこようとしたバカがいたけど……ええ、言わなくても分かるわね、あの赤毛のバカの事よ。馬鹿魔力で無理矢理だったから、結界に悪影響出しかけて、キレた陸斗にフルボッコにされたのは言うまでもないわ。

「……………雷、落ちるわね」

文字通り、きつと陸斗に直撃するでしょうね。

それでもこれは、嫁をほったらかしにしておいた陸斗の自業自得……うん。

心の中で両手を合わせて、彼の冥福を祈った。

第17話：明日は荒れ模様になるでしょう（後書き）

さてと、茶々丸襲撃イベントは起きませんでした。

ここで陸斗を登場させると、陸斗「魔法関係者となってしまうので、それは防ぎたかったですから。」

というより、この場面でオリ主がネギの攻撃から守る、というのはかなりテンプレなので、あまりやりたくなかっただけですけどね。

さて、次回はタイトル通り「荒れ模様」になります。

最後の紫視点で登場した“彼女”が現れます。同時に、陸斗の秘密がちよびつとだけ明らかになります。

……まあ、最後の方でもちよつとだけ出てますけどね。

第18話：嫁警報発令中！

〔Side Rikuto〕

茶々丸襲撃未遂の翌日、エヴァに脅されたのが原因か、ネギ坊主がいなくなった。

まあ、聞くところによると長瀬が拾って色々と話をしたらしく、翌朝には立ち直って帰ってきたのだが。

そしてさらにその翌日、つまり今日。風邪で寝込んでいるエヴァに「果たし状」を叩き付けに行き、また授業放棄したので、俺が再び授業を行っている。……教師の仕事してるのか？ アイツ。

予定より少し早く授業が終わったので、軽くコミュニケーションタイムを取った。

俺に関する質問（授業や私生活について）も受け付けている。

「あの、風峰先生。少しお伺いしたい事があるのですが……」

案の定、雪広が質問しに来た。

ま、シヨタコンのこいつが聞きたい事といえば、ネギ坊主の事なのだろうが。

「ネギ先生は今も、パートナーを探しているのでしょうか？」

「……………」

あゝ………そういえば、まだ訂正とかしてなかった気がするな。いい機会だから、コイツらの勘違いを矯正しておこう。

「ネギ先生の言うパートナーっていうのは、別に恋人とかそういう

「のじゃない。あくまで地域独特の風習みたいなものだ」

「そう、なのでですか？」

「そうだ。それに、学校でそういった事はしないよう釘は刺した。気にしないように」

雪広を含む、何人かの生徒は不満げな顔をしている。

パートナ―

ネギ坊主の従者ねえ……絶対苦労しかしないと思うが。

「じゃあ、風峰先生はパートナー探したりしないの？」

「バカを言うな。俺は既婚者だ」

え、何でだ？ 俺、変な事言ったか？

「……あの、先生。今なんて？」

聞こえなかったのか、もう一度言つてやる。一語一句そっくりそのまま。

そして、しばらくすると……思いっきり声が上がった。

…なんか、腹立つな。

それ、俺に相手がいないって言うてるようなもんだぞ、おい。

「だ、だって前に『恋人いない』って言うてましたよね！？
『時
間も無い』って！」

「いや、いないぞ。嫁いるし。そもそも探す必要もない」
「結婚指輪してないじゃないですか!!」

だって、幻想郷にそんな習慣無いし。
俺もアイツもそーゆーの知ってるけど、それほど気にしたことないし。

「ど、どんな人ですか!？」

「ん」……俺より結構年下だな」

俺、600歳超だけど、アイツ確か……何歳だったっけ？ でも俺より年下なのは間違いない。
初めて会ったのが幻想郷出来る前で、色々あって結婚したのが今から50年ほど前だったかな。

「あ、アスナは知ってるの!？」

「何で私のとこに来るのよ!」

「だって風峰先生と昔なじみなんですよ!？」

なお、アスナは知っている。

麻帆良に来る前にちよくちよく。もう10年近く会っていないが。

「……まあ、知ってるわよ。少し会ったことあるし」

「どんな人!？」

「大人のお姉さんって感じ。優しくて包容力があって……」

だけど、怒ると怖い。あの笑顔が怖い。

……この前、幻想郷に里帰りした時、すっかり会っの忘れてたからなあ……里帰りしてた事が知られたら、間違いなく雷が落ちる。
そつえば、まだ紫に釘を刺して無かったな。いや、紫以上に釘を

刺すべき相手は他にいる。主に鴉天狗とか鴉天狗とか鴉天狗とか。アイツに新聞バラまかれたら終わる。

「ほら、その話は終わりだ」

正直、話していると怖くなる。……飛んできそうぞ。

いやいや、紫以外は結界越えて来るはずがないし、そんなわけ無いんだが。

〔Side Out〕

〔Side Make〕

放課後、例の吸血鬼騒ぎについて風峰先生に相談した。

私は何も覚えてないんだけど……やっぱり襲われたかもしれないわけだし、ちょっと気になって……亜子にも心配されたし。

そんなわけで例の桜通りにまで来ている。面白がって着いてきた亜子達も一緒に。

「1番考えられるのは、吸血鬼を装った変質者なんだが……………」

へ、変質者って…………。

聞いてて背筋がぞつとしてきたんですけど…………。

「少なくとも、見つかった時に着衣に乱れは無かったし、そういった違和感は無かったんだろ？」

「えーっと…………そう、ですね」

「だから、そういうのは考えにくい。これまでの被害者つても、男女バラバラだし」

基本的に学生だけど、男の人も女の人も関係なく襲われたって話だけど。

でも、吸血鬼って言われてても、別に首筋に傷があったわけじゃなかったから、違うのかな？

「大体、吸血鬼なんてもんがいるわけないだろう？」

「う、うーん…………でも、いそうな気がして…………それもごく身近に」

そう言うと、風峰先生の表情が一瞬固まった。

何でか分かんないんだけど、近くにいそうな気がするんだよね。なんとなく。

「…………なあなあ」

ん？ どうしたの？ 亜子

「誰か来る」

「え？」

も、もしかして……吸血鬼！？

「馬鹿者。昼間から吸血鬼が出るか」

あ、言われてみれば確かに。

じゃあ、寮生かな。そもそも、そっちだって考えるのが当たり前な
んだけど。

来たみたい……って。

「……………うわ」

すごい美人……。

ちよっと変わった服装で、羽衣っていうのかな？ それを腕に纏っ
てるのが特徴的。

肩口で切りそろえられた青紫の髪。ルビーのように鮮やかな瞳。顔
立ちだつてすっきりしてて、まさしく「大人の女」って感じ。

……あれ？ なんかどこかでそんなフレーズを聞いたような……。

「……………い、衣玖？」

風峰先生の搾り出すような言葉に、にっこり微笑む女性。あれ？

知り合い？

それに……何でだろう、凄い威圧感みたいなものが伝わってくるん
だけど……。

風峰先生なんてすごい冷や汗ダラダラだし、顔色も青通り越して、
口で言い表せないほど悪い。

「……………何でいるわけ？」

「八雲様に許可を頂きました。もちろん、あの方からも許可は頂いております」

「……………」

あの、風峰先生？ 紫って誰ですか？ 「紫、後で百回殺す」って……………。

「それで、実に10年ぶりに顔を合わせた妻に対して、何か言うことではないのですか？」

……………え？ 今、この人「妻」って言ったよね？

隣の亜子やアキラに視線で尋ねると……………頷かれた。

じゃ、じゃあこの人がっ！？

「あ、いや、その……………すまん」

「いいえ許しません。とりあえず百回殺します。ええ、殺しますとも」

頬を染めて微笑む女の人に、風峰先生はげっそりとしたような顔をしてる。

「……………佐々木、悪いが急用が出来た。この埋め合わせは今度ちゃんとするから、ちょっと見逃してくれ」

「あ、別にいいんですけど……………奥さん、綺麗な人ですね」

「……………ありがとう」

それから、風峰先生は文字通り、奥さんに引きずられていった。何て言うか……………イメージはドナドナっって感じ？

[Side Out]

[Side Rikuto]

……いや、100回とかマジで死ぬから。
実際そこまで行かなかったけどさ。……まあ、その辺は置いておこ
う。

「本当に、すまん」

色々した後、改めて床で土下座して衣玖に謝る。
諸事情あったとはいえ、10年間コイツをほったらかしにしていた
のは事実だ。愛想尽かされてもおかしくはない。

「まあ、そこはいいですよ。埋め合わせはたっぷりしましたし、し

てもらいましたから」

「……………」

……そこ、何をしてたとか考えるな。話したくもないし、聞きたくないだろう？

「……10年分ですから、まだまだ足りませんが」

「いや……ほんと勘弁してくれ」

「とまあ、冗談は置いておきましょう」

お前が言つと冗談に聞こえない。

それはともかくとして……本当に何しに来たんだ。

「里帰りに来ておいて、私には会いにこない不届き者に会いに来ただけですよ」

「……………うっ、本当にごめん……………」

いや、そこは本気で謝るしかない。

10年前、アスナの事とか色々あつて、幻想郷離れて麻帆良で暮らし始めて……それからずっとだからな。

「分かっていますよ。あなたがそういう人だっていうのは、一緒になつた時から知ってましたし」

「……………む」

……永江衣玖との縁は……幻想郷が出来る前からになる。

博麗大結界で隔絶される前から、俺はその地域のまとめ役のような事をしていて、地上はもちろん天界にも顔が利いていた。

分かっていると思うが、衣玖も妖怪……竜宮の遣いと呼ばれる種族に位置づけられる。

主に雲の上を泳ぎ、地上に地震が起きる事を伝える。……まあ、出会ったのは本当に偶然なんだが。

それから何だかんだで顔を合わせる事が多くなり、色々あって結婚した。

……結婚に至るまでの事を話せば、それこそ12話構成の1時間ドラマに、3部作の映画くらい必要なエピソードがある。

「だから、私が側にいる事にしました」

「は？」

「安心してください。既に仕事も見つけてあります」

ほら、と側の鞆から書類を取り出して見せてくる衣玖。

……えっと、女子寮の管理人……え！？

「い、いつの間に！？」

「あなた達と遭遇する前です。ちょうど欠員があったらしく、空気を読んで面接に臨みました」

……ああ、そういえばそうだったっけな。

衣玖の能力は「空気を読む程度の能力」。空気を読むので、いつの間にか会話に加わったりしている。

面接とかでも、空気を読めば場を乱す事無く、円滑に話を進める事が出来る。

「それに、また面倒事に巻き込まれているのでしょうか？ 私がいれば、何かとサポートが出来るはずですよ。それでも腕に覚えはありませんから」

……そう、衣玖はこう見えて相当強い。

今は装備していないが、羽衣を用いた戦法は俺でも苦戦する。柔よ

く剛を制すとは、よく言ったものだ。

おまけにあの電撃はキツイ。さっき一発喰らったが……威力は前より強くなっていた。

「………わかった。でも、あんまり無茶しないでくれ」

「はい」

幻想郷と連絡を取る方法は少ない。

何せ、博麗大結界で隔絶された地域だ。普通に電話をかけるゝなんて行かない。

だが限られた地点にのみ、紫のスキマ能力を流用した通信機器が置かれている。俺の携帯はちょっと特別製なので、そこに連絡することが可能だ。

……で、部屋の準備やらで寮に戻った衣玖と別れ、俺はある相手へ連絡を取っていた。

『……いや、ほんとごめん。私じゃ止めきれなかったっていうか……』

「ああ……わかってる、今回は俺が悪いし」

電話の相手は、俺や衣玖にとって縁の深い相手。

今現在、天界で仕事に追われている少女、比那名居天子。……普段は衣玖がお目付役みたいのをしてる。

「それで、そっちは大丈夫なのか？」

『何とかね。混乱自体は小さかったし、それも納まりつつあるって感じよ』

彼女がそんな役職に就いている理由。……数年ほど前、天界でとある不祥事が明るみになった事がきっかけである。

天界に住まう者達は主に「天人」と呼ばれ、不老ではあるが、死が訪れる。

寿命が来て、迎えに来た死神を追い払っているため、冥界からは困った顔をされており、死神達は天人を嫌っている。

しかし、その中で冥界との裏取引が判明した。……取引を交わした天人達を見逃す代わりに、別の人間の寿命を奪うという、取引が。

それがひよんな事から発覚し……そんな天人達を、天子が“処理”した。

そして今現在、滞っていた書類の処理などを行っているため、忙殺されている。

『あの閻魔様がカンカンでね、むしろそっちの方が大変』

「まあ……あの人は仕方ないだろ」

四季映姫・ヤマザナドゥ。

幻想郷を担当する“閻魔”であり、怖い者知らずの紫が唯一恐れる

相手。

性格は「生真面目」を形にしたような人で……そう、新田先生に似た感じだ。もちろんその件については激怒していた。

『ま、そんなわけだし、衣玖の事お願いね』

「……正直なところ、そっちにいて欲しかったんだがな」

何よりも、幻想郷には危険が少ない。

スペルカードルール。先代の巫女と俺たちが理論だけを打ち立てたそれを、当代である霊夢が実現させた“血を流さぬ戦い”。

もちろん、中にはガチで殺り合うものもある。……花の妖怪とか、悪霊とか、魔界の神様とか……そーゆー昔なじみとか。

「もちろん、守るけどな」

『いい機会だから、帰ってくるまでに子供の1人でも作って来なさ』

ブツッ。

無言で通話を切った。……余計なお世話だ。

第18話：嫁警報発令中！（後書き）

えーと、批判は覚悟しています。永江衣玖さん登場です。

こういう立ち位置にしたかったんですが……うう、反応が怖い。

念のためにですけど、陸斗は衣玖一筋ですから、他のアプローチなどに靡く事はありません。……色々あったと思いますよ？ 主に戦時中とかは。

天子のキャラが違う、と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、コレもある種のバターフライ効果です。主に陸斗の介入がありましたから。そっちのイベントもオリジナルです。昔書いてた東方の二次創作で暖めていたアイデアなんですけどね。

確かにワガママだとは思いますが、決して？だとは思わないんですよ。

天子と衣玖は「緋想天」の時に初めて顔を合わせたような描写があります。

よく二次創作だと、それ以前からの顔見知りで、天子のお目付役的な存在に描かれたりもしてますが、私もそれに乗っ取ってそーゆー立場だった事にしてます。

まあ、その辺は後々書いたりもするかもなので、ご了承ください。

第19話：魔法使い達の饗宴【前編】

〔Side Kitayama〕

あ、ありのままに言うぜ……今日はメンテナンスで停電だから、薬味vsエヴァが行われるはず。

だからちよつと女子寮の様子でも見に行こうかなって思って来たんだが……。

「~~~~~」

なんか、すっごい見覚えのある女が女子寮の前で掃除していたんだ……いや、間違いない。あれ緋想天に出てくる永江衣玖だよな！？
キヤークサーン！！

どうなってるんだよ、この世界は！ いや、単にそっくりさんの可能性だってある。

と、俺に気づいたのか、首をかしげながら尋ねてくる。

「……………あの、どうかされましたか？」

「あ、いや！ えっと……………あなたは？」

「ああ、申し遅れました。私、今日からこの寮の管理人に就任しました、永江衣玖と申します」

やっぱり本人かよおおおおおお！！

って事は、この世界には幻想郷があるのか！？ マジかよ！

よし、ネギまを攻略したら、今度は幻想入りだ！ 手始めに…………。

「あの永江さ」

「私既婚者ですので、そういったお誘いはご遠慮させていただいて

「ます」

え？

き、既婚者だつてええええええええええ！？

いや、おかしいだろ！？ 何で衣玖さんが結婚してんだよ！
原作
で結婚とかそーゆーのねえだろ！？

「……あの、学校の方へ行かなくてよろしいのですか？」

……なお、この日は遅刻して、新田にめっぽう怒られた。

ちくしょう。主人公の薬味だって、普通に登校拒否したりしてるじゃないか。俺はオリ主なんだぞ。

[Side Out]

[Side Rikuto]

もうすぐ8時になろうとしている。

なお俺たちは現在、茶々丸のハッキングが終了するのを待っている。停電の時間は夜8時から深夜0時の4時間。その間、麻帆良内の電気は完全に停止し、街頭はもちろん、エレベーターも使えなくなる。なお、停電中の生徒の外出は禁止されているが……それでも出歩くヤツがいる（主にうちのクラスのヤツらとか）。その辺りは、新田先生を始めとする一般教師に任せよう。

「では陸斗、予定通りに頼むぞ」

「りょーかい」

俺の役目は、ネギ坊主をエヴァのところまで誘導するだけ。

もちろん、正体がバレないように適当な姿に変身した上で……だが、それが終わったら、魔法先生としての業務だ。学園結界が復旧するまでの間、外から入り込んでくる連中をひたすら防ぎ続ける。普段はサボりまくりだが、さすがにこれだけはサボるわけにはいかない。何せ、学園都市の人間の命を預かっているのだ。

「さて、と」

誰に化けるかな。嫌がらせも兼ねて、ナギにでも化けるか？ いや、それだとエヴァが、後でうるさく追求されそうだな。

けど、実在の人物に化けても厄介な事になりそうだし……うーん、ここはもういない相手が1番いいな。

……よし、アイツにしよう。

軽く妖力を発揮し、身体中に纏わせる。それを思い浮かべた姿へと変質させる。

「……これでよし」

「ほづ……」

20歳に差し掛かる辺りの、白い法衣のような衣服に身を包んだ女性。

かつて、俺が大战で戦った相手。俺たちがこの世界へ転生するきっかけとなった、あの“女神”の転生した姿。

紫並みに厄介な相手で、ラストスベルまで使ってどうにか倒せた。

……コイツの相手した後で、“造物主”ともタイマンしたからな……あれはマジでヤバかった。

「それじゃ、行ってくる。予定通り大浴場で待機していてくれ」
「ああ」

そう言って、飛び立つ。

さてと、ネギ坊主はどこにいるのかな？………？

「……………お、いたいた」

寮の見回り中だったのか。杖も持ってるな。…………あのオコジョがいるのは面倒だが。

さてと、ちよつとばかり脅かしてやるか。

[Side Out]

「Side Negi」

「うーん、真っ暗な寮ってなかなか怖いねー、カモ君」

「むむむ……」

ねえ、カモ君。さつきからどうしたの？　なんか唸りっぱなしだけ
ど。

「兄貴！　何か異様な魔力を感じねーか！？　停電になった瞬間、
急に現れやがった！」

「えっ……何か魔物でも来たの？」

学園長先生やタカミチの話だと、麻帆良を覆ってる学園結界は、外
から来る魔物を防ぐ役目があるらしい。

停電中はその結界も消えてしまうから、魔法先生がそいつた魔物
の襲撃を防いでるんだって。

「分からねえけど、かなりの大物だ。まさか、エヴァンジェリンの
ヤツじゃ……」

「ええっ！？」

だって、エヴァンジェリンさんはもう改心したんだよ！？

今日だって茶々丸さんと一緒に、真面目に授業に出てたし……。

「だから兄貴は甘いんだって！ そんな簡単にヤツが諦めるハズないだろ！？」

「そ、それは……………」

た、確かにそうかもしれないけど……………うゝん……………。

ふと、何かの気配を感じて俯きかけていた顔を起こす。……………そこには、白い服に身を包んだ女の人の姿があった。

歳は……………20歳ぐらい。銀髪の女の人。

「だ、誰ですか！？」

「……………ネギ・スプリングフィールド。エヴァンジェリンがお前を待っている」

「え、ええっ！？」

まさかこの人は……………エヴァンジェリンさんの仲間！？

「大浴場で一对一の決闘を所望している。……………早めに来る事だな」
「待ってください！」

呼び止めようとしたけど、その人はあっという間に飛び去っていった。しまった。

ど、どうしよう……………エヴァンジェリンさんと決闘って……………。

「マズイぜ、兄貴。エヴァンジェリンのヤツ、この停電で魔力を復活させたんだ！」

「そ、そんな……………」

エヴァンジェリンさんは、すっかり反省して学校に来たと思ってい

たのに……酷い過ぎる！

いくら悪い魔法使いだからって、やっていい事と悪い事があるよー！

「兄貴、とにかくアスナの姐さん呼んで仮契約だ！」

「……駄目だよ、カモ君。さっきの人、一対一だって言ってたよ」

それにアスナさんには、仮契約は絶対しないって言われた。

これは僕の問題なんだ。アスナさんに迷惑かけたりしたら駄目だ。

「けど、兄貴……」

「大丈夫！ 実はこの時のために用意はしてあったんだ！」

隠してあった袋から、装備一式を取り出す。

予備の杖に、魔法銃。魔法薬各種……これだけあれば、何とか……

…。

「……わかったよ。でも、俺っちも行くぜ」

「カモ君……ありがとう」

さあエヴァンジェリンさん、今度こそ悪い事はやめてもらいますからね！

[Side Out]

「Side Eva」

「ふむ……暇だな」

「そうですね」

私は現在、大浴場で待機中だ。

おそらくあと少しすれば、ぼーやがここへ1人で飛んでくるだろう。

「しかし、本当に1人で来るのか？」

「……あれは目的のために手段を選ばないところがある反面、ルールに関して妙に意固地になるところがありますから」

ふむ……そういえば、魔法を覚えるために禁書庫に潜り込んでいた
と言っていたな。

あくまでも「自分の目的のため」というわけか。……くくく、歪んで
いるな。

「最終確認だ、レイヤ。本当にいいんだな？」

私は今日、ぼーやを完膚無きまでに叩きのめす。

命までは奪いはしないが……それでも腕の1本を折るかもしれない。
最悪、ぼーやの心も折れるだろう。

それでいいのか、という最終通告だ。

「……構いません。あれがどうなるかと、私の知った事ではありませんから」

「……………そうか」

レイヤにとって、ぼーやは「どうでもいい存在」。それこそ、目の前で死にかけていても、悲惨な目に遭っていても、どうでもいい。必要なら手を差し伸べるかもしれないが、必要が無ければ手を差し伸べようとはしない。

……………ふふふ、その冷酷なまでの心……………我が弟子に相應しい。今回の件が終わり次第、本格的に鍛えてやるとするか。

「では、そろそろ部屋の方へ戻ります」

「ああ。気をつけて帰れよ」

「……………ご武運を祈ります」

そう言い、大浴場を後にするレイヤ。

いらぬ心配だ。……………いや、何も知らなければ慢心していたな。慢心し、下手に手加減してぼーやに遅れを取っていたかもしれない。

だが今回、手加減は無用だ。“闇の福音”の名において、全力でネギ・スプリングフィールドを迎え撃つ。

む……………来たか。

「エヴァンジェリンさん!!」

「ふふふ……………待っていたよ、ぼーや」

ほう、やはり1人で来たか。いや、肩には例のエロオコジョ……………あれは無視しておこう。

「あ、あなたは……誰ですか？」

がくっ

お、おい……いくら何でもそれは無いだろう？

確かに、今の私の姿は幻術で20歳相当の姿にしているが……貴様、この前夢で見ただろうに。

……ああ、思い出して苛ついて来たな。勝手に私の夢を覗いてくれて……！ あのデリカシーの無さは父親と同じだな……！

一步踏み出し、瞬動で接敵して蹴りを入れる。……ちっ、障壁で防がれたか。

「ま、まさか……エヴァンジェリンさん！？」

「気づくのが遅い！！ リク・ラク ラ・ラック ライラック！」

私が詠唱しだしたのを見て、すぐに腰の魔法銃を取り出して引き金を引く。

魔法銃とは珍しいな。そういえばレイヤの話では、ぼーやは骨董魔法具のコレクターだったか？

だが、魔力弾は全て私の障壁に当たって霧散する。……ひょっこ如きが、私の詠唱を止められるとも思ったのか？

「『魔法の射手 連弾・氷の22矢』！」

「うあっ！？」

22本の氷の魔法の矢が、ぼーや目がけて放たれる。

どうやら頭を使ったらしい。窓の方へと駆け出している。魔法の矢は窓ガラスをたたき割り、そのまま落下したぼーやへと降り注ぐ。チッ、視認から外すと厄介だな。

「どこへ逃げるつもりだ？ ぼーや」

この方向だと……大橋の方か？

学園結界の端だから、ピンチになったら外へ逃げればいい。私は呪いで外には出られない……という設定だから。

いや、違うな。下手に頭の回る小利口なぼーやの事だ。そんなせこい策を用いるとは思えない。

となると……橋まで誘い込み、そこで何かしらの罠を発動する。ぼーやが考えつく罠といえば、捕縛結界だな。

(くくく……こうまで都合がいいとはな)

ふと、懐の試験管に触れる。

確かに私といえど、単体で捕縛結界に囚われてしまつては脱出は難しい。茶々丸がいれば「はいてく」とやらで結界は解除できる。

そこでレイヤが「もしも」の可能性に備え、私のために用意してくれた魔法薬がある。

(さあ、ぼーや。お前の策とやらを、お前の妹が打ち砕く瞬間が近づいているぞ……)

[Side Out]

「Side Rikuto」

変化を解除し、そのまま魔法先生達に合流した俺は、それぞれの警備区域へと来ていた。

……俺の実力を見込んでか、多くの敵が入り込むであろう区域に配属されている。

「風峰先生、よろしくお願いします！」

「ああ」

俺に挨拶したのは、銀髪金目のイケメン教師。

確か……北山だったか？ 最近、来たばかりの新任魔法教師。なかなか出来る男だと聞いているが、生徒からの評判はすこぶる悪い。特にエヴァは汚物を見るような目で見ているらしい。

「……………」

……ああ、コイツが「キモイ」だの「うざい」だの言われる理由が分かった気がする。

視線が「いやらしい」。何かを探るような、勝手に入ってくるような感じがして、確かにそう思いたくもなる。

しばらくの間、北山の変な視線に晒されながらも、警戒をゆるめる事なく警備を続けていたが……10分ほど経って、空気が変わった。

「…………来るぞ」

「え、ええっ!?!」

狼狽えるな、うるさい。

空気の感じからして下級魔族。数は……150、160か。いつもより少なめだな。

「新入り。一匹たりとも討ち漏らすな。一匹でも麻帆良に入れたら終わりだ。いいな?」

「は、はいっ!」

「よし、行くぞ!」

さて、溜まりに溜まった鬱憤。学園長にも張らせなくてイライラしてたんだ。思い切り晴らさせてもらうぞ、コラ!!
地を蹴って高く飛び立ち、攻撃で周囲に影響の出ない地点へと移動する。ちょうど、周囲は川だ。

「スペルカード、宣言!」

その言葉と同時に、指の間にスペルカードを顕現させ、視界に入ってきた悪魔の大群に向けて解き放つ。

「虚無「エクリプスクレイモア」!」

幾つもの黒い光弾が出現し、大群へと向かい……爆ぜる。
爆発に巻き込まれた悪魔達は悲鳴も無く消滅していき、完全な消滅を免れた悪魔も、身体の一部が削られたようになっていく。
俺はそのまま、次のカードを取り出し、再びその名を呼ぶ。

「虚無「ラグナブレード」！」

俺の両手に、妖力で編まれた二振りのエネルギー状の剣が握られ、振り回す。

この剣に断てぬものなど、そんなに無い！……まあ、ラカンのようなチートの身体を斬れるかは疑問だが。

剣が振るわれることに、悪魔達は両断されていく。

数は多いが、それほど大した事無い。……悪いが、俺のストレス発散の相手になってもらうぞ！！

第19話：魔法使い達の饗宴【前編】（後書き）

というわけで、吸血鬼編も大詰めです。今回はその前編、前哨戦です。

次回の後編で決着が付き、次の修学旅行編への幕間みたいのになります。

で、ようやく陸斗の戦闘描写も出てきましたが……スペルカードがどこかで聞いた事のある名前なのはご愛敬です。

もしかしたら「スペルカードルールを提案したのは霊夢で、それごく最近だろ?」と思ってる方もいらっしゃるかもです。陸斗は普通に大戦期からスペルカードを使ってますが、もちろんその辺にもきちんとした理由があります。

過去編は……ほんと、魔法世界編か悪魔襲来編までお預けになるでしょうね。

第20話：魔法使い達の饗宴【後編】（前書き）

というわけで、ついに20話突破です。

今回で吸血鬼編が終了し、次回から修学旅行編に突入しますが……
どうなるんでしょう。

なお、本日付けでPVが322,339アクセス、ユニークアクセスが33,761人を確認しました。

第20話：魔法使い達の饗宴【後編】

「Side Eva」

陸斗達が外敵の侵入を食い止めているであろう頃、私たちは空中戦を繰り広げていた。

「『凍る大地』！」

「わーッ!？」

突き出た氷柱が、ぼーやを掠め、吹き飛ばす。

バウンドして地面に置いたぼーやを尻目に、現在地の確認をする。

……麻帆良学園都市と外とを繋ぐ麻帆良大橋。

……確かに冷静な目で見てみれば分かる。息を荒げているぼーやの目は、何かを待っている。……そう、私が畏にかかってくれるのを。

(……………ほう)

目を凝らしてぼーやの前辺りのアスファルトを観察してみると……うまく隠蔽されているが、何かが設置されている。

私クラスの敵を捕らえるものだとすると、やはり捕縛結界か。見習いのぼーやでも、それなら扱える。

「ふ……なるほどな。この橋は学園都市の端。私は呪いによって外に出られん。……ピンチになれば学園外に逃げればいい、か」

まあ、実際は外に出るのも自由自在なのだが。

ぼーやを追い込むために、わざとそれに乗ってやろう。

「……意外にせこい作戦じゃないか。え？ 先生」

一步一步、ぼーやへと歩み寄る。

倒れたままだが、杖を離していない。そして真っ直ぐこちらを見つめている。

そして、罨が仕掛けられている地点に足を……踏み出さなかった。

「え？」

「見え見えなんだよ、ぼーや」

懐から取り出した試験管から、赤い液体を地面へと垂れ流す。

それが地面に注がれると同時に、隠されていた罨が露出し、完全に破壊される。……予想以上の威力だな。

「そ、そんな!？」

この試験管の中身は、レイヤ謹製の魔法薬。……レイヤが自身の魔力から精製したという魔法薬だ。

その効果は、このような罨や結界……挙げ句は攻撃魔法などのあらゆる魔力に対して発揮され、完全に打ち消すという。

確か名前は……「幻想殺し」イマジンブレイカーだったか？ 完全に殺しているのだから、その名にふさわしい。

「残念だったな、ぼーや。とっておきの罨もこれでおじやんだ」

「う、うう……」

涙目で私を睨むぼーや。

魔法も撃ってこないところから、戦意喪失か？ つまらん。

「……お前の親父なら、この程度の苦境など笑って乗り越えたも

のだがな」

その言葉に、ぴくりと身体を震わせた。

ふ……火が点いたか？ やはりキーワードは父親か。

「サウザンドマスター千の呪文の男”の子とはいえ、この程度か。息子がこれなら、ヤツもたかが知れたものだ」

「と、父さんの事を悪く言わないでください！」

ほう、反論するだけの気力が残っていたか。

倒れていたばーやも立ち上がり、震える手で杖を握りしめ、こちらへと向けている。

ふふふ……本番はここからだな。

「かかってくるがいい、ばーや。逃げずに立ち向かった事に敬意を表し、全力で相手をしてやろう!!」」

[Side Out]

「Side Rikuto」

『術者の捕縛に成功した』

北東区域の警備を担当していた神多羅木からその連絡が入り、肩をなで下ろす。

後100体はぶっ飛ばしたかったんだが……まあ、よしとしよう。

「……スペルカード、何でどうして……」

北山はぶつぶつ何か言ってるが……無視しよう。

「風峰さん、お疲れ様です」

ボロボロになった瀬流彦が、その声をかけてくる。

瀬流彦は直接的な戦闘型では無く、支援の方の能力が高い。とはいえ、今回のような事では前線に立たざるを得ない。……まあ、健闘したとは思うぞ。

「で、捕縛した術者ってのは？」

「詳しい事はまだ入ってきていないんですが、どうやら西の……」
「……またか」

下級魔族を複数召喚してきたが、どうやらそれはダメー。

東洋呪術を用いて魔族を召喚……西洋魔術師の犯行に見せかけるためのものだったか。

こういつた事は以前から何度もあったのだが、当の関西呪術協会は「一切関与していない。下の暴走だ」と言い張っており、とりつく島もない。

俺たちとしても、下手に騒ぎ立てればもめ事に発展するのは目に見えているし、ため息をつきつつも矛先を突きつけるような事はしていない。

「そういえば……聞きましたか？」

「何をだ」

「今年の修学旅行、京都らしいです」

はあっ！？

思わず叫んでしまったが……おいおい、それマジかよ。

「変更は……」

「無理ですね。ほら、風峰さんのクラスの近衛さんの事もありますし、現にガンドルフィー二さん達が学園長に抗議してるそうですが……」

どことなく疲れた顔で瀬流彦がそう漏らす。

無理も無い。西の総本山の純血統である木乃香がこっちにいる事にも、向こうは相当うるさく言ってきている。

現に数回、木乃香を狙つての誘拐未遂が起きている。……その辺りは護衛の刹那と、俺たち魔法先生の行動で防がれているが。

さらにはこんな事が連続して起きている上、今年の3-Aにはネギ坊主とレイヤもいる。争いの火種になる危険性は高い。

……ガンドルフィー二達が抗議するのも無理はない。木乃香を狙つて襲撃かけてきて、下手をすれば被害が一般生徒にも及びかねない。

「今年の魔法先生は……まず、俺と瀬流彦は確定か」

「せめて、神多羅木さんや刀子さん辺りが警護に就いてくれれば安心なんですが……」

それは……難しいな。

まず、神多羅木の担当クラスは高等部……それも修学旅行には参加しない。葛葉刀子も元々は神鳴流剣士。向こうからしてみれば、「東へ移った裏切り者」として見られている可能性が高いため、許可が出るとは思えない。

……ちよつと待て、まさか俺たち2人とか言わないよな？

「……………これ、最悪の場合も想定しておくべきか？」

「……………しておいた方がいいかもしれませんね」

なあ、さっきまで曇り空だったんだが、急に降り出してた気がするぞ。

こんなんで大丈夫なのか？ 修学旅行。

いくらアスナや刹那がいるとはいえ、一般生徒を守りきれるか不安なんだが。

……最悪、身銭を切って龍宮辺りにでも依頼しようかな。

[Side Out]

「Side Eva」

「ふははははははは！ その程度か、ぼーや！」
「くっ……………」

弱い。何よりも、心が弱い。

父を求める想いだけは見事だ。だが、それ以外は大した事はない。
いくら強大な魔力を秘めていようと、いくら強力な呪文を覚えてい
ようと、所詮はその程度……………心の弱さは隠せない。

^{レイヤ}妹を見習え。あれは冷静に全てを見据えている。……………ヤツこそ、我
が弟子に相応しい。

「さあ、そろそろ終わりにしようか。……………リク・ラク ラ・ラック
ライラック！」

「ら、ラス・テル マ・スキル マギステル！」

追い詰められたこの状況で、ぼーやが使うのは1つ。

雷属性の高位魔法『雷の暴風』。現在のぼーやが使える最強の魔法。
……………せつかくだ、使う呪文はお前に合わせてやろう。

「来れ雷精、風の精！」
「来れ氷精、闇の精！」

やはり驚いた顔をしているな。撃ち合うつもりか、とても思っているのだろう。

『雷の暴風』も『闇の吹雪』も、同系統の呪文。同じ規模の呪文がぶつかり合えば、強い方が勝つ。

「雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐！」

「闇を従え、吹雪け常夜の氷雪！」

さあ、受け止めてやろうぼーや。

その上で受け入れるがいい、己の敗北を！！

「『雷の暴風』！！」

「『闇の吹雪』！！」

強烈な雷を纏った旋風と、闇を纏った吹雪がぶつかり合う。

確かにぼーやの宿した魔力は強大だ。それこそ、ナギにも匹敵するほどに。

しかし……完全に使いこなせていない今、それは単なる魔力タンクに過ぎない。

その答え通りに、ぼーやの『雷の暴風』が、次第に私の『闇の吹雪』に押され、呑み込まれていく。

「くっ……うっ……！」

「ぼーや、これが現実だ。……現実を受け入れるがいい！！」

私はその言葉を発したと同時に、『雷の暴風』は消失し、ぼーやは『闇の吹雪』に呑み込まれた。

もちろん、殺さない程度にはしてある。……いや、殺さないようにの間違いか。

じじいとの強制制約の、私が書かされた内容だ。「ネギ・スプリン

グフィールドの命を奪わない」という安全弁。

そのため、殺傷力のある攻撃は全て、ギリギリで殺さない程度に自動的に手加減されてしまう。……まあ、私はそれで構わないのだが。殺したら殺したで煩いし。

「お前の負けだよ、ぼーや」

ボロボロになって倒れたぼーやに、そう声をかける。

魔力も空っぽのお前が、これ以上どうやって私と戦うつもりだ？

「ぼ、僕はまだ……まだ負けて……」

「いいや、もう終わりだ」

ぼーやの首根っこを掴み、持ち上げる。

完膚無きまでに叩きのめす。それが私の目的だ。……受け入れる、完全な敗北というものを。

「…………『凍て付く氷枢』」

その詠唱が完成すると同時に、ぼーやの身体は氷柱へと封じられた。ふん……つまらん仕事だったな。まあ、久しぶりに魔法が使えたのは由とするか。

[Side Out]

[Side Konoe mon]

深夜、学園長室でワシは1人思案しておった。

「……………失敗じゃったかのう」

ネギ君を成長させるため、エヴァと戦わせる。

エヴァも手加減して、それをネギ君が突き勝利する……………はずじゃったんじゃが……………どうしてこうなったんじゃろ。

エヴァは手加減する事なく、ネギ君を完膚無きまでに叩きのめし、その結果ネギ君は完全に敗北。……………今、治療中じゃ。

「やはり、あの強制証文が響いたか……………」

エヴァが依頼を引き受ける条件として提示した、強制証文の使用。ワシがエヴァに提示した内容が「ネギ君の命を奪わない」。

そしてエヴァが提示したのが「決闘には一切手出し無用」という条件じゃった。

……………まあ、確かにネギ君がああいう状況に陥れば、四の五の言わずに割って入っておったからの。

「まあ、あの敗北もネギ君には＋に働いたようじゃし……」

どうやらネギ君は、敗北をバネにして「強くなる」事を決意したようじゃ。

これなら、修学旅行に際する“特使”への任命も問題ないじゃろう。

……じゃが、やっぱり問題はガンドルフィー二君を筆頭とする魔法先生達じゃな。別に問題無いと思うんじゃないかのう……。

さすがの向こうも、そこまで過激な行動には出んじやろうし。

……なお、ワシがこの時「もっとしっかり考えて修学旅行の事を決めておれば……」と後悔するのは、修学旅行から帰ってきた風峰君達が、角を生やして学園長室に殴り込んできてからじゃった。

[Side Out]

「Side Arnya」

やっぱり暇よねえ……。

え？ ああ、私が今何してるかつて？ いつも通り占い師よ。最初の頃こそ大変だったけど、最近は順調。街の人とも仲良くなったし、これでも結構有名なのよ？

その辺りはレイヤに感謝かも。あの子の近くにいたから、魔法に頼りすぎないように生活出来たわけだし……。

……けど、こういう客の入りの無い日もあるのよ。

「……たまには、レイヤの事でも占ってみますか」

私の占いは、依頼者によつて様々な占いを使い分けている。それと魔法を合わせ、的中率をぐぐんとアップさせている。

また、魔法にも様々なものがある。その中でも1番最初に習うのが基本魔法。

占い（未来予測）の精霊や、小物を動かす精霊は初歩の初歩。ちなみにネギはそういった基本魔法が得意だったりする。

ん……とりあえず、タロットカードから行ってみますか。

「……………」

カードを切り、順序よく並べていく。

それを定められた順番で開いて、開かれたカードの図柄と向きによつて、その意味合いは変わってくる。

……う、うーん……。

「こ、これまた微妙な……」

現れたのは16番の大アルカナ。落雷で塔が破壊され、男が落下する様の描かれた『The Tower』のカード。

正位置だと「崩壊」「悲劇」とかハッキリ言って不吉な意味しかないけど、これの逆位置…………。

レイヤに当てはめると、なんか不安になってきたんだけど。

「…………念のために後で電話しとこつと」

まあ、それはそうとして…………今日はもう店じまいしようかしら。なんかお客も来ないし、おまけに天気も悪くなってきたし…………。

「…………あの、よろしいですか？」

「え？」

あ、え？ お客さん？

おつかしいな。さっきまで通里には誰もいなかったんだけど…………。

…………うわ、珍しいくらいの美人さん。

淡い空色の髪を腰までゆったり流し、透き通るような新緑の瞳。そして…………何故にメイド服？

いや、ここではメイドも珍しくないけど、なんかこの人には似つかわしくないって言うか…………。

「えつと、何を占いますか？」

「いえ、占いではなく、あなたに用事があつてきました」

という事は、私のファン？

まあ確かに「リージエント通り裏のアーニャ」って言ったら、ちょっとは知られた名前だけど、ファンが来るのは初めてね。

「お話があります。6年前の雪の夜について……アンナ・ユーリエ
ウナ・コロウアさん」

「!？」

ちよっ……何で私の本名知ってるの!？ この街の人でも「アー
ニャ」しか知らないってのに。
いや、そっちはともかく……6年前の雪の夜って、まさか。

「……あなた、何者？」

「申し遅れました。私の名は、結崎ゆちる」

蠱惑的な微笑を浮かべ、傲岸不遜な態度を崩さぬまま、彼女は言っ
た。

「天に坐する“王”を守護する、情熱的な女です」

……これが私と、私の師となる結崎ゆちるとの出会いだった。

第21話：修学旅行は波瀾万丈？（前書き）

というわけで、修学旅行編の下準備です。
主に陸斗が暗躍したり愚痴ったりします。

第21話：修学旅行は波瀾万丈？

〔Side Rikuto〕

麻帆良停電の翌日……俺とエヴァ、そして茶々丸は学食に来ていた。まあ、色々あったからお疲れ様、みたいな意味合いで奢ってやる事にしよう。

そんな感じで席に着こうとしていたんだが……。

「……………あ」

「む……………」

ネギ坊主（+オコジョ）とアスナに遭遇しました。……………ていうか、何故アスナが？

……………ああ、出がけに捕まったわけですか。

「こ、こんにちはエヴァンジェリンさん」

「……………ふん、気安く挨拶を交わす間柄になった覚えは無いがな」

ふむ、ネギ坊主の様子からするに、潰れずには済んだようだな。

氷の中に閉じ込められたネギ坊主見た時、さすがにやり過ぎだろうと思ったし……………。

「あの……………エヴァンジェリンさん」

「だが断る！」

ネギ坊主の言葉を遮り、切り捨てるエヴァ。……………いや、せめて聞いてやれよ。

ま、ネギ坊主が何を尋ねようとしていたかは俺でも想像出来る。大

方、ナギの事だろう。

エヴァ、行動を誘発させるために、ナギの情報を思わせぶりに喋ったのが間違이었다な。今後付きまとわれるかもだぞ……昔のタカミチみたいに。

「そ、そんな！ 父さんの事教えてください！」

「くどい。話す義理も無ければ、貴様には聞く権利も無い！」

最早漫才と化した2人の様子を、俺とアスナは苦笑しつつ、茶々丸はどう反応していいか分からないような顔で見守っていた。

……で、しばらくの間、そんなやり取りが交わされた後で……。

「ええい、しつこい！ そんなに知りたければ京都にでも行け！」

「京都？」

「詳しくは知らんが、ナギの隠れ家があったはずだ。学園長にでも聞いてみる」

だよな、と視線を向けてくるエヴァ。

ん……俺自身、京都には何度か足を運んだ事はあるけど……隠れ家には行ったことないからな。まあ、あるとは聞いた事あるが。

「それに、ちょうどいい機会だしな」

ああ、そういえばもうすぐだったか。京都への修学旅行。

……しかし、本当にどうするかな。いつその事、紫に頼んで増援でも送ってもらおうか？

放課後、京都に行けると喜び、ひたすらハイテンションなネギ坊主と共に学園長室を訪れ、開口一番に告げられたのは「修学旅行の京都行きは中止になるかも」という言葉だった。

……なお、その言葉にネギ坊主がどれほどのショックを受けたのかは……。

「きょうと……きょうと……」

この通りだ。さすがの学園長も冷や汗をかいている。

「これこれ、話は最後まで聞かんか。まだ中止とは決まっとらん。

……先方がかなり嫌がっておつてのう」

「先方？ 京都の市役所とかですか？」

いや、それは無いだろう。何で“たかが”修学旅行で市役所が嫌がるんだよ。

……そりゃあ、麻帆良学園はあちこちで騒ぎを引き起こしてるから、出入り禁止になった施設も無くは無いけど。

「あ……と、その前に……風峰君、ちょっと下がっていてくれんか？」

「……了解」

やっぱり、そつち関係の話か。

一応、表向きは一般教師で通ってるし、ネギ坊主と一緒に話を聞くのはマズイよな。

隣の部屋に入り、静かに聞き耳を立てる。

「関西呪術協会。それが先方の名前じゃな」

「か、関西呪術協会……！？」

なお、念のために言っておくが、レイヤは日本に来るに当たり、日本における魔法使いの勢力などもしっかり下調べしていた。下手な行動や言動を取ったりして、周囲に迷惑をかけたりしないためである。

「実はワシ、関東魔法協会の理事もやつとるんじゃが、関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪くてのう……。今年は1人魔法先生がおると言ったら、修学旅行での京都入りに難色を示してきおつた」

「え……じゃあ、僕のせいですか！？」

がーん、とショックを受けるネギ坊主。

まあ、そうだな。単刀直入に言ってしまうえばネギ坊主の所為なんだが……そうすんなり行かないのが大人の世界だ。

「まあ、聞きなさい。ワシとしては、喧嘩はやめて西と仲良くしたいんじゃ。そのための特使として西へ行ってもらいたい」

そう言い、机から封筒を取り出した学園長。

……おい、何か「特使」とかの単語から、凄い嫌な予感がしてきたんだが。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。ただ、道中向こうからの妨害があるやもしれん。彼らも魔法使いである異常、生徒達や一般人に迷惑が及ぶような事はせんじやろが……」

いやいや、充分に見境無しに来てるから。

4年前なんて、普通に木乃香誘拐されかけたの忘れたのかよ。たまにアイツがこっちに来てたからよかったものの……。

そんな感じで話が進み、ネギ坊主が部屋を出て行って、再び入室した俺と学園長のみが残された。……さて、ここからが本題だな。

「それで風峰君、1つ頼みがあるんじゃないか……」

「だが断る!!」

学園長の言葉を聞く前にきっぱり切って捨てる。

……今朝方エヴァが言ってたので、俺も1度言ってみたかった言葉でもある。

「ふお!?　せめて内容を聞いてから断るものじゃろう!？」

「大方、ネギ坊主のサポートをしろとかそういうのだろう?　この風峰陸斗の最も好きなことの1つは、自分の無茶ぶりがいつも通用すると思ひ込んでいる愚か者に『NO』と断ってやる事だ!」

某漫画家のように、腕を組んだまま胸を張って一気に言い放つ。:

…ふっ、決まった。

そもそも、何で毎回毎回後始末やらされてるんだよ。

おかげでまともに夫婦の時間も取れずに、衣玖から「私の旦那様は

忙しい方ですからね」とか、ねちねち嫌味言われてるんだよ！！

「だいたい分かってるのか？　今までもそうだったが、今回、よりよって木乃香が京都に行く時にネギ坊主を送り込む。その危険性がどれだけ高いか！」

「む、むう……」

関西呪術協会には、魔法使い……西洋魔術師を毛嫌いしている連中が多い。その中でも“英雄”と言われている者達に対して、どのような感情を抱くだろうか？

ネギ坊主は理解していない。英雄の息子というアドバンテージが、時に悪い結果を呼び起こす事になり得る事を。

ただでさえ「木乃香お嬢様を返せ」と何度も要求されているのに、修学旅行で京都市行き？　狙ってくるのは目に見えている。

「まあ、生徒の楽しみを奪うのは吝かではない。だがな、同行する魔法先生が俺と瀬流彦だけってどうなんだ、オイ！！」

「いや、一応ネギ君もじゃが……」

「レイヤはともかく、あんなの使い物になるわけないだろうが！」

修学旅行に行く生徒がどれだけいると思ってる！

確かに、俺は強い。それは自負してる。だが、「敵を倒す」事と「人を守る」事は違う。約150人を瀬流彦と2人で全て守りきる自信は無い。

「しかしのう、他の魔法先生は同行出来んのじゃ。担当クラスの授業もあるし……タカミチは海外じゃし」

じゃあ呼び戻せよ！　と叫びたかったが、おそらく無駄だろう。

ここでネギ坊主に説明した、という事は「既に決められた」事とな

っている。一介の教師である俺がいくら叫ぼうと、その決定は覆らない。

……相も変わらず、狡いぬらりひょんだ。

「ネギ坊主は知らん。だが、生徒の身の安全は守る。これは教師として当然の事だ」

「……………うむ」

それで妥協したのか、学園長もとやかく言ってくる事は無かった。そして、その晩……………。

「それは……………大変ですね」

俺は衣玖を誘って、超包子に飲みに来ていた。

事情を話すと……………さすがに衣玖は空気を読んでくれたのか、1番無難な答えを返してくれる。

ああ、大変なんだよ。常日頃、俺がどれだけ苦労してるのか……………！

「1度お会いしましたが……………瀬流彦さん、あまり戦闘向きというわけではありませんしね」

そうだ。前にも言ったが、瀬流彦は直接戦闘タイプの魔法使いじゃない。

俺やタカミチが相手を攻め立てる「攻」の属性なら、瀬流彦や式集院さんは「防」の属性。結界や電子精霊などによる後方支援の能力に優れている。

確かに、今回の仕事は「生徒の安全を守る」事だ。そう考えれば、瀬流彦の能力向きだと言っている。

しかし、守るだけでは勝てない。状況が状況だし、せめて魔法先生が2、3人いるはずなんだが……………。

「向こうが難色を示している、と」

点心を摘みながら、衣玖が核心を突いてくる。

そうなんだよなあ……過度の戦力が京都入りする事で向こうは警戒を強めてるし、こちらとしても無駄に刺激したくもない。

だから結果として、同行する魔法先生の数が少なくなってしまった。

「そう考えると、ハワイの方がよかったんだが」

「学園長先生のゴリ押しで京都市……ですか」

「ああ」

西と仲良くしたいとかどうとか言ってたが、どうせネギ坊主の存在をアピールしたいだけだろ。

それに、ネギ坊主をわざわざ特使に仕立て上げる必要もない。魔法秘匿の「ま」の字も知らないようなヤツだぞ？　どんな珍道中になるのか……。

「……なら、私も同行しましょうか？」

「は？」

「たまたま休みを取って、たまたま京都に旅行に行ったら、たまたま麻帆良学園の修学旅行と重なって、たまたま同じ旅館に宿泊するだけです」

いや、それ「たまたま」じゃないし。

まあ実際、衣玖の実力は折り紙付きだ。並の術者では歯が立たないだろうし、いてくれたら心強いのも確かだ。

「夫婦揃って旅行、というのも乙なものでしょう？」

「……俺、仕事で行くんだが」

「それはそれ、これはこれです」

かなり大変なんだぞ？ 生徒の引率って。

施設や他の観光客に迷惑かけないよう抑えなくちゃならないし、終始目が離せない。はつきり言って、旅行を楽しむどころじゃない。

……まあ、今回はネギ坊主もいるし、少しは負担が軽くなる……と思いたい。

（とりあえず、うちの武闘派にも依頼しよう）

〔Side Out〕

〔Side Eishun〕

お義父さんからの連絡によると、木乃香がこっちへ来るらしい。

さらに、木乃香のクラスには教育実習生として、あのナギとアリカ

様の息子、ネギ君が。そしてクラスメイトには2人の娘、レイヤ君がいるという。

…… 諍いの火種になるのは…… 火を見るより明らかなんだが。

「それで、10年間どうにか社会生活に適応している、社会不適合者のあなたから見た2人の評価は？」

『蹴り飛ばすぞ、お前』

古くからの知己であり、かつての戦友でもある、3-A担任教師はストレスの溜まった声で物騒な答えを返してくれた。
ははは、まあ想像はしていましたが。

「まあ、10歳の子供にそこまで期待していません。あなたの目から見た、ありのままの人間像を教えてもらえませんか？」

『…… 妹の方とはかく、ネギ坊主はハッキリ言つて、覚悟のかの字も知らない未熟なガキだ。一般社会の常識はもちろん、魔法は秘匿されるものつて事忘れてるんじゃないか？』

ふむ、どうやら風峰殿はネギ君の事はお気に召さないらしい。
タカミチ君から聞いた話でも、些か気になる部分はあつたが……。

『…… ちなみに、武装解除くわいごの主な被害者はアスナだ。しかも、ちよつと前まで部屋に居座られて相当お冠かんだった。部屋から出てった時は狂喜してたぞ』

「そ、それはそれは……」

アスナ君…… 気の毒に。

ちよつと前に聞いた話によると、記憶を消したというのは嘘。昔のままだと聞いていたが、それはそれでダメージが大きいのでは？
しかし、魔力制御も出来ていない子供を、木乃香と同じ部屋に住ま

わせるとは……お義父さん、木乃香に魔法を隠すつもり、ありませんね？

『多分、魔法がバレるのも時間の問題だぞ。打ち明けるなら早い内がいい。……潮時だろう？』

「……………そうかも、しれませんがね」

神鳴流の宗家青山家に生まれ、裏の世界を見てきただけに、あの子このかには危ない目に遭って欲しくない。

そう思い、魔法から遠ざけて、麻帆良のお義父さんのところへ預けたのだが……………やはり、私の考えは間違っていたようだ。

10年以上経ってから気づくとは……………私もまだまだ未熟だな。

『自覚してるならいい。家に帰ってきたらきちんと話してやれ。…

……………ま、叱られるのは覚悟しておけ』

「ええ、分かっています」

『それから、下の方を抑えてくれ。正直、そっちに行ける魔法先生の数足りないんだ』

まあ、確かに数が多ければ下手に刺激する事に繋がるし、少なければ警護の意味が無い。

あの風峰殿がそこまで言うのだから、かなり切羽詰まっているのだろう。

「それは……………難しいかと。木乃香だけならともかく、『千の呪文の男』の子供達』が来るという事でかなり警戒が強まっています。運悪く、腕利きの部下達がちょうど出払う時期と重なるので、私だけでは過激な行動に出る者達を抑えるのがやっとです」

『やはり、か。……………はあ、やっぱり修学旅行が京都ってダメだろ』

鶴子君は出張中だし、素子君は元より大学生で今は東京在住……。彼女達がいらないのも痛い。

……まあ、私個人としては、木乃香にも会いたいし、ナギ君とレイヤ君の顔が見てみたいとは思う。

しかし、その周囲に危険が及ぶ可能性が高い。お義父さんも何を考えているのか……。おまけに刹那君からの報告では、木乃香にお見合いを強要させているらしいし……。その辺りも今度しっかり問い詰めなければ。

「そういえば……風峰殿、聞きましたよ」

『何がをだ？』

「奥方がそっちに来ているらしいですね」

ぴしいっ！

……い、今の空気が凍て付くような音は何だろう？

『……どこから聞いた？』

「いや、刹那君が『寮に新しく、永江衣玖という女性が管理人になった』という報告をしてきたので……」

だからと言って、刹那君を責めないでくださいね。

木乃香の護衛である以上、新しくやってきた管理人に警戒心を持つのは当然の事。

……ちなみに、私は風峰殿と、ナギ達と知り合う前からの付き合いなので、その奥方ともそれなりに親交がある。

大方、風峰殿がずっとほったらかしにしていたのに痺れを切らし、八雲殿に『お願い』して麻帆良へやってきたんだろうが。

「まあ、夫婦生活を楽しめばいいのでは？」

『……詠春、今度百回死なす』

そう不吉な言葉を言い残すと、風峰殿はそのまま通話を叩き切った。やれやれ、少し調子に乗り過ぎたか。あの分だと、こっちに来た時にガチで殺し合いになりかねない。

……正直な話、今のままだと風峰殿に百回殺されかねない。

私としても鈍った感も否めないし、いい機会だから少し鍛え直しておくか。

〔Side Out〕

〔Side Asuna〕

「ねえねえ、この前管理人になったあの人、どう思う？」

「永江衣玖さん、だっけ？ すっごい美人さんだよね」

私は湯船に浸かりながら、そんな会話を聞いていた。

……まあ、衣玖さんは美人。紫さんも美人だし、幽々子さんも美人……てゆーか今更だけど、幻想郷の女の人って美少女、美人だらけじゃない？

「この前、一緒にお風呂入ったんだけど……胸おつきいし、腰なんてこう……キュツと締まってさ」

柿崎がそう、衣玖さんのボディラインについて語り始める。

そう考えてみると「ないすばでい」な人も多いのよね。……一部、ちよつと残念な人もいるにはいるけど。

まあ、それはうちのクラスにも言える。柿崎、アンタも普通に中3のスタイルじゃないから。

「そういえば、帰る途中に風峰先生と一緒に超包子で飲んだのを見ました」

「そうそう！ あれは“ラブ臭”を感じたわ！」

夕映ちゃん、余計な事言わない。ほら、みんなが色めき立ち始めた。普通に美男美女のカップルだから、目を引くのは分かるけどさ。その辺は……察してあげようね？

あとパル、ラブ臭って何よ。なんかその触覚がみょんみょん言ってるんだけど。

「そりゃそうだよ。あの2人、夫婦だもん」

まきちゃんがそう言った瞬間、熱気が籠もっていたはずの風呂場が、一気に凍て付いた。

……まきちゃん、お願いだから空気読もうね？

「…………まき絵、それ本当？」

「う、うん。ちょっと前に桜通りで初めて会ったんだけど、その時にそんな会話してたし、風峰先生も否定してなかったし…………」

「で、風峰先生と長く付き合いのアスナ。その辺どうなの？」

ちよっ…………いきなりこっちに話振らないでよ！　今まで無関係装ってたのに。

ほら、木乃香も興味津々な目でこっち見ないの。まったくもう…………。

…………まあ、別に衣玖さんが来た時、陸斗は何も言ってこなかったから、バラしてもいいだろうけど。

「本当よ。諸事情から別姓だけど、あの2人は夫婦」

そもそも、幻想郷にそういう習慣ないし。

あそこが外と隔絶されたのが明治時代だし、それまでも隠れ里的な感じだったそうだから、外の情報は入ってこなかったとか。

「そういえば、前に会ったことがある…みたいな事言ってたよね。その割には話してるトコ見た事ないけど」

「…………まあ、色々ね」

単にタイミングが合わないただけだけど、私としてはどう話していいかわからないところがある。

…………衣玖さんは「気にしてません」って言うてくれるけど、私はそうは思えない。

私が、衣玖さんから…………ううん、幻想郷から陸斗を奪ってしまったのだから。

第21話：修学旅行は波瀾万丈？（後書き）

さて、今回ちょっとだけ名前が出てきて「あれ」と思った人もいる
かも知れませんが……あの2人は登場しません。

逆算して考えて、ネギまの舞台が2003年、ラブひなが1998
2000年ぐらいだったので、数年しか離れてないため、まだ大
学生という事になります。

第22話：修学旅行1日目・波乱に満ちた旅行の始まり

〔Side Rikuto〕

詠春に連絡を取ったり、うちの武闘派（龍宮や長瀬）に「万が一の時は」という理由で依頼したり、旅行の準備したりと……そんなこんなで修学旅行当日を迎えた。

AM6:00

俺たち教師陣は、諸々の準備のために生徒達より早く、大宮駅に集まっていた。

今回、京都へ行くのは3-A、3-D、3-H、3-J、3-Sの5クラス。これ同行する教師は俺やネギ坊主を含めて7人。その内、魔法先生は俺、瀬流彦の2人。なお、ネギ坊主が役に立つか不明なのでカウントしていない。

新田先生達と今日の日程などを確認し終え、後は生徒が集まるのを待つだけだ。

「…………ふはははははは」

「ん？」

なんか、聞いた事のある高笑いだが……。

あまりいい予感はないが、それとなく視線を向けてみる。……案の定、明らかにハイテンションな金髪少女がいた。おいおい、どうしたんだよコイツ。

さすがの新田先生も怪訝そうな顔をしている。

「あれは……A組のマクダウェルですな。どうしましたか？」

「あ、いえ……本人、諸事情から旅行とか出来なかったので、それ

でテンションが上がってるのかと」

まあ、15年も閉じ込められっぱなしだったしな。あそこまで上機嫌になるのも分かるが。

おつと、閉じ込められっぱなしで思い出した。人目を避けて懷から位牌を取り出す。

「さよ、出てきていいぞ」

「あ、はい」

その声に応えて、どろん、と相坂が俺に見えるように実体化した。今は

この実体化を覚えてから普通に学校にも通っており、A組にはごく普通に受け入れられた。もちろん、幽霊云々は話していない。

……そういえば、さよの姿を見た学園長が面白いくらいに驚いていたようだ。さよは「よくわからない」みたいに言ってたが。

「それにしても、不思議ですね」

「ん？　これか」

と、さよの名前の入れられた位牌を持ち上げる。

今回の修学旅行にも『里帰り』の時と同様に、位牌という一種の媒介を用いる事によって、外出を可能としている。

さよは6班なので、事情を知っているエヴァや茶々丸辺りに位牌を預ける事にしよう。常に俺が持つてると、あまり離れられない。

「……………ん？」

おや、うちの生徒第1号（エヴァは除く）かな。誰か来たようだ。

……ああ、刹那か。ナツプザックに……おそらく野太刀を入れた細

長の袋を肩にかけている。

そういえば、刹那は今回の事について知ってるのか？

「あ、おはようございます。風峰先生」

「ああ、おはよう。……刹那、今回の事については？」

そう尋ねると、やや困ったような顔になった。

なるほど……俺たち同様に学園長の無茶ぶりに悩まされている、と。

「出来れば、私が影から護衛したかったのですが……班が違つたとなると、そう上手くは……」

「だったら班分けの時、積極的に行動すればいいだろうに」

実際、班を決める際、木乃香が強引に刹那を班に入れようとしていたが、顔真つ赤にした刹那が必死に抵抗したので、こういう班分けとなった。

……木乃香も木乃香だが、拒否するコイツもコイツだな。それで後でヘコむわけだし。

「一応、5班にはアスナもいるし、俺も事情は話してあるし、最低限のガードはしてくれるだろ」

「そう、ですか」

「……まあ、1日目と2日目は同じ場所を回るわけだから、なるべく側にいてやれ。それが木乃香のためだ」

ぼんぽん、と頭を軽く撫でてやる。

コイツも難しく考えすぎてるんだよな。ただ戦っただけじゃ、本当の意味での「守る」事には繋がらない。

今回の事で、刹那も少し理解してくれるといいんだが……。

[Side Out]

[Side In]

——AM10:30 新幹線「ひかり213号」にて

やれやれ、陸斗も大変そうですね。

あんなハイテンションなクラスの担任をしている、というだけでも大したものだと思いますが。

私ですか？ 3-Aとは一つ離れた車両に乗っています。もちろん、印象を変えるために眼鏡は着用済みです。

(……………あら？)

今、車内販売の方が通られたのですが、何か妙な気配を感じたような。

集中して気配を探ってみると……やはりあの女性から、僅かではあります。妖気を感ずる。女性自身が放っているわけでは無いようですし、それらを使役する立場……陰陽師でしょうか？

（もしや、関西呪術協会の？）

こんな真つ昼間から行動を起こすとは思えませんが、「あり得ない事はある得ない」というのが陸斗の口癖ですからね。注意は払っておいた方がよさそうです。念のために連絡しておきましょう。

携帯電話で陸斗にかけると……さすがに新幹線内なので電話には出ませんが、先の車両からこっちへと歩いてきた。

「何かあったのか？」

「怪しい女性が1人。おそらく、西の人間かと」

そう言い、怪しげな気配のした車内販売の女性の事を伝えた。向こうも一般人に危害を加えるとは思いますが、可能性が0というわけではない。

陸斗も同意見らしく、いつもより硬い顔で頷いてくれた。

「わかった。気をつけよう」

「ええ」

と、元の車両へ戻ろうとしたのですが……何やら、騒がしいですね。何かあったのでしょうか？ と思った矢先、私たちの真横を鳥らしき影が通り過ぎていった。何か啜っていたような気がしますが……。

さらに、その同方向からスーッ姿の赤毛の少年が走ってきた。

「ネギ先生？ 何かあったのか？」

「あ、いえ！ 今ちよつと急いでますので〜！」

なるほど、あの子がネギ・スプリングフィールドですか。

話には聞いていましたが、やはり子供ですね。

「……どうしましたか？」

「いや、さっきの鳥が啜えてたの、ネギ坊主が預かってた親書だった気が……」

……もしかして、向こうで騒ぎが起きた隙を突かれ、親書を奪われた……と。

な、なるほど。陸斗がストレスを溜めるのも分かる気がしますね。本当に警戒してるんでしょうか？

〔Side Out〕

「Side Leiya」

道中、色々ありました（カエルが出てきたり、式神が飛んできた））、どうにか京都へ到着しました。

……確かに、数百年単位で現存する木造建築物というのは、世界的に見ても珍しいものですからね。

イギリス生まれイギリス育ちの私としても、実に興味深いものです。

「おお、ここが例の飛び降りるアレ！」

「誰かつ、飛び降りろっ！」

……ここら、少しは落ち着いてください。他のお客さんが驚いてますよ。

とりあえずエヴァンジェリンさん、あなたも落ち着いてください。ノリがすっかり3-Aクオリティです。

「む、失礼な。私のどこが落ち着いていないと？」

「最初から最後まで全部です」

気持ちは分かりますよ？ 15年間ずっと麻帆良に閉じ込められっぱなしだったわけですし。

まあ、それはそれとして、どうもおかしいですね。

新幹線から感じていた事ですが、ずっと視線を感じます。まるで監視されているような……。

「レイヤさん、どうかしましたか？」

「……いえ、何でもありません」

心配そうに顔を覗き込んでくる茶々丸さんにそう答え、先へ行ってしまった他の人達を追う。

このおかしな出来事については、後で風峰先生にでも聞くことにしましょう。今は京都を満喫しなければ。

……あれ？ あやかさんにまき絵さん、どうしたんですか？ 穴なんかに落ちて……。

「いえ、私にもよく……」

「いきなり落とし穴に落ちちゃったんだよ。ほら、その石」

そういえば、そんなような事がパンフレットに書いてありましたね。えっと、目を閉じたまま石から石にたどり着ければ恋が成就する……なるほど。

「ズルしてバチでも当たったんじゃないの？」

「なっ……私はズルなどいたしませんわ！」

「私が薄目開けたからかな……」

いえ、こんな人為的なバチがあるとは思えませんけど。

しかし……落とし穴に力エル、ですか。もしかして、新幹線のアレと同一犯？

何だかネギも意味深な視線を……刹那さんにですね……向けてますし。刹那さんが気になるんでしょうか？

「はいはい、気を取り直して音羽の滝行こーよ」

ふむ、3本の水が通っていて、飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就する、ですか。

女の子はそういうの好きですからねえ。……私？ あんまり興味ありません。まだ10歳ですし。

「う、うまい！？ もう1杯！」

「た、確かに効きそうな…… 靈験あらたかなこの味」

やれやれ、あまり騒いだら他の方に迷惑でしょう。

どうせですし、私も1杯飲みましようかね。……ん？ 何か妙な臭いが。

まさかとは思いつつ、水が流れてくる屋根の上を見上げてみる。よく見てみると、1番左のところに何やらホースのようなものが……。

「何か酒臭いが…… どうかしたのか？」
「……………」

風峰先生に、無言で滝の上を指さす。

背の低い私からでははっきりしないが、大人の風峰先生の目線からなら見えるはず。

現に、何か見つけたらしい先生の顔が渋いものへと変わっていく……。

そのままシュバツと高く飛び上がり、滝の方で見つけたらしきものを抱え、降りてくる。あ、それって……。

「酒、だな」

「ええ……………」

ここからホースを通じて、音羽の滝にお酒が流れるよう仕掛けられていたわけですか。

とりあえず皆さんに注意を……遅かった。既にべろんべろんに酔いつぶれて……。

「……………ん？ 何かお酒臭く無いですか？」
「言われてみれば……………」

ちょうど、瀬流彦先生と新田先生もやってきました。
2人を見て……………ネギ達が青くなってますね。バレたら旅行中止の上、
停学とでも思ってるんでしょうか？

「あー、その……………これは」

「観光客狙いの悪質な悪戯のようです。滝の上にこんなものが仕掛けられていました」

あぶぶぶ、と焦るネギとは対照的に、風峰先生がどん、とお酒の樽を地面に置く。

それを見た2人……………特に新田先生の表情が強ばっていく。

「お酒、ですと……………」

「みんな子供ですからね。酒の味なんてわかんないでしょうし、靈験あらたかと思って飲んじやったんでしょう」

ええ、さつき実際あやかさんがそんなような事言っていましたし。

私は医学や薬学が専門なので、割と慣れてる方です。アルコールを薬の調合で扱う事がありますから。

ちなみに、未成年がお酒を飲んではいけない、というのは身体の発育に悪影響を及ぶ可能性があるからです。中学生は成長期ですから、その影響がより謙虚に現れます。……………現に皆さん、酔いづれちゃいましたし。

「とにかく、酔いづれちゃった子は全員バスに押し込みましょう。
瀬流彦、手伝ってください」

「あ、はい!!」

なんかすつごく、前途多難なんですが……。

そんなこんなでホテルまで来たわけですが……何だかネギが妙にうじうじしてて、ハッキリ言って「ウザい」です。

明らかに怪しかったので問いただしてみたんですが……。

「関西呪術協会が？」

「う、うん。学園長先生の話だと、この親書を狙ってるって……」

そう言い、懷から封のされた封筒を取り出すネギ。……ああ、だから風峰先生や刹那さんがげんなりしていたんですか。

よくよく考えてみると、おかしいですね。京都や大阪は関西呪術協会の縄張りなのに、魔法先生は風峰先生と瀬流彦先生しかない。

「ところでレイヤ、関西呪術協会の事知ってるの？」

「……当たり前でしょう。私たちは“魔法使い”です。現地の勢力について調べておくのが当然ですから」

「あう……」

英雄の子供達
そつえば、私たちがこっちへ行く事について、何も聞いてません

ね。

明らかに西の人達からは反発があると思ったんですが……何も言われなかったから、特に気にしなかったんですけど。

……いえ、私たちを気遣って、誰も言わなかったのかもしれませんが。それはそれでありがたいんですが……。

「そうだ、クラスの桜咲刹那ってヤツが敵のス파이らしいんだよ！何か知らねーか？」

はあ？ 刹那さんが？

「……バカですか、あなた。刹那さんがス파이なはずないでしょう」「な、何だとお！？」

「レイヤ、それどういう事？」

いや、どちらかと言うと、私がそう言いたいんですが。

まさか……本当に何も知らないんですか？ というか、何も聞かされていないんですか？ 刹那さんの立ち位置についても。

……学園長、恨みますよ。

「刹那さんは確かに、京都の出身。関西呪術協会とは深い関係にある“京都神鳴流”の剣士です」

「関西呪術協会って……やっぱり敵じゃねーか！！」

「話は最後まで聞きなさい、淫獣。……刹那さんの役目は、ある人物の護衛。そのために麻帆良にいるんです」

そもそも考えてみなさい。クラス名簿に「京都神鳴流」って書いたのタカハタさんですよ？

そんな風にわざわざ書いてあるのに、ス파이のわけ無いでしょうに。仮にス파이だとしても、今まで何もせずのさばらしにしているわけ

がありますか。

そうだったら、まずあなたに「気をつけるように」みたいな事を言うに決まっています。

「じゃ、じゃあ……今までの妨害は？」

「さあ？ 少なくとも刹那さんは味方です。他にいると考えていいでしょう。……というより、自分の生徒を疑うのは教師としてどうかと思いますけど？」

少しだけキツイ目でネギを睨むと、あからさまに怯えられた。

……まったく、話していてイライラする。少し考えれば、いや……刹那さんと話をすれば分かる事だというのに。

「とにかく、後は自分で何とかしてください」

「ええっ！？ 手伝ってくれないの？」

あなた、バカですか？ 何で私があなたを手伝わなくちゃならないんです。

親書云々もあなたの仕事でしょう。私には何一つ関係ない。

……もちろん、クラスメイトや同級生達に何かしらの危害が及ぼうとしているのなら……私も黙って見ているわけにはいきませんが。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

「……これでよし」

「お疲れ、瀬流彦。……腕を上げたな」

瀬流彦が今張ったのは、防御と感知能力を兼ね備えた結界。

外部からの“呪い”の類をシャットアウトし、また侵入者の存在を感知する。……まあ、魔法関係者と入れ替わりに入られたら意味は無いが……そんなドジは踏まない。

見た限り、術式構成も前より練られているし、これなら安心だ。

「いえ。それで風峰さん、早速妨害があつたそうですが……？」

うちのクラス

「3-Aを狙つてきてる。ネギ坊主の親書か、もしくは……」

「近衛さん、ですか？」

関西呪術協会に狙われる要因があるのは、そのどちらかだ。アスナはまた別だし。

早速来てるし。……学園長め、龍宮や長瀬への依頼料、経費でせしめてやる。

「しかし、あんなしょーもない妨害なんて意味ないだろ？」

「そ、それは……」

新幹線のカエル騒動は……ネギ坊主がちょっとドジったから危なかったわけだが、清水寺での一件はよく分からない。

落とし穴にカエル。さらに音羽の滝に酒。……何の意味があるんだ？

「もしかしたら、ホテルに行かせる事が目的かもしれませんよ」

「……レイヤ」

ぺこりと一礼し、俺たちにそう進言するレイヤ。

「さつき、挙動不審なネギから話を聞いてきました。何やら物騒な話になってるようですね」

ま、まあ……確かにそうだな。

否定できない事実なので、俺たちは苦笑する事しか出来ない。

いや、それはそれとして………どういう意味なんだ？

「生徒が酒で酔い潰れば、そのままバスに乘せられてホテルへ直行です。それが目的という可能性がある。それだけの話ですよ」

「つまり……既にホテル内に入り込んでいる可能性がある。そう言いたいのかい？」

「いえ、あくまでの可能性の話です。……もしかしたら、清水寺での妨害で目をそらし、その隙に親書や木乃香さんを奪うつもりだったかも知ですし」

そうになると、ホテル内を調べてみる必要があるな。

「それと、ネギと淫獣が刹那さんの事を『西のスパイじゃないか』って疑ってました」

「「はあ？」」

……おい、ちょっと待て。今、すごく嫌な予感がしたんだが。まさかとは思うんだが、学園長のヤツ、刹那の立ち位置についてネギ坊主に何も話してないのか？

「なお、私も聞かされていませんでした。……後で刹那さん本人から、事情はお聞きしましたが」

「「……………はあ」」

……あのジジイ、絶対物事を樂觀視してやがる。

「まあ、結界も張ってありますし、さすがにホテル内…………一般人の目につくかもしれない場所で騒ぎを起こしたりは」

「ひゃあああああああ~~~~~~~~っ!？」

レイヤがフラグっぽいものを踏んだ直後、その悲鳴が響き渡った。

「……………先生、今のって私の所為ですか？」

「……………いつもならそうするが、今回はかりは無理だ」

例えそこを踏まなかったとしても、その時はきつと訪れただろうか。……………というか、俺もそれっぽい踏んだし。

声がしたのは……………女湯だな。俺達が行ったらまずいな、うん。

「レイヤ、悪いが……………」

「……………ええ、分かってます」

第23話：修学旅行1日目・お嬢様を取り戻せ（前書き）

ちよつとペースが落ち始めてます……このままだと1日くらい間が開くかもです。

第23話：修学旅行1日目・お嬢様を取り戻せ

「Side Asuna」

「3 - A 防衛隊結成ですよ！ クラスのみんなを関西呪術協会から守りましょう！」

にこやかにそう宣言するネギだけど……うつ、その名前なんか知らない？

木乃香が誘拐されかけて、そこからの流れでネギとレイヤちゃんも交えて刹那さんから事情を説明してもらった。まあ、私もレイヤちゃんも事情は最初から知ってたけど。

……てゆーかネギ、何で刹那さんがスパイなのよ。

「じゃあ、僕見回りに行つてきます！」

「あ、ちよつと……」

意気揚々と飛び出して行くネギ。……まったく、少しは落ち着きなさいっての。

「アスナさん、刹那さん、すみません」

「いえ、お気になさらず」

「そうそう。別にネギがバカやったからって、それはレイヤちゃんには関係ないんだし」

いくら兄妹だからって、ネギの責任をレイヤちゃんが被る必要はない。

実際、ネギに脱がされた事を土下座で謝られたし。

「それはそうと、やはり学園長の見通しの甘さが響いてきましたね」
「……………ええ」

やっぱり、狙いは木乃香……あそこまであからさまに狙ってくる
なると、この先一般人に被害が及ぶ事もあり得る。

その可能性があった事は分かっていたはずなのに、修学旅行に来て
いる魔法先生はネギを入れて3人。魔法生徒も10人にも満たない。
おまけにネギはひよつ子、瀬流彦先生も直接戦闘型じゃないって聞
くし……圧倒的に戦力が足りないじゃないの。

「せめて、後2、3人いてくれればどうにかなるんだけど……」

「あら？ お力が必要ですか？」

え？ と思いつつ振り向くと……そこには見覚えのある女性が1
人。

つて、衣玖さん！？ 何でここに！

「いえ、たまたま休みを取って、たまたま同じ新幹線に乗り合わせ
て、たまたま旅行先も同じで、たまたま宿泊先も同じだっただけ
です」

「は、はあ……」

呆氣にとられているレイヤちゃんと刹那さん。

……あ、そういえばこの2人って衣玖さんの事あんまり知らない
じゃ……噂話みたいなものとは無縁なタイプだし。

「あの、アスナさん。この方は……？」

「うちの寮の新しい管理人さん」

「永江衣玖と申します」

ぺこり、と一礼する衣玖さん。

そして私は、さらに爆弾級の威力を持った一言を投げかけてしまう。

「で、陸斗の奥さん」

その言葉に文字通り、2人は凍り付いた。

え？ ちよっ……ここまで衝撃受けるってどうなの？ てか、本当に知らなかったの！？

……とりあえず、2人がフリーズ状態から立ち直るのに5分かかった。

「た、確かに以前、既婚者だとは聞いていましたが……」

「まさか、こんなに近くにいたとは……」

あゝ……そこはちよつと違うのよね。

10年近くほったらかしにしてて、この前里帰りした時に衣玖さんとは会わずに戻ってきちゃったのよ。で、それに衣玖さんがキレて麻帆良に飛んできた……と。

そう説明したら、2人とも呆れていた。うん、こればかりは完全に陸斗が悪いし。

「それで衣玖さん、今回の事なんですが……」

「ええ、分かっています。非才の身ではありますが、お力添えいたします」

いやいや、非才って……私達よりずっと強いじゃないですか。戦闘場所と状況・環境によつては、陸斗と互角で戦えるくせに。

でも、衣玖さんがいてくれるなら、私達もかなり安心して戦う事が出来る。

……よし、私もアレ用意しておかないと。

~~~~~♪

「これは………」

「あ、私のケータイだ」

えっと、着信相手は……ネギ？ 何かあったのかな。

「もしもし？」

『姉さん！ 木乃香姉さんが連れてかれちゃった！』

な、何でネギのケータイからカモの声……って、ええ！？  
ちよっと待った！ いつ、どうやって、どこから！？

『後、兄貴と俺っち動けねえ！ 助けてくれ！！』

[Side Out]

「Side Negi」

アスナさんも協力してくれるみたいだし、刹那さんだって味方になってくれた。

レイヤは……ちょっと分からないけど、「クラスメイトは守ります」って言ってたから、きっと協力してくれると思う。

これならきつと、関西呪術協会からクラスの人々を守る事が出来る！

「やっぱりよお、兄貴。これを機に仮契約した方がいいんじゃないか？」

「うーん……それは、無理かも」

アスナさんからは断固として拒否されたし、仲良くなったばかりの刹那さんにもそんな事お願い出来ないし、レイヤは……うん、冷たい目で見られる。

他に魔法がバレてる人はいないから、仮契約は難しいんじゃないかな？

「何言ってるんだよ！ 木乃香姉さんが狙われてるんだぜ？ 戦力増強のためにも、ここは一発ブチューっと……」

「う、うーん……」

そ、そうだよな……うん、後でもう一回アスナさん達に頼んでみよう。

……ん？ 何だろこの音、どすんどすんって……重たいものが走ってくるような……。

と、僕らの前に大きなおサルが、どすんっと着地した。その腕には

誰かが抱えられている……って木乃香さん!?

「あら、さっきはおーきに。カワイイ魔法使いさん」

おサルの中に女の人!?

い、いや……そうじゃなくて、何で木乃香さんが!? まさかこの人、関西呪術協会の……!?

「待ちなさい、おサルさん! ラス・テル・マ・スキ……もがつ!」

ち、小さいおサルが邪魔を……! 離してください!!

「こ、コイツはやべえ……そうだ!」

と、カモ君が僕の浴衣のポケットに飛び込み、中から僕のケータイを引っ張り出した。

そうだよ、カモ君! 早くアスナさん達に……!!

[Side Out]

「Side Leiya」

淫獣からの連絡を受け、僅かに残っていた木乃香さんの魔力を追っていくと……風呂場に現れたのと同じ猿が、ネギに絡んでいた。アスナさんがネギにくっついていた猿を全て引っぺがすと、ネギを起き上がらせる。

「ネギ、大丈夫!？」

「は、はい……それより、でっかいおサルさんが木乃香さんを!」

木乃香さんの魔力は……まだ、それほど遠くには行ってませんね。これなら追いつける。

そのままネギを加えて木乃香さんの魔力を辿っていくと、前方にどすどす走るでっかい猿が見えた。その腕には木乃香さんが抱えられている。

「……待て——っ!!!」

「ち……しつこい人は嫌われますえ」

女性、ですね。それにこのしゃべり方から京都の方。やはり、関西呪術協会の刺客!

そのデカい猿は、止まる事なく駅へと入り込んだ。私達も同様にその中へ飛び込む。

「ちょっとおかしいわよ、終電間際にしては乗客も駅員も1人もいない!」

「人払いの呪符です。普通の人は近づけません!」

と言うことは、予め決められていた逃走ルートという事ですか。電車も出発寸前……つと、どうにか滑り込みセーフ! 普段だったら怒られますね。

……しかし、あまり運動は得意では無いんですが……ふう。

「前の車両に追い詰めます!」

確かに、自動走行しているのなら、前に追い詰めれば逃げ場はない。

「ふふ……ほな、2枚目のお札ちゃんいきますえ」

お札ちゃん? 確かにあの人の側の小猿が呪符らしきものを……。つて、今のこの状況は……まずい!

「お札さんお札さん、ウチを逃がしてくれやす」

そう言い、呪符が投げられる。ですがそれ故に、読めてます!!

「『氷結・術式封印』!!」

私が指を鳴らすのと同時に、その呪符が完全に凍り付く。

今のは、私の解呪の研究での副産物。東西関わらず、全ての術式を封印する魔法です。尤も、効力の高いものには効果は薄いですが。

「う、ウチの呪符を封じ込めた!？」

がたんと電車が揺れ、停車する。

私達の動きが一瞬止まった隙を見計らい、デカ猿が電車から飛び降りる。チツ、このまま逃がしはしませんよ！！

駅から出て、さらに走り出す。そのまま長い階段までたどり着くとそこには……。

「フフ……よーここまで追ってこれましたな」

さ、猿が脱げた！？ 丸めがねにエプロン……あれ、この人確か。

「あなた、新幹線の車内販売員でしたね？ では、一連の騒動はあなたの仕業ですか」

「ほう、なかなか頭回るお嬢ちゃんみたいやな。せやけど、それもここまでですえ。……3枚目のお札ちゃん、行かせてもらいますえ」

さっきのは電車内だったから、使われる術が予想出来ましたが、このように開けた場所だと何が来るか分からない。

きっちり術に合った属性でなければ逆効果になる事もあるからです。

「おのれ、させるかっ！！」

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

刹那さんが駆け出そうとするが、それよりも女性がお札を投げる方が早かった。

アスナさんが術に巻き込まれないよう、刹那さんを掴んで引き寄せる。

「三枚符術、京都大文字焼き！」

瞬間、大の字で凄まじい炎が巻き起こる。

危なかったですね、もしアスナさんが刹那さんを引き寄せていなければ……。

「ホホホ、並の術者ではその炎は越えられまへんえ。ほな、さいなら」

ええ、確かに並の術者なら無理でしょう。

ですが残念ながら、私は並の術者ではありませんので。

「フィ・ニリア・エル・レア・ファイアールア 目醒め現れよ浪立つる水妖、水床に敵を沈めん！」

炎には水。これが定石。

それに、さっきのお礼も兼ねて撃たさせていただきます。

「『流水の縛り手』！」

水柱が出現し、炎を越えて女性へと向かう。

しかし、彼女を呑み込む寸前で、その前に現れた何かによって阻まれる。

「『風花・風塵乱舞』！！」

ネギも同時に詠唱していたらしく、手には携帯用の杖が握られていた。

凄まじい風が吹き渡り、残っていた炎を全て吹き飛ばす。ネギにしては、なかなかやりますね。

「な、何や——!?」

「逃がしませんよ! 木乃香さんは僕の生徒で……大切な友達です!」

……言うじゃないですか、ネギのくせに。

ですが、私も同意見です。クラスメイトに手を出すのを見過ごす事は出来ません。

「アスナさん、刹那さん……行きますよ!」

「OK!」

「え……あ、はいっ!」

見たところ、相手は陰陽師。直接的な戦闘力は低いはず。

先ほど聞いた善鬼と護鬼を出してきたとしても、それぞれアスナさんと刹那さんに任せれば、残るのは彼女だけ。それは私とネギだけでも充分に叩ける!

「はあっ!」

「こっのおおっ!」

刹那さんとアスナさんが、女性に向かって跳躍し、それぞれ攻撃を繰り出す。

が、女性の前にさっきのデカ猿に、さらに熊のぬいぐるみが現れ、攻撃を受け止める。私の呪文を受け止めたのもコイツらですね。

アスナさんは素早く距離を取ると、懷からカードを取り出した。……え、あれってまさか……!

「アデアット!」

アスナさんの手に、巨大な剣が握られる。表面には「MINIST

RA M I G I A S U N A」の文字が刻まれている。間違いない、あれはアーティファクト。

しかし何故、アスナさんが仮契約カードを？ ネギとは仮契約していないはず。実際、ネギも淫獣も相当驚いてますし。

「どきなさい、このデカ猿！！」

アスナさんが剣を振るうと、デカ猿は一撃で叩き斬られて消える。防御の上からあの威力……アーティファクトの能力でしょうか？ それともアスナさん自身の力？

「刹那さん！ そっちのクマは何とかするから、木乃香を！」

「すみません、お願いします！」

確かに、あれだけの力があれば式神相手には戦いやすいはず。それに式神がアスナさんに行っているなら、彼女を守る物は何も無い。この勝負、いただきました！

私と刹那さんが女性に向かって駆け出すが、私に向かって黒い影が飛び出す！

「させへんわっ！！」

「くっ！」

障壁で防いだとはいえ、なかなか重い打撃のようですね。顔を上げて、横やりを入れた相手を見てみると……………。

「ほお……今のを受け止めるとは、なかなかやるやないか」

私とそう変わらない年頃ですね。黒髪からちょこんと犬のような耳が飛び出ている少年……………。

刹那さんの方も、やや短い刀を両手に構えた少女と向き合ってます。やはり、雇われている人間がいるというわけですか。厄介ですね……。

「女とやるんは主義やないけど、相手したるわ！」

「……接近戦は得意では無いんですが」

心得が無い、というわけではありません。

身体が弱いとはいえ、ある程度の護身術ぐらいは嗜んでいます。

少年が迫り、鋭い拳打を連続で繰り出してくる。全ては捌き切れず、何発かは障壁で受け止める。

くっ……接近戦では向こうに利がありますか……。

「ホホホ、これで足止めOKや。所詮小娘2人に見習い剣士や」

これでは少しマズイですね……。

「『魔法の射手・戒めの風矢』……！」

その声と同時に、ネギから魔法の矢が放たれた。

ナイスです、ネギ！ たまには褒めてあげます！

攻撃力の無い風属性なら、木乃香さんも傷つけずに拘束でき……。

「あひいつ、お助け……！！」

「あ、ま、曲がれ！」

はあっ！？

女性が木乃香さんを楯にしたのを見て、魔法の矢が女性をそれて的外れの方向へと向かっていった。

ちよっ、何やってるんですかあのバカは！

「よそ見してる暇あるんか!？」  
「ちっ!」

少年の攻撃を捌きながら、どうにか女性の方へ向かおうとするが……うまく行かない。  
あまり人前でこれを使いたくは無かったのですが、仕方ありませんね。

「どきなさいっ!！」  
「なっ………!？」

私の一撃を受け、少年が簡単に吹き飛ばされる。  
少年も、防御したにも関わらず吹き飛ばされたため、何が起きたのか分からない顔をしている。  
……私の奥の手の1つです。本来、こんな場所で晒したくは無かったのですが……。

「『氷結・武装解除』!！」  
「なあ~~~~っ!？」

女性の衣服が凍り付き、一気に砕け散る。  
……木乃香さんを巻き込んでしまったので、後で謝っておきましょう。

武装解除を受けて、構えが崩れた彼女にアスナさんが接敵し、必殺の跳び蹴りを叩き込んだ!

「ろもすこみれっ!？」

モロに受けた女性は、妙な悲鳴を上げて、ぎゅるぎゅると吹き飛ん

だ。

木乃香さんは刹那さんが受け止め、すぐに上着を着せる。

いや、何て言うか……凄じ蹴りでしたね。アスナさん、ぐるぐる回ってましたし。

「くっ……小太郎、月詠はん、退きますえ!!」

どろん、と額に「2」と書かれたデカ猿が現れ、女性がそれに捕まって飛び去った。

ここからだ……追いつけませんね。見ればさっきの少年と少女もいませんし。

……まあ、木乃香さんを取り返せただけ、よしとしましょう。

[Side Out]

[Side Rikuto]

レイヤ達の戦闘の様子を眺めていたのだが……思ったよりやるじゃないか、あの子達。

しかし、完全にしくじったな。木乃香が浚われるとは……。

どこから潜り込んだかは、後で茶々丸にでも頼んで監視カメラを確認しておこう。

「……………で、いつまで見てるつもりだ？」

そう、ビルの影にいる誰かに声をかける。

もう1人いる。おそらくは、さっきの猿女の仲間の1人……それも相当な実力者。

俺の声に応え、その誰かさんがこちらへと歩いてくる。月明かりにその姿が晒され……ん？

「お前は……………」

「久しぶりだね“空に坐す者”」

現れたのは白髪の少年だった。歳はレイヤと同じくらい。学生服のような衣服に身を包んだ、どこか虚ろな印象を覗わせる……………。

……………おいおいおい、何でコイツがここにいるんだよ。

「確か、『地』のアーウェルックス……………だったか？」

「そうだよ。……………まあ、今はフェイト・アーウェルックスと名乗っているけど」

無表情にそう告げる少年……………フェイト。

しかし、コイツが出てくるとはな。目的は……………アスナか？ いや、そもそも何故旧世界にまで……………。

「最初に言っておくけど、僕は君と争うつもりはない」

「何？」

「それにおそらく、互いにいくつか誤解している事があるはずだ」

誤解？ いったい何の事を……………。

「10年前、君の仲間を襲撃したのは僕らじゃない」

「何……………？」

「それに僕らは今のところ、計画を実行するつもりはない」

「！？」

これには驚いた。てか、普通に信じられない。

20年前、あの“造物主”の命に従い、世界を滅ぼそうとしていた男が何を……………。

「それが“彼”の意志だからだよ。……………その“彼”の考えを変えたのは、他でもない君だろう？」

いや、俺は特に何もやってないんだが……………どっちかといえば、激戦の上に舌戦だっただけで。

……………まあ、今ちよつと思ひ起こしてみれば、確かにそれっぽいような事を言ってたような気が……………。

「その事については、また後日話し合う事にしよう。……………君も仕事があるんだろう？」

「……………まあな」

とりあえず、ケータイの番号を交換して別れた。

……………いや、何でこうなったのか俺だって分かんないし。何で俺、敵だった相手とケー番交換してるのさ！？

第23話：修学旅行1日目・お嬢様を取り戻せ（後書き）

アスナキックのイメージは、ス。クキックです。

あの何だかくるくる回るヤツ。アスナもその気になれば壁を走れます。

**第24話：修学旅行2日目・命短し恋せよ乙女【前編】（前書き）**

後書きで、ちょっとしたアンケートを行いますので、よろしければご協力お願いします。

## 第24話：修学旅行2日目・命短し恋せよ乙女【前編】

「Side Eva」

よく分からんが、近衛木乃香が誘拐されかけたらしい。

その辺りはレイヤが活躍して何とかなったとか。で、桜咲刹那は近衛木乃香から逃げ回っている……と。ま、私には関係ない事だが。それで今現在、陸斗が頼み込むので、茶々丸に協力させてやっている。

何でも近衛木乃香を誘拐したヤツが、どこから入り込んだのかを知りたいのだとか。

「……………ハッキング終了しました。監視カメラの映像、コピー成功です」

「じゃあ、適当に再生してくれ」

監視カメラの映像が、ノートパソコンに映し出される。

ふむ……………別にぱつと見では怪しいところは特に無いが……………。

それに侵入者がいれば、普通に気づくだろう？ 曲がりなりにも結界は張ってあったわけだし。

「……………ん？ ちょっと今の正面玄関のところ、もう1度頼む」

「はい」

正面玄関だと？ そんな馬鹿正直に入ってくるヤツがいるわけないだろう。

そう思っただけその部分を見てみると……………ばーやが走って正面から出て行くこうとして、外から来た女とぶつかった。

……………おい、まさか……………コレか？

「ああ、おそらくコレだ。……あのガキ、また余計な真似を……」

よく見てみると、ぼーやが自動ドアを開けると同時にその女が走り込み、衝突している。

お人好しなぼーやはその女を怪しむ事なく、落ちた荷物を拾うと、そのまま外へと駆け出していった。

……つまり、今回の誘拐騒ぎはぼーやが原因か？

「ま、顔も割れてる事だし、同じ手は使わないだろう」  
「だろうな」

しかし、大変だな。じじいの見通しの甘さで困ってるようじゃないか。

どうだ？ 手を貸してやろうか？ もちろん対価は要求するが。

「今のところはいい。ヤバくなったら頼む」

「わかった。……せいぜい、そうならない事を祈るんだな」

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

監視カメラの映像を確認した後、部屋に戻った俺は詠春に電話をかけていた。

内容は主に、木乃香の誘拐未遂とアーウェルンクスの接触について。

『アーウェルンクスが……！ では“完全なる世界”が背後に？』  
「いや、見た感じそうじゃなかった」

あのメガネの神鳴流剣士も、犬っぽいガキも、少なくとも雇われただけって感じがした。

そもそも“完全なる世界”は、タカミチやクルトの尽力によってほぼ全てが掃討されているため、背後に就くだけの力は無いはず。

おそらく、何らかの理由があって協力している……もしかすると、狙いはネギ坊主とレイヤか？

『考えられますね。ネギ君もレイヤ君もアリカ女王の……ウェスペタルティア王家直系の人間。向こうとしても無視は出来ないでしょう』

「可能性としてはそれが一番高いな。……で、俺が気になってるのはアイツが言ってた事なんだが」

『……計画を実行するつもりはない、ですか』

滅び行く魔法世界を、黄昏の姫巫女の力によって“完全なる世界”へと封ずる。

世界を造った者が行き着いた、世界を救うために世界を滅ぼす計画。フェイト達にとって、造物主の意志は絶対。彼ら自身、その意志に従って計画を遂行しようとしていた。

言葉の上ではいえ、『計画を実行するつもりはない』と言えるものだろうか？

「判断するには情報が少なすぎる。何はともあれ、話を聞いてみてから……だな」

「……わかりました。そっちはお任せします。それで、襲撃者についてですが」

「何か分かるか？」

襲撃者のあの女。クマと猿の式神を使っていたところから、西の人間なのは間違いない。

詠春なら、何かしらの情報が得られるかもしれないと思ったのだが……。

『おそらく、その術者は……天ヶ崎千草かと思われます』

「天ヶ崎……？」

はて、どこかで聞いた事のあるような……。

天ヶ崎、天ヶ崎……ん？ おい、まさか天ヶ崎って……！

『ええ。20年前の国境戦で戦死した、天ヶ崎夫妻の娘です』

「……目的は、復讐か」

『おそらく』

思わず手で額を覆った。

“紅き翼”の……ナギの負の遺産、か。これでネギ坊主達がナギの子供だと分かったら、間違いなく殺しにかかるな。

しかし……レイヤはともかく、問題はネギ坊主か。

「ネギ坊主はまず納得しないぞ。アイツにとってナギは“英雄”なんだ。負の遺産をどうこう言っても聞き入れるかが分からね」

『……参りましたね。我々は本来、崇められるべき存在では無いというのに……』

2人して、ため息をつく。

別に俺達は英雄になるつもりなどなかった。結果的に英雄になっただけだ。

ナギも、最初は名を挙げるため、力を試すために参戦したという。英雄になったのは結果に過ぎない。

「とにかく、ネギ坊主に俺の事は言っなよ。いいな？」

『わかりました』

その翌日……修学旅行も2日目を迎えた。

今日は奈良で判別行動。教師は主に、好きな班と行動出来るのだが……。

（ほう、意外だな）

朝食を終え、部屋に戻る途中だった俺の目に飛び込んで来たのは、宮崎がネギ坊主を誘う場面だった。

俺の目から見て、宮崎のどかはハイテンションな3 - Aの中では一際大人しく、一歩後ろに下がった生徒に見えていた。しかし、ここまで積極的に出るとは思わなかったな。

「わかりました、宮崎さん！ 今日僕、宮崎さんの5班と回る事にします！」

「え……………」

ネギ坊主のその言葉に、周囲からも「おおっ」と歓声上がる。まあ、ネギ坊主の考えは「5班にはアスナさんがいるし、お猿のお姉さんに狙われてる木乃香さんもいるし……………」と言ったところだろう。

………… ネギ坊主、少しは女の子の気持ち分かるようになるうな？

[Side Out]

「Side Leiya」

修学旅行も2日目。私達6班は奈良公園に來ています。

……なお、エヴァンジェリンさんは昨日に引き続き、ひたすらハイテンションで、私にさよさん、茶々丸さんは宥めるのに一苦労です。刹那さんはいつもにも増して積極的な木乃香さんから逃げ回り、ザジさんは……どこ行ったんでしょう？　それで私はと言うと……。

「……………」

角が立派な牡鹿に、そつと鹿せんべいを差し出す。

鹿は、しばらくの間こつちをじつと見ていましたが、もしかもしゃとせんべいを食べ出した。

……ううん、可愛いですね。その様子に、さよさんも癒されています。

「はあ……いいですね」

「さよさん、修学旅行には？」

「えっと、來た事無い……と思います」

えっと、確かさよさんが亡くなったのが60年前で……戦前ですよ。

その頃の日本って、どういう学校制度だったんでしょう？

「ほらレイヤ！　いつまでも突っ立ってないで、次行くぞ次！」

「わ、ちょ、ちょっと……引つ張らないでください！」

15年間出られなかったからって、落ち着いてください。

エヴァンジェリンさんはそのまま私を東大寺の大仏殿の方へと引って張っていく。

はあゝっ、大きいですね。これが有名な奈良の大仏ですか。写真撮っておきましょう。ケータイケータイ……。

「大仏が大好きでっ……………」

「へえゝ、渋い趣味ですね」

……………ん？ 何ですか、今の漫才。

さよさんとエヴァンジェリンさんも怪訝そうな顔をしており、柱の影に隠れてそっちの方を覗き込むと……………。

「……………ネギ先生と、宮崎さんですね」

「何やってるんでしょう」

あ、向こう側にハルナさんと夕映さんが隠れて何か言ってるん……………？ 遠くてちよつとよくわかんないですね。

「あの、そのっ……………私、ネギ先生が大……………大吉で……………！」

「あ、はい。おみくじ引きますか？」

「いえっ、じゃなくて——大吉が大好き……………いえ、大仏……………」  
「うえゝん、大凶でした……………」

だから何なんです、その漫才。

傍から見てる分には面白いんですが、何か妙ですね……………。

「……………あ、もしかして告白しようとしてるんじゃない」

「告白だと？ 宮崎のどかがばーやにか？」

「ええ。さっきから『大好き』とかそう言っつので詰まっていますし」



「……しばらくそれは使うな。命にも関わるぞ」  
「わかっています」

本当に「奥の手」の1つですから、人前では使いたくありませんし。一応、他にも戦い方は持ってますので、極力これは使いませんよ。

〔Side Out〕

〔Side Fate〕

「そう、そっちは順調なんだね」

『ああ。この様子なら予定よりも早く稼働が可能だ。……テルティウム、お前の目から見た英雄の子供達の様子はどうか？』

デユナミスの言う「様子」とは、今後僕たちの障害となり得るか、という意味合いだ。

あの計画を実行に移すつもりは無いとはいえ、変な勘違いをして敵対する可能性も否定できない。……10年前の“千の呪文の男”のように。

「一言で言うなら、子供だね。今のままなら少なくとも障害にはならない」

『ふむ……』

「だけど、兄の方はともかく、妹の方はそうとは言えない」

情報によると、兄の方が優秀だとされているが、それはあくまで座学での事。実戦では妹の方が勝る。

それに、遠くから少ししか見えなかったけど、犬上小太郎を吹き飛ばしたあの一撃……おそらくは王家の魔力。

『王家の魔力だと？ 見間違えではないのか？』

「非力な少女が、防御の上から何mも吹き飛ばしたんだ。……大戦期のアリカ王女の記録映像を覚えているだろう？」

『……………』

そう言うと、さすがのデユナミスも黙った。

いや、あれは僕もどうかとは思った。“千の呪文の男”がぼんぼん投げられているのだからね。

あれを見て暦君達大笑いして……正直、あんなのに負けたかつての僕が情けなくなってくる。

「ただ、妹……レイヤ・スプリングフィールドは先天的に身体が弱いらしい。魔力の巡りがおかしかった」

『つまり、王家の魔力に身体が耐えきれない？』

「おそらく」

しかし、あの症状……おそらく完治は可能だ。極東最強の魔力の持ち主、コノエコノカ。彼女の力を使えば、或いは……。

少なくとも愚鈍では無いのだから、僕達の障害となる事は無いはず。

「とにかく、このつまらない仕事と“空に坐す者”との会合を終わらせ次第、すぐ戻る。それまではそつちを頼む」

『分かった。……それより、あの娘達はどうかできるのか？ 騒がしくてたまらん』

「……………善処するよ」

まあ、収穫はあった。“空に坐す者”と接触が持てた上、英雄の子供達の存在を確認する事が出来た。

後は彼らがどんな行動を取るか……………お手並み拝見と行かせてもらうよ。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

観光からホテルに戻つてくると、ネギ坊主の様子がおかしかった。ぼーっと思つたら、急にごろごろ転げ回ったり……明らかに変質者だ。

……あれ、何があつたんだ？

「ネギ先生、どうされたんですの？」

「昼の奈良公園で何かあつたの？ ネギ君」

「い、いえ別に何も……誰も僕に告つたりなんて……」

は？ 告白？

考える暇も無く、こつくりさんがどうこうなどと意味不明な事を言いながら、ネギ坊主は飛び出して行った。  
マジで何があつたんだ、あれ。

「……………本屋ちゃんがネギに告白したのよ」

こつそりとアスナが耳打ちしてくれた。

ああ、宮崎がねえ……まあ、納得と言つかなんと言つか……。

じゃあネギ坊主は、告白にどう答えるかで悩んでるわけか？ 英国紳士がどうかで。

「多分ね。告白されて大変だったのよ、知恵熱で倒れて」  
「あ……………」

その光景が、簡単に想像出来るのが嫌だな。  
ま、10歳の子供にはキツイよな。俺やタカミチは割と告白受けるけど、クールに大人の対応で断ってるが。

「……へえ、その話……興味深いですね」

「……おい、首に羽衣はヤメロ。マジで窒息する……。そのまま電気でも流されたら、ホントにヤバイから。下手したらホテルにも被害出るぞ。」

「安心してください。まだやりませんから。……それで、誰が誰から告白を受けたんでしょうか？」

「だから……俺は既婚者で、相手は生徒だ。断ってるに決まってるだろうが」

10年も教師やってると、普通に告白とかされて大変なんだよ。

……時には教師からとかもあったぞ？　もちろん全部断ってるが。

「とにかく、ネギもいっぱいいいっぱいなの。こんな時に何かあったら大変だから気をつけてよ？」

「……アスナ、世の中にはフラグというものがあってな」

「……ごめん、今のは失言だった」

いや、フラグっぽいものを踏んだからといって、必ずしも何か起るとは言えないんだが。

……しかしその数十分後、凄まじい泣き声がホテル内に響き渡り、俺達は頭を抱える事になるのだった。

第24話：修学旅行2日目・命短し恋せよ乙女【前編】（後書き）

アンケート

鬼と天狗、どっちがいいですか？ 内容はご想像にお任せします。

なお、このアンケートによって、修学旅行3日目のあるイベントに変化が生じます。

皆さんのご協力を期待しています。

第25話：修学旅行2日目・命短し恋せよ乙女【後編】

〔Side Asuna〕

……もーダメだ。ここまでバカだとは思ってなかった。  
よりによってあの朝倉にバレるなんて……お終いね、これ。

「……うん、アンタ世界中に正体バレて、オコジョになって強制送還決定だわ」

「そ、そんなあああああああ!？」

「朝倉にバレる」世界にバレるだもの。諦めなさい」

さすがの事に、刹那さんとレイヤちゃんも相当困った顔をしている。  
……まあ、ネギ1人ならともかく、私達まで連帯責任とかなったら  
厄介よね。

「おーい、ネギ先生」

「ここにいたか、兄貴」

ん、何よ。朝倉。……てか、何でカモがアンタと一緒にいんのよ。  
とりあえず、釘だけでも刺しておこうかしらね。

「朝倉、アンタあんまり子供虐めるんじゃないわよ」

「イジメ? 何言ってるのよ。てゆーか、アンタの方がガキ嫌いじゃなかったっけ?」

まあ、そりゃそうだけど……。  
いやいや、今はそうじゃなくて、魔法の事よ魔法の事。

「姉さん、このブン屋の姉さんは俺らの味方なんだぜ？」

「え？」

「報道部突撃班・朝倉和美、カモっちの熱意に絆されて……ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していく事にしたよ、よろしくね」

あゝ、要するにカモが説得してたって事ね。

……カモが、つてところがすっごく怪しいし、先行き不安ではあるけれど。

「よ、よかった、問題が1つ減ったです……」

「よかったじゃない」

……だから、カモと朝倉つてところが不安なの。

守銭奴のカモに、パパラッチの朝倉……この2つが混ざったら嫌な化学反応を起こしそうなんだけど。

「ところでよ、姉さん。何で仮契約カードを持ってるんだよ」

「そ、そうですよ。いつ誰と……」

あー、やっぱり追求してきたか。

ポケットから仮契約カードを取り出し、表だけをネギ達に見せる。

……5歳ぐらいの私が、当時の身長には不釣り合いな大剣を握っている姿が描かれている。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。もしかして姉さん……昔っから魔法に関わってたのか!？」

「……ま、そーなるかな」

ネギ達には見せていないけど、裏面には契約者の名前も書かれてい

る。

…… 10年前、記憶を消すかどうか選んだ後で、陸斗に頼んで仮契約を結んだ…… 私にとっての決意の形。

「言うておくけど、ここからは私のプライバシーだから、何も言う気はないからね」

ネギとカモは不満そうだったが、それでその話は終わりとなった。

…… なお、私の嫌な予感が的中し、頭痛を覚えるのはその騒動が終わってからだった。

[Side Out]

[Side Rikuto]

「コリア、3 - A！ いい加減にきなさい！！」

あゝあ、新田先生の雷落ちたよ。

原因は単純。就寝時間が近づいているにも関わらず、騒がしいっただけじゃない。

もちろん俺たつて注意したよ？ でも言う事を聞かない。聞くはずがないよな、そりゃ。

「これより朝まで自分の班部屋からの退出禁止！ 見つけたらロビーで正座だ、わかったな！？」

「「「「え〜〜〜〜っ！？」「「「「

「「「「ロビーで正座あ——！！？」「「「「

いや、当然だと思うぞ？

麻帆良学園の生徒だけってわけじゃないんだし、騒がしくしていれば余所の客にも迷惑になる。

今回ばかりは俺も味方はしないぞ？

「……すいません、新田先生。うちのクラスが迷惑を……」

「いや、風峰君も苦労してるんだろ？ 何せ、あの3 - Aだ」

ええ、苦労してますよ。特にネギ坊主が。

俺が「飴と鞭」で頑張っても、ネギ坊主が何も考えずに台無しにしてくれまからね……。

……ていうか、何でわざわざ教育実習生の事で悩んでるわけ？ 俺。

「とりあえず、予定通り見回りはした方がいいですね。……絶対何かしかすでしょうし」

「そうか……」

2人顔を見合わせ、ため息をつく。

レイヤから聞いた話だが、朝倉にもバレたらしい。記憶を消す事も考慮していたのだが、朝倉自身が「秘密は守る」と協力の意志を表明したため、見逃している。

……絶対、ろくな事考えないと思うんだがな。だってアレ、文と同じタイプだし。

「では、また後で」

「ええ」

朝倉についてはきちんと見張っておかないと、ほんとに何かしでかしそうだ。

例えば……あの淫獣と組んで、仮契約で一儲けとか？

いやあ、自分で言っておいてなんだが、さすがにそれは……………。

(……………どうしよう、笑えない)

充分にあり得る。よし、後でアスナ辺りに相談しておこう。

[Side Out]

「Side Iku」

「なんか、旅館内が騒がしい気がするんだけど……」

「そ、そうですね……」

少なくとも、悪意のようなものは感じませんし、大丈夫とは思いますが……？

……まあ、入浴前に3-Aの皆さんのテンションが妙に高かったのは気になりますが。

「それより、明日はどうするのですか？」

「とりあえず、私がネギと一緒に本山の方へ向かう予定です。で、刹那さんには木乃香と一緒にいてもらいます」

なるほど……。

陸斗は基本、6班と一緒に行動すると聞いていますし……私は旅館から様子を見た方がよさそうですね。

と、刹那さんがおそろおそろ声をかけてきた。

「あの……永江さんは、風峰先生の奥方……なんですよね？」

「そうですね」

あ、もしかして陸斗の事ですか？

あの人はあまり自分の事は話さないタイプですからね。何か聞いたい事があつたら答えますよ。

「じゃあよろしければ、先生とのなれそめを聞かせて頂いてもよろしいですか？」

陸斗とのなれそめ、ですか？　どうやらアスナさんも……気になるみたいですね。

うーん……ちょっと恥ずかしいんですけど……。

「……初めてお会いしたのは、私が子供の頃でしたね」

まだ、右も左も分からない、幼い頃。幻想郷が出来る前。雲の中を飛んでいたとき、たまたま彼と出会った。

どんな話を話したのかは覚えていない。ただ、1つだけ覚えているのは、頭を撫でられた事。

……思えばあの日、彼に心奪われてしまったのかもしれない。

「次に再会したのは、それから随分経ってからです」

幻想郷が出来て、私が天界に上がったばかりの天子様のお世話役に就いた頃。

天子様と一緒に下界に降りた際、花の妖怪とそれはもう壮絶な殺し合いを繰り広げているところに遭遇した。

殺し合いといっても、あそこまで儚く、美しいものは見た事は無かった。

……後で知った事だが、あれが後のスペルカードルの原型ともなったのだとか。

「花の妖怪って……ああ、あの人」

アスナさんが苦笑いする。ええ、気持ちは分かりますよ。

幻想郷でもトップクラスの实力者で、陸斗とも知己だという“彼女

”。なお、最近イメチェンで髪を切ったらしい。

「それで、それから付き合いが始まって……」

最初は、まあ……いいお友達みたいな間柄でしたね。

陸斗はただでさえ、異性関係には淡泊ですから。1番近い女性でも八雲様ぐらい。

そんな関係が急速に進んだのは、あの日。天界の不祥事が判明し、天子様自ら罪を負った日。私が……何も出来なかった日。

さすがにそれについては詳しく話せませんが、それがきっかけで私達の距離は近づき、その数年後、私が押し倒す形で告白し、それから結婚へと至った。

「お、押し倒した!？」

「そんな事したんですか？」

まあ、今でこそ話せますけど、あの頃は本当に自己嫌悪で落ち込み続きでしたっけ。「陸斗の気持ちを無視しているのではないか？」という後悔で押し潰されそうで……。

その数日後でしたね、ボロボロの陸斗が訪ねてきたのは。……後で話を聞けば、八雲様を含む、周囲の女性（式、亡霊、閻魔様etc.）にフルボッコにされたとか。

それでしっかり考えて、私と話合って……それから少しして婚姻です。

「結婚してから色々ありましたよ。あの人、束縛を嫌ってますから」

20年前の大戦の時も「幻想郷に飛び火してくるかも」という事から、单身飛び出していきましたし。

で、いつの間にか帝国皇女とは親しくなってるわ、英雄と呼ばれる立場にはなってるわ……特に前者については厳しく追及しましたよ、ええ。あれはもう「恋する乙女」の顔でしたからね、彼女。そつえば、10年前もそうでしたっけ。

「あ……………」

アスナさんが沈んだような顔になる。……私も陸斗も気にしてないんですけどね。

陸斗が麻帆良に留まっている理由。それはアスナさんの成長を見届けるため。そのために教師として麻帆良に留まっている。

10年前にアスナさん達と共に帰国し、それからずっと側で守り続けている。……アスナさん自身は、その事で私達に罪悪感のようなものを感じているそうですが……。

陸斗の行動自体は八雲様からもしっかり許可を得ていますし、問題無いんですけどね。

〔Side Out〕

「Side Eva」

「……………何をやってるんだろうな、アイツら」  
「さあ……………」

私の問いに、レイヤが困った様な顔で答える。

現在、テレビで映し出されているのは、朝倉和美主催の「ネギ先生とラブラブキス大作戦」とやら。

……………それにしても、仮契約が目的なのは見え見えだな、これ。

「そういえば、仮契約にも仲介料が生じるんだっとな」

「ええ。確か、現在のレートだと5万オコジヨ\$は……………」

レイヤが告げた金額に、私は目を丸くした。

正直な話、心が揺らいだぞ。それだけの金額なら……………うん、気持ち  
は分かる。

仮契約の魔方陣なら私も使えるし、万が一の時のために用意だけは  
しておこう。

「……………あの、マスター」

「どうした、茶々丸」

「私の目に異常が無ければですが……………ネギ先生が5人いるように見  
えるのですが」

は？

そう言われたので、テレビの方を覗き込んでみる。

確かに茶々丸の言うとおり、5箇所の監視カメラからは、別々の地

点のぼーやが映し出されている。

なんだコレは。朝倉の用意した偽物か？ そんな事を考えている内に……。

『キス……してもいいですか？ 夕映さん』

『いいんちよさん、キスをお願いします』

『チューしてもいいですか？』

『その……お願いがあつて……その、キスを……』

『今から史伽ちゃんの唇をいただきます』

……なんだ、このカオス。

いや、あり得ないだろ。あのぼーやが告白だと？

「全部偽物でしょう。朝倉さんが用意した……」

言いかけて、レイヤが止まった。それも冷や汗をダラダラ流した状態で。

おい、どうしたんだ一体。不吉にしか見えんぞ。

「……いえ、思い出したんですけどね。さっき、刹那さんがお風呂へ行く前に、身代わり用の護符を渡してたんです」

「身代わり？ 確か陰陽道の、名前を書くだけで本人そっくりに擬態するアレか？」

「ええ。……その、これは私の推測なんですけど、ネギが自分の名前を書くのに失敗して、何枚も無駄にしたとしたら？」

……あり得そうで怖いな。

あのぼーやの事だから「ホギ」とか「ヌギ」とか「みぎ」とか間違えて書いてそうだ。それで紙型をくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に……  
……いかん、頭痛がしてきた。

本来、そういった護符は燃やすなり、破るなり、×を書くなりして処置しなければ、後々発動する。その結果がアレか。

「あ、全員ロビーに終結しましたね」

「キスしたら爆発したな」

なるほど、そういう仕組みなのか。

……おいおい、新田に跳び蹴りかましたぞ。ぼーや、どんな命令出したんだ？ 叱られて相当ストレス溜まっていたとか？

「どんどんキスして行きますけど、爆発していきますね」

「全部偽物だろう。何より、ぼーやがこんなくだらんものに参加するとは思えん」

キスしろと迫られたら、赤くなっておろおろするのが目に見えている。

その辺りは陸斗やタカミチを見習え。どんな時も冷静に努めるのが魔法使いという物だ。

「本物っぽいのが来ましたよ。……あ、宮崎さんが何か言ってます」

「……よく分からんが、うまく纏まったらしいな」

お、綾瀬夕映が宮崎のどかの足をひっかけて……キスさせたな。

どうするんだ、これ。陸斗辺りが知ったら間違いなくキレ……あ、本人来たな。青筋浮いてるぞ。

「……おい、これは何の騒ぎだ？」

「あ、これは、その……」

「全員朝まで正座だ！ だいたい何時だと思ってる！ 他の宿泊客の迷惑を考えんか、このバカ共！！」

これで仮契約の事を聞いたら、怒り狂うのは目に見えている。  
……とりあえず、私もトトカルチョに乗っていたのは黙っておこう。  
冗談のつもりで図書館組に賭けたんだが……大穴だったな。

[Side Out]

**第25話：修学旅行2日目・命短し恋せよ乙女【後編】（後書き）**

というわけで、修学旅行2日目をお送りしました。

なお現在、アンケートは鬼：11 天狗：4となっております。

## 第26話：修学旅行3日目・始まりの朝

〔Side Other〕

…… 15年前。

廊下の前で行ったり来たりする男が1人……彼の名は近衛詠春。つい数年前に近衛家に婿入りし、関西呪術協会の長に就いた男性だ。かつての“大分裂戦争”では、かのナギ・スプリングフィールドの盟友として参戦し、戦争を終結へと導いた英雄として謳われている。そんな彼も、落ち着かない表情で行ったり来たり……見かねたもう1人の青年、風峰陸斗がジト目で睨み、そして一言。

「……落ち着け詠春。お前がそんな感じでどうする」

「え、ええ。それは分かっているのですが……」

はあ、とため息をつく陸斗。

陸斗と詠春の付き合いは長い。というより諸事情から、近衛家や神鳴流宗家たる青山家との縁が深いため、必然的に宗家青山の流れを組む詠春とも親交があった。

だからこそ分かっていいる。サムライマスターとも讃えられる詠春が、こーゆー状況にひたすら弱い男だという事は。

相変わらずおろおろし始める詠春を見かねて、もう一度陸斗が口を開こうとした時、赤子の産声が聞こえ、思わずぎよっとした。

「お生まれになりました！」

ふすまが開き、出産に立ち会っていた女官がそう告げる。

顔を見合わせた陸斗と詠春は、そのまま部屋の中へと踏み入った。

……部屋の中には、女官に抱かれた赤子と、布団に寝かされた女性

……詠春の妻、木乃葉の姿があった。

「おお……………」

女官から赤子を抱かされ、感極まって泣きそうになる詠春。陸斗もそんな光景を微笑ましそうに見ていた。

……ふと、詠春がこちらを見ている事に気づいた。

「風峰殿、よろしければ……風峰殿が名前を付けてくれませんか？」  
「俺がか？」

詠春にそう言われ、陸斗は悩んだ。

これまで何度か生まれたばかりの子供を抱くことはあったが、名前を付けると言われたのは初めてだ。

そもそも、何かに名前を付けた事自体が少ない。

「それはええかもしれへんわ。……風峰殿、ウチからもお願いしたいんやけど……………」

詠春だけでなく、木乃葉にまでそう言われ、陸斗は果てしなく悩んだ。

うん、自分で思いつかないのだから、2人の名前から取る事にしよう。それがいい。

「詠春と木乃葉から……………このか。木乃香という名前はどうか？」

[Side Out]

「Side Leiya」

「…………アホですか、あなた達」

「「「う……………」」」

例の「ラブラブキッス大作戦」から一夜明けて、ネギと淫獣、そして朝倉さんの3人は私の前で正座している。それに対し、アスナさんと刹那さんは私の後ろで苦笑いしている。

理由は簡単。魔法とは何の関わりも無い一般人の、宮崎のどかさんと仮契約を交わした事に関して。

一見、ネギに非はなく、全て淫獣と朝倉さんの責任のように思えますが、そうでもない。このバカがすっかりペットの抑制が出来ていれば、今回のような事は引き起こさなかったはず。

「というわけで、麻帆良に帰ったら覚悟しておくように」

「ま、待ってくれよ！ 何で仮契約如きでそこまでされなくちゃならないんだよ！」

「黙りなさい淫獣」

少し強めに睨み付けると、ガタガタ震えながら黙った。  
だいたい、あなた達分かっていますか？ 仮契約を結ぶことは従者となる事を意味する。

覚悟のない一般人を魔法の世界に巻き込む事……これがどれだけ危険性が高いか。

朝倉さんや淫獣は、金儲けのために仮契約を利用したようですが、本来“魔法使いの従者”とはより神聖なもの。何より、女の子の愛を金儲けに利用するなど、同じ女として許せません。

「だいたい“英雄の子供”がどれだけ危険な立場か分かってます？  
ただでさえ、生徒に危険が及ぶ可能性があるっていうのに……」  
「ちょ、ちよつと待った。それどういう意味？」

……そうですね、朝倉さんの疑問も尤もですし、刹那さんやこのバカにもいい機会だから説明しておきましょうか。  
そもそも、英雄というのが誰からも慕われる存在だと思ったら大間違いです。

「私達の父……ナギ・スプリングフィールドは確かに英雄です。ですが、あくまでも戦争の英雄だという事を理解してください」  
「レイヤ、それどういう意味？」

未だにそれが分かっていないようですね、このバカは。  
朝倉さんは……どうやら分かってくれたらしく、苦い顔をしている。  
ちよつと問題はありますが、決してバカではありませんからね。

「かつての大戦は、連合と帝国の2つの勢力に分かれていましたが、ナギ・スプリングフィールド率いる“アラルブラ紅き翼”は連合側の魔法使い

として、この戦争に介入しました。……もちろん、彼らによって帝国側に甚大な被害を与え、連合からは“千の呪文の男”と謳われましたが、帝国からは“連合の赤毛の悪魔”として恐れられました”  
「え、ええ？」

「……つまり、連合からしてみれば英雄ですが、帝国からしてみれば恐るべき敵……単なる恐怖の対象に過ぎません」  
「そ、そんな！」

もちろん、戦争の黒幕だった“完全なる世界”を撃ち倒した事で、魔法世界からは英雄として敬われるようになりましたけど……。  
ちなみにこの程度の事、普通に教本にも載ってますし、調べたらすぐわかる事ですよ。

「朝倉さん、私の言ってる事、わかりますね？」

「……うん、それはホントに悪かったと思う。もう本気で」

ナチスを率いたヒトラーも、ユダヤ人達からは恐怖の対象でしたが、当時のドイツ国民……ゲルマン民族には慕われていた。

見方を変えれば、評価なんてガラリと変わる。……人間なんてそんな物です。

「とにかく、麻帆良に戻ったら仮契約は解除します。わかりましたね？」

淫獣は不満そうだったが、こればかりは譲れない。

コピーカードを宮崎さんに渡してしまったのは仕方ない。後で適当な理由で預かって、ごく普通のカードとすり替える事にしましょう。  
……アーティファクトが危険極まりないものでしたからね。ホントに危ない。

[Side Out]

[Side Rikuto]

宮崎との仮契約については既に聞いている。

とはいえ、表向きは一般教師として通っているため、ネギ坊主達にその事で説教は出来ない。

……朝倉やオコジヨを怒鳴り散らしたい衝動で一杯だ。

「……少し落ち着いたらどうだい？」

「ああ、すまん」

今現在、俺はフェイト達“完全なる世界”との会談に赴いている。  
というのも今朝方、フェイトからの連絡を受けたため、こうして向こうの示した場所へと来ている。

なお、俺が不機嫌な理由を告げたところ、彼も完全に呆れていた。

……無理も無いが。

「それで聞かせてもらえるのか？ お前らが計画を実行しないと言った真意とか、10年前にナギ達を襲撃したのはお前らじゃないって事について」

「……そうだね、まずはそこから説明するべきだろう」

フェイトがそう言うのと、俺達の横に画面が出現した。

そこに映っているのはローブ姿の仮面の魔導士。確か、20年前の決戦でアルと戦ったヤツだったな……。

……それはともかくとして、後ろでひょこひょこ女の子がこっちを覗いているのが気になるんだが。

「……あんだ誰？」

『デユナミスだ。……まずは、お前の疑問に答えようと思ってな』  
「なるほどね。で、どういっつもりなんだ？」

『テルティウムからも聞いているだろうが、お前自身が言った言葉だろう？ 「他者を信じる事も無く、ただ1人で自己完結してるだけだ」と』

「あ………」

そういえば、言ったかも。

今思い返してみれば、かなり背筋が寒くなるような事ばっか言ってた気がする。

「だから、信じる事にしたのさ。……彼が最後の最後で君を信じたように、彼の意志を継ぐ僕らも信じてみる事にね」  
「……なるほど」

20年前の、あの“墓守り人の宮殿”での決戦。

“造物主”と対峙して、互いの意志をぶつけ合って……最終的に、ヤツは消えた。

……俺の言った事を理解してくれたのかはわからんが、少なくとも何らかの影響は与えたのだと思いたい。

それも、一種の希望的観測なのかもしれないが。

「だけど、少なくとも凍結しただけで計画を捨てたわけじゃない。本当に世界を救う方法が無いのであれば、僕らは計画を遂行する。それだけだよ」

まあ実際、手の施しようが無いというのは確かだ。

例えば世界が救われたとしても、魔法世界にはびこる問題が全て解決するわけでもない。

そう考えると、造物主の考えたプランは「逃げ」かもしれないが、それでも全てを救い得る唯一の手段だ。

「分かってるさ。……まあ、その話はいい。で、10年前の事について聞かせてもらえるか？」

「確かに10年前、僕は千の呪文の男と戦い、それで相打ちになった。それは確かだよ。でも、あれは僕らも予期していなかった」

「………は？」

いやいや、予期していなかったって……。

実際にナギと戦ったわけだろ？ 何でそこでその言葉が出てくるのさ。

『ぶつちやけると、我々も騙されたクチだ』

いや、ぶつちやけ過ぎだろ。あんた、そーゆー性格だったのか？

……ん？ ちよつと待て。騙されたクチ……って事は、誰かが紅き

翼と完全なる世界をぶつけ合わせたって事か？ そんな事出来るヤツなんて…………。

「…………あー、そういう事か」

そんな事が出来るのは、1つしか考えられない。

要するに、紅き翼も完全なる世界も、くだらない覇権争いに利用されたって事か。

戦争が終わる前ならば、完全なる世界も利用される事は無かっただろうが、造物主や幹部がいなくなつて、10年前の時点で大幅に弱体化していた。

…………老害共が、くだらない争いを。

「ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグはまだ話の分かる相手だったが、ナギ・スプリングフィールドは聴く耳持たずで、結局戦うハメになった。…………いくら呼びかけても『お前らの事なんて信じられるか！』と言われたよ」

「あ…………それは、スマン」

アイツはその、おツムが弱いからな。難しい事考えない「とりあえず潰す」の脳筋だし。

そう考えてみると、ネギ坊主はあまりアイツには似てないな。やっぱり母親似か。

その辺りはありがたいと言えばありがたいんだが…………それにしても、イヤゝなところばかり似ている気がする。

「今回、僕は関西呪術協会、及びスクナの調査が目的だ。おそらくネギ・スプリングフィールドやレイヤ・スプリングフィールドとも交戦する事になる。…………構わないかい？」

ネギ坊主はともかく、レイヤと何か……………。

「……………最悪の場合は俺が止めに入る。それで構わないのなら」  
「ああ、構わないよ」

それから今後の事について話し合い、そのまま別れた。

フェイトは、ネギ坊主とレイヤを試すつもりでいる。今後の障害となるかどうか、自分で確かめるんだろう。

俺自身、レイヤの実力をこの目で見てみたいと思う。

ネギ坊主がボコボコにされるのは構わないんだが、レイヤは下手なダメージがそのまま死に繋がり兼ねない。

……………もちろん、止めに入る事は了承させたから、そうはさせないのだが。

[Side Out]

「Side Leiya」

「……つけられています。数は少数ですが……」

「そうですか、やはり……」

5班と6班は合同で動く事になり、現在私たちはゲームセンターで暇を潰しています。

この後、アスナさんがネギと同行して総本山へ向かい、刹那さんと私で木乃香さんを護衛する手はずになっています。

……しかし、先日と同じと思われる刺客が数名、こちらを見張っている感がある。

「せつちゃん、どないしたん？」

「あ、いえ……その、何でも……」

刹那さんも強情ですね。「影ながら」と言っておきながら、喜んでいるのは見え見えます。

木乃香さんと距離を置くこととしている理由は、何となくですが分かる気はするんです。……ちょっと特別製なので、見えちゃうんですけど。

刹那さんはかなり高位の霊格を身体に宿している。妖怪の血を引く先祖返りか、もしくは混血児か……。

（まあ、だいたい想像が付きますけど）

それで迫害され、トラウマを持っている。だから、木乃香さんとは距離を置いている。……正体がバレて突き放されるのが怖いから。

……まったく、そんな心配ないと思うんですけどね。

「……………あら？」

店の外へ駆け出していくのは……さっき、ネギと対戦していた子ですね。

あれ？ あの子どこかで見たような……。

「……………っ！」

思い出した。木乃香さんが誘拐されかけたあの夜、私の邪魔をした子だ。

直接当たったのは私だけだし、あの時は詳しく顔まで見てる暇は無かったので気づきませんでした……間違いない。

でもネギはともかく、アスナさん……気づいてくださいよ。

「刹那さん、念のために本山の方へ連絡を取ってください。……も

しかしたら、道中罾が仕掛けられているかもしれません」

「！ わかりました」

もし私が敵ならば、本山までの道のどこかで罾を張って、そこでネギ達を迎え撃つ。……………充分に考えられる。

ネギはこういった不測の事態に弱いですし、罾にはまったら抜け出せなくなる可能性も高い。事前に何らかの準備をしておかなければ……。

「……………レイヤさん、長に連絡を取ったところ、すぐに手配するの事です」

ひとまず安心、と言っていいんでしょうかね。

とはいえ、現時点で事件が既に起きている以上、鶴の一声でそれが完全に止まるとは考えられませんか、対策はしておく必要があります。

不幸にも、アスナさんもネギも、東洋系の呪術には疎い（私もですけど……）。この中でそっちに精通しているのは刹那さんだけ。もし、ネギ達にそういった呪術が来たら、防ぎきれない可能性も出てくる。

「ネギ先生達には、これを付けさせます」

「それは……？」

刹那さんが取り出したのは、昨晚騒動を引き起こした「人型」。身代わりを作っても、さほど効果はないと思うんですけど……。

「いえ、これは式神です。戦闘力は皆無に近いですが、サポートぐらいは出来るかと」

「……なるほど」

戦力的にはアスナさんがいるので大丈夫とは思いますが、やはりそっち方面の知識を扱える人がいる必要がありますね。

さて、そろそろ時間ですし、私たちは木乃香さんの護衛に専念しますか。

[Side Out]

「Side Chigusa」

ゲームセンターから小太郎が出てきたのを見計らい、手招きしてこちらへ呼び寄せる。

……で、どうやった？

「千草姉ちゃんの想像通りや。やっぱり名字、スプリングフィールドやったわ」

「……そうか、やっぱりそうか……」

ふ、ふふふふ………そうか、そうやったんか………あははははは………はははははははははは………

あの“英雄”ナギ・スプリングフィールドの息子やったんやな。通りでよう似とるはずや。

英雄の子供が麻帆良で修行しとるゆー噂はあった。でもまさか、わざわざ親書届ける特使がそうやったとはな。

「つくづく、西洋魔術師は愚かやな」

サウザンドマスターの息子なんて、ウチらからしてみれば恨むべき相手や。そんなのを西へ向かわせる？ 狙われるに決まっとるやろ。……ま、ウチにしてみれば、喜ばしい事やけどな。

（おとん、おかん、見ててや。2人の仇は必ず取るで）

……おとんとおかんを殺したサウザンドマスターはもうおらへんけど、その息子はおる。

西洋魔術師を根絶やしにして、あの坊やの首を2人の墓前に捧げたるからな。

## 第27話：修学旅行3日目・シネマ村珍道中（前書き）

3日目は後3回ぐらい続く予定です。

なお、アンケートは「鬼」が優勢ですので、鬼で書いてます。

……これ、あくまで優先順位を決めるためのアンケートなので、天狗も後で出しますよ？

## 第27話：修学旅行3日目・シネマ村珍道中

〔Side Yuchiru〕

「なるほど、そっちも大変なようですね」

「ええ。陸斗も愚痴ってたわ。……相当ストレス溜まってるわよ、あれ」

話は聞いていましたけど、それはご愁傷様としか言い様がありません。

出来る事なら、今すぐ飛んでいきたいところですが……いやそもそも、あなたが何とかしてあげたらいいじゃないですか。

「何で私がそんな事しなくちゃならないのよ」

「暇なんでしょう？ わざわざイギリスまでスキマで移動してくるんですから」

尤も、スキマに時間も距離も関係ないんでしょうけど。

でもあなたが暇人なのは私だけでなく、幻想郷の皆さんもよく知ってますよ。

……まあ、どちらにせよ、私が西の争いに手を出すわけには行きませんが。

「あら、どうして？」

「忘れたんですか？ 私が向こうでどういう立場だったか」

「………そうだったわね、ごめんなさい」

今の関西呪術協会で私の顔を覚えてる人間なんて、数えるほどしかないと思いますけど……。

それでもやはり、向こうには行きたくない。詠春はともかく、他の人はまずい。ええ、とてもまずい。それに…………。

「し、ししょ…………ただいま戻りました…………」

「はい、ご苦労様」

ボロボロになったアーニヤが、よろよろと私の前まで歩み寄り、バタツと倒れる。

あらら、まだまだですね。これでもまだ初歩中の初歩だというのに。

「…………あなた、何したの？」

「いえ、よく言うじゃないですか『千尋の谷に突き落とす』って。だから崖から叩き落として帰還するっていう訓練を課したんです、半日ほど前に」

もちろん、箒のような飛行用の道具は無し。魔力発動体は指輪なので、跨って空を飛ぶことは出来ない。

は？ 食糧？ そんなの持たせるわけ無いじゃないですか。自給自足は戦場における基本です。

「…………あなた、結構容赦ないわね」

「何言ってるんです。まだ入門編です。最終的にはケルベラス大渓谷に落として帰還させるプロットを組んでるんですから」

「いや、それ死ぬから」

ケルベラス大渓谷の谷底には、無数の魔獣が蠢いている。

おまけに魔法は使えない。…………あのナギも、アリ力を救出するのに相当な苦労をしたと聞いている。

えっと、陸斗と協力して…………あそこでタカミチ君たちを叩き落とし

て修行させたのが……8年前でしたね。もちろん3人とも無事帰還しましたよ。

「ねえ、ゆちる」

「はい？」

「悪魔って呼ばれた事、ない？」

[Side Out]

[Side Asuna]

ネギと一緒に本山を目指して、山に入っただけど……なんか変な術で閉じ込められた。

刹那さんの式神……ちびせつなが言うに、空間を湾曲させて出られなくしたらしい。よくRPGとかである「無限ループ」って奴ね。で、何かいきなり襲ってきたガキと戦って、私が大活躍したんだけ

ど、最終的にネギがいいところ持って行ってこんな状況。

「ぐあ……がつ……！」

「どうだ！　これが西洋魔術師の力だ！」

いや、前半頑張ったの私だからね？　あんたボロボロにされてるとき、カウンター気味にパンチ入れて『白い雷』決めたただけだから。……にしても、無理するわよね。自分の身体に我流の術式で魔力供給……デタラメで無茶苦茶するのはナギそっくり。見てる方がハラハラするっての。

「よし、兄貴！　後はこっから脱出するだけだぜ！」  
「ま、待てエツ！」

その声を発したのは……さっきのガキ。  
キツイ一撃を受けて、まだ地面に倒れたままになっている。

「……た、ただの人間にここまでやられたのは初めてや。さっきのは……取り消すで、ネギ・スプリングフィールド」

ちよ……あれ喰らってまだ動けるわけ？

『白い雷』は攻撃性の高い攻撃魔法の一種。零距离でそれを受けたのだから、しばらくは身体が痺れて動けないはず。

でも、なんかあのガキ、無理矢理立ち上がるうとしてない？　てか、ベキベキとかゴキゴキとか言ってるんだけど。

「だが……まだや、まだ終わらへんで！！」

白い体毛、明らかに人間離れた爪。何て言うか狼人間？　……つて、もしかしてこれ獣化！？

さつき、ちびせつなさんが「狗族」とか言ってたけど、こんなのアリ！？

「ウラアツ！！」

さつきまでとは比べものにならない速さで、ガキが迫る。

その拳打にも凄まじい気が込められており、一撃で地面を割った。あんなの喰らったら、私はともかく、ネギなんてトマトみたいに潰れちゃうわよ？

「くっ……仕方ない！」

「メチャクチャだ！ 兄貴、相手するこたねえぜ！ 放つって脱出だ！」

そうね、今回ばかりは力モの意見に賛成。

ここで戦えば消耗戦になるのは目に見えてるし、ネギの疲労もだいぶ溜まってる。私は……奥の手がいくつかあるけど、出来ればここで晒したくはない。

「うっん。……契約執行10秒間！ ネギ・スプリングフィールド」

「兄貴！」

このバカ！ いくら魔力供給したって、限界があるのよ？

もし、ここで戦ってやられでもしたらどうするつもりなのよ。

「へ……………」

ガキの姿が一瞬、視界から消える。これまで以上の速度……ヤバイ、あれにはネギも対応出来ない。こうなったら咸卦法で……………。

「左です、先生——!!」  
「ッ!!」

その声に反応し、素早くネギが左へと飛ぶ。  
……と、さっきまでネギのいた地点にガキの一撃が炸裂し、派手に爆ぜる。

「の、のどかさん!？」

ほ、本屋ちゃん!? 何でここにいるのよ!  
……その手に持つてるのって、もしかしてアーティファクト!?  
どうやって呼びだしたわけ!?

「えーと、あの……それはその、鳥居の前で会ったおじさんに……あ、右です先生!」

次々と繰り出される攻撃を、本屋ちゃんの指示通りに躲けていき、反撃に転じるネギ。  
す、凄い……アイツの行動全部読めてるじゃない。

「とにかく、このまま戦うのは危険よ。早く脱出しないと」  
「あ、そ、それなら大丈夫です」  
「え?」

パリイインッ!  
私はその声を出すのと、甲高い音を立てて何かが割れるのはほぼ同時だった。  
もしかして……結界が破壊されたの? いったい誰が……。

「姉さん、脱出は今しかねえ！」  
「分かってるわよ！」

呆然としてるネギとガキはほっというて、本屋ちゃんを抱えて走り出す。

いち早く我に戻ったネギも、杖に乗って逃げ出す。

「あつ、待てコラ！」

「あんたも早く逃げた方がいいわよ！　すぐに誰かが私たちを助けに来るから！」

半分ハツタリだけど、半分本当だ。

外から誰かが結界を破壊したのなら、きつとそれは私たちの味方。助けてくれるのは目に見えている。

さつき本屋ちゃんが「鳥居の前でおじさんに会った」みたいな事を言っていたし、その人から仮契約カードの事とか聞いて、それでこっちに來ちゃったんでしょうけど。

……でも、陸斗やレイヤちゃんが頭抱えるのが想像出來ちゃうわね。……マジでごめん。

[Side Out]

「Side Leiya」

「……………どうやら、撒いたようですね」

「ええ……………」

まさか白昼堂々、それも街中で木乃香さんを狙ってくるとは思いませんでした。

とにかく、人混みに紛れてやり過ごす事にし、シネマ村の中へ入ったのですが……………。

「式神からの連絡が途絶えたところから、おそらくネギ先生達にも何かあったのかと」

……………マズイですね、完全に後手後手に回ってます。

こうしてシネマ村に逃げ込んだのも、向こうの策略の内かもしれないまし、何かしらの巻き返しを考えなくては……………。

「せつちゃん、レイヤちゃん……」

「え?」

あ、あれ? 木乃香さ……………って、どうしたんです、そのカッコ。時代劇にも登場するお姫様……………でしょうか? 純和風のお嬢様ですし、よくお似合いですよ。

「知らんの？ その更衣室で着物貸してもらえるんやえ。ほらほら、せつちゃんとレイヤちゃんも……」

「え、あ、ちよっ……」

止める間も無く、木乃香さんに引きずり込まれていく刹那さん。

……まあ、郷に入り、郷に従うとも言いますし……私も着替えですか。それにそちの衣装の方が敵の目も欺けるかもですし。で、着替えたわけですが……。

「わゝ、2人ともカツコええゝ」

刹那さんが着替えたのは、「誠」の字の書かれた陣羽織……所謂、新撰組隊士の衣装。そして私は、くの……忍者の衣装です。

似合ってますし、動きやすくていいとは思いますが、刹那さん、その服で野太刀は合いませんよ。

「………言わないでください」

自覚はしてるんですね……。

「あ、あのすみません！ 写真撮ってもいいですか？」

「え」

「あゝ、ええですよ」

あらあら、集まってきちやいましたね。刹那さん、結構ノリよくポーズ取ってるじゃないですか。

こうして見てみると、刹那さんかなり似合ってますし、普通に絵になる1枚です。

パカラッパカラッパカラッパカラッ、ガガガガガ……

……ん？ 馬車、でしょうか？ 降りてきたのは……。

「どうも、神鳴流……じゃなくて……その東の洋館のお金持ちの貴婦人でございます」

「お、お前は！」

確かこの人は……この前、木乃香さんが誘拐されかけた時に出てきた、神鳴流剣士。名前は……月詠さん、でしたっけ？

刹那さんと互角に戦ってましたから、相当な実力者だと思われすが、何でここに？

「せつちゃん、劇や劇、これお芝居や」

「……そういえば、観光客を巻き込んでお芝居が始まるっていう説明が、パンフレットにあったような気が……」

「今日こそ借金のカタに、お姫様をもらい受けに来ましたえ」

つまり、お芝居に見せかけて、衆人環視の中で木乃香さんを連れ去ろうというわけですか。

刹那さんもその思惑に気づいたらしく、厳しい顔で月詠さんを睨み付けている。

「そうはさせんぞ！ 木乃香お嬢様は私が守る！」

「きゃ、せつちゃんカツコええ」

「わ、い、いけませんお嬢様……」

うん、明らかにこれ百合百合ですね。

「そーおすか……ほな、仕方ありまへんな」

と、月詠さんは自分の手袋を脱ぎ、「えい」と刹那さんに投げつ

ける。

所謂……決闘の申し込み。

「木乃香様をかけて、決闘を申し込ませて頂きます。30分後、場所はシネマ村正門横「日本橋」にて……ご迷惑と思いますが、ウチ……手合わせして頂きたいんです」

これはどうもおかしい。木乃香さんが目的なら、わざわざこんな面倒な事をするはずがない。

……どうも月詠さんにとって、木乃香さんの誘拐は二の次の様子。

彼女の狙いは……刹那さんですか。どうやら彼女は私が1番苦手な人種、バトルマニア戦闘狂。

「逃げたらあきまへんえ……刹那センパイ」

……ッ！

一瞬、凄まじい殺気を感じました。木乃香さんもビクツと震えてましたし。

「ほな、助けを呼んでもかまいまへんえ」

ガラガラと、来た時同様に馬車に乗って、月詠さんは引き上げていった。

……あれは避けられませんか。逃げたとしても、既に見張られているでしょうし……。

「……やるしかありませんね」

「ええ……」

幸い、周囲の観客はお芝居だと思っているようですし、少し派手に

やつても大丈夫そうです。

何かあつたら、全部学園長先生の所為にしちやえば問題無いでしょ。……その後、付いてきていたハルナさんと夕映さん。何故かシネマ村にいた3班の皆さんを伴い、指定された場所へと向かっていた時……。

（刹那さん、レイヤ）

「え？」

「あ」

ネギ？ それに淫獣も……それ、ちびせつなの紙型ですよ。

「ちびせつなの紙型を使って、気の跡を辿って……」

「それより、何があつたんだ！？」

話してる時間はありません。とりあえず、邪魔なのでさっさと帰ってください。

ちびせつなは簡易式の呪術は使えましたが、あなたその状態で何も出来ないでしょう？ 実際、足手まといでしかありませんし。

「ふふふふ……ぎょーさん連れてきてくれはって、おおきに。楽しくなりそうですな」

橋の上に、二刀の小太刀を握り、微笑みながらこちらを見ている月詠さんがいる。

何故だろう。とてもにこやかに見えるけれど、彼女からは“危険”しか感じない。

「ほな始めましようか、センパイ。……木乃香様も刹那センパイも……ウチのモノにしてみせますえ」

ふふふ、と微笑む月詠さん。

木乃香さんも……怯えてますね。無垢なだけに、あの手の気配には敏感なんでしょう。

刹那さんの腕を掴んで、後ろに隠れているけど……あ、何か呟いている。

「安心してください、木乃香お嬢様。……何があっても、私がお嬢様をお守りします」

……うつ、これはちょっと……迂闊にもときめいてしまいました。実際、周囲からも拍手と感嘆の声が上がっている。告白にしか見えませんからねえ、今の。

「桜咲さんかつこいいわね、あやか」

「ええ！」

派手な格好のあやかさんが、ボロボロ感動の涙を流しながら、がしつと刹那さんの手を取る。

「桜咲さん！ お二人の愛、感動いたしましたわ！ お力をお貸します！！」

「だから違うんですってば、いいんちよ！」

「ホホホホ、そちらの加勢は無いのかしら？ 私達、桜咲さんのクラスメイトがお相手致しますわ！」

うわ、ノリノリですねこの人。

ですが……どうしましょう。いくらあやかさんといえど、さすがに神鳴流剣士が相手はマズイでしょうし……。

「ツクヨミ……と言ったか？ この人達は……」

「ハイ、センパイ。心得てます」。この方達には私の可愛いペットがお相手します」

そう言い、月詠さんがバラバラとお札のようなものをバラまく。ペット？ ちょっと待ってください、あのお札まさか……。

「ひやつきやこおー！」

瞬間、デフォルメされた妖怪のようなものが、多数出現する。

周囲からは「スゴイCGだ」という声が上がっており、疑問視する声は上がらない。……千雨さんだけが呆れた顔してますけど。

「レイヤさん！ 木乃香お嬢様をお願いします！」

「分かりました。……お気を付けて」

木乃香さんの手を取り、そのまま駆け出す。

悔しい話ではありますが、下手な横やりは刹那さんの邪魔になりかねない。かといって私では神鳴流剣士には敵わない。

ここは逃げるしかない。身体が弱いとはいえ、木乃香さんを誘導して逃げる程度は……。

「レイヤちゃん、せつちゃんが……」

「刹那さんなら大丈夫です！ それよりも早くこの場を離れて、アスナさん達と合流します！」

後ろからは金属がかち合う音と、観客の歓声が聞こえる。

今の私に出来るのは、刹那さんを信じる事、そして木乃香さんを守る事。……刹那さんからそれを託されましたからね。

「……レイヤちゃん、ウチに何か隠し事しとるやる？」  
「……………」

答えずに走り続ける。人混みを避けて、出口へと向かう。

「レイヤちゃんだけやない。アスナもせつちゃんも……みんなウチに何か隠しとる。この前、お猿のお姉さんに浚われかけた時も、おかしかった」

「……………ごめんなさい、今の私には答えられません」

今、私がここで魔法の事をバラすのは簡単な事だ。

……………だけど、それをするわけにはいかない。

その問いに答える権利が、裏の世界の事を教える権利があるのはきつと、木乃香さんのご両親と刹那さんだけだから。

「ま、待ってレイヤ」

ちよつと……………何で追って来てるんですか！ こっちには木乃香さんもいるんですよ！？ あなたが見つかったらマズイでしょうが！  
すぐさまSDネギを掴むと、有無を言わずに術式を破壊し、式神の術を解除する。……………淫獣は……………逃げたんでしょう。

「レイヤちゃん、今の……………」

「後で刹那さんかご両親に聞いてください！」

よし、このまま行けば出口……………。

「そうはいきまへん」

出口の門の前で待ち構えていたのは、この前の女性陰陽師に、見た

事のない白髪の少年だった。

迂闊でした……月詠さんがいたのだから、この人がいないはずがない。

あの式神を2体出されたら木乃香さんを守りきれませんし、後ろに控えている白髪の少年の実力も未知数。つまり……ピンチです。

「さあ、おとなしく木乃香お嬢様を渡してもらおか」

くっ……このままでは……。

——雷符「エレキテルの竜宮」

瞬間、私たちの周囲に雷が降り注いだ。

な、何ですかこれ！？ いや……よく見ると、当たってない？ 向

こうは当たってるみたいですが、全て障壁で防がれて……。

「こつちだ」

「え？」

第28話：修学旅行3日目・永い夜の始まり（前書き）

ぺったんぺったんつるぺったん  
ぺったんぺったんもちぺったん  
♪

## 第28話：修学旅行3日目・永い夜の始まり

〔Side Other〕

無限方処から脱出したネギ一行は西の本山へと再び歩を進めたのだが、そこへ刹那と木乃香、レイヤが合流した。

……が、アスナ達が見たのは、すっかり諦めたような表情の刹那とレイヤ、そして楽しそうに談笑する木乃香、ハルナ、夕映、そして和美の4人だった。

どういう事かと詳しく事情を聞いてみると……朝倉が刹那の荷物にGPSを仕込んでいたため、入り口で捕まってしまったとの事。あまりの事態に頭を抱えるアスナであった。

「ちょっと朝倉。朝にレイヤちゃんが言った事忘れたの？」

「いやさ、どちらにせよ勝手に班離れて行動したらダメでしょ。風峰先生なり、新田先生なりに許可取ってるならともかく」

「う……………」

言われてみれば、確かにそうだ。

陸斗や瀬流彦なら何らかの便宜を図ってくれるかもしれないが、一般人の新田にはそうもいかない。

「ていうか、アンタやネギ君が巻き込まれている以上、私としてもほっとけないのよ。一応協力を申し出た身としては」

「朝倉……………」

「ま、純粹にそっちの世界に興味があるってのも確かだけどね」

アスナは思い出していた。そういえば、朝倉和美という女はそうだった、と。

確かに、ちょっとやり過ぎるところもあるが、基本的に正義…善の側に位置する信念を持っており、真実に対しては徹底的に追求する。

（てゆうかさ、見た感じ本屋ちゃんにもバレたんでしょ？ いい加減、情報をどうにかする人間は必要だと思っけど？）

（そ、それはそうだけど…… ああ、だからアンタってわけ？）  
（そーゆーこと）

そう言われ、アスナは悩んだ。

3-Aのパパラッチと呼ばれているだけあり、情報関連に関しては彼女の右に出る者はいない。彼女の協力を得られれば、今後進行するかもしれないネギによる魔法バレが、ある程度食い止められる…  
…かもしれない。

朝方の様子から、こちらにとって不利益……魔法の存在をバラしたりはしないはず。

「……分かったわよ。でも、危なくなったらすぐ逃げなさいよ？」  
「分かってる分かってる」

そんな事をしている内に、重苦しい雰囲気の下にまでたどり着いた。

[Side Out]

「Side Leiya」

どうやら、ここが関西呪術協会の本拠地……所謂「西の総本山」というわけですか。

噂には聞いていましたが、なかなか強力な結界が張られている様子。これなら並大抵の敵は入り込めないでしょう。

そして、門を潜った私たちを出迎えたのは……………。

「…………お帰りなさいませ、木乃香お嬢様——」「…………」

「へ？」

大勢の巫女さんと、広大なお屋敷だった。

………そういえば、木乃香さんのご実家でしたね、ここ。十分予想は出来るはずでした。

「え、レイヤ……知ってたの？」

「当たり前です。しっかり調べておくのは当然のことでしょう？」

ネギ、行き当たりばったりなのにも程度がありますよ。

最低限、自分達が敵対するかもしれない組織の事についても、学園長先生なり、瀬流彦先生達のような魔法先生なりに聞いておくのが当然です。

…… あれ？ そういえば、ネギってタカハタさん以外の魔法先生……  
…… 知ってましたっけ？

そのまま広間のような場所へと通され、待つこと数分……。

「ようこそアスナ君、レイヤ君、木乃香のクラスメイトの皆さん、  
そしてネギ・スプリングフィールド君」

奥から現れたのは、眼鏡をかけた40代ほどの中年男性。見た目は  
普通っぽい人ですが、纏っている空気は間違いなく一流のそれ。

この人が近衛詠春さん。木乃香さんのお父さんで、私の父…… ナギ・  
スプリングフィールドの戦友にして、最強とも謳われた神鳴流剣士  
……。

…… 木乃香さんに抱きつかれてる分には、ごくごく普通の父親にし  
か見えませんけどね。

「あ、あの…… 東の長、麻帆良学園学園長、近衛近衛右門から西の  
長への親書です。お受け取りください」

「…… 確かに承りましたネギ君。道中、大変だったようですね」  
「い、いえ」

よくよく考えてみて、その親書に意味はあるんでしょうか？

学園長先生と詠春さんは義理の親子であって、あまり意味が存在す  
るようには思えない気がします。

封筒から中身取り出した詠春さんも苦笑いしてますし……。

「…… いいでしょう。東の長の意を汲み、私たちも東西の仲違いの  
甲斐性に尽力するとお伝えください。任務ご苦労、ネギ・スプリン  
グフィールド君！」

「あ……… ハイ！」

まあ、これで一安心……でしょうか。  
あの襲撃者もいますし、全部が全部解決したわけではありませんけど。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

「……とりあえず、これで一息つけるな」  
「ええ」

物陰に隠れ、中の様子を窺っていたが……よくもまあ、ネギ坊主は  
気楽に喜べるな。

確かに親書を届けた事は評価しよう。だが、何一つ事態が好転した  
わけではない。

天ヶ崎千草を始めとする、今回の件の首謀者達が捕縛されたわけで

もないのだから、喜ぶにはまだ早い。

「……木乃香さん、少し機嫌が悪そうですね」  
「無理ないだろ」

あの時、衣玖のスペルで目を眩ましている間に、俺が2人を引き寄せて飛び立ってなかったらアウトだった。

当然、木乃香には相当問い詰められたが、その辺りは詠春と木乃葉に丸投げだ。後、刹那にも。……まあ、木乃葉は四国の方へ出張中らしいし、戻るのは明日みたいだが。

「それでどうします？ ネギ少年やアスナさん達はともかく、一般人のあの子達は？」

「今から戻る途中、襲撃をかけられる可能性もある。人質にでも取られたら厄介だし、だったら本山の方で預かってもらっとく方がいい」

木乃香と刹那はあらかじめ、諸事情で実家に戻ってるとでも報告すればいいし、アスナ達は詠春が身代わりを仕立ててくれるとか。

まあ、向こうもそう簡単に本山に手出しは出来ないだろうし、しばらくはほっとこう。仕事あるし。

……フェイトだったら、本山の守護結界も突破するだろうが……俺が必要になったら、その時に飛んでいけばいい。

「んじゃ、そろそろ戻るぞ」  
「はい」

ぎゅっ、と腕にしがみつく衣玖。……いや、普通に飛んでくれて、柔らかな感触がダイレクトに腕から伝わってきて……何というか、恥ずかしいんだが。

[Side Out]

[Side Fate]

ようやく彼らが本山に入ったようだね。

風峰陸斗とも打ち合わせしていたけど、まさかシネマ村でああなるとは……彼が来なかったら正直危なかった。

「ちつ……コラ、新入り！ あんたが追わんでええゆーから放つといたら本山に入られて手出し出来んやんか！」

とは言っても、これも彼との協定だからね。近衛詠春とも内密に結んだ……。

本山で暴れても構わないが、絶対に人を殺さない事。また、解除不可能な石化は施さない事。

……まあ、僕らは人間を殺める事は禁じられているし、ここで『永久石化』を使うつもりも無い。

近衛木乃香に対しても、誘拐して彼女に引き渡したらそこまで。英雄の子供達を確かめて、後は適当なところで引き上げる。

……それにしてもこの人は、西洋魔術師全てに対して恨みを抱いているようだ。僕に対してもキツイ視線を向けてくるし……。

「大丈夫ですよ」

確かに、西の総本山の守護結界は大したものだよ。

だけでも、それに頼りすぎている。……衰えたようだね、近衛詠春。彼が『暴れて構わない』と許可を出した意味……分かる気がするよ。そのためだね？

「僕に任せてください」

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

修学旅行も最後の夜を迎え、俺たちものんびり過ごしている時だった。

……アスナからの連絡が入ったのは。

「本山がやられた？」

『そうなの！ 木乃香も浚われちゃって、詠春も石にされて……』

思わず舌打ちをする。

あのバカ……実際に会った時もそう感じたが、かなり実力が衰えてたらしいな。

ネギ坊主と刹那もフェイトに一蹴されたらしいし……ここまで簡単にやられるとは思ってなかった。

「レイヤは？」

『今、石にされた人達の解説に取りかかっている。幸い強力すぎるものじゃないから、自分でも出来るって』

「そうか……わかった。すぐに行く」

通話を切り、ケータイをしまつと隣の衣玖に視線を合わせる。

真剣な顔で頷き合うと、すぐに支度を調べてロビーへ降りる。

……そこで、こっそり抜け出そうとしている3人と鉢合わせた。

「……………何やってるんだ、お前ら」

長瀬に古、そして龍宮……3人とも、夜遊びに行こうとしている姿ではない。

ああ、でもちようどよかった。例の事を頼もう。

「いや、それなら今、バカリリーダーから救援要請が来たでござるよ」

バカリリーダー？ …… ああ、綾瀬か。アイツ、無事に襲撃から離れられたらしいな。

で、頼りになりそうなヤツに電話で助けを求める…… なかなかやるな。

んで、龍宮もか？

「ああ。だけど、依頼料はしっかりもらうよ？」

「……ま、いーけどさ」

これでも、教師以外にも色々収入はあるし、世間一般の基準に当てはめれば「お金持ち」になるんだろう。

え？ 公務員の副業はダメだって？ …… そこ、細かい事は気にしない。ちよつとした息抜きみたいなもんだ。

「ま、とりあえず行くぞ。早く行かないとマズイかもだしな」

[Side Out]

「Side Asuna」

現在、私たちはネギの作った結界の中で作戦タイム。

あのデカザル女が木乃香の魔力で、鬼やら天狗やら適当に100体以上呼びだしたみたい。気分は「チンピラ100人に絡まれた」感じね。

どうにか、詠春のように石化させられた人達も治療したんだけど……。

「……まさか、一斉蜂起されるとは……」

苦い顔で刹那さんがそう呟く。

そう、あのデカザル女の仲間が本山を襲撃したのを好機と見たのか、それに同調する連中が本山を襲撃してきた。要するにクーデターってやつ。

で、詠春や石化を解かれた人達はそれに応戦して動けない。つまり、木乃香を助けるために動けるのは、私と刹那さん、レイヤちゃん、ネギの4人。陸斗にも連絡を入れたから、もう少ししたら衣玖さんと一緒に来てくれると思うけど……。

「それで、どうする？」

「……二手に分かれるしかありません。私がここに残り、奴らを引きつけます」

つまり、刹那さんが囧になるって事？

確かに4人全員がここに残ってたら意味がない。向こうがあれを召喚したのも時間稼ぎが目的なんだから。

ここに引きつけられている内に、間違いなくあのデカザル女が何かしでかす。

「じゃあ、私も残るわ。私、あの手の敵には滅法強いし」

そう言い、手に握った剣を持ち上げて見せる。

私のアーティファクト「ハマノツルギ」は、召喚魔などに対して絶大な威力を発揮する。魔法使い……特に精霊使い相手には天敵もいところ。

「では、アスナさんと刹那さんがこの場に残り、その隙に私たちが木乃香さんを救出する……」

「後は本山に逃げて援軍を待つ！ それっきやねえ！！」

……うん、確かにそれしかない。

陸斗や衣玖さんが来てくれるのは……多分、10分ほどかかると見ている。全速力で飛ばして来ても、それくらいかかる。

それなら本山で籠城戦した方が、関東からの援軍も望める。

「よし、そうとなったらアレもやっとうぜ！ズバツとムチュツとよお！」

「…………アレって？」

分かっているけど、一応聞いてみる。

「キスだよキス！ 仮契約！」

「「えええっ！？」」

……このエロガモ。

とりあえず、ム力ついたので踏みつぶしておく。

「むげろっ！？ な、何するんだよ姉さん！！」

「アンタねえ……状況を考えなさいよ」

「いや、俺っちは真面目に言ってるんだよ！ 刹那姉さんの“気”に、兄貴の“魔力”を上乗せすれば一気にパワーアッ」

「反発するわよ」

私の告げた言葉に、カモだけでなく刹那さんとネギもポカンとする……あ、レイヤちゃんだけは納得の顔をしている。やっぱり知ってたんだ。

「“気と魔力の合一”……咸卦法っていうんだけど、相反する力を融合させる高難度技法。そのための訓練をしていなかったら、間違いないく逆効果よ」

「……聞いた事はありません。タカハタさんの使われている技法ですよね？」

そうそう。ガトーさんから教わって、何年か前にエヴァちゃんの別荘で完成させた。

私や陸斗もちよこつとだけ修行には協力してたわよ。……なお、私は10年ほど前からずっと使い続けているので、タカミチより制御は上手いと自負している。

説明を受けて、刹那さんも「あゝ」と納得している。

「とにかく、仮契約は無し！ それより、そろそろ結果が消えるわよ」

元々、2、3分ぐらいしか保たない結界だし、そこは仕方ない。

ネギとレイヤちゃんがそれぞれ詠唱を始め、手を召喚された者達がいるであろう地点へと向ける。

そして、風の結界が消えたと同時に、詠唱の完了した呪文を解き放った。

「『雷の暴風』!」

「『闇の吹雪』!」

2つの大呪文が大群を薙ぎ払い、体制が整う前にすぐに飛び立つ。ネギは杖に跨ってるけど、レイヤちゃんは普通に浮遊術を使っている。

「さ、鬼退治よ、刹那さん!」

「はい!」

襲いかかる鬼達に向かい、駆け出す。

纏めて叩き斬り、送り返す。確かに強いけど、タカミチや陸斗に比べたらずっと遅いし、攻撃も弱々しい。

また、刹那さんも神鳴流剣技を駆使して一掃する。……実戦経験の差かな、私より動きがずつと鋭い。

この調子でいけば、思ったより早くネギ達の応援に行けるかもしれない!

そう思った時、今までよりもずつと濃い妖気が現れた。

「ふん…… たった2人で挑んでくるなんて、いい度胸だね」

そう言っ、大群の前に進み出たのは…… 私たちよりずっと小さな女の子。……うわ、酒くさつ。

でも、頭には大きな2本の角が生えていて、それが鬼だという事を

主張している。

「あんだ、他のとは随分毛色が違うけど………」

「ああ、何か私もよく分かんないんだけど、気がついたらここにいたんだよ。神社で酒飲んでただけだよ」

ぽりぽりと頭を掻きつつ、ぐびっと手にした瓢箪から何か飲む小鬼。いや、鬼が神社で酒って……。

……ううん、身体こそ小さいけど、感じる妖気は他の連中よりもずっと強い。妖怪としての霊格はずっと上だ。ぎゅっと、ハマノツルギを握りしめる。

「刹那さん………」

「……ええ、わかってます」

2人がかりでも勝てるかどうか分からない。

もし、この小鬼がネギ達の方へ行ったら……間違いなくあの2人は負ける。

コイツだけは、私たちがここで食い止める……！！

## 第29話：修学旅行3日目・妹の本気？

〔Side Other〕

ネギ達が追跡を開始するより、ちよつとだけ前…………。

麻帆良学園の学園長室で、近衛近衛右門はレイヤからの連絡を受け、頭を抱えていた。

本山が襲撃を受け、木乃香が浚われた。詠春は反勢力に応戦するのが精一杯で動けない。動けるのは、ネギを含めても4人。

『私たちだけでは対抗しきれません。すぐに援軍をお願いします』  
『しかしのう……タカミチは今、海外じゃし……』

その言葉に、レイヤは思わず舌打ちをした。

麻帆良において、学園長に次ぐ実力者であるタカミチ。彼がいないのは痛い。

「今すぐそこへ急行できる人材は……ふむ、わかった、何とかしよう」

通話を切り、今度は別の相手にかける。

相手は、つい最近麻帆良学園の魔法教師に就任した男。性格や素行には些か疑問は残るのだが、実力は折り紙付きだ。

電話をかけて都合を聞いてみると、快く応じてくれた。そして少しして、彼が学園長室に現れた。

「失礼します、学園長！」

「うむ、わざわざ来てもらって悪かったのう、北山君」

北山史郎。もしかしたら、実力はタカミチとも互角かもしれない男。今から彼を京都へ送り、ネギ達の援護をさせる。……間に合ってくれればいいのだが。

「では、ネギ君達の援軍、頼んだぞい」

「はい！」

[Side Out]

[Side Setsuna]

「奥義……斬岩剣！」

「てえええいつ!!」

烏族の攻撃を躲しながら、アスナさんの一撃と同時に、奥義を目の前の相手に向けて繰り出す。

しかし、2つの攻撃はそれぞれ片手で受け止められ、そのまま投げられる。うまく体制を整えて着地するが、私の身体に小鬼の鎖が巻き付く。

「くっ……」

「動かない方がいいよ……。……酔神「鬼縛りの術」！」

がつ……こ、これは……私の力を吸い取って……いや、散らしている！？

このままでは、全て吸い出されてしまう……くっ！

「刹那さんを、離しなさいっ！！」

と、そこへアスナさんの跳び蹴りが炸裂した。

……おお。この前の戦闘でも思いましたが、アスナさん、蹴り技の才能がありますね。

マトモに受けた小鬼はそのまま吹っ飛び、ずざざざ、と地面を滑る。

この隙を見計らい、身体を震わせて鎖から解放される。

「刹那さん、大丈夫？」

「ええ、何とか……」

とはいえ、かなりの量の気を散らされてしまいました……。……。

「いたた……乱暴だね、そっちの子」

頭をさすりつつ、起き上がる小鬼。あれを受けて立ち上がるとは……さすがは鬼ですね。

と、そこへアスナさんが1つの疑問を投げかけた。

「……ねえ、アンタひょっとして幻想郷の鬼？」

幻想郷？ 何の話ですか？

「あれ？ 何で幻想郷の事知ってるのさ」

「さっきスペルカード使ったでしょ。あんなの使うの幻想郷の住民しかないわよ」

スペルカード……ああ、さっきの鎖の術ですか。

確かに、どこか独特の術のように思いましたが、何でしょうかそれ。そこへ小鬼が、じゅっとアスナさんの顔を眺め始め、ぼんと手を叩いた。

「ああ！ 思い出した思い出した、あんた10年ほど前に陸斗が連れてた子でしょ？ 確か……アスナ、だっけ？」

「そうそう！ ……それで、出来ればその辺のよしみで見逃して欲しいって言うか……」

「あ、それ無理」

ぶんぶん鎖を振り回しながら、きっぱり切り捨てる小鬼。  
いや、そこを断言って何ですか！？

「無理矢理とは言え、喚び出されちゃった以上、仕事はしないとダメなわけ。それに……強いのと殺り合いたいとも思ってるし」

……この小鬼も月詠と同じ“バトルマニア戦闘狂”か。

再び鎖が投擲される……が、それは私たちに届く前に、別方向から飛び出した“何か”によって弾かれる。あれは……羽衣？

「遅くなつてしまい、申し訳ありません」

ふわり、と私たちの前へ降り立つ影が1つ。  
もしかして、永江さん？ どうしてここへ……。

「アスナさんから救援要請が入りましたので。……それで、どうしてあなたがここにいますか？ 萃香さん」

と、やや厳しい目で小鬼の方を睨む永江さん。

あの小鬼は風峰先生と顔見知りのようなので、永江さんとも面識があってもおかしくはありませんが……。

「いや、私も無理矢理喚び出されたんだって。その辺のと同じ様に」  
「……そうですか」

無理矢理のところを強調する小鬼に、周囲の鬼や烏族も「うんうん」と頷いている。

……よく見てみると、中には不満げな顔をしているヤツらもいる。  
もしかすると、この召喚に乗り気では無かった、という事か？

確かに、伝承では鬼は「嘘を何より嫌う」らしいし、そのような者達がいるのなら、今回の召喚に眉をひそめるのも頷ける。

……その様子に永江さんは、「はあ」とため息をつく。

「つまり、引くつもりは無い、と？」

「そーゆー事。……で、どうする？」

永江さんは、少し目を閉じて考えていたようですが、ふと私たちの方へ視線を向けて口を開いた。

「アスナさん、刹那さん……あなた方は先へ行ってください。ここ

は私たちが引き受けます」

「し、しかし！ この数にあの小鬼相手では……」

「言いませんでしたか？ 私たちが引き受ける、と」

え？ 私たち？

何故複数形なんだ、とその疑問が放たれる前に、周囲で異変が起きた。

数体の烏族が何者かに撃ち抜かれ、送り返されていく。これはいたい……。

「……らしくない。苦戦しているようじゃないか、刹那」

「た、龍宮！？」

視線を向けると、そこにはショットガンを構えた龍宮と、脳天気な顔の古がいた。

何故2人がここに……いったい誰が……？

「うちの担任教師の依頼だ。『もしもの事があつた時、応援を頼みたい』と、私と楓に旅行前から頼まれていてな」

「風峰先生が……」

「尤も、旅館を出ようとしたのは綾瀬から救援要請があつたからだ。……出ようとしていた時に先生やこの人と鉢合わせたんだが」

と、永江さんの方を指さす。

じゃあ、風峰先生も既にこつちへ……！？

「既に近衛の救出に向かっている。……間に合うかどうか分かんが」

「早く行ってください。今行かなければ、きっと後悔しますよ」

「！ 分かりました！」

永江さん達に任せ、私とアスナさんは駆け出した。  
既に風峰先生が向かっているとは思いが……頼む、間に合ってくれ！

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

召喚された者達の相手をアスナさんと刹那さんに任せ、私とネギ（+淫獣）は木乃香さん奪還のため、彼女が連れ去られた方向へと一直線に向かっていた。

……確か、この方角にあるのは……飛騨の鬼神、リヨウメンスクナノカミが封じられているという祭壇。

18年ほど前に封印が解かれ、父や詠春さん達の働きによって再封印されたと聞いていますが………もしま、木乃香さんの力で封印を解き、リヨウメンスクナを操るのが目的？

（急がなければ……）

そう言い、飛行速度をさらに上げようとした時、地上から殺気を感じた。

咄嗟に身を捻って飛来した何かを回避するものの、ネギの方は回避しきれずに墜落した。

くっ……ここでネギに構っている時間は無い！

墜落したネギを無視し、そのままさらに飛び続け……森を抜けた私の前に広がっていたのは湖だった。中央には祭壇と巨大な岩……あれですか！

「ファイ・ニリア・エル・レア・ファイールア！ 風の精霊21人、縛鎖となりて敵を捕まえろ！」

詠唱しているのは風属性の魔法の射手。これなら木乃香さんに当たってもダメージは無い。

これが通用するとは思えませんが、牽制にはなります。

「『魔法の射手・戒めの風矢』！」

21発の魔法の矢が祭壇に向かって放たれる。

しかし、着弾する前に全て打ち落とされた。……あそこにいるのは、確かシネマ村で遭遇した白髪の少年？

「……10歳で浮遊術を使いこなすとは、なかなかの才能の持ち主のようだね、レイヤ・スプリングフィールド」

その場に浮遊し、少年の言葉に耳を傾ける。

時間稼ぎかもしれないが、それでも私には情報が足りない。何故、

ここまでの事件が引き起こされたのかも、彼が何者かも。

「あなたはどなたですか？ 出来れば、退いて頂ければ嬉しいのですが……？」

「フェイト・アーウェルンクス。諸事情から彼女に協力している。

……あと、答えはNoだ」

そう言った瞬間、フェイトさんの周囲に石の槍が出現し、私の方へと撃ち出される。

結界で受け止めようとも思っただけで、嫌な予感が脳裏をよぎり、無詠唱魔法と高機動を駆使して回避する道を選んだ。

私の頬を掠めた時、障壁で緩和されることなく頬が切れたところからおそらくは障壁突破能力を付与されている。……もし障壁で防ごうとしていたら、もっとも貫かれていたところだった……！

(……………強い)

少なくとも、私が今まで見てきた魔法使いの中では、間違いなくトップクラスの実力者だ。

このレベルの相手に対抗できるのは、風峰先生かエヴァンジェリンさん……少々厳しいかもしれないけど、タカハタさんくらいだろう。……ハッキリ言って、今の私では足下にも及ばない。ですが、一矢くらいは報いさせてもらいます！

(『魔法の射手・闇の一矢』！)

無詠唱の魔法の矢をフェイトさんに向けて撃ち出す。当然、簡単に弾かれたが……あくまでも牽制。

1発ずつではあるけれど、そのまま連続して無詠唱の矢を撃ち出していく。その間、呪文詠唱を続ける。

……以前、魔法先生同士による模擬戦の記録映像を見せてもらった時、神多羅木先生の戦い方を見様見真似ではありますが、真似させて頂きました。魔法使いとして、かなり高度な戦法ではありませんからね。

「フィ・ニリア・エル・レア・フィアールア、来れ氷精、爆ぜよ風精！ 『氷爆』！」

フェイトさんの周囲に大量の氷が出現し、それが爆ぜる。

凍気と爆風で攻撃する呪文ですが……フェイトさん相手には効果があるか分からない。

だからこそ、さらに続ける。足を止めたら、そこで全てが終わってしまうから。

「『氷神の戦鎚』！！」

ただ、巨大な氷の球体を作り出し、相手にぶつける。それだけの呪文。

エヴァンジェリンさんから教えてもらった呪文の1つで、エヴァンジェリンさんなら半径10m近いものをいくつも作れるが、私は4.5mのを1個が限界。

それでも、受け止めた際に何らかの隙が生じる。

「はああああっ！！」

「っ……！！」

予想通り、フェイトさんはそれを両手で受け止める。

……彼は本気で戦っていない。おそらく、私と戦っているのも時間稼ぎではなく、何か別の……そう例えば、実力を計るため、とか？ その点には複雑ですが、今は感謝するしかない。おかげで、それで

生じた隙を突く事が出来る。

フェイトさんがそれを受け止めた瞬間、足に魔力を込めてフェイトさんの懐へと飛び込む。そして、予め留めてあった呪文を解放した。

「『魔法の射手・戒めの風矢』」

風の拘束が、フェイトさんの身体を縛り上げる。

私の取得呪文、そしてエヴァンジェリンさんの教えてくれた呪文から思いついた、相手をやり過ぐすコンボです。……試した事はありませんでしたが……。

「……なるほど、遅延呪文か。見事だよ、レイヤ・スプリングフィールド」

「それは、ありがとうございます」

——ディレイスベル  
“遅延呪文”。

その名の通り、予め詠唱した呪文を時間進行、或いは設定したキーワードで発動したりする、時間差技法の1つ。

あまり強力な魔力を行使できない私は、小手先の技術で戦うしかない。研究の合間を縫って習得した技法の1つです。

風属性の魔法の矢は、それほど協力ではありませんし、フェイトさんほどの実力者なら数十秒で破られる恐れもある。その前に、なんとしても木乃香さんを……。

「……しかし、遅かったようだね」

「っ……………」

私の眼前で、巨大な光の柱が立ち上り、そこから巨大な鬼神が現れようとしていた。

これが……………リョウメンスクナノカミ……………。肌にひしひしと伝わ

つてくる気配は、確かにマズイとしか言い様がありませんね……。木乃香さんとあの時のデカザル女は、リョウメンスクナの肩の辺りに浮いている。フェイトさんの拘束も、後10秒もしない内に解けるでしょうし、背を向けて飛び立つわけにも行かない。

だけど、ここで立ち止まるわけにはいかない。諦めたら、そこで試合終了なんです！

……あれ？ 今の言葉、何でしたっけ？ まあ、それはともかく、再び浮遊術で飛び立とうと……。

「てや〜」

「ッ！？」

間延びした声と共に、鋭い斬撃が繰り出され、咄嗟に後方へ飛んで回避する。

今の声と攻撃、まさか……………。

「どうも〜、神鳴流です〜」

「つ、月詠さん！？」

しまった……完全に失念していた。

彼女は刹那さんにご執心のようだし、私のところへは来ないだろうと……完全に私のミスですね。

ハッキリ言ってマズイ。遠距離なら分らないが、近接戦では月詠さんには勝てない。いや、それどころかフェイトさんまで加わったらず、勝ち目は無い。

いくつか“隠し球”を使っただとしても、勝てる要素は……………。

(…………やむを得ませんね)

勝率はほとんど0に近い。否、勝てるはずがない。

今の自分に出来る事。それは少しでも彼らにダメージを与えるなりして、後に続く人達へバトンを渡す事。

人任せと言ってしまうえばそこまですが、今の私に出来るのはそれくらいしかない。

そこで、全ての魔力を解放する。……普段解放する事のない“王家の魔力”を。

それ全てを解放した瞬間、私の身体に魔力が流れ込み、同時にこれまで味わった事のない激痛が迸る。

「これは……王家の魔力」

相当驚いているようですね。……ええ、私自身も驚いてますよ。

ここまで濃密に王家の魔力を解放したのは初めてです。……下手したら、命にも関わりかねませんから。

とはいえ……意識を保つだけでもキツイですね……。

「わ……これはこれは、斬り甲斐がありそうですね」

……あの、月詠さん……何でそう目をキラキラさせてるんですか？子供みたいな顔で、すっごく物騒な事言ってる気がするんですけど……いえ、フェイトさんも呆れてるような気がします。

私が一步踏み出した瞬間、2人の纏っていた雰囲気が変わった。：

ええ、出し惜しみなんてしません。最初から最後までクライマックスで行かせてもらいます！！

「はああっ！！」

月詠さん目がけて、無詠唱の魔法の矢を放ち、そのまま蹴りを放つ。が、魔法の矢は一閃でかき消され、蹴りも片手で受け止められる。しかし、月詠さんの顔が少し歪む。

王家の魔力は防御不可能……それはあの前哨戦で、あの犬っぽい子相手にした時、お見せしたはずですが？

今の蹴りにもそれを込めて、受け止められると同時に月詠さんの身体へと流し込んだ。

魔力や気を敵の身体へと流し込み、身体の内部から破壊するという技は普通に存在します。中国拳法でも、確か「浸透剋」と言っただけでしたっけ？

まあ、私はまだまだ未熟ですから、そこまでの破壊力は期待出来ません。……せいぜい、相手を怯ませるのが精一杯です。

「まだ、です！」

腹部に右掌を押し当て、零距离から魔法の射手を放つ。

無詠唱の1発だけ。けども、放ったのは雷属性の矢。電気によるしびれが残って動けなくなるはず。

「ファイ・ニリア・エル・レア・フィアールア！ 来たれ虚空の雷、薙ぎ払え！ 『雷の斧』！」

雷属性の上位古代語魔法。

無詠唱魔法の射手からの発動は、“千の呪文の男”が好んで使用していたという連携。

……共に、エヴァンジェリンさんから教わった戦法の1つです。使うのは少し複雑ではありましたが。

「驚いたね。君はてっきり氷系だと思っていたんだけど」

ぱきん、と拘束が引きちぎり、フェイトさんがそう呟く。

……ええ、確かにさっきまでは氷系の呪文を使っていましたよ。

「私、器用な方なんです」

「……………なるほど」

嘘は言っていないですよ？ 私はある程度ではありますが、いくつか異なる属性の魔法も扱う事は出来ます。

……………これはある意味、私だけの才能と言つべきものなのでしょう。

「いたた、今のは効きましたわ」

そう、月詠さんが身を震わせつつも起き上がる。

なにげにシヨックですね……………結構重く入ったと思ったんですけど……………。

「ウチもちよつと規格外なので」

……………確かにこの人は、色んな意味で規格外ですね。

しかし、どうしましょう。正直な話、このままでは……………。

と、フェイトさんが突然歩みを止め、私とは全くの別方向へと視線を向ける。そして……………。

「……………ようやく来たようだね」

「え？」

その視線の先には……………。

「ああ、全速力で飛ばしてきたんだが、思ったより時間がかかったんでな」

「ふ……………君がその気になれば、もっと早く飛んでくる事くらい出来るだろうに」

「生憎、音速で飛んだら周り全部吹っ飛ぶわ。……………さあ」

ずっとフェイトさんと月詠さん、そしてリョウメンスクナの上の方にいるデカザル女に指を差す。

「お前達の罪を数える——！」

いつもとは違う面持ちの、風峰先生の姿がそこにあった。

**第30話：修学旅行3日目・雷光、夜天に煌めく（前書き）**

注意：タイトルに夜天とは付いてますが、別に狸は出てきません。

### 第30話：修学旅行3日目・雷光、夜天に煌めく

「Side Negi」

木乃香さん救出の途中、小太郎君に邪魔されたけど……そこに長瀬さんと綾瀬さんが現れて、先に進ませてくれた。

レイヤは先に行ってるから、きつと今頃あの白髪の少年と戦ってるはず。……急がなくなちゃ。

「ネギ！」

「ネギ先生！」

その声に、顔を横へ向けると……。

「アスナさん、刹那さん！ どうしてここへ……」

「援軍が来たのよ！ それで私たちも木乃香の方へ向かってるってわけ！」

「それより、レイヤさんは？」

あ、えつと……小太郎君に邪魔されてる間に、先へ行っちゃったみたいなんですけど。

そう説明すると、2人の顔色が変わった。

「ちよっ……それマズイでしょ！？ あの変なガキと、月詠ってヘンタイ剣士もあっちにいるんじゃないの！？」

言われてみれば……小太郎君の事で目一杯で忘れてた。

ちよっと待ってください。と言うことは、レイヤ1人であの人達と戦ってるって事じゃ……。

「急ぎましょう！」

刹那さんがそう言い、僕達も森を突き進み……ようやく抜ける。  
そこに広がっていたのは……巨大な鬼神と、祭壇らしき場所で戦っている白髪の少年に剣士の女の、そして……。

「か、風峰先生！？」

何故か、レイヤと一緒に戦っている風峰先生の姿だった。  
な、何で風峰先生がここにいるの！？

[Side Out]

[Side Rikuto]

「てや」  
「くつ！」

月詠の斬撃を躲しつつ、拳撃で反撃する。  
純粋な力量で言えば俺の方が上だが、相手は退魔専門の神鳴流剣士。  
おまけにコイツの撃ってくる技は……。

「ざんまけ〜ん！」  
「うおつと！」

神鳴流奥義「斬魔剣・弐の太刀」。  
妖怪や悪霊に対し、絶大な効力を発揮する……退魔の技の真骨頂。  
元々は悪霊に取り憑かれた者を傷つける事なく、悪霊のみを斬り伏  
せるために考案されたという。

ハッキリ言つて、妖怪の俺はまずぶった斬られる。おまけに結界無  
視の効果なので、受け止める事は出来ない。つまり、避けるしか  
ない。

しかも……………。

「足下がお留守になつてるよ」  
「ちつ……………！」

相手は月詠だけでなく、フェイトもいる。  
ここで手札を見せるつもりは無いらしく、ある程度手は抜いている  
が……それでも厄介この上ない。

満身創痍のレイヤを守りつつ、この2人の相手をするのはさすがに  
……………。

「『魔法の射手・連弾・炎の34矢』！」  
「！？」

「ひゃ〜」

炎の矢が2人に向かって放たれた。当然回避されたが、それでも時間稼ぎにはなった。

その間、俺は距離を取って魔法を撃った張本人……レイヤのところへと下がる。

「レイヤ、お前………」

「援護ぐらいは出来ます。……ちょっと無理しすぎましたから、動けませんけど」

疲労は大きいのだが、それでも強がって笑おうとするレイヤ。身体中、どこもかしこも血だらけだが、ここで休んでいる暇は無いらしい。

「それに……諦めたらそこで試合終了ですからね」

「！ お前、その言葉………」

それ、安西先生の名台詞じゃないか。

この世界には、あっちの世界の漫画は存在しない。それをレイヤが知っているという事は、微かだが記憶があるのか？

……いや、それどころじゃない。今はコイツらをどうにかしなければ……。

「後ろを頼む。あまり無理はするなよ？」

「はい！」

立ち上がり、再びフェイト達へと視線を向ける。

……おそらく、フェイトは待っている。自分が退くタイミングが……俺達の援軍が来るのを。

出来れば今すぐにも退いて欲しい気分なんだが……。

「来るのかい？」

「ああ。少しばかり相手をしてもらっ

懐からスペルカードを取り出し、発動する！

「虚無「エクリプスクレイモア」！」

無数の黒い光弾が俺の周囲に出現し、一斉に放たれる。  
だが、これで終わりではない。

「続けて……結界「黎明の抱擁」」

瞬間、フェイトと月詠を包み込むようにして、黒い正方形が出現する。

相手の行動を束縛するためのスペル……だが、既にクレイモアは箱の中へと入っている。

「爆ぜろ！」

次の瞬間、全てのクレイモアが弾けた。

箱の中で凄まじい熱量の爆発が発生する。……………これで倒せる相手ならいいんだがな。

「……驚いたね、ここまでの術を使ってくるとは」

正方形が消滅し、中から無傷のフェイトと月詠が現れた。

やっぱり無傷かよ。本気でやったらこの辺り一帯吹っ飛ぶから、半分以下の出力だったとはいえ、さすがにショックなんだが。

「ヴィ・シユタル・リ・シユタル・ヴァンゲイト…おお、地の底に眠る死者の宮殿よ」

おいおいおい、ここでこの呪文かよ。

詠唱を邪魔しようにも、月詠が先へ行かせてくれないし……。

「我らの下に姿を現せ。『冥府の石柱』」

無数の巨大な石柱が、フェイトの周囲に出現する。

ただ、あれをぶつけるだけの魔法。だが、その質量からなる物理的破壊力は凄まじいの一言に尽きる。

あれを全部打ち落とすのはさすがに一苦勞だ。だから……。

「アスナっ、どっかその辺にいるんだろ？ デカイのは頼む！」

「え？」

「わかってるわよっ！！」

やっぱり来てたか。そろそろ来ると思ってたんだが……。

横に視線を向けると、水面を走ってくるアスナと刹那、さらに杖に乗って飛んでくるネギ坊主の姿があった。

アスナがハマノツルギを振り上げ、一言呟いてそれを振るう。

「——無極而太極斬」

ハマノツルギが振るわれる毎に、石柱がかき消されていく。

アスナの“魔力無効化”能力を攻撃に転用した技。これであの石柱はどうにか出来る。

……あ、ちよっと待った。アスナのあれを見られてるという事は……。

「魔力完全無効化能力……黄昏の姫巫女か」

ちよつと驚いたような顔でアスナの方を見ていた。

まあ、そりゃあ驚くよな。10年前まであんなのだったのが、今はああだし。

「……そろそろ退いてくれないか？　こうやって援軍が来た事だし、確かに頃合いかもしれない。……では、また会おう」空に坐す者”」

足下の水たまりに沈む形で、フェイトの姿が消えた。

水を用いた“転移陣”か。まあ、その内連絡か何かが入るんだろうけど。……さて、次は……。

「お嬢さん、あんたはどうする？」

「そーですねー、お給料分は働きましたし……ウチも帰りますうー」

正直ホツとした。

いや、ここでこのまま殺り合うのも御免だし、何というか……戦ってる時、すっごい恍惚な表情で斬りかかってきたのが1番怖かった。

「刹那センパイと戦えへんかったのは残念ですけど、そこのお兄さんと殺り合えたのは楽しかったですわ。今度は本気で殺り合いますよ？」

「………考えとく」

そう言い、月詠も明後日の方向へと去っていった。

……なお、俺がこの言葉を後悔するのは、麻帆良に帰ってしばらくしてからだった。



あの場所まで行くとなると、浮遊術は必須になる。しかし、刹那にそれが出来るのか？

「……皆さん、私には皆さんに、お嬢様にも秘密にしていた事があります」

そう言った刹那の背中に、何かが広がった。

……白い羽。そうか、刹那から感じていた違和感の正体はコレだったのか……。

「お前、鳥族……天狗の」

「……半分、血を引いています。奴らと同じく、化物です」

……む、今のはちょっとムツと来たな、俺も。

アスナも少し顔をしかめている。……まあ、無理も無いのだが。

「でも、誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です！……ただ、怖かったです。この醜い姿をお嬢様に知られて嫌われるのが……あの、アスナさん、何を？」

困惑した顔でアスナを見る刹那。

なお、アスナは刹那の背中の羽を、もふもふしている。

俺もちよつと触ってみたいのだが……さすがに教師という立場上、自重している。

「いや、触ってみたいなんて。綺麗だし」

「き、綺麗って……」

「……刹那さん、今の言葉ちよつとムツと来てる。自分の事化物だつて言つたでしょ？そこが納得出来ない」

ちよつとだけ厳しい目で刹那を睨むアスナ。

「私は……まあ、昔から色々あって、所謂「人じゃない」人達とも付き合いはあった。でもね、その人達は凄く感情豊かで、凄く真っ直ぐで……だから、刹那さんの言葉にちよつと見過ごせなかった」

「アスナ、さん……」

「だいたい……木乃香がそんな事で誰かを嫌いになったりすると思う？ これでも2年近くあの子の側にいた私にだって分かる。木乃香はそんな子じゃない」

刹那が何気なく、俺やレイヤ、ネギ坊主の方を見る。

ネギ坊主やレイヤは、何言わずに頷いている。……まあ、俺もアスナの意見には同感だ。

「……ま、俺もその化物の定義に充分当てはまるんだが……」

「え？」

「その話はまた今度だ。……ほら、お姫様の救出頑張ってこい」

「……ハ、ハイ！」

刹那がかみ込み、飛び立つ体制を整える。

……と、俺達に向かって何か呟いた。

「……このちゃんのために頑張ってくれて、ありがとうございます」

そう言い、飛び立った。

さて、刹那が木乃香を救出してからだ。スクナをどうにかして封印可能なまでに押し留めない……。

俺が本気でやれば、それくらいは容易い。だが、場所が場所なので空間に変な影響が出る恐れもある。……チツ、エヴァを呼んでくればよかったな。

「……あの、私に任せてくれませんか？」

「レイヤ？」

「1つだけ。あれをどうにか出来る呪文があります。……未完成ですが、少なくともあれをどうにかするには十分な威力はあります」

顔を上げて、スクナの方を見るレイヤ。

……ここで止めた方がいいかもしれないが、それでもレイヤはそれを望んでいる。

「……わかった。だが、絶対に無茶をするな。いいな？」

「はい」

スクナを真つ直ぐに見据えると、レイヤは自分で親指を噛み、自分の血で陣を描く。

「ファイ・ニリア・エル・レア・ファイアルア！ 契約により、我に従え高殿の王！ 来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆！」

っ！？ この詠唱は……雷系最上位！ ナギが好んで使用していたあの……。

ちよつと待て、今のレイヤが使えるのか？

同時に、無数の魔方陣がスクナの周囲へと展開される。効果範囲や射程距離、その他諸々を拡張し、補正する役割の陣だ。

未完成だと言っていたから、これを使って完成形に近い形に仕上げるつもりか。

「百重、千重と重なりて、走れよ稲妻！」

最後の詠唱を終えたと同時に、刹那がスクナの肩で、木乃香と千草

を掴んで離れる。

急速に離れていき、呪文の射程外へと逃れたと同時に俺は声を上げた。

「今だっ！！」

「『千の雷』！！」

轟音と共に凄まじい熱量の雷が出現し、スクナの身体を焼いていく。余波が来る前に、アスナとネギ坊主を後ろに下げ、レイヤの前へ立つと、もう1枚スペルカードを発動させる。

「……結界「二重結界」」

[Side Out]

「Side Set suna」

彼女はなおも笑い続けている。

……18年前、スクナの封印を解いて制御しようとした術者も、スクナの力に吞まれて精神を病んだと聞いている。

お嬢様のお力でスクナを制御しようとしたのだろうが、それすらも制御出来なかった。だから、スクナに吞まれてしまった。

『アイツも、被害者なんだ』

悲しげな顔で、風峰先生はそう言っていた。

天ヶ崎千草は20年前の大戦で、両親を亡くしたと長から聞いている。……その詳細は分からないが、おそらくそれが今回の事を企てる原因となったのだろう。

……彼女の気持ちは理解出来無くない。だが、それでも……。

「天ヶ崎千草……お嬢様は返してもらおうぞ!」

私の事は目に入っていないのか、そう言ってもまだ笑い続けている。お嬢様を抱きかかえ……ついでに天ヶ崎千草の腕を掴み、そのまま離れる。

既にスクナの周りには幾つもの魔方陣が浮かび上がっている。おそらく、これがレイヤさんの切り札。

私がある程度の距離を取ったと同時に、凄まじい轟音が響き渡り、スクナの身体が粒子と化して消えていく。

……これが、レイヤさんの力……。

「んっ……何や、今の音……」

「! お嬢様!」

今の呪文の音で目が覚めたのか、お嬢様がつつすらと目を開ける。  
そして……私に抱きかかえられていると気づき、微笑む。

「……あゝ、キレーやな」

「え？」

「せつちゃんの背中」

こ、これは……えと、あの、その……。

「まるで、天使みたいや」

そう言い、お嬢様……このちゃんはまた笑った。

[Side Out]

[Side Leiya]

私が『千の雷』を発動させると同時に、風峰先生の結果が展開され、呪文の余波から私たちを守る。

……この呪文はまだ未完成。だから、周囲へどれだけ被害が出るか分からない。

下手をしたら、アスナさん達も巻き込みかねない。……その懸念はあったのですが、どうやらうまくいってくれたようです。

「これで、一安心……」

あ、あれ……身体が、言う事を……。喉の奥が熱い。こぶっ……。

「レイヤ、ちゃん？」

アスナさんが呆然とした顔で私を見つめている。どうしたんですか、そんな顔で……。

……あれ？ 今、私が吐いたのって、血？  
あ……足下がおぼつかない。ぼーっとする……。

「レイヤっ……！」

倒れる寸前、風峰先生が抱き留めてくれた。

……やっぱり、似てる。今の感じや、この心配そうな顔も全部……。  
うつすらと残っている、私の前世の“兄さん”に。

「おい、しっかりしろ！ 意識を保て！」

「あ………う………」

声が出ない。視界もかすむ。雑音だらけ。

そんな何も分からないまま、私の意識は闇に墜ちた。

第30話：修学旅行3日目・雷光、夜天に煌めく（後書き）

ついに、無理をしてきたツケが回ってきました。  
レイヤはどうなってしまうのか。次回、果たして……。

今、弟子入りテストの36話ぐらいまで書き終えてるんですが、ちよつとやり過ぎた感が否めないんですよね。  
特に35話が、完膚無きまでに感情の赴くまま書き上げてますから、批判が来そうで怖いです。

### 第31話：修学旅行3 & 4日目・明けぬ夜はない

〔Side Asuna〕

「レイヤ！　しっかりしろ、レイヤ！」

ちよつと、これどうなってるのよ！？

大呪文使い終わった後で、いきなり血を吐いてレイヤちゃんが倒れた。

確かに身体弱いとは聞いてたけど……何があつたのよ、いつたい！？

「レイヤさん！」

「レイヤちゃん！！」

刹那さん、木乃香も……。

あ、楓ちゃんと夕映ちゃんも来た。えつと……誰だっけ、あの犬っぽいガキも。

「レイヤちゃん、どないしたん！？」

「……魔法の過負荷だ。力を使いすぎて、身体が耐えきれなかったんだ……」

悔しそうな顔で陸斗が齒を食いしばる。

無理も無い。あの状況、レイヤちゃんが「どうにかする」と言つて、私たちはそれに任せたのだから。

でも……どうするの？　ここには治癒術者は誰もいない。今から本山へ行って連れてくる……うつん、レイヤちゃんを連れて行った方が早いけど……。

「……いや、ここから動かせばヤバイかもしれない」

「ごほごほ、となおも血を吐き続けるレイヤちゃん。

確かに……動かしたらヤバイ状況になるかもしれない。でも、どうするのよ!？」

「お嬢様……」

「うん。アスナ……ウチ、レイヤちゃんにチューしてええ?」

「は?」

「ちょっと……こんな状況で何言ってるの?」

「いや……別に同性間のそういった事にどうこう言つつもりは無いけど、そーゆーのはもっと人目の……」

「そうやなくて、ほらあの……ぱ、パクテオーいうやつや」

「パクテオー? ……ああ、仮契約ね。」

「確かに仮契約には、対象の能力を引き出す効果がある。木乃香……というより、近衛家の女の人の力が治癒に傾倒してるっていうのは、前に聞いた事がある。」

「うまくいけば、木乃香の力でレイヤを救う事が出来る……かもしれない。」

「……やむを得ないな。オコジヨ、魔方陣を頼む」

「お、おう!」

「オコジヨが魔方陣をレイヤの下に魔方陣を描くと、そこへ木乃香が近寄る。」

「ボロボロのレイヤの身体を抱きかかえ、首を持ってそのままキスする。」

……瞬間、眩い光が一带を埋め尽くした。

「う……………」

「レイヤ！」

弱々しいが、レイヤが目を開いた。  
だ、大丈夫なの？　なんか怖いんだけど……。

「……………にい、さん？」

兄さんって……………ネギのこと？　いや、でもレイヤちゃんがネギの事を兄さんって呼んだ事あったっけ？  
ネギは……………呆然としてるわね。

「ああ、そうだ。ゆっくり休め」

「……………はい」

陸斗にそう言われたのと同時に、再び目を閉じた。

規則正しい寝息が聞こえてきたので、眠っただけなんだろう。……  
とにかく、レイヤちゃんは助かったと分かったので、私たちは肩を  
なで下ろした。  
よ、よかった………………。。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

事件が終息し、刹那が逃げようとしていたのをレイヤやアスナが引き留め、それで旅館に戻っていった後、俺と衣玖は改めて本山を訪れていた。

……いや、旅館は大変だったぞ？ 俺達のいない間に、身代わりがストリップショー始めててな……新田先生を誤魔化すのが大変だった。

「風峰殿、今回は本当に感謝を……」

そう詠春と、四国から帰ってきたばかりの木乃葉が俺達に頭を下げる。

おいおい、やめてくれよ。身体張ったのはレイヤなんだからさ。

「それで、レイヤさんは……？」

「ご安心を。身体の調子も安定してますし、この分なら後遺症も遺らないでしょう」

詠春のその言葉に、俺と衣玖はホッとした。

いくら木乃香の超絶的な治癒力で回復したといっても、身体の中身

がどうなったかまでは分からない。

「で、お前達は相当絞られたんだろう？ 木乃香に」

「ええ……」

俺の言葉に苦笑いする2人。

戦いを終えてすぐ、お冠の木乃香は詠春と木乃葉、さらには刹那も含めてOHANASHIタイムを行った。内容は主に、「何故自分に魔法の事を黙っていたのか」。

……そりゃあ怒るよな。裏に関わらせないっていう教育方針に、全く自分の意志が反映されてないんだから。

なお、刹那もOHANASHIの対象になった。いくら護衛だからといって、影ながら護衛する事が最良だと決め込んでいた事に対し、相当お冠だった（なお、この辺りは詠春達も知らなかったらしく、眉をひそめていた）。

「最終的に、木乃香が魔法を学びたいという意欲を見せたので、その辺りについては義父を交えて話し合った上で決めたいと思います」  
「それに、お父様はウチらに黙って、木乃香にお見合い話を持ち込んでたらしいからな」

にこやかにそう言う木乃葉だが……目が笑っていない。詠春も青くなってるぞ、おい。

……ああ、そうか。刹那にストーキングされてる事を電話で告げた時の雰囲気、あれに似てるんだ。

コイツら、似て欲しくないところが似てくるなあ……夜美<sup>やみ</sup>に。

「と、とにかく、義父とはその辺りも含めて話し合った上で、木乃香の今後についても考えていくつもりです。……もちろん、あの子の意志を最優先にしますよ」

「まあ、何はともあれ、これで一件落着か」

そもそも、こんなややこしい事態になったのは、学園長の見通しが甘かったからだよな。

援軍とかで送ってきた北山も、最終的に道に迷ったとかで、こつち来たのがあの後だったし……向こう帰ったら思い切り追求してやる。

「あの、主犯の天ヶ崎千草さん……彼女は怎么样了のですか？」

衣玖が躊躇いがちにそう尋ねる。

ああ、そう言えば……なあ。『千の雷』に巻き込まれないよう、刹那が木乃香助けた際に引つ張ったらしいが……。

「実刑は免れないでしょう……ただ、この事が引き起こされる要因となったのは、元を正せば我々の不手際にあります。その辺りに恩情を加えた上での刑罰になるかと」

「……………そうか」

スクナの力に吞まれたとはいえ、18年前の術者のように精神が壊れる事は無かった。

とはいえ、治療は必要だ。……出来る限り、前向きに生きて欲しいものだが。

「ところで、今日はネギ君達をナギの別荘へ案内するのですが……どうしますか？」

この場合の詠春の言う「どうしますか」というのは、俺も行くのかどうか、という事だろう。

ん……基本、教師も行動は自由になってるし……このまま旅館に戻ってもな。

隣の衣玖に視線で尋ねると、にこやかに頷かれた。じゃあ、そうするか。

「俺も同行しよう。どのみち、ネギ坊主には説明しなくちゃならんだろうし」

「そうですか」

衣玖には……アイツの事を頼もう。

いや、いくら手当たり次第に召喚したからって、何でアイツが出てきたんだ。きちんと送り返さないと……。

おっと、折角京都に来たんだ。その前にあそこへ寄らないとな。

「あそこ？」

「墓参りだよ。……あのボケ娘のな」

「……………ああ」

[Side Out]

「Side Leiya」

どうも、いつにも増して絶好調なレイヤ・スプリングフィールドです。

……いえ、理由は分からないんですが、身体の調子がいいんです。いつもはこう、もやがかかっていたけど、今日はすくっと晴れ渡ってるというか……。

昨晚、死にかけた時に木乃香さんと仮契約して一命を取り留めたようなんです……それでしょうか？ よく分かりませんが……。

「ほら、レイヤちゃん早く」

「はいはい」

現在、私たちは父様の別荘とかいう場所に向かっている。

私はそれほど興味は無かったのですが……ちよつとだけ詠春さんに用があるので、いい機会だと思ったので。

……何故か一般人のはずの夕映さんとハルナさんがいるのは無視しましょう。

「やあ皆さん、休めましたか？」

「遅かったな、お前達」

と、出迎えてくれたのは私服姿の詠春さんと、いつも通りの風峰先生。

起きた後でアスナさんに教えてもらったのですが、私、風峰先生の事を「兄さん」って呼んでしまったようです。

……い、いえ！ 確かに、私の記憶にある「兄さん」と似てるな……とは思いますが……その辺りはどうなのでしょう？

「この奥です。3階建ての狭い建物ですよ」

「あ、はい。……あの、どうして風峰先生が……それに昨日の事は……」

……そうでしたね、ネギは先生が魔法関係者だという事は知らないのでしたっけ。

その辺りはおいおい説明があると思うので、放っておきましょう。先生も無視するようですし。

そのまましばらく歩くと、草木に囲まれた建物が見えてきた。……あそこ、でしょうか？

「10年の間に草木が茂ってしまいましたが、中は綺麗なものですよ」

確かに詠春さんの言ったとおり、中は意外にも綺麗だった。

周囲から聞く話では、父様はかなりいい加減な人だったようですし、散らかり放題かと思っていたのですが（その事を尋ねたら、詠春さんも先生も何とも言えない顔をしていた）。

適当にその辺りの本を一冊……ふむ、なかなか高度な魔法理論ですね。ギリシャ語ですから、普通の人間には読めないでしょうけど。

「レイヤ君、あなたもこちらへ」

「？」

呼ばれたので行ってみると、そこには既にアスナさんと木乃香さん、刹那さんとエヴァンジェリンさんに……おまけのネギも集まっていた。

机の上には写真立てがあり、詠春さんも先生も懐かしげにそれを眺めている。

アスナさん達とそう変わらない年頃の父様を中心に、4人の男性と1人の少年がその周囲に立っている。その内の1人は、20代ぐらいの詠春さんでしょうか？

「……この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友達……黒い服のが私です」

ううん、かなり若いですね。

年代的に考えると……20年ほど前の写真でしょうか？

「あ~~~~~っ!!!」

こ、木乃香さん？ どうしたんですか、いったい。

その手に持っているのは……別の写真立て？

「こ、ここの……これ！」

「え？」

その写真には、3人の少年少女を前に、そして後ろには今と変わらない姿の先生に、見た事のないメイド服の女性の姿が写っていた。そりゃあ、風峰先生は写っているでしょう。仮にも“紅き翼”の一員だったわけですし。

「そ、そうでした！ 何で風峰先生が……」

「あ……」

先生は、詠春さんと顔を見合わせると、次に私にも視線を向けてきた。

ネギに黙っていたのも、戦友だった事がバレると根掘り葉掘り聞かれる可能性がありましたからね……ファザコンですし。

ここで下手に何か言って通用するか怪しいですし、話してしまっ  
ては？

「サウザンドマスターのパーティ“紅き翼”。……俺もその一員だ  
ったからな」

「じゃ、じゃあ……父さんの仲間！？」

「そうなる」

「ど、どうして教えてくれなかったんですか？」

だから、そういう風に問い詰められるのが目に見えていたからです  
よ。

「聞かれなかったから」

………便利ですね。その言葉。

ネギも、それ以上追求しても無駄だと悟ったのか、先生から視線を  
そらしていますし。

「この子………どっかで………」

木乃香さん、まだその写真見てたんですか？

えっと、右側の子ですよ。眼鏡じゃなくて、短い髪の子。……

言われてみれば、確かに知ってるような気がします。誰でしたっけ？  
そこへ詠春さんが苦笑しつつ、教えてくれた。

「タカミチ君ですよ」

タカミチ君？ ……ああ、タカハタさんですか。

………え？ タカハタさん？ ええ！？

もう1度写真を見してみる。そして改めて、私の知るタカハタさんの

顔と照らし合わせてみる。……老けすぎでしょう。

……まあ、実年齢の倍以上老ける人もいますから、その辺はいいでしょう。

「私もナギも、かつての大戦で戦った戦友でした。……そして戦争での働きにより、彼は“千の呪文の男”と呼ばれるようになったのです」

戦争の英雄……ですか。

ネギは……あれ、思った以上に落ち込んでませんね。戦争って辺りを強調していたのに。

「天ヶ崎千草の両親も、その戦争で命を落としています。……それにも幾つかの複雑な事情があったのですが……それはまた、今度にしましょう」

では、彼女の今回の行動は、両親を死に追いやった魔法使い達への復讐。

ですが、詠春さんも先生も苦い顔をしていますし……この辺りにも何かあるんでしょうか？

「ナギが行方不明になったのは10年前、彼の最後の足取りは分かりません。そして公式の記録では1993年死亡……これ以上は私にも」

「そう、ですか」

……あれ？ アスナさん、何だか顔色が悪いような……。

「……うつん、何でもない」

そういえば、アスナさんも結構な謎な人なんですよね。  
10年前に先生に連れられて麻帆良にやってきたらしいですし、その上仮契約カードも持っていましたし、何かあるのでしょうか？  
……少し、嫌な予感がしますね。深入りはやめておきましょう。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

ナギの別荘での話を終え、俺は旅館に戻ってきた。  
出発時間も近づいてるし、それほどゆっくりは出来ないけどな。

「お疲れ様でした、陸斗」

「……………ああ」

出迎えてくれた衣玖に、ふっと微笑む。

思えば、こいつにも感謝だな。普段から迷惑かけっぱなしだし、昨日だってあの飲兵衛の相手をしてくれたし。

「ところで、あの飲兵衛は？」

「こつちです」

そう言い差し出したのは……見覚えのある2本の角が突き出た、やや大きめのナツブザック。中からは寝息が聞こえる。

……まあ、角生やした人間が京都を彷徨かせるわけには行かないし……。

「……麻帆良帰ったら、紫呼んで送り返さないとな」

俺の言葉に苦笑いする衣玖。

いや、送り返さなくちゃダメだろ。確かに麻帆良はかなり寛容なところがあるけど、さすがに魔法先生に見られたらアウトだ。

「それと、ありがとな。俺のワガママ聞いてくれて」

「……いえ、私としては普段から甘えてくれた方が嬉しいんですけど？」

バカ言うな、大の大人が甘えられるか。

前に言ってきた「姉弟プレイ」とか「赤ちゃんプレイ」とか……いや、思い出したくない。入れ知恵した紫は、後で吹っ飛ばしたが。

「じゃ、そろそろ時間だし、先に駅に行ってくれ。後で追いつく」

「はい。……では、また後で」

「ああ」

うーん、思い返してみると、それほど夫婦の時間が取れてないし……

… ちょうど帰ったら日曜だし、しっかり家族サービスするか。

… まあ、その前に学園長へOHANASHIだが。

第31話：修学旅行3 & a m p ; 4日目・明けぬ夜はない（後書き）

というわけで、修学旅行編は終了です。次からは弟子入り編と悪魔編になります。

### 第32話：厄介事再び

「Side Eva」

修学旅行から帰ってきて、陸斗とアスナが尋ねてきた。

何の用事かと思ったが、どうやら魔法使いとしての相談らしい。で、詳しく話を聞いてみたんだが……。

「……………」

「……………」

「……………という意味だ？」

完全にフリーズした茶々丸とアスナ、私もその言葉をひねり出すのが精一杯だった。

いや、だって……なあ？

「で、どう思う？」

「……………いや、少し待て。思っていた以上に事が大きすぎる」

賢しき愚者は踊る、其の動きは混沌を招く

始まりを知る大樹が輝きを放つ時、新たな世界が開ける

遙か空の上、乱す者と開く者は互いの刃を交えん

約束の日は来たる、完全なる世界は満たされる

造られし世界に終わりが告げられる中、始まりの鐘は鳴り響く

原初の王の名の下に、彼の者の願いは成就されん

……陸斗が持ってきた紙に書かれていた内容だ。  
陸斗が言うに「そこそこ当たる程度の予言」らしいが……いや、重  
大すぎるだろうに。

「これ、カリムの予言でしょ？」

カリム？ 誰だ？

「“紅き翼”の身内で、元戦災孤児。今はMM元老院議員で、アリ  
アドネー在住の大使……だったかな」

ああ、そう言えば前にタカミチが言っていたな。

自分と同じ様に、ナギ達に拾われたガキがいたとかどうか。

「それでどう思う？ 違った観点から予言を見た意見が欲しくてな  
なるほど。」

私としては、まずこの「賢しき愚者」という部分だな。

現代風に言い換えるとなら「小利口なバカ」という事だ。これに  
当てはまるのは1人……。

「…………ネギ坊主か」

「私の知る限りではな。そーゆーのは、あのぼーやくらいだろう？」

「其の動きは混沌を招く」。つまり、ぼーやが何かバカをやらかし  
て、さらに問題が大きくなる……と。

…………いかん、自分で言ってる怖くなってきた。充分に実現し得る  
のが笑えない。

「漠然としすぎているから、何も言えん。後半なんて意味不明だ」  
「……………そうか」

その辺りは詠春やタカミチと話し合ってみてはどうだ？  
そもそも、私にも隠している事がある以上、そこは意味がない。

「マスター、お客様です」

ん？ 誰だ？

[Side Out]

[Side Leiya]

「……………信じられない」

現在、私は病院に来ている。

と言っても、身体の調子が悪いわけじゃない。むしろいい方です。

……そう、調子が良いすぎる。修学旅行に帰ってきてからも、おかしいくらいに身体の調子がいい。

知ってるとは思いますが、私は生まれついて身体が弱い。魔力を流しただけでも激痛が走り、王家の魔力もまともに扱えない。

そこがおいしいと思い、風峰先生に相談したところ、魔法関連の検査をしてもらえる病院を紹介してもらい、裏関係の事情も知っているしずな先生に同行してもらって検査に望んだのですが……。

「どう、だったんですか？」

眉をひそめて検査結果を覗き込んでいるしずな先生に、おそろおそろの問いかけてみる。

まさかとは思いますが、この状態は身体のどこかで悪影響が出ている、その症状なのでしょうか……？

「……単刀直入に言うわね。あなたの身体の状態、昔と比べて良くなってるの」

「……………は？」

何を言われたのか分からなかった。

呆然としている私に、検査結果を手渡される。…………た、確かに、

この数値は…………。

ぶっちゃけると、異常だったのが正常に戻った、そう言うのが正しいでしょう。

確かに嬉しい。身体の調子がいい理由も分かりました。しかし、何故？

「その、私の推測なんだけど……近衛さんとの仮契約、あれじゃないかしら？」

うーん……考えられる可能性としてはそうですけど、しかしどうして？

木乃香さんの魔力で私が助かったのは確か。その影響で身体の異常全てが治った？ なんとこの都合主義な……。

「その辺りはもう1度、風峰先生に聞いてみたら？ さすがに私では何とも言えないし」

「……わかりました。わざわざありがとうございます」

いえ、本当にしずな先生にはお世話になってます。

勉強関連については新田先生ですが、しずな先生には女性特有の悩みについても相談してます。

……その、新田先生や風峰先生には相談しにくい事も……色々と。

「風峰先生と仲良くなれるといいわね」

「か、からかわないでくださいっ！」

その、風峰先生とはそういうのじゃなくて……えっと、そう！ 兄のような人です！

第一あの人は既婚者です。そういう恋愛感情ではなく……家族に向ける親愛と言いますか……。

「じゃあ、そういう事しておきましようか」

だ、だから……それでいいです、はあ。

[Side Out]

[Side Asuna]

……いや、エヴァちゃんバカでしょ？

「う、うるさい！」

だって……あれだけ煽てられてノリに乗って許可するって、バカじゃない。

え？ ああ、何があったか？ ぶっちゃけるとネギが来たのよ、カモと一緒に。

私と陸斗は二階に避難して様子を見てただけど……なんと、エヴァちゃんに弟子入りたいって言いに来たの。

エヴァちゃんも一蹴して、さっさと帰らせようとしたんだけど………。

『自分の力不足を痛感し、最強無敵の魔法使いであるエヴァンジェリンさんに弟子入りをお願いしたいんです!』

……それからずっと、ネギのターンだった。

エヴァちゃんも煽てられて調子に乗って……気がついたら、「弟子入りテストしてやる」と言っていた。

で、ネギが帰った後でハツとなって頭抱えてる。

「それでどうするんだよ。まさか「やっぱりやめた」なんて言うんじゃないんだろうな」

うん、さすがにそれはダメでしょ。

いくら何でもメチャクチャ過ぎるし、1度決めた事を反故にするのはどうかと思う。

……まあ、弟子にしてあげたら？

「私には既にレイヤがいる。これ以上弟子はいらん」

「…………ふん」

ふん、レイヤちゃんの事、気に入ってるんだ。

確かに才能もあるし、真っ直ぐ前を見据えてる。何よりも強い子だものね……心が。

「じゃあどうするの?」

「……よし、前にアイツがタカミチ達に実践した『ケルベラス溪谷に叩き込む』ってのはどうだ?」

いや、それ「ゆちるの地獄メニュー」の最終章でしょ。

魔法が一切使えないケルベラス溪谷に落とされて……それをクリアしたあの3人はスゴイと思うけど、タカミチ涙目で猛抗議してたじ

やない。クルトは魂抜けかけてて、カリムなんて「生きてるってすばらしい」状態だったし。

……そもそも、魔法世界に行くのはダメだし、厳しすぎるじゃない。ナギじゃないんだから、まず死ぬわよ。

「厳しすぎず、なおかつ「クリア出来るかも」のラインのテストか」

「茶々丸さんと模擬戦させて、一撃入れたらクリアってのは？」

私的にもそれが1番いいと思うんだけど。

もちろん、魔法の使用は無し。格闘戦オンリー。……ネギ、最近格闘術の勉強に前向きだから、丁度いいんじゃないかな。

「ふむ、1つの案だな。いつそのこと、茶々丸ではなくレイヤにさせてみるか？」

「……いや、レイヤちゃん身体弱いんだし、ダメでしょ」

「そうでもないぞ。不調どころかむしろ好調だ」

ん？ それって、木乃香との仮契約が原因？

うーん……よくわかんないけど、後でもう1回レイヤちゃんに聞いてみよつと。

[Side Out]

「Side Kamol」

兄貴がにこにこして帰ってきて、俺っちの作戦がうまくいった事が分かった。

「カモ君の言った通りにしたら、うまくいったよ。ありがとう」  
「いいってことよ」

ズバリ！ エヴァンジェリンに兄貴の弟子入りをOKさせるための秘策さ！

俺っちが見たところ、エヴァンジェリンは煽てられるのに弱いタイプみたいだし、兄貴が目一杯褒めれば調子に乗ってOKするはず！  
そう思い「目一杯褒めてやれば、エヴァンジェリンもOKしてくれるかもだぜ」とアドバイスして送り出したんだが……。

「とりあえず、テストしてくれるって。それまでしっかり修行しなくちゃ」

む、テストかよ。……ま、兄貴なら大丈夫だよな。

それより、問題は仮契約だな。この前、緊急事態だったとはいえ、木乃香姉さんと仮契約したのは美味しかった。

……ま、仮契約したのはレイヤの方だけど。

（この分で仮契約を勧めて……次は刹那姉さんだな）

理由は、木乃香姉さんと同じ立場の方がいいとか言ってみれば、納得するはず。

むふふふ……これはマネーチャンスの予感がするぜ！　むふふふふふふ。

「…………カモ君、気持ち悪いよ」

[Side Out]

[Side Konoka]

レイヤちゃんが病院、陸斗さん達がエヴァちゃん家、そしてネギ君がカモ君とおるなんて知らずに、ウチは自室で勉強中やった。

「うーん……………」

今、ウチが目を通しとるのは、ふるゝい文献の写し。所謂、コピーやな。

京都から戻ってくる前に、実家でお父様やお母様が写してくれて、「これで勉強しなさい」と持たせてくれたもの。

……………正直、お父様達やせっちゃんにはまだ怒つとる。

何も言わずに、まほゝの事も全部ナイショにしとったんや。これは怒ってええはず。

ウチとしては、自分でしつかりまほゝの事を知ってから、その上でその道に進むかどうか考えたい。

お父様もお母様も、その事は分かってくれた。で、今勉強しとるトコなんやけど……………」

「……………やっぱりわからん」

昔の言葉やなくて、きちんと今の言葉で写してあるのはええんやけど、やっぱり言葉その物が昔の使い方やから、読めへん。

……………考えてみたら、まほゝの事も教えてくれる人が必要やな。

「ウチとしては、陸斗さんがええねんけど……………」

お父様の話では、陸斗さんは魔法使いじゃないとか。

やったら教えてられるかどうか分からへんし、そもそもその辺りの事情から断られるかもしれへん。

うーん……………身近な魔法使いゆーたら、おじいちゃんやネギ君やけど……………。

「……………なんか、嫌やな」

うん、何となく嫌や。

ネギ君も魔法使いやって知ってから、ネギ君が麻帆良に来てからの事を思い返して、ちよつと「あれ？」と思った。

まず、アスナの服をくしゃみで脱がしとった事。あれ「ぶそーかいじょ」ゆー魔法で、ネギ君は魔力の制御が出来てへんから、くしゃみでああなったらしい。

……ちなみに、お父様達に「こういう事あったんよ」と言う風に話したら、すつごく渋い顔で「ネギ君だけはやめておきなさい」と言われた。うん、ウチも正直そう思う。

「おじいちゃんは……何というか」

元々、おじいちゃんはウチに魔法の事は教えたがってたみたいなんや。

やから、魔法関係者のアスナと住ませて、さらにネギ君も同居させてたんやけど……お父様は魔法の事はバラしなくなかった。つまり、お父様の事を無視して、そういった事をしてた。……お見合いとかもそう。

……いや正直、ウチもおじいちゃんから魔法教わるゆーのも……なんとなく嫌かもしれへん。

「やっただら残るのは……」

……レイヤちゃん？ うん、レイヤちゃんなら問題ないかも。

常識もしっかりしとるし、ちよこつとだけ聞いたら「治癒と解呪が専門です」ゆーとったし。

もしなるんやったら、レイヤちゃんみたいな魔法使いになりたい。怪我しとる人治せる魔法使いに……。

「それに、これもあるし」

ウチが持つとるのは、レイヤちゃんとのパクテオカード。……コ  
ピーやけどな。

着物姿のウチが2つの扇子を持つとる絵。のどかも同じの持ってた  
けど、まさかあのラブラブキッス大作戦が、カモ君の仕掛けたパク  
テオカードを作ろうとした作戦やったとはな……。……。

……やっぱり乙女の純情を弄ぶのは許せへんな。今度せつちゃんや  
レイヤちゃん連れてOHANASHIに行こな？

「……そや、レイヤちゃんに頼んで、せつちゃんともパクテオ  
や」

あれから、前よりずっと打ち解けてくれるようにはなっただけど、呼  
び方も「お嬢様」やし、完全に打ち解けたとは思えん。

パクテオはその第一歩や。そこからずんずん進んでいって、昔み  
たいに「このちゃん」って呼んでくれるよう頑張るで！

とりあえず……。まずは、陸斗さんに相談やな。

〔Side Out〕

「Side ???」

「依頼ですか？」

『そういう事になる』

「ウチは構いまへんよ。何より、刹那センパイやあのおにーさんと会えるんやったら、嬉しいし」

そう言うたら、何故か悲痛な声になった。

『…………頼むから、その辺りは自重してくれ。いや、真面目に』

「ええ？」

どうしてですか？

刹那センパイと死合うのはもう興奮するの一言に尽きますし、おにーさんにしてももう濡れまくりですわ。

『とにかく、長期の仕事になる。先方にはしっかり伝えておくので真面目に取り組むように』

「はい」

ふふふ、楽しみだな。

刹那センパイ、待ってておくれやす。

### 第33話：なにこのカオス（前書き）

タイトルに関して、一切ツツコミは受け付けません。

さて、先のアンケートでは遅れを取った“彼女”がようやく登場です。

……なんでこんな事になったんでしょうね。私も分かりません。

### 第33話：なにこのカオス

「Side Leiya」

病院から帰ってきた次の日、エヴァンジェリンさん達から「ネギが弟子入りテストを受ける」という話を聞いた。

何でそんな話になったのかも聞いて…………ハッキリ言って呆れた。

「…………エヴァンジェリンさん、アホでしょ？」

「か、仮にも師匠に向かってなんだ！ その言葉遣いは！」

「いえ、煽てられて調子に乗って勢いで言っただから、アホしか言い様がありませんし」

風峰先生やアスナさんも私と同意見らしく「うんうん」と頷いている。

しかし、本当にどうするんですか？ ネギを弟子にするつもりなんて無いんでしょう？

「ああ。さらさら無い。…………と言うより、もうテストの内容は決まっている」

と、がしつと私の肩を掴んできた。

…………ちよつと、どういう事ですか？

「お前を倒せば弟子入りを認める、と言った。頼んだぞ、我が弟子」  
「はあ！？ 何でそんな事になったんですか！？」

「だいたい、当事者<sup>わたし</sup>には何の説明も無しってどういう事ですか！

…………あ、もしかして…………また？

茶々丸さんに視線を向けると、無言で頷かれた。……何やってるんですか、このすっかり吸血鬼。

呆れた目で見つめてみると、さすがに何かが突き刺さったのか、「うぐっ」と呻いている。

「で、本当に何があつたんです?」

「それが……………」

茶々丸さんによると…………本日早朝、カンフーの修行をしていたネギと遭遇し、「そっちの修行をするんだったら、私の弟子入りは無しだな」と断ろうとした。

しかし、たまたまその場に居合わせたまき絵さんに「チビなエヴァちゃんなんか教えてくれなくなつて、ネギ君ならすぐに達人だよーだ」と半ばキレ気味に反論され、勢いで茶々丸さんと軽くバトラせて撃破。おまけのその後の言葉が…………。

『茶々丸に勝てるようであれば、弟子入りも考えてやつたんだがな。テストでは我が弟子と戦わせてやろう。光栄に思ふんだな、ふはははは…………』

…………いや、アホでしょう?

「それでおい、アホ吸血鬼。本当にどうするんだ?」

「アホアホ言ふな! と、とにかく師匠命令だ。どうにかしろ」

む、無茶苦茶言わないでくださいよ!

話を要約すると、ネギが私を倒せば弟子入りを許可する、と。格闘戦だけだと…………私、正直危ないですよ? 魔法を使えば勝てるでしょうけど、一般人の前でもです…………。

カンフーって事は師匠は古菲さんでしょうし、にわか仕込みの体術

でどこまで通用するか……うーん、身体の調子は絶好調ですから、魔力供給は問題無いですけど……。

……あ、そうだ、こうしよう。

「先生。先生の知り合いに中国拳法の使い手っていませんか？」

「ん？ ……ああ、いるぞ」

「その人、呼んでもらっても構いませんか？」

今の私がすべき事は、ネギ戦の対策として拳法を学ぶ事。

いい機会なので、それをベースにして体術を構築するのも悪くないかもですね。

「うーん……まあ、アイツ暇人だし問題無いだろ。門番だけど昼寝ばかりしてるって言うし」

いや、それ門番として失格じゃないですか。よくクビになりませんか、その人。

……正直、その人に教わるのが心配になって来たんですが……。そう思っていると、ふっと微笑んだ先生が口を開いた。

「安心しろ。確かに素行ではやや不安なところはあるが、人格的には問題無いし、実力も折り紙付だ」

「……なら安心します。それでエヴァンジェリンさん、テストの日時は？」

「3日後だ」

3日後……ギリギリですね。

別荘を使えば圧倒的に優位にはなりますが、それはフェアじゃない。あくまで対等な立場でやりたい。

「よし！ じゃ、今からすぐ呼んでやるよ」

「お願いします」

さて、頑張りますか！

「……しかし、あれを突いて来ないとは……ぼーやもまだまだだな」

「いや、あんなの誰も気づかんذار？ ある意味、反則なんだし。

お前だって気づいたのついさっきじゃないか」

？ 何の話ですか？

なんとなくなんですけど……すごく不穏な空気が流れている気がします。

「いや、エヴァがネギ坊主に提示したテストの内容にはな、抜け道があるんだよ。それに気づいていないようじゃ、ダメだろうなって話」

「え？」

[Side Out]

「Side Setsuna」

ネギ先生がエヴァンジェリンさんの弟子入りテストを受けるらしい。本人からそれを聞き、思わずお嬢様と顔を見合わせた。

（……せつちゃん、どう思う？）

（話の流れとしては、エヴァンジェリンさんがその場の勢いでOKしてしまっただと思いますが……）

（やよなあ）

現在、ネギ先生は3日後の弟子入りテストに向けて、古の指導を受けている。

……確かに、ネギ先生の上達度は凄い。中国拳法には素人目な私から見ても、それは分かる。

しかし……気になるのはテストの内容だ。

「呪文詠唱無し、格闘戦オンリーで“エヴァちゃんの弟子”を倒せばクリア。……これ、無理とちゃうん？」

「おそらく無理でしょう」

元々、エヴァンジェリンさんも弟子を取るつもりは無かったらしいが、勢いでつい言ってしまったようだ。

さすがに難易度の高すぎるテストだけは出来ない。だからこうなったんだろうが……。

まず、ネギ先生が使えるのは我流の魔力供給（アスナさん曰く、「デタラメな術式」）に、後はにわか仕込みの中国拳法。

それに対し、エヴァンジェリンさんの弟子と言うと、ネギ先生は知らないだろうが、おそらくレイヤさん。エヴァンジェリンさんの指導を受けているのだから、相当なレベルなのは間違いない。現に京都での戦いでは、彼女の活躍があつてこそだった。

練度では比べものにならない。勝てるとしたら、相手の隙を突く戦法でのみだが……。

「古もカウンターを用いた戦法を重点的に教えているようですが、勝率としては2割にも満たないでしょう」

……お嬢様と仮契約した事で、一命を取り留めると同時に不調だった身体が絶好調になつたらしい。

その辺りは風峰先生……陸斗さんも驚いていて「木乃香の魔力が身体中を流れた影響か……よくわからん」と言っていた。

以前までの病弱なレイヤさんだったら、おそらく半々だっただろうが、今のレイヤさんと条件は違ってくる。

「……まあ、話を聞く限り、抜け道を気づいとらんネギ君に勝ち目は無い思つけど」

「と言いますと？」

「簡単や。エヴァちゃんは『茶々丸に勝てるような事があれば、弟子入りも考えてやつたんだがな』言うてる。つまり、テストまでに茶々丸さん倒せれば、弟子入り出来るかもしれへんのや」

………あ、つまり、奇襲なり何でもして倒せばいい、と？

気づかれないようになら、魔法でも何でも使えるし………確かに問題は無い。

「そ。もちろん意図的やのうて、エヴァちゃんも勢いで言うてしまっただけやし、ほんまにやって通用するかはわからへんよ？ けど、

可能性の1つとして存在はしとる」

「言われてみれば……………」

屁理屈ではあるけれど、言葉の隙を突いたといえれば確かに通じる。陸斗さん辺りなら、戦闘者として評価しそうだし。

「ま、ネギ君は茶々丸さんに負けとるし…………ほら、吸血鬼事件の時も色々あつて、茶々丸さんと戦いたくない思つとるんかもしれへんよ？」

「……………確かに」

これはアスナさんから聞いた話なのだが、ネギ先生がカモさんに唆され、茶々丸さんの単独行動中に襲撃をかけようとした事があったらしい。

アスナさんから話を聞いた陸斗さんが、タイミングよく呼び出しをかけ、行動を未然に防いだのだとか。

……なお、その後でエヴァンジェリンさんに相当脅されたらしいので、どのみち奇襲自体も出来ないかもしれないが。

「そつといえば、せつちゃんは陸斗さんに稽古つけてもらえるんやつて？」

「え、ええ」

実は……………そうだ。

とはいえ、本格的な指導ではない。あくまで、腕が錆び付かない程度に実践形式でらしい。

『神鳴流の領域に俺が手を出すわけにはいかないだろ。下手に教えて剣術が鈍ったらマズイし。…………ま、そっちは専門家に頼んでおくさ』

そんな事を言っていた。

……専門家、というのが誰なのか気になるが……。

「……実は、ウチも魔法の事、陸斗さんに相談したんや」

「そう、なんですか？」

「うん」

まあ、陸斗さんは普段から生徒の相談を受けていると聞くし、お嬢様が相談する相手としたらうってつけかもしれない。

「というより、レイヤちゃんに魔法教わるのはどうかって」

「あ………」

レイヤさんは戦闘力も高いが、専門は治癒・解呪などの補助的な魔法の方だという。

お嬢様の資質もまた、治癒に傾倒した能力らしく、そういった方面で考えるならうってつけの人材だろう。

それで、どうだったのですか？

「『レイヤも修行中の身だから、教わるのはあまり賛成できない』  
やって」

「……なるほど」  
「けど『教わるんじゃない、一緒に勉強するのはどうだ？』って言われた」

嬉しそうにお嬢様がそう仰る。

確かに、一緒に勉強するのであれば、レイヤさんも気苦労をかける事は無い。色々とストレスが溜まっているようだし……主にネギ先生の事で。

最初の頃は酷かった。……アスナさんやエヴァンジェリンさんに土下座しに行ったとか。

「うちもレイヤちゃんを、先生って言うより、勉強する友達の方がええからな」。後で話に行こうんや」

……本当に、お嬢様は強くなられた。

アスナさんはもちろん、陸斗さんにも感謝しなければ……。

〔Side Out〕

〔Side Rikutō〕

紫に何故か連絡がつかなかったため、天子経由でアイツを呼びだし、レイヤに紹介して修行を始めて……俺はお邪魔だろうから、もう1つの仕事をやろうと思って女子寮に来たのだが……。

そこで待っていたのは、困った顔の衣玖だった。

「いなくなっただ？」

「ええ……ちよつと買い物に行ってきたのですが、その間に……」

おいおい、あの飲兵衛どこに行ったんだよ。

寮内ならともかく、外に出られるとマズイ。タカミチ辺りならまだいいが、他の魔法先生に見つかる騒ぎになる。

伊吹萃香は鬼だ。見かけこそ幼女だが、頭にはしっかり鬼の印である2本の角が生えている。

何も知らない人間からは「コスプレ」程度にしか見られないだろうが、分かる人間が見れば見抜かれる。

厄介事になる前に、幻想郷へ送り返したかったんだが……。

「まさか、酒の臭いに釣られて？」

「……完全に否定出来ないのが怖いな」

しかし、これはマズイ。早めに見つけないと……。

「あ、風峰先生。衣玖さん」

ん？ ああ、佐々木か。

なんだ、その重箱。ネギ坊主にか？ しかし、そんなに食べられないと思うんだが……。

だがちよつとよかった。2本角の生えた幼女、見なかったか？

「あ、その子ならさつき知らないオジサンに連れていかれました」

知らないオジサンって……おいおいおい、さすがに犯罪はマズイぞ。

衣玖もちよつと青い顔をしている。まあ、萃香に手を出そうとしたら逆に握りつぶされると思うが。

「そういえば……そのオジサンが、その事について聞いてきた人にこれを渡してくれって」

「……………手紙？」

封筒には……特に記銘は無い。

佐々木、そのオジサンどんな人だった？

「えっと、眼鏡でお酒臭いオジサンでした」

「……………」

俺達は思わず、顔を見合わせた。

……………ああ、間違いない。あの人だ。考えられるのはあの人しかない。

何も言わずに封筒を開き、手紙を取りだして中を見る。うん、あの人の字だねえ。

「……………おい」

読み進める度に、顔色がどんどん悪くなっているのが、自分でも分かる。

ちよつと待て。何でこうさらに厄介な状況になってるわけ？

「どうしたんですか？ いったい……………」

「……………読んでみる」

そう、衣玖に手紙を手渡す。

数秒後、俺と同じ様な顔色になった衣玖は、今にも倒れそうだった。

だつて……無理ないだろう？

「あ、あの……どうしたんですか？」

「気にしなくていい。ちよつと厄介な仕事が入っただけだから」

ネギ坊主の弟子入りテストが3日後。……出来ればそれまでに済ませたい。

アイツは間違いなく麻帆良の方へ飛んでくる。色んな意味で目立つからなあ、この街。

〔Side Out〕

〔Side ???〕

あややや……ここはどこでしょう？

ん、確かいつも通りに取材中だった時、いきなり景色が反転した

と思ったら、見覚えのない場所に出てたんですよ。  
気がついたら枝に引っかかってましたからねえ。……でも、ほんとにどこなんでしょう？

「……あやや？ 何だか見覚えのあるような……」

……そうそう！ ここ京都じゃないですか！ 懐かしいですねえ……  
……もう100年以上経つんでしたっけ？  
と言うことは、ここは外の世界？ いや、どうしてまた……スキマ妖怪の仕業でしょうか？  
それよりも、どうやって帰りましょう？ うーん……。

「あ、それならあの人に頼みましょうか」

陸斗さんなら外の世界にいるはずですし、頼めば送り返してくれるはず。

えっと、確かマホラ……でしたっけ？ 大きな霊木のある街だって言っ  
てましたし、それっぽい霊力を探せば何とかなるでしょう。

あ、せっかくですし……外の世界の情報を集めて、それから帰るつ  
てもアリですね！ その辺りは要相談ですけど。

「さって、行きましようかね」

### 第34話：風神少女とお姫様

「Side ???」

ふむ……ここがマホラですね。

街の中央のあの大樹が、『世界樹』……でしたっけ？ 確かに凄い  
霊力を持ってるみたいですね。

「さて、と」

むっ、生意気にも結界が張ってあるじゃないですか。

うーん、専門外ではありますが、おそらく感知機能は付いてるでしょうね。

もちろん私ぐらいの妖怪になると、気づかれないように入り込む事  
など容易いものですけど。

すいすい、っと。

「……………さて、どうしましょう」

1番ネタになりそうな事といえば、やっぱりアレでしょう。

以前、陸斗さんが帰ってきた時に愚痴っていた「ネギボウズ」なる  
人物。

どんな人物なのか調べ上げ、「文々。新聞」増刊号として売り出せ  
ば、きっと反響間違いなし！

ささ、取材開始と行きましょう。まずは……あそこの3人組にしま  
すか。

「すみません。「文々。新聞」の清く正しい射命丸ですが……………」

〔Side Out〕

〔Side Rikutō〕

俺は現在、瀬流彦及び数名の魔法先生と共に学園長室を訪れている。  
……正直に言おう。今回ばかりは妥協するつもりは無い。なお、これは他の連中にしてもそうだ。

瀬流彦はまだ苦笑しているが、ガンドルフィー二辺りはもう相当だ。あれだけ旅行前に徒党を組んで抗議した拳げ句、旅行は京都。……にも関わらず、大した措置を執っていないかったために今回の事件。

「さて、申し開きはあるか？ 茄子頭」

「ふおっ！？ ど、どうして茄子なんじゃ！？」

「お前をぬらりひょんと形容するのは、ぬらりひょんに失礼だという結論につき最近至った」

その言葉に思わず噴き出す、周囲の魔法先生達。  
いや、それを指摘されて、俺も「そうかも」と真面目に思ったからな。

「まあ、それはどうでもいい。……俺達は何を言いたいか、分かるな？」

……目の前の学園長は冷や汗だらだらだ。  
しかし、追求の手を緩めるつもりはさらさら無い。

「今回の件、下手をすれば、西の総本山が壊滅していた恐れもあった！　これがどういう意味かわかるな？」

「う、うむ……」

「それにも関わらず！　救援は新任教師1人、おまけに『道に迷った』とかふざけた理由で戦いには参加しない！　俺達をバカにするのか！？」

あれには呆れた。キレる前に呆れたぞ、おい。

なお、全部終わった後で空気を読まずに「いや、すみません。遅くなりました」と来た時には、俺だけではなく周囲の全員（ネギ坊主除く）の視線が氷点下のそれに変わった。……フルボッコにしたのは言うまでもない。

「い、いや……わしもそれは想定外で……とにかく、すまん！」

うん、それはまあ信じてやってもいい。

どちらにせよ、ここで学園長に対する刑罰のようなものは課せられない。

既に終わった事であるし、こちら側に非があるわけでもない。それでも、締めるところは締めておかなければ。

「西の長<sup>えいしゅん</sup>としても、既に済んだ事を蒸し返すつもりは無いらしいが、それでも今後は気を引き締めて欲しいと言っている」

「……………うむ、以後気をつけよう」

今回の事件、西だけの問題では無かった。

実行犯の天ヶ崎千草は西洋魔術師の“被害者”であり、彼女は18年前にサウザンドマスターによって封印されたりヨウメンスクナノカミを復活させ、日本の西洋魔術師の放逐……………つまり、麻帆良への侵攻も視野に入れていたと考えられる。

もし、もしもだ。関東の縄張りにスクナが侵入していたら……………東西の仲違いは決定的なものへと発展していただろう。

その後、他の魔法先生が退出し、俺と学園長だけが残される。さて、ここからもう1つ真面目なお話だ。

「ネギ坊主を『英雄ナギ・スプリングフィールドの息子』として見るのはやめろ」

「……………どういう意味かの？」

「言わなくてもわかるはずだ。……………今回の件、レイヤは死にかけた」

もし、あそこで木乃香と仮契約しなければ、レイヤは間違いなく死んでいた。

学園長の見通しの甘さが大元の原因である事は言うまでもない。もし、旅行先が違っていたり、魔法先生が他にいたならば、ああはならなかった。

……………さすがに学園長も自覚しているのか、唸っている。

「メルディアナの方をしてみる。ネギ坊主を特別視して教育した結果、あそこまで歪んで育った。ああなったら俺でも矯正は難しいぞ」

「……………やっぱり、マズイかのう？」

「ああ、マズイ」

……まあ、学園長の気持ちも分からんわけではない。

麻帆良はMMの直轄機関。麻帆良学園のトップとはいえ、学園長も所詮は中間管理職。……辛いよなあ、そりゃ。

俺達にはほとんど情報が入ってこないとはいえ、相当な横やりが入ってきていてもおかしくはない。

MMからのネギ坊主達に対する干渉を抑えるのも、そりゃあ大変だろうねえ。

「今、ネギ坊主に必要なのは甘やかす事じゃない。魔法使いとして何より1人の人間として捉えて導く事だ」

「確かに……そうじゃな」

ようやく重い腰を上げたようだ。これで、ひとまずは安心だ。

今、俺がこの事について追求したのにも理由がある。それは……ネギ坊主の今後について。

ネギ坊主の弟子入りテストだが、これはほぼ間違いなくレイヤが勝つ。いや、格闘術の師匠の実力がこっちの方が上だし、その上レイヤは「ネギが使ってくるであろう技」の対策を重点的に鍛えている。全てを満遍なく鍛えて、器用貧乏を目指すよりはずっといい。

「で、ここからが本題。ネギ坊主の魔法指南役として何人が用意して欲しい」

「なるほど。……ネギ君の師匠となる魔法先生じゃな」

俺の方で用意する義理はないし、何よりめんどい。

だったら魔法先生から選んだ方がいい。幸い、「先生」なのだから教え方は上手いはず。

「そうじゃのう。ネギ君は風系じゃし、同じ風系の神多羅木君が適任かの」

「後はガンドルフィーニと瀬流彦辺りがいいだろ。幸い、人格面でも問題無いし」

古矢辺りだったらマズイが、今拳がった3人なら大丈夫だ。

ガンドルフィーニはやや頭が固いとはいえ、独自の価値観を人に押しつけるような真似はしないだろう。

さて、俺がネギ坊主にしてやる事は……後はOHANASHIだけだな。

[Side Out]

[Side In]

……いませんね。

先ほどからずっと街の中を歩きつつ、彼女を捜しているのですが……。  
いえ、麻帆良内に気配は感じますから、絶対にいるはずですよ。

（見つけたら有無を言わず強制送還です）

……あの天狗はこっちに置いておいたらトラブルしか巻き起こしませんし。

それ以上に、人の旦那に対して少し馴れ馴れしすぎる気がするんですよ。

ええ、年上だという事は分かってますよ？ 私と出会う前から陸斗と親しかったのも知ってますよ？ だからといって、許容するほど私は寛容ではありません。

新婚当初、やけにベタベタしていたのに嫉妬して、ちゅーんとやってしまったのはいい思い出です。

「……………あら？」

あそこにいるのは……………確か、3-Aの生徒さんでしたね。

「麻帆良のラッキー大明神」こと椎名桜子さん。ややハスキーボイスな釘宮円さん。そして柿崎美沙さん。

なお、柿崎さんには化粧品や最近の流行の事について教えてもらっているのです、他の生徒よりも親交度数は高いです。……………時々、「10歳の少年の性への興味はどれくらいでしょう」のような、怪しげな質問をされるのは困りものですが。

「あ、衣玖さんだ」

「こんにちは」

あら？ その新聞は……………すぐく見覚えのある気がするのですが。

「あ、これですか？ さっき、記者の人の質問に答えたらもらったんです」

「すごく面白いですよ、これ」

私は無言で、その「文々。新聞・特別号」と題された新聞……というよりも号外を受け取り、中身を眺める。

内容は、紅魔館の大図書室が再び、黒白の被害に遭ったという事について。

……まあ、ただでさえ認識障害の影響で「非日常を日常」として捉えるようになってますし、その上「文々。新聞」は一種の娯楽みたいなものですから、それほど問題は無いでしょう。

まさか、堂々と取材していたとは思いませんでしたけどね……ふふふ。

「い、衣玖さん？ どうしたんですか、目が笑ってないんですけど……」

「ああ、すみません。念のためにお聞きしますが、その記者の方の名前は？」

もしかしたら、あっちじゃないかもしれない。

白狼天狗だったら見逃します。万が一、という事も無くは無いですがからね。

「えっと、確か『清く正しい射命丸』って名乗ってました。黒い髪で、私たちとそう変わらない年頃の」

ぶちっ！

……あらあら、どうしましたか？ どうしてそこまで怖がってるんですか？

「あ、い、いやだって……」

「その……射命丸さん、とどのような関係で？」

おそろおそろと言ったように、釘宮さんが尋ねてくる。

「人の旦那を狙っている肉食系の鴉と、それを防ぐ妻の関係です」

〔Side Out〕

〔Side Asuna〕

私には実戦経験がほとんどない。……まあ、危ない目には何度も遭ってきたけど、実際に戦ったりはした事がない。  
ぶっちゃけちゃうと、修学旅行の一件は私にとってもいい教訓になった。

……やっぱり、いくら力を持っていたても、それをうまく使えるかどうかはまた別の問題なのよ。

「ほっ……ほっ」

ぱしぱし、と木刀で撃ち込みを続ける。

改めて陸斗に相談してみたら、実戦を想定した稽古を付けてもらえるようになった。……レイヤちゃんと一緒に。

でもさ、レイヤちゃんと一緒につて、ようするにエヴァちゃんが指導する事になるんじゃないの？ 嫌な予感しかないんだけど……。

「あ、ちよつとすみませうん！」

「え？」

こっちに近づいてくるのは、カメラを片手に持った女の子。年頃は

……私とそう変わらない。

……はて、この子どこかで見た事のある気が……。

「どうも、「文々。新聞」の清く正しい射命丸です。ちよつとお伺いしたい事がありました……」

「は、はあ」

「その前に、ネギ・スプリングフィールド少年についてご存じですか？」

……… ああ、ここで「知らない」と言えたらどれだけ楽か………

……！

私の異様な気配を感じ取ったのか、その記者の子は少し怯えながらもさらに突っ込んで聞いてくる。

「えつと、お知り合いですか？」

「……一応、うちのクラスの教育実習生よ。で、ちよつと前まで私の部屋に同居してたわけ」

「ふむふむ！ それで彼の身の回りで何かトラブルがあったと聞いていますが……どのような事があったかご存じですか？」

……トラブル、ねえ。

まあ、今思い返してみたら、トラブルばっかよね。あれで騒ぎになつてない方がおかしいんだけど。

とりあえず、魔法には触れない程度に全部ぶっちゃけた。……いや、ストレスとか色々溜まつたのよ。ホントに。

半分愚痴に近かったわね。……全部聞き終えて、その子もすつごく渋い顔をしていた。

「……あの、それマジですか？」

「残念だけどマジよ」

中身がナギみたいに「考え無しのバカ」なら、まだ良かったのよ。ナギのあれは好ましいものだし。

……ほんと、どんな化学変化起こしたんだか。

「ご協力ありがとうございました。では、私はこの辺で……」

「どこへ行くつもりですか？」

その声が聞こえた瞬間、びくつと震えた。いや、記者の子だけじゃなく、私も。

声の主は分かっている。間違いなく衣玖さんだ。でも、半端じゃなく声が冷たい。

「……み、見つかったしまいましたね」

「ええ、見つけましたよ。真っ直ぐこっちへ来ていたのはありがた

「かったですか」

あれ、知り合い？

そういえば、どこかで見た事がある気がしてたのよね。……誰だっけ？

『あやややや、その子はどなたですか？』

……………あ。

「ああああああああああああ！！ 思い出した！ あの時のパパラッチ天狗！」

そう、10年前に幻想郷へ一時的避難した際、陸斗に付きまといいた天狗。

陸斗曰く「パパラッチ天狗」らしく、私も色々取材された。……無視してたけど。

「あやや？ …………… あ、誰かと思えば、あなたは10年前に陸斗さんが連れてきた子ではありませんか。お久しぶりですね」

「あ、ども。……………じゃなくて、何でここに」

言いかけて、思い出した。

つい先日、同じ様に幻想郷の住民が喚び出された事を。……もしかして、あれ？

いや、あれから考えてみたけど、そもそもどうして幻想郷の住民が喚び出されたんだろ。結界とかあるし、普通喚び出せないんじゃない？ ……。

「それですが、向こうとの連絡が取れないようなのです」  
「へ？」

衣玖さんが言うに、紫さんとの連絡が取れないのだとか。

いや、別に幻想郷全てというわけじゃない。普通に門番さんとは連絡が取れたみたいだし、陸斗がちょっと無理して向こうとの“扉”繋いでたから。

でも紫さんとの連絡が取れないって事は、紫さんに何かトラブルがあつて、それで結界にも何かしらの影響が出てるって事？

「可能性としてはあり得ます。……普段から結界の管理を、巫女と式に任せつきりですから」

あゝ……そういうばそう言う人だったつけ。

この分だと、この人送り返せないんじゃないの？

……というのも、正規の手続きを踏んでこつちへ来た人なら、簡単に帰る事が出来る。あの門番さんは、正規の手続きでこつちに来てるから問題無い。

でも、この前の小鬼や目の前の天狗の場合、そうも行かない。

博麗大結界に拒絶される恐れがあるため、紫さんか神主さんでないと、安全に送り届ける事が出来ない。

……あ、神主つてのは、博麗神社の神主さんの事。

とはいえ、普段はこつちの世界に住んでるから、幻想郷でその姿を見ることはほとんど無い。

普通の人間だつて聞いているけど……鬼とタイマンで飲み比べ出来るような人が、普通の人間だとは思えない。

「……ちよつと待つてください。じゃあこの人、しばらくこつちに

いるんですか？」

「……残念ながらそうなります」

う、うーん……朝倉と変な化学反応起こさなきゃいいけど……。

[Side Out]

[Side Eva]

「……………」  
「……………」

レイヤと、陸斗が連れてきた奇妙な女が対峙している。

両者互いに全く動かずにあっだが、一陣の風が吹くと同時に、2人同時に動いた。

「ハアッ!!」  
「ッ!!」

一瞬、2つの影が限りなく近くなり……レイヤの方が膝を突いた。  
……が、一瞬あの女の方もぐらつく。不完全ではあるものの、レイヤの攻撃も入ったらしい。

「……見えてきました、ようやく」

しかし、あの女……何者だ？  
格闘戦に関しては明らかに私以上。間違いなく最強クラスの実力だ。  
陸斗の古い知り合いとの事だが……。

「ふう、思っていた以上に呑み込みが早いですね。これなら教え甲斐もありますよ」

「ありがとうございます、<sup>メイリン</sup>美鈴さん」

紅美鈴と名乗ったそいつだが、幻想郷の住民の1人らしい。  
普段は紅魔館とかいう吸血鬼の居城の門番をしているらしいのだが  
……幻想郷にも吸血鬼はいるのか。

「それにしても、わざわざお仕事休んでまで来てもらって、すみません」

「いえいえ、溜まっていた有給を消化しただけですし、それにあの人の頼みならどこへだって飛んできますよ」

そう言い、仄かに顔を赤らめる。

……アイツ、どれだけ周囲の女にフラグ立ててるんだ？  
下手したらハーレムEDとかなってたんじゃないか？

### 第35話：拭えぬ過去（前書き）

と言うわけで、弟子入りテスト編なわけですが……。うーん、今回はちよつと薬味アンチ風味が強いかもしれませんがやりすぎた感もしますし……。お気をつけください。

### 第35話：拭えぬ過去

「Side Negi」

ついに弟子入りテストの日がやってきた。

僕は古老師に弟子入りし、中学拳法を教わり、この日を迎えた。

『相手がどんな人物か分からぬ以上、最初の一撃で確実に仕留めるアル！』

『ネギ君ならきつと大丈夫だよ、頑張つて！』

古老師もまき絵さんもそう言ってくれた。

テストで僕の相手をするのは、エヴァンジェリンさんの弟子だという。いったい誰なんだろう……？　もしかして、あの停電の日に出てきた女の人かな？

分からないけど、とにかく頑張るぞ！

「ネギ・スプリングフィールド、弟子入りテストを受けに来ました！」

エヴァンジェリンさんに茶々丸さん、それに……人形のチャチャゼ口さんが椅子に乗っている。

あれ、エヴァンジェリンさんの弟子って人はどこにいるんだろう？

「よく来たな、ぼーや。……それより、そのギャラリーは何とかならんかったのか？」

そう、僕の後ろの人達を指さす。

アスナさんや刹那さん達はともかく、まき絵さんやゆーなさん、ア

キラさんに亜子さんまでついて来ちゃった……。  
でも、魔法を使うわけじゃないし、多分大丈夫のはず。

「あの、エヴァンジェリンさんのお弟子さんは……？」

「……ふん、それならもう来るぞ」

こつ、こつ、こつ……。

誰かが世界樹広場から降りてくる。2人いるみたいだけど……え、えええ！？

「……………どうも」

「れ、レイヤ！？」

降りてきたのはレイヤと、見た事のない赤毛の女の人。

チャイナドレスっぽい服に身を包み、『龍』って字の入った帽子を被っている。

ま、まさかレイヤが……………？

「紹介しよう。私の弟子、レイヤ・スプリングフィールドだ」

そんな、いったいいつから……………そもそもどうして……………。

「…………やる事がありますから。エヴァンジェリンさんに取引を持ちかけて、その縁で色々」と

「呆けてる暇はないぞ、ばーや。…………試合時間は設定しない。どちらかが「参った」と言つか、もしくは気絶するまで続ける。いいな？」

つまり、僕が諦めずにレイヤに食いつき続ければ…………勝機はある。  
レイヤは身体が弱い。格闘術はそこそこ出来るみたいだけど、古老

師から教わった中国拳法を生かして戦えば、絶対に勝てる。  
ここで勝って、エヴァンジェリンさんに弟子入りして、もっと強くなるんだ！

「では、始めるがいい！」

レイヤ……僕が勝つからね！

「『契約執行！ ネギ・スプリングフィールド90秒間！』」

[Side Out]

[Side Rikuto]

………始まったか。

2人の戦いを見下ろす形で、俺達は世界樹の上にいる。

ネギ坊主の手には初心者用の杖が握られている。……あれを魔力発動体になっているのか。

「急に動きが良くなりましたね。あれは？」

「魔力供給呪文。身体中に魔力を通して、身体能力を高める働きがある。……しかし」

無茶苦茶な魔法だな。構築が荒いし、式もデタラメ……我流で組んだのか。

魔力供給は基本戦闘魔法の1つだし、普通ならそっちを優先して覚ええると思うんだがな。

確かに動きは鋭い。古菲の修行もそこそこに効果が出ているらしい。

「ですが、あれでは勝てませんね」

衣玖の指摘通り、ネギ坊主はレイヤには勝てない。

ほぼ互角の戦い……に見えるが、実際は違う。レイヤがネギ坊主を誘い込むようにして攻撃をしているだけ。

ネギ坊主が狙っているのは、レイヤの攻撃の隙を突くカウンター。中国拳法において、受け身の形から攻撃へと転じるカウンターこそが極意である。

「古菲は……一般人では、間違いなく最強の部類に入る」

“気”を使えないとはいえ、純粋に修行して得た格闘術の技量は感嘆に値する。

もしも、あれで気を行使できるようになったら……達人級の使い手が生まれる事になるだろう。

……ま、俺には関係ない事だがな。

「…………ネギ少年が仕掛けるようです」

[Side Out]

[Side Leiya]

確かに速い。しかし、数日程度の修行では粗さは消えない。

その気になれば、一撃で沈められるでしょうけど…………敢えて、数日の修行でどのくらい成長したのかを確かめてみたい。

それで、わざと「やや強めに」蹴り飛ばし、ネギの体制を崩させた。

「ハアアッ!!」

真正面から撃ち込み…………横からの支えるような形で攻撃をそらされる。

これは確か、八極拳の技の…………美鈴さんが「狙ってくる可能性大」

だと言っていた技の1つ。

契約執行が付いているため、並の人間なら避けられずにキツイ肘打ちを受けていたでしょう。……ですが、既に研究済みです。

「……『戦いの旋律』」

ここで魔力供給呪文を発動させ、身体能力を高める。

ぐつと大地を蹴り、ネギの攻撃を躲し……そのまま背中目がけてムーンサルトよろしく蹴りを叩き込んだ。

「がつ！？」

蹴られたネギは地面を何度も跳ねて、壁に叩き付けられて止まる。

………今のは結構効いたと思うんですけど。出来れば立ち上がって来ない方が楽でいいんですが。

「……ぼーや、それが貴様の器だ。顔を洗って出直して来い」

つまらん、と吐き捨てそんな顔で言い放つエヴァンジェリンさん。倒れ込んだネギに、古菲さん達が駆け寄ろうとするが……。

「い、いえ……まだです。まだやれます！」

口元の血を拭い、よろめきつつも立ち上がるネギ。

……まあ、ここで終わっても呆気なさすぎですし。私としてももう少し暴れたかったところですから。

立ち上がると、そのまま真っ直ぐ向かってくる。……その心意気だけは認めてあげましょう。ですが……。

「優雅さが足りない」

「げふっ……!!」

契約執行は既に切れており、スピードはもちろん、攻撃・防御力もガタ落ち。

この時点でもう、ネギには勝機は無い。

そう、ネギが私に勝つためには、最初の一撃で問答無用に私を沈めなければならなかった。あれを逃した時点で、敗北は決定している。

「ま、まだ……まだ……」

「しつこい」

……本当にイライラする。

そもそも、何のためにネギは私に勝とうとする？ 父様を捜す力を得るため？ 立派な魔法使いになるため？ それならお門違いだ。ネギの存在その物がこの数年間、ずっと私を苛つかせている。……正直、目障りだ。

「レイヤ……その動き、まさか！」

ほう……さすがは古菲さん、気づきましたか。

アスナさん達は既に気づいているようですが、さすがに一般人のまき絵さん達は気づいていない様子。なら、教えてあげましょう。

「いい機会なので紹介します。……ここ数日、私に中国拳法の手ほどきをしてくださった、ホン・メイリン紅美鈴さんです」

そう言い、茶々丸さんの隣にいた美鈴さんを紹介する。

美鈴さんはふつと微笑むと、ぺこりと一礼した。……なお、紹介した瞬間に古菲さんの目の色が変わったのは言うまでもありません。

「ちゅ、ちゅーごくけんぽう……じゃあ、まさかレイヤちゃんも……」

そうですね、まき絵さん。

相手が使ってくる格闘技を事前に「予習」するのは当然じゃないですか。

……まあ、美鈴さんの教え方も上手かったですし、やってみて面白かったんで、これからもやって行きましようか。太極拳は普通に運動にも取り入られていると聞きますので。

「……どうして」

「はい？」

何か言いましたか、ネギ。

「どうして、どうしていつも……レイヤばかり……」

……。

「どうしていつも！ レイヤはそうやって僕を見下して……いつもそうだ！ 6年前のあの時だって」

「黙れ」

どうやら私は、既にキレていたらしい。

考えるよりも先に手が出ていた。それも、手加減無しの一撃が。殴り飛ばされたネギは、さっきよりも強く地面へと叩き付けられ、その衝撃で階段にヒビが入った。

「過去を見ようとしなないお前が、6年前の事を語るな」

「っ！？」 僕は……」

「黙れと言っている!!」

胸ぐらを掴み挙げ、思い切り地面に叩き付ける。

……今ので肋骨の1本や2本折れたかもしれないが、そんな事知った事じゃない。

こいつの口から、村の事が語れるのが許せない。ただ、それだけだ。

「レイヤ、そのくらいに……」

エヴァンジェリンさんが何か言っているようだけど、関係ない。

こいつはここで潰す。二度と立ち上がれないように、完膚無きまでに叩き潰す。

立ち上がるうとしていたけど、強化された状態の足をネギの右腕向けて振り下ろした。

べきっ……………

何かが折れる、嫌な音が響いた。

「あっ、あああああああああああああああ!!!!!!」

「うるさい」

胸ぐらを掴み、持ち上げる。

過去を見ないのは勝手。だけど過去を見ないまま、知った顔で過去を語る事だけは許せない。

「英雄という偶像に目を向けて、ずっと村の事から目を背けているお前に！ 6年前の事を口に出す資格など無い!!」

「ぼ、僕は目を背けてなんて……」

「じゃあ何故！ スタン爺様を、おじさまを、ココロウアのおばさ

まを、みんなを治す方法を探さない!!」

……6年前から、ずっと抱えていた疑問。

『どうして、ネギはみんなを助けようとしなののか』

聞きたかったけれど、聞いてしまったら何かが壊れてしまうような気がして、だから聞かずにいた。

勝手に「目を背けている」と思い込んでいたかったから。問い詰めて……そう肯定されなくなかったから。

だけど、もう止まらない。止まる気もない。

「私はあの日から探し続けてきた!! アーニヤさんにも手伝ってもらって、ずっと!!」

図書館島に眠っていた高度な魔導書の知識。

エヴァンジェリンさんが有する、既に死滅した古い魔法。

そして、修学旅行から戻る前に、詠春さんから借りた東洋呪術に関する古い書物。

あと少し……あと少しで、みんなを元に戻せる。なのに、こいつは……。

「なのにお前はこの6年、何をしていた!? ずっと過去から目を背けて、都合のいい“英雄”<sup>げんじつ</sup>にだけ目を向けて……逃げ続けていただけだろうが!」

「違う!」

「違うない!」

私も目を背けていられたら、どれだけ楽だったか。

だけど、私たちにそんな資格など無い。村のみんなを犠牲にして生き残った、私たちには……。

ネギを突き飛ばし、右手に魔力を収束させる。……より薄く、より

鋭く……。

「な、何あれ!？」

……外野が煩い。さっさと終わらせよう。

「よせっ！ レイヤー!」

エヴァンジェリンさんの制止の声が聞こえた。アスナさん達も、私を止めようと駆け出した。

だけど、もう止まらない。止めるつもりもない。……ここでネギを終わらせる。

倒れ込んだままのネギに向けて、右手を振り下ろした。

肉を断ち、骨を砕く嫌な感触は……伝わってこなかった。

ネギに当たる寸前のところで、私の手は横から突き出た別の腕で止められていた。

「そこまでだ」

「……風峰、先生」

この人も、これを見ていたのか。

ああ、分からなくなってきた。私は何をしようとしていたんだっただ？

「そこに踏み入れちゃいけない。力を消すんだ」

「……………はい」

言われた通りに、右手に収束させていた魔力を発散させる。

……………何故だろう。この人の言葉には心が安らぐ。

生まれる前から……………魂の底から信じられる。そんな気がする。

「陸斗、悪いがレイヤを送っていつてくれ」

「ああ」

そのまま先生が私を抱きかかえると、歩き出した。

後ろの方で、エヴァンジェリンさんが何か言っている。

「……………試験は不合格だ。出直して来るんだな」

[Side Out]

「Side Asuna」

……正直、かなり焦ったわね。

まさか、レイヤちゃんがあそこまでキレるとは……。

「木乃香、どう？」

「大丈夫や大丈夫」

ま、かなりボロボロだけど、骨も単純に折られたみたいだし、これならすぐくつつくでしょ。

……だからさ、まきちゃんもそんな顔しないの。

「だって、ネギ君が……」

「あゝ、正直あれはネギの自業自得だから」

だってそうじゃない。レイヤちゃんがあそこまで怒ったの初めてよ？  
やっぱり触れられたくない部分があつて、ネギが不用意にそこに触れてしまったから、あそこまでキレた……と。

「ねえ、アスナ。さっきネギ君とレイヤちゃんが言ってた事って…

…」

ちよつと怒ったような顔でゆーなが聞いてくる。

まあ、ちよつとやり過ぎな感もあったけど、それも含めて自業自得  
って事よ。

「私も知らない。けど、ネギもレイヤちゃんも色々あったんじゃない？」

「そう、なのかな」

「そうなのよ、きつと。……言っておくけど、直接聞いたりはしない方がいいわよ」

レイヤちゃんがあれたったのだから、下手したら再びキレられる可能性もある。

……だけど、キレたレイヤちゃん。何て言うか……アリカ姉様そっくりだったな。

[Side Out]

[Side Rikuto]

レイヤを送り届けた後、俺は保健室を訪れていた。

ネギ坊主は既に治療されたらしく、傷はほとんど治っているが、体力は回復していないので寝込んでいるとか。

「ネギ坊主、起きてるか？」

遠慮無く中へ入ると、そこにはベッドから身を起こしているネギ坊主の姿と、佐々木の姿があった。  
ふむ……………取り込み中だったかな？

「あ、風峰先生……………」

「今大丈夫か？」

ちら、とネギ坊主が佐々木を見る。

ま、ちよつとヤバ目の話も入るから、出来ればちよつと出ていて欲しいが。

「じゃ、また後でね。ネギ君」

……………佐々木も佐々木で大変だな。何でも新体操の事で、二宮先生に酷評されたらしいし。

まあ、ネギ坊主の事で幾分か吹っ切れたらしいが。

「あの、何の用でしょうか？」

……………弟子入り出来なかった事には落ち込んでいるようだが、レイヤに指摘された事を気にしている様子は無い。

気にしてたら、もっと落ち込んでいてもおかしくはない。……………どうやら、自分に都合の悪い事はシャットアウトしたらしいな。  
ま、これなら手加減する必要は無いか。

「なあと、ちょっとOHANASHIに、な」

### 第36話：OHANASHI TIME（前書き）

というわけで、OHANASHI並びに木乃香無双の時間です。  
第1回目なので肉体言語は伴いませんが、今後の展開次第では第2  
回OHANASHIが魔王式に切り替わるかもしれません。

### 第36話：OHANASHI TIME

「Side Rikuto」

さて、まずはこいつに自分の立ち位置つてのを懇切丁寧に教えてやらないとな……。

……いや、何で俺がこんな事してるんだろ。これ本当はメルディアナの方で教えてる事のはずなんだが。

「ネギ坊主、まず……お前は何だ？」

「え？」

「ナギの息子、“立派な魔法使い”候補生、見習い魔法使い……違うな、麻帆良におけるお前は、麻帆良学園女子中等部3-Aの教育実習生だ」

そう、ネギ坊主の社会的地位はそれだ。

しかし、どうもこいつはそれを自覚していない節が見受けられる。

「教育実習生とはいえ、一応そういう立場だからこそ、お前には仕事をさせる義務……勤労の義務がある。わかるな？」

「あ、はい」

「だが、3-A担任教師の俺から見ても、お前はその義務を果たしているとは思えない」

そう言うと、ネギ坊主がムツとしたような顔で俺を睨む。

10歳のガキに睨まれても怖くも何ともない。むしろ可愛いだけだ。

「まず、期末テストの時がそうだ。あの時にも言ったが、お前は『生徒を引率する立場』であつたのにも関わらず、バカレンジャーズ

を制止しなかった」

少しは身に覚えがあるのか、俯くネギ坊主。

子供が落ち込む姿はちよつとばかり心が痛むが……この程度でお説教を止める気はない。

「ちょうど、吸血鬼事件の時の授業でも問題はある。授業には上の空、挙げ句全く関係の無い事を生徒に質問する。……ああ、そうそう。授業ほっぽり出してどっか行つてた事もあったな」

何でも、エヴァに果たし状叩き付けに行つたらしいが……授業忘れるってどうよ。

おまけにその時、夢見の魔法でエヴァの夢を見たとか。……プライバシーってものを考えるよ。

ネギ坊主はというと……俺が問題点を挙げる度に、どんどん顔色が悪くなっている。

「修学旅行の時は……まあ、大目に見るとしよう」

ホツとしたような顔になるネギ坊主。

確かに、色々あった。悪い点もあれば、評価せざるを得ない点もある。

「ごく最近、お前……仕事してたか？」

「し、しました！」

「……じゃあ、何でお前の机に書類溜まつてるんだ？」

俺の指摘に再び俯くネギ坊主。

原因は、古菲との修行にのめり込み過ぎた事による職務怠慢。それに対し、新田先生はカンカンだった。……宿めるのに一苦労したぞ、

おい。

「……ハッキリ言わせてもらう。お前、教師の仕事を修行の延長線上という認識で捉えてないか？」

「ッ!？」

……… 図星か。いや、今言われて初めて気がついたところかな。だからこそ、「魔法使い」の事柄を優先して、「教師」としての事柄を後回しにする。……… ネギ坊主にとっての優先順位は、魔法使いの方が上だ。

「確かに、お前は今まで一般的教養を習得せずにいた。……… まあ、それはお前だけでなく、その周囲にも問題はあるが」

レイヤの話によると、従姉の女性はネギ坊主に相当甘いらしい。本来叱るべき立場のはずだが、やはり強く出る事が出来ず、バカやつても優しく宥める程度だという。

他の人間にしてもそうだ。ネギ坊主が「英雄の息子」であるために、多少の行動には目を瞑っていた。それがここまで歪む原因となったのは言うまでもない。

「教師としての不手際はここまでにしておこう。次は、魔法使いとしての問題点だ」

と、ネギ坊主の表情が今までよりもずっと反抗的になった。

……… やっぱりか。コイツにとって、教師よりも魔法使いの事が大切だという証明になっている。

「魔力制御は最近マシになってきているからいいとして、最初の問題点はホレ薬だ」

「え？」

「……………ホレ薬は違法だぞ」

きよとんとしているネギ坊主。自覚は……………無しか。

「でも普通に『まほネット』でも売ってますし……………」

「それは販売前の成分調査で安全判定を受けた、比較的效果の軽い物だ。周囲の人間全てに強い影響を及ぼす、あそこまでの代物は明らかに違法だ」

どうやら、自分が知らぬ間に犯罪を犯していた事に気づいたらしく、「ボク犯罪者……？」と小声で呟いている。

ああ、間違いなく犯罪者だ。もちろん、騒ぎが知れ渡る前に学園長がもみ消したから、そうはならず済んだけどな。

なお、まほネットで販売しているホレ薬は、せいぜい「ちよつと好意的」になるような効果の軽いものだけ。後で僅かに残っていたホレ薬を調べたところ「魔法の素・丸薬七色セット（大人用）」を使って作られたものと判明した。

……………誰があんなもの子供に渡したんだ。調べた式集院さんも顔引き攣らせてたぞ。

「後……………お前、魔法秘匿する気あるのか？」

「あ、ありますっ！！」

「じゃあ何で初日でアスナに魔法バレてるんだ」

そう素早く切り返すと、案の定「うつ」と言葉に詰まった。

アスナに魔法がバレた原因は、足を踏み外した宮崎を魔法で助けたから。

いや、それはいい。助けてなかったら宮崎は大怪我してただろうし、そのために魔法を使った事は評価すべき点だ。

……問題はその後でネギ坊主が取った行動だ。

「アスナの言い分を聞かずに、一方的に記憶を消そうとしたらしいな？」

「だ、だって魔法は知られちゃダメだって……」

確かにそうだ。ただし、そのために記憶操作を施すのは、あくまで「最終手段」でしかない。

最初は会話による説得を行い、魔法の危険性などを充分に説明した上で秘匿を頼む。通常はこれに合意で話が進む。

しかし、ごく稀に合意せず、魔法による対価を強要するヤツもいる。そういったヤツにのみ、記憶を消したりする事が認められる。これが魔法使いとしての常識だ。

「……なお、この事はしつかり魔法学校でも教わったはずだ。現にレイヤに尋ねたところ、そうだと答えてくれた」

「……………」

「ネギ坊主、お前は魔法使いとしても、人間としても未熟だ。10歳なんだからそれは仕方ない。まずはそこを自覚しろ」

ネギ坊主が自分でやらなくてはならない事は、自らを省みる事。

今挙げた他にも、ネギ坊主の問題点はある。それらを全部把握した上で自らを厳しく律する。

それこそが、ネギ坊主が今積むべき善行だ。……おっと、閻魔様っぽくなってしまったな。

「後、レイヤにもちゃんと謝っておけ。無神経な事言っただのも事実なんだからな」

そう言うのと立ち上がり、そのまま保健室を後にする。

俺の言った事でネギ坊主がどう変化するか……それは今後次第だな。歪みが完全に矯正される事は無いだろう。だが、ある程度は方向修正出来るかもしれない。

……ま、後は知らん。勝手に潰れようが、俺の知った事じゃないしな。

「どうやら、OHANASHIは終わったみたいですね」

「……お前か」

廊下の影から、ひょいっと文が出てきた。

一応、防音の結界は張ってあったが、そこまで強固にはしてないの  
でコイツなら聞き取れるだろう。

「ネギ少年にもインタビューしたかったんですけど……さすがに無理そうですね」

「今は胸中ごちゃごちゃだからな。まともに受け答え出来るか怪しいぞ」

「ですよね」

どちらにせよ、それに答えを出すのはネギ坊主自身。そうでなければ前へは進めない。

……これ以上、歪みが酷くなる事だけはならないで欲しいんだがな。そう考えていると、右腕に柔らかな感触を感じた……って、おい。

「あやや?」

何で抱きついてるんだ、お前は。

「いいじゃないですか、知らぬ仲じゃないですし」

「いや、そうじゃなくて……」

「それに“委員会”の会員2号としては、当然の行動だと思いますけど？」

ちよつと待て。……あの組織、まだ解散してなかったのか。

結婚前、あれほどまでに質の悪い組織の存在が発覚して、衣玖と相やり合ってたって言うのに。

「実態は健全なファンクラブですし、いかがわしい要因はゼロですから」

ああ、そうだった。そうだったよ。……忘れていたかったけど。  
衣玖にバレたらあの時の再来だ。絶対バレないようにしないと……  
…。

[Side Out]

〔Side Eva〕

「……………すみません、少し気が高ぶっていたようです」

翌朝、私の家に来たレイヤは開口一番にその言葉を口にした。

……正直なところ、ぼーやが死のうが私にとつてはどうでもいい。  
だが、レイヤが手にかけるのはマズイ。

まずその事実をもみ消す事は難しいだろうし、それ以前にレイヤの  
心が壊れる恐れがあった。……かなり空虚に近い状態だったからな。

「それはいい。……それよりレイヤ、6年前の事というのは……例  
の魔族の襲撃の事だな？」

「……………はい」

私に弟子入りする前に語った、知識と技術を求める理由。

6年前、爵位級魔族の石化を受けた村人達を元に戻すため、私の持  
つ力を欲していた。

ぼーやもそれに巻き込まれた……そう考えるのは当たり前、か。

「しかし、それだけではあるまい」

「……………？」

「お前がぼーやを嫌う理由だ。もう1つあるはずだ。……例えば、  
母親の事とか、な」

ほんの少しだけ、レイヤの表情が歪んだ。……図星か。

そう考えたのにも理由がある。私や陸斗がナギとは知己だと判明し  
てから、ぼーやはナギの情報を聞き出そうとしている。

しかし、自分の母親に関する情報は全く求めようとしてしない。1  
0歳の子供<sup>ガキ</sup>がだぞ？

普通、子供……それも男だったら、母親を強く求めるのが心理学的

にも証明されている。だから、そこが少し引つかかっていた。

「ぼーやは父親だけを見て、母親を見ようもしない。むしろ、その存在さえ認知しているのかすら怪しい。……そんなところか」

「……よく、わかりで」

「600年も生きていれば、自然とそういったものも分かるようになる」

で、どうなんだ？

「……あれはずっと、父親だけを見続けて、母親を見ようとはしていません」

「ふむ」

「これまで何度か、母親の事も会話に挙がった事はありませんが、それを気にする素振りを見せた事はありません。……ここへ来る前、祖父にそういった事を尋ねてみましたが……」

まあ、だいたい想像は付く。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは、無辜の民を救うために命を捧げようとした。

それを尊敬するお前の心情は分かる。だが、ぼーやはそれを知ろうともしない。挙げ句、母親を見ようもしない。

……ふん、だからこそ、か。

「ぼーやもそうだが、お前の根源も“闇”にある。この言葉の意味、分かるな？」

「……ええ、なんとなく」

これから先、本格的な修行に入るわけだが……まずは“器”を鍛える。

そして最終的には、我が禁呪を受け継がせる事になる。ふふふ……  
楽しみになってきたな。

〔Side Out〕

〔Side Negi〕

昨日、風峰先生に怒られた事もあって……ちょっとだけ落ち込んでたら、のどかさんと夕映さんが、例の地図の事で話があると言ってきた。

父さんの手がかりが見つかったのは嬉しいんですが……それにしても「オレノテガカリ」って……。

そ、それはともかく、綾瀬さんにも魔法がバレちゃって……どうしよう。

「それより兄貴、どうするんだよ？」

「うーん……………」

地図の「オレノテガカリ」は、図書館島の地下。  
この前とは違って魔法も使えるし、朝早くに行って帰ってくれば授業にも間に合う。

だけど……………入ったらダメなんだよね。

「どういう事だよ？」

「実はね、カモ君が来る前の話なんだけど……………」

僕達が図書館島に忍び込んだ事が原因で、現在図書館島には許可を受けた人以外は入れないようになっている。

図書館探検部はもちろん、生徒は全員立ち入り禁止。僕は一応先生だし、学園長先生に頼めば許可はもらえるかもだけど……………うーん。

「そんなのアレだって。こっそり入っちゃえば大丈夫だよ！」

「で、でも……………」

「バレなきゃいいんだよ。バレなきゃ」

……………うん、そうだね。

こっそり入って、ちらっと見てくるだけなら……………うん。

でも、だったら他の人には内緒だね。アスナさんや木乃香さんはもちろん、のどかさんや夕映さんにも。

それで、図書館島の入り口で杖を準備していたら……………。

「おはようございます！ ネギ先生」

と、眠そうなのどかさんと夕映さんがいた。

……………あの、もしかしてずっと待機してたんですか？

「ええ、ネギ先生がすぐにでも図書館島へ入り込もうとするのは目に見えていましたからね。さあ、一緒に行くですよ」

「え、ええっ！？ でも……」

「手がかりの情報の正当な代価です。それほど無茶な交換条件ではありませんが？」

のどかさんも「おねがいますー」と言ってきている。  
う、うーん……カモ君、どうする？

「仕方ねえ、嬢ちゃん達の熱意の勝ちだ。連れてこよう」  
「そう、だね」

のどかさんと夕映さんも杖に乗ったのを確認して、いざ出発！

「…………どこ行くん、ネギ君？」

[Side Out]

〔Side Set suna〕

早朝、素振りをしていたらお嬢様から電話が来た。

何でもネギ先生のお父様の手がかりが図書館島の地下にあるらしく、ネギ先生の様子からすぐにも行動に起こしかねないという。そんな予感がしてネギ先生を見張っていたらしいのだが、やはり行動に出たらしい。

……期末テストの際、夜に図書館島へ忍び込んだ事から、図書館島への立ち入りは厳しく制限されており、当然だが一般生徒は禁止されている。

そこにネギ先生が忍び込めば……最悪、図書館探検部は解散する恐れもある。いや、その前にネギ先生は間違いなくクビだ。

「お嬢様、どうですか？」

「ほら、あそこや」

図書館島の入り口にたどり着くと、既にネギ先生は飛び立とうとしていた。

止めなければマズイ。顔を見合わせて頷き、出て行こうとすると……。

「おはようございます！ ネギ先生」

あ、綾瀬さん？ それにのどかさんも……何故ここに。

「ネギ君のお父さんの情報、例の地図にあったんやけど……それをネギ君に教えたん、夕映なんよ」

「あ、ああ……だからですか」

これで綾瀬さん達がネギ先生を止めてくれれば……って、むしろ乗り込む気満々ですか！？ よく見たら綾瀬さん、双眼鏡やら装備してますし。

お、お嬢様……抑えてください。微笑みが黒いです黒い。

「せっちゃん、そろそろ行くで」

「……はい」

「さて……どこ行くん、ネギ君？」

お嬢様と共に、今にも飛び立とうとしていたネギ先生達の前へと出る。

私たちの姿を見て……相当驚いている。無理も無いが。

「こ、木乃香さん……それに刹那さんも。どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたも……ネギ君、今何しようとしてたん？」

「な、何って……それは、その」

口籠もるネギ先生。カモさんも冷や汗ダラダラだし、綾瀬さんとのどかさんも顔色が悪い。

いや、私は悪くない。お嬢様がここまで怒る原因は、ネギ先生達が図書館島へ忍び込むうとしてたからですよ？

「夕映とのどかも！　ウチらが図書館島に入るの禁止されとるの忘れたん？」

「そ、それは……その」

「そんなの、こっそり入ってこっそり出てくれば大丈夫です！」

ぶちっ

あ、今、何かが切れたような音が……。

いえ、私は何も聞きませんでしたし、何も見ませんでした。……例えば、隣のお嬢様が黒い鬨気のようなものを放っていたとしても。

「……………夕映とのどか、ほんまに分かつとるん？ バレるバレないの問題やなくて、それをやってもうたら図書館探検部として……………うん、麻帆良学園の生徒として最悪や」

「「う……………」」

「ネギ君もや。……………今のネギ君は先生や。先生やつたら、生徒の見本にならなあかん。それなのに決まり事破るんか？」

お嬢様の容赦ない指摘に、3人も俯いている。

……………これは本気で怒っている。ここまで怒ったのは、魔法について話した時以来だな。

「もし、これでネギ君達が図書館島入ってバレたら、間違いなく図書館探検部は終わりや。ネギ君も修行中止でオコジヨで強制送還されるえ？」

「そ、それは……………」

「それでもまだ「入る」言っんやつたら、ウチはもう知らん。図書館探検部全体に迷惑かけても、ネギ君がクビなっても知らん。ぜゝんぶネギ君達の自業自得や」

ほ、本当に強くなられましたね……………お嬢様。

……………強くなり過ぎて、ちょっと怖くなって来た気がするのですが。

第36話：OHANASHI TIME（後書き）

よくよく考えてみると、ネギって他人に左右されやすい気質なのかもしれません。

茶々丸襲撃は力モの入れ知恵で、夕映と仮契約する時も木乃香に唆されている。

度々自分で全部背負い込もうとして、周囲から説教喰らってますけど……それで気分を切り替えるのもちよつと早すぎる気がする。

……その辺りも問題なのかも知れませんか。

### 第37話：南の島での幕間（前書き）

南の島と入ってますが、少ししか出てきません（笑）

### 第37話：南の島での幕間

「Side Konoka」

ちよつとOHANASHIして、ネギ君達の図書館島侵入を食い止めてから、陸斗さんが飛んできた。

いや、ウチがOHANASHIしてる時にはもう近くまで来とったみたいで、なんや苦笑いしとったし。

……とりあえず、笑うのやめてもろうてええですか？

「いや、本当に木乃葉に似てきたと思ってな」

「お母様に？」

「ああ。……今はまだ大人しくなったが、昔のあの子にそっくりだ」

お母様の昔？

うーん、おじいちゃんが前に、確かお転婆の元気娘やったゆってた気がするけど……全然想像つかん。

「しかし、説教してその次の日にああ出るとは……」

はあ、とため息をつく陸斗さん。

何でも、レイヤちゃんにボコボコにされた後、保健室で「教師としての立場を自覚しろ」みたいに説教したらしい。

……その後で規律破って図書館島に忍び込むのは、やっぱりダメやと思っくんやけど。

「……正直、これはさすがにキツイんだが」

「し、しっかりしてください」

思わず崩れ落ちそうになる陸斗さんを、せつちゃんが支える。  
まあ、ネギ君に全否定されたも同然やし……そらシヨックやよな。  
ウチかて呆れるし。

「あの分だと……ちょっと目を話した隙にまた忍び込みかねないな」  
「とりあえず、学園長に報告しておいたらどうですか？」

あ、それいいかも。

さすがのネギ君も、学園のトップおじちゃんから直接言われたら無視できない  
やろっし。

夕映とのどかには、うちの部長にも報告して、その上で叱ってもら  
えばええやろ。

「……そうだな」

[Side Out]

〔Side Iku〕

ようやく連絡の取れた八雲様は、何やら疲れ切っていた。  
麻帆良に来た時はいつもの余裕は無く、明らかに「休ませて」と言わんばかりのオーラが全身からにじみ出していた。

「あの、大丈夫ですか？」

思わずこう聞いてしまうほどに。

案の定、八雲様も弱々しいが微笑みを浮かべて、

「ええ、大丈夫よ」

と返してくれた。

……とてもそういう風には見えない。というより、何があったんですか？

「……ちよつと暇だったから、ゆちるに会いに行つたのよ」

結崎ゆちる。私や陸斗の古い知人の1人で、私の知りうる限りでは“最高”の剣士。

なお、10年ほど前からタカミチさん達の修行を担当されており、関係者では「地獄の登竜門」と噂される「ケルベラス大渓谷からの生還」という荒行を考案し、実際にタカミチさん達3人に実行した張本人。

陸斗曰く、「悪意」と「傲岸不遜」を“大胆不敵”という液体で混ぜ合わせ、それを地獄の窯で焼き上げた代物らしい。

……私にとって、最大の敵とも形容出来る相手です。

「それで？」

「……あの子、新しい弟子を取ったのよ」

理解した。理解してしまった。……したくは無かったのですが。ようするに、その子への修行に巻き込まれた、と。幻想郷……いえ、世界的に見ても最強クラスの八雲様を、修行のためだけにコキ使うのは、彼女くらいのものでしょうか。

「ところで、その弟子というのは？」

「ん……見た感じ、なかなか面白い子だったわ。才能もあるみたいだったし……」

それにしても、あのゆちるさんに目を付けられるとは……気の毒に。

ある意味光栄な事なのかもしれませんが、同時に不幸とも形容出来る事ですからね……。

……無事修行を終えてくれればいいのですが。

「そうそう、鴉天狗がこっちに来てるって聞いたけど？」

「さっさと連れて帰ってください」

今のところは大人しくしてますが、陸斗は何だかんだで甘いですから、いつ調子に乗って暴走するか分からない。

そんな事になる前に、一刻も早く連れ帰ってもらわなくては……。

「……あの、ね。それなんだけど……」

何だか申し訳なさそうな顔で、おずおずと八雲様が切り出す。何ですか？ 凄く嫌な予感がするのですが。

「しばらくの間、こっちで預かってもらう事ってできない？」  
「はあっ!？」

いきなり何言い出してるんですか、この人は!  
あんな『清くも正しくも無いパパラッチ天狗』をこんな場所麻帆良に置いておいたらどうなるか……わからないはず無いでしょう!?

「いや、その……ね。ちょっと色々あるのよ」  
「……………」

おかしい。八雲様にしては、妙に齒切れが悪すぎる。  
そもそも何故、向こうへ戻す事が出来ない? その辺りがわからないんですが……。

「幻想郷で何かあったんですか?」  
「うーん、そういうわけじゃないんだけど……………」  
「……………では、こっちで何かあるんですね?」

そう尋ねた瞬間、微かにだけけど八雲様の身体が震えた。  
……凶星、ですか。そうなると何故、彼女をこちらへ残さなければならぬか。それも自ずと絞られてきますね。

「レイヤさんの事、ですか?」  
「……………相変わらず鋭いのね。その通りよ」

やっぱりですか。  
陸斗からレイヤさん達の立ち位置について聞きましたが……相当危ないらしいです。  
「英雄の子供」よりも「女王の子供」の意味合いの方が強い、という事でしょうね。

「ゆちる経由で来た情報なんだけど……何でもMMで不穏な空気が流れてるみたい」

ふむ……MMの情報となると、クルトさんからでしょうか。

確かに不吉ですね。麻帆良はある意味独立した組織ではありますが、連合派の魔法使いが危害を加えない、とは言い切れない。

ああ見えて、文さんは戦闘力が高い。風を操る高度な能力。そしてスピードでは間違いなく幻想郷最速。

……さては彼女をレイヤさんに付けるつもりですね。

「ダメ？」

可愛らしく尋ねてくるけれども、それはちょっと……。

……あの人、ただでさえ問題行為の塊なんですよ？ 麻帆良に置いておいたら、どんな化学反応起こすか……。

「じゃあ、何か問題起こすまで様子見って事にしない？ ほんと～にお願い！」

結局、八雲様のその言葉に押し切られ、文さんをもう少し麻帆良に置いておく事になった。

出来るだけ早く引き取ってもらいたいですけど、それは彼女が何かしらの問題を起こす事になる。

……どつちつかずになっちゃいました。本当にどうしましょう。

[Side Out]

「Side Other」

ネギは果てしなく落ち込んでいた。

というのも、図書館島に眠っているであろう父の手がかりを探しに行けず、挙げ句学園長からも「勝手な行動は慎むように」と叱られたからである。

沈み込むネギであつたが、彼には「どうして」怒られたかを本当の意味で理解していなかった。

「父さんの手がかりがあるのに……」

それもそのはず。彼はこれまでも書庫に忍び込む事を何度も行っており、その時は特に怒られたりはしなかった。

そもそも、ネギは麻帆良に来るまで、怒られた経験が無い。だから自分が何故怒られたのか、頭で理解出来ても、心では理解出来ない。

これまで「英雄の息子」として将来を期待されていたがための弊害であつた。

「はあ……………」

「あら、ネギ先生ではありませんか」

そう言つて現れたのは、いいんちょこと雪広あやかであつた。

実は、妙に元氣のないネギを尾行しており、話しかけるチャンスを探つていたのだ。

「あ、いいんちょさん……………」

「元氣が無いようですが、何かあつたのですか？」

「いつ、いえ」

さすがに、「立ち入り禁止の場所に忍び込もうとして怒られた」などとは言えない。

……………まあ、ネギにぞつこんのあやかならば、彼に味方するのは目に見えているが。

「先日のGWはどこかへ？」

「いえ、どこにも……………」

「まあ！ いけませんわ。……………折角の週末ですので、私が『南の樂園』へご招待させて頂きたいのですが……………」

ネギの手を取り、視線を合わせてそう誘うあやか。

彼女の狙いはここだった。南の島で二人つきりになつてのパラダイス計画。

「南の樂園、ですか？」

「ハイ。南の島の『海』ですわ」

「え、う……………海、ですか……………」

その言葉に、心が揺らぐネギ。

……まあ、これもまた現実から目を背けるだけなのだが……

[Side Out]

[Side Leiya]

……あの、ところで私は何故、こんな場所にいるんでしょうか？

「さあ？」

可愛らしく小首をかしげるさよさん。

えっと……いきなり拉致られて、気がついたら見た事のない景色が広がっていて……。

……ここ、明らかに麻帆良じゃないですね？

「『『『海だ

——！！！！！！！！」

あ、いえ……それは分かります。

燦々と照りつける太陽。真っ青な海。そう、ここは南の島……。

「そうじゃなく！ 何で私がここに………」

「諦める。私はもう慣れた」

何だか覚りを開いたような表情のエヴァンジェリンさん。

なお、私もエヴァンジェリンさんも水着姿……。いつの間に着替えさせられたんでしょう、私。

茶々丸さんは用事メンテナンスがあるとかで欠席。いや、あの人は口ボですし、塩水とかダメでしょうからね。

「……それにしても、ぼーやはモテモテだな」

私たちの視線の先には、のどかさやあやかさんを始めとする面々に囲まれ、おろおろしているネギの姿が。

……あれ、将来すごい女泣かせになると思っんですが。

「あ、逃げた」

1人になりたいとかどうか言い出して、凄い速さで逃げて……千鶴さんの水着に突っ込んだ。

いや……あれは無いでしょう？ 女性の胸に顔を突っ込むなど、明らかに女の敵です。

あゝ、どんどん他の人も集まってきて、結果的に潰されるような形になって……ぷかぷかと浮いた。

「おい、死んでるんじゃないか、あれ」  
「ほっときましょう」

そつ、今更ネギなどどうでもいい。

……よくよく考えてみたら、あれから1度も話してませんけど……。

「私たちも……魔法使いになれないものでしょうか？」  
「……はあ？」

夕暮れ時。すっかりバカンスを堪能していた私たちのところへ、ネギを伴った夕映さんとのどかさんがやってきて、そう切り出した。  
魔法使い？ 何を言ってるんですか、この人は。

「……まさか、またバレたんですか？」  
「はうつ！？」

ちよつと厳しい視線を向ける。

エヴァンジェリンさんは……呆れた顔をしている。いや、だってネギがこつち来てまだ2ヶ月ちよいですよ？

バレた人数は……最初から魔法の事を知っていた人を抜かして、夕映さんで6人目。ほんと何やってるんです、この薬味。

「で、何なんです、その魔法使いになれないかって」  
「ええ。私たちも、危険と冒険に満ちた『ファンタジーな世界』に足を踏み入れたいと思っそちらがわのているのです！」

……ちよつとイラッと来ましたね。

チラッとエヴァンジェリンさんの方を見ると、明らかに「不愉快だ」と言わんばかりの顔をしている。……この人も元賞金首ですから、色々あつたんでしょう。

「……とりあえず、夕映さん」

「はい」

だからその期待に満ちた顔をやめなさい。

とりあえず、怒ってもいいですよね。これは。

「あなた、私たちをバカにしてるんですか？」

そう言つてあげると、明らかにムツとした顔になる夕映さん。

「どういう意味ですか、それは」

「そのままの意味です。危険と冒険に満ちたファンタジーな世界？  
何ふざけた事言つてるんです」

そんな世界が見たいなら、ラノベでも読んでなさい。

少なくとも、私たちが生きる世界は、そんな夢物語の世界じゃない。  
まほつかい  
風峰先生やアスナさんがいなくてよかったですね。あの2人がいたら、怒るなんてものじゃ済まされませんよ？

「だいたい修学旅行の事を忘れたんですか？ 私、死にかけたんで

すよ？」

「それは……………」

のどかさん、あなただってそうです。ネギがボコボコにされるとこ  
ろ見たんでしょう？」

……ああ、この人達もあれですか。都合のいいものしか見ずに、事  
実を曲解する……ネギと同じタイプ。私が1番嫌いなタイプです。  
ネギ、あなたはどうなんです？ 一般生徒が魔法に関わろうとする  
なんて、明らかにあなたが原因でしょう？  
つて、相変わらず俯いていじいじして……まったく。

「勝手にしたらどうだ？ ばーやから魔法教わって魔法使いになれ  
ばいい」

「ちよっ……エヴァンジェリンさん!？」

「私には関係のない事だ。そいつらがこちら側に踏み入って、ばー  
やの所為で死のうが、私の知った事じゃない」

死ぬ、という言葉に反応する夕映さん達だが……まあ、確かにその  
通りですね。

私と彼女達の関係といえば、ただのクラスメイト。自分から危険な  
場所に行こうとしているのを、別に身体を張って止めるほど、私は  
お人好しではない。

まあ、風峰先生に報告だけしておいて、後はほっときましょう。

……ああ、そうそう。これだけは言うておかないと。

「ようこそ……………理不尽さに満ちた 非日常の世界へ」

### 第38話：西からやってきた少女

〔Side Rikuto〕

レイヤ達は「南の楽園」とやらにバカンスに行ったらしい。

教師の俺が誘われなかったのは、ちょっと残念（何故か衣玖に睨まれた）なのだが、まあそれはいい。

……今現在、俺が対面している問題に比べれば。

「ふおおおお。紹介しよう、関西呪術協会より派遣されてきた……」

「月詠言います。よろしゅう」

真夜中、世界樹前広場に集まった俺達の空気が凍り付いた。

修学旅行の事情を知らない魔法先生はともかく、モロに神鳴流の関係者である葛葉は、信じられないものを見た顔をしている。

……とりあえず、フリーズから抜け出せない面々を代表して、俺が質問させてもらおう。

「……学園長、とりあえず説明してください」

「彼女は西からの使者じゃよ。この前の事件で、もつと東と西との連携を取るべきという結論が出たの。その第一号じゃ」

ま、有り体に言ってしまうえば一種の牽制だ。

月詠は関西呪術協会の名代であり、彼女に対する無礼はそのまま関西呪術協会への無礼へと繋がる。

……実際この前の事件で、元々微妙だった東西の仲がさらに微妙になった。残念ながら、ネギ坊主の親書もそれほど効果は発揮していない。

ここで何かバカをやらかせば、そこを向こうに突かれる。だから古矢や連合派の魔法使い達も何も言えないのだ。

「それで月詠君なんじゃが……彼女の事は風峰君に一任しようと思う」

ざわ……ざわ……ざわ……！

今、俺の顔はきつと引きつっているはずだ。隣にいたタカミチが青い顔で「げ」と漏らしたのがわかる。

「ほ、本気……ですか？」

「マジじゃ」

本気と書いてマジと読む。

俺だって、月詠の“危うさ”については実際に応対して肌で理解している。要するに……学園長は俺に月詠を押しつけるつもりなんだろう。

いや、分かりたくはないが、分かる。あれは他の魔法先生では荷が重すぎる。あれを抑えられるのは学園長やタカミチレベルでなければならぬ。

……やるしか、ないのか。

話が終わると、青い顔の葛葉が近寄ってきて一言。

「………頑張ってください」

「その言葉返って不安になるんだが!？」

[Side Out]

「Side Fate」

ネギ・スプリングフィールドが、かの“闇の福音”の弟子入りテストに失敗したらしい。

何故僕がそんな事を知っているかと言うと、麻帆良在住の諜報員から来たビデオメールを見ているからだ。

「動きからして……フェイト様と同じ、中国拳法ですね」

映像を見た琴君がそう、冷静に述べる。

確かにそうみたいだね。おそらく、僕の戦いを見て興味を覚えたんだろうが……まだまだ、だね。

「うわ、痛そう……」

レイヤ・スプリングフィールドがネギ君の腕を踏みつけた場面を見て、暦君と環君が顔をしかめる。

あれはいけない。ネギ君はもう少し、人の心が分かるようにするべ

きだ。……まあ、10歳の子供にそれを求めるのは酷なのかもしれないが。

「フェイト様、ネギ少年と実際に戦った感想はどうでしたか？」

「……そうだね」

才能が豊かなのは否定しないよ。実力は見習いにしては充分だと思う。

だけど、今の映像を見ていて分かるとは思っけど、心が弱い。……

風峰陸斗が言うに「現実から目を背けている節がある」らしい。

それで、彼の生い立ちや幼少期の様子。メルディアナでの生活も探ってみたんだが……。

「？　どうかされたのですか？」

「……暦君、少し酷なことを聞くかも知れないけど……君はご両親に叱られた事はあるかい？」

暦君は元々、戦災孤児。紛争で家族と故郷を失っている。

僕の質問に少し悲しそうな色を浮かべるが、すぐに答えを返してくれた。

「あります。……それはその、大抵は私に非があつたんですけど」

「そう、大人が子供を叱る。それが当たり前前の事だ。しかし……」

ネギ君は大人から「叱られた事が無い」らしい。

これはメルディアナの教師の“脳”に、直接聞いた事だから間違いない。

「あの、それ本当ですか？」

「残念ながら、本当だ」

うわあ、と嫌そうな顔になる。

僕はそうだった事はよく分らないのだが……それが歪んだ育ち方を  
する要因の1つ、らしい。

「ネギ少年はともかく、こちらのレイヤ・スプリングフィールドは  
どうなのでしょう？」

焰君が、映像を別の物に切り替えて、そう質問してくる。

切り替わったのは、京都での一件。リョウメンスクナがレイヤ君の  
放った『千の雷』によって撃ち抜かれる場面。

……正直、これには驚いた。10歳にして上位古代語をここまで形  
にしている、彼女の才覚。何よりもその心の在り方。

「……彼女は強い。理想的な師の下で指導を受ければ、おそらく世  
界最高クラスの魔法使いになれるだろうね」

聞けば、既に“闇の福音”の弟子であるという。

あの弟子入りテストでネギ君と相對していたのも、そこからだろう。  
世界最古の王家の血統であり、最強最悪の賞金首の弟子、そして“  
空に坐す者”に守られる存在。

「“空に坐す者”ですか……」

その名前に、複雑な表情を浮かべる栞君。

……そういえば、君は彼に会いたがっていたんじゃないか？

「あ、いえ！ それは……その、色々ありまして……」

？ まあ、プライベートを聞き出すつもりは無いから、別にいいけ

ど。

それは置いておくとして、僕らの今後の活動についてだけど……。

「当分は現状維持だね。他勢力に気づかれぬよう、万全を期する必要はあるけど」

「まあ、さすがにここへは誰も来ないと思いますよ？」

……確かに。ここに踏み入る事は何人たりとも許されない。

この場所の危険度は世界中に知られているし、ここまでたどり着けるのは最強クラスの実力者……かのジャック・ラカンやそれに順する者達くらいだろう。

ここは“墓守り人の宮殿”。……風峰陸斗が言うに、ラストダンジョンらしい。

「それでも、だよ。連合上層部は利権争いで騒がしいし、帝国も連合を出し抜こうと考えている一派がいる。中立を謳うアリアドネーも何を考えてるかはわからない」

そういった輩が暴走し、ここへ手を出して来ないとは限らない。だからこそ、注意しておく必要は充分にある。わかってると思うけど。

「……………テルティウム」

なんだい、デユナミス。珍しいね。

その場を後にして、歩き出した彼を追う。

「……………元老院が動いた。狙いは麻帆良だ」  
「麻帆良……………」

なるほど、目的はネギ君とレイヤ君、か。

しかし、あの老害達はどやって手を出すつもりなんだい？　いくら麻帆良がMMの下部組織といっても、過度な干渉は出来ないはずだよ。

「6年前と同じ方法だ。尤も、そこまで過激な行動に出るつもりは無いらしいが」

「……………そう来たか」

なら、僕も少し動く必要があるね。

[Side Out]

[Side Kitayama]

おかしい。俺の知る「ネギま」とはメチャクチャおかしい。

まず、原作には「風峰陸斗」もないし、薬味の妹「レイヤ・スプリングフィールド」なんてキャラは存在しない。

そして、薬味は3-Aの担任じゃなく、教育実習生のまま。

よく分からないけど、多分アスナや木乃香とも仮契約してないみたいだ（これはむしろ安心した）。

「……間違いない、あの2人は転生者だ」

木乃香と仮契約し、エヴァの弟子になってみたいだし……まず、レイヤ・スプリングフィールドは間違いない転生者だ。

風峰陸斗も、調べてみれば“紅き翼”の1人らしいし、これも間違いない転生者。

「まさか、この能力をこんなにも早く使う事になるとはな……」

今、俺の周囲には無数の本棚が出現している。

これこそ、俺の10のチート能力の1つ「星の本棚」だ！ 仮面ライダーWでフィリップが使ってたあれだな。

必要なキーワードさえ入力すれば、どんな情報だろうが手に入る。まず、レイヤ・スプリングフィールドから調べてみるとしよう。

「よし、キーワードは……『転生者』、『ネギの妹』、『王家の血統』」

俺がキーワードを口にする度に、次々に本棚が移動していき、どんどん少なくなっていく。

そして、1冊だけになり、俺のところへと飛んでくる。

その本を開く……そこにはレイヤ・スプリングフィールドの人生が記されていた。

しかし、肝心の転生者であるという部分だけは見あたらない。……

つか、前半部分がほとんど真っ白なんだが。

「どーゆー事だよ、これ」

ちっ、わかんねえ。

なら次だ次！ 風峰陸斗の本だ！

キーワードは『転生者』、『幻想郷』、『英雄』、『紅き翼』だ。

「……………おい、何だよこれ」

なんか鎖がじゃらじゃら言ってるんだが……………明らかに封印されてねえか？

いや、おかしいだろ！ 何者なんだよ、アイツ！

[Side Out]

「Side Arnya」

し、死ぬ……本気で死ぬ……。  
全身筋肉痛でベッドに倒れ込んだ私は、これまでの事を振り返っていた。

『6年前の事件。あれからずっとレイヤさんは、石にされた村人達を助けるため、行動している』

『しかし、今のままだと彼女だけが前へ進む事になる。あなたはどうしますか？』

『もしもあなたが……彼女と共に進む力を望むのなら……私の弟子になりなさい』

そんな無茶苦茶な事を言ってきた、気がついたら私はあの人の弟子になっていた。

何よりも、「レイヤに置いて行かれる」っていうのが嫌だったし……いや、だってあの子、目を話したら絶対無茶しかすし。ネギが頼りにならないからって、魔法使いまくって倒れてもおかしくないまあなんていうか、あの人も色々つぶつぶ飛んだ人だけど……弟子になった事は後悔していない。なんと書いても……。

「実感してるから、ね」

最初は訝しかったけど、1日が経つ毎に私が強くなっている事がひしひしと伝わって来ている。

最初は無詠唱魔法が全く使えなかったけれど、今では余裕で使える。瞬動術だってあちこちにぶつ飛んだりしたけれど、今なら“入り”も“抜き”もかなりうまくなったと自負してる。

……と言うより、出来ないと思死んでたから、文字通り「死ぬ気」で頑張っただけなんだけど。

「……そういえば、あの人って何者？」

私の師匠、結崎ゆちるは謎の人物だ。

一言で形容するなら「ぶっ飛んだ人」で、各方面に顔が利くらしく、この前ヤクモ何とかって女の人が修行の相手をしてくれたけど……全く手も足も出なかった。

師匠自身も相当な実力者で、私がこれまで見てきた魔法使いの中では、間違いなく最強。

本人に過去の事を聞くのも躊躇われるっていうか、正直怖い。またあの「足から出る斬撃」が飛んできそうで怖い。

「アーニヤさん、入りますよ」

「あ、どうぞ」

入ってきたのは、相変わらずメイド服の師匠。

……あの、前々から気になってたんですが、何でいつもメイド服なんです？

「この服は私の誇りだからです」

「誇り？」

「そう。……なぜなら私は、あの方への愛に生き、愛に殉じる情熱的な女ですから」

あと、こういうところも意味が分からない。

時折、「あの方」っていう代名詞が出てくるけど、いったい誰の事なんだか。

「それで、どうしたんですか？」

「ああ、忘れるところでした。ちょっとお仕事に行きますよ」

……あの、拒否権はありますか？

「ありませんよ」

につこりと素敵な笑顔で言い放ってくれる師匠。あなたのそーゆーところが大好きです、コンチクショー。

……なお、師匠の言う“お仕事”とは世間一般の仕事とかじゃない。極めて危ないお仕事だ。

正直、逃げ出したい気分でもある。

「さ、行きますよ」

「……………はい」

身体は痛むけど、ここで寝てたら余計に死ぬ。

……なんて言うか、すっごい憂鬱。

[Side Out]

「Side Rikuto」

「それで……どういふつもりなんだ？」

安全に話が出来るところ……という事で、俺達は今、エヴァの家に来ている。

肝心のエヴァは「南の楽園」にバカンスに出かけてしまったが、留守を預かる茶々丸がいたので、ありがたく使わせてもらっている。

「依頼です」

「依頼？ 誰からのだ」

「京都でのお仲間さんです」

茶々丸の淹れた茶を飲みながら、月詠がそう答える。

ああ、なるほど。そういう事か。神鳴流剣士である月詠に、アイツらから出した正式な依頼。それなら問題は無い。西云々もカモフラージュなんだろう。

……その辺りには木乃葉が絡んでいそうで怖い。正直、詠春よりアイツの方が策略家として向いている。

「ところで……刹那センパイ達は？」

残念だが、今頃は南の島でバカンスを楽しんでいる頃だろう。

なお、刹那だけでなく、アスナや木乃香、レイヤも……3-Aの生徒はほとんどバカンス中だ。

そう告げると案の定、月詠は残念そうな顔になった。……時折「放置プレイ」とか「お預け」などの不吉な言葉が聞こえてくるが……

無視しよう。

「ところで……フェイトさん言うてはった“空に坐す者”って何ですか？」

“空に坐す者”

俺の旧い名の1つだが、それを知る者はこの世には極めて少ない。それこそ紫や藍ねーさんのように、俺と昔から付き合いのある相手ぐらいだ。

フェイトがこの名前を知っていたのは、あくまで俺が自分で名乗ったから。現在はまだ名乗っていないので、その名前で呼ぶ者も少ないというわけだ。

……まあ、名乗るのをやめたと言うか、名乗りたくなかったというか……。

「いや、説明するまでもないと思うぞ」

「ほえ？」

「……よく考えてみる。神鳴流の門下にいたなら、多分聞いた事あると思うから」

そう言われた月詠は、少しの間天井を見上げて、何かを思案していた。

数十秒後、その結論に行き着いたらしく、ちょっと驚いた顔で俺を見つめてきた。

「あ、ま、まさか……」

「そーゆー事なんだよ」

思わずため息をついてしまう。

……そう、厄介だけでもそーゆー事なのだ。

「あれ、とゆーことは……………」

俺を見る目が訝しげなそれへと変化した。

ああ、そうだよ。悪かったな。お前が今思ってるように、あの逸話も全部真実だよ、悪いか！

「いえいえ、まさか先々代の……………」  
「ストップ」

月詠の言いかけた言葉を制する。

……こればかりは、あまり口にしてもらいたい事じゃない。俺だけの話じゃないしな。

確かにあれは事実だ。俺にもアイツにも、譲れないものがあつた。

……ただそれだけだ。

幸い、月詠は空気を読んでくれたのか、ふつと微笑むだけで何も尋ねては来なかった。

### 第39話：予兆

「Side Leiya」

バカンスから戻ってきて、私の日常は変わらない。

“別荘”でエヴァンジェリンさんや茶々丸さんにシゴかれて、学校でもきちんと授業を受けて、そうやって過ごしている。

……そうそう、京都で敵対した神鳴流剣士の月詠さん。何でも依頼を受けたとの事で、こっちに来ていて、実際に応対した時は……大変でした。

もう刹那さんが刀抜いていきなり飛びかかろうとして、木乃香さんに沈められてました。

「レイヤちゃん、次お願い！」

「はい」

……現在、別荘もかなり大所帯になってきた。

最初は私たち3人だけでしたが、アスナさんや木乃香さん、刹那さんに月詠さんも使うようになって……時折、風峰先生も修行を見てください。

そんなわけで、私たちは頑張ってます。

「『魔法の射手・連弾・光の125矢』！」

アスナさんに向けて100発以上の魔法の矢を放つ。

京都での一件の後で教えてもらった、アスナさんの力……魔法無効化能力。マジックキヤンセル

私も文献でしか見た事がなく、実際にその力を持っているのは数人とされるほど、極めて稀少な能力。……もしかして、風峰先生と関

わりがあるのもそれなのでしょうが？

「はああああっ！！」

木刀を振るい、魔法の矢を次々と打ち消していく。

これは自分の力を自在に使えるようにするための訓練らしく、私も魔法の精度を高めるために付き合っています。

何はともあれ、少しずつですが前へ進んでいるという事です。

「お疲れ様です、アスナさん」

「うん、そっちこそありがとね」

「アスナ、レイヤちゃん！！」

あれ、木乃香さん？ どうしたんですか、そんなに慌てて。

「なんや分かんらのやけど、ネギ君達が別荘（ニ）に来てもったんや！」

「はあっ！？」

……ああ、トラブルの予感。

木乃香さんに案内され、ついた先には……。

「……………っわ」

あからさまにおろおろしているネギと、眼をキラキラさせてるのかさんと夕映さん、ちよつと居心地悪そうにしている朝倉さんと古菲さんの姿があつた。

ちよつとこれ、何があつたんですか？

「いや、ほんとごめん」

「止めきれなかったアル」

手を合わせて謝罪してくる朝倉さんと古菲さんはいいとしましょう。で、そのバカ3人は何やってるんですか。

「いえ、刹那さんとエヴァンジェリンさんが一緒に歩いて行くのが気になりまして、それでちよつと……………」

「レイヤ、警察に連絡だ。この不法侵入者共を通報しろ」

ええ、それが1番いいでしょう。あ、でも1日経たないとここから出られませんでしたっけ。

とりあえず、どこかの部屋に監禁しておきましょうか。

「ちよ、ちよつと待ってください！ 何でそこまでされないといけないですか！」

「勝手に私の家に入ってきたからだ、馬鹿者」

いきり立つ夕映さんに、冷静にエヴァンジェリンさんがツッコむ。ここにいる時点で、エヴァンジェリンさんの家に不法侵入したのは目に見えています。

殴られないだけありがたいと思ってくださいよ。

「ほらほら、勝手に入った私らが悪いんだからさ」

「ここは大人しくするアルよ、バカリーダー」

何だか奇妙なほどいい子な朝倉さんと古菲さんに宥められ、しぶしぶ口を閉ざす夕映さん。

……この人、まだ諦めてないんでしょうかね。ネギから魔法教わるのは勝手ですけど、私たちに迷惑かけないでくださいよ。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

「元老院に不穏な動きが？」

「うむ。MMのクルト君からの連絡じゃ」

学園長室に喚び出された俺は、学園長からその事を聞いていた。厄介だな……こっちに飛び火してこなければいいんだが。

「風峰君は、ネギ君とレイヤちゃんに注意を払ってくれんかの？」

「ああ、わかった。……しかし、ネギ坊主はヤバイんじゃないか？」

何というか、この前の弟子入りテストで失敗してから、不安定になつてゐるって言うか……。

このまま放っておくと、何かがきっかけで爆発しかねない。レイヤに被害が出なければいいんだが……。

「うむ……やはり、エヴァの弟子になれんかったのが大きいようじやな」

「まさか、わざと負けて弟子にすればよかった、なんて言わないだろうな？」

「そのつもりはないぞい。さすがにそんな事で弟子になっても、エヴァにやる気が出んじやろうからな」

だから、早めに魔法先生から選抜してくれ。

魔法使いとしての修行に身を入れれば、少しは状態も改善されるだろうし。

そんなこんなで会話して、学園長室を後にしてから、俺は懐からケータイを取り出す。通話の相手はフェイト。魔法世界の事だし、アイツなら何か知っているかもしれない。

数回のコール音の後、繋がった。

『……………はい、こちらフェイト様の携帯です』

……聞いた事のない少女の声。そういえば、この前の通信の時に女の子がちらほら見えてた気が……。

「フエイトは？」

『あ、今ちよつとデユナミス様と……あの、もしかして……風峰陸斗、さんですか？』

「ん？ ああ、そうだが」

そう答えると、電話の向こうから「キャー！」という悲鳴が響いた。  
……なんとなく、ショックだな。

『あ、も、申し訳ありません！　すぐに取り次ぎますので！』

「あ、ああ」

それから十数秒後、クールな男の声が聞こえてきた。

『すまないね。ちよつとこつちもゴタついているんだ』

「いや、こつちもいきなりだからな。……ところで、元老院の方が騒がしいらしいが、何か知らないか？」

『……耳が早いね。ちようど今、僕らもその事で動いていたところだ』

「ふむ……」

フエイト達がわざわざ動く……となると、やはり元老院の狙いはこつちか？

元老院が狙いそうなものと言えば、ネギ坊主とレイヤ英雄の子供達にアスナ、ちよつと離れて木乃香ぐらいか？

『詳しい事はまだ分からないが、彼らが何らかのアクションを起こすのは間違いない。充分に気をつけた方がいい』

「ああ、すまないな。……ところで、さっき電話に出たのは誰だ？」

なんか、あからさまに驚かれたんだが……。

『ああ、“完全なる世界”の構成員だよ。栞さんと言ってね……そういえば、君に会いたがっていたんだよ』

「俺に？ 何で？」

『さあ？ 他の子達なら知ってるかもしれないが、プライベートの事だし、僕は聞いた事無いよ』

ふむ……魔法世界の女の子、ねえ。

特に接点とか無いと思うんだが………何でだろ。

[Side Out]

[Side Eva]

く、空気が痛い……いや、比喩とかそういうのじゃなくて、もう本

気で。

「夕映、のどこも……今言った事ほんとにわかつとるん？」

「そうよ。今回ばかりは私も見過ごせない」

木乃香とアスナが相当厳しい顔で2人とぼーやを睨み付けている。何故こうなったか、だと？ 綾瀬夕映が空気読まずに「魔法を教えたい」とぼーやに頼んだからだ。おまけに、ぼーやも断らずに子供用の杖を取り出した事で、2人の目が厳しくなって……。なお、レイヤと茶々丸は「我関せず」で、刹那は心配そうな目で木乃香を見つめ、残った朝倉と脳筋はその様子を眺めていた。

「ネギ、あんた分かつてる？ 夕映ちゃんも本屋ちゃんも一般人なのよ？」

「そ、それはそうなんですけど……のどこさんとは仮契約しちゃってますし……」

「そんな理由にはならないわ」

確かに、その通りだ。

私の目から見て、宮崎のどこは戦いには向かない性分だ。

そんな人間が魔法を覚える？ 自滅するのが関の山だ。やめておいた方がいいな。……陸斗がいたら殴られてるぞ、ぼーや。

「レイヤちゃんから聞いたけど、こっち側が『危険と冒険に満ちたファンタジーな世界』言うたんやて？」

「そうです。私たちも話し合った上で、そちら側に足を踏み入れよう……」

「……夕映、ええ加減にし。本気で怒るえ？」

な、なんだ……木乃香の身体に黒い魔力のようなものが見えるぞ……

…？

闇の魔法にも見えたが……違うな。よく分からんが、あれに逆らってはいけない……そんな気がする。

「京都での事、忘れたん？ ウチ浚われて危ない目におうて……レイヤちゃんも大怪我したんやで？」

「それは……そうですが」

納得はしていない、か。ふん、好奇心は猫をも殺すと言うがな。

木乃香自身、幼少期から狙われる立場にあっただけに、こちら側の世界の危うさにはすぐ気づいたらしい。

そんな考えを持つてるヤツからしてみれば、綾瀬夕映の言葉は勘に障るのは当たり前だな。

「ネギ、あんたも分かった？ 2人に魔法教えるなんて以ての外よ。そんな事したら今度こそ、オコジヨで強制送還だから」

「う、うう………」

……しかし、このぼーやの事だから、強引に頼まれたら断り切れなというパターンの予感がするな。

ま、そうなったとしても私たちには関係ないんだが。

[Side Out]

〔Side Yue〕

まったく、アスナさんも木乃香さんもあそこまで言う事ないじゃないですか。

確かに……京都での一件は危ないと思いましたし、レイヤさんが死にかけてのも分かっていきます。

それでも！ 私は退屈な日常より、危険な非日常に心惹かれてしまっているのです！

「あゝ、ネギ先生。先生はどうして“立派な魔法使い”を目指してるんですか？」

ふむ、確かに少し気になりますね。

立派な魔法使い……これまでの話を総合するに、ネギ先生のお父様もまたそうだったと聞きます。

やはり、お父様に影響されたのでしょうか？

「……そう、ですね。皆さんにはお話しした方がいいのかもかもしれません」

そうして、ネギ先生は語り出した。

6年前、幼いネギ先生に何があったのかを……。

[Side Out]

[Side Eva]

……なるほど、な。

念のため、ぼーや達を閉じ込めた部屋に監視用の装置を設置しておいたが……。

「あの話は本当か？」

「らしいです」

興味なさそうに答えるレイヤ。

話の内容は、6年前にぼーや達の村が襲われた事の詳細。ぼーやが何故、父親を追うのかという理由。

概要はレイヤから聞いていたが……そういう経緯だったか。

「甘いな」

ピンチになったら父親が駆けつけるだと？ 下らん。

そういった部分を周囲が矯正しないから、今のぼーやの歪んだ思想が生まれる事になったんだ。

「一応、私たちも矯正しようとはしましたよ？」

「そうなのか？」

「ええ。……まあ、無駄だったわけですが」

それはそうだろう。

同年代：それも妹であるレイヤから何を言われても、意地を張って聞かないに決まっている。

スタンとかいうジジイも、割合マシだったようだが……あの言い方ではぼーやもムキになるのは目に見えている。

「そういえば、どうなんだ？ 石化解除の薬の方は」

「……あと少しです。あと少し……」

よく分からんが、京都から封印級の呪いの参考書のようなものを詠春から借りてきたのだという。

それやそれまでの全てを注ぎ込み、格段に完成に近づいたらしいのだが……。

「せめて、あの石化をかけた魔族の……何でもいいんです、サンプルさえあれば、一足飛びに研究が進みます」

「魔族のサンプル、か」

それは難しいだろうな。

爵位級魔族を召喚するには、かなり高度な技術が必要になるし、狙ってその魔族が召喚されるとも限らない。  
ま、地道にやるしかないという事だ。せいぜい頑張れ。

「ええ……………」

[Side Out]

[Side ???]

ふむ……ステルスは万全のようだ。  
なかなか手強い警備体制だが、どうにか潜り込めたか。

「さて、まずは……………」

我々の仕事の目的はあの子達だが……その前に、彼から瓶を取り返

さなくては。

あの瓶に再度封印されてしまったては、話にならない。  
しかし……私としては、彼がどの程度成長したかが気になる。

「楽しみだよ、ネギ君」

あの日から、どれだけ使える少年になったか……。  
この目でじっくりと見定めさせてもらおうという。

## 第40話：悪魔、襲来

〔Side Rikuto〕

「生徒が何者かに連れ去られた!？」

「は、はい」

とりあえず、職員室へ戻ろうかとしていた時、慌てて飛び込んで来た春日と遭遇し、その報告を聞いた。

おいおい、まさか学園長やフェイトが言ってたのってこれなのか？

「それで、連れ去られたのは誰だ？」

「えっと……朝倉にゆえ吉、本屋にあとくーちゃんです」

よりによって魔法バレした4人かよ。

いや、それを狙ってという事か？　だとすると……他に狙われる恐れがあるのがある。

「悪い春日、お前はその事を学園長に報告してくれ！」

「ちよっ……先生!？」

他に狙われそうなのは、アスナに木乃香、刹那辺りか？

そもそも、今挙げた3人を狙うのはともかく、何故最初の4人を浚った？

正直、あの4人には特に秘密などない。共通点といえば、4人とも魔法の存在を知っているくらいだが……。

「……人質、か？」

誰かを脅迫……もとい呼び出すための人質。

呼び出される可能性が高いのは、ネギとレイヤ。これはマズイかもしれない。

そんなとき、懐のケータイが振動する。普段、学校にいる時はマナーにしている。

「もしもし？」

『あ、風峰さん……ですね？』

この声は確か、この前フェイトにかけた時に出た……栞ちゃん、だったか？

『は、はい。フェイト様から連絡をとられたので……』

「何かあったのか？」

『元老院が何をしようとしているのかが判明しました』

それから彼女が告げた内容は……思わず声を上げてしまいそうになる事だった。

くそっ、もつと気を払っていれば……。

「……わかった。情報提供感謝する」

『あの……何かあったんですか？』

「……おそらく、その悪魔と思われる相手に既に4人、連れ去られている」

電話の向こうから、息を呑む声が聞こえた。

もつと早くこの事が分かっていたいけば、何かしらの対策を立てられたかもしれないが……いや、今すべき事は浚われた生徒の救出。

『……すみません、もつと早くお伝えできていけば……』

「いや、気に病む事はない。おかげで今後の対策が立てられる。  
…ありがとう」

そう言って通話を切り、ケータイを懷にしまおうとする。  
しかし、すぐに次の着信が入り、そのまま通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『陸斗さん、アスナが……………』

おいおいおいおい、最悪の状況じゃないか……………！

[Side Out]

[Side Asuna]

ん……………うんは……………？

えっと、何があっただんだけ？

「お目覚めかね、お嬢さん」

目を開けると、そこには見た事のない男の人がいた。

黒コートに黒帽子、髭を生やした……何というか、ダンディなオジサン。誰、この人？

「っ！？」

何か肌寒い。……って、何なのよこの格好！

ちゃんと服を着てたはずなのに、いつの間にかキワドイ下着姿になっている。

とゆーか、何なのよこの下着！ 私こんなの持っていないんだけど！？

「囚われのお姫様がパジャマ姿では、雰囲気が出ないかと思ってね。些か趣向を凝らせてもらったよ」

って、お前が犯人か——っ！！

思わず蹴り飛ばした私は悪くない。てか、脱がしたの誰よ！ アンタなの！？

「い、いや、着替えさせたのは私ではなく、彼女達だよ」

「あ？」

指さす方向に視線を向けると……何だかデフォルメされた女の子が3人いた。

えっと、あれもしかしてスライム……あ、お、思い出した！

寮に戻って部屋にいたんだけど、そしたら窓からスライムが入ってきて、咄嗟に木乃香を庇って……。

「いやいや、まさか身を挺して友人を逃がすとは……なかなか男気の溢れるお姫様だね」

「お、男気……」

何気にショクなんだけど、その言葉。

でも、いったい何者なの？ このエロジジイ。なんか変な術式のペ  
ンダントかけられてるし……。

「アスナ〜！」

「え？」

その声に振り向くと、そこには水球のようなものに閉じ込められた  
夕映ちゃん達がいた。

水球は3つあって、1つにはみんなが、1つには眠っている刹那さ  
ん、そして最後の1つには……。

「な、那波さん！？ なんで……」

「退魔師の少女は危険なので眠ってもらっている。そっちのお嬢さ  
んは成り行きの飛び入りでね」

まあ、刹那さんに意識があつたら、間違いなくあんなのは破られて  
る。

ところで……ところでくーちゃん、なんであんた達、素っ裸なわけ？

「フロにいたところを襲われたアル！」

「いきなり水に引き込まれたら、いきなりここだもん」

「油断したです……」

でも、何でみんながここに……。

私や木乃香なら、狙われるのは分かる。でも、あの4人は何で？

「彼女達は観客だよ。……我々の仕事は『学園の調査』だが、『ネギ・スプリングフィールド、レイヤ・スプリングフィールド並びにカグラザカアスナの3名が今後、どの程度の障害となり得るか』というのも含まれている」

「ッ!？」

私達の調査!？  
いつたい誰が……何のために……。

「まあ……仕事は別として、ネギ君には少々思い入れがあつてね。彼があの日からどの程度使える少年に成長したかは私自身、非常に楽しみだ」

「……………?」

[Side Out]

「Side Leya」

修行を終え、エヴァンジェリンさんの家で少し寛いでいる時、その電話が入った。

電話の相手は木乃香さん。しかもその内容は……………。

「アスナさん達が誘拐された!？」

「うん…………ウチを庇って、それで…………」

くっ、いったい誰が…………修学旅行の事もありましたし、西の一派とは考えにくい。

『そや、陸斗さんに連絡したんやけど、そしたらレイヤちゃんに伝言頼まれたんや』

「伝言、ですか？」

『えっと…………すぐ学園長室まで来て欲しいって。レイヤちゃん、ウチ…………』

「…………わかりました。木乃香さん、寮にいるんですね？ なら出来れば、衣玖さんと一緒にいてください」

1度誘拐に失敗したので、再び手を出してくるとは考えにくいけれど、それでも危険性は残っている。

衣玖さんほどの実力者と一緒になれば、そう簡単には手出ししてこないはず。

通話を終えて、エヴァンジェリンさんに一言告げるとそのまま、私も学園長室に向かった。

…………既に室内には、何人かの魔法先生と木乃香さんと衣玖さん、そして神妙な面持ちの学園長先生が集まっていた。

私が入ったのを見て、風峰先生が口を開く。

「……今回の騒動。狙いはおそらく、ネギ坊主とレイヤだ」

っ！？ やはり……………。

「ネギ君とレイヤちゃん、ですか？」

「ああ。首謀者もだいたい分かっている」

風峰先生の言葉に、面々が色めき立つ。

一同を代表し、ガンドルフィー二先生が尋ねる。

「誰、ですか？」

「元老院だ」

その言葉に、私たちは凍り付いた。

元老院。その単語が示す勢力は私の知り得る限り1つだけ。

メガロメセンブリア元老院。魔法世界のメセンブリーナ連合、北の魔法使い達を牛耳るメガロメセンブリアのトップ。

まさか…………狙いは私やネギで、アスナさん達は人質？

「風呂場で浚われたのは、うちのクラスの生徒4人。朝倉和美、綾瀬夕映、古菲、宮崎のどか…………他にも何人かいなくなってる」

「というところ？」

「桜咲刹那と神楽坂明日菜、そして……………那波千鶴だ」

え？ 千鶴さんも、ですか？

それ以外の人は魔法関係者かその秘密を知っている人ですが……………何故、千鶴さんが？

その疑問を他の人も抱いたらしく、眉をひそめている。

「よく分からないんだが、成り行きで巻き込まれたらしい。……既にネギ坊主が犯人と思われる人物に呼び出されたと、同室の生徒から聞いている」

「同室の生徒って……村上夏美さんですか？」

「ああ」

それは……マズイですね。

夏美さんも千鶴さんも、おそらくですが魔法関係を目の当たりにしたはず。幸い、話の分かる相手だからいいんですけど。と、風峰先生が私の方を向き、口を開く。

「村上から聞いた話だが……レイヤ、お前も呼び出しの対象になっている」

「やはり……」

狙いは私とネギ、ですか。

確かに、狙われる要素は……思いつく限りたくさんありますけど、何でまたこんなタイミングで……。

これまで静かに報告を聞いていた学園長先生が、立ち上がり、真剣な顔で言葉を放つ。

「事態は一刻を争う。誘拐された生徒の救出を最優先とし、直ちに取りかかる事じゃ。なお、他の生徒にも被害が出んとは限らん。守りを固めるのも忘れるん事じゃ」

「……はっ！」「……」

「風峰君、君はすぐに誘拐犯のところへ行き、生徒の救出を頼む」「了解」

風峰先生が身を翻し、学園長室を後にしようとする。

それに私も続く。

「レイヤちゃん、行くのかの？」

「相手の狙いに私も入っている以上、私が行かなくては誘拐された人達の身に何が起こるか分かりません。それに……」

「それに？」

「………見殺しには、したくありませんから」

夕映さんやのどかさんは、自分の意志で“こちら側”に足を踏み入れようとしている。

今回の事はその延長線上で起きた事。だけど、相手の狙いは私にある。

ここで何もしないという選択を取る事も出来るが、それだと私としても寝覚めが悪い。

「………気をつける事じゃ。学園結界をすり抜けてくる以上、相手は相当な実力者じゃからな」

「はい」

そう言うと、学園長室を後にした。

既にネギが向かっているとの事ですが………変な無茶をしていなければいいのですが。

[Side Out]

「Side Negi」

知らない男の人に、アスナさん達が浚われた。  
しかも、目の前で那波さんまで……僕の所為だ。

「見えたで、ネギ！」

「うん！」

今、僕の杖には京都で戦った小太郎君が乗っている。  
何でも、僕らに危険が迫っている事を知って、それを知らせるため  
にこつちへ来てくれたみたいなんだ。

……世界樹前広場のステージ。確かに、アスナさんらしき人達が捕  
まっているのが見える。

「先手必勝だ、兄貴！」

「うん！ ラ・ステル・マ・スキル・マギステル……」

狙うのは、ステージ上の男の人！

アスナさん達には当たらないように……あくまでも、牽制程度に……！

「『魔法の射手・戒めの風矢』!」

無数の風の矢が、男の人目がけて放たれる。

だけど、避ける気配が無い。と、男の人が片手を挙げて……全ての矢が防がれ、うっんかき消された?

何だかアスナさんの胸元が光ったような気がしたけど……。

「皆さん、無事ですか!？」

「『ネギ先生!』!」

「ほう、ようやくご登場か。ネギ・スプリングフィールド君」

思わず身構える僕達。

この人はいったい……。

「なに、私はただ君たちの実力が知りたいだけだ。私を倒す事ができれば、彼女達は無事に帰そう。元より、危害を加えるつもりは無いがね」

確かに……パツと見た感じは紳士的な人みたいだけど……。  
でも油断は出来ない。小太郎君の話だと、かなり強いみたいだし。

(ネギ、俺がアイツらの気を引きつける。その間にさっき渡した瓶を使うんや)

(うん)

小太郎君の言葉に、懐の瓶を握りしめる。

……でもこの瓶、どこかで見た事があるような気がするんだけど……どこでだっけ。

「さあ、来たまえ」

その人の声に、水牢の前にいた3人の女の子が飛びかってくる。何かぐにやぐにやしてるけど、何なのあの子達！？と、そこにアスナさんが僕達の方へ……。

「その子達スライム！ 物理的な攻撃はあんまり効かないから！」  
スライム？ な、なんかイメージと全然違う気が……。確かに、殴ったりしてもそれほど効いてるようには見えない。これはかなり厄介かも。

「ネギ、うまくやりいや！」

小太郎君が影分身で、それぞれ3人に飛びかかる。この隙に僕は、無詠唱呪文を男の人目がけて放つ！

（『魔法の射手・光の一矢』！）

最近練習して、ようやく出来るようになった魔法。だけど、それがかき消された。何かの障壁？ それとも……うつん、それより今は攻撃が最優先だ。それを目くらましにして、一気に接近。そのまま懐の瓶を相手に向ける。

「むっ……」

「僕達の勝ちです。『封魔の瓶』！」

瓶の効力を発動させる呪文を唱える。これで男の人は封印されて、僕達の勝ち……そう思った。

「くっ……あ、あああああああああ……!!」

あ、アスナさん!?

その胸元のペンダントはいい……い、いやそうじゃなくて……呪文がかき消された!?

「……ふむ、放出系の呪文には完璧のようだ」

よくわからないけど、あのペンダントが今の無効化と関係してるみたいけど……。

少なくとも、僕らはそう簡単にこの人には勝てないみたい。それだけは確かだ。

「さて、そろそろ私も本気でやらせてもらおうとしよう。まさか、これで終わりではあるまい? ネギ・スプリングフィールド君」

第41話：昨日までの過去と明日からの未来【前編】（前書き）

なんだかんだで41話……早いものですねえ……。

#### 第41話：昨日までの過去と明日からの未来【前編】

「Side ???」

ふーん、陸斗も頑張ってるみたいだねえ。

ま、本来の物語からは随分外れちゃったらしいけど、ネギ・スプリングフィールドが中心から外れつつあるだけ。

その点はレイヤ・スプリングフィールドが代わりを果たしてるみたいだから、物語が崩壊せずに済んでるんだけど。

カランカラン……

「お、いらつしやい」

玄関に備え付けてあるベルが鳴ったので、そっちの方へ顔を向ける。  
……そろそろ来ると思ってたよ、ゆちる。

「こんにちは。……頼んでおいたものは完成しましたか？」  
「ん、実はまだ」

……ほら、殺気を収束させるのやめてよ。  
だって、アーニヤちゃんとレイヤちゃんだっけ？ その2人に合わせるんだったら、やっぱり2人の特性やらを調べて、それ全部プログラミングする必要があるし。

「しかし、大したものですね。でばいす、というのは」  
「別にボクが全部作ったわけじゃないし」

あくまで、いくつかアイデア組み足してみただけ。

まさかここまで凄いものになるとは思ってたけどね。

「とりあえず、君らが動くのはもう少ししてから。日本行く前に仕上げておくし、安心して修行を続ける事。わかった？」

「……わかりました」

そう言うと、ゆちるは渋々引き上げていった。

これで時間は稼げる。早いとこ完成させないと。

[Side Out]

[Side Other]

戦いは一方的だった。

ヘルマンの攻撃は“重くて速い”。対するネギ達は魔法を封じられ、肉弾戦で相手をするしかない。

しかし、ネギは我流の魔力供給しか出来ず、体術もにわか仕込みの中国拳法。

小太郎も、実戦で鍛えた我流の格闘技を駆使して戦うが、さすがにヘルマン相手では通用しない。

おまけに、アスナのペンダントを外そうとした力モは失敗し、水牢の中に閉じ込められた。……八方塞がりである。

「……やれやれ、この程度かね」

落胆した顔で、そう呟くヘルマン。

両者の實力には天地の差があり、逆立ちしてもそれは埋まるわけではない。

「先ほどの動きはまあまあだったが、どうやら私が手を下す程では無かったようだね。……残念だよ、ネギ君」

しかし、ネギ達は諦めない。

小太郎は脱走してきた身のため、能力の大半は封印されており、“狗神”はおろか“獣化”も封じられている。気までは封印されていないのが唯一の救いだった。

「小太郎君、大丈夫!？」

「アホ! まだいけるわ!」

そう言いながらも、ヘルマンに飛びかかる。

2人の攻撃は確かに鋭い。だが、ヘルマンは軽くそれを捌いていき、カウンター気味に強烈な一撃を小太郎へと叩き込む。攻撃を受けた小太郎は大きく吹き飛ぶ。

「ネギ君、君は本気で戦ってはいないのでは無いかね？」

「なっ……ぼ、僕は本気で戦っています！」  
「そうかね？」

ヘルマンはずっと、戦闘に突入してから何かしらの違和感を感じていた。

ネギからは、戦いの際に感じるはずの独特の興奮を感じない。そう、本気で戦っていないのなら、それに説明が付く。

「君は、なんのために戦うのかな？」

「な、何のため？」

「そうだ。小太郎君を見たまえ、実に楽しそうに戦う」

小太郎が戦う理由は「強くなるため」。

純粹に自分のためだけに戦うからこそ、本気を出せる。

「戦う理由は常に自分だけのものでなければならない。『怒り』『憎しみ』『復讐心』などは特にいい。誰もが全霊で戦える。……或いはもう少し健全な言い方をして、小太郎君のように『強くなる喜び』でもいい」

義務感や責任感が、どれだけの力を与える？

「しなければ」を理由にしても、決して本気になどなれない。

「僕が……僕が戦うのは……！」

「……君が全てを失ったあの雪の夜の記憶から、逃げるためかね？」

6年前の、雪の夜。

ネギは故郷を失い、同郷の者達を失い、父に出会った。……同時に、心に決して消えない傷を負った。

それを持ち出されたネギは、レイヤに指摘された時以上の驚愕でm

その表情を染めた。

「な、なんであなたがそれを……………」

「それは……………こういう事だよ」

ヘルマンは自分の帽子に手をかけ、ゆつくりとそれを下ろす。

そして、それを目の当たりにしたネギは、文字通り凍り付いた。

「はっはっは……………喜んでもらえたかな。いいカオだよ、ネギ君。いやあ、今時『ワシが悪魔じゃー』と出て行っても、若い者には笑われたりしてしまうからねえ」

それはそうだろう。

10年前ならともかく、現代の若者はそれを見ても「特殊メイク」としか思わない。この麻帆良ならば、それは尚更だ。

「あ、あなたは……………」

そこにあつたのは老年の紳士の顔ではなかった。

ネギの脳裏に焼き付いている、6年前の村の光景。自分の前に現れた、あの……………。

「そうだ。君の仇だ、ネギ君」

……………山羊のような角を生やした、あの魔族だった。

「あの日召喚された者達の中でも、ごく僅かに召喚された爵位級の上位悪魔の1人だよ」

召喚されたのは、大半が下級魔族。

だが、中には“石化”を使うほどの上位悪魔が紛れていた。だからこそ、治療が出来ない結論へと至ってしまった。

「君のおじさんやその仲間を石にして、村を壊滅させたのもこの私だ。……あの老魔法使いには全くしてやられたがね」

「……………」  
「どうかね？ 自分のために戦いたくなつたのではないかね？」

その問いに、ネギは答えない。

……………否、答えられる状況では無かった。

怪訝そうな顔になるヘルマンだったが、次の瞬間、懐へと潜り込んだネギによって高く吹き飛ばされていた。

（この力は……………魔力の暴走か！）  
オーバードライブ

ネギの最大魔力は使いこなされていないが、かなりの量を誇る。

時折、それが何らかのきっかけで一気にあふれ出す事がある。そう なつた時の戦闘力はかなり高い。

しかし、それはあくまでも暴走であり、自分の意志で制御されては いない。……………いわば、獣と変わらない。

だからこそ、簡単に攻撃は読まれ、敵の攻撃を躲す事は出来ない。 ヘルマンの一撃を身に受け、地面へ叩き付けられる。

「ぐっ……………」

「素晴らしい才能だが……………それだけでは私には勝てない」

地面に降りたヘルマンは、起き上がろうとするネギの身体を押さえ つける。

殺すつもりは無い。殺せという命令は受けていない。だが……………。

「手足の1本ぐらいは、覚悟してもらおう」  
「!?!」

ヘルマンの口の奥が怪しく輝く。

抑え付けられたネギはもがき、水牢に閉じ込められた夕映達が叫び、小太郎も体制を立て直す。しかし、間に合わない。  
そう、その時だった。

「『漆黒の濃霧』!」

世界樹前広場一帯に、黒い霧が蔓延したのは。  
魔力で出現したそれは、あくまでもただの霧。空気中の水分に干渉し、霧へと変化させて視界を封じるだけの魔法。  
もちろん、視覚だけに頼る戦い方をする者達には効果はあるが、ヘルマンほどの実力者にはそれほど効果は無い。  
……そう、視界を封じる効果は無かった。

「ぬっ!?!」

ヘルマンは咄嗟に腕で防御する姿勢を取った。  
瞬間、強い打撃が腕を通して伝わり、後ろへと吹っ飛ばされた。

「今のは……ネギ君でも小太郎君でもない。何者だ?」

そうしている内に、スライム娘達によって霧が晴れていく。  
彼女達も“水”の属性を持っているため、この程度の事は容易い。  
それにこの魔法はそれほど高度なものでもない。  
そうして霧が晴れ、そこにいた乱入者達の姿が明らかとなった。

「遅くなっちゃい、申し訳ありません」

「ま、半分は自業自得だから、それくらいは勘弁してくれ」

そう言葉を放つ、少女と青年。

その2人の姿を確認し、アスナは思わず声を上げた。

「陸斗！ レイヤちゃん！」

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

何とか、ギリギリだったようですね。

……まあ、本当は魔法無効化が発動した頃から、世界樹の上の方で様子を窺ってたんですけど。

さすがに石化はマズイと思って乱入したんですが……。

「か、風峰先生……………」  
「ん」

風峰先生が、まだ倒れたままのネギを持ち上げると…………。

「そおれっ!!」

「なまるれてるぼっ!？」

小太郎さん目がけて、思いっきり投げ飛ばした。

ま、あのままそこに転がっていられてても、ハッキリ言っただ邪魔ですから。

小太郎さんはどうにか受け止めたので、思わず「チッ」と舌打ちしてしまう。

「……………ネギ君には口止めしておいたはずなんだがね」

「ああ。残念だが、ネギ坊主からは全く連絡は来てない。…………部屋に残ってた子から事情は聞いているが」

全く、の部分を強調して言い放つ風峰先生。…………どうやら、相当お冠のようです。

と、何か思い出したようにネギの方を向き、口を開く。

「ネギ坊主、後で説教だ。覚悟しておけ」

「え……………」

この場合、宣戦布告されたネギがまず行すべきだったのが「他の魔法先生への報告」です。

どうせ「人質の命が惜しければ、1人で来い」のような事を言われたんでしょけど、それも含めて報告はするべきでした。

「僕が先行して時間を稼ぎますから、その間に対策を考えてくださ

い！」という風に。……いや、ダメですね。そういう場面が想像出来ない。

……しかし、まさかストライク……それも直球ド真ん中のが来てくれるとは……。

「爵位級魔族、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン卿とお見受けしました」

「そうだが」

「あなたに、一対一の真剣勝負を所望します」

「………ほう」

ヘルマン卿の私を見る目が、変わった。

私をネギの同類とも思ってたんですか？ 心外ですね。

「あなたが勝った場合、煮ようが焼こうが好きにしてください。ただし私が勝った場合、あなたの生体サンプルをいただきます」

「生体サンプル、というと？」

「まあ、爪でも髪の毛でも構いません。あなたの生体情報が手に入れば、石化解除の研究は飛躍的に発展しますので」

問題は、彼に勝てるかどうか……。

アスナさんの魔法無効化によって、私の魔法のほぼ大半は封じられてしまっている。

ですが、さっきの『漆黒の濃霧』のような“反則魔法”なら、いくつか使えそうなのがある。

（風峰先生、アスナさん達の方をお任せしても？）

（………わかった。無理はするな）

（はい）

軽くそう話し合つと、ヘルマン卿の方へと身構える。

「横やりを入れてしまったようで、申し訳ありません」

「なに、気にする事はない。それに、私の目的は君と戦えば果たされる。問題は無い」

「……そうですね」

足に魔力を込め、瞬動術で一気に距離を詰める。

子供という体格は格段にハンデとなっている。まず、打撃に威力が無い。リーチも短い。そして受けるダメージが大人のそれより大きい。……これは美鈴さんにも指摘された事だ。

見ていた限り、ヘルマン卿の攻撃は“重くて速い”。一撃でも、受けたら命取りになり得る。

……しかし、存在するのはハンデだけでは無い。

「む」

「ハアッ!!」

魔力を込めた蹴りを、ヘルマン卿の脚目がけて叩き込む。

突然の下段攻撃に反応が遅れている。なお、このまま休むつもりはない。

小柄な体格のメリット。それは身軽さと俊敏さ。それを応用し、避けまくるしかない。

「まだまだっ!!」

次々とアクロバティックな動きを繰り返しつつ、拳撃を叩き込んでいく。

攻撃の手を休めれば、その瞬間にカウンターを受ける。相手に反撃のチャンスを与えず、攻めきる！

「なるほど、ネギ君よりは数段マシのようだ。……しかし」

蹴りを防がれ、咄嗟に距離を取る。

ヘルマン卿が構えを取り、右手を振り抜く。……あれはマズイ。

「『悪魔パンチ』!!」

「っ！ 封印解除！」

迫る強大な魔力の塊に、私は切り札の1つを切った。

予め詠唱し、発動を凍結しておいた“遅延呪文”の一種。1つめの効果は転移魔法。……また短距離しか転移できませんが。

「ファイ・ニリア・エル・レア・ファイールア！ 轟く雷鳴、素は天意なり！」

「……………む！」

私が何をしたか気づいたようですね、ですが遅い。

この位置なら直撃できる！

「『不和の雷』！」

空が光り、

この呪文がどういうものか気づき、ヘルマン卿が防御を固める。

「くううっ!!」

雷の直撃を受けて、その身体からは焦げたような臭いが漂う。いくら爵位級とはいえども、さすがに効いたでしょう？

「……なかなかやるねえ。しかし、聞いた事のない呪文だったか？」  
「当然です、私の作った魔法ですから」

今の魔法は「ただの落雷」。

精霊の力で天候に干渉し、雷を発生させて落とす……それだけ。天気が雨だったのも幸いしました。それほど魔力使ってませんし。

「ほう……魔力で構築するのではなく、魔力で発生した効果をぶつけたのか」

「ええ」

魔力を容赦なしにシャットアウトするのなら、これしかありませんし。

……でも、このアイデアどこから来たんですって？ 魔法無効化能力者なんて、数えるほどしかありませんし、そもそも何で作ったんですって……？

——それは、牢が解けかけたから

「え」

「隙あり」

突然響いたその声に気を取られ、ヘルマン卿の一撃から意識をハズしてしまった。

どうにか身を捻って直撃だけは免れましたが……くっ、今のは、かなり……！！

「戦場で気を抜く事は、命を失う事に繋がりがねない。……油断禁

物だよ、レイヤ君」

「しまっ……」

咄嗟に風障壁を展開……ダメ、回避も防御も間に合わないっ……！

「『悪魔チヨップ』！」

広範囲を薙ぎ払う、その攻撃を身に受けて、地面に叩き付けられる。  
……ぐ、ネギ達はこんなのをぽんぽん受けてたわけですか……すぐに立ち上がれないはずです……！

「殺しはしない。しかし……真剣勝負だからね、それ相応のリスクは背負ってもらうでしょう」

動け……動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け！

ここで立てなくちゃ、全てが終わっちゃうんです！

ヘルマン卿に勝てなければ、石化も解けないし、兄さんの事も何も

………！

——ほら、簡単よ

え？

——内なる力に身を任せるだけでいい。そうすれば……なんだって出来る

あなた…… いったい、何なんですか！

私の中に語りかけてきて、いったい…… いったい誰なんですか！

—— 私が誰かって？ 私はね…… 女神様よ

その人物がどんなカオをしてるのか分からない。

けれど、彼女はきつとその瞬間、ニイツと嗤ったはずだ。  
どちらにせよ、私の意識は文字通り、闇に呑み込まれた。

## 第42話：昨日までの過去と明日からの未来【後編】

「Side Leiya」

……旧い、旧い夢を見た。

記憶の中の私たちに親はいなかった。お決まりの事故死に、親戚からはたらい回し、挙げ句施設入り……。

私は、まあ……兄さんがいれば、どこでだってよかった。兄さんと一緒なら、地獄でも耐えられた。

兄さんは強くて、賢くて、優しくて……私にとって、自慢の兄さんだ。

友達からも「ブラコン」と呼ばれたけど、それは当たり前だと自覚している。なぜなら私は兄さんLOVEだから！

「という事があつたんですが、どう思います？ 兄さん」

「……そーゆーは実の兄に言う事じゃないだろう」

呆れ顔でそう答える兄さん。

だって、私が兄さんLOVEなのは宇宙の真理なんですから！

「まったく……お前、もうすぐ高校卒業だろ？ いい加減に兄離れしろ」

「いいじゃないですか。あ、そうそう。明日はちょっと付き合ってください」

「……どこへだ？」

どこへ、ですって？

そんなの決まっています！ 明日はアニ。イトで「とある」のキャンペーンがあるんです！

それで買い物してから、「超・電王」見に行くんです。超クライマックスフォームってカッコイイじゃないですか！ NEW電王ベガフォームも気になりますし。

せっかく頑張ってお金貯めてきたんですし、使う時にはしっかりと使わないと！

「だから？」

「荷物持ちお願いします」

につこり微笑んでそう言うと、げんなりされた。何故？ WHY？

「そーゆーのは彼氏に頼め」

「そんなのいりません。兄さんがいますし」

「…………ま、いいけどさ」

…………そう、私は幸せだった。

でも、これが夢幻のように消えてしまったのはどうしてだったわけ？  
それを思い出す前に、私は再び闇へと呑み込まれた。

[Side Out]

「Side Rikuto」

「ほいつ、と」

アスナの胸元のペンダントを引きちぎり、腕を拘束していたスライムっぽいものも引きちぎる。

打撃の効果の薄いスライム娘はちょっと手こずったが、強敵と呼ぶほどでは無かった。

「大丈夫か？ アスナ」

「と、とりあえず上着貸してくんない？」

……あゝ、天気雨だしなあ。そんな格好でいたら風邪引いちゃうか。咸卦法には保温効果があるが、あまり人前では使いたくないだろうし。とりあえずほれ。

「ありがとう」

「さて、今度はこっちなんだが……」

じと、と綾瀬達が閉じ込められてる水牢を見る。

だいたい流れは把握してるし、コイツらがどどういう事をしたのかは分かる。

懇願するような視線を向けてくる綾瀬達はほつといて、まずは那波の閉じ込められた左の水牢へと向かい、破る。

……ふむ、眠ってるだけか。怪我もしてないみたいだし、これなら大丈夫だ。

「さて次は……」

「か、風峰先生！ 助けてくださいー！」

「……『ファンタジーな世界』に来たかったんだろ？ しばらくそこで味わっとけ」

無視だ、無視。次は刹那の水牢を破る。

しかし……コイツもどうかと思うんだがな。いくら寮の中とはいえ、こんなのに捕まるなんて……油断しすぎだ。

まあ、衣玖も寮内に気を配ってなかったみたいだし……後でお仕置きだな。

「……ん？」

魔力の流れが変わった。

なんだ、この禍々しいほどの魔力は………！

「な、何よあれ！？」

「なっ………！？」

それは倒れたレイヤからあふれ出している、黒いもやのようなものだった。

おいおいおい、何だよこの禍々しさは……フランドール 悪魔の妹や西行妖並みじゃないか。バケモノ桜

「……ほう、それが君の力か」

ヘルマンは楽しげに笑ってるし……いや、あれなんなんだよ。  
少なくとも、俺の１０００年近い記憶の中にはあんなのは無かった。  
なんなのさ、あれー！

俺達が戸惑っている中でも、それは止まらない。黒いもやはレイヤの身体を包み込んでいき、獣じみた姿へと変化していく。

王家の魔力か？ いや、あんな禍々しくは無いはず。……嫌な予感

「才才才才才才才才才才才才才才才才才才  
才才才！！！！」

それは、高く咆哮を上げた。

既にレイヤは人の姿をしていない。四肢には鋭利な爪が生え、は虫類っぽい尻尾が伸びている。

「ちょ、ちよつとマズインじゃないの、アレ!？」

「確かにマズそうだが……」

俺達が出したら、余計にマズイ事になりそうな気がする。  
いや、そんな事を言っている間に戦闘が……。

「は、速ッ！」

レイヤはこれまでとは全く違う動きでヘルマンを翻弄し、全ての攻撃を回避していく。

獣じみた姿だけじゃなく、完全に獣じみた反応速度だろ、あれ。なんかやばい薬とかやってなかったはずだが……。

そうしている内に、ヘルマンにこれまで以上の魔力が集まる。……

本気の一撃か。あれは俺でもかなり痛いぞ。

「『悪魔ナツクル』!!」

直射系大魔法にも匹敵しかねないその一撃を、レイヤは避けることなく……。

「ガアアアアアアツ!!」

たったそれだけ。その咆哮だけで、かき消した。

さすがにそれには俺達の驚いた。いや、1番驚いてたのはヘルマンだったが……。

だが、それが命取りとなった。一瞬で接敵したレイヤの一撃を身に受け、地面に叩き付けられた。

「……そうか、その力の波動……そういう事か」

おい、何勝手に自己完結してるんだよ。知ってるんなら教えろ。

しかし、そうしている間に、レイヤの前方に高密度の魔力が収束していく。

これは……レイヤだけでなく、大気中の魔力を全てつぎ込んだ攻撃……いわば、収束砲撃……。

「あ、あれ完全にヤバイって!」

「そ、そうみたいだな……」

あんなの受けたら、「痛い」じゃ済まない。いや、そもそも麻帆良壊滅のお知らせ?

ヘルマンもそれに気づいたらしく、すぐに高く跳躍する。

そして、それが放たれた。ヘルマンはそれに呑み込まれて………これこの位置だと余波でも完全にヤバイ! とにかく結果!

「に、「二重結界」!!」

[Side Out]

[Side Konoe mon]

わしらが忙しく動き回っておる時じゃった。

その禍々しい魔力の奔流が、天を貫いたのは。

「な、なんじゃあれは……!!」

いや、学園結界もぶち抜いておるが……恐ろしい威力じゃな。

しかし、いったい何者じゃ？ 学園に入り込んだ悪魔？ いや、これほどの力を持っていれば、間違いなく感知されておるはず……。

風峰君というのも考えにくい。彼は滅多な事で本気を出すはずもな

いし、彼の力は魔力では無い。となると…………。

（まさか、レイヤちゃんかの？ 嫌な予感しかせんが…………）

禍々しさといい、これだけの質といい、エヴァの“マギア・エレベア闇の魔法”に酷似してある。

……エヴァのヤツ、レイヤちゃんにいったい何を教え込んだのじゃ？

[Side Out]

[Side Rikuto]

つつ……二重結界でも完全に防ぎ切れなかったか。これなら「多重結界」にしとくんだった。

咄嗟に妖力流して、壁作ったからアスナ達は無事だと思っが…………。

「無事か、アスナ」

「何とか……アンタこそ、腕大丈夫？」

「腕？」

なんかすつごい微妙な目で見られた。

……ああ、ボロボロになってるな。血だらけだし、骨なんて露出してるし……通りで痛いはずだ。

とりあえず超速再生、っと。

「これくらいなら問題無い。……しかし、俺の結界を抜けてくるとは……」

僅かにだが、王家の魔力が混じってた。あれで無効化されたい。それにしてもあんなのが出てくるとは……恐ろしい才能の塊だな、レイヤは。

そういえば、レイヤは……？

「あ、あそこアル！」

古菲の指摘に視線を向けると、獣じみた姿のまま何かを持ち上げている。

それは片腕を失い、半死半生のヘルマンの姿だった。

「ふふふ……素晴らしい」

おい、まさかレイヤのヤツ……トドメを刺すつもりか？

相手は爵位級の上位悪魔。確かにさっきの砲撃クラスの攻撃なら、完全に討ち滅ぼす事も可能かもしれない。

……いや、あれは止めないとマズイ！ このままだと、レイヤの目的は達成されない！ それ以前に……。

「よかるう、その“闇”、我が身を以て受けるでしょう！ トドメを刺したまえ！」

「よ、よせレイヤ!!」

レイヤの右腕に魔力が収束し、超低温で構築された剣が出現する。くっ、ここからだ……ダメだ、間に合わない！

「レイヤ————!!」

[Side Out]

[Side Leiya]

……はて、ここはどこでしょうか？

そもそも私はヘルマン卿と戦っていたはず……途中でキツイ一撃を

受けてからの記憶が無いんですが。

「あら、思ったより早くこっちに来たんですか」

え？ どちら様ですか？

声するけど姿は見えず……うーん、少なくとも悪意のある声では無いようですが。

「ああ、見えてないんですね。……ま、今の貴女なら無理ないですよ」

「あの……どちら様ですか？」

「それは今関係ないし、省かせてもらいます」

なんか、聞き覚えのあるような声なんですよね……。

「私の予定だと、麻帆良祭の中盤辺りに来ると思っていました……意外ですね。やっぱりあの腐れド外道女神の干渉があったからでしょうか」

「く、腐れド外道女神……？」

「とりあえず、あれの干渉は私がシャットアウトしておくので、安心していいですよ。それより……」

妙に真剣な空気に切り替わりましたね。

「あなたもいい加減、自分の立ち位置というものを自覚した方がいいですよ」

「は？」

「あれだけ側にいるのに手を出さないなんて……羨まし過ぎます！ 私だって、兄さんとイチャラブしたいんです〜！」

……えっと、これどう答えればいいんですか？  
妙になる単語もいくつか聞こえてきましたし……。

「とにかく、力の方も私が抑え込んでおくので、さっさと戻ってください。私に会った記憶も封じておきますから」

「え、どうしてですか？」

「……本来なら私は、ここで出てきちゃいけない存在なんです。今回は非常事態なので、あなたを無理矢理こっちに呼び出しましたけど」

「は、はあ………」

「じゃ、またお会いしましょう。………兄さんによろしく願いますね、私<sup>レイヤ</sup>」

[Side Out]

[Side Asuna]

「……………あ、う」

「レイヤ！ 気がついたか!？」

陸斗の腕に抱かれたレイヤちゃんが、うめき声を上げた。

ふう……………これでひとまず安心ね。一時はどうなるかと思ったけど。

「あ……………こ、ここは……………?」

「世界樹前広場のステージ。覚えてないのか?」

あのヘルマンとかいうオジサンと戦ってて、なんかいきなり暴走したと思ったら苦しみだして、それで元に戻ったと思ったら倒れちゃって……………。

なお、レイヤちゃんの最後の一撃だけど……………正直、かなり危なかった。あの横槍が入らなかつたら、間違いなくトドメを刺していた。それでその横槍というのが……………。

「かなりヤバイと思って手加減無しで狙撃したんだが、大丈夫だったか?」

「いや、おかげで助かった。わざわざすまない」

学園長から連絡を受けたっていう龍宮さんが、すぐに世界樹の上に潜んでいて、狙撃できるポジションにいた。

あの暴走でトドメを刺しそうになった時、レイヤちゃんの腕を狙撃し、攻撃をそらさせる事に成功したって事。……………その後で苦しみましたから、相当焦ってたみたいだけど。

「それで、残る問題は……………」

陸斗の視線が、ステージの方を向く。

そこには片腕を失ったままのヘルマンと、スライム3人娘が特殊な鎖で縛られていた。

「で、まだやるのか？」

「……いや、私の仕事は終わったし、こちら君たちを敵に回してまで戦うつもりもない。私の負けだ」

「じゃ、ちよつと失礼……つと」

ぷつん、とヘルマンの髪の毛を1本抜く。わ、痛そう。

レイヤちゃんの言ってた、石化解除のための手がかりだったわけ？

「アスナ、アーティファクト貸してくれ。こいつら送り返すから」

「あ、うん」

「ちよつと待ってください」

と、レイヤちゃんがよろめきながらも立ち上がる。

崩れかけたのを龍宮さんに支えてもらい、そのままヘルマンの方へと近寄る。

「1つだけ……教えて欲しい事があります」

「内容にもよるが、何だね？」

「6年前の事件、あなた達を喚び出したのは誰ですか？」

……そつか、6年前の……ネギとレイヤちゃんが故郷を失った事件。村人を石化させて、村を壊滅させたのはこの人だけど、6年前のこの人達を召喚した黒幕がいるはず。

「……分からない。我々に下されたのはただ1つ……『どんな手を使ってでも、英雄の子供達を始末しろ』だった」

「……」

ちよつと、それじゃあ村が襲われた理由ってまさか……！

「……やはり狙いは、私たちでしたか………！」

「そんな………」

悔しげに唇を噛み締めるレイヤちゃんに、呆然となるネギ。

じゃあ、村人が石化された理由って…… 2人を守るために戦ったから？

「レイヤ君、瓶を使わないのかな？」

「瓶？」

「ネギ君が持つている瓶だ。このままだと、私は風峰氏によって魔界へと送り返される。……復讐を遂げる機会には巡ってこないかもしれないぞ？」

つまり、瓶による封印。

前に聞いた事があるけど、上位魔族は特定の高位魔法で無ければ討ち滅ばせないらしい。

その呪文をレイヤちゃんは覚えてるかもしれないけど、それだけ疲弊した状態じゃ使えるかどうかも分からない。

だけど、レイヤちゃんはちよつと呆れた顔でため息をつく。

「……別に、私は魔族に復讐したいわけじゃないですし」

「ほう？」

「あなた個人に恨みが無いって言ったら嘘になりますけど、それは解除に手間のかかる石化を行使してくれたって事くらいでしょうかね」

あ、そ、そこなんだ……。

その発言に、陸斗だけでなく龍宮さんも呆氣にとられてる。

「それに、あなたの証言で黒幕の目星もつきましたから。英雄<sup>私</sup>の子供達を消そうとするほど邪魔だと思っ勢力は、限られますし」

「ふ……ふふふふ、随分と変わった子だね、君は」

「そうですか？ 至って普通の10歳の女の子ですよ、私は」

いや、明らかに普通じゃないし。

「……こう才能豊かな者達を見ると、心躍るものだ。いつかまた、君が成長した姿を見る事を楽しみに取っておくでしょう」

「私としては、もう会いたくないですけど」

### 第43話：とある大妖怪と竜宮の遭いの日常（前書き）

今回はいつもよりも糖分が増し増しかもしれません。ご注意ください。  
い。

あと、ちょっとしたアンケートをしたいので、後書きをご確認ください。  
さい。協力を待っています。

### 第43話：とある大妖怪と竜宮の遣いの日常

〔Side Rikuto〕

学園長への報告やらを終えて、女子寮の衣玖の部屋にお邪魔して、色々とお仕置きをした。

……うん、まあ色々だよ？ 主に女子寮に侵入された挙げ句、生徒を誘拐された事について。

どんなお仕置きとか、どうなったとかは聞くな。

「それで……どうなったんですか？」

息も絶え絶えで赤い顔のまま、衣玖がそう尋ねてくる。

形のいい大きめの胸が自己主張しており、思わず手を伸ばしたくなる。

「そうだな……まずネギ坊主だが、学園長や他の魔法先生から相当絞られた」

終わった後で改めて、ネギ坊主から詳しい事を聞いたんだが……再び、頭が痛くなったのは言うまでもない。

たまたま女子寮へ来ていた際、妙な気配を感じて様子を見に行くと、那波が浚われる場面に遭遇した。

その時に「仲間の身を案じるなら、助けを請うのは控えるのが賢明だね」と言われたらしく、そのまま小太郎と共に指定された場所まで飛んでいった……と。

……話し終えると、衣玖も何だか微妙な顔になっていた。ああ、気持ちは分かる。

「……しかし、ネギ少年はどうも、自分だけで全てを解決しようとする傾向が見られますね」

「よく言えば責任感が強い。悪く言えば、自分だけで解決できると思っ込んでいる。……どちらにせよ、いい傾向じゃない」

この場合、ネギ坊主がやるべきだったのは、俺なり学園長なりへの報告だ。

「助けを呼ぶな」とは言われたが、「報告するな」と言われたわけではないし、その部分も含めてしっかり説明すれば、それ相応の対策も立てられた。

もちろん、ネギ坊主だけの責任ではない。ヘルマンやスライム達の侵入に気づけなかった俺たち学園側にも落ち度はある。

だから嚴重注意というだけで、それほど重い処分も下されなかった。

……ある意味、責任は半々だからな。

「レイヤさんは大丈夫だったんですか？ 話を聞く限り、危ない状態になったそうですが……」

よく分からんが、エヴァがそれを封印したとかどうとか。

「まだ早すぎる」とか意味深な事をぶつぶつ言ってたんだが……俺にも分からん。

少なくとも封印を施したのだから、それほど問題は無いはず。

「綾瀬達もこれで落ち着いてくれればいいんだが……」

今回は本気で怖い目に遭ったんだから、さすがに踏みとどまるだろ。

……これでさらにのめり込むようになったら、本気でどうしよう。

魔法先生集めて職員会議モノかも。

「……………」

ん？ どうしたのさ、なんか不満そうな顔してるけど。

「何でもありません」

ぷいつ、とそっぽ向く衣玖。

正直それされても、可愛いだけなんだが。

……あ、もしかして俺が生徒の事ばかり構ってるから、ヤキモチ妬いてる？

「ち、違います！」

「顔真つ赤にして反論しても信憑性は皆無だぞ」

「うゝ……………」

うゝ、って……レミリアじゃあるまいし。

そつと頭に手を伸ばし、撫でる。……こうしていると、昔を思い出すな。

「悪いな、あんまり構ってやれなくて」

「……あなたがそう言う人だって事は、結婚する前から分かってました」

それはさすがに否定出来ない……。

……俺もあの頃は、瑪瑙の事とかゆちるの事とかで、踏ん切りが付かずにいた時期だったからな。

散々泣かせて、散々困らせて、散々迷惑かけて……でも、その上で俺を愛すると言ってくれた。

「ありがとな。……愛してる」

「は、反則です！ そのタイミングで言うなんて……んっ！」

頬に手を寄せ、強引にキスする。

反則結構。これまで反則しまくって生き残ってきたんでね。

「何かご希望は？」

「う……や、優しくしてください」

……まあ、色々あるんだよ、大人の世界には。ここから先はR - 1  
8の世界だ。

とりあえず、翌日起きたばかりの時は足腰立たなかったとだけ言っておく。

[Side Out]

[Side Leiya]

あの騒動の翌日、私は千鶴さんと夏美さんを伴い、学園長室を訪れていた。

と言うのも、2人は昨日のあれこれで当事者（千鶴さんは普通に誘拐された）になってしまったので、その事も含めての説明が行われる。

学園長室には既に、風峰先生とせずな先生が来ており、私たちが到着すると説明が始まった。

「……………というわけだ」

「魔法、ですか……………」

さすがに夏美さんは混乱しているようだけれど、千鶴さんはどこか納得したような顔をしている。

どこか大人びた人だとは思ってましたが……………ここまでとは。

「それで君たちの今後なんじゃが……………2つの選択肢がある」

「どういったものですか？」

「うむ。魔法の事を今後黙っているというのであれば、特に処置をする事はないが……………もしも口外するのであれば、記憶を消す事もやむを得ん」

記憶を消すと言われ、露骨に怯える夏美さん。そのまま千鶴さんの後ろへ隠れてしまう。

ま、普通ならこういう反応ですよね。妙に落ち着いている千鶴さんが凄いと思いますし。

「もちろん、昨日の事件で怖いと感じているならば、魔法の事を忘れさせる事も可能だ。……………どうする？」

「その前の1つお聞きしたいのですが……………小太郎君は？」

あゝ……そっちの問題もあつたんでしたよね。

小太郎さんの立場は「西の本山から脱走してきた」身。昨日の事で恩赦が出て、向こうへ戻される事も無くなつたんですが……。そつえば、今後どうするんでしょうか？

「しばらくは、麻帆良で面倒見る形になるかな。とはいえ面倒見る場所は決まってるないが」

「では、記憶は消さない方向でお願いします」

「……いいのか？」

「はい。魔法の事を忘れるとなると、小太郎君の事も忘れる事になるでしょう？」

……まあ、確かにそうなっちゃいますね。

話によると、怪我をしていた小太郎さん（拾った時は子犬だった）を助け、手当てをしていたそうですし……何かと思うところがあるんでしょう。

とりあえず、夏美さんも相当迷つてたようですが、記憶を消さない事にし、魔法の事に関する簡単な説明もして、その上で学園長室を退出していった。

……なお、私やネギの事も説明したら、ネギの下りで何故か納得されました。この反応は明らかにダメでしょう？

「……それでレイヤちゃん、身体の方はもういいのかの？」

「ええ、エヴァンジェリンさんにしっかり治療してもらいましたから」

私もよく覚えてないんですけど……なんか、すっごい獣じみた姿に変身して無双したそうです。

それで、その後でエヴァンジェリンさんが私の身体を治療してくれたらしいんですが、詳しくはよく分かりません。

……ただ、すつごく驚いてたような気がしましたが……。……。

[Side Out]

[Side ???]

うーん……… とりあえず企画案はこれでよし、と。

アーニャちゃんのは杖型アームド。レイヤちゃんが手甲型アームド  
ガントレット

で決まりかな。

ゆちるの話だと、二人とも“魔法戦士”みたいだし。

「あー、名前も考えなくちゃならないか」

あと大まかなデザインも。

だいたいはどうするか決まってるけど、やっぱり自分だけでやるとヤバいからね。

そっちの方は、近い内に里帰りしてあの子に頼もうかな。

だけど、問題はA Iだね。A Iを稼働可能にまで構築させるには、どうしても年単位の作業にはなるし……。

ゆちるのようなストレージならともかく、インテリだったりアームドだったらやっぱA Iは不可欠になるからな。

「……ここはやっぱり、アレしかないかな」

うん、試したことはないけど、やっぱりアレしかない。

残る問題は誰にするかだね。……とりあえず、ゆちるに頼んでそれとなくアーニヤちゃんの人格検査してもらわないと。

……ところで、僕の名前っていつ出てくるんだろ。

[Side Out]

[Side Other]

一方のネギだが……相当落ち込んでいた。

先の爵位級魔族、ヘルマン卿によって自身の心の奥底を見透かされた挙げ句、叩きのめされた事も原因の1つではある。

しかしそれ以上に、守るべき一般生徒を危険にさらした事を指摘され、注意を受けた事が大きかった。

『ネギ君。いくら生徒が人質に取られているからといって、僕らに何の説明も無しに飛び込んでいくのはただ無鉄砲なだけだよ。裏を返せば僕らが信頼されていないという事にもなるし、それはさすがにショックだ』

『僕も同意見じゃ。自分だけで全てを解決しようとせず、少しは僕らを……周りの大人を頼る術を身につけるべきじゃよ？』

タカミチや学園長に、やんわりとだがそう叱られた。

魔法先生としての問題点であったために処罰こそされなかったが、それでもネギの心には深い傷が残った。

それは叱られた事の無いネギにとって、ショックは大きかった。それ以上に……。

「僕は……間違った事はしてないのに」

自分は間違っていない。そう思い込む事で、少しでも自分の受けた傷を軽くしようとしていた。

今回の事も「助けを求めるな」と言われたから、魔法先生には知らせずに自分だけ（厳密には小太郎もだが）で指定された場所へ向かった。

間違った事はしていない。助けを求めたら、生徒は殺されていたかもしれないのに。なのに、何故叱られなくてはならない？

「僕は、間違つてない」

しかし、いい意味でも悪い意味でも、彼は10歳の子供だった。言葉の穴を突くという裏技を行うを思いつかないほど、彼の思考には柔軟さが欠けており、それ故に彼の想いは歪んでいく。

陸斗はネギを「歪んでいる」と評したが、最早それだけは済まないレベルにまで進行しようとしている。

周囲がその事に気づいた時、既に事態は取り返しの付かないところにまで行き着いているのだが……それはまだ先の話であった。

[Side Out]

[Side In]

「怪物？」

寮の掃除をしていたら、聞き込みから帰ってきた文さんがそんな事を言い出した。

何でもここ最近、麻帆良に怪物が出現しているのだとか。外から入り込んだ妖怪じゃないんですか？

「いえいえ、どうやら人間が怪物に変身しているような話なんです……詳しい事は私にも」

「人間が？ ……小太郎少年や慧音さんのような存在でしょうか？」

上白沢慧音さんは、半分人間で半分妖怪の血を引くワーハクタク。普段は人間と変わらないのだが、満月の夜だけは部分的に獣化する。そして「歴史を作る程度の能力」を得る。  
彼女のような半妖は、限定的にはあるものの、妖怪の力を使う事が出来、姿もそれに近くなる事がある。

「うーん、それも考えにくいんですよ」

「何故ですか？」

「そういつた存在は、麻帆良の中でもかなり限られている。それにその全ては麻帆良が存在を把握してるんです。何だかんだで裏の関係者らしいですからね」

まあ、確かに……。

半分人外の血を引いているなら、まず完全な一般人である事は考えにくい。

魔法生徒か魔法先生としての所属。……そうでなくとも、麻帆良から何かしらの監視を受けていてもおかしくはない。

……ところで、どうやって麻帆良の情報をそこまで手に入れたんですか？

「あ、いえ。ちょっと弟子に出会いましたね」

「弟子？」

ゆちるさんに引き続き、あなたも？ いや、それは構いませんよ。で、どんな弟子ですか？ 妖術を教えるとは考えにくいですし、やっぱり……。

「麻帆良学園の女子生徒で、私と同じ臭いをしている子です」

「…… やっぱりそうですか。あまり変な事教えてないでしょうね？」

「情報収集のやり方をちよくちよく教えつつ、危機回避方法や処世術を仕込んでるだけです」

それが変な事なんです。

確かに、この人のそういった技術は凄いとは思いますが、でも、人間に教えるものじゃないと思いますが……。

…… 麻帆良に、射命丸2号が生まれなければいいんですが。

「それはそれとして、ちょっとお聞きしたいんですが……」

いつもよりもにやにやした様子で近づいてくる。

…… 嫌な予感しかしませんね。何を聞きたいんですか？

「いえ、大した事じゃありませんよ。…… ただ、夫婦の夜の営みについて」

何も言わずに、速攻でちよつと強めに羽衣を巻き付け、持ち上げる。

このまま締め上げてもいいですし、電気を流してもいいんですが、確認させてください。

…… あなた、覗いてましたね？

「な、何の話でせう？」

「あなたがそう言った事を聞きに来るのは大抵事後確認くらいです。正直に答えてください。遺言くらいは聞いてあげます」

「死亡確定ッ!？」

当たり前じゃないですか。何を戯けた事を言っているんです？

「さ、」

「えっと……私、これまで天子さんがMで衣玖さんがSだと思ってたんですが、まさか衣玖さんもMだったなんて……」

「死になさいッ!！」

最後まで言わずに電撃を流し込む。

ばりばりばりばり……。

10秒後、そこには真っ黒焦げになったパパラッチ天狗が……とりあえず、ほっときましょう。どうせその内復活するでしょうし。

それにしても、なんて事言っんですか！確かに天子様は自他共に認めるDMですが（Mじゃないわよ!!）、私は……まあ、陸斗の前限定という事で……。

#### 第43話：とある大妖怪と竜宮の遣いの日常（後書き）

えっと、久しぶりにアンケートです。

といっても、前回のようになんてそれほど大きいものじゃありません。

Q ・閻魔様といえばどっち？

A ・あくまでも原作に遵守。背は高めの大人数なお姉さん

B ・二次創作のロリザナドゥ。低身長のロリ幼女

#### 第44話：幽鬼、来る（前書き）

アンケートにご協力いただき、ありがとうございます。

どうやらAが優勢のようなので、そっちの意見を参考にさせていただきます。

#### 第44話：幽鬼、来る

〔Side Eishun〕

犬上小太郎君が本山の懲罰房から脱走した時は、どうなる事かと思  
ったが……。

ネギ君やレイヤ君に迫る危険から守るため、という事が分かり、今  
回の事を恩赦として彼の処罰は無しとなった。

彼も月詠君と同じく雇われた身なので、それほど重い罪にはならな  
かっただろうが。

「とはいえ、彼に逃げられた事はどうかと思うよ？」

「……肝に銘じておこう」

現在、私のところへは客人が来ている。

風峰殿から予め事情は聞いていたので、それほど驚かずに済んだ  
のだが……。

「まさか、こうやって君と向かい合う事になるとは……思っていな  
かったよ」

「それは僕の台詞だよ。20年前は殺し合いをした仲だからね」

フェイト・アーウェルックス。

書類によると、イスタンブールから派遣されてきた事になっている。  
……間違いなくこれは偽造。

何より、私はこの少年と20年前に面識がある。その時は敵同士だ  
ったわけなのだが。

「それで、今日ここへ来た目的は？」

「元老院が動き出した。……その事についての注意にね」

元老院……か。

20年前の大戦で、彼ら“完全なる世界”にも荷担していたと思われたが、かつてナギが掴んだ証拠も葬り去られ、真相は闇の中。

アリカ女王も彼らの罠にかかり、“災厄の女王”という名でタブーの権化とも形容されるようになってしまった。

彼らが動き出した、という事は……なるほど。

「西の総本山にも何らかの形で干渉してくる可能性がある、と？」

「可能性の話だよ。注意があるのと無いのでは違うだろう？」

「……違うない」

そう言い、ふつと苦笑を漏らす。

先の事件で分かるように、関西呪術協会は決して一枚岩では無い。重鎮の1人が元老院の手先である可能性も、完全に否定する事は出来ない。……あり得ないなんてあり得ない、風峰殿もよく言っていた。

「近いうちにでも、洗い出す事にしよう。幸いそういった事に強いのが何人か……」

「長！ 一大事です！」

どたどたと、こちらへ近づいてくる足音が聞こえる。

落ち着きなさい。……ああ、ふすまはまだ開けないように。

フェイト君に目配せしてから立ち上がると、自分からふすまを開ける。

「……何があつた？」

「懲罰房の天ヶ崎千草が、姿を消しました！」

[Side Out]

[Side Eva]

レイヤの血には痕跡無し……か。  
ふむ……少なくとも、誰かに操られていたという線は薄いが……。

「じゃが、理由も無しに“闇の魔法”が暴走するというのもあり得んじやろう?」

「確かにな。……間違いないのか?」

「肌で感じ取ったからの。それに風峰君達を目撃証言もある。……ほぼ間違いないじやろうな」

まあ、私もあれの波動は感じていたし、間違いという可能性は無い。しかし、それだと少しおかしい点が出てくるんだよ。

「どういう事じゃ？」

「簡単だ。私はまだ、レイヤに“闇の魔法”を運用するための訓練は課していないんだ。ついでに言えば、存在についても話していない」

“闇の魔法”は私の固有技能。私のように、人外が存在が運用する事を前提に開発した。

人間が使えばどうなるかは分からん。力に耐えきれずに死ぬか、それとも……。

そもそも、かつての私のように“器”が無ければ使うどころか、習得も出来ん。

「じゃあ、何故レイヤちゃんは……」

「分からん。他者から操られたという線も捨てきれんし、こうやって調べていたんだが……」

レイヤの血を改めて採取し、いくつか検査してみた。

だが、精神操作などの干渉を受けた痕跡は見あたらなかった。これ以上調べるためにはレイヤの脳内に踏みいらないが……。

「とにかく原因が分からない以上、再びそういった事が起こりかねん。もし、そうなった時は……」

「そうなった時は？」

「止める。何をしてでも、だ」

もしも、再び暴走状態に陥り、万が一その状態で他者を傷つけるような事があれば……最悪、レイヤの精神は完全に闇に囚われる。そうでなくとも、身体は闇に食い尽くされる可能性もある。

原因が分かるまでは、魔法生徒としての任務は控えさせた方がいいだろうな。

「……うむ、分かったぞい。他の魔法先生達にも事情を説明し、休ませる事にしよう」

「じじい、分かってると思うが……」

「全部は話さん。要点は省いて、所々はほかすわい」

正義バカ共が“闇の魔法”の存在を知れば、レイヤに危害を加えかねん。

……英雄の子供はばーやだけがいればいい、そう言ってな。

これまでのあれこれで、レイヤ自身にも味方は出来つつある。木乃香や刹那はもちろん、魔法先生にも何人か。

そういつたところで見ると、ばーやよりもレイヤの方が英雄の器なのかもしれん。……レイヤ自身は「そんなガラじゃありません」と言いそうだが。

「エヴァ、出来る限り早めに……レイヤちゃんに“闇の魔法”の事を話した方がいいかもしれんぞ。自覚しているのといないのでは大違いじゃからな」

「……ああ。近いうちに説明する」

と、そんなときだった。

じじいのケータイが鳴り出したのは。……どうでもいいが、着メロが「ゲ。ゲの鬼太郎」ってどうなんだ。

「む、スマンの。……儂じゃ。おお、これは婿殿」

なんだ、相手は詠春か。

「……なんじゃと！　して、行き先は？　……わかった、すぐに手配する！」

「どうした？　荒事か？」

手伝ってやらん事も無いぞ？

もちろん、しっかり報酬は請求させてもらうがな。

「……うむ、今回は切羽詰まっておるようじゃからな」

「何？」

「天ヶ崎千草を知っておるかの？」

アマガザキ？

……ああ、確か修学旅行の時にスクナを喚び出した女だったか？  
それがどうした。

「本山の懲罰房から姿を消した。おそらく、何者かの手引きでじゃ」

「ふゝん………で？」

「彼女が使ったと思われる転移魔法符の痕跡が近くに残されておった。……行き先は、麻帆良<sup>マホウ</sup>じゃ」

何だと？

では、狙いは木乃香か？　なら別に慌てる事はないだろ。

アレには刹那が付いてる。少なくとも、女陰陽師1人に後れを取るようなヤツじゃない。

「いや、彼女の狙いはネギ君とレイヤちゃんじゃ」

「！？　どういう事だ、じじい」

「……天ヶ崎千草の両親は、20年前の大戦で亡くなつとる。ある魔法使いの放った広域殲滅魔法に巻き込まれて、の」

……おい、まさか。

「そうじゃ。それに彼女は、ネギ君やレイヤちゃんがナギの子供だと知っておる。狙われる可能性は非常に高い」

目的は復讐、か。

レイヤは覚悟しているから大丈夫とは思うが……問題はぼーやだな。あのスタンスだと、混乱して命取りになりかねん。

……ま、あれが死のうが生きようが関係は無いのだが。

「ぼーやの方は学園側お前達で何とかしろ。レイヤは私たちが守る」  
「うむ。くれぐれも注意するように」

[Side Out]

[Side Leiya]

「ですから……何度も言っているでしょう？ 私は何も話すつもりは無い、と」

本日何度目かになる言葉を吐き出し、うんざりする。

……ちよつと買い物に来たのが運の尽きでした。たまたま夕映さんとのどかさんに捕まってしまうとは……。

「しかし、知らなければ判断など出来ません！ あなたの言う“非日常”がどんなものか説明してください！」  
「しつこいですよ」

そもそも、私に聞きに来ないでネギに聞いてください。あれなら何でも答えてくれるでしょうから。

それとも……なんですか、他の人からも意見が聞きたいですか？  
ふざけないでください。

知らなくていい事もある。知らない方がいい事だってある。……好奇心は猫をも殺す、ですよ。

「とにかく、私から話す事はありません。……失礼します」

「あ、待ってください！」  
「待ちません」

あと、のどかさん。やらないとは思いますが、アーティファクトで私の心を読もうなんて真似したら……分かっていますね？

軽く威圧すると、ぶるぶる震えながら夕映さんの後ろに隠れてしまった。……やりすぎましたかね？

そんな感じで2人からさつさと離れようとしたが、ふと……周囲に誰もいない事に気づいた。

(……これは、人払いの結界?)

魔法先生や魔法生徒では無いようですが……いったい、誰が?と、歩みを止めたその時、私の肌を刺すかのような殺気がどこから放たれた。

「ッ!?!」

咄嗟に、その場を飛び退く。

それとワンテンポ遅れて、私の立っていた場所に何か重たいものが突き刺さる音が響く。

…… あれは、確か京都の時に出てきた式神……?

「……サウザンドマスター……サウザンドマスターアアア……!」  
「え?」

今の声……それに、あの式神。  
いや、そんなはずはない。だってあの人は、本山に捕らえられて話ですし……。

「おとんとおかんの仇……仇やああああ!!」

ゆらりと、私の前に姿を現したのは……間違いなく、天ヶ崎千草その人。

ですが、1ヶ月前の修学旅行の時よりも、格段にやつれ、髪もぼさぼさ……その瞳もどこなく虚ろ。

ていうか、私の事を父様と勘違いしている? いや、だってそれはあり得ないでしょう?

「熊鬼! 猿鬼!」

2体の式神が、私に向かって襲いかかる。

反応が遅れたので、その攻撃を障壁で受け止める。動きもずっと速いし、攻撃も重い！ 明らかにこれはおかしい！

「れ、レイヤさん、これは……」

「死にたくなければ、さっさと逃げなさい！」

あなた達がいれば、こっちも戦いたくても戦えないんです！  
逃げないなら、巻き込まれても知りませんよ？

「どちみち人払いされてるなら……はあぁっ！！」

障壁の効力を強め、2体を新たに展開した風障壁で弾き飛ばす。

とにかく、ここをどうにか切り抜けて、助けを呼ばなければ……  
と、そんなとき、懐のケータイが鳴りだした。

誰かは知りませんが、とにかく助けを呼ばなくては……。

「も、もしもし？」

『レイヤ、私だ！』

エヴァンジェリンさん？

いったい、何のようですか。今大変ですから、手短にお願いします！

『落ち着いてよく聞け。お前を狙っている女陰陽師がいる。くれぐれも1人で出歩くな』

「……エヴァンジェリンさん、その忠告は5分ほど前に欲しかったですよ」

今現在、その天ヶ崎千草さんとは対面してますから。

ここ一帯に張られた結界からするに、私を殺すつもりなのは間違いない。そして後の事も全く考えていない。

麻帆良の中で結界を張れば、すぐにでも魔法先生が飛んできます。1人や2人ならともかく、集団で飛んできたら相手に出来るはずもない。

……私を殺せばそれでいい、というところなんでしょう。式神の攻撃が頬を掠め、紅い筋が頬を走る。

「ッ……！ ちょっと電話するのはキツくなってきました……また後でお願いします」

『お、おい！ ちょっと待て、お』

通話を切って懷にしまい、再び彼女と向き合う。

……ネギならともかく、私を父様と見間違っるのはあり得ない。それに、彼女のあの表情と異常なまでのパワーアップ。……何者かに操られている可能性も捨てきれませんね。

「天ヶ崎さん！ こんな事をしても……あなたのご両親は戻ってきません！ やめてください！」

「うるさい！！ 西洋魔術師が……黙れえ！！」

くっ……聴く耳持たずですか。

元々、彼女が西洋魔術師を敵視するのは、ご両親を大戦で亡くされたからと聞いていましたが……。

……言葉で止められたなら、それでよかったのですが、しかたありません。

「少しばかり、反撃させてもらいます！！」

[Side Out]

〔Side Yue〕

最初は、ワケが分からなかったです。

いきなり変な女の人出现在了かと思つたら、猿と熊の着ぐるみがレイヤさんに襲いかかつて……。

「ゆえ、あの人……」

「知つてるですか？ のどか」

「うん……京都で、ネギ先生達の敵だった人……」

では木乃香さんを誘拐し、利用しようとした……！

そういえば、木乃香さんのお父様が言っていましたね。確か名前は

……天ヶ崎千草さん。20年前の大戦でご両親を亡くされた、と。

では、レイヤさん……つまり、魔法使いへの復讐！？

「ここで逃げるのは……レイヤさんを見捨てる事」

確かに、レイヤさんは逃げるように言いましたが……。

確かにあの魔族のおじさんの時は、とても怖かったです。同時に……

……魅せられてしまったのかもしれない。

あなた達の生きる世界に……命の危険と隣り合わせの“非日常”の世界に。

私は、今更全てを忘れる事など出来ません。ですから……。

「ゆえ？」

「……のどか、全てを見届ける勇氣はありますか？」

「……………うん」

……しかし、私は……いや私たちは、この判断を後で後悔する事になる。

私たちの存在が、レイヤさんに最悪の結末を迎えさせてしまう原因となってしまうのだから……。

## 第45話：罪

〔Side Leiya〕

確かにあの時よりも式神の強さは上がっていたし、千草さん自身の力も強くなっていた。

けど、決してそれが見切れないほどのものではない。

「『断罪の剣』！」

剣を腕の先から展開し、斬り掛かる。

固体・液体の物質を無理矢理相転移させ、剣の形で固定させる氷系呪文。

とはいえ、相当高度な呪文らしく、私のこれはまだ未完成。剣の長さは30cmほど。完成形ならば自在に長さを調節できるという。

「つあああああつ！！」

迫る爪を紙一重で躲しながら、『断罪の剣』で熊の式神をえぐるようにして斬り裂く。

後方から迫っていた猿の式神にも、左腕に展開させた『断罪の剣』で後ろ手に突き刺す。

……確かに強いです。速さも力も、あの時とは比べものにならない。でも……。

「私だって、強くなってるんですからねッ！！」

2体纏めて、蹴り飛ばす。

そして、さらにそこから詠唱を始め、2体纏めて照準に入れて放つ。

「『白い雷』!!」

白色の雷が2体の式神を包み込み、雷が消えると同時に式神も送り返された。

これではらくは式神を使えない。この隙に千草さんを捕縛して……。

「がつ!？」

背中に鈍痛が走ると同時に、私は何か強い力に押さえ付けられた。首だけを動かして背中を見ると、そこには狂気に染められた千草さんの姿があつた。

「ここまでやなあ……サウザンドマスター」

な、なんて力ですか!？ 明らかに女性のそれじゃない。身体をバタつかせても、びくもしない。

「レイヤさん!!」

なっ……何してるんですか! 夕映さん、のどかさん! 早く逃げると言っておいたのに……何でまだここに……。

「その人! レイヤさんから離れなさい!!」

と、その辺にあつた椅子やら石やらを投げつけ始める。……が、全て障壁のようなもので弾かれる。

援護してくれる気持ちはありがたい。だけど、何してるんですか! 下手に手を出して、矛先がそっちに向いたら……。

「…………なんや？ 邪魔な小娘やなあ」

千草さんの目が、ゆっくりと……………夕映さん達へと向いた。その手には、新しい呪符が握られている。

今更彼女が殺傷力の低い術を使うとは思えない。

夕映さん達に、その攻撃から身を守る術は無い。このままだと、呪符による攻撃を受けて、2人は間違いなく死ぬ。

「消えいや」

そう言つて、手の呪符を投げつけようとする。

瞬間、脳裏に浮かんだのは……………血だまりの中に沈む、夕映さんとのどかさん。

ダメだ、そんな事……………ダメ……………！

ずぶっ……………。

そう、一瞬だった。

千草さんが呪符を持ち、夕映さん達を狙うその瞬間。

私を押さえ付けている力が緩み、それを狙って私は……右腕に再度展開させた『断罪の剣』を彼女の胸元目がけて突き刺した。

「はあ、はあ、はあ……………」

私は、ただ自分が今した事を、冷静に見つめていた。

千草さんは自分の胸を貫く剣を、信じられないものを見るかのような目で見つめていて……少しして、虚ろだったその瞳に光が灯った。

「……………ああ、そっか。ウチは……………」

ごぼつ、と千草さんの口から血があふれ出す。そして、私に抱きつくような形で倒れ込む。

私は……何も出来ない。腕の『断罪の剣』を消す事も、彼女に答える事も。

「……………堪忍な、お嬢ちゃん」

「え……………」

「ほんととは……分かつとったんや。こんな事しても、おとももおか  
んも帰って来いひん。何の意味も無い、ただの自己満足やって……  
……」

弱々しく、微笑む千草さん。

「だから……ありがとな、ウチを止めてくれて」

「私は……わた、しは……」

違う。私は、こうするしか無かった。

止めるとか、そういうのじゃなくて……ただ、こうするしか出来なくて……。

私の手に、血が伝う。その度に、私の心がズキッと痛んだ。

「かんにん、な……」

そう言い遣して、千草さんは瞳を閉じた。

そのまま崩れ落ちる千草さんを、私はただ見ていた。

……そう、私はこの日初めて……人を、殺した。

[Side Out]

〔Side Negi〕

「…………何を、してるの」

学園長から連絡が入って、現場に来たけど……既に終わっていた。血まみれになったレイヤと、ぴくりとも動かないお猿のお姉さん。真っ青な顔で立ち尽くしている夕映さんとのどかささん。

「何、したの……………」

僕らの力は…………困ってる人を助けるためのもの。

人を傷つけたり、ましてや殺したりするようなものじゃない。

なのに…………なのに…………なのに、どうして。どうしてッ……!

「何してるんだよ、レイヤッ……!」

どうして、その人を殺したの?

殺さなくてもよかったはず。レイヤなら、殺さなくても何とか出来たはず。

なのに、どうして殺したの? 魔法を使って、どうして…………?

魔法は人を守るための…………助けるためのものだよ。おかしいよ、レイヤ。

〔Side Out〕

[Side Konoe mon]

その報告を聞き、儂は頭を抱えると同時に、深くため息をついた。  
……恐れていた事が起きてしまった。

「それで……どうなんじゃ？」

『僕らが現場に到着した時は相当でしたよ。……特にネギ君がですね』

瀬流彦君によると、ネギ君は相当レイヤちゃんに詰め寄っておったらしい。

叫ぶわ糾弾するわ……この辺りは儂らの責任が大きい。

ネギ君は、魔法が「人を守るもの、人を救うもの」だと頑なに思っておる。じゃから余計に、魔法で人を殺めたレイヤちゃんが許せんかったんじやろう。

儂らがもつとしっかり、ネギ君にその辺りの事を説いておれば……ここにはならんかったのかもしれないが。

『レイヤちゃんは……ぼーっとしてました。茫然自失といえますか……』

「……………そうか」

とにかく、瀬流彦君達はそんなネギ君を引き離してから、現在に至る……と。

『あの、他の人達……風峰先生には？』

「既に連絡済みじゃ。……すぐにでもレイヤちゃんのところへ飛んでいくじゃろう」

風峰君が麻帆良から離れておったのが響いたの。

もし、彼がここにおったなら……いや、やめておこう。これは農らの責任じゃ。

レイヤちゃんがそうしてしまった……そうせざるを得なかった責任は、農ら麻帆良学園側にある。もっと早くに行動を起こしておれば、レイヤちゃんは……。

「レイヤちゃんの事は、風峰君に任せよう。……それで、巻き込まれた生徒は？」

『現在、高畑先生が付いてます。この辺りは心配無いかと』

「……わかったぞい」

通話を切り、深くため息をつく。

魔法使いの世界は、綺麗事だけで生きてはいけん。

こちら側の住民である以上、レイヤちゃんもいつかは殺しを体験する事になったはずじゃが……。

「……早すぎる」

あの子はまだ10歳じゃ。ナギでさえ、戦争に参戦したのは13歳の時。

いくら精神が熟達しているとはいえ、殺しは重すぎる。……エヴァ

とあの話をしたばかりだというのに、これは非常にマズイ。

「いや、それよりも……………」

今現在、麻帆良には魔法先生達を直接抑え込むだけの力を持つ者がおらん。タカミチも儂もそういった事とは方向性が違うし、風峰君とはまた違った能力を求められる。

最悪、レイヤちゃんの事を排斥せんと企む魔法先生達も出てくるかもしれない。

これは……………あのお方に連絡を取る必要があるかもしれないの。

[Side Out]

[Side Rikuto]

今日、俺は麻帆良の下部組織との寄り合いに出ていた。

本当は他のヤツの仕事だったんだが、たまたま休みだったから押しつけられた。……今覚え、断っておけばよかったと思う。  
仕事を終えて、学園長からの知らせを聞いて、頭が真っ白になり……気づいたら、既に麻帆良の……救護室の前にいた。

「レイヤッ!」

救護室の扉を開けると、椅子に座って手当を受けているレイヤの姿と、手当てをするしずな先生の姿があった。

「風峰先生、治療中です! もう少し静かにしてください!」

「あ、すまん……」

……少し、衝動的になりすぎていたらしい。

精神を落ち着かせて、深呼吸する。……すーはー、すーはー……。

「はい、これでおしまい。1週間くらいは安静にしていってね?」

「……わかりました」

手当てを終えたしずな先生は立ち上がると、救護室を後にしようとする。

すれ違い様に、真剣な顔でそつと囁かれた。

「あの子の事、よろしくお願いします」

「ッ!」

部屋を出て行く際、軽く一礼された。

……室内に再び、静けさが満ちる。えっと、俺は……どうすればいいんだろ。

「…………私、殺しました」

「え？」

「あの人を……殺しました」

ただ、そう呟くレイヤに、俺は何も言えなかった。

天ヶ崎千草を殺したのは事実。どんな理由があっても、その事実は揺らがないし変わらない。

「でも千草さん、ありがとって……堪忍なっ……」

「レイヤ……………」

「そんなつもり、無かったのに……ただ、何とかしなくちゃって……」

気づいていないのだろうか。

レイヤの瞳からは、ぽろぽろと大粒の涙がこぼれだしている。

…………気がついたら、ぎゅっとレイヤの身体を抱きしめていた。

「かざ、みね……せんせい？」

何も答えずに、ただぎゅっと抱きしめた。

俺には、これくらいしか出来ないから。

「…………殺したく、なかった」

ぽつりと、そう呟く。

「殺したくなんか、なかった！ でも！ 私が殺した！ 私が……」

……私が……！ 私があの人を殺してしまった！」

それから、抱きしめられた状態のまま、レイヤは泣き始めた。

あくまで声を押し殺すように、泣き顔を見せないように。  
泣き続けるレイヤを、俺は何も言わずにただ抱きしめ続けた。

[Side Out]

[Side Eishun]

——天ヶ崎千草は、レイヤ・スプリングフィールドの手によって  
処断された

その知らせが私たちの下へと届けられた時、愕然とした。  
私は、私たちは……10歳の子供に、それを背負わせてしまったの  
か！？

『すまぬ。儼らが不甲斐ないばかりに……』  
「いえ、彼女の脱走を防げなかった我々にこそ、落ち度はあります」

天ヶ崎千草の脱走を手引きした者は、目下搜索中。  
……おそらく、そう遠くない内に判明するはず。

「それより、レイヤ君の様子は？」

『……今のところは風峰君が側におる。落ち着いておるそうじゃが……』

「……そう、ですか」

風峰殿が側にいるなら、安心できる。

しかし、どんな事情があれ人を殺した事は事実。逃れる事は出来ない。

レイヤ君の心が、殺人という罪を背負えるかどうかは……。

『わかっておる。しかし忘れさせてはならん。それを忘れてしまったら、間違いなく狂う。……かつての儂のようにな』

「お義父さん……」

『とにかく、お主は西を抑える事を優先しとくれ。彼女の脱走を手引きした者を見つけ出す事が第一じゃよ』

「………はい」

天ヶ崎千草が単独で脱走したとは考えにくい。

転移魔法符を使用した形跡もあった。おそらく、何者かが脱走を手引きし、彼女を麻帆良へと向かわせた。

……彼女の復讐心をうまく誘導し、ネギ君やレイヤ君を殺させるために。

「しかし、学園の方は大丈夫ですか？ 最近の魔法先生は凝り固まっているそうですが……」

『否定出来んのが辛いところじゃな』

お義父さんは電話の向こうで苦笑いしている。  
となると、レイヤちゃんの取った行動で、相当波紋を呼んでいる可能性が考えられる。下手をすれば、麻帆良学園が真つ二つに割れかねない。

『その事なんじゃが……あの方に力をお借りしたいと思っておる』  
「あの方？　もしや、先々代様ですか!？」  
『うむ』

確かに先々代様ならば、今回のような荒事にはうつつつけかもしれない。

レイヤ君が絡んでいるとなれば、もしかしたら力を貸してくれるかもしれない。

……しかし、問題はネギ君の事では？

『……そうじゃのう。あの方はナギの事を心底嫌われておるし……』

いや、あれは本当にナギが悪い。

完全に先々代様を巻き込んで戦い始めて、謝罪も無し。……半殺しにされたのは自業自得だ。

ナギに生き写しのネギ君を見て、殴りかからないという保障が出来ない。

『まあ……なるようになれ、じゃよ』  
「……そうですね」

#### 第46話：動き出す者達（前書き）

ここ最近の事について、ちょっと後書きに書きました。  
かなり重い話になるので、見る時は覚悟してください。 重要なお知らせにも……なるかもです。

## 第46話：動き出す者達

〔Side Setsuna〕

……私がその話を聞いたのは、エヴァンジェリンさんの別荘を後にしたその直後。

刀子さんから話を聞き、どういう事かと学園長のところへ向かうと……そこにはすでに、他の魔法先生達も集まっていた。その中には刀子さんもいて、私に気づくと軽く会釈してくれた。

「どういう事なんですか、レイヤさんが人を殺したって……」

「……殺したと言っても正当防衛よ。相手は、天ヶ崎千草」

「天ヶ崎……！？」

いや、何故あの女が……確かに、彼女なら魔法使い達を襲う理由もある。

しかし、彼女はあの事件の後、本山の懲罰房へ入れられたという話何故……。

「何者かが手引きしたという話だけど、詳しい事は何も……」

「待たせたの」

と、学園長が部屋に入ってくる。

魔法先生達の緊張が一気に高まり、全員が学園長の言葉に集中する。

「皆が集まっている理由は分かる。……レイヤちゃんの事じやろう？」

「学園長、レイヤ君の記憶を消すべきです。殺人の記憶について、念入りに」

ガンドルフィーニ先生がそう主張する。

記憶を消す、というのは……確かに一理あると思う。他の魔法先生達もそれに賛成する人は何人かいるようだ。

いくら正当防衛とはいえ、レイヤさんに人を殺した事を背負わせるのは重すぎる。下手をすれば、心が壊れる危険だつてある。

「何より、あの子はまだ10歳です。それなら、殺したという事を受け止めさせなくても……忘れさせてもいいはずです！」

「ガンドルフィーニ君、それはダメじゃよ。それだけは……ダメなんじゃ」

少し窺めるような学園長の言葉に、私たちは少し驚いた。

てつきり、この人もガンドルフィーニ先生達と同じ意見だと思つていたから。

「何故ですか？」

「例え記憶を消しても、完全に全て無かつた事になるわけではない。それではまた、同じ過ちを繰り返す事になる。……かつての僕のよ」

その言葉に、私たちは文字通り凍り付いた。

……魔法使いの世界は綺麗事じゃない。もちろん、魔法先生の中には人を殺してきた人だっている。

学園長がそつだという事も理解は出来る。でも、それは……。

「……僕がこの学園の魔法生徒だつた頃、今よりも東西の仲違いがずっと酷かつた頃の話じゃ。その頃は向こうも一般人を巻き込む事などお構いなしでの、僕も何度か西からの刺客を手にかけておつた。……しかし、僕は人を殺す事を最低な理由で誤魔化しておつた」

「……その理由とは？」

「『正義のため』じゃ。麻帆良学園を守るために、西洋魔術師達の平和のために殺した。……そんな最低の言い訳をしておったんじゃないよ」

その言葉はそのまま、私たちに突き刺さった。

殺しに来ているのだから、殺してもいい。殺す覚悟もあるのなら、殺される覚悟だってある。

現にガンドルフィーニ先生を始め、何人かの魔法先生は呆然としたように、揃って苦い顔をしていた。

「……あのお方に会い、叩きのめされるまで……僕は自分を正当化しとるだけじゃという事にも気づかなかった」

「あのお方？」

「先々代の西の長。儂にとってしてみれば、義理の祖父に当たるお方じゃ」

つまり、お嬢様にとっては曾々祖父に当たる人物。

学園長の在学時代なら、まだ存命だっただろうし、その方が長を務められていた時代だろうか？

ガンドルフィーニ先生が深々と頭を下げ、学園長に謝罪する。

「……すみません、学園長の気持ちも考えずに」

「いや、構わん。これは君たちにも……しっかり考えてもらいたい事でもあったからのう」

そうかも……しれない。

レイヤさんだけの問題ではない。これは、私たち全員にも言える問題。

私たちがしっかりと「正義」というものを見据えて、答えを出さな

くてはならないもの。

ただ「守りたい」というだけで剣を振るう事では……ダメなんだ。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

泣き疲れて眠ってしまったレイヤをベッドに寝かせ、俺は天ヶ崎千草の遺体が安置されている部屋を訪れていた。

既に検死解剖は終わられて、遺体には布が被せられている。

側で苦い顔をして解剖結果を覗き込む式集院さんに、それとなく尋ねてみた。

「それで、解剖の結果は？」

「……正直、レイヤ君が助かった事は奇跡だと思うよ」

見てごらん、と書類を手渡してくれた。

……確かに、これは……。

「どれも数値が異常だし、薬物投与で強化措置が施されていた形跡もある。……これだと、僕や瀬流彦君辺りだと太刀打ち出来ないね」

「精神操作もされていた可能性、とありますが？」

「現場に居合わせた生徒から聞いたんだけど……どうも彼女、レイヤ君をずっと『サウザンドマスター』って呼んでたらしいんだよ」

それは……確かにおかしいな。

ネギ坊主をそう呼ぶのはまだ分かる。あれはナギに生き写しだし、見間違えるというのも頷ける。

しかし、レイヤはそれほどナギには似ていない。むしろアレは母親<sup>アリカ</sup>似だ。

「だろう？ だからそういう風に暗示がかけられていた可能性が高いんだ」

「なるほど」

彼女の復讐心につけ込み、ネギ坊主やレイヤを狙わせた……か。

そつと、布を持ち上げて彼女の死に顔を眺める。

……穏やかな顔で、ただ眠っているように見える。

「魔法使いに殺されたんだってね、彼女の両親は」

「……ええ」

「……いつになっても消えない。悲しみの連鎖、か」

こうなってしまったのは、俺たちにも責任がある。

もっと早く、彼女の苦しみを和らげてさえいれば……利用されずに、死なずには済んだだろう。

英雄だなんどの言われても、完璧な存在じゃない。

『武の英雄に未来を作る事など出来ぬ』

ああ、確かにその通りだ。

俺は“壊す事”しか出来ない。作る事など出来るはずがない。  
だが……それでも俺は、進むしかないんだ。

〔Side Out〕

〔Side Asuna〕

青い顔をして戻ってきた刹那さんから事情を聞き、すぐさま陸斗に連絡を取ったけど……繋がない。

事が事だし、魔法先生達の間でも相当な問題になっているんだろう。

それから数日経った今も、レイヤちゃんは学校には来ていない。

……でも、レイヤちゃんの事を話す際のネギの様子が、少しおかしかった。

もしかすると……これ、当事者だけの問題じゃないのかもしれない。だから、関係者らしき相手を授業が終わってすぐにとっつかまえて、校舎裏へと引きずって行った。

「で、その辺どうなのか教えてくれないかな、美空ちゃん」

「や、やだなあ……何で私のところへ来るのかさっぱりんだけど」

今更何言ってるのよ、あんたが魔法生徒だって事は知ってるんだから。

そう指摘しても、明後日の方向を向いて口笛なんて吹く始末。……なら、こっちにだって考えはある。

「美空ちゃんがこれまで陸斗に仕掛けてきたトラップの数々。シャークテイ先生に報告してもいい、と？」

「何でも聞いてくださいます、明日菜様」

うん、素直でよろしい。

てゆうか、聞きたい事はズバリ、レイヤちゃんの事よ。どんな感じなの？

「いや、私も詳しい事は知らないよ？ 知ってる事は明日菜と変わんないと思うし」

「そう……じゃあ、魔法先生や魔法生徒の間ではどんな様子なの？

その……レイヤちゃんの事について」

そう尋ねると、美空ちゃんの顔が凄く微妙なものに変わった。あれ？ 何かマズイ事聞いちゃった？

「……そのさ、それについて意見が真つ二つに割れてるわけ。『殺さなくてもよかった』ってのと『仕方なかった』ってのに」

「……………何よそれ」

殺さなくてもよかった、って何よ。

レイヤちゃんがそこまで追い込まれたのよ！？　なのに殺さなくてもよかったって……………。

「ウルスラの、高音さんって先輩がさ…………『魔法は世のため人のために使うもの。人を殺すのに使うなんて以ての外。殺さずに捕縛だって出来たはず』なんて言い出して、他の魔法先生と相当やり合ってるんだよ」

「そんな……………」

ちらつとレイヤちゃんの顔が思い浮かぶ。

…………体調を崩したとは聞いてるけど…………人を殺したんだもん。心の中ごっちゃだろうし、来られるはずないよね。

「…………ネギ君なんだけどさ、現場でレイヤちゃんと相当やり合ったんだって。『何で殺したんだ』って詰め寄って……………」

「だから、あんな顔してたんだ……………」

まるで、レイヤちゃんの事を心底憎んでいるかのような顔。

ネギは魔法が人を救うためのものだと思ってる。それはやはり、人伝に聞いたナギのしてきた事…………“立派な魔法使い”の仕事がそうだという影響が強いからだと思う。

だからこそ、レイヤちゃんが許せない。人を救う魔法で人を殺めたから。

「美空ちゃんは、今回の事についてどう思うの？」

「ん……正直さ、私はレイヤちゃんの事とか詳しく知らないし、今回の事件だって詳しく聞いたわけじゃない」

私が聞いたのは全部噂話だからね、と前置きする。

まあ、魔法関係者とはいえ、生徒に人が死んだ事は伝えたりはしないだろうけど。

「つまり？」

「だからさ、これにどうこう言う筋合いは、私らに無いんじゃないかなって」

「……そうよね。」

これは、あくまでもレイヤちゃんの問題。

レイヤちゃんが、人を殺した事をどう受け止めるか。究極的に言えば、そこだけ。

部外者の私たちが、レイヤちゃんに横から口を出す権利も無ければ義務も無い。

「ネギもその辺を分かってくればいいんだけどね……」

[Side Out]

「Side ???」

試行錯誤を繰り返していたボクのところに、その電話は舞い込んできた。

相手は珍しい事に近衛右門。最初は速攻で切ろうとしたけど、何だか妙に真剣だったから話を聞いてみたんだけど…………。

「…………それは、相当だね」

『今は風峰君達がレイヤ君のケアを行っているので問題はなさそうですが…………』

まあ、気持ちは分かるよ。

ぶっちゃけると、今麻帆良学園は2つに割れている。

半分近くの魔法先生は「今回の事は仕方なかった」と主張しているが、過剰なまでに正義にこだわるバカ共は「殺さずに捕縛する事が出来たはずだ」と主張し、レイヤちゃんを糾弾する。

「あのクソガキの息子はどうしてるの？ どっちかって言うと、レイヤちゃんの事を糾弾してたみたいけど」

『……正直な話、かなり危ない状態かと』

「昔の君みたいに？」

ボクの指摘に、近衛右門は黙り込む。

ああ、ごめんごめん。ちょっと意地悪な質問だったかな。

『それよりも、魔法生徒の方にも飛び火しつつあります。……中には、レイヤちゃんの修行停止を訴えている者も……』

「……………そこまでか」

深くため息をつく。……………ボクが現役だった頃は、ここまで酷くなかったけど？

その場にいなかった連中には、レイヤちゃんの取った行動を非難する権利は無い。それに、第三者として判断しても、それは明らかに正当防衛だよ。

魔法バレしていたとはいえ、一般生徒も巻き込まれてたって言うし……………。

「それで、非常事態の時のための秘匿回線まで使って連絡してきたって事は……………ボクにもう1度表舞台に出ろって言いたいわけ？」

ボクが隠居する前に、麻帆良学園の学園長職に就いたばかりの近衛右門に残した通信網。

たった1度だけ、手に負えない非常事態が発生した時のみ、ボクに連絡する事を許した。

「わかってると思うけど、ボクはもうずっと昔に引退して裏方に引っ込んでるわけ。6年前はたまたまだよ？ あれは木乃香が危なかったわけだし」

『わかっています。今、麻帆良に必要なのは爆発的な効果を発揮する薬です。毒にも薬にもなり得る。……………だからこそ、あなたの力をお借りしたいのです。レイヤちゃんのためにも……………』

……………やれやれ。

もしも、ここで「麻帆良学園のために」とか「関東魔法協会のために」とか言ってきたら速攻でぶった切ってたんだけどね。

「木乃香のために」なら及第点。でもまさか「レイヤちゃんのために」って言葉が出てくるとは……。

「……ま、近い内にそっち戻る予定だったし、それが早まっただけかな」

『！では……』

「ああ、ちよつと待った。まだ雇用条件について話してない」

言っておくけど、教壇に立つつもりは無いよ？

教師の数は充分足りてるみたいだし、だいたいボクが教えられる科目なんて無い。それ以前に教員免許持ってないし。

だから、ここは君に雇われるって形でそっちに入る。詠春……ていうか、関西呪術協会について方法もあるけど、何でもちよつと前に神鳴流剣士が親善大使みたいな役割で麻帆良入りしたらしいし。

「だからさ、あくまでも“助っ人”みたいな形が好ましいわけ。正規で組み込んだらうと、MMとかから無駄な干渉が来そうだし」

『ふむ……わかりました。あなたの功績なら、それでも問題は無いはずです』

「うん、お願いね」

……さて、と。

ゆちるに事情を説明すると、どうしても納得してもらえないところが出てくるだろうし……いや、あの子の事だから「私も行きます」って無理矢理着いてきそうだ。

で、KYに問題発言しまくってるバカ共を「切り捨て御免」にしそうなのがする。

「いかん、考えてて怖くなって来た」

よし、ゆちに接触するのはやめよう。下手に嘘を話しても見破られる気がしてならない。

とりあえず、「アイディアを探しに日本へ行きます」とでも書き置きを残しておけば、編に疑われないだろうし……うん、そうしよう。

#### 第46話：動き出す者達（後書き）

……ちょーつと悩んでいます。

ちょつとやり過ぎた感がありましたよ？ それは自覚してます。最初に言っておきますけど、ちゃんとネギを矯正するための用意はあります。元の方へもきちんと戻す予定です。

……不快感しか感じないとか、そーゆー事言われるとショックです。かなり批判する内容が届いてますし、中には私自身に対する中傷や、私の作品を全否定する酷い内容のものも含まれてます。

今更停止するつもりは無いですし、書き続けるつもりではありませんが、露骨な悪感情しか表さないものが今後も続くなら、感想書き込みにも制限を付けますし、酷ければブロックもかけます。

最悪、更新を停止する事も考えてます。その辺りをご理解頂きたいと思いますので。

## 第47話：その名は凜音

〔Side Rikuto〕

毎度お馴染み、魔法先生御用達のバー。

俺は再び、同僚達の愚痴に付き合わされていた。

「……………ぶはあ……………」

「だから飲み過ぎだつて……………酒そんなに強くないんだから」

今回の面子はガンドルフィーニに、式集院さん、そして神多羅木に俺を加えた4人。

……………言わなくても分かるだろうが、この前のレイヤの事で、麻帆良学園はだいぶガタついてる。

この3人はレイヤの行動については肯定的だが、その周りがそうでもない。特に……………。

「しかし、ガンドルフィーニ君。本当にそんな事言つてたのかい？  
高音君は」

「……………正直、僕も頭を抱えなくなりましたよ。いえ、以前までの僕だったら、それに同調していたかもしれせん」

高音・D・グッドマン。ガンドルフィーニが担当している魔法生徒で、ウルスラに在学している2年生。

“立派な魔法使い”候補生で、そこそこの優秀なので、学校卒業後の進路も期待されている……………が、問題はその理念。

典型的な正義依存症で、ネギ坊主に近い考え方をしている。ぶつちやけると、今回の事にも相当喧しく言つてきている。

「しかし、レイヤちゃんだけの責任じゃないだろう？ 彼女を逃がした関西呪術協会、彼女の侵入を感知できなかった我々……レイヤちゃんがそうせざるを得なくなったのは、寧ろ僕達の方に責任があると言っている」

ちよつと太り気味な身体でそう言う式集院さん。

確かに、今回の事は俺たちにこそ責任はある。レイヤはむしろ、彼女を止めた功労者でもある。

「高音君はその辺りは分かっていない。『殺さなくても捕縛できたはずだ』と何度も言っている。……これでは堂々巡りだ」

「ガンドルフィーニ……飲み過ぎだ」

神多羅木がそう窘めるも、さらに飲み進めるガンドルフィーニ。

……おい、俺がまた家まで運ぶのか？

「それに、こうも言い出している『人を殺めるようであるなら、立派な魔法使いとしての修行を行う権利もない。すぐにでも修行をやめさせるべきだ』と」

その言葉に、俺たちは揃って苦い顔になる。

事実、レイヤの行った事に反感を覚えている者は少ない。彼女がそんな事を言い出せばどうなるか？

答えは簡単。それに乗じてレイヤを排除しようと動き出す。実際、非常にマズイ。

「今のままならまだマシな方だけど、ここままた下手をしたら襲撃とかかけそうだね」

「『正義のため』……か。本当に虚しく聞こえるものだな」

万が一の事を考えて、レイヤには衣玖が付いている。魔法先生程度なら軽くあしらえるはず。

アスナ達もちよくちよく連絡を取り合っているらしいし……問題と言えば、ネギ坊主か。

元から2人の関係は良くなかったが、あれがあつてから、ネギ坊主は露骨にレイヤの事を嫌うようになった。

3-Aではそれほど悪影響は出ていないが、勘の鋭い何人かはネギ坊主の様子に違和感を覚え始めている。……正直、このまま放置はマズイ。

(とは言っても、どうすつかねえ………)

[Side Out]

[Side ???]

いや、しかし……麻帆良も随分様変わりしたねえ。

最後に来たのが6年前。ま、あの時はちょこつと立ち寄った程度だったし、それほど詳しく回ったわけじゃない。

「じゃ、まずは近衛右門のトコかな」

問題は学園長室の場所だね。

ボクが隠居する時まで、学園長室は女子中等部の校舎の中にあった……さすがに移転させてると思うよ？　だってさあ、学園長室が女子校の中につてダメじゃん。

さてと、とりあえず適当に学校関係者っぽいのに話を……。

「あれ、木乃香？」

ん？

その声に振り向くと、高校生ぐらい……かな？　それくらいの年頃の女の子が3人、ボクを見つめていた。

「あ、ごめんなさい。人違いだったみたいで……」

「ねえ、木乃香って……近衛木乃香の事？」

そう尋ねると、ちょっと驚いたような顔になった。

まあ、詠春の話だとよく似てるらしいし……見間違えられてもおかしくないかも。

ボクの髪は黒じゃなくて銀髪だから、そこだけが違う点なんだけど。

「もしかして、木乃香の親戚の子？」

「あ、まあ……親戚だね、一応」

向こうからしてみれば、記憶に残ってもいないだろうけどね。

だって、会った事無いし。6年前のアレだって、顔見ないで戻ったし。

「あのさ、ついでで悪いんだけど……学園長室ってどこかな？」

[Side Out]

[Side Konoka]

「レイヤちゃんに会いたい？」

「……はい」

街角でたまたま遭遇した夕映とのどかは、いの一番にそう切り出してきた。

まあ、レイヤちゃんに会いたい理由は、きっとこの前のあれやと思うけど……。

「言っておくけど、夕映達まで『殺さなくてよかった』なんて言うつもりじゃ……」

「違います！ ただ……謝りたいんです」

そう言うと、俯く夕映。

のどかも似たような顔で、ずっと青い顔で黙り込んでくる。

……やっぱり2人とも、この前のあの事件が相当響いてるみたいやな。

「……レイヤさんがあししたのは、私たちの所為です。ですから……」

「夕映、それは何について謝るつもりなんや？」

「え？」

この前よりはずっとマシになったみたいやけど、それはあかん。

今、レイヤちゃんに謝ったりなんかしたら、返って逆効果や。きつと「安っぽい謝罪はいりません」とか言われるに決まってる。

……ううん、下手したら失踪しかねん。

「レイヤちゃんが本当に求めとるんは、夕映達が魔法の事をしっかり理解した上で考えて、それで判断する事や思うで？」

「……………木乃香さん」

「あと、別荘とかで無神経な事言つた事については、後できちんと謝った方がええかもしれんけど」

レイヤちゃんは「どうでもいい」言つてたけど、そうやない思う。ホンマにどうでもええんなら、夕映達の事もほっといてるはずや。それこそ、殺すなんていう最悪手取らんくてもええはず。

夕映達の事守ろうとしたから、そうなってしまうたんじゃないかな？

「陸斗さんならきつと教えてくれる思う。やから、しっかり説明聞いて考えた方がええと思うな？」

「「……………はい」」

よし、これでこの2人は大丈夫やな。

問題はネギ君なんやけど……………うーん、あれ相当やで？　ほんまどないしよう……………。

と、そんな事を考えながら歩いてたら、いきなりどすんって角から出てきた人とぶつかってしもうた。

「「いたた……………あ、すみません」」

あれ？　今、なんか声が重なった気が……………。

そう思いつつも顔を上げると、そこにはウチの顔があった。

「「なんでこんなところに鏡が……………」」

うーん……………。

あれ？　よう見たら、鏡のウチの髪の毛……………黒やない！？

「う、ウチの自慢の美しい黒髪が真っ白に！？」

「ぼ、ボクの最高位陰陽師の証たる銀髪が真っ黒に！？」

言ってる事は違うけど、同時に頭を押さえてそう驚いた。

……………あれ？　なんや違う気が……………。

「……………何なの、その漫才？」

「あ、柿崎さん、釘宮さん、椎名さん……………」

どないしたん、3人とも。

それに、このウチの2Pキャラっぽい子は……。

「ん？ あ、もしかして……木乃香？」

「え？ うん、そうやけど……」

そう答えたら、ぐしゃぐしゃと頭を撫でられた。

え？ いったい何なん！？ 何者なん、この子？

「うわゝ、ずいぶんおつきくなったねゝ。詠春から聞いてたけど、ボクそっくりだ」

「え？ え？ え？」

ど、どうなつとるんゝ！？

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

学園長室へとやってきたあのバカは、何故か木乃香達も伴っていた。……俺は予め、コイツが来る事は知っていたのでそれほど驚かずに済んだ。で、その素性を説明して……。

「う、ウチのひいひいおじいちゃん!？」

おお、やっぱり驚いたか。

そりゃあ驚くよな。コイツ、見た目木乃香と変わんないし。

「うん。……近衛凜音、先々代の西の長だよ。リンって呼んでね」

にぱ〜と笑って自己紹介するリン。

そんなリンを目の当たりにし、顔をちよつと引き攣らせながらも綾瀬が俺に質問してくる。

「……風峰先生、マジですか？」

「残念ながらマジだ。なお、あれでも130歳で学園長より年上だぞ」

明治17年、博麗大結界の創建に携わった“人間の賢者”だからなだが、ハッキリ言ってそうは見えない。

まず外見は木乃香と変わらない。唯一違うのが、木乃香が黒髪であるのに対し、リンは銀髪……これは多少、海外の血が混じってるかららしいが、詳しくは知らん。

長寿についてはノーコメント。こればかりは分からん。

「こらそこ！　ボクはまだ129だよ!!」

「「変わらないだろ（です）」」

正直、妖怪じゃないのか？ と聞かれても否定出来ない。

……別に特殊な術を使っているわけでもないの、非常に怪しく思えてしまうからだ。

「こうして顔を合わせるの随分とお久しぶりですな、凜音様」

「あゝあゝ、堅苦しい挨拶はいいよ。……で、用意は出来てる？」

学園長が差し出したのは、名刺サイズの身分証明書。

リンに手渡されたのは「広域指導員」の証明書だが、ちょっとだけ手が加えられている。

「で、これは最終確認。本当にいいんだね？」

「……このまま放置しておいては、麻帆良学園は崩壊します」

リンが麻帆良に来たのは、麻帆良学園が崩壊するという最悪のシナリオを回避するため。

もしも崩壊すれば、微妙なパワーバランスによって成り立っている東西の関係は、一気に瓦解する。だからこそ、今の魔法先生達を強制的にでも纏める誰が必要になる。

……かつて形骸化しかけていた関西呪術協会を、圧倒的なカリスマによって纏め上げ、現在の形の基礎を築いたコイツの力が。

「陸斗、レイヤちゃんは？」

「今は衣玖が付いてる。心配いらない」

「ん、なら安心だ」

レイヤのメンタルケアは衣玖に任せてある。

それに万が一、レイヤを狙ってくる不屈き者がいても、そこいらの

魔法先生程度ならば衣玖が容易く蹴散らすはず。

「ところで……何でお前らはここにいるんだ、綾瀬。それに宮崎も」  
「あ、それは……………」

少し、俯いてもじもじし出す綾瀬。  
と、意を決したように宮崎が顔を上げ、口を開いた。

「私たち、魔法の事をすっかり知りたいです。……レイヤちゃんが言ってた、危険な事も含めて全部……その上で、きちんと考えて答えを出そうって」

「……………ふむ」

これには驚いた。

アスナや木乃香から話は聞いていたが、正直なところ、綾瀬や宮崎の考えには呆れていた。

それがこんなに真剣に考えたいと言い出してくるとはな……木乃香、お前何か言ったのか？

「ウチはただ、レイヤちゃんに謝りたい言ったから、それ違うんじゃない？　って言うただけです」

「……………そうか」

事実と言えば、俺はコイツらに魔法に関わって欲しくはない。

一連の事件で分かっているとは思うが、魔法に関わる＝命の危険もあり得る事に繋がり兼ねない。

だからこそ、魔法に携わる者として……何より教師として、俺はそれに反対する。

……しかし、こんな風にすっかり知りたと思うのなら……俺は教師として、その想いに応える義務がある。

「わかった。ちょっと長い話になるだろうし……エヴァの“別荘”を使うでしょう」

「あ、でも……私たち、エヴァンジェリンさんに出入り禁止を……」  
「俺が許可を取る。心配するな」

あくまでも、俺がするのは説明だけだ。

全てを知ってその上で、真剣に魔法に関わりたいというのであれば……俺を論破してみる事だな。

[Side Out]

[Side In]

ふと、夜空を見あげる。

……陸斗がレイヤさん連れ帰ってきてから、レイヤさんの状態は

良くなかった。

人を殺めるには若すぎる。だからこそ、精神の状態もかなり危ないところにあった。

「……………出てきたらどうですか？」

茂みの方へと声をかける。

そこにいるのは分かっています。空気を読みましたから。

私の声に従い、数名が姿を現す。魔法先生が2人に魔法生徒が3人……………おまけに武装してますね。

「残念ながら門限は過ぎていきますので、中にお入れする事は出来ません。お引き取りを」

「レイヤ・スプリングフィールドはここにいるんだろう？」

「……………彼女に何か？」

とはいえ、この人達の殺気を感じていれば、目的も自ずと見えてきますが……………。

大方、レイヤさんを排除しようとする一派でしょう。

英雄の子供はネギ少年がいればいい。人を殺すような魔法使いは必要ない、と……………久しぶりにちよつとイラッと来ましたね。

「彼女に話があつて来たただけだ。通してもらいたい」

「お断りします。許可を持たない不審者を通すようでは、管理人失格ですから」

不審者呼ばわりに腹を立てたのか、殺気がどんどん増していく。あらあら、カルシウムが足りていないのでは？ 私程度の挑発で気を乱すのは良くない傾向ですよ？

「分かったのならお帰りください。少なくとも、誰も通すつもりはありませんので」

「なら、力尽くで押し通らせてもらっ！」

ばちん、と指を鳴らすと同時に、周囲に結界が展開される。

……人払いの結果ですか。どうやら、私も排除するつもりなのでしょうね。管理人1人程度ならどうでもいい、と？

「『魔法の射手・連弾・雷の23矢』！」

「『魔法の射手・連弾・砂の31矢』！」

周囲から魔法の矢が私目がけて降り注ぐ。感電させる雷の矢と、鉄板すら撃ち抜く砂の矢。

ですが……その程度で私を倒せるとでも？

羽衣を、降り注がれる魔法の矢目がけて自在に操り、全てかき消す。

「なっ……魔法を消し去った！？」

「あの布、アーティファクトか！？」

いえ、違います。これはちょっと特殊な羽衣です。

私の妖力が染みついているので、私の意志に合わせて自在に動く。さらに、妖力を注ぎ込めば極めて強い防御力を発揮する。

……つまり、今の魔法は私の妖力より下、というわけです。

「では、今度はこちらから参らせていただきます」

ぺこりと一礼してから、微笑みかける。

……露骨に怯えられたんですが、何故ですか？

ちよっと腹が立ったので、適当に羽衣を振るって1人を弾き飛ばす。

「ふべらっ!？」

「! 危険だ、彼女も排除する!」

魔法先生達が私に向けて走り出す。

……むう、私って陸斗ほど足が速くないので、パパラッチのように機動性の高い相手は苦手なんです。

とはいえ、いくら速くてもそれで優位に立てるかとは別問題ですが。

「はっ!！」

背後に回り込んだ1人が私に向けて蹴りを繰り出す。

が、右手でその足を払いのけ、羽衣を巻き付かせてから容赦なく地面に叩き付ける。……白目向いてますが、正当防衛です。

「……この程度ですか？」

いえ、嫌味とか挑発とかじゃなく、本気でそう思いました。

昔から何度か麻帆良には来た事がありますが……昔に比べると、魔法使いの質が随分と落ちている気がします。

やはり、平和ボケでしょうか？

「ま、まだだ! 一斉にかかるぞ!」

その声に従い、私に向かって3人が私目がけて飛びかかる。

……ああそうそう、私に近づくのはよした方がいいですよ? にっこりと微笑んでから、手元のスペルカードを発動させる。

「棘符「雷雲棘魚」」

このスペルカードは私自身に電流を導き、帯電状態にする効果を持

っています。

つまり、この状態の私に下手に近づくと……。

「あびびっ！？」

「しゃばばっ！？」

「そげぶっ！？」

全身に電気が走り、感電します。ちょうどこんな風に。

一応手加減してあるので、感電死するほどではありません。せいぜい、気絶するくらいですかね。

「……しかし、この人達どうしましょうか？」

このまま放っておいてもいいんですが、息を吹き返してから襲撃されるのは困ります。

かといって、トドメを刺したら後で煩そうですし……とりあえず、陸斗に任せましょう。

#### 第47話：その名は凜音（後書き）

えっと……皆さん、ありがとうございます。

とにかく、完結させるまでは突っ走る事にしました。これから頑張りますので、よろしく願います。

## 第48話：狂乱の銀

〔Side Other〕

一部の魔法先生達による、レイヤ・スプリングフィールドの強制排除が失敗したその翌朝。

まだ人通りもまばらな早朝、世界樹広場前に魔法先生と魔法生徒達は集められていた。……なお、襲撃に参加した魔法先生と魔法生徒は、空気の読める嫁によってフルボッコにされた後、とある妖怪によって「口では言えないほど悲惨な目」に遭わされたため、出席していない。

……珍しくその席には、出張が多いタカミチや、そういった集会には滅多に参加しない陸斗も参加しており、他の魔法先生を驚かせた。

「さて、まず諸君に紹介したい人物がおる」

学園長の声に従い、1人の少女が前に出る。

その姿を見た瞬間、集まっていた者達の過半数が驚愕に顔を染めた。髪の色こそ違うけれども、その少女の顔立ちは学園長の孫娘、近衛木乃香に瓜二つだったからだ。

“彼”が何者かを知る者達には、青い顔になる者もいれば、「なんでいるの?」と言わんばかりの顔になる者もいる。

全体を見渡すと、ふつと微笑みながら彼は自己紹介する。

「『初めまして』……いや、西に攻め込んで来て痛い目見た子達は『久しぶり』かな? 近衛凜音です。よろしく」

面々の中にざわめきが広がる。

彼が名乗った「近衛」という名字。それは、関西呪術協会の長の一

族を指し示す名字であると同時に、学園長の親類である事を意味している。

しかし、中にはその名前を聞いて、彼が何者であるかに気づいた者もいた。

「ルナティックシルバー 狂乱の銀”……………!”」

“ 狂乱の銀” 近衛凜音。

先々代の近衛家当主……………すなわち先々代の西の長だった人物で、近衛家歴代最強の使い手だと言われている。

麗しい少女のような外見とは裏腹に、非常に謀略や駆け引きに優れた能力を持っていたとされ、底辺にいた権力闘争を勝ち抜き、長の座を奪い取った。

そして同様に、空を支配したとされる大妖怪“ざから”とは幾度となく激戦を繰り広げたという逸話も残されている。

……………なお、その大妖怪は現在、タカミチの隣で苦笑しっぱなしである。

「彼は今回、儂の要請を受けて全魔法先生・魔法生徒を直接統括する、魔法業務統括官として赴任してもらった。よろしく頼む」

その言葉に文字通り、全てが凍り付いた。

[Side Out]

「Side Takamichi」

あゝあ、やっぱりこうなったか。

いや、僕もこの話聞かされて、同じ様な状態になったから。

「どういう事ですか！ かつての西の長が我々の上に立つとは！」

「そもそも、納得出来るはずがないでしょう！！」

学園長の発言の後、少し間を置いて彼らが凄い勢いで詰め寄り始めた。

その魔法先生や生徒の大半が、連合派の魔法使いだったり、レイヤちゃんの事に難色を示す、いわゆる「歪んだ正義」の持ち主ばかりだ。

……まあ、こういう反応は無理ないと思うが。

「そうは言ってもものう、適任者がおらんのだよ」

そう、今の今まで統括官が空席だったのは、適任者がいないから。元々、学園長は表と裏両方の教師を指揮しなければならないので、どうしても全体に指揮が行き渡らない時がある。そこで作られたの

が、裏の部分を統括する学園長直属の役職『魔法業務統括官』だ。しかし、統括官に求められるのは戦闘能力だけでなく、全てを見通す広い視野と魔法先生や生徒を把握するだけの高い指揮能力が必須となる。

（8年前に高屋敷先生も退職しちゃったからなあ……）

前任の高屋敷教諭は高齢のため、3年ほど前に教師を引退。それ以降はずっと空席状態が続いている。

陸斗さんや僕も後任に押されたのだが、陸斗さんは「ガラじゃない」から、僕は出張が多い事と、やはり指揮するだけの自信はないので辞退した。

なお、リンさんが就任すれば、魔法先生達は動かざるを得ない。……そうしなければ、痛い目に遭うのは目に見えてるからだ。

「しかし……」

「あゝもう面倒くさいなあ」

今まで黙っていたリンさんがそう口を開いた。

……あれ、どうしてだろう。嫌な予感しかないのは。

「ようするにさ、ボクが気に入らないわけでしょ？　だったら纏めてかかっておいでよ。全員叩きのめして実力見せてあげるから」

蠱惑的な笑みを浮かべ、何を考えたのか宣言する。

……ああ、そういえばそうだった。そういう人だったな、この人は。だけど、魔法先生や魔法生徒は中々飛びかかろうとはしない。

それもそのはず。年配の魔法先生は身を以て知っているだろうし、そうでなくとも肌を通して感じる威圧感から、並みの強さでない事はすぐに分かる。

「……はっ、いいじゃないか。その方が俺もやりやすい」

彼は……確か、北山君だったかな？

学園長の話では、相当出来るらしいけど……でも、僕からしてみれば無謀としか言えない。

あのリンさんだよ？ 20年前に、全力のナギを赤子の手を捻るかのように半殺しにしたリンさんだよ？ 少なくとも僕は戦いたくない。

「ふーん、なんか面白そうなのが出てきたね。いいよ、相手になってあげる」

リンさんのその言葉に、他の魔法先生達が離れ始める。

あの人がここで本気で戦うとは思えないけど、正直なところ、リンさんが戦ったらかなりの被害が出かねない。

[Side Out]

「Side Rin」

ふん、なんか妙なが出てきたよね。

何て言うか、力と心がアンバランスって言うのかな？　ちぐはぐな感じがする。

「おい、お前……トリッパ転生者か？」

「……は？」

内心の動揺は全く出さずに、呆れたような声でそう答える。  
もしかして……ああ、なるほど。そういう事か。

「いや、何でもない。それより……行くぜ！」

北山がボク目がけて突っ込んでくる。

瞬動術のキレはなかなかだけど、動きに明朗さが無い。はつきりいつて気の使い方がへたくそ。

だから簡単に見切れる。ぴよこぴよこ躲しながら、カウンター気味に軽く蹴りを入れる。

「ちょこまかと……！」

無駄に耐久力だけはある……と。

確かに力は強いみたいだけど、しっかり使いこなせてるようには見えない。『公一郎』や『ガリル』よりはずっと対処が楽でいいや。

「ならこれならどうだ！　『雷の暴風』！」

急速に魔力が高まったかと思うと、突きだした拳の先から『雷の暴風』が放たれた。

避けられない事はないんだけど、ここで避けたりしたら周りに被害が出そうだし……仕方ない、手札を晒す事になっちゃうけど……

「しょうがないか……」

懷から呪符を取り出し、投げる。

ただの結界用呪符。ただし、使う人間の魔力に比例してその強さが変わる。

つまり、ボクが使えば……この通り。

「い、雷の暴風を受け止めただと!？」

大呪文をも防ぎきる鉄壁の守りとなる。

じゃ、今度はボクの番。再び呪符を取り出し、今度は投げずに指で挟んだままそつと呟く。

「天魂召雷」

空から雷が北山目がけて降り注ぐ。

おお、耐えてる耐えてる。手加減しているとはいえ、やっぱり耐久力はピカイチだね。

「お、お前! やっぱり転生者か!」

「違うよ。……あんなのと一緒にしないでくれる?」

実際に応対してみたら分かる。……あの力は、この世界にあつてはならないものだ、と。

強すぎる力は災厄しか呼ばない。力を振るわれるその度に世界が歪む。

「ま、これでいつか」

保存用の呪符を千切ると、ボクの左手に握られたのは1本のバット。その効力は、どんな相手でもホームラン……すなわち、一撃で流れ星に変える。

「くっ……『魔法の射手・連弾・光の666矢』！」

もはやマシンガンとしか言い表せない勢いで魔法の矢を撃ってくる北山。

ただただ撃ってるだけだから、追尾性能も無い。そんなもんがボクに当たるはずもない。

それらをかいくぐりつつ北山の懷に潜り込み、バットを振りかざし……。

「そおれっ！」

カキイイイイイイン！！

「そがぶすれみのあわてれげぶっ！？」

心地よい音を響かせて、北山は流れ星となった。

不思議な事だけど、流れ星になるほどの威力を持ちながら、打たれた相手は絶対に死なない。確か『ギャグ補正』がどうとか言ってた気がするけど……どういう意味なんだろう。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

あ、相変わらずえげつないな……アイツ。  
あれで吹っ飛ばされたんだから、当分は戻ってこないだろう。

（……実際、アイツとはやり合いたくないからな）

昔何度もやり合って、かなりきわどいところまで追い込まれた……  
が、決着は未だに付いていない。

「ふう、疲れた」

「嘘つけ」

こきこきと肩を鳴らしながら、こっちへ戻ってくるリン。  
北山の戦いを見たのは初めてだったが……あれならタカミチでも余

裕で勝てる。力が大きいだけのバカだ。

どんなに力が強くとも、それを当てる事が出来なければ意味が無い。トランク스가パワーを重視した変身をしたため、スピードを殺してしまったのも同じ話だ。

「それでどうするんだ？ 確かに連中、萎縮してるみたいだが……」

北山が流れ星になる様を目の当たりにし、呆然となっている魔法先生達。

いや、気持ちは分かる。俺もその流れ星にされた1人だから。

「ま、なるようになるでしょ。ボクも仕事はきっちりやるよ」

そんなこんなで顔合わせは終わり、俺も校舎へと引き上げた。

いつも通りの授業……なのだが、やっぱりどこことなく気が抜けた感じがする。麻帆良祭が近づいている事もあるが、レイヤの事も大きいだろう。

こればかりは、アイツが回復するのを待つしかないからな……。

……放課後、資料倉庫で書類整理をしていた俺のところへ、綾瀬と宮崎が尋ねてきた。

「で、答えは出たのか？」

「……私たちは、そちら側に関わるのをやめたくありません」

……ほう。

「1つ聞いておくが、未だにファンタジーがどうか」

「違います！ そんなのは関係なく……ただ、もう止まれないんです。それに……」

俺の目から見て、綾瀬夕映という生徒は「何か足りない」という印象が強かった。

そのため、学業にも身が入らずにかなり残念な結果になってしまっていた。

……その足りない「何か」が、魔法だったって言うのは……あまり考えたくない事だな。

「今更、全部忘れてさようならなんて出来ません！ 私ものども、ネギ先生を助けたいです！」

宮崎も同意見らしく、真剣な顔でこくこくと頷いている。

……どーすつかねえ、これ。

いや、記憶消して一般生活へ戻りなさいってのもあるんだよ。ただ、それすると問題がいくつに残る。

納得していない事があるままで記憶を消すと、やっぱり普段から納得のいかない状態が続く事になる。そうすると、日常生活にも支障が出る可能性もありうる。

1番楽なのは、こっちに引き入れる事なんだが……それすると別の意味で問題が出てくるわけだし……。

……仕方ない、か。

「……分かった。そこまで言うんなら、好きにしろ」

俺の言葉に、ぱあっと表情を輝かせる2人。

ただし、ちよつと待った。

「俺はほとんど何もしない。目の届く範囲ならともかく、俺の知らない場所で死にかけてるうが俺は知らん。死のうが生きようがお前達の勝手だ。……わかるな？」

既に、この2人には魔法世界についても簡単に説明してある。

魔法という要素がある分、ハッキリ言ってこちら側の方が複雑な状況にある。

だから、こちら側に関わる事〓死の危険が高い事もしっかり説明してある。

「分かっています。責任は、足を踏み入れた自分自身にある事は」  
「……………よし、なら俺から何も言うことはない。ま、相談くらいになら乗ってやるよ」

一応、教師だしな。  
それを言つと、ちょっとだけだが安心したらしく、2人揃って頭を下げてくる。

「「ありがとうございます」」

そう言つて退室したのだが……………何というか、宮崎の様子がちよつとだけおかしかった。

……………まあ、宮崎が俺に言いそうな事と言えば、ネギ坊主くらいの事だが……………。

「何か相談があるなら、気持ちを落ち着かせてからいつでも来い」  
「……………はい」

## 第49話：あなたの罪を数えなさい

〔Side Rikuto〕

色々と騒ぎが起きている中でも、麻帆良祭までもうすぐ1週間を切ろうとしている。

我が3-Aはメイド喫茶だったそうなのだが、ネギ坊主が脱がされるといふハプニングなどから、お化け屋敷という事に決まった。

いやさ、それは別に構わないんだが……この学園長の人形はどうかと思うぞ？

「大丈夫だって、許可は取ってあるし」

「許可……出したのか、学園長」

確かに、お化け屋敷にはピッタリかもしれない。

……正直俺でも不気味に思うし。

「ところでさ、レイヤちゃん……大丈夫なんですか？」

「……ああ」

明石の言葉にふつと横を見る。

そこには、アスナ達に混ざって書き割りの製作を手伝うレイヤの姿があった。

俺や衣玖が色々と相談に乗ったのがうまくいったのか、レイヤはほとんど完全回復に近い状態にある。

「ちょっと質の悪い風邪に当たったようなもんだ。治ればすぐに復帰するってわけだ」

「へっ」

……もちろん、完治したわけではない。  
アイツはこれからも、自分自身の罪と向かい合っていかなくちゃならない。いずれはそうなるはずだったが、それがちよつと早すぎただけの話。

(……………しかし)

問題はネギ坊主だ。あからさまに不満そうな視線をレイヤに向けている。

ああ、あれか。人を殺したのはいけませんってか？

……まあ、ネギ坊主の反応は仕方がない。普通、人を殺した人間に好感を持つ者はいない。  
だがあの場合、それを辞さない非常事態だった事は理解してるのか？ 一歩間違えば、レイヤだけでなく、綾瀬や宮崎も死んでいたかもしれない。

(もし、リンがこの状態のネギ坊主と遭遇したら……………)

間違いなく、麻帆良に血の雨が降る。

アイツはネギ坊主……………というより、ナギの事を嫌い抜いてるからな……………。

ネギ坊主が空気読まずに、アイツの前で問題発言連発しませんように。

[Side Out]

「Side Leiya」

まだ、迷いは拭えません。

経緯はどうあれ、私が千草さんの命を奪った事は事実。

……救護室で泣きじゃくった後、私は衣玖さんのところへ連れて行かれて、数日間彼女の手伝いをして過ごした。

そして昨日、だいぶ状態が落ち着いた頃に、衣玖さんが私に言った言葉がある。

『少し酷かもしれませんが、現実から決して目を背けてはいけません』

……それを言われた時、頭の中が真っ白になった。

なぜならこの数日間、私はずっと『あの出来事』から目を背け続けていたから。それは、私が最も嫌ったネギと同じ行為。

『現実から目を背け続けた先に待っているのは破滅だけです。私や陸斗は、過去そういった人達を何人も見てきました』

いつものほんわかとした雰囲気とは違い、真剣な表情で私に告げる衣玖さん。

『私はあなたが好きですよ？ このまま歪んで欲しくない。……だから』

衣玖さんは、ゆっくりと私を指さしながら言い放つ。

『あなたの罪を、数えなさい』

……そう。千草さんを殺した事。それが私の罪。

夕映さんとのどかさんを守るために殺した。それは決して、歪める事の出来ない事実。

私がこれからも背負って数えていく、私自身の罪。

『まあ、この言葉は他の人物からの受け売りなんですけどね』

そう言つて衣玖さんは笑った。

何でも十数年ほど前、陸斗と衣玖さんがちょっとした用事で、風車が多く回る地方都市を訪れた際、出会ったという男性の口癖だったらしい。

「……ま、とりあえずは目の前の課題から片付けますかね」

目の前に置かれた、お化け屋敷で使うという書き割り。

……それにしても、もうすぐ1週間切るって言つのに、何でこんな中途半端な状態で止まってるんですか？

[Side Out]

[Side Rin]

向かいの校舎から、3-Aの教室の様子を眺めつつ一安心。

話聞いたときはどうなる事かと思ったけど、あれなら安心そうだね。

「それでタカミチ。例の超って子は怎なのさ？」

「詳しい事は僕にも……ただ、麻帆良にくる前の経歴は一切不明です」

「ふむ……」

言っておくけど、ボクは転生者じゃないよ？ まあ、その影響を受けていると言えばそうなんだけど。

ボクが知っている事と言えば……この世界が、ネギ・スプリングフィールドを中心として動くはずだった事と、それが本来いるはずの無いイレギュラーの影響によって、レイヤ・スプリングフィールドへと移りつつある事くらい。

ただ1つ、超鈴音という女生徒が麻帆良祭で何かを企んでいるらしい。……これは、この前遭遇した北山とかいう転生者がばそぼ独り言言つてたのを聞いちゃったから。

で、他にも色々と気になる事があったからタカミチに調べてくれるよう頼んでみたんだけど……。

「君たち魔法使いの力を持ってしても調べきれない……か。確かに怪しいね」

北山の独り言だけでは、ボクも動きはしない。

ただ、超鈴音が製作に関わったというロボット……絡繰茶々丸。彼女をちよつと見てみたんだけど……あれはあり得ない。

現代の科学力であそこまで高性能なものは作れない。つまり、超の技術と知識は数十年……いや、百年は先のものなのかもしれない。

「リンさん、いったい何を……」

「……タカミチ、6年前の事覚えてる？」

まあ、忘れてるはずは無いと思うけど。

案の定、ボクと同じ考えに至ったのか、若干顔色が悪い。

「……まさか、彼女が未来から来たと？」

「可能性の1つとしてはね。麻帆良の最強頭脳なんだし、タイムマシンくらい作れるでしょ」

「それを否定出来ないのが恐ろしいですね……」

そう、6年前の……木乃香誘拐事件。あれは大変だった。

詳しい事は省くけれど、東西以外にも何者かの思惑が働いていたらしく、捜査に携わった魔法使い達も相当手を焼いて……最終的に陸斗の要請を受けてボクも動くハメになった。

いや、ボクとしては久しぶりに暴れられて楽しかったけど。

「陸斗さんはそう思っていないでしょうけど」

苦笑いしつつもタカミチはそう答える。

あ、そうかも。でもボクとしては羨ましかったかな。

身体乗っ取られたのはともかく、クライマックスに事件解決に貢献したんだもん。

「だけどさ、もし超鈴音が未来から過去を遡ってきたとしたら……まず、とんでもない事が起きるよ」

「……でしょうね」

超鈴音が未来から来た未来人だと仮定しよう。だとすると、彼女の目的は？

わざわざ時間を遡ってまで過去に来たのだ。その目的はおそらく、歴史の改竄。何らかの方法で彼女のいた時間を……ボク達の未来を変えるつもりだ。

もしも、人類滅亡の危機みたいな世界規模の異変を解決するのなら、それは仕方ない。でも、それがもし個人的な悲劇を変えるためだったとしたら……。

「だからタカミチ、君も超を助けようとかそーゆーのは考えない方がいい」

「ですが……」

「分かってるはずでしょ？ 時の流れを乱す事は、決して許される事では無いって」

クルトはまだ利口だったよ？ 話を聞いて、すぐにでもあの20年前に飛んでいきたいと思っていたはずだ。

でも彼は耐えた。アリカ姫を救えるという誘惑に耐えた。……その辺りは立派だよ。

「ま、超鈴音が未来人云々はボクの推測だし……気にしないでいいよ」

とは言ったものの、ボクの推測はかなり近い割合で当たっている可能性が高い。

……最悪の場合は、彼らの力を借りる事になるかもしれないからね……。

[Side Out]

[Side Rikuto]

なんかかんやで時間は過ぎていき、学園祭までついに1週間を切っ

た。

そんなある日、俺はエヴァに呼び出され、別荘に来ていた。いつもより真剣な表情のエヴァが語ったのは、ある意味衝撃的な内容だった。

「マギア・エレベア  
“闇の魔法”？」

「そうだ。私が編み出した禁呪……聞いた事はないか？」

そういえば……前にラカンからそれっぽいのを聞いた事があった気が。

ただ、どういったものかは知らないし、それがレイヤとどんな関係にあるのかも分からない。

「ヘルマンとかいう魔族と戦った時、レイヤが暴走したのは覚えてるな？」

「……………ああ」

レイヤ自身はどんな風に暴走したか覚えていないが、俺たちが覚えている限りで鮮明に話すと……青い顔で土下座された。もちろん、ネギ坊主以外。

下手したら、捕まってたアスナ達も殺しかねない攻撃だったし……あれ。

「あの時の禍々しい力の波動……“闇の魔法”と酷似していた。おそらくは……………」

「おいおい、ちょっと待て。でも話によると、まだ何も教えてないんだろ？」

「そうだ。まだ“器”を鍛えている最中だし、習得に関する事は何もしていない」

だったら、どうしてそれが出てきたりしたんだよ。

「それは分かん。だが、暴走については……いくつか思い当たる節はある」

エヴァの話によると、元々“闇の魔法”は、エヴァのように最強種と呼ばれる人外が存在が使う事を前提としているため、それらに比べるとスペックでは格段に劣る人間が使うと、何が起こるか分からないとか。

……何が起こるか分からないものを習得させようと思つなよ、おい。

「じじいとも話したが、レイヤが何かに操られたという証拠は見あたらなかった。だから大丈夫とは思つが……」

何かから操られた……か。

「陸斗？　どうかしたのか」

「……いや、何でもない」

……まさか、いや……それはないな。アイツはもうこの世界にいないはずだ。

20年前、俺がこの世から消し去ったのだから。

[Side Out]

〔Side Yukari〕

どうやら大結界がちよつと不安定になっているらしい。まあ、不安定といつても幻想郷にはほとんど影響は無い。

……ただ、外の世界からの要請……つまり召喚がかかるようになってしまい、それでちよつと前に2人が喚び出された。

ええ、きちんと直しましたとも。さすがに今回は霊夢や藍だけじゃなく、閻魔様もお冠だったもの。

「聞いているんですか？ だいたいあなたはいつもいつも……」

……訂正するわ。現在進行形でお冠です。

ゆちるの修行に付き合わされて、その後でどうにか天狗の件を衣玖に受け入れさせて、それで幻想郷に戻ってきたら……今度は不眠不休で結界の修正。

そして現在、閻魔様からはお説教を受けている真つ最中。……ねえ、もう帰りたいんだけど……。

「ダメに決まってるでしょうが！ そもそも、今回の事はあなたが結界の管理を式に投げっぱなしにしてたから起きた事。起こるべく

して起きた事とも言えます」

「いや、だから反省してるから……」

「あなたには！ その辺りの責任が無いように思えます！ 少しは常日頃からの苦勞というものを……」

……ダメね、これ。

結局、閻魔様のお説教は3時間続いた。……いつもと比べて、まだマシな方かしら。

「以後、気をつけるように！」

「……………はい」

な、長かった……早く帰って寝ましょ。

さっさと帰ろうとしたのだけど、ふと閻魔様から呼び止められた。

「ちょっと待ってください。1つお聞きしたい事があります」

「な、何かしら？」

あまりいい予感はないのだけど。

「例の麻帆良のお祭り……確か、もうすぐでしたよね？」

「ええ。もうすぐ……まさかとは思うけど、外に出る許可が欲しいとか言わないでしょうね？」

それはマズイ。非常にマズイ。

私や一介の妖怪ならともかく、この人は冥界を管理する閻魔……この人がいなくなると、冥界が機能しなくなる。

……まあ、あのサボタージュの泰斗がサボり続けているから、こっちも割と暇なのは否めないのだけど。

が、呆れた様な顔で閻魔様は……。

「そうじゃありません。ただ、気にかかった事があったのでお聞きただけです」

「気にかかった事？」

「ほら、世界樹と呼ばれている大樹の大発光です。あれ今回は確か、お祭りの時期に合わせて発光するんじゃないやありませんでしたか？」

あゝ……言われてみれば、22年周期だからそろそろよね。その間に色々あったから、すっかり忘れてたわ。

「昔の事を覚えていますか？」

「昔？ ……ああ、麻帆良学園創設期の」

確かに、あったわね。ああいう事が。

尤も、アレは最終的に自滅したんじゃないかったっけ。

「……つまり、閻魔様は世界樹の力を悪用しようとしている輩が出てくるんじゃないかって言いたいのか？」

「可能性の話ではありますが、あり得なくはないでしょう？」

「まあ、確かにね」

20年ぐらい前ならば、麻帆良学園も粒の揃ったのがいたんだけどね……。

今はかなり質が低下してるし、ああいう輩が何かしでかそうとしたら、止められるかどうか分からない。

「とりあえず、陸斗にそれとなく忠告しておいてくれませんか？ 自由に行き来できるのはあなたぐらいですから」

「……まあ、いいわ。麻帆良祭には参加したかったし」

……でも、何故か陸斗は「来るな」って言うのよね。どうしてかしら？

そりゃあ去年は暴れすぎたかなーとは思ってたけれど……うーん。

「あと、私も行きますから」

「……………はい？」

「私も行きます。あなただけを行かせると何が起こるかわかりませんし」

いや、だから……閻魔様はここ離れちゃダメでしょ？

「既に休暇は申請済みです。代理の者も派遣すると通告がありました。問題はありません」

「ず、随分根回しいいのね……」

「……………去年、あなたが色々やらかした事で陸斗から抗議の手紙が届きました。同じ轍は踏みたくありませんので」

**第50話：賢しき愚者の蛮行（前書き）**

というわけで、OHANASHI前哨戦です。

## 第50話：賢しき愚者の蛮行

〔Side Rikuto〕

超包子で朝食を取り、学校で仕事を整理し、夜は教師陣と共に超包子で飲む。

……これが俺の学祭時期の生活パターンだ。今年は夜の飲み会に衣玖が参戦するようになった。

何故かは分からんが、何人かの女性教師が落ち込んでいるように見えたが……。

まあ、そんなこんなで麻帆良祭が迫ったある日の事だった。

「あー、風峰先生」

「ん？」

どうした、宮崎。

いや、お前図書館島の方行かなくていいのか？ やつと解禁されたんだろ？

……期末試験の件で封鎖されていた図書館島だったが、数日前に制限ありでようやく封鎖が解除されている。

「いえ、その……ちょっと相談が」

「あゝ……」

ちらつと雪広の方を見る。

さすがは委員長。それだけで察してくれたらしく「構わないので、相談に乗ってあげてください」と視線で返してきてくれた。

そのまま宮崎を伴い、生徒指導室へと入る。念のために防音の結界を張っておくか。

「で、どうした？」

「実は……ネギ先生の事なんです」

……まあ、納得と言うか何というか。

レイヤも学校に戻ってきたが、ネギ坊主の様子はよろしくない。2人が会話をする事はまず無いし、ネギ坊主はレイヤの事を否定している。さらにぶっちゃけると、那波や龍宮辺りはネギ坊主のおかしさに気づき始めている。

このまま放置しておく……非常によろしくない。

「私、聞いちゃったんです。ネギ先生が他の人達と『レイヤの修行は取り消すべきだ』って言うてるのを」

「……そこまでか」

こうなってしまったら、言葉でどうこう言っても止まらない。

ハッキリ言わせてもらうと、かなりキツイ矯正が必要になってくる。宮崎も俺の言っている事の意味が分かったらしく、相当暗い顔をしている。

「実は、俺もネギ坊主とは話したんだが……」

その言葉に宮崎は驚いたような顔になる。

……正直、あの時の事を思い出すとかなり鬱になってくる。

ネギ坊主が相変わらず煩いので、ちよつとキツめに説教したんだが……。

『僕は間違ってます。レイヤが人を殺したのは事実ですから』

そう言っただけの話で聞こうともしない。

……いや、俺がもつとネギ坊主と信頼関係を築けていれば、こうはならなかったのかもしれない……。

「……………私、今のネギ先生見てると辛いです……………」

ま、こちら側に憧れたよりも、ネギ坊主に憧れた面が強いからか。

……こうなってしまったのは俺の責任だ。仕方ない、学園長と相談して……………。

「陸斗!!」

ノックする事無く勢いよく扉を開けて飛び込んで来たのはアスナだった。

おい、相談中って札出してあっただろ？　ちゃんとノックぐらいしろ。

「あ、ごめん……………いや、そうじゃなくて、大変なのよ!」

「どうした」

「ネギとリンが決闘とか言い出してるのよ!!」

は？　決闘？　……………ああ、一対一でやるアレか。

……………え？　ネギ坊主とリンが……………はあ!?

「……………ヤバいな」

「限りなくヤバいわよ。どうするの?」

どうするって言われても……………いや、こうなったらもう遅いだろ。アイツの辞書に「情け」とか「容赦」とかいう文字は載ってないし。せいぜい、ネギ坊主が死なないよう祈るしかない。……………いや、そもそも何でそうなった!?

[Side Out]

[Side Set suna]

どうしてこうなったのだろう。

私がリンさん（先々代様とお呼びしたら「そんなジジイみたいな呼び方しないでよ」と怒られた）と、レイヤさんについての事を学園長と話していると……いきなり、ネギ先生が他の魔法先生や魔法生徒と一緒にやってきた。

何かと思って話を聞いていたら……あろうことが、レイヤさんの修行中止を訴えての事だった。

「……ネギ君、何度も言っておるが、レイヤちゃんに対する処分は無しじゃ」

「どうしてですか。人を殺したんですよ？」

「あれは正当防衛じゃよ。報告書は見たじゃろう?」

天ヶ崎千草には、何らかの強化措置が施されており、それによって異常なほどに能力が強化されていた。

私も実際に報告書は読ませてもらったが……私でも直接戦って勝てるかどうか……。

「……それでも、人を殺すのはいけない事です」

「そうです！ 我々“立派な魔法使い”は人を救う事こそが本分にあります！ 人を殺めるような事など、あつてはいけません！」

この人は確か……ウルスラの高音さん、だったか？

ガンドルフイーニ先生が指導されているという魔法生徒だった気がします。

「ではあの状況、どうしておればよかったのじゃ？ 話によれば、そうせざるを得ない状況だと聞いておる」

「殺さずに捕まえる事だつて出来たはずです」

私たちはその言葉に、思わずため息をつく。

綾瀬さんや宮崎さんからも話は聞いているが、あの状況でどうやって捕まえると言っただ？

少なくとも、完全に無傷で捕縛は難しい。相当なダメージを負わせた状態でなら可能かもしれないが……。

「それは難しいと言っておろうが。……それとも何じゃ、殺す事なく死んでおればよかったとも言つつもりか？」

「……そうです」

「そつだ、死んでいればよかったんだ！」

ッ！　こ、この人達は……！！  
制止される間もなく、思わず掴み掛かろうとした瞬間。

「……君ら、今なんて言った？」

刺すような殺気が室内に充満し、私も思わず意識が飛びそうになった。

普段は飄々としているリンさんが、怒っていた。

殺気を隠そうともせずに、ギラギラとした目でネギ先生達を睨み付けている。

「あの場にいたわけでもないくせに、後からごちゃごちゃ言う筋合いは無いよ」

「何が言いたいんです。……そもそも、誰ですか」

そういえば、ネギ先生はリンさんの事は知らないんだっとな。

ただ、気に入らないとばかりにリンさんを睨み付けている。……無謀な。

「ボクが誰なのかなんてどーでもいい。……だから言ってるでしょ？　君がレイヤちゃんの事について口を出す筋合いは無いって」

「あなたには関係ありません。話の邪魔だから黙っていてください」

ぶちっ

あ、今何かが千切れる音が……。

首だけを動かして学園長の方を見る。……無言で首を横に振られた。

「……ふーん、人の話を聞かないところは父親そっくりだね」

その言葉に、ネギ先生がリンさんの方を見た。

「今すぐ逃げろ」と本能が叫んでいるが、足が動かない。

「あなた……父さんの事、知ってるんですか？」

「ああ、知ってるよ。人の話を聞かずに突っ走るだけのクソガキだったよ」

……うわ、悪役にしか見えない。

と言うより、その顔でそういう事言うのやめてもらえませんか？ なまじお嬢様にそっくり……いえ、お嬢様がそっくりなんだから気になります。

ネギ先生の顔が歪み、リンさんを睨む目がさらに強くなる。

「父親が父親なら息子も息子だね。こうまで話聞かずのバカだと、呆れを通り越して拍手したくなっちゃうよ」

「っ！！」

殴りかかるネギ先生だが、軽く足下を払われて転ぶ。

今にも乱闘が発生しかねない状況にもかかわらず、リンさんの視線は冷ややかだった。

「近衛右門、ダイオラマ魔法球ある？」

「あ、あるにはありますが……何故？」

「このガキに現実つてのを教えてあげようかなと思ってね。……あ、治癒術師用意しておいてね」

ほ、本気だ……本気でネギ先生を潰すつもりだ、この人……。

「学園長！ こんな横暴を許していいのですか！？」

そう、古矢先生が叫ぶ。

だって、こうなったリンさんは止められませんか。少なくとも私は止めたくないです。

「そうは言っても……。先に喧嘩を売ったのはネギ君……というより、君らじゃよ」

「そうそう。……あ、何なら纏めてかかってきてもいいよ？ どうせ、1人相手するのも全員相手するのも同じだし」

だからそうやって逆撫でしないで……いえ、ナンデモナイデス。

「……いえ、僕が戦います。もちろん1対1で」

「ふーん……いい度胸だね」

何も言わずに睨み付けるネギ先生。

私は知りません。ネギ先生がリンさんに半殺しにされようが、この状況では明らかに自業自得です。

……と言うよりも、巻き込まれないように逃げたいです。

[Side Out]

「Side Cha o」

ふむ……やはりおかしいネ。

私の知る未来には「風峰陸斗」もいなければ「レイヤ・スプリングフィールド」なんて人間も存在していなかった。

しかし、この世界……過去の世界には存在している。これはどういう事力ナ？

「それにネギ坊主の事も気になる」

確かに……やりすぎとは思う行動もあったけど、あそこまで酷くはなかったはず。

私の知る歴史なら、彼は3-Aの担任になってるはずだし、アスナサンやセツナサンとも仮契約していたはず。

やはり鍵は「風峰陸斗」と「レイヤ・スプリングフィールド」にあると見ていいネ。

「超さん、ネギ先生達がどこかへ行くようです」

「ムム？ 何があったのかナ？」

「……どうやら、あのリンって人に喧嘩売ったみたいですよ」

「ムム………」

近衛凜音……確かに、近衛家にはそのような名前の人間はいたし、先々代の当主として名を連ねている。

しかし、この時期に麻帆良へは来ていなかったはず。その上、コノカサンにそっくりなのはという事ネ？

パラレルワールドという可能性も考えたが、カシオペアに不備は見あたらなかったし、問題は無いはず。

「どうします？」

「まあ、さすがに死にはしないだろうし、ほっとくネ」

「……ですね」

私から見ても、ネギ坊主の様子はさすがにマズイと思うネ。

これで矯正されるなら、私としても願ったり敵ったりヨ。

……しかし、ここでネギ坊主が殺されたら、私消滅するんじゃないカ？

折角、本屋とゆえ吉にそれとなくアドバイスして、歴史の方向性を修正したというのに……。

[Side Out]

〔Side Kitayama〕

おいおいおい、やっぱりおかしいぞ。

近衛凜音なんてキャラ、原作にはいなかったし、ここまで食い込んでくるはずがない。それにあの薬味だって完全にトチ狂ってる感じじゃねえか。

それにこんなOHANASHIがされたら、薬味が殺される危険性大だぞ！？

（どうするかって？ とりあえず止めるか）

薬味がここで殺されたらマジでヤバイ。

麻帆良祭とか魔法世界とか、明らかにゲームオーバーになるのが見える。

それとなく凜音とかゆーヤツに止めようと声を……。

（か、かけられねえええええええ！？）

近づこうにも足が動かない。声を出そうにも声が出ない。

ただひたすら怖い。アイツの存在を俺自身が拒んでいるかのようなのだ。

……いや、そう感じていたのは俺だけじゃないらしく、周囲の魔法先生や生徒達も同じ様な顔をしている。

（と、とにかく様子見だ様子見）

薬味がマジでヤバくなったら止めに入ればいい。

そう、俺は最強オリ主なんだ。それくらいは出来るはず。

……いや、決して近衛凜音を怖がってるわけじゃないぞ？ ただ、様子を見るだけだ。

「北山先生、何か言ってますん？」

「とりあえず無視だ無視」

おい、そのモブキャラうるせえぞ。

## 第51話：星の輝き

S t a r l i g h t   B r e a k e r (前書き)

分かる人には分かるタイトルです。ちょい、東方のBGMっぽくしてみました。

## 第51話：星の輝き

## Starlight Breaker

〔Side Rin〕

学園側の魔法使いが修行などで使うダイオラマ魔法球。

その最大の利点といえば、現実の1時間が魔法球の中では1日に延長される事にある。

……尤も、女性の魔法先生や魔法生徒は「老けるから」という理由で、使用するのを拒むのが多いけど。

「んで？ 準備OK？」

設定フィールドは草原。障害物は何も無い、ただっぴろい空間。

現在、ボクの前には不機嫌な表情のままのネギ・スプリングフィールドがいる。

最大限簡潔に説明するとだね……喧嘩売られたから、挑発して喧嘩買っただけ。

「……ボクの方はいつでも」

「ほらほら、肩の力抜かないと怪我するよ？」

「ふざけないでくださいッ！！」

別に巫山戯てるつもり無いんだけどねえ。

外野の魔法先生及び魔法生徒も、明らかに不満そうな顔してるのがちらほらいるし。

「……ルールは、どちらかが「参った」と言うか、気絶するまで。これでいい？」

「構いません」

例の弟子入りテストと同じルールだけど……気にしてる様子も無いね。

「んじゃ、やろうか？」

「『魔法の射手・連弾・光の23矢』！」

開始突然、いきなり魔法の矢が飛んできた。

なるほど遅効呪文ね。基本魔法は天才級だって聞いてたけど、なかなかやるじゃない。

降り注ぐそれを軽やかに避けていきつつ、ネギの方を見る。

既に次の呪文の詠唱を始めている。……どうやら、火力で押し切るみたいだね。

「『白い雷』!!」

「よつと」

確かに威力はそこそこあるけど、避けちゃえば問題ない。

それにさ、ただ撃ってるだけじゃ当たらないに決まってるじゃん。

「……かかりましたね」

「え？」

と、足下の穴から魔法の矢が次々と撃ち出された。

いや違う。これはさっき当たらなかった分の魔法の矢……。

（なるほど、これも遅効呪文……）

予め放った魔法を「後で発動させる」術式を組み立て、それを放った。

時間差で魔法の射手を発動させ、それを中心点に立つボクに当てるため。今までの攻撃は全てそのための布石……。

「『雷の暴風』!!」

それらの魔法の矢が全て炸裂し、さらにネギが放った次の魔法もボクに直撃した。

〔Side Out〕

〔Side Negi〕

僕の魔法が全て直撃し、あの人は爆風で見えなくなった。

……なんだ、全然大した事無いじゃないか。

「……そうだ、僕は間違っていない」

間違ってるのは、人を殺したレイヤ。

その事を罰さずにいる学園長先生やタカミチ達。

そして、今僕に刃向かってきた木乃香さんによく似た知らない人。

「レイヤだつて、人を殺した事で罰を受ければ、それで……」  
「それで？ どうなるわけ？」

爆風が晴れたそこには、無傷のその人が立っていた。  
なッ……ど、どうやって……！？

「魔法使いも陰陽師も、戦闘時には障壁張ってるに決まってるじゃん。さっきの魔法の矢も、雷の暴風も全部防いだ。ただそれだけ」  
「嘘だ……僕の魔法を全部防ぐなんて……」

「単純な質量の話だよ。君が撃った攻撃魔法より、ボクの障壁の方が大きかった。だから全部防げた。それだけ」

あり得ない。あんな人の障壁に、僕の攻撃魔法が競り負けた？  
そんなの嘘に決まってる。きつと、何かカラクリがあるはず……。

「それよりさ、さっきの続き、それでどうなるわけ？」  
「え？」

「レイヤちゃんが罰を受けて、それでどうなるのかって話」

そんなの決まってる。

人を殺した事はいけない事だ。罰を受けて、修行を中止して故郷へ戻って……それでもう1度勉強し直してから修行に行けばいい。  
そうすれば、父さんのような“立派な魔法使い”にだって……。

「なれるわけないね」

きつぱりと、その人はそう斬り捨てた。

「それにさ、レイヤちゃんはもう罰を受けてる。……人を殺したって十字架を、一生背負い続けてくつていう罰を」

……………え？

[Side Out]

[Side Rin]

どうも、コイツはその辺りが分かってないらしい。  
なら懇切丁寧に説明してあげるしかないかな。

「レイヤちゃんが人を殺して……本当に何のショックも受けなかつ

たと思うの？」

「何でそんな事が分かるんです」

「じゃあ、何であの子は事件があつてから数日、学校を休んだのさ」

そう切り返すと、案の定言葉に詰まった。

ただこつちを睨んでくるだけ。……やれやれ、これだから子供は。

「人を殺した、これは変えようのない事実。だからあの子は、その罪を一生背負って行く事を選択した。それがあの子の受ける罰だよ」  
「……だから、何なんです。そんなのただの自己満足じゃないですか！」

「少なくとも、ナギ・スプリングフィールドは同じ様にして罪を背負つてた」

あのクソガキの名前は出しくなかつたけど、こつちの方が食いつきはいいでしょ。

実際、ネギの表情がこちんこちに固まつてるし。

「“紅き翼”は戦争の英雄。もちろん、人だつて殺してる。……日常で人を殺せば犯罪だけど、戦争で人を殺せば英雄になれるとはよく言つたものだよ」

だけどボクの知る限り、アイツらはそれをきちんと受け止めていた。  
鶏頭ナギもチートバカラカンも、詠春だつてそう。人を殺す事がどういう事かしっかり見定めて、それで戦っていた。

特に、ラカンは元拳闘奴隷だけあつて、その辺には理解も深かつたかな。

「自己満足です。そんなのただの……」

「……じゃあさ、人を殺した事がどれだけ辛いかわかるわけ？」

ほんの少し、声色を落としてそう問いかけると、ネギの表情が固まった。

「分かるわけないよね。だって君、人を殺した事ないもの。分かるはずがない」

「……………うるさい」

「勝手に決めつけて。勝手にそう思い込んで。…………そっちの方が自己満足なんじゃないの？」

「……………うるさい」

「ああ、それも分かるわけ無いか。そう思い込んだ方が都合いい」「うるさいッ！！」

瞬間、爆発的に魔力が膨れあがる。

感情の爆発による、魔力の暴走か。…………大した魔力量じゃないの。

「うるさいうるさいうるさい！！　僕は間違ってない…………間違ってなんかいない！！！」

無茶苦茶な動きでボクに向かって殴りかかる。

中国拳法も何も無いね。ただ子供がだだをこねているだけ。受けても痛くないだろうけど、とりあえず避ける。

だって、わざわざ殴られる義理ないもの。

拳を受け止め、ぎゅっと力を込めて動きを封じる。そして、さらにダメ出し。

「魔法は力だよ。人を殺すも人を生かすも、それは術者次第」

「くっ……………！」

「レイヤちゃんはしっかり理解して、それで罪を受け入れた。……………だけど君は、それを理解しているようには見えない。ただ、魔法が

便利なものだ」と曲解しているだけだ」

そのまま、ぐんつと投げ飛ばす。

受け身も取れずに地面に叩き付けられたが、何度かバウンドして体勢を立て直す。

だけど、そんな悠長に待っているほど戦いは甘くない。接敵して思い切り蹴り飛ばす。

「がつ……」

ネギの身体が空中に浮き、そこへさらに肘打ちを叩き込む。

「陰陽師を甘く見すぎだよ。ボクらも魔法使いと同じ……強くなれば前衛も後衛も関係ない」

ハッキリ言って、ひよっこに毛の生えた程度の腕じゃ相手にもならないよ。

ま、それにボクはどちらかって言うと“魔法剣士”に近いタイプだし。

「レイヤちゃんにも言われたんじゃないの？ 現実を見るって」

ボクの指摘にも、びくつと身体を震わせるだけ。

……どうやら、反論するだけの気力はもう無いみたいだね。

「言うておくけど、ボクは君みたいな甘えたがりで世間知らずのガキは大嫌いだよ」

悪意のない善意の押しつけほど、厄介極まりないものはない。ネギの行動に悪意は無い。だからこそ、周囲はそれに善意しか感じ

る事しか出来ない。

存在しない悪意の方が、存在する悪意よりもずっと危ういものだというのに。

「君のような存在は、いずれ全てを破滅に導く。……歪だよ、君は」  
そう指摘しても、何も言い返してこない。

「……何とか言ったら？ 喋るための口は付いてるんでしょ？」  
「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！ 来れ雷精、風の精！  
雷を纏いて吹きすさべ！ 南洋の嵐！！」

……ま、下手な反論よりは呪文詠唱の方が効果的だね。こりゃ完全にキレてるかな。

しかもこの魔力の込め方……ボクを殺すつもりで撃つみたいだね。  
これはさすがに障壁だけでは防げない。ちよつとばかり強力な結果を……。

「……………」

そう思つて……やめた。  
ちよつとだけいい事を思いついたからだ。

「『雷の暴風』……！」

雷を纏つた旋風が、ボクに向けて放たれる。

ここは敢えて、何もしない。それがボクの攻撃。そう、何もしない。  
強力な雷がボクの身体を焼いていき、旋風が身体を切り刻んでいく。  
激しい痛みが全身を貫く。

そうして魔法が消え去った後、死に体と言わんばかりのボクの姿が

晒される。

「……………ッ!？」

「何怯えてるわけ？ 殺すつもりで魔法撃ったんだから、こうなるのは当たり前じゃない」

ボクが1歩踏み出すと、ネギは1歩後退する。

その瞳にはさっきまでの憎悪も怒りも何も無い。ただ、怯えのみが広がっている。

「違う……………僕は、僕は……………」

「ボクが憎くて殺すつもりで魔法撃った。それが事実。変える事の出来ない現実だよ」

さて、今度はボクの番。

懷から取り出したのは、「星」の字が書かれた呪符。

「星光収束」

その呪文と共に、銀色の光がまるで流れ星のように、一箇所へと集まっていく。その度にその箇所の銀色の球体は大きくなっていく。

東洋呪術……………所謂、陰陽道が西洋魔術に劣る点。それは火力。

1つの都市を灰燼に帰す事も出来なければ、軍隊を纏めて薙ぎ払う事も出来ない。陰陽道でそれを覆すためにはどうすればいいか。

その答えが、大氣中に満ちる魔力を東洋呪術で一箇所に収束させ、それを自分の魔力をトリガーにして撃ち出す。……………ま、組み立ててみたら西洋魔術のパクリでしか無いんだけどね。

「あ、あ……………ああ……………」

「逃げるな。自分の力と向き合え。恐れも全て受け入れろ」

そうして、星の光が全てを埋め尽くした。  
呆然としたような顔で彼は吹き飛んでいき、そして落ちた。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

俺がアスナと一緒に到着した時、全て終わっていた。

ダイオラマ魔法球から出てきたボロボロのリンは、ネギ坊主を俺に渡すと、その場にぶっ倒れた。……あれだけダメージ受けてたら当たり前だな。

魔法先生の中に紛れ込んでいた北山が「どこのSLBだよ……」と呟いていたのが気になったが……。

「……しかし、相変わらず不思議な技よね」

ま、確かに。

ネギ坊主に外傷はほとんどなかった。せいぜいすりむいたとかそのくらいだ。

……リンが使ったあの技。あれの最大の利点として、純粹魔力によるダメージを与える事が出来るというところにある。

つまり、精神にのみダメージを与えて、肉体を傷つける事はない。

……殺さずに相手を倒す技の代表格というわけだ。

「アイツが本気出したら、ネギ坊主なんて一瞬で灰燼に帰してるぞ」  
「……でしょうね」

リンの異常さを痛いほど知っているアスナは、青い顔でちょっとだけ身震いした。

……昔殺し合った時、俺の余剰妖力でいくつも収束させてバンバン撃ってきたんだぞ？ あれはシャレにならないくらい怖い。

「でもさ、これからネギはどうなるわけ？」

……そこが問題なんだよな。

これが、単に一個人同士の喧嘩なら大した問題は無かった。しかしこの場合、問題になるのはリンとネギ坊主の立場だ。

ネギ坊主は実習生とはいえ、麻帆良学園の魔法先生。そしてリンは麻帆良学園に属していないとはいえ、学園長が雇ったフリースタンスで、魔法先生を統括する立場にある。

……学園長室での口論については刹那から聞いたが……。

「それにしても大した毒舌よね。ネギって余程のことが無い限り、殴りかかったりしないじゃない」

「その辺りは、父親とは違って母親似だからな。ナギの事を貶され

たのが頭に來たんだろ」

いや、ネギ坊主がナギに似てたらそれほど事は大きく………なつてたか。

言葉でどうこうじゃなく、即座に殴りかかつてる。そして結末は……

…アレ、あまり変わらないな。

とにかく、ここで問題となってくるのが2人の立場だ。

知らなかったとは言え、ネギ坊主は自分の上司に喧嘩を売ったんだ。それも、麻帆良学園のトップ学園長の目の前で。

どこでもそうだが、上司に対して喧嘩売るのは大問題。……昔、どつかの魔界神がボヤいてたが、空気読めないヤツはレジ打てない店員レベルで必要無いしな。

「まあ、ネギ坊主がそこまで行つたのは俺たちにも責任はある。その辺りも考慮されるだろうし、それほど重くはならないだろう。……よくて減給、悪くて謹慎だな」

もちろん、麻帆良祭の後の処置になるだろうけど。

そういえば……アスナは学祭どうするんだ？ タカミチとデートでもするのか？

「バカ言わないでよ。タカミチにはしずな先生がいるじゃない」

しずな先生……ねえ。

確かに一緒にいるところは目にするが、そーゆー話は聞いたこと無いんだが。

「それに、タカミチはそーゆー相手にはならないの。それ私、人を好きになるとかまだ分かんないし」

「ま、それが女子中学生の平均的意見だな」

「陸斗だって、衣玖さんと色々あったじゃない。瑪瑙さんやゆちるの事で」

……まあな。

瑪瑙については……まあ、機会があればおいおい話そうと思う。少なくとも、この場の勢いで話していい相手じゃない。

ゆちるについてもノーコメントだ。何でも紫によると新しい弟子を取ったらしいが……その子の冥福を祈るしかない。

## 第52話：隠された真実

〔Side Negi〕

魔法が怖いと思ったのは、初めてだった。

木乃香さんに似たあの人に酷い事言われて、それでカッとなって…

…気がついたら、あの人を殺しそうだった。

……ううん、雷の暴風を受けてあの人はボロボロで……あの人がじゃなかったら、間違いなく死んでた。

怖い……そう、怖い。

あの人の攻撃を受けた時も、すごく痛くて……怖かった。

何も分からない。こんな時どうすればいいのか、誰も教えてくれなかった。

誰か、助けてよ……。

「失礼……ネギ・スプリングフィールド君、だね？」

〔Side Out〕

[Side Rikutō]

「くらそー！ きびきび手を動かす！」

「うひい い い い い い い い い ! ! !」

俺たちは現在、お化け屋敷の設置作業に追われている。

なあ、麻帆良祭まで残り数日だったのに、これおかしくない？

何で未だに出来てないわけ？

まあ、原因と言えばバカ騒ぎで演し物が中々決まらなかった事なん  
だが。

「あの、風峰先生。ネギ先生は？」

雪広にそう聞かれ、思わず言葉に詰まった。

ネギ坊主は現在、リンの攻撃のダメージが癒えていないらしく、現在療養中だ。……とはいえ、デカイのは心の傷だな。

ま、その辺りは麻帆良祭でしっかり癒されるだろうし、大丈夫だろう。

「ネギ坊主は別件だ。お前達と同じく地獄を見ている頃だ」

「何ですって!？」  
「こうしてはいられませんわ、すぐに……」

「お前は委員長だろうが。ネギ坊主は大丈夫だから、自分の仕事をしろ」

そう言つと、さすがに委員長としての責任感から逃れられなかったのか、齒を食いしばるような表情で作業に戻った。

……実際、あれからネギ坊主とは会っていない。と言うより、会いに行つても留守なんだよな。

学園長は『療養中』としか言わないし、うーん……。

[Side Out]

[Side Leiya]

ネギがOHANASHIされた事について、正直どうでもいい……  
…とは言えないんですね。

これまで、私の事を疎ましく思っている人達は、英雄の息子ネギが私の排除に賛成していたため、強気でいられたわけです。

しかし、ネギがOHANASHIで倒れた今、そうは行かなくなる。

「……まあ、楽になったと言えばそうですね」

夕映さんとのどかさんですが、風峰先生によると「しっかり現実を見た上」で関わる事を決めたとか。

まあ、きちんと理解した上で選んだのなら、私はどうこう言いません。元より関係ないですし。

学校でもごく普通に接してますし、特に問題ありません。

……残る問題と言えば……。

（尾けてきとるのが3人……多分、魔法先生やと思います）  
（そうですか）

手を出して来ないとはいえ、私の事を監視してくる鬱陶しい人達がいる事くらいです。

念のため、月詠さん（学校も行っていないので基本ヒマ）が私のガードに付いてくれています。

……守ってくれる事は非常にありがたいんですが、時折なめ回すような視線で私を見てくるのがちょっと……。

（どうします？ あれ、斬ってええですか？）

（……斬っちゃダメです。仕掛けてくるまでは様子見で）

……明らかにこの人、護衛向きじゃないですよな？

本当は刹那さんや龍宮さん辺りにお願いしたかったんですが……刹那さんは木乃香さんの護衛。龍宮さんは他の誰かの仕事を引き受けたらしく、断られてしまいました。

とにかく、月詠さんが暴走しないよう抑えるのが精一杯です……うう。

（あゝ、お預けなんて殺生な）

（別荘に戻ってから刹那さんやアスナさんともやり合ってたんださい）

（だって、センパイはウチ見たらすぐ逃げてまうし、あのツインテールのお姉様はウチの好みとは微妙にかけ離れてるし……）

アスナさんはともかく、刹那さんはあなたの自業自得です。

時折この人、神鳴流剣士としての研鑽を積むという名目で、刹那さんと模擬戦してるんですが……その内容が酷い事酷い事……。

しばらくはマトモに斬り合ってるんですが、刹那さんがちょっと油断を見せると、式神で脱がすわ、セクハラするわ……。

なまじ、剣士としての力量は刹那さんより上なだけに厄介だそうです。なお刹那さん、月詠さんとやり合う時、ガチで本気モードですよ。

（……別荘に戻ったら、私が相手してあげますから）

仕方なくそう言つと、さっきまでの殺気走った様子から一転し、穏やかな感じへと収まった。

あまり戦いたくないんですけどねえ……この人とは。相性が最悪的に悪いですし。

ちよつと話の方向性を変えましょう。そっちの方がずっといい。

「ところで月詠さん、近衛凜音という人物はどのような方なんですか？」

これは正直、疑問に思っていた事。

もちろん、どんな事をしてきたかは知ってる。しかし、それはあくまでも一般的に知られている内容でしかない。

関西呪術協会……西側の人間である月詠さんなら、また別の面の事を知っているかも知れない。そう思って聞いたのですが……。

何故か、凄く微妙な顔をされた。なぜ、W H Y？

「あゝ……その、あらゆる意味でぶっ飛んだお人です」

そんな微妙な顔のまま語られた内容によると……うん、きっと私の顔も微妙になっているはず。

確かにこれは、ぶっ飛んでいるとしか言い表せない。何ですか、その超本気な風峰先生と殺し合ったって。

「何で殺り合ったかは知らんですけど、何度も激戦を繰り広げた事は伝説と化してます」

「で、伝説……」

「だって100年近く昔のお話ですからなあ」

風峰先生の本気……想像も付かない。

そもそも、エヴァンジェリンさんは割と本気の魔法を見せてくれるけど、風峰先生が本気を出したとこ見た事は無い。

……いや、「阿修羅さえを凌駕する」とか物騒な2つ名が広まっている以上、あの人の本気出したら麻帆良が消し飛びそうで怖いんですけど。

[Side Out]

「Side Eva」

「…………やはり、闇の魔法はやめておいた方がいいな」  
「でしょ？」

ふん、貴様に言われるまでもない。

ヘルマンとやらの時に暴走したのだから、最初から不確定要素はあった。

他者に操られたという可能性……痕跡は無かったが、やはり完全に否定は出来ん。何よりも私の勘が危険だと言っている。

「近衛凜音、そもそも貴様、何故私の家にいる」

「ん…………事情を聞きに、かな？」

「…………ほう、何を聞きたい？」

対価によつては、答えてやらん事もないぞ？

が、凜音は私ではなく、私の側で控えていた茶々丸に視線を向けて…………。

「ああ、君じゃなくて絡繰茶々丸さんね」

「私、ですか？」

「そうそう。…………あ、エヴァ。君は話さなくていいよ。つーかややこしくなりそうだから口出さないで」

……なあ、コイツをくびり殺しても問題は無いな？

いや、近衛凜音を相手にする以上、間違いなく本気を出す必要がある。

こんなところで全力全壊の戦闘を繰り広げれば、間違いなく正義の  
狗共がやってくる。……仕方ない、我慢するか。

「……マスター」

「構わん。答えられる範囲で答えてやれ」

心配そうな目でこちらを見てくる茶々丸にそう答える。  
で、いったい何を聞くつもりなんだ？

「君の制作者……超鈴音についてだよ」

「……超について、何を？」

「単刀直入に聞かせてもらうけど、彼女は未来人？」

はあ？ 貴様、何を言って……。

「はい。超は自分の事を「未来人」或いは「火星入」だと呼称して  
いました」

……茶々丸、お前も何を言っているんだ。

確かに超の頭脳ならタイムマシンも作れん事は無いだろうが、いく  
ら何でも火星入は無いだろう。どうせいつもの悪質な嘘に決まっ  
ている。

近衛凜音、貴様もいったい何を……。

「……………それ、マジ？」

「マジです。ハカセとの会話中もよく、火星入という単語を用いて

いました」

……どうした、顔色が悪いぞ？

「……火星人……未来から来た……何のために？ 人造異界の崩壊？  
いや、あり得る……だとすると………」

「おい」

「魔法世界は……未来を変える？ つまり………」

「聞いてるか？」

「……でも彼女によると、確か15年以内………」

「私を無視するなバカ者！！」

どごんっ！！

さっき散々言われた分の恨みも込めて、渾身のかかと落としをお見舞いしてやった。

相当効いたらしく、頭を押さえて転がり回っている。どうだ、痛いだろう？

「つつつ……でも、ありがと。どうにか考えは纏まった」

「何をかつこつけている。それにさっきの質問の意図はなんだ。脈絡が掴めん」

「それは余裕のある時にでもゆっくり話す。……で、もう1つだけ質問、彼女はこれから何をしようとしているのかな？」

超鈴音が何かする？

その質問に対し、茶々丸は……。

「申し訳ありません。それに関する事はお答えできません」

「つまり、麻帆良祭で何かするっていうのは肯定するんだね」

「……………」

言っておくが、私は何も知らんぞ。

確かに超から「麻帆良祭の開催期間中、ちょっと茶々丸を借りるネ」とは言われたが。

……ま、ヤツが何をしでかすのかは知らんし、興味もない。せいぜい見学させてもらう事にしよう。

「ま、いいさ。じゃ、超に会う事があつたら伝えておいてくれる？」

『時の流れを乱す事は赦されない』って」

「……………わかりました」

と、そんな会話が終わった直後だった。

「遅くなりました」

レイヤが月詠と共に、私の家に入ってきたのは。

どうしたレイヤ、近衛凜音をじっと見て。……ああ、そういえば初対面だったな。あの事件でしばらく休んでいたし。

こうまで木乃香に似ている……いや、木乃香がコイツに似ているんだ。それは驚くだろう。

「初めまして、近衛凜音です。うちの玄孫の木乃香がお世話になってるんだってね？」

「あ、はい。どうも初めまして、レイヤ・スプリングフィールドです」

「うんうん、母親似のいい子だね。……あのバカとは大違いだ」

ああ。じじいが言っていたが、貴様はアレを酷く嫌っていたな。

その言葉に何か不穏なものを感じたらしく、レイヤはちよつと頬を引き攣らせて質問する。

「……あの、うちのバカ父が何かご迷惑を？」

「隠居してるトコに『千の雷』ぶち込まれた。ちょっと頭に來たから半殺しにして説教したけど、『巻き込まれるお前が悪い』とか言い返されたっけね」

なお、じじいから酒の席で聞いたその話にはオチがある。

空気も読まずにそんな事をほざいたナギは、詠春を始め、味方にボコられたというアホらしいオチが。

「あの……それはその、本当に申し訳ありませんでした」

「ああ、頭下げなくていいよ。君に罪があるわけじゃないし」

その割には、ぼーやには盛大にOHANASHIしたと聞いたぞ？

「あれは喧嘩売られたから買ったただけだよ。向こうの自業自得」

「ふん、どうだかな」

……で、どうした。話が終わったんならさっさと帰れ。

「あのさ、エヴァ。今回来たのは話を聞くためでもあったんだけど

……ちょっとレイヤちゃんの事で話したい事があってね」

「何？」

「闇の魔法を教えないって事は、レイヤちゃんは決め手を欠く事になるんじゃないの？」

……そんなもの必要ないだろう？

レイヤに叩き込むのは、オールラウンドに戦うために必要な基礎能力だ。

どんな戦闘スタイルに発展させていくかは、レイヤ自身に選ばせて

……。

「だから、ちよーつとレイヤちゃんに習得させてみたいものがあったね」

「……………なんだ」

「精霊魔法だよ」

なっ……………せ、精霊魔法だと!?

「何ですか、それ？」

「聞いた事ないですな」

……………まあ、貴様らは知らなくて当たり前か。

アレはある意味、忘れられた秘法に近い。禁呪と言われるほど危なくはないが、習得に危険が伴う。

現代の魔法使いの大半は知らんだろう。当然、神鳴流剣士も知るはずがない。

そもそも、何故陰陽師の貴様がそれを知っている。

「そりゃあ、大元に会ったからだよ。ずっと昔だけど」

「大元だと？」

精霊魔法の大元？ ま、まさか……………。

「その、ま・さ・か」

「……………貴様が規格外だという事は知っていたが、そこまでとはな

確かに、レイヤは精霊魔法の方がずっと向いているかもしれん。

だが、習得できるかどうかは別問題だぞ？ あれは使うの事よりも、習得するまでの方に危険が伴う。

それこそ、闇の魔法など比にもならんほどに。

「あの……私、何させられるんですか？」

「あゝ、大丈夫大丈夫。ちよつと力見るくらいだから。さ、別荘行こうか」

「は、はあ」

まあ、習得させるかどうかは本人の意志だからな。

度合いを見たり、さわりを聞くくらいなら損はあるまい。……近衛凜音は多少、やり過ぎるくらいはあるが。

とりあえず、死地へ赴く我が弟子に言葉くらいは手向けてやろう。

「レイヤ、逝つてこい」

「それちよつと字違いません!？」

なお、ぼーやの時など比にならん激戦が繰り広げられ、最終的にレイヤが吹っ飛ばされた事は言うまでもない。

それでも、ヤツ相手に1時間持ち堪えたのは大したものだが。

……ちなみに、近衛凜音の言う「ちよつと」とは、「ちよつと本気で」という意味なので注意しておけ。

### 第53話：カシオペア（前書き）

もしかしたら……麻帆良祭では陸斗の影が薄くなるかもしれません。  
いいところ、レイヤのサポートに徹するみたい？

### 第53話：カシオペア

〔Side Rin〕

「はい、今日はここまで」

「……………ど、どうもありがとうございました……………」

やれやれ、もう死に体じゃないの。

ちよつとシゴいただけなのに……………ゆちるに比べたらずっとマシだよ？

……………しかし、これは近衛右門の時とは違った意味で面白い才能だね。

「うん、やっぱり適正はあると思う」

「そうなんですか？」

「そうそう。だって君、攻撃魔法より基本魔法の方が得意でしょ？」

基本魔法っていうのは、主に精霊未来予知を使役する事で発動する魔法の事。

『小物を動かす妖怪』だったり『占いの精霊』だったりね。

ちよつとこの子のメルディアナでの成績表つてのを見てみたんだけど……………それ見て「おや？」って頭捻ったね。

この子、攻撃魔法とかより基本魔法の方がずっと適正高いんだから。その辺りは兄妹共々同じだけど。

「でも基本魔法って言うても、学校でほとんど教わったんですが？」

「いやいや、学校で教わる事だけが全部じゃないってのは知ってるでしょ？」

「それは……………まあ」

そう。基本魔法っていうのは、あくまでも学校で教わる範囲の事しか言い表さない。

ならば、その発展部位をなんといい表すか？ それをね、『精霊魔法』って言うんだよ。

「精霊……魔法」

「この世界には様々な精霊がいる。火や雷といった属性を司る精霊に、君が学校で習ったような小精霊」

魔法使いが魔法によって召喚し、使役するのは大抵が下位から中位精霊。上位精霊ともなると、大魔法の発動時に詠唱に挙げられるほど「力のある」精霊として名が通っている。

ほら、『雷の暴風』でもあるじゃない。「来れ雷精、風の精」ってあれが上位精霊を表してるってわけ。……で、ここから話の本番。

「そして……最上位のさらに上に位置する精霊」

「それ、まさか精霊王ですか！？ でもあれってお伽噺じゃ……」

やっぱり知ってたか。

魔法使いならば、必ず子供の頃に聞いた事のあるお伽噺。それに登場する、精霊達の統治者が精霊王。

尤も、精霊王って呼び名は人間が勝手に定めたもので、それに値するとされる精霊は何体も存在する。その内、ボクは水と地の精霊王に会った事がある。

「……最高位の精霊魔法はね、精霊王の力を借りて発動するものなんだ」

上位精霊までなら、遭遇するのはそれほど難しくはない。

チートバカことジャック・ラカンも、夜の迷宮のダンジョンで雷の最上位精霊と戦った事があるらしいし。

だけど、精霊王となるとそうは行かない。何せ、ボク達とは違う世

界に生きているから。

「違う世界というと、魔法世界ですか？」

「いいや。そういった概念を全部振り切った向こう側にある世界。ボク達概念が全く通用しない世界。……そうだね、言い表すなら『精霊界』とでもしておこうか」

精霊王に会うためには、精霊界に行くか、儀式によって喚び出すしかない。

ボクが行ったのは精霊界に行った方法。なお、これは50年以上昔の話。

精霊界に行くには、色々と厄介な手順を踏まなくてはならないし、彼女がまだその基準に達していないので却下。だから、召喚という方法に限られてくる。

「まあ、召喚したら力を示さなくちゃならないんだけどね」

「力を示すって、戦うって事ですか？」

「そうなるかな」

まあ、必ず戦うって事でもない。

探し物を見つけ出してきたり、問題に答えたり……色んなヤツがいるんだよねえ。

え？ ボクもそれしたのかって？ まあ、ご想像にお任せします。

「精霊魔法を使いたいって思うなら、それ相応の訓練をエヴァが付けてくれるだろうし……ま、選ぶのは自分だよ」

「……………」

確かに、習得に至るまでは相応のリスクがあるからね。即決出来るようなものじゃないか。

「辛い時間はあるんだし、ゆっくり考えるといいさ」  
「……………はい」

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

麻帆良祭を翌日に控えたその日、私はずっと考え続けていた。  
精霊魔法。……………とても興味深く、手を伸ばせば届く位置にあるかもしれないもの。

しかし、習得には相応のリスクを伴うという。……………簡単には決められる事ではありませんね。

とりあえず、ゆっくり考えようと思っていた矢先、刹那さん達共々しずな先生に呼び止められ、世界樹前広場に行くよう指示された。  
何でも学園長が待っているらしいのですが……………。

「よく来てくれたの、レイヤちゃん」

人払いの結界が張られており、そこでは学園長を始め、何人もの魔法先生と魔法生徒が私達を出迎えてくれた。

瀬流彦先生やガンドルフイーニ先生のように顔なじみの方もいれば、見た事の無い人も……あれ？ あそこのシスター服の人、顔をそらしたような……。

「学園長先生、何かあったのですか？」

「うむ。今回は麻帆良祭とこの世界樹について話そうと思つての」

世界樹……ですか。

詳しい事は知りませんが、何でもただの大樹ではなく神木……所謂「魔法の樹」だと効いていますか？

「うむ。正式名称を『神木・番桃』と言つての。極めて強力な魔力を宿しておる」

……なるほど。

もしかしたら、西の人達が東の魔法使い達を毛嫌いする理由の一つとして、世界樹の事があるのかもしれないね。

これだけ立派な大樹なら、かなりの力を宿していそうですし……それを掠め取ったような形になった魔法使い達は気に入らないでしょうから。

「麻帆良祭の期間中、22年に1度の大発光と重なるんじゃない。その大発光というのが、世界樹が溜め込んだ魔力が目で確認できるほど具現化される事なんじゃよ」

「それで、何かあるんですか？」

「……実はの」

学園長が語った内容は、私たちにとっても驚愕的だった。

麻帆良祭の期間中、世界樹の魔力の影響により、この広場を始め6ヶ所の魔力溜まりを精製。その場所で告白を受けた場合、それが成就してしまうとの事（成率は驚異の120%！？）。

……まあ、占いや迷信好きな生徒なら、試したいと思うでしょうね。結構有名な噂みたいです……。

「要するに、告白を防ぐために警備に参加しろって事ですか？」

「まあ、有り体に言ってしまうえばそうなるの。……どうじゃ？」

「……まあ、私も一応麻帆良学園の魔法生徒ですから」

後でシフトを組みたいので、希望時間を通達して欲しいと言われ、その場はお開きとなった。

途中、神多羅木先生が打ち落とした監視機械が気になりましたが……。

学校を休んでいるネギには、後で伝達しておくとの事。……それにしても、何があったんですか、あれ。

「リンさんに叩きのめされて、未だに立ち直れないみたいです」

そう困った様な顔で教えてくれたのは刹那さん。

その話を聞いて、合流した小太郎さんも呆れた様な表情を浮かべています。

「なっさけないな、ネギも。たかが1回負けたくらいやん。しかも相手はメチャ強の陰陽師やったんやろ？」

「小太郎さんがネギの立場だったらどうですか？」

「そりゃあ、負けたらメツチャ悔しいわ。けど、次は負けんよう必

死で己を研ぐで」

……まあ、ネギはただ負けたってわけじゃなくて、自分の価値観を全破壊された上で負けたみたいですし。

どちらにせよ、ただ負けてもネギは立ち直れなかったかもしれないが。エヴァンジェリンさんに怖い目に遭わされて、登校拒否してたみたいですし。

小太郎さんは……いい意味で体育会系なので、そういった事も全部バネにして成長するんでしょうけど、ネギのようなタイプは1度折れると立ち上がるのに時間がかかりますからね……。

「とにかく、仕事くらいはちゃんとしてもらいたいものです」

そんな風にぼやきながら、街中を歩いていると上から何かが吹っ飛んできた。

人……ですよね？ 何かバチバチ言ってますけど……。

「あれ、超さん？ 何してるんですか」

フードを取ったその顔は、クラスメイトの超鈴音さん。

麻帆良の最強頭脳を自負する天才科学者で、マッドサイエンティスト超包子の経営者だって聞いてますけど。

「おお、レイヤさん。いいところに……私怖い人に追われてるネ。助けてくれないか？」

怖い人って……893ですか？

確かに、何かがこちらへ近づいているようですけど……。

「……………」

あれ？　ちょっと待てよ…………。

超さんと言えば、麻帆良の最強頭脳で機械工学については天才的な科学者……それに「追われてる」？　まさか……。

「……超さん、つかぬ事をお聞きますが……誰に追われているか、明確に教えてくれませんか？」

「え？　あゝ、そ、それは……………」

「まさかとは思いますが、世界樹広場のアレ……超さんが仕掛けたものじゃないんですか？」

案の定、冷や汗流しながら視線をそらされた。

……という事は、彼女を追っている「怖い人」というのは……。

「待ちなさい、超鈴音……あれ？」

「……やっぱり」

超さんを追って来たのは、高等部のガンドルフィーニ先生だった。ちよつと頭の固いところはあるんですが、いい先生です。私も色々とお世話になってますし。

それで、やっぱり世界樹広場での件ですか？

「ああ。確かにある事情から超君は多少のリークは許されているが、わざわざステルスまでかけて我々の会合を覗き見るのは度を超えている。それに、これまで再三にわたり警告も受けての行動だ」

「それは……………まあ」

訝しげな目を超さんに向けると、「あははゝ」と苦笑いされた。

「とりあえず、引き渡してくれないかな？　今回ばかりはどうにも

ならない」

確かに、ここで超さんを引き渡した方が今後のためかもしれないんですが……。

何となく……本能が言ってるんですよね。ここで超さんを引き渡しちゃダメだつて。

「……あの、ここは私に免じて何とかならないでしょうか？ 一応、クラスメイトですし……おそらくですが、記憶も消したりするんですよね？」

「まあ、そうなるね」

「その辺りはどうにかなりませんか？ さすがに記憶処理がされるとなると、このままクラスメイトを見捨てるのもなんと言いますか……」

「ああ、いいアルよ。覚悟もしてたからネ」

ひらひらと手を振る超さん。……うーん、本人が納得しているなら……でも……。

と、悩む私の手の上に何かを乗せてきた。これは……懐中時計ですか？

「何ですか、これ」

「私を庇ってくれたレイヤさんにプレゼントアル。学祭をさらに楽しむためのスペシャルアイテムネ。バンバン使ってくれよろし」

「……はあ」

超さんの発明品なんでしょうけど、あまりいい予感しませんね。一応、後で風峰先生にも報告しておきましょうか。

「じゃ、麻帆良祭でまた会っネ」

そう言って、ガンドルフィーニ先生に連れられて、超さんは姿を消した。

……ここで気づきべきだったのかもしれませんが。“麻帆良の最強頭脳”超鈴音は、ただ記憶を消すくらいでどうにか出来る相手なのかと。

その事で後悔するのは、麻帆良祭2日目の夜。彼女の目的を知ってからだった。

[Side Out]

[Side Chaot]

……ふう、助かったネ。ハカセ。

「まったく、囿になるって言った時は焦りましたよ？ もちろん捕

まる可能性は考慮してましたけど……」

「いやいや、ネギ坊主ならともかく、レイヤさんともなると甘くないからね。予め用意しておいてくれて助かったネ」

ガンドルフィーニ先生も甘い甘い。この私が記憶を消される事に何の対策もしてないと思ってたの力？

記憶処理とは言っても、記憶を上書きするだけ。ならば上書きした部分を消してやればいい。

中にはきちんとそういった解除魔法もあるけれど、今回私たちは科学技術でそれを補ったネ。

「それで、うまくいったんですか？」

「もちろんヨ。カシオペアをレイヤさんに押しつけられたネ」

ネギ坊主なら何の考えなしに使ってくれるだろうけど、レイヤさんは怪しむ可能性が高い。

押し入れに入れっぱなしにはしないだろうが……まあ、いいとこ身につけて使わない程度だろう。

「だからこそ、いくつか策を講じておいた」

……悪いガ彼女には、途中退場してもらう事にしたヨ。

本来、私の知る未来に彼女は存在しない。ここで消えたとしても、問題無いはず。

それに、本当に消えるわけではない。ちよーつと未来に飛んでもらうだけネ。全部終わった後の未来に、ネ。

「……しかし、本当に大丈夫なんでしょうか？」

「ハカセは心配すぎネ。数年かけてようやくここまで来た。今更止まる事など出来ないネ」

「それは……分かってるんですが」

ムム？ 妙に齒切れが悪いじゃない力。

「なんと言いますか……嫌な予感がするんです。その、言葉では言い表せないんですが、嫌な予感が」

「そんな『予感』という不確かな物に頼っては、科学者として失格アルヨ」

「……そ、そうでしたあああああああああああああああ  
あ！！！」

絶叫しながらハカセがのたうち回る。……やれやれネ。

まあ、確かに妙な胸騒ぎは感じるが、そんなもので計画を止めるつもりはさらさら無い。

……そのために、100年後の火星から時間を超えてやってきたのだから。

[Side Out]

「Side Rikuto」

「どうだ、リン」

「ん……ざつと見た感じ、ボクでも解析不可能な技術があるし、やっぱりその可能性は高いかな」

「……やはり、そうか」

俺たちは顔を見合わせ、ため息をついた。

レイヤが超の捕縛したところに居合わせて、その際にこの懐中時計をもらったらしいが……何となく不安だったようで、俺に報告してきた。

……まあ、いい意味でも悪い意味でも、超一派はマッドサイエンティストだからな。さすがに「自爆装置」は組み込んでないと思うが……。

「超鈴音は未来人。それも、100年後の火星人を名乗ってるそうだよ」

「……もし仮に、彼女が未来を変えるために来たのだとしたら……」

それらの単語から導き出される答えは、ただ1つ。

リンも無言で首を縦に振る。……ああ、やっぱりそうなのか。

「……一応さ、ボクの知り合いに魔族がいて、その研究機関が調べてるんだよ。崩壊開始までのカウントダウンについて」

聞きたくない。だが、聞かないわけには……いかないんだろうな。で、どうなんだ？

「まだ詳細までは割り出せてないけど、最短で15年も無いらしい」  
「そこまでかよ……………！」

そう聞かされると、超の行動にもある程度だが納得出来てしまう。  
結局、武の英雄に未来は作れなかった事が証明されてしまったんだからな……………。

……………だが、本当に未来を変えに来たのだとしたら……………。

「リン、チケット持つてるよな？」

「もちろん。あれボクの宝物だもん。しっかり磨いてるよ」

「……………いや、磨いたらダメだろ」

一応、あれ紙なんだしさ。磨いたらダメになりそうなんだが。

「念のために常備しておけ。最悪、彼らの力を借りる事になるかもしれない」

「だね。……………あ、それ持っていていいよ。少なくとも、怪しいところは見当たらなかったし……………」

と、リンから懐中時計を受け取る。

オーバーテクノロジーの塊であるわけなんだが……………どう捉えていいか分からない。

純粹に超の好意から来たかもしれないものを、無理矢理預かっておくわけにも行かないし……………とりあえず、これについてはレイヤの判断に任せよう。

## 第54話：祭の始まり

「Side Aya」

「ふむ……なるほど、それは面白い事になってきましたねえ」

「どうします？ 師匠」

『どうしましょう？』

私が動くと感じられる恐れがありますからね。

ここはやはり、あなた達に任せる事にしましょう。

「というより、頼まれたのはあなた達でしょ？ 私が今更口出しす

るわけには行きませんかからね」

「あ、あはは……」

『それもそうですよね』

幸い、さよさんの存在には気づかれていても、限りなくステルス性を高めれば気づかれないと思います。

……あの龍宮とかゆー人には要注意ですが。前に高速で飛んでるところを捉えられたところから、相当特殊な眼を持ってるようですし。

『らじやです！』

「さてと、私はどうしましょうか」

いい機会ですし、学祭の様子を纏めて記事書きましょうか。

題材は……『射命丸文の麻帆良滞在記』。うん、これがいい。

最近はどうも、あの引きこもりが目立ってきていましたし、この辺で少し格の差というものを教えてやらないと。

(あ、一応陸斗さんにもこの事伝えておきましょうか)

[Side Out]

[Side Rikuto]

俺がここに来て、ちょうど10回目の麻帆良祭、か……。

去年と4年前は大変だった。ああ、大変だったとも。

あのスキマババアがしでかした厄介事の後始末に奔走されて、タカミチは泣いてたっけ……。

「陸斗、現実逃避はよくありませんよ」

「そうそう」

………現在、俺の両隣には俺のよく知る女性が2人、腕に抱きつく形で歩いている。

1人は言うまでもなく紫。そしてもう1人は、カジュアルな服装に身を包んだ緑髪ショートのお姉さん。

なお、顔を見た瞬間「なんているの？」と口を滑らせて、シバき倒されたのは言うまでもない。

だって……あんたはここにいちやダメでしょうが。

「いいえ、私にはあなたを導く責任と義務があります。なぜなら、私はあなたの現地妻ですから」

「余計な誤解を招くからその言い方はやめんかあああああああ  
あ！！」

この人の名は、四季映姫・ヤマザナドゥ。

冥界の幻想郷区域を担当する閻魔であり、紫が最も苦手とする相手でもある。

俺はまあ……幻想郷が色々顔なじみで、その関係でちよくちよく世話になってたりなつてなかったり……。

なお、現地妻というのは無視してくれ。てゆーか、さっさと解散しろ。

「そうはいきません。“委員会”の委員長にして会員1号である以上、他の皆さんのご期待には応えなくては」

「あら、あの組織まだあったの？」

ああ、残念ながらまだあるんだよ。

結成理由を除けば、いかがわしい要因がゼロ。タチの悪い組織なのは言うまでもない。

……なお、1度だけ解散に近い形に追い込まれた事はある。それでもしぶとく生き残っていたとは……。

「で、本当に何しに来たんだよ？」

「あなたに会うためと、お祭りを楽しむため。後はこっちのスキマ妖怪のお目付役です」

「……納得しました」

いや、だって……なあ？

「な、何よ。その目は」

「……お前、4年前のダンゴムシ事件忘れたのか？」

俺にとっての忘れたい出来事では、ダントツでトツプクラスだがな。

「……あれは私の所為じゃないわ」

「じゃあ去年のパンツマン事件は！？」

何があつたとか、そーゆー事は聞くな。

俺が言いたいののは、去年も4年前も、コイツが面白半分で引っかけ回して事態を複雑にして、終息させるのに一苦労だったという事だ。頼むから、今年くらいは大人しくしてくれ。

P P P P P P P P P P P P P P P P

ん、この音は確か……学園側からの緊急連絡だったな。

「悪い。ちょっと呼び出し喰らった。適当に回っててくれ」

[Side Out]

「Side Leiya」

「つまり、この懐中時計……カシオペアは世界樹の魔力を使って稼働する、タイムマシン……という認識でいいんですね」

「うむ、その通りネ」

え？ どうしてこんな状況になっているか？

実は麻帆良祭が始まる直前、懐中時計を弄っていたら急に変な感覚に襲われて、気がついたら周囲が真っ暗……。

時間を見てみると、6月20日の午前4時……6時間以上も巻き戻っていた。

……普通に、懐中時計が原因だと考える方が当たり前ですよね。

それで詳しい事を聞くため、朝からずっと超さんを探していて……開幕直前になってようやく、超包子の屋台にいたのを発見したわけです。

「いや、まさか偶然起動するとは思ってなかったアル。すまんかったナ」

「それはいいですけど……いいんですか？ こんな貴重な物を頂い

ても」

「いいアルいいアル。よく覚えてないガ、困てたところを助けてもらった恩ネ」

ああ、そういう風に記憶操作されたわけですか。

しかし、こんな凄いものをぽんぽんくれる……どこか怪しい気がします。

……いえ、クラスメイトを最初から疑ってはいけませんね。使うかどうかは別として、ありがたく頂いておくとうしましょう。

「そうそう、今日の6時から『まほら武道会』の予選受付があるガ……レイヤさん、出てみない力？」

「まほら武道会……ですか？」

聞いた事はありません。25年ほど前までは麻帆良祭の目玉とも言われるべき大会だったと。

しかし、

「実は、私が他の格闘技大会を合併し、1つにしてみたネ」

「それ、M & a m p ; Aじゃ……」

「細かい事は気にするな。優勝賞金はなんと一千万アル！」

い、一千万ですか……そ、それはちょっと心が揺らぎますね。

最近ちよっとお金が不足気味でしたし、何より薬の研究を進めている身としては、お金はいくらあっても足りないくらいです。

一千万もあれば……あちこちから出世払いで借りている分も纏めて返せるのは間違いありませんね。

「出ますっ……！」

……つい勢いでそう言ってしまいましたが……どうしましょう。

[Side Out]

[Side Konoe mon]

「ネギ坊主の記憶を消したってどういう事だ!？」

そ、そんなに怒鳴らなくてくれ。聞こえとるからの。

それに正直なところ、俺も怒鳴りたい気分なんじゃよ。

「……MM元老院からの直接命令じゃ。処理が行われたのは……ネギ君が凜音様にやられた翌日じゃ」

「それって、ネギ坊主が寝込んでた頃じゃ……まさか」

その「まさか」じゃ。

凜音様に色々言われた事や、レイヤちゃんが人を殺した事も全部、記憶から抹消され、強力なプロテクトがかけられた。要するに、全部無かった事にされたわけじゃよ。

「……ふざけてる」

「全く持って同感じゃよ。……ネギ君は現在、ダイオラマ魔法球で修行中じゃ。修行を担当しておるのは……古矢君じゃ」

「はあ!？」

「……そんなに睨まんでくれ。」

いくら麻帆良学園のトップとはいえ、所詮はMM元老院の下部組織。向こうからの命令には従わざるを得ないのじゃ……。

ここで刃向かえばそれこそ、麻帆良学園にとって最悪の状況が訪れる事も考えられる。

「ここ数日、僕にも箝口令が敷かれておつての。今日になってようやく、皆に伝える許可が下りた」

「……ネギ坊主への接触を控えさせるため、か」

「おそらくの」

ここで他の魔法先生達がそれを知ったらどうなるか？

間違いなくネギ君のところへ行くじゃろう。何をするかはそれぞれじゃが、少なくとも元老院側にとっては嬉しくはない。

「おまけに、ネギ君への記憶処理に関して触れる事は禁止されておる」

「リンについては？」

「特に何も言われなかったが……それでも、凜音様にも控えてもらった方がええじゃろうな」

「……そうだな」

それともう1つ。レイヤちゃんの事じゃが…………。

「何かあったのか？」

「…………いや、何も無かったんじゃ。『正当防衛は充分に成り立つ。問題は無い』とだけ言われた」

そう言うと、風峰君の顔も怪訝そうなそれへと変わる。

儂もおかしいとは思った。これを機に『自分達の監視下に置こうとするのでは？』と思っただからの。

向こうにとってしてみれば、レイヤちゃんは「英雄ナギの娘」ではなく「女王アリカの娘」じゃ。

現在、MMがウェスペタルティア王国…………オスティアを押さえいているとはいえ、正当な王家の血筋である彼女の存在は、あまりにもリスクが大きすぎる。

世間的には「災厄の女王」としての汚名を着せられておるが、アリカ女王を慕っておる者は多い。

レイヤちゃんは、薬にも毒にもなり得る…………極めて重要な存在じゃからな。

「何も出来ないのが、齒痒いところじゃな」

「…………ああ」

今、儂らに出来る事といえば、警戒を強める事くらい。

…………全くもって、くやしいのう。

[Side Out]

「Side Iku」

……えっと、何でいるんですか？

「観光よ」

「観光兼スキマ妖怪の監視です」

ああ、そうですか……。

いやそうじゃなく、何であなたがここに？

「私くらいでしょう？ この人の制止役になれそうなのは」

……まあ、そうですね。

八雲様を制止出来る相手と言えば、

え？ 『式はどうなのか』ですか？ 無駄ですよ。あの人に限らず、

式というものは基本、主に絶対的忠誠を誓っていますから。

そうでなければ、あの式だって常日頃から結界の管理なんてしてませんよ。

「でも、よろしいのですか？ 閻魔様が冥界を離れて……」

「溜まっていた有給を有効活用しただけです。ちゃんと代理の者も送られているでしょうし、せいぜい小町がひいひい言ってる程度でしょう」

……気の毒に。

まあ、それはサボり過ぎて仕事を溜め込んだあの人の自業自得ですし……。

「そうそう、陸斗とは仲良くやっていますか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

なんと言っても、私たち夫婦ですから。

……ああ、そう言えば結婚前に色々ありましたっけ。委員会とか色々……。

ふふふ……思い出したら、ちょっと久々にイラッと来ちゃいましたね。

「……衣玖、落ち着きなさい。バチバチ言ってるから」

おっと、すみません。少し我を忘れていました。

ライバルが多いのは知っていましたけど、あの時はかなり頭に來ました。天子様に制止されていなかったら……本気で殺っていたかもしれせんね。

……あれ、そう言えば天子様も……ふふふふふふ。

「だから落ち着きなさい。顔が怖いわよ」

「あなたは少し、嫉妬深いのをどうにかした方がいいかもしれせんね」

[Side Out]

[Side Kamō]

「それで兄貴、学祭はどうするんだ？」

「うーん、とりあえずクラスみんなのところへは回るつもりだよ」

何でも、MMから来たっていう魔法使いが、兄貴の記憶を消したらしい。

ま、俺っちとしては兄貴が立ち直ってくれたんならいいけどよ。

……もちろん、消した記憶に関してはノートタッチを約束させられたが。

（とりあえず、兄貴にそれを言おうとしたヤツを止めればいいんだよな）

他の魔法先生や魔法生徒は学園長から口止めさせられるだろうが、やっぱり姐さん達やゆえっち達が危ないよな。

……それにしても、のどか嬢ちゃんだけじゃなく、ゆえっちも兄貴の事が……へへへ。

（これは、仮契約チャンス！）

うまい事言えば、ゆえっちも乗ってくるはず！

学祭は大もうけするチャンスだな。……ま、姐さんにはバレないよ  
う気をつけないと……。

「そういえば、昨日コタローと話してた格闘大会には出るんだろ？」

「もちろん！ 古矢先生にみっちり鍛えてもらった分、その成果を試したいからね」

古矢か……なぐんか変なヤツだったが、まあいつか。

## 第55話：波乱続きの学園祭

「Side Iku」

八雲様や閻魔様と別れてしばらくして、学園長室から戻ってきたらしい陸斗と合流した。

……まあ、ネギ少年についてはとやかく言つつもりはありません。私には関係ない事ですし……。そんな感じでしばらく警備のために歩いていて、ふと腕を絡めてみた。

「……悪いな。せつかくの学祭だったのに、仕事ばかりで」

やっぱり、気にしてたんですね。

「気にしないでください。私は……一緒にいらればそれで幸せですから」

「ん」

これは正直な気持ちです。

私としては10年前、「一緒に来て欲しい」と言っただけです。

……いえ、無理矢理にでも付いて行くべきでした。それだけは後悔してます。

「あら……？」

ふと、妙な力の流れを感じたので、世界樹の方を見上げてみる。……光ってますね。いつもより数段。これはもしかすると……。

「マジかよ……………」

青い顔をしている陸斗。…………やっぱりそうみたいですわね。  
要するに告白生徒が出た、と。

顔を見合わせて頷き合うと、力が流れ込んでいる場所を特定し、そこへと向かう。

……そこには、裸になった魔法生徒2名と、のどかさんを庇う形で前に出ているアスナさん。そして……明らかに様子のおかしいネギ少年がいた。

「……………何やってるんです、あなたたち」

思わずこう聞いた私は悪くないはず。

だって……………ねえ？

「ネギのバカが本屋ちゃんに告白されて暴走しました！」

「納得しました」

つまり、そっちの2人は捕縛しようとして返り討ちにあった…………と。

……いくら暴走中とはいえ、それはどうかと思うのですが。

私の微妙な視線を受け、居心地悪そうに顔をそらす2人。

まあ、それはともかくとして、あれをどうにかしなくてはなりませんね。

「ネギ坊主、お前は教師だろう？　ならバカやってないでさっさと仕事に戻れ」

「はい。ですから、アスナさんにしてから仕事に戻らせていただきます」

……は？

そつとアスナさんの方へ顔を向ける。

「……どうも、本屋ちゃんに『キスして欲しい』って言われたみたいで……」

いや、それも告白の定義に当てはまるのでしょうか……。  
どちらにせよ、無理矢理止めなければいけないでしょう。

「……邪魔をするのなら、排除します」

中国拳法の構えを取った瞬間、ネギ少年の姿がかき消えた。  
数コンマ後、右に気配を感じ、咄嗟に右腕でガードする。

びぎぎっ……。

「くっ……!」

思った以上に重い一撃ですね。これが修行の成果、というヤツですか？

いえ、それもあるでしょうけど……世界樹の魔力によるドーピング  
かもしれません。昔も似たような事がありましたからね。

「彼女達に手を出すのは、私たちを倒してからにしてもらいましょ  
うか」

「……わかりました。では、まず衣玖さんからキスで」

ぶちっ

……落ち着いてください、陸斗。

嗤いながら懷からスペルカード取り出さないでください。しかもそ

れ、高威力の上広域殲滅攻撃じゃないですか。  
それに、この乙女の敵に天誅を下すのは私の役目です。

「沈みなさい」

斜め上から羽衣による一撃を叩き付ける。

……防ぎますか。並の魔法使いなら、障壁ごと叩き潰す威力なんです。

ネギ少年は接近し、私目がけて正拳を打ち込む！ しかし、それは羽衣によって防がれ、さらにそのまま羽衣がネギ少年の身体へと巻き付く。

どうにか拘束を破ろうともがいているが……無駄ですよ。

「この羽衣は特別製なので」

……以前も言ったかもしれませんが、この羽衣には私の妖力が染み渡っています。

ハッキリ言うと、陸斗でも束縛から逃れる事は出来ませんし、おまけに陸斗自身の妖力もミックスされていますから。

八雲様曰く「これも一種の宝具だと思うのだけど」だとか。

「……後、私の唇は陸斗だけの物です」

羽衣で持ち上げたまま、電撃を流し込み、そのまま地面へと叩き付けた。

……頭からめり込んでますけど、まあ大丈夫でしょう。せいぜい気絶したくらいのはず。これが乙女の敵の末路です。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

「まったく、相手が10歳だからと言って油断してるからそうなるんだ。慢心は己を殺す。少しは自覚しなさい！」

「はい……………」

「ネギ坊主！ 告白については聞いていたはずだ。それなのにこれか？ 無様にも程があるぞ……！」

「あうっ……………」

高音・D・グッドマンと佐倉愛衣の担当教師はガンドルフィー二なので、連絡をすると飛んできた。……説明したら呆れてたぞ。

で、2人に話を聞いたところ、1度呼び止めて注意をしたとか。それにも関わらず、2人を振り切って逃げて……挙げ句、この騒ぎ。別に学祭デートをとかく言うつもりはない。俺だってしてるようなもんだし。だが、自分の立場と状況を自覚しろと言っているんだ。

「とにかく、ネギ坊主は2人の服代を弁償！あと自分の仕事に対して自覚と責任感を持って！以上！！」  
「……すいませんでした……」

……おっと、もうこんな時間か。

早いところパトロール済ませて交代して、見に行かないと。

「じゃあ後頼む。悪いな、わざわざ来てもらって」  
「いえ。……では、風峰先生もお気を付けて」

そう言つてガンドルフィーニに後を任せ、少し離れた場所で事態の成り行きを見守っていた衣玖の元へ向かう。  
お前にも悪かったな。……こんなバカ騒ぎに付き合わせて。

「いえ。ちょっとスッキリしましたし」  
「そ、そうか？」

そう言えば、ネギ坊主を叩き付けたとき、恍惚の笑みっぽいものを浮かべていた気が……。  
いや、あれは見なかった事にしよう。叩かれたり締め付けられたりするの御免だ。

「そうそう、6時から『まほら武道会』の予選が始まるとき。レイヤも出るみたいなんだが……見に行くか？」  
「はい」

まほら武道会か……超が主催者みたいだし、俺も出ようかと思つたが……衣玖から止められた。  
曰く「あなたが出るのは、出来レースみたいなものです」。……否定出来ないのが嫌なんだが。

[Side Out]

[Side Leiya]

ふむ……年齢制限が無くなったのは嬉しいですね。  
最悪、エヴァンジェリンさんの年齢詐称薬をおうとも思いましたが、私が使うのは少しリスクが大きいですから。

「あれ、レイヤちゃん？」

「……アスナさん、それに木乃香さんと刹那さんも」

いえ、予選受付の時間を待ってるだけですよ。

……何があったか？ ああ、これですよ。

「ああ、格闘大会ね。……ん？ い、いつせんまんえん……」

「……!!??」

ええ、普通にそういう反応来ますよね。

私は……自分の実力を試したいですし、何より一千万が魅力的ですから。

「ん……一千万あったら学費と生活費、全額払えるかも……」

そう言えば、アスナさんって風峰先生に小さい頃からお世話になっていたんでしたっけ。

確かに、生活費や学費って結構行くと思いますけど……。

「よし、私も出る！ 刹那さんも出てみたら？」

「うーん、そうですね……」

あまり無理強いは良くないですよ。

神鳴流剣士は、あまり表舞台に立たないらしいですし、こういった場で技を披露したく無いでしょうし。

『6時になりました。見学者と参加希望者は入り口からお入りください』

おっと、時間ですか。

どこかで聞いたような声のアナウンスに従い、他の人達に混じって中へと進む。

中には幾つもありリングが設置されており、その奥では朝倉さんがマイク片手にアナウンスを行っていた。

……って、あなたでしたか。

『では、今大会の主催者より開会の挨拶を。学園人気NO.1屋台

「超包子」オーナー、超鈴音！！」

……やっぱり出てきましたか、超さん。

朝倉さんに代わって前へ出て、集まった人達を見据えて口を開いた。

「私が……この大会を買収して復活させた理由はただ1つ。表の世界、裏の世界を問わず、この学園の最強を見たい。……それだけネ」

……ここら、裏の世界って言っていていいんですか？

周囲の人達「裏の世界って何だ？」とか言ってますよ。

「20数年前まで、この大会は元々裏の世界の猛者達が力を競い合う伝統的大会だたヨ。しかし、主に個人用ビデオカメラなど記録機材の発達・普及により、使い手達は技の使用を自粛。大会自体も形骸化。規模は縮小の一途をたどた……」

まあ、それも仕方ないのかもしれないね。

誰彼も自分の手札は晒したくありませんし。

私やアーニヤさんだって、人には晒していない切り札を幾つも持ってます。こーゆーのは切り方が重要ですから。

「だが私はここに、最盛期の『まほら武道会』を復活させるネ。飛び道具及び刃物の使用禁止！そして……呪文詠唱の禁止！この2点を守ればいかなる技を使用してもOKネ！！」

ぶっ！？

じゅ、呪文詠唱の禁止って……そんな事、一般人の前で言っちゃダメでしょうが！！

魔法先生がこれ聞いてたら、間違いなく超さんとお捕まってますよ！？

「案ずる事はないヨ。今のこの時代、映像記録がなければ誰も何も信じない。大会中、この龍宮神社では完全な電子的措置により、携帯カメラを含む一切の記録機器は使用出来なくするネ」

……ま、それなら安心ですけど……。

「裏の世界の物はその力を存分に奮うがヨロシ！ 表の世界の者は真の力を目撃して見聞を広めてもらえればこれ幸いネ！ 以上！」

ふむ、どうでしょうか。

もちろん出ますよ？ ですが、いくつか引かかる点が存在するのも確か。

やはりここは、風峰先生辺りにでも相談して……。

「……ああ、1つ言い忘れてる事があったネ」

と、何か思い出したように超さんが再び口を開いた。

「この大会が形骸化する前、実質上最後の大会となった25年前の優勝者は……学園にフラリと現れた異国の子供、「ナギ・スプリングフィールド」を名乗る、当時10歳の少年だった」

超さんはある一点を見つめつつ、そう言った。

……なるほど、腰の引けていたであろうネギへの言葉、ですか。確かに父様の事を持ち出せば、あのバカは普段とは打って変わって積極的になりますからね。

「……ま、どうでもいいでしょう」

予選で当たっても、本戦で当たっても、ぶちのめすだけです。  
私の力を貫き通すために……何より、一千万のために！！

〔Side Leiya〕

〔Side Rikuto〕

おお、やってるやってる。

何でも超が複数の大会をまとめ上げて、1つにしたらしいが……。

「あ、刹那さんとアスナさんいましたよ」

「どれどれ……」

……うん、他のヤツらが相手にならないな。

てか、セーラー服はやめた方がいいぞ。パンツ見え……いえ、何でもありません。だから首に羽衣巻き付けしないでクダサイ、オネガイ

シマス。

「あつちには……タカミチ君ですね」

多分、超の動向を探るために出たんだろ。……ばったばった倒れてるな。

龍宮と古菲、長瀬に小太郎……他にも粒が揃ってるが、本線出場者はやっぱり限られてくるか。

お、あつちのヤツ、『遠当て』使ってる。なかなかやるな。

「なんだ、お前達も来ていたのか」

「エヴァ」

人形のような愛らしさのエヴァと、悪魔風コスチャチャゼロ。

……そういえばお前は出ないのか？ 弟子の成長を確かめるゝとかで。

「メンドクサイ。客席から見分で充分だ。……だいたい、私が出たら優勝確定だろうが」

「……そうだったな」

封印の施された最弱状態ならともかく、今のエヴァは最盛期と同等。麻帆良にいるヤツで太刀打ち出来るのは……俺や衣玖、文に学園長……次点でタカミチぐらいじゃないか？

……紫と閻魔様？ いや、あれは明らかに反則級だから敢えてカウントしてない。

「お前が出るなら、面白い事になったかもしれないがな」

「……いや、全っ然面白くないから」

俺たちがガチでやり合ったら……マジでヤバイ。  
そう、いわば「麻帆良終了のお知らせ」？

……まあ、俺と紫が本気で殺り合うのよりはずっとマシだな。

「どういう意味だ？」

「紫の能力は“境界を操る程度の能力”。そして俺の能力は……“  
虚無を司る程度の能力”」

虚無とは“始まり”と“終わり”の力。そのため、俺と紫の能力は  
極めて近く、限りなく遠い。

もしも、俺たちが互いに本気でぶつかり合った場合……概念その物  
が崩れ去り、最悪世界が滅ぶ可能性だってある。

なお、俺と紫が本気で殺し合いをするのは閻魔様から固く禁止され  
ている。……実際、昔マジで殺り合って危ないところまで行った事  
があるし。

「……………マジか？」

「残念ながらマジ」

あの頃の俺は若かったからな……………。

ほんと、色々あったとしか言い様が無いんだよ。

「陸斗、レイヤさんがいましたよ」

「……………お、ホントだ」

〔Side Out〕

「Side Leiya」

「や、やるじゃねえか嬢ちゃん。……本戦頑張れよ」  
「ありがとうございます」

何だか凄い名前の遠当てを使ってくる人を吹き飛ばし、場外にした。それで今、リングに残っているのは私を含めて3人。……おそらく、フードを被ったあの男の人は進出確定です。

力を隠しているとはいえ、私には分かる。間違いなく最強クラス……エヴァンジェリンさんや風峰先生と同等の位階に位置する実力者だと。

……じゃ、さつさと次行きますか。

「と言うわけで、残ったのは私とあなたなんですけど……さつさと降参してくれませんか？」

そう、既にスタボ口なネギに提案する。

私は迫ってくる相手だけを吹っ飛ばしてましたが、どうやらネギは自分から無茶苦茶に飛び込んでみたいで、余計にダメージを受け

ている様子。

……それでも実力は前よりマシになっているようですけど。

「嫌だよ。僕と同年で父さんがこの大会で優勝したんだ。僕も……」

「ああ、それは無理です」

きっぱりとそう、切って捨てる。

何でかって顔ですね。それは……。

「あなたはここで、私に無様に吹っ飛ばされて予選落ちするからです」

「ッ!？」

その言葉にカツとなったのか、瞬動で距離を詰めて私に掴み掛かろうとする。

瞬動術はなかなかですね。技も形になっていますし……ですが。

「また甘い」

私に迫っていた右腕を弾き、そのままネギの背後へ回り込み、腕を絡めて首を絞める。

「……あ、吹っ飛ばされてって言ったの訂正します。気絶して予選落ちでした」

そう言うと、反論される前に頸動脈を締め上げ、意識を無理矢理シヤットダウンさせる。

本気でやったら殺しちゃいますからね。ある程度は手加減しつつ、気絶させる程度に留めました。

さてと、これで予選は終了。本戦ではいたい、誰と当たるんでしょっね…………。

## 第55話：波乱続きの学園祭（後書き）

Q・もしも衣玖ではなく、陸斗がネギと戦ってたら？

A・ミンチにされてました。

## 第56話：激戦の予兆

〔Side Rikuto〕

……おいおい、これはまた災難だな。

正面に張り出された本戦トーナメント表を見て、俺はそう思った。

……いや、俺だけじゃないな。

多分、衣玖やエヴァも同じ様な事考えてるだろうし。

……ああ、肝心のトーナメントの組み合わせだったか。

第1試合：佐倉愛衣vs村上小太郎

第2試合：大豪院ポチvsクウネル・サンダース

第3試合：長瀬楓vs中村達也

第4試合：龍宮真名vs古菲

第5試合：田中vs高音・D・グッドマン

第6試合：レイヤ・スプリングフィールドvsタカミチ・T・高畑

第7試合：神楽坂明日菜vs桜咲刹那

第8試合：北山史郎vs山下慶一

……とりあえず、これを見て思った事はいくつかある。気になる名前もいくつか見られるし……。

それにしても北山のヤツ、いつの間にエントリーしてたんだ？ それっぽい姿は見なかったんだが……。

「で、お前的にはどう思う？」

そう、隣の衣玖に尋ねてみる。

こいつはある意味、俺よりもそーゆー目に優れてるからな。面白い意見が出てくるかもしれない。

「そうですね……見応えのある試合はいくつもありますが、気になるのはやはり、クウネル・サンダーズなる人物でしょうか」

ああ、明らかに偽名だよな。

どうもレイヤと同じブロックにいたヤツみたいだが、フードを目深に被って顔は見えなかった。

しかし……どうも気になるんだよな。名前の響きとか、雰囲気がよく知ってるヤツに似てるような気がするし。

「それより、レイヤさんは大変ですね。初めからタカミチ君ですし」  
「だな」

いや、いくらレイヤと言っても、タカミチ相手ではかなり厳しい。

詠春みたいに隠居してて実力が衰えてるならともかく、タカミチは現役……それも今なお世界中を飛び回り、悪の秘密結社やらとも激戦を繰り広げている。

ハッキリ言って、レイヤがマトモに戦った場合、勝てる要素はほとんど無い。個人的には応援したいけどな……。

「しかし、大半が3 - Aの関係者じゃないか」

「そうですね」

そう考えると、思わず笑ってしまう。

……まさかとは思うが、こうなるのも超の計画通り？ いや、何かそう考えると怖くなってくるんだが……。

「明日は楽しみだね、レイヤちゃん。お手柔らかに頼むよ」

「若輩の身ではありますが、全力で当たらせていただきます」

さすがはレイヤ。慢心も何も無いな。

……あれ、そう言えば予選落ちしたネギ坊主はどこ行ったんだ？

[Side Out]

[Side Negi]

……負けた。レイヤに勝てなかった。

優勝するどころか、予選で……それもレイヤにあつという間に負けた。

「悔しい……」

何でレイヤに……いつもいつも、どうしてレイヤばかり……。

6年前だつてそうだった。父さんが助けてくれたのは、レイヤじゃなくて僕だったんだ。杖だつて、レイヤじゃなくて僕がもらったんだ。

なのに、どうしていつも……レイヤばかり。

「ネギ坊主、予選落ちは残念だったネ」

「……超さん」

どうしたんですか、大会の準備とかで忙しいんじゃない……。

「いやいや、ちょっとネギ坊主に用事があつてネ」

「僕に、ですか？」

「うむ。ネギ坊主……単刀直入に言わせてもらうが……」

そう、一旦区切つて微笑むと、超さんは言い放った。  
僕にとって、とても衝撃的な言葉を。

「過去を変えたいと、思わないか？」

〔Side Out〕

「Side Leiya」

1日目の打ち上げにちよつと顔を出してから、私は別荘で1人対策を考えていた。

改めてトーナメント表を見ても、強敵ばかり。中でも……私が今、最優先で対策を考えなければならぬのはタカハタさん。

超有名人なので、情報については事欠かなかったのですが……問題は戦い方ですね。

「……そういえば昔、ネギが何か言っていたような……」

ちよつとだけタカハタさんに戦い方を教わった時、『素手で100mの滝を真つ二つに割った』とかどうか……。

あの時には「何バカな事言ってるんです」と言いましたが、今考えれば充分にあり得る。タカハタさんは究極技法“咸卦法”の使い手ですし。

「それに予選での相手の倒し方……」

あまり注意して見ていたわけではありませんが、予選相手を手も触れずに倒していましたっけね。

調べてみても大した情報も出てきませんでしたし……本当にどうしましょう。

「随分考え込んでるみたいだな、レイヤ」

「風峰先生、それに衣玖さん……」

あれ、どうして2人とも水着……うう、衣玖さん大きいですね。  
女性としての魅力を見せつけられているようで、ちょっと凹みます  
……。

「おいおい、お前まだ10歳だろ？ あと5年もすれば成長するつて。母親もスタイル良かったし……」

「り・く・と？」

「………何でもございません」

い、今……衣玖さんの背後に黒いオーラのようなものが……！  
かなり背筋がぞつとしたんですけど。

「大方タカミチ戦の対策でも考えてて、ほとんど思いつかないってところか？」

「………はい」

「どうする？ 俺からそれとなくネタバレしてもいいが………」

た、確かに風峰先生はタカハタさんとは旧知の仲。

大戦期からの付き合いみたいですし、戦い方も当然知っているはず。  
……いえ、やっぱりやめておきましょう。

「どうして？」

「だって、攻略本見るのつまらないじゃないですか」

ここで風峰先生から聞いたなら、それ完全にズルです。  
そうやって勝っても、嬉しくないです。……それで負けたら恥以外の何者でもありません。

……でも、私ゲームとかってほとんどした事ないんですけど、どう

してこんな言葉が出てきたんでしょう。

「……そーゆートコ変わんないな」

「え？」

「ま、いいさ。じゃあ、1つだけヒントだ」

そう言うのと、人差し指を空に向けてピツと立てる。

……あれ、このポーズどこかで見た事があるような……。

「タカミチの体質は知ってるな？」

「え、ええ。先天的に呪文詠唱が出来ないと……」

「そこがヒントです」

ええ！？ 今のどこがヒントなんです！？

「タカミチ君は魔法が使えない。なら、予選のアレは魔法ではない事になります」

「た、確かにそうなりますけど……じゃあいったい何なんですかな？」

「おっと、ここまで。俺たちがタカミチに許可取ってるのはここまでだから」

タカハタさんに許可、ですか？

「ええ。レイヤさんとタカミチ君の戦闘力の格差はかなり激しいですし、これくらいのハンデはあっていいでしょうみたいに聞いてみたら、『ヒントの度合いは任せます』と言われたので」

「何も知らないまま戦っても、勝負は見えている。だから、ちょっとだけヒントってわけだ。……それだけでどうにか出来る相手じゃないかな」

……確かに。いくら戦い方を掴んだとしても、所詮はそこまで。  
タカハタさんは究極の努力家。圧倒的に経験値で私を上回っている。  
……こればかりは覆せない。  
真正面からぶつかっても、まず勝てない。無詠唱呪文でも、あまり  
派手なものは使えませんし……。  
ここはやはり、手札の切り方を考える必要がありますですね。いく  
つか切り札も使う事になるかもしれませんし。

〔Side Out〕

〔Side Chaot〕

今のところは計画通りネ。  
しかし、やはり問題となってくるのは本来いなかったはずの存在……  
…風峰陸斗やレイヤ・スプリングフィールドの存在。

今となつては、彼らの危険性を考慮して計画を中止する事など出来ない。

なら、私に出来るのは計画を確実に遂行する事ネ。

「それでハカセ、例のものの準備は？」

「問題ありませんよ。田中さん量産型も整備完了してますし、後は」

「でも意外でしたね、ネギ先生がこちらに協力してくれるとは……」

そうでもないヨ。

我がご先祖様は幼少期、ナギ・スプリングフィールドの背中ばかりを見ていたとされている。

それに6年前の村の惨劇が、心に深い闇を生み出すきっかけともなっている。

つまり、それらの事を引き合いに出せば、簡単に墜ちる。……いくら頭がいいとは言っても、所詮は10歳の子供ネ。

「その反面、レイヤさんを引き入れるのは不可能と思われるガ」

歳に似合わず、レイヤさんは極めて冷静な判断力を持っている。

おそらく、私が何らかの取引を持ちかけても、一蹴されるのがオチ。

……けれど、彼女は心の奥底で何かに揺らいでいる。そこを突くのはそう難しい事でもない。

心の揺らぎを軽くつつけば、彼女はその悩みに囚われる。さらにダメ出して退場してもらうヨ。

「ですが、最大の懸念と言えば、風峰先生と近衛凜音さんですよ」

「……………確か二」

彼らこそが今の私たちの最大の障害。

特に風峰陸斗の存在が、私の知る過去と大きく食い違わせていると言っている。

特に、学園教師の大半が「正義」に固執する歪んだ思想の持ち主だたはずが、真つ当な倫理観を持つ教師となっているのが大きい。問題は彼らが私たちの計画にどの程度気づいているかだガ…………。

「茶々丸は普通に話しちゃいましたからね。超さんは火星人だって……………まあ、その辺りは私のうっかりネ」

唯一の救いといえば、計画の内容をバラさなかった事ヨ。

「おそらく、彼らは未来を改変する事には気づいている。しかし、私たちがどんな計画を立てているかまでは気づいていない。気づかれる前にさっさと進めるしかないネ」

「ええ」

マトモに戦っても間違いなく負ける。ならば、気づかれぬ内に進めるしか無い。

そう、まほら武道会もそのための布石。

ネギ坊主が予選オチしてしまったのは想定外だが、不幸中の幸いにもこちら側に引き込めた。……………せいぜい隠れ蓑として頑張ってもらうネ。

[Side Out]

〔Side Rin〕

列車から降りると、そこは辺り一面砂浜。  
僕が降りると同時に、列車は再び走り出す。……さて、と。

「預けていたものは引き取ってきたし、これで大丈夫……かな」

ボクの手には1つの箱。中にはカードが1枚。……正直言うと、これは使いたくなかった。

何でかって？ あまりにも反則級的能力だからだよ。

正直なところ、ボクはこの手の能力は好かない。ゲームで改造コード入れて遊ぶのと同じ。所詮はズルだからね。

下手に所持してて無くしたり、奪われたりしたら危ない。だから、ボクの知り得る限り確実に安全な場所で預かってもらってた。

……あそこなら、チケットが無ければ入れないしね。

「でも、そう言ってられる状況じゃ無いかもしれないし」

カードには、今よりも幼いボクの姿が描かれている。

10歳前後のボクが、厚みのある一冊の本を抱きかかえた姿。……

そつ、近衛凜音として本当の始まりを告げた、あの夜の……ビギン

ズナイトのボクの姿が。

「……しかし、これ相当ヤバイかもしれないね」

念のため、オーナーにもそれとなく意見を聞いてみた。

超鈴音が未来を変えるために過去へとやってきた未来人かもしれない、と。

もちろん、今のところは状況証拠しかない。茶々丸の証言だって、超がそう言っているだけだし。

あの懐中時計についても、確かにボクの知らない未知の技術が使われていた。しかし、それが未来の技術だとは限らない。別世界のものかもしれないし、本当に現代の火星在住の宇宙人かもしれない。……だけど、オーナーの意見はある意味、弛んでた気合を引き締めるには充分過ぎるものだった。

『彼女がこの時代に来た時点で、大幅に未来が変わった事は言うまでもありません』

ついさつき、オーナーと交わした会話が脳裏をよぎる。

会話の内容は主に、『仮に超鈴音が未来人で、この時代に「いるはずの無い」存在だった』と仮定した時の事。その場合、本来の時代とどの程度差違が出ているのか。

まず、超包子は存在しなくなる。

彼女が資本を立ち上げて、四葉五月……さっちゃんをシェフとして重用したのだから。

……多分、さっちゃんは超包子ではなく、部活動の方で有名になってたんじゃないかな。

それに、茶々丸の事もある。彼女の制作者に超は名を連ねている。

ちょこっただけ透視してみたけど……彼女に使われている技術は、ボクでも解析不可能な部分もあった。この辺りはカシオペアと同様だね。

どんな経緯で生まれたのかは知らないけど、その場合、歴史が大幅に食い違ふ事になるのは明白。

『近い将来、彼女は何らかの形で報いを受ける事になるでしょう。

……いえ、もしかしたら既に報いを受けているのかもしれない』

『……それ、どゆ事？』

念のために聞いてはみたけど、オーナーは答えてくれなかった。…

…まあ、未来に関わる事は教えてくれないのが当たり前だけど。とりあえず、陸斗にはちゃんと話しておかないとね。

……そう、この時ボクらはまだ気づいていなかった。

陸斗やレイヤちゃん、そしてボクがこの世界、この時代に存在する事によって、既に超の計画は意味の無いものになっていた事に。

同時に、超自身がこの世界にとっての異分子になりつつあるという事に。  
イレギュラー

それに気づくのは皮肉にも、全てが終わった後なんだけど……。

## 第57話：開幕、まほら武道会

〔Side Rikuto〕

麻帆良祭2日目 AM6:30

あの後、遅れて別荘にやってきたアスナ達の稽古を見つつ、適当に休んでから、俺たちは本戦会場の龍宮神社へと来ていた。

チケット？ ちゃんと事前に前売り券を買っておいた。……何故か、こっちの2人の分まで買うハメになったけどな。

「……てか、何で俺が金出さなきゃならないんだ？」

「仕方ないじゃない。私たち、こっちの世界のお金持ってないんだし」

まあ、そりゃあ……そうだけどさ。

納得いかない顔をしていると、突然閻魔様が俺にこう尋ねてきた。

「それはともかくとして陸斗、あなたの見立てではどうなのですか？」

「何の？」

「まほら武道会です」

……ああ、そっちな。

トーナメント表を見てみても、実際粒は揃っている。

アスナやレイヤ達はもちろんの事、高音・D・グッドマンは操影術の使い手。多少油断しやすいところはあるが、実力的に見れば充分優秀だ。

……ま、それとは別件で思うところはあるんだが。

「と言つと？」

「……………刹那の事だ」

実はこれは、アスナに相談された事でもある。

俺も前々から感じていたが、少し弛んでいる気がする。

雰囲気は前よりもずっと柔らかくなつて、打ち解けやすくなった。これは俺から見てもいい傾向だ。前の刹那は抜き身の刀みたいで、周囲とはギスギスしてたからな。

「話は聞いています。上白沢慧音や魂魄妖夢と同じく、半妖の子……でしたね」

「それだけじゃない。……白鳥つていえば分かるか？」

その言葉に、閻魔様も納得したような顔になる。

烏族、すなわち天狗の血を刹那は半分引いており、ただそれだけならば黒い翼を持っていた。

しかし、通常のそれとは違う白い鴉は、古来より吉兆の証とされていた。つまり、通常より霊格が高い事を示している。

そういつた存在は禁忌とされ、大半は迫害される。……刹那がどんな幼少期を送ったかは自ずと想像はつく。

「京都の一件で、自分の生まれを受け入れてはいますが、納得はしていない様ですから」

衣玖もそれとなく話してはみたものの、やはり芳しくないらしい。

この辺りには神鳴流の教えが大きいのかもしれない。神鳴流は退魔師。魔に属する相手と敵対するのが理だからな……。

「……機会があれば、私から説教すべきでしょうか？」

「あ、それいいかも」

閻魔様の言葉なら、さすがの刹那も聞き入れるかもしれないし……。

[Side Out]

[Side Leiya]

私はアスナさん達と一緒に、選手控え室へと来ていた。

もう既に他の選手は集まっており、身体を動かしている人もいれば、じっと瞑想している人もいる。

「おはよう、レイヤちゃん」

「タカハタさん」

いつも通りの白スーツ姿のタカハタさんが、私たちを出迎えてくれた。

今日、私がぶち当たる……“最強”と呼ばれる者達の位階に位置する、最初の相手。

凄く不安であると同時に、凄く楽しみでもある。……私も月詠さんの事をどうこう言えませんか。

「今日はよろしく願います」

「……うん、昔よりずっといい顔をするようになったね」

そう、でしょうか？

そんなに変わったとは思いませんけど。

すると、ちよつと呆れたような顔のアスナさんがタカハタさんに……。

「タカミチ、あまり調子乗って派手にやり過ぎないようにね」

「わかってるよ。本気でやってバレても困るからね」

……そういえば、アスナさんとタカハタさんってどのくらいの知り合いなんですか？

普通にタメ口使ってますし、付き合い長いと思いますけど。

「ん……まあ、カレコレ10年かな」

「早いものだね。……昔のアスナ君とは大違いだ」

「……ま、そうね」

10年、ですか。

私が生きているのと同じだけ、この人達には絆がある。

……何となく、羨ましいですね。

[Side Out]

〔Side Takamichi〕

……レイヤちゃんは変わった。それもずっといい方向に。  
彼女の昔を知る者としては、喜ばしい事だよ。

（ねえ、タカミチ。さっきレイヤちゃんが変わったとか言ってたけど……）

（……ああ、そうだね）

レイヤちゃんは、昔はちょっと人を拒む感じが大きかった。

……尤も、その原因の大半は僕ら“紅き翼”にあるのだけど。

（幼少期のレイヤちゃんは、英雄の子供を求める大人達に辟易していた。時には、襲われた事だつてあつた）

彼女の祖父、メルディアナの校長の話によると、ほとんどの大人は

彼女やネギ君を通して、ナギを見ていた。

……いや、それについてどうこう言うつもりは無い。もしかしたら僕も同じ様に、ネギ君やレイヤちゃんの後ろにナギを見ていたかもしれない。

ネギ君はそれに気づいていないみたいだけど、レイヤちゃんはそういった相手には敏感で、幼少期から心を磨り減らしていた。

……そして、極めつけにはあの事件。ナギを憎む相手による襲撃。

（襲われたって……ほんと？）

（残念ながらね。幸い軽傷で済んだし、犯人も捕まった。……ただ、レイヤちゃんはその一件でさらに心を閉ざすようになった）

彼女が心を許していた相手といえば……実の祖父にネカネ君、幼なじみのアーニヤちゃんぐらいかな。

実の兄のネギ君にも心を開かず、大半の大人を拒んでいた。年の近い子供達にも、アーニヤちゃんを除いては必要最低限の接触しかしていなかったらしいし……。

（日本に来て、君たちのクラスメイトになって……彼女は本当に変わった）

その中でも1番大きかったのは、陸斗さんとの交流だろう。

……ネギ君との仲が冷え切っているのに対し、陸斗さんとは実の兄妹のように見えるのは……本当に皮肉だけど。

〔Side Out〕

「Side Rikuto」

四方を水上に囲まれた特設リング。

15分間の1本勝負。色々とルールは定められているが、要するに問答無用の真剣勝負というわけだ。

「そろそろ始まりますね。……第1試合は犬上小太郎と佐倉愛衣となってますが」

「佐倉？」

……はて、それって昨日の魔法生徒だったような気がする。それに高音もそうだし、何でこれに出てるんだ？

「もしかしたら、ネギ少年のお仕置きのために参加したのかもしれない」

衣玖の言葉に、一瞬そうかもと思ってしまった。ぶっちゃけ、ネギ坊主が昨日の暴走の後、これの予選に参加したらどう思うか？

……普通に反省してないよな。パトロールもしてなかったし……。今考えると、俺でも「え？」と思うぞ。

「でも、ネギ坊主は予選落ちしてるぞ」

「標的をレイヤさんに変えたとか」

……あり得る。

佐倉はともかく、高音はレイヤの事に納得していない。

表立ってどうこう言っていないが、それでも内心不満だらけだろうな。とりあえず、うるさく何か言うようだったら……俺もちょっと説教しないとならないかもしれない。

「遅くなりました」

と、試合が始まる直前になって、閻魔様と紫が戻ってきた。俺たちの分の飲み物や、フライドポテトやたこ焼きなどの軽食が、その手のお盆に載せられている。

「いや、今から始まるところだ」

「……ふーん、魔法使いに妖狼のハーフね」

リングに出てきた2人を見て、紫がそう呟く。

小太郎は狗族……要するに、狼の妖怪の血を半分引いている。

……お、佐倉がアーティファクト出てきたな。あれは………箒？

「だけどあの子、戦闘向きじゃありませんね」

さすがは閻魔様。やっぱり分かるか。

佐倉の能力は戦闘向きじゃなく、あくまで後方支援型。感知能力の方がずっと強い。

……多分、あの幕も戦闘能力は無いと思う。

そんな事を考えている内に、佐倉が瞬動で距離を詰めてきた小太郎に吹っ飛ばされて……池に落ちた。

「掌底アップー……いえ、ただの風圧ね」

「小太郎君、フェミニストですからね」

その辺は立派だと思うがな。

……くしゃみで服を脱がす、どこぞの英国紳士と比べたら。

そういえば、どこ行っただアイツ。予選でレイヤにやられてからずっと見てないが……仕事してるのか？

「……溺れてますね」

「小太郎が助けに行っただぞ」

てか、泳げなかったのか。

[Side Out]

「Side Leiya」

第2試合。……やはり、あのクウネルという人は相当な実力者で間違いない。

カウンター気味の一撃を入れてKOしたけど、間違いなくあれは偶然を装った一撃。

可能な限り、自分の実力を晒したくないという強者の考え。

「気をつけた方がいいですよ、あの人……間違いなくタカハタさん並み……いえ、それ以上の実力者です」

効果は無いとは思いますが、一応そう小太郎さんには言っておいた。そんな言葉で立ち止まったり、怖じ気づいたりするような人じゃないのは、京都の時によく分かってますし。

実際、あまり気にした素振りは見せなかった。

「さて、見所はやはり第4試合ですね」

第3試合は中村達也vs長瀬楓。

気の練度はなかなかでしたが、やはり単純な力量では楓さんが上回り、呆気なく終了。

そして第4試合。私が楽しみにしていた試合の1つでもある、龍宮さんと古菲さんの試合。

リングに立つ2人から目を離さずに、隣にいる楓さんに尋ねる。

「楓さん、単刀直入にお聞きます。この試合、どちらが勝ちますか？」

「そうでござるな……まず、単純な力量で言えば真名の方が圧倒的に上でござる。」

それもそうでしょうね。

龍宮さんは重火器戦闘に特化しているのに対し、古菲さんは中国拳法の達人。

しかし、こういった戦いで重要になるのは実戦経験の有無。「百の訓練より一の実戦」とエヴァンジェリンさんも言うように、大きく成長するのは実戦の中。

古菲さんは対人戦闘の経験こそ豊富でしょうけど、実際に命の賭かった戦闘をした経験は少ない。が、それに対し龍宮さんは、本当の戦場を知るプロ。

おそらく、タカハタさんクラスの实力者でなければ太刀打ち出来ないでしょう。

「古に勝機があるとすれば、近接戦闘に持ち込むしかないのでござる」  
「……問題は、そうさせてくれるかですが……」

まほら武道会において、重火器の使用は禁止されている。もちろん、エアガンやそれに類するものも。

京都で龍宮さんが使用したのは、改造されたエアガン。それらを使えないとなると、どんな戦法を採るのか……。

そう考えている内に試合が始まり、それと同時に古菲さんが後ろへ吹っ飛んだ。

「今のは……」

ちゃりーん、と甲高い音が響く。

何かはよく分かりませんが、小銭が落ちたの音のような……。

『こ、これは……五百円玉!?』  
『あれは羅漢銭ですね』

朝倉さんの言葉に、解説席の豪徳寺さんがそう解説する。

羅漢銭……確か小銭を相手に向かって打ち出す、指弾の一種と聞いた覚えがあります。分かりやすく言えば、銭形平次の銭投げですね。五百円玉は硬貨では最大の大きさですし、それを弾いて撃ち出す。

……これはかなり痛いでしょう。

……いえ、頭部に直撃はしていない。おそらく、当たる瞬間自分から後ろへ跳んでダメージを減らした……。

「おや、レイヤ殿。よく気づいたでござるな」

「目はいいんです」

動体視力は高い方ですから。

案の定、龍宮さんの呼びかけに古菲さんが立ち上がった。

「始まるでござるな」

「……………ええ」

服の袖からシリンダーのように五百円玉が出てきて、次々と撃ち出される。

あのゆつたりとした服は、弾を隠すためのカモフラージュですか…

…。

マシンガンのような連射で撃ち出されるそれを、古菲さんは避けていくが……明らかに疲労が蓄積されている。

接近戦にもつれ込めば、勝機はある。だけど……………。

「龍宮さんがそれをさせてくれるはずがない……………」

と、その瞬間、

瞬動術ではない。あれは八極拳の歩法技能の1つ、活歩。

龍宮さんの懷に潜り込む……が、零距离で放たれた五百円玉が顎を捉え、古菲さんの身体が宙を舞う。

リングに落ち、立ち上がろうとするが、四肢目がけて五百円玉の連射が撃ち込まれた。

……あれをあれだけ撃たれたら、さすがに……。

「いや、まだでござる」

「え？」

確かに古菲さんの目は、諦めていない。

意識を刈り取るために撃ち出された五百円玉が、飾りだと思っていた布によって防がれ、それがそのまま龍宮さんの左手ごと顔に巻き付く。

「ふ、布槍術！」

確かに中国拳法では槍の類を得意としますが、あんなものまで槍に変えるとは……！

……失念していました。古菲さんもまた、極限たる努力によって達人級の実力を身につけた猛者。あの程度の逆境で諦めるような人では無い。

龍宮さんが右手からの連射で拘束を撃ち抜くが、古菲さんはしなやかに槍撃を繰り出す。

「……………すごい」

そうとしか言えない。

あれは私がまだ行き着かない、本当の達人による戦い。

目の前で繰り広げられる激戦に、目が釘付けになった。

五百円玉が古菲さんの左腕に直撃するものの、左腕に巻き付かせた布を龍宮さんごと引き寄せる。

「いかん！ 真名は既に攻撃を！」

「いえ、古菲さんの狙いは……………！」

2人の影が重なった瞬間、鈍い音が響き渡り、古菲さんが膝を突いた。

最後の一撃は不発……………そう思ったのと同時に、龍宮さんの背中が爆ぜ、倒れた。

やはり最後の一撃は硬気功、そして浸透剄。硬気功によって攻撃を防ぎ、浸透剄によるカウンター……………。

『……………10！ 古菲選手勝利！ 龍宮選手を下し、2回戦に進出です！…！』

……………まあ、とりあえずドクターストップに行きますか。

リングから降りてきた古菲さんに近づき、何も言わずに左腕に触る。

「あひやいつ！？」

五百円玉が直撃した箇所軽く触れたら、派手に痛がった。

念のために左腕を取り、気をつけて触診する。……………あー、やっぱりポツキリ逝ってますね。

「……………さて、古菲さん。救護室へ行きましょうか」

「えと、次の試合は？」

十中八九、ドクターストップかかるでしょうね。

木乃香さんに頼んで治してもらってもいいんですが、あれ1日1回ですし、なるべく使わせたくないんですよ。  
かといって、私は骨折まで治せませんし……それに骨折だったら自然治癒が1番いいんです。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

「ありゃ折れてるな」

「折れてますね」

試合後の迅速な行動から、レイヤも即座に見破ったみたいだが。

……まあ、龍宮と戦って骨折で済んだのなら、それはそれで凄いとは思っただけだな。

「しかし、彼女……完全に本気では無かったようですね」

さすがは閻魔様。そこを見抜いていたか。

龍宮が完全に“殺る気”で来てたら、古菲はまず瞬殺されている。

これは重火器使用禁止と真っ向からの真剣勝負という、リングの上での戦いだっただからこういう結果になった。

……もちろん、それなりに本気だっただろうがな。

「さて、レイヤさんの試合は次の次ですが……」

タカミチの“無音拳”はオールレンジで戦えるし、初見の相手はまず見切れない。大半は何が起きたか分からぬままKOだ。  
タカミチ戦の対策は出来たのか……見物だな。

「陸斗的に、レイヤ・スプリングフィールドの勝率はどのくらいなのかしら？」

不敵な笑みを浮かべながら、紫がそう尋ねてくる。

……こういう場だし、タカミチも出力はともかく“殺る気”では来ないだろうから……せいぜい3割ぐらいじゃないか？

もちろん、レイヤの手札を全て知ってるわけじゃないし、その手札の切り方によっては、残り7割を覆せるかもしれないがな。

## 第58話：Ramble Princess

..... 5年前

「やあ、君が.....レイヤちゃんだね？」

「.....あなたは？」

「タカミチ・T・高畑。君のお父さんの.....知り合い、かな？」

「.....そうですか」

「興味なさそうだね」

「.....碌な父親じゃありませんから」

「まあ、それは確かに.....」

「それで、タカハタさんは何のご用でしょうか？」

「レイヤちゃんに会って見たかったから、かな？」

「.....英雄の娘に、ですか？」

「いいや。君はレイヤ・スプリングフィールド。確かにナギ・スプリングフィールドの娘だけど、そこはレイヤちゃん自身とは関係ないだろう？」

「.....」

「君に会って見たかった。ただ、それだけだよ。……それじゃ、またね」

「……………はい」

「Side Rikuto」

第5試合：高音・D・グッドマンvs田中。

この試合を一言で言い表すならば、脱げた。それだけだ。

「どうでもいいが、羽衣をそろそろ解いてくれないか？」

なお今現在、俺の視界は衣玖の羽衣によって封じられている。というのも、田中のビームが高音に直撃。制服が脱げたから。何やってるんだと思った瞬間、羽衣が顔に巻き付き、俺の視界を封

じた。……ここまでしなくてもいいだろうに。

「……そうですね、もうすぐ始まるみたいですし」

その眩きの後、羽衣が俺の顔からしゅるしゅると離れていく。  
これ、下手したら窒息してるぞ？

「それにしても、あの坊やがねえ……」

くすくすと笑う紫。

考えてみれば、タカミチとは10年以上前に会ったつきりだったな。  
去年や4年前は顔合わせてないし。

しかし、もう10年だ。この10年の間にタカミチは驚異的なまで  
に成長した。

それこそ、かつての“紅き翼”おれたちに迫る勢いで。

(……さ、お前達の力、たっぷり見せてもらおうか)

[Side Out]

「Side Leiya」

タカハタさんと並んで、リングへと上がり、それぞれ向かい合う位置に立つ。

……あの後、風峰先生のヒントの意味を自分なりに考えてみた。魔法が使えない人間がどのように戦うか。

それはやはり、体術や剣術のような“技”へ全てを昇華するしかない。

タカハタさんは何か武器を使うようには見えないし、おそらくは体術。

（しかし、ただの体術では昨日の“あれ”は説明がつかない）

改めてその光景を見ていた人から話を聞いても、不可解だった。しかし、不可解だからこそ、答えは見えた。

『それでは皆様、お待たせしました。第6試合……………』

タカハタさんの使う技の正体。そして、それに対抗するための策。それは……。

『Fight!!』

（『戦いの旋律』！）

試合開始と同時に、魔力供給呪文で身体の隅々まで魔力を行き渡らせる。

そして、足に魔力を集中。体勢を低くして一気に地を蹴る！

「おお……」

頭の上を“何か”が通過するが、私には当たらない。

タカハタさんの懐へ飛び込んだと同時に、下段から捲い気味に右正拳を撃ち込む。

右腕で防がれたが、そのままさらに蹴りを放つ。

「くっ……」

タカハタさんの腕は既にポケットから出ている。つまり、この攻撃は『ただのパンチ』。

今の状態なら、あれは来ない。距離を取られる前に、あれを出してくる前に攻めきる！

一撃が私の頬を掠めるが、躊躇わずに攻め続ける。

（『雷撃武器強化』！！）

私の四肢に電気が走ったのを見て、タカハタさんの表情が変わる。魔力による武装強化は戦士にとっての基礎。だけでも、それは刀剣や杖のような武装に限るはず……とでも思っているんでしよう。

しかし、それはあくまでも狭い枠組みの中の考え。ならば、その枠組みを取っ払ってしまえばいい。さらに私なりのアレンジが加えられてます。

「……なるほど、自分の肉体を“武器”として認識させたわけか」  
「ええ」

剣士にとっての武器は剣。銃士にとっての武器は銃。ならば、格闘

家にとっての武器は？

答えは簡単。自分自身の鍛え上げられた肉体こそが、格闘家の武器。認識を広げてやれば、このように魔力による武装強化が適応される。

「しかし、それならば通常の魔力供給でも充分なはず。何故……」

「その答えは、拳で語りましょう」

そうすれば、嫌でも分かるでしょうから。

「……違いない」

再び、拳撃の撃ち合いが始まる。

そんな中で一瞬、私の動きが止まり、そこへタカハタさんが攻撃を仕掛けてくる。

……いえ、これは誘い。攻撃を受けるのも攻撃の1つ！

「ッ！！」

私の身体に触れると同時に、タカハタさんが怯む。

攻撃は止まらなかったが、怯んだ分だけ勢いが削がれ、威力も落ちる。狙い目はここ！

（『白い雷・解放・右腕』！）

予め遅効呪文で留めておいた攻撃呪文を解放し、右腕に集中させる。中級の、ある程度までの攻撃呪文ならば、詠唱破棄が可能。……もちろん、幾分か攻撃力は落ちる。それでも、一撃を繰り出すには充分な威力がある。

狙うのは反応の遅れたタカハタさんの腹部！

「白雷蓮華掌!」

[Side Out]

[Side Asuna]

タカミチがレイヤちゃんの強烈な一撃を受け、吹っ飛んだ。  
どうやら……レイヤちゃん、タカミチの戦法を完全に見抜いたみたいね。

「高畑先生の、戦法?」

「ほら、昨日の予選で他の人達がばったばった倒れてたでしょ?」

「ああ、あれか」

木乃香は戦闘については素人だけど、覚えておくのは決して損じゃない。

もしもの事があるかもだし、とりあえず説明だけでもしておこう。

「あれは、タカミチがその人達の顎を撃ち抜いていたから」

「え？ でも、高畑先生何もしとらんかったよ？ 手だってポケットに突っ込んだままで……」

そこよ。タカミチの技は、それが構えなの。

「居合い拳、ですね」

そう発言したのは刹那さん。

やっぱり刹那さんは気づいてたか。

本来の「居合い」は刀を鞘に収めたまま行っけど、「居合い拳」はポケットを鞘の代わりにし、拳圧を撃ち出す。

「おまけに、高畑殿は魔力で拳圧を極限に加速しているでござる」

そう。呪文詠唱が出来ないだけで、魔力を使えないわけじゃない。

寧ろその分を身体強化やレジストに回している。……ある意味、究極的な格闘家に発展させてとも言える。

ハッキリ言って、あれは私にも完全に反応は出来ない。防御できない事は無いんだけど……。

「あれ？ でも高畑先生、居合い拳使って無かったやん」

「使ってなかったんじゃない。使えなかったのよ、距離が近すぎて」

その辺は居合いと同じ。近距離クロスレンジの相手には使えない。

同様に射程の問題もあるから、今のままじゃ超遠距離アウトレンジの相手にも使えない。

弱点だらけ……でも、タカミチやガトーさんの場合、そうとも言え

ないのよ。

「さっきの攻撃もレジストされてる。……ここからが本番よ」

[Side Out]

[Side Takamichi]

素晴らしい。

彼女と対応し、この一撃を受けた瞬間、その言葉が頭に浮かんだ。  
レジストしていなければノックアウトしていたかもしれない。

(……見事だよ、レイヤちゃん)

わざわざ自分の身体にもダメージを与えかねない武器強化呪文をアレンジし、自分の身体に纏わせたのは、僕の一瞬の“怯み”を狙う

ため。

雷撃ならば、ほんの少し触れるだけで身体中を駆け巡り、一瞬であるけれど麻痺の症状が出る。

いわば、近接打撃対策の雷の鎧。

「……本当に、驚いた」

5年前のあの日、儚げに見えた少女がここまでの使い手に成長するとは……。

遅延呪文に、中級呪文詠唱破棄……見事だ。

だけど、こんな僕にも譲れない意地と誇りというものがある。そろそろ気合を入れていくでしょう。

「左腕に“魔力”、右腕に“気”……」

水煙の中から僕の気配を感じ取ったのか、レイヤちゃんの気配も強くなる。

さあ、ここからが本番だ。

「合成!!」

気と魔力の合一……究極技法「咸卦法」。

これが僕の真正銘の本気。……さあ、行くよ。

「豪殺・居合い拳!」

[Side Out]

「Side Leiya」

っ！？ この感覚……まさか！  
本能的に感じた「嫌な予感」に従い、右へ跳んだ。……そして次の瞬間。

ドゴオオオンッー！

まるで大砲のような一撃が、私のいた地点へと突き刺さった。  
い、今の攻撃も……“無音拳”によるもの？ いや、ただの一撃じゃない。ここまで強化された一撃……。

「まさか………」

「さあ、ここからが本番だ」

水煙が晴れると、そこにはほとんど無傷のタカハタさんの姿があった。

……やはり、ほとんどレジストされましたか。それにタカハタさん

の纏っているアレは……。

「咸卦法……！」

気と魔力。相反する力をぴったり同じ分だけ融合させ、爆発的な力を得る高難度技法。

タカハタさんが使い手だとは聞いた事がありました。しかし、実際にこれを使うところを見るのは初めてです。

……今、それを出してきたという事は……。

「本気、なんですね」

「怖いかい？」

「いえ、寧ろ嬉しいです。……やっぱり私の戦闘<sup>バトルマニア</sup>狂ですかね」

思わず、苦笑してしまう。

……これでは月詠さんやチャチャゼロさんをどうこう言えない。

「あんまり似てないと思っていたけど、そう言うところは父親似だね」

そこが似るって、どうなのでしょう。

正直、あまり嬉しくないです。

「さあ、そろそろやろうか」

「……………ええ」

タカハタさんの“無音拳”は極めて凶悪。

予備動作もほとんどなく、攻撃も静か。極めつけとにかく速い。撃ち出されたら見切るのは不可能に近い。

だからこそ、近距離戦に持ち込むしかなかった。……無音拳を完全

に封じるためには。

（しかし、同じ手が通用する相手ではない！）

撃ち出される強烈な一撃を避けながらも、反撃の糸口を探し続ける。けれど、隙が全く見つからない……！

避け続ける内に、ほんの少し、ほんの少しか動きが鈍り、瞬動を繰り出すタイミングがズレた。そして、そこを見逃すタカハタさんではない。

（直撃する！ 『氷盾』……）

避けられないなら、防御を高めるしかない。

咄嗟に攻撃と移動に使っていた魔力を、全て防御につき込む！

「ぐっ……！」

横薙に無音拳が直撃する。

少しは軽減してるとはいえ、ここまでの威力とは……！  
そしてそこへ、上からの容赦ない一撃が叩き付けられた。

「がっ！？」

地面に叩き付けられ、その威力でリングが砕けた。

今のはかなり効いた。ダメージも大きい。でも、立ち上がれないほどじゃない。

（しかし、どうする……）

カウントぎりぎりまで身体を休めるとしても、対策が全く思い浮か

ばない。

圧倒的力量差のある相手に対しては、攻撃の手を休めずに撃破する。それしか無い。

接近戦に持ち込もうとしても、同じ手が通じる相手でもない。瞬動も、私の中では見切られる可能性が高い。

……………見切られる？　そうか、なら……………。

「……まだ、勝負はついていません」

「れ、レイヤちゃん！？」

ゆつくりと、立ち上がる。

朝倉さん、ちょっと下がっててください。正直、邪魔です。ただ冷静に……タカハタさんを見据える。

「驚いたね。さっきの一撃は手加減してなかったんだが……」

「生憎、人一倍負けず嫌いなんです。それに……知りませんでした？　女って男よりずっと撃たれ強いんですよ」

「……ご尤もだね」

これは本当の話。

出産時の激痛は、男の人では耐えられないと言われている。……体験した事無いので、どんなものか分かりませんが。

それでも、さっきまでの攻撃よりもずっと痛いというのは確か。

（そう、見切られてしまうなら……見切る必要の無い行動を取ればいい）

正面から突っ込めば間違いなく、咸卦法＋無音拳の強烈なのが来る。それを防いで接敵すれば……見切られる心配も無い。

（『紅い焰・術式封印』……っ！）

『紅い焰』に遅延設定を施し、ぐっと右拳を握りしめる。  
そして、真っ直ぐにタカハタさんを見据えて、前へ一歩踏み出す。  
予想通り、真正面から強烈な一撃が跳んでくる。

（『風花・風障壁』！）

瞬動を発動すると同時に、風障壁を展開する。  
風障壁は10メートルの衝突すら防ぎきる、優れた対物理防御魔法。

ただし、効果は一瞬。そして連続使用も出来ないという欠点はある。  
……だがそれでも、無音拳一発くらいなら防ぎきれる！

咸卦の気が乗せられた無音拳を防ぎきり、そのままタカハタさんの目の前へと接近する。

この距離なら無音拳は使えない。瞬動で後ろへ下がれば、また瞬動でそれに追従する。私を迎撃するとしたら……。

「くっ！」

無音拳を撃ったばかりだから、腕での攻撃は来ない。だから、どうしても足での攻撃に限られる。それも、距離が近すぎるから膝蹴り。どんな攻撃が来るか分かっていれば、対策は充分に立てられる。

右手に防御のための最低限の魔力を込めて、わざと膝蹴りの着撃と同時に反発させる。その反動で私の身体がタカハタさんの真上に浮く。

……そう、狙いはここ。

自分の真上には蹴りは届かない。ジャンプしてパンチも時間がかかる。これが、最後の攻撃のチャンス！

（『紅い焰・解放・右脚』！）

ただ解放してもレジストされる。右脚に魔法を収束させる。

「鳳凰撃墜脚！！」

前へ回転しながら、タカハタさんの肩口へと蹴りを叩き付ける！

「はああああああっつつつ！！」

「ぬつつつつつつつつつ！！」

その瞬間、私の魔力とタカハタさんの気が反発し、爆発した。  
うまく着地するが、思わず片膝を付いてしまう。

『れ、レイヤ選手の必殺技がヒイイット！！ レイヤ選手もズタボロですが……こ、これはまさに先ほどとは逆転！ し、死んだ！？ とにかくまずカウントを……』

朝倉さんのその言葉通り、さっきの私のようにタカハタさんが倒れている。

……結構ダメージ喰らいましたけど、今は私が撃てる最高の一撃。これでダメなら……。

『4、5……え！？』

カウントの途中で、タカハタさんが身を起こす。

しかし、完全に起き上がったわけではないので、カウントは止まっていない。……あれ受けて平気って、かなり凹むんですが。

「いや、かなり効いたよ。正直、危ないかな……」

とはいえ、私に余力は残っていません。魔力もほとんど使い切りましたし、体力も……。

少なくとも、タカハタさんとこれ以上やり合うだけの余力は残っていない。

「……いや、でも20以上年の離れた君に本気を出して、ここまで見事に1本取られたんだ。この勝負……」

ばたん、とタカハタさんが大の字で倒れた。

「……君の勝ちだ、レイヤちゃん」

同時に、カウント10が取られる。

『レイヤ選手勝利！ 高畑選手を下し、2回戦進出が決定しました』  
『！』

あ、危なかった……。

思わずへなへなとその場に崩れ落ちる。これでもう1回やれって言われたら……うわ、もう無理です。

どちらにせよ、少しでもいいから休ませてください……。

## 第58話：Ramble Princess（後書き）

何だか聞いた事のあるような名前かもしれません。

鳳凰撃墜脚のイメージとしては、ギャレンの「バーニングスマッシュ」です。

## 第59話：ブレない想い、貫く覚悟

「Side Leiya」

うう……結構、ダメージ入りましたね……。

体力も魔力もエンプティですし、少し休まないと次無理です。

「とはいえ、深刻なダメージにはならないよう気遣ってたみたいですよけど」

「……やっぱりですか」

怪我を見てくれていた衣玖さんの言葉に、納得してしまう。

なんだかんだでタカハタさん、頭を狙いませんでしたし。……それはそれで嬉しいようなショックなような……。

「ええ。……だって、本当に殺る気であつたら、レイヤさん1分保つか怪しいですし」

「……………」

……そう、ですよ。

タカハタさんは間違いなく“最強”の部類に位置する実力者。まだまだ修行中で見習いの私では、まず勝てる相手では無い。……勝てたというより、勝たせてもらった感が強いでしょうね。

「あれ？　そういえばタカハタさんは？」

「さつき軽く治療を受けてから、どこかへ行ってしまったんですが……」

私の攻撃、かなり深く入ってたと思うんですが……大丈夫でしょう

か？

「それよりレイヤさん、魔力大丈夫ですか？」

「え、ええ何とか。……幸い、いつもより大気中に魔力が満ちてますし」

上手い事魔力を取り込めば、早く回復してくれると思います。

怪我の治癒もきつと速まりますし……あ。

（……これ、戦闘にも使えるかも）

大気中の魔力を一箇所に集めて、相手にぶつける……。

いや、それだけじゃなく、自分自身に収束させて身体強化に用いる

……これ、今後の課題になるかもです。

[Side Out]

〔Side Asuna〕

次は私と刹那さんの試合……なんだけど。

何て言うかさ、刹那さんが妙にブレてるんだよね。……まあ、原因は分かってるけど。

「ほう、その原因とは？」

「木乃香との関係回復よ。そりゃあ、何年もあんな感じだったんだから気持ちは分からないでもないけど……」

それでも弛みきってる。

京都での一件は、私たちにも非はあるから仕方ないとして……悪魔襲撃、あれは酷い。

話によると刹那さん、スライムの化けた裸の木乃香に遭遇して、慌てふためいてるところを捕まったらしい。……いや、これ酷いですよ？

「いやはや、確かに酷いですね。それもまた彼女の魅力かもしれませんが」

「うっさいわね！ てか何なのよあんだ！」

そもそも私、誰と話してるのよ！

振り向いてみると……そこには、ローブ姿の謎の男。えっと、確かクウネル・サン……え？

でも、このフードから覗く顔には見覚えが……ありまくる。

「…………アル？ あんた、アルビレオ・イマ！？」

「ええ。お久しぶりですね、アスナさん。しかし、今の私はクウネル・サンダースです」

う、うん久しぶり……って、何であんたがここにいるのよ!？  
あんた、10年前からずっと行方不明だったじゃない!!

「10年前からずっと、この下で療養中です。なお、学園長は知っていますよ」

「……あの狸」

「まあ、他の人には知られたく無かったので、あまり責めないであげてくださいね」

……まあ、コイツにも事情はあったんだろうけど。

てか、妙に存在感がおかしい……ああ、分身みたいな使ってるのね。つまり本体は地下で療養中って事。

「で、あんたの狙いは……レイヤちゃんとネギかしら?」

「おや、どうしてそう思うので?」

「あんたがそんな分身作ってまでわざわざ出てくるような理由といえば、それくらいしか思いつかないのよ。……まあ、こんな舞台に出てくるんだから、遺言でも伝えに来たんでしょ」

アルのアーティファクト『イノチノシヘン』。

その能力は「特定人物の身体能力と外見的特徴の再生」。ただし、自分より優れた人物の再生は数分しか出来ず、大抵の人間はアルより弱いからそれほど使いようは無い。

そしてもう1つの能力。それは……『半生の書による、10分間の全人格の完全再生』。

「ええ。彼らから、それぞれ2人に宛てたものを預かっています」  
「やっぱりね。……彼ら?」

何で複数形なわけ？ ナギだけじゃないの？

「レイヤさんに関してだけは、もう1人……」

「……それって、まさか」

その事を尋ねようと思ったけど、やめた。

こんな場所だし、どこで誰が聞いているか分からない。……普通に超だし、盗聴とかされてそうだし。

でも、レイヤちゃんにだけって……。

「いえ、彼女から頼まれましてね。『私の遺言をどのような形で聞かせるかはお前に任せる。ただしお前の目から見て、遺言を聞かせるに値しないと判断した場合、使用しなくていい』と」

……なるほど、ね。

確かにネギは姉様の存在を認知してないし、その時点で聞く視覚は有していない。

だけど、レイヤちゃんは姉様の存在を認知している。それにある程度だけど姉様の事にも理解を示しているようだし……。

「学園祭が終わったら、お茶会へご招待します。その時にでも……」  
「そ。わかったわ」

とりあえず、まずは刹那さんの事よね。

……てか、こーゆーOHANASHIキャラって明らかに私向いてないと思うんだけど。

まあ、エヴァちゃんが陸斗が出たらバランスブレイカーになっちゃうから、それは仕方ないんだろうけどさ。

とにかく、私なりにやってみましょうかね。……OHANASHI  
ってヤツを。

[Side Out]

[Side Set suna]

考えてみると……私はアスナさんと本気で戦った事は無い。  
同様に、アスナさんも本気で私と戦った事は無いし、アスナさんの  
本気というものを見た覚えが無い。

魔法無効化という稀少能力の持ち主で、かつての“紅き翼”の関係  
者。そして「召喚魔を一撃で送り返す」アーティファクトの持ち主  
……。

(……そういえば、私はアスナさんの事を何も知らない)

友人。確かにその立場にいるのかもしれない。  
だが私は、彼女の事を何も知らない。

どのような形で彼女が“紅き翼”と関わりを持っていたのか。  
何故、麻帆良に来たのか。……何も知らない。

「せつちゃん、頑張つてな！」

「あ、このちゃ……お嬢様」

……そうだ。今はただ、アスナさんと戦う事だけに集中しよう。  
アスナさんの事はまた、日を改めて聞いてみればいいだけの事。  
リングの上には既に、アスナさんがいる。

……私と同じ様にいつもとは違う姿をしているが。

「……あの、アスナさん？」

「文句があるなら超に言つて。……あと、下着も替えさせられたんだけど」

「あ、あはは………」

わ、私と同じですか。

アスナさんの手にはハリセン……確か、アーティファクトの力を一定に抑えたのだったか？

対する私の得物はデッキブラシ。されど、気で強化すればそこの武器には劣らない。

『それでは第7試合……Fight!!』

その声と同時に、一気に接近。激しく撃ち合う。

「……刹那さん、最近ちよつと腑抜けてるんじゃない？」

そう言いながら、アスナさんはハリセンで撃ち込んでくる。

……防ぐのがやっとで反撃できない！これは奥義を使わないなど

とは、言っではいけない……！

「腑抜けてる！？ 私はそんな事は……」

「あのヘルマンって悪魔が来た時」

その言葉に、一瞬動きが鈍った。

「刹那さん……明らかに油断してたよね？ そうでも無かったら、簡単に捕まる事は無かった」

「それは……」

事実だ。

私はあの時、裸のお嬢様に動揺してしまい、その隙を突かれた。そして風峰先生に助けられるまで……ずっと眠っていた。

「前の刹那さんだったら、そんな事は無かった」

「ッ!？」

「木乃香と仲直りして、刹那さんは凄くいい顔をするようになった」

デッキブラシを弾かれ、突きが私の首の横を通過する。

それで斬られた髪の毛が、はらはらと宙を舞う。

「だけど……今のままじゃ、私には勝てない」

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

……ガラじゃないような事言っておきながら、かなり様になってるじゃないか。

容赦なくハリセンで撃ち込むアスナに対し、刹那はその攻撃を防ぐ事しか出来ていない。

「……完全にさっきのアスナさんの言葉で心を乱されていますね」  
「ああ」

ちよつと前に……「抜き身の刃」だった頃の刹那ならば、その程度の言葉に耳を貸す事は無かった。

確かに刹那は強い。あの歳であれだけの技量……神鳴流剣士でも群を抜いた才覚の持ち主だと言える。

このまま成長を続ければ、いずれは最盛期の詠春と同格、もしかしたらそれ以上に成長するかもしれない。

……だが、それ故に危うい。

「刹那の最大の弱点は、心の弱さ」

だから、ちよつとした事で簡単に「揺らぎ」が生まれてしまう。例えば木乃香の事。修学旅行の件では誘拐されたり狙われたりで、刹那の胸中にごちゃごちゃ……ハッキリ言つて、ブレ続けていた。もう1つ、正直なところ刹那と月詠の技量の差はそれほど無い。ちよつと月詠が上だが、刹那は圧倒的に苦戦している。これにも同じ事が言える。

心が揺らげば、それはそのまま剣にも現れる。迷いは太刀筋を鈍らせる。

「それは、過去の経験からですか？」

「……………」

にこりと問いかけてくる衣玖の頭を、とりあえずくしゃくしゃにしてやる。

……知つてて聞くなバカ者。

「悩む事は誰だつてある。大切なのは、それとどう向き合うか。…

…問題は」

「彼女がそれから目を背けている……でしょう?。」

……そこなんだよな。

刹那の悩みの根底にあるのは、自分が人外との混血である事に対する拒絶感。

しかも、問題はそれを自覚していないところ。なぜなら……。

「京都での一件で、彼女が自覚していた部分を払拭出来てしまったから、でしょう?。」

そう。衣玖の言うとおりだ。

木乃香達が刹那を受け入れた事で、刹那は「混血の自分」を受け入

れる事が出来た。

だけでも、それは自分が自覚している部分のみ。……自覚していない、もつと深い部分は完全に払拭されていない。  
それが「揺らぎ」を生む原因となっている。

「だが、こればかりは『話してすぐ解決』というわけにはいかなからな……」

長期的に、何らかの形でアセスメントしていくしかない。

例えば……同じ様な身の内のヤツがカウンセリング、とか。とはいえ、そんなヤツは……。

「……………」

「……………」

どうやら、衣玖も俺と同じ結論に至ったらしく、どことなくぎこちない。

いや、だって……なあ？

あれはマズイ。アイツがカウンセリングなんてしたら、間違いなく刹那が潰れる。

「……とりあえず、あなたが話をした方がいいんじゃないですか？」  
「そう、だな」

そんな話をしている中でも試合は進み、既に10分近くが経過しようとしていた。

俺たちが再び試合観戦に集中しだしたと同時に、ハリセンの一撃が刹那の右脚に直撃した。

〔Side Out〕

〔Side Asuna〕

……やっぱり動きがずっと鈍いし、キレだって悪い。  
今の攻撃だって、普段の刹那さんなら充分に見切れていたはず。

「ねえ、刹那さんは何のために戦うの？」

ヘルマンがネギにしたのと同じ質問。

正直なところ、彼の言葉には共感せざるを得ない部分がいくつかあった。

義務感や責任感を糧にしても、決して本気になどなれない。……確かにその通りだ。現にネギは力を出し切れずにいた。  
それはきつと、今の刹那さんも同じ。

「木乃香を守るため。それは知ってる。……なら、どうして木乃香

を守るの？ 木乃香を守る理由は何？」

「それは……それが、私の使命だからです！！」

再び、打ち込みが激しくなる。

……だけど、やっぱりブレてる。攻撃に芯が込められていない。だから簡単に防げてしまう。

「あの日、私は誓った……お嬢様を、このちゃんを守るって！ だから……」

「だから力を求めた？ 木乃香を守るために。……でも、強くなつてそれで本当に守れるの？」

「……あなたに何が分かるんですか」

冷たい声でそう言葉をぶつける刹那さん。

これは、相当怒っているらしい。……まあ、ズバズバ言い過ぎたから当然かもしれないけど。

「力が無ければ何も守れない……あなたに、何が分かるんですか！？」

……目を閉じると、あの日の光景が脳裏をよぎる。

タカミチと私、そしてガトーさん……あの運命の日の事が、事鮮明に蘇る。

『幸せになりな、嬢ちゃん。……あんたには、その権利がある』

ガトーさんがいなくなつてから、麻帆良に来てから、何度も思った事がある。

自分に戦う力があれば、みんなを守る力があれば、ナギもガトーさんもいなくならずに済んだのかもしれないって。

……だから。

「ええ、分かるわ。だから、何？」

「ッ!？」

力だけでも、思いだけでも……貫けないものはある。

ただ力だけを求めても、そこには何の意味は無い。

左手に魔力、右手に気。……それを身体の前で、合掌するようにして合成する。

「なっ………!」

「だから……歯あ食いしばりなさい!!」

思い切りハリセンを振りかぶり、刹那さん目掛けて突進する!

刹那さんもデッキブラシを私目掛けて振り下ろす。

神鳴流奥義『斬岩剣』。気で強化されたその斬撃は、岩石をも両断する。だけど……。

「私には、効かないのよ!!」

左手で握りしめたハリセンで、デッキブラシを受け止めると同時に、デッキブラシがへし折れる。

私の能力……忘れたわけじゃないわよね? 魔法無効化は気をもかき消す。……ここまで使いこなすの苦労したけど。

そしてそのまま、咸卦の気で強化された右腕を、刹那さん目掛けて振り抜く!

「ぐっ!!」

咄嗟に腕を交差して防がれたけど、少なくともダメージは入った。

それに、もう勝負は付いてる。……刹那さんの武器はもう無いから。

「まだ続ける？」

ハリセンを刹那さんに突きつけ、そう尋ねる。

「神鳴流は武器を選ばず」とも言うけど、今の刹那さんでは私には勝てない。武器を失った上、これまでじり貧だったから。

……これで続けるなら、もうちょっと出力上げて意識刈り取らなくちゃならないけど。

「……いえ、私の……負けです」

搾り出すような声で、刹那さんがそう答える。

……やっぱり、私ってOHANASHIキャラには向いてない。

## 第60話：かたちあるもの（前書き）

なんだかんだで60話にまで到達しました。

これも皆さんの応援あってこそ……ありがとうございます。

## 第60話：かたちあるもの

〔Side Asuna〕

試合が終わった後も、刹那さんはしばらく無言だった。

……いや、まあ……私もかなり言い過ぎちゃったし、謝りたいんだけど……きっかけが掴めないっていうか。

選手控え室に戻って、ようやくそのチャンスが巡ってきたので口を開こうとしたけど……。

「せ、刹那さん……その」

「すみませんでした!!」

……へ？

「さっきの試合、頭に血が上がりすぎていて……ついカツとなって……」

「あ……」

もしかして、アレかな？ 何が分かるんですか……ってヤツ。

いや、売り言葉に買い言葉だったから、私も言い過ぎちゃったし……。

「やっぱり、木乃香とちょっと話してみるべきじゃない？」

「お嬢様と？」

「これ、元々木乃香から相談されてたことなんだけど……木乃香、相当気にしてるのよ。護衛の事」

修学旅行の後、木乃香も自分の立場を知らされて、納得出来る部分

と出来ない部分があった。

西の総本山の血族で、外向的にも重要な立場にある事は納得している。護衛を付けられるのも納得出来る。だけど、その事について木乃香自身に何も知らされていなかった事だけは納得出来ないと言う。……まあ、それで詠春達も相当絞られたみたいだけど……。

「『守られるだけなんて嫌や』って言ってた。その辺り、話し合ったことある？」

「……………いえ、ありません」

俯いたまま、沈んだ声でそう答える刹那さん。

……うわー、これ重症ね。やっぱり言い過ぎたかも。

「とりあえず、木乃香と話し合う事。これは友達としての頼みだからね」

「……………はい」

これ以上、私が話しても無駄だと思ったので、後は木乃香に丸投げする事にした。

刹那さんの抱える悩みは、私じゃ解消できない。

やっぱり、刹那さんと長い付き合い合いの木乃香や、同じ身の上の人じゃないと無理だと思う。

木乃香がうまく纏めてくれればいいんだけど……………。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

現在、第8試合が終了したところだ。  
結果？ ああ、結果か。それなんだが……………。

「馬鹿ね」

「ええ、馬鹿です」

「馬鹿としか言い様がありません」

上から、紫、閻魔様、衣玖の順番で感想を口にする。…………いや、俺もそう思うし。

第8試合。「3D柔術の使い手」山下慶一vs「新人魔法先生」北山史郎。

……簡潔に試合結果だけを言おう。この勝負、山下の勝ち。

「油断してたんでしょうかね？」

「多分な。……タカミチやレイヤがあそこまで頑張ったのに、アレはないだろ」

なんかにやにやしてるトコを、山下に首締められてあっさりKO。

……何やってるんだ、アイツ。

まあ、仕事じゃなくて学祭だし、問題にはならないだろうけど……色々言われるだろうな。

「とりあえず、馬鹿は放っておくとして……全第1試合は終了ですね」

ここまでの戦歴を振り返り、次の試合を組み立ててみると……。

第9試合（準々決勝第1試合）：村上小太郎vsクウネル・サンダース

第10試合（準々決勝第2試合）：古菲vs長瀬楓（しかし、古が骨折でドクターストップがかかったため、長瀬の不戦勝）

第11試合（準々決勝第3試合）：高音・D・グッドマンvsレイヤ・スプリングフィールド

第12試合（準々決勝第4試合）：神楽坂明日菜vs山下慶一

……となる。

まあ、何となくだが……準決勝へ進む人間も自ずと見えてくる。

「……………ん？」

ケータイ？ この振動の仕方からするにメールだろうけど……。ああ、カメラ機能が使えないだけで普通にメールは出来るのか。メールの相手は文。内容はと言うと……………。

『超、髭、捕獲』

と、明らかに急いで打ったと分かる。

この状況で髭と言われて、思い浮かぶのは1人しかない。

……まあ、アイツの事だからわざと捕まっただらうけど。

(……しかし、捕まっただって事は、やっぱ探られたらマズイものがあるって事か)

それこそ、タカミチを放置してはマズイと考えて捕縛したのだから……そういえば文のヤツ、何やってるんだ？ てつきり武道会の取材に来るかと思っただけに。

[Side Out]

[Side Aya]

最初は取材に行こうかな、と思ってましたけど……こっちの方が探

り甲斐がありそうですからね。

……なんて、気楽に言ってる場合じゃありません。

「うじゃうじゃ来るのは鬱陶しいですよー!」

さつきから下水道施設を飛び回り、私はアレから逃げ続けている。

……いやあ、高畑さんでしたっけ？ あの眼鏡に無精髭の人。あの人があっさり捕まってたから、とりあえずその辺を陸斗さんにメールで知らせようとしたら、アレに見つかっちゃったんですよねえ……。

え？ アレって何かって？ それは……。

「うひひひひひひひ!!」

次々とビームが私目がけて放たれる。

なんかサングラスかけたロボットみたいのが、襲いかかってきてるんですよ!

あと、多脚式の戦車っぽいのも！ さつきからビームばかり撃ってきますすし!

……それにしても、さつきから随分飛び回っていますが、段々警備が厳しくなってきた気が……。

「むっ!」

ふと、前方の道が途切れている。

否、まるで滝のように下水道が下へと流れ落ちている。これなら……。

「急降下~~~~~!!!!」

半ば飛び込むようにして、直角に下へ急降下する。

さすがに向こうは飛べませんし、こっちまで追っては来られないでしょう。

………っと、着地！

「………ふむふむ、どうやら面白いところへ出たようですね」

見た限り、近代的な部分は見あたらないところから………遺跡でしょうか？

麻帆良………というよりも世界樹は、世界的にも重要な聖地の1つですし、こういった遺跡のようなものがあってもおかしくはありませんけど。

もしかしたら………大当たりかもしれません。

「おや、これは………」

………扉、ですね。

壁の割れ目から生えているのは、世界樹の根っこでしょうか？  
力を入れて扉を押す。どうやらこの向こうには人の手が入っているらしく、人工的な光が………。

「ッ！？」

扉を開けたそこには、さっきのロボットが無数に待機していた。

どうやら起動していないみたいですし、急に襲いかかってくる恐れはなさそうです………む、さっきの多脚式もいるじゃないですか。

どうやら、さっきまでの嚴重な警備はここを守っていたようですね。

「とりあえずカメラカメラ………」

……ふむ、会場から離れているためか、ここではカメラが使える様子。

適当にロボット達を写真に収めて、周囲を見渡す。

……あれ？ ちょっと待った。あれは何？

その全体像が視界に入り、文字通り、私は凍り付いた。

「……………ま、まさしく巨大ロボ……………」

あまりいい予感はありません。撮るだけ撮ってさっさと逃げましょう。

[Side Out]

[Side Eiki]

………なんだかんだ言っていたけど、彼女とはうまくやっているらしい。

あの頃は本当に、どうなる事かと思っていましたけど……。

「安心してる？」

「……………半々、ですね」

八雲紫の言葉に、そう応える。

陸斗がああいう表情をするようになったのは、間違いなく永江衣玖の存在があつてこそ。

それが喜ばしくもあり、少し羨ましくもあり……………です。

……………何せ、私たちが半世紀近くかけて出来なかった事を、彼女はわずか数年で成し遂げたのだから。

「ま、それもそうね。……………瑪瑙の事もあつたし、ね」

もう2度と、彼女の名を聞く事は無いと思つていましたが……………。

かの近衛木乃香と同じく、“旧き血族”の流れを組む巫女。

そして……………陸斗が誰よりも愛した女性であり、彼に癒えぬ傷を負わせた仇敵。

「ところで何故、彼女の名を？」

「超鈴音の事でちよつとね……………」

超鈴音……………確か陸斗によると、未来から来た可能性が高いという話でしたが……………。

その彼女がどうかしたんですか？

「未来から来たかもしれない相手が、過去の人間を味方に引き入れる時、何て言ったら1番効果的だと思う？」

「……………？」

「『過去を変えたくないか』よ」

……まさか、彼女が陸斗を引き込もうとするとでも？

「可能性の話よ。でも、もしそうだった場合、瑪瑙の事を引き合いに出す可能性が高いのは事実でしょ？」

「……………確かに」

瑪瑙の死は、決して避けられないものでは無かった。

今の医療ならば、十分に救い得る可能性は高い。しかし……………。

「……………愚かと言えませんか」

「まあね。衣玖と出会う前ならともかく、今の陸斗にそれ言ったら……………まず碌な目に遭わない」

「良くてミンチ、悪くて跡形もなく消滅……………でしょうか？」

「本気出そうとしたら止めるわよ。下手したら麻帆良終了のお知らせだもの」

[Side Out]

「Side Negi」

『過去を変えたくは無い力？』

超さんの言葉に、思わず僕は頷いていた。

6年前の雪の夜……村のみんなを助けられるかもしれない。

ううん、それだけじゃない。10年前に行方不明になったっていう父さんだって、助けに行ける！

父さんがいれば、レイヤだってきつと分かってくれる。“立派な魔法使い”にだってなれる。

『ただ、レイヤさんは仲間になってくれるか分からないネ。だからネギ坊主、1つ頼みがあるヨ』

そう言って超さんが僕に手渡して来たのは、黒い懐中時計。

タイミングよくこれを使えば、過去を変える第一歩になると言っていた。

『魔法が世界にバレれば、もっと多くの人を救うために魔法が使えるようになる……これは世界規模の平和のためネ』

超さんの目的は、世界に魔法をバラす事。

……そうだ。みんなが魔法の事を知っていれば、もっと多くの人が助かる。

さすがに混乱が起きるかもしれないけど、それは超さんが何とかするって言っていた。だから、絶対大丈夫だって。

そうすれば、“立派な魔法使い”に……。

[Side Out]

[Side Rin]

休憩中、近衛右門と警備の具合について話していると、明石教授から連絡が入った。

例の「まほら武道会」の映像が流出している……と。

それでネットを覗いてみたら……。

「うわゝ、流れちゃってるね」

「ほほう……タカミチ、年甲斐もなく本気出してるのう」

いやいや、あれは仕方ないって。

しかし……さすがはレイヤちゃんだね。ボクの「将来性が見込まれるランキング」でもダントツ1位な事はある。

……よし、学祭終わったら僕もガチでやろつと。

「……しかし、何か妙じゃない？」

「どこが、ですかの？」

「いや、不自然に『魔法』って単語が多い気がするんだよ」

ほら、掲示板とかでも………うわ、なんか凄い事になってるし。

何この「麻帆良学園は黒魔術教団が牛耳ってる」って。……あながち間違ってるないけど。

「……もしかしたら、これが狙いなのかもね」

「と言うと？」

「カメラのような電子機器を使えなくしたにも関わらず、ネットには流出。……これ明らかに超の手が入っている可能性が高いよ」

しかし、問題はその真意だね。

これだけ派手にやらかして、彼女の目的は何なのか………。

やっぱり情報が足りないね。現場のタカミチから報告が来てくれればいいんだけど。

## 第60話：かたちあるもの（後書き）

明日、1月16日（日）は投稿をお休みさせていただきます。

そろそろストックが尽きかけている事と、日曜はネット環境が使える状況では無いからです。

誠に申し訳ありません。次回投稿は1月17日（月）を予定しています。

## 第61話：影使いの憂鬱

「Side Leiya」

準々決勝第1試合……小太郎さんとあのクウネルという怪しい人の試合でしたが、これはクウネルさんの圧勝。

というのも、小太郎さんの攻撃は全て見切られ、直撃したはずの攻撃は無効化。強烈な反撃（重力魔法のようにも見えましたが）を受けK・O。

まあ、やられても小太郎さんは「次は負けへんからな！」と噛みついていたので、これなら大丈夫そうです。

舞台修理が行われている中、戻ってきた木乃香さんから伝えられた情報に思わず啞然となった。

「……………試合映像が流出している？」

「そや」と頷く木乃香さんが取り出したのは、小型パソコン。

確かにインターネット上に、さっきまでの試合映像が流れている。

……こうやって自分の試合を見ると恥ずかしいですね。芸能人も自分の映像を見るときはこんな気持ちなんでしょうか？

「観客席で陸斗さんに会って、そしたらこれレイヤちゃんに見せてくれ言われたから、見せに来たんやけど……」

「……………なるほど」

予選開始前、超さんは自分で「カメラなどは使用不可にする」とか言っていましたね。

事実、カメラやビデオなどは使えない。携帯電話のカメラ機能も使用不可能。ならば、誰がこんなものを流したのか。

……考えられるのは1人しかいませんが。

「どういう事？」

「木乃香さん、賭け事で……1番儲かるのは誰かご存じですか？」

ここ、麻帆良学園でもトトカルチヨは大流行しているとか。

もちろん金銭類を賭けるのは違法なので、食券がいいところですが。麻帆良祭前の中間テストでも、どのクラスが1位を取るかで賑わいましたし、麻帆良のラッキー大明神こと桜子さんが大儲けしてました。

……でも、桜子さん以上に儲けた人がいるんですよ。

「……あ、分かった。賭けを企画した人やな」

「—That's right《その通り》」

ほら、あまり思い出したくありませんが……修学旅行でのバカ騒ぎ。なんだかんだで1番儲けていたのは朝倉さんでした。

つまり、余程の強運や腕の持ち主が相手でなければ、賭けの大元は損をしない。そもそも損をするような事は自分からしませんし。さて、この理論をさっきの話に当てはめると……分かりますか？

「……もしかして、超さん？」

「1番疑わしいのは彼女でしょうね」

彼女が使用不可能にしたのだから、それをくぐり抜けられるのは超さんと同等かそれ以上の天才。

魔法使いにしても、よほど高度な魔法を使わなければ不可能。そもそも、魔法を秘匿するのが常識である以上、こんな事をする魔法使いなどいるはずがない。

となると、考えられるのはそれを仕組んだ人間……超さん一派とな

るわけです。

「でも、どうしてわざわざ自分から……………」

……木乃香さんの疑問の尤もです。

超さんは自分から、カメラ類の使用を不可能にした。しかし、自分は映像を記録し、ネット上に流出させている。

これなら、情報を規制しなくても同じ事のはずなのに……………何故？

「見つけましたよ、レイヤさん！！」

そう、考え込んでいた私たちに声をかけてきたのは……………高音さん。  
あ、もしかしてリングの修理終わりましたか？

「先ほどの高畑先生との試合……………あなたの技量と不屈の闘志には正直言って驚かされました。……………しかし！」

びしつと指を差して言い放つ高音さん。

……………あの、人を指さすのやめてくれませんか？

「それはそれ、これはこれです！ この『影使い・高音』、近接戦闘最強モードを出して、本気でお相手させて頂きます！」

「あ、高音さん。今それどころじゃ……………」

「言い訳は聞きません！ あなたの力、見極めさせていただきま  
す！」

私たちの言葉を全く聴かず、高らかに宣言するだけしておいて、高音さんはリングへと上がっていた。

……………いや、これどうするんですか？

と、神妙な顔をしていたら、そこへ佐倉さんがやってきてフオー

を始めた。

「す、すみません……お姉様、ちょっと一直線過ぎるところがあつて……」

「えっと、佐倉さんでしたっけ？」

「はい」

……うん、この人はまだ落ち着いてますね。

とりあえずパソコン見せて、今現在の状況だけでも教えておかないと。

「こ、これさっきの試合じゃないですか！ どうして……」

「理由は分かりませんが、下手をすれば魔法がバレル恐れがあります。既に対処を始めているでしょうけど……念のため、学園側にも連絡をお願い出来ますか？」

「わ、わかりました。あの、お姉様なんですけど……」

……ああ、そっちの問題が残ってましたね。

あの様子だと私の言葉は聞いてくれそうにありませんし、もうリングの上に上がっちゃってますからねえ。

『それでは第11試合……Fight!!』

「私の真の力、お見せしましょう」

とりあえず、派手な事やらかす前にさっさとK・Oしちゃいましょう。てか、それしかありませんし。

「これが、操影術近接戦闘最強奥義！」

高音さんが羽織っていたローブを脱ぎ捨てる。

そこには、何とも言い難い派手な人形を背後に携えた、黒服の高音さんの姿があつた。

「『黒衣の夜想曲』!」

(は、派手だ——つ!!?)

『おお、つと、何かスゴイの出た——つ!』

あんなの出てきたらダメでしょう!?

いや、そうじゃなくて……そんなのどうやって相手にしろって言うんですか!

[Side Out]

[Side Takamichi]

さて、うまく超君の所へ潜り込めて、彼女の目的も聞き出せたけど……。

「まさか、魔法の事をバラすだなんて……」

僕と同じ様に拘束されている、ちびせつな君がそう呟く。

超君の目的、それは「魔法使いの存在を全世界に公表す<sup>バラ</sup>」事。

彼女は大した事じゃないとは言っていたが…… 充分に大した事だよ。

（リンさんの言っていた未来人説と組み合わせると…… 充分に考えられる）

魔法の存在をバラし、その上で世界情勢を抑えていく。

超包子やこれまでの彼女の功績などから、超鈴音名義の資産は相当なものに及ぶだろう。それらを適用していけば、確かに可能かもしれない。

……だが超君。君は本当に分かっているのかい？ 何故、魔法が秘匿されているか。

君が魔法をバラせば、間違いなく魔法使いの大半を敵に回す事になる。本当に彼らを抑えられるのかい？

どちらにせよ、彼女の行為は陸斗さん達を敵に回すのは間違いない。……碌な目に遭わないだろうな。

「ど、どうしましょー、高畑先生」

「うーん、放つとくわけにもいかないね」

とりあえず、まずは脱出だ。

ここじゃあ念話も通じないし…… 幸い、脱出路は頭に入っている。

「しかし、この機械式の拘束具。ちよつとやさそつとじゃ……」

「大丈夫。それでもこういうのは、君たちより慣れてるんだ」

これでも長年、前線で戦ってきたと自負している。  
今回みたいに敵に捕まったりする事も多々ある。……そういつた時に、奥歯に仕込んであるアレが役に立つんだよ。

〔Side Out〕

〔Side Takane〕

……さっきの戦いを見ていて分かっていただけ、この子……強い。  
高畑先生を下す実力と、頭の回転の速さ。

（……本当は分かっていた）

あの事件。レイヤ・スプリングフィールドが侵入者を殺さざるを得なかった事件。  
だけでも自分は、ただ感情のままに彼女を否定した。

……そうしなければ、これまでの自分が崩れ去ってしまうかのよう  
な気がして。

「くッ！」

影槍を巧みに操り、レイヤさんを捕えようとする。

しかし、瞬動術を連続使用し、私の攻撃はかすりもしない。

無詠唱魔法の射手で反撃してくるが、完全防御状態の私にはその程  
度の魔法は通じない。

……まさに、千日手。

だが、私の『黒衣の夜想曲』は常時展開型。つまり展開し続ける限  
り、魔力を消費し続ける。このまま続ければ、15分もしない内に  
私の魔力が尽きる。勝ち目は……無い。

「それでも私は！」

私は知りたい。

何故、彼女はここまで戦えるのか。

何故、罪を犯してなお前へ進めるのか。

ネギ先生へのお仕置きなんて、建前だった。

………本当は彼女を、レイヤ・スプリングフィールドを知りたかつ  
ただけ。

「ッ!？」

一瞬の動揺。

その隙を突かれ、彼女は私の懷へと飛び込んでいた。

そして、彼女の手が私の腹部へと添えられるのを見て……。

「しまっ……………」

打撃に対して発動するオートガード。だけど、それ以外には発動しない。

その欠点を突いての零距离魔法の射手。完敗ね。

……あ、この子、笑うと可愛いかも。

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

あ、危なかった……操影術なんてレアな技使ってくる相手と戦った事が無いので、動揺しっぱなしでしたよ!?

それにしても影の防御力……目を見張るところがあります。マイナーな技術なので目を向けた事はありませんでしたが、防御魔法として研究してみましようかね。

「……………はて」

高音さんが気絶すると同時に、背後の人形のようなものがしゅうしゅうと音を立てて消え始めた。

操影術はその名の通り、影を操る術。正確には、影の使い魔を使役する魔法の一種。

……………つまり、術者が気絶したり、魔力が途絶えたりすると使い魔が消えるわけだから……………。

「い、いけないっ！」

咄嗟に、自分が羽織っていたローブを高音さんに着せる。それとほぼ同時に、高音さんの着ていた服が消えた。

あ、危なかったです。1回戦でもこの人、脱がされてますし……………下手したらトラウマ物ですね。

……………はて、今「脱げ女」という電波を受け取ったような気が……………。

「う……………」

おっと、いくらローブを着せているとはいえ、下は裸ですからね。こんな衆目監視のところに置いておけません。ほら、朝倉さん早いところ宣言を。

『おっと失礼。では改めて……………レイヤ選手の勝利——！！』

とりあえず、救護室のベッドへ高音さんを寝かせた。

制服は1回戦のアレでダメになっちゃいましたし、佐倉さんをお願いして適当なものを持ってきてもらう事に。

しばらくはリングの修理で時間がかかる上、次の試合は正直なところ見所がなさそうなので彼女の側に付いている事にした。

「う……わ、私は……………」

「気がつきましたか？」

もうちょっとしたら佐倉さんが服を持ってくると思うので、しばらくこのままでいてください。

幸い、ここに男の人が入ってくる事はほぼ無いと思いますし。

「すみません、わざわざ……………」

「お気になさらず」

……はて、こんなに大人しい人でしたっけ？

話によると、かなり気性の激しい方だった気がするのですが…………。それに試合でも何か探るような戦いをしていた気がしますし、うーん。

「レイヤさん」

「はい？」

「まずはお詫びさせていただきます。……申し訳ありませんでした」

そう言い、高音さんが私に頭を下げてきた。

ちょ……い、いきなり何なんですか？ どうしてまたこんな……。

「先の事件の後、私は……あなたの修行停止を訴えました」

先の事件って……あれ、ですか。

私がダウンしてた頃、一部の魔法先生や魔法生徒が過敏に反応してたらしいですが、この人もそのクチだった、と。

「何も知らず、ただ知ったような事ばかり言って……本当に申し訳ありませんでした！」

「あ、頭を上げてください」

こ、困りましたね……私はそれほど気にしてないんですが。

……もしかして、さっきの試合もそれ関係で何か探ろうとしてたんですか？

「はい。あなたがどうして、あそこまで真っ直ぐに進めるのか。それが知りたかったのです」

……まあ、この人達から見てもれば、不思議でしか無いでしょうし……。

「……ただ、罪を数えただけです」

「罪を、数えた？」

千草さんを殺した事。それが私の罪。

どんな形であつたにせよ、彼女を手にかけたのは事実。

「罪は、償ったり拭えたり出来るものじゃない。正面から向き合つて、一生付き合っていかなくちゃならないもの」

衣玖さんに言われ、私は自分の罪を数えた。  
罪を数えて、罪と向き合う。……それが、私の結論です。

「……強いんですね、レイヤさんは」  
「いえ、弱いですよ」

未だに、全てを振り切る決断が出来ない。前へ踏み出す決断も出来ない。  
弱いからブレ続けてます。今もずっと……。

[Side Out]

[Side Rin]

うわー、やっぱり来てるね、こりゃ。

今考えてみると、超鈴音がむざむざ大人しく捕まる事がおかしかつたんだよねえ。

……うん、そろそろ真面目に対策取らなきゃマズイかな。

「……ん？ メールが2通……」

1つはタカミチからで、もう1つは……珍しい、天狗からだ。てか、天狗ってばいつの間にケータイ買ったのさ。んじゃ、まずはタカミチの方から……。

「……やっぱりかあ」

メールの内容を要約すると、「超の目的は魔法をバラす事」。まあ、これだけ派手にやらかしてくれてるんだものねえ……自ずと絞られてくるけど、まさかドンピシャとは。こっちは学園側で予め組んでおいた電子班が対応するとして、問題は文の方だね。ご丁寧に写真付だよ。

「………は？」

いやいや、これ……アレだよな。

見た感じかなり弄ってあるけど、アレだ。……こんな事するのは1人しかない。

まさかとは思うけど、これも使うのかな？

「………これ、本格的にシステム見直した方がいいのかも」

## 第62話：混乱の影で

〔Side Rikuto〕

今現在、眼下ではアスナの試合が行われている。

山下とかゆーヤツも善戦しているが、やはりアスナ相手には遠く及ばない。

だが俺は、さつきからずっとある事について思考を巡らせていた。

……というのも。

「……………」

試合を眺めているフードを深く被った男をそれとなく見る。……にこりと会釈された気がした。

……………てかあれ、アルだよな？

小太郎の試合を見てそう確信した。てか、アイツこんな所で何してんの？

（……………まあ、思い当たるのは1つぐらいだが）

10年ちよつと前、あのバカが行方不明になる前に記録した“遺言”を伝えるためだろう。

わざわざこんな舞台を選んだのも、アルらしいと言えばアルらしいが。

「……………ん？」

再びケータイが振動している。

しかも、この着信は『秘匿回線』。学園側からの非常事態にのみ使

用される専用チャンネル。

これが前に使われたのは6年前の木乃香誘拐事件。……つまり、あの時並みに厄介な事が起きている事になる。

……大方、誰が中心人物か分かってしまうのが嫌なんだが。

「悪い、仕事が入った」

「残念ですね……決勝には戻ってきて来られます?」

そればかりは分からない。

事が事だし、もしかしたら戻ってこれないかもしれない。

出来れば、レイヤの試合……よくて決勝までには戻りたいものだが……。

「……善処する」

この場合、最も角の立たないだろう言葉を返し、俺は会場を後にした。

[Side Out]

「Side Leiya」

改めて、トーナメント表を見る。

ついに準決勝。相手はアスナさん。……強敵ですね。

かなり動揺していたとはいえ、神鳴流剣士である刹那さんを下すほどの実力者。

それに私たち“魔法使い”の天敵とも言える稀少能力『マジックキャンセル』魔法無効化の保持者。

（しかし……困りましたね）

タカハタさんに対抗するための手段ばかり構築していて、その先の事を全く考えていませんでした。

幸い、舞台の修理でもう少しかかりますし、私たちの試合の前にもう1つ……クウネルさんと楓さんの試合が控えている。

その間にどうにか、アスナさんに対する対策を考えるしかありませんね。

「あ、レイヤさん」

と、そこへ佐倉さんが駆け寄ってきた。

高音さんなら大丈夫です。それより……報告はどうになりましたか？

「既に、明石教授や式集院先生が電子班を率いて応戦しているようです。……見てください、これ」

「これは……」

佐倉さんに差し出されたパソコンを眺めて、思わず絶句した。  
そこで繰り広げられているのは単純なネット論争ではなく、最早ネットを介した世論操作戦……高度な電子戦。  
これは間違いなく、超科学と最新魔法技術の戦いですね。

「今のところ、どうにか対応出来ている……というところでしょうか」

「どうやら予め、電子戦を想定して準備が整えられていたそうなんです」

予め？

超さんがやらかすかもしれない事を想定して、対応策の準備が出来る人となると、凜音さんくらいですけど……。

「……うん？」

ふと、視界に何か飛んでくる物体が入ってきた。

なんと言いますか、シスターのような人影が……私たちの後方に着地。

「……え？」

「あ」

……目が合った。

あれ、あの人が持つてるのは仮契約カードで、名前が……。

「……美空さん？」

「いえいえいえ、私美空などという人ではありませんよ。見ての通り、通りすがりのシスターです」

いえ、さつきカード見えましたよ。  
しつかり「MISORA」ってありましたから。

「いえ、私美空じゃありません」

しかも、ダメ押しで「出席番号9番 春日美空」ってテロップ出ますから。

……それにしてもこのテロップ、どこから出てきたんですか？

「……任務。『まほら武道会』の監視」  
「あ、こらココネ！」

……となると、この映像についてですね。

さすがに開催中は無理でしょうけど、大会が終わり次第、超さんにも事情を聞くことになりそうです。

とはいえ、素直に従ってくれるとは思えません。

[Side Out]

〔Side Asuna〕

す、3D柔術……なんか今までとは違う戦い方だから、結構苦戦したわ。

まあ、どうにか勝てたからよかったんだけど……。

……でも、問題は次の試合。相手はレイヤちゃん。……強敵ね。

（大抵の魔法なら打ち消せる。だけど、レイヤちゃんがもし“王家の魔力”を使つて来たら……）

私の“魔法無効化”で打ち消せないのは、ウェスペタルティア王家の魔力。創造神に由来するという魔力だけはかき消せない。

それを使うところは、京都の時に1度だけ見た。

あの頃は身体がまだ完全じゃなかったから、力の使い方も下手だったけど、今のレイヤちゃんはあの頃とは違う。

「……うん、絶対手は抜けないわ」

レイヤちゃんの最大の長所は、その思考力にある。

どんな事柄も論理的に結末へと至る。タカミチに対しても、咄嗟に高速思考を働かせてあの一撃を食らわせたのも、そのものだもの。

下手に油断していたら、間違いなくやられる。

……てか、あの容赦のない所は間違いなくナギ譲りだと思うんだけど……。

〔Side Out〕

「Side Arnya」

修行の方も一旦小休止。それでウェールズの方へ戻ってきたんだけど……里の方が妙に騒がしかったので話を聞いてみて、即座に校長室へ乗り込んだ。

現在、私は校長……おじーちゃんを前に、今回ばかりは本気で怒っている。

レイヤが人殺したってどういう事よ！ おまけにその事を私には黙っていたって……。

「お前がその事を知れば、修行を放り出して日本へ行くじやろう？」  
「そりゃあ……まあ」

レイヤがそういう事になったのは、やむを得ない状況に追い込まれたからだってのは分かる。

……でも、本当に大丈夫なのかしら？　メル友の話だと、ネギとはかなり険悪みたいだし……。

「罪を背負う事を決意した。……コノエモンはそう言っておったよ」  
罪を背負う、か。……そうよね。罪は消えない。無かった事にだつて出来ない。

一生にそこにあつて、例え目をそらしても無くなるわけじゃない。師匠も「罪を数える」ような事を言ってたけど、そういう事なのかな。

「向こうも当初は揉めておったようじゃが、最近は落ち着いておるそうじゃ」

「そ、そつか……」

その言葉に、とりあえずは安心した。

……1番心配なのは、ネギがバカやってないかって事なんだけど。ネギがどんな事やらかしてるかってのは、レイヤが気を使っているらしく、あまり教えてくれない。

だけど何故か、うちの師匠はどこからかその情報を手に入れており、私もそれをちよつと聞いたけど……ハッキリ言つて呆れた。

「う、うむ。ネギも落ち着いておるそうじゃ」

「……………?」

……………怪しい。

この言い方からするに、相当モメたんだろうな。  
ネギがKY発言を連発して、レイヤかその味方した人にフルボッコにされる……うわ、リアルに想像出来るんだけど。

「……おじーちゃん、本気でネギの修行中止して一般常識からたたき直した方がよくない？」

「うむ………」

ネギの問題行為は師匠から聞いている。ハッキリ言つて、秘匿とかそーゆーレベルの問題じゃない。

それで修行が続けられているのは、MMから圧力がかかっているため……らしい。

……今更だけど、師匠つて謎な人よね。どこからそんな情報手に入れてくるんだらう。

あ、師匠といえば……。

「そうそう。おじーちゃん、これ何か分かる？」

ウェールズに一時帰省する前に、師匠から変なものの預かったのよね。列車のチケットみたいなんだけど、こんなの見た事ないし、魔力とも違う謎の力を放ってるみたいで正直不気味。

一応、向こうで駅員さんに見せてみたけど使えなかった。……何のチケットなんだろ。

「……これを、どこで？」

「うちの師匠からもらったの」

確か「いずれ必要になるはずですから」とか言ってたっけ。

「なるほど、ユチル・ユイザキ殿なら所有していてもおかしくはないの」

「おじーちゃん、師匠の事知ってるの？」

「……… 有名人じゃからな。それよりもアーニヤ、そのチケットは決して無くしてはならんぞ」

う、うん。分かってるって。

元より、師匠から預かったものを無くしたりなんかしたら、半殺しじゃ済まない。

あの地獄の日々がさらに激化しかねない。

そのまま部屋を後にしたから気づかなかった。中のおじーちゃんがこう言っただのを。

「あなたの仕業でしたか、ユイザキ殿」

〔Side Out〕

〔Side Yuchiru〕

あらら、気づかれているとは……………。

第一線から退いているとは言え、さすがは高位の魔法使いですね。

「お久しぶりですな、ユイザキ殿。かれこれ20年ぶりでしたか？」  
「だいたいそれくらいですね。あなたは……あまり変わり映えしませんけど」

それを言ったら、近衛近衛右門麻帆良のぬらりひょんもそうですけどね。

「それより、何を考えてデンライナーのチケットをアーニヤに？」  
「……いずれ必要になる。そう遠くない内に、クライマックスはやってくるでしょうから」

つい先日、ちょっとした用事があったのでデンライナーに乗ったところ、オーナーから凜音が来たという話を聞いた。同時に、麻帆良で何が起ころうとしているのかも。

もし、私が超鈴音ならば、間違いなくレイヤさんに何らかのアクションを起こす。未来人という存在であるなら、その可能性は極めて高くなる。

そのためにも、彼女にチケットを渡しました。……高かったですよ、あれ。

「……分かりました。アーニヤの修行については、こちらから手続きしておきましょう」

「助かります」

どちらにせよ、レイヤさんに危機が迫っていると知れば、あの子は修行なんて無視して駆けつけるでしょうけど。

それでもやはり、こうやって手続き出来るならしておいた方がずつといい。

「ところで、お父上は元気ですか？」

父様ですか？ ええ、元気でやってると思いますよ。

きつと今頃、麻帆良でお義母様と一緒に……………ふふ、ふふふふ……………。

「ゆ、ユイザキ殿……………落ち着いてください」

「あら、私は落ち着いていますよ？」

[Side Out]

[Side Rikuto]

「……………それ、マジか？」

学園長室に呼び出された俺たちは、その言葉を聞いて啞然としていた。

俺たちが前にしているのは、単身脱出してきたタカミチ。そしてタカミチが語った超の目的とは……………。

「馬鹿げている！！ 魔法使い<sup>われわれ</sup>の存在を全世界に公表するだ！？」

どん、と机を叩いて怒りを露わにするガンドルフィーニ。

他の面々も苦い顔をしており、どう見ても超の計画に賛同は出来ないだろう。

……かく言う俺も、その計画だけは成就させるわけにはいかない。神秘の存在が発覚すれば、それは間違いなく混乱を生む。そしてそれを手に入れようとする輩が現れるのは明白。

その矛先が向くのは……未だ多くの神秘が生きている幻想郷だ。

「学園長！ 超鈴音の捕縛許可を！」

「……確かに、彼女の計画は危険じゃ。それを成功させるわけにはいかん」

今から魔法先生達のシフトを組み替えて、人員を手配。

そして会場を完全に包囲するには……1時間近くかかるな。ちょうど武道会が終わる頃。

「風峰君、スマンが会場へ戻ってくれんか？ 超君が逃走したり、下手な真似をしないよう睨みを利かせて欲しい」

とはいえ、会場をセッティングしたのは超自身だ。

抜け道の1つや2つ手配しているだろうし、逃げられる可能性だって高い。

少なくとも、観客を人質にするような真似はしないと思うが……………。

「了解」

まあ、衣玖との約束もある。  
今から戻れば、決勝には間に合うだろう。

第63話：意地の張り合い、せめぎ合い（前書き）

今回、あとがきでちょっとした質問を受け付けます。  
よろしかったら答えて頂けるとうれしいです。

### 第63話：意地の張り合い、せめぎ合い

〔Side Rin〕

何故、魔法が秘匿されているか。

それはやはり、魔法使いがそれを望んでいるから。

もちろん、中には魔法を公表すべきだと主張する少数派もいる。だが、やはり大多数は秘匿を望み、それで現在も隠され続けている。

……超が魔法公表を実現するという事は、その大多数の魔法使いを敵に回す事に他ならない。

「いくら天才って言っても、そればかりは……」

どうにかなると思えない。

確かに彼女の資本なら、世界経済を支配するだけのクラスはあるかもしれない。

だが、それでどうなる？ 大多数の魔法使いを力でもって押さえ付けるのか？ やはり、うまく行くとは到底思えない。

せいぜい、数年内に暗殺されるのがオチだろう。

「ま、ボクも昔、似たような事考えたからね」

正義バカ共に家族殺されて、自暴自棄になってた頃。

まだ陸斗や紫さまに出会う前、復讐の事ばかり考えてて、その中の復讐案に魔法公表も入っていた。

……もちろん机上の空論で、実行したとしても失敗するのが関の山だったけど。

「……そういえば、ネギ・スプリングフィールドの事忘れてた」

大した問題じゃなかったから考えてなかったけど、超が何かしらアクションを起こすとして、薬味を引き込もうとするかもしれない。……いや、もしかしたらもう引き込んでいたりしてるのかも。でも、見たところ普通に仕事してるみたいだし、超と接触しようにも、あれでも魔法先生なんだからこちらにもすぐに分かる。

「とりあえず、薬味はほつといていいか」

しかし、あの薬味を放置しておいたのがきっかけでデンライナーに乗らなくちゃいけなかったり、他にも色々と面倒な事態を引き起こす事になるのだけど……。

ボクがそついった事に気づくのは、もうちょっと先なのであった。

[Side Out]

「Side Leiya」

……ついにこの時が来ました。

おそらく、今大会でもトップクラスの相手。神楽坂明日菜さんとの試合。

準決勝第1試合では、クウネルさんが勝利して決勝進出を決めた。

……最後に使ったアレはアーティファクト。それにあの姿は……。

（……まあ、それは後で考える事にしましょう）

それより今は、こっちに専念すべきです。

アスナさんは間違いなく、下手な魔法使いよりもずっと強い。

タカハタさんまでとは行かないかと思いますが、それでもそれに準ずるくらいの实力は持つていても不思議ではない。

さらに“魔法無効化”という稀少能力保持者。……まさしく魔法使い殺しですね。

「レイヤちゃん、覚悟はいい？」

「ええ。こちらも手加減はしません。……最初から最後までクライマックスで行かせていただきます!!」

そう、戦いはノリのいい方が勝つんですよ!

……あれ? この台詞、なんでしたっけ?

『それでは第14試合……Fight!!』

試合開始と同時に、私は無詠唱で魔力供給を行い、アスナさんも咸卦法を発動させる。

……究極技法“咸卦法”。

発動するだけで、肉体強化や加速だけでなく、物理・魔法防御、鼓

舞、耐熱、耐寒、耐毒……その他諸々の効果を得られる高難度技法。魔力供給呪文でも、せいぜい肉体強化と加速が関の山だと言つのに……さすがは“究極技法”と呼ばれるだけの事があります。

「やあああああつー！」

アスナさんがハリセンを手に、突っ込んでくる。

あのハリセンはアーティファクト。能力は召喚魔などを一撃で送り返す他、魔力障壁も無効化する能力がある。

つまり、防御は無意味。だから……。

（躲し続けるしかないー！）

何度も鍛えた足さばきで、アスナさんの撃ち込みを紙一重で躲していく。<sup>ステップ</sup>

確かにアスナさんは速いし、攻撃力もかなり高い。さらに耐久力だってある。

だけど、タカハタさんのように『全く見えない攻撃』でも無ければ、高音さんのように『絶対的な防御力』も持っていない。

決して勝てない相手じゃ………ないー！

（『魔法の射手・雷の3矢』！）

「無駄ッー！」

3本の魔法の矢はアスナさんへと向かうが、全てハリセンの一降りでかき消される。

やはり、何十発も撃ち出すのならともかく、1発や2発の無詠唱魔法の射手では効果は無い。

遠距離からの魔法攻撃は通じない。なら………。

「接近戦しか無い！」

身を低くして大振りを躲し、カウンターで三連撃をアスナさんの身体に叩き込む。

……私の身体の小ささは、敵の攻撃に当たりにくいという利点はあるけれど、同時に攻撃が軽いという欠点がある。

1発2発入れたところで、堪えるはずがない。それなら、堪えるまで打ち続ければいい。

「はあああああつ！！」

[illegible]

さすがに何十発も受けたのは堪えたのか、アスナさんの身体が揺らぐ。

しかし、カウンター気味にアスナさんの蹴りが、私の肩に叩き込まれた。

ぐっ……なんて馬鹿力！ クラスでも1/2を争う脚力は伊達じゃありませんね……！

「まだまだアアアッ！！」

「こんのおおおおお！！」

私の体力が尽きるのが先か、アスナさんの体力が尽きるのが先か……。

これから先、ガチの撃ち込み合いになりますね。

[Side Out]

「Side Kotaro」

あのクウネルとかゆーヤツ、強かった。

俺に「私の足元にも及びません」とか言うてた……まあ、メツチヤ悔しいけどその通りや。

……最後、獣化するかどうかで迷うたけど、こんな場所で獣化したら誤魔化しようあらへんし、勝てるかどうか怪しかったからやめといた。

「……………ん？」

今、ネギっぱいヤツが見えた気したけど……気のせいかな？

そう言えばネギ……予選落ちしてから、顔ずっと見てへんな。見る事も修行になる言うて誘ったけど、仕事とかどうとかで断られたし、警備で回つとるんか？

「……………よし」

気になったので、ネギっぱいのが見えたところから後を付けてみた。  
……お、いたいた。やっぱりネギや。

仕事柄、誰かを尾行したりさせたりするのは得意や。多分、気づかれへんやろ。

でも、こつち大会関係者以外立ち入り禁止の区域やないか。何しとるんや、アイツ。

「お、部屋に入ったな」

扉に張り付いて、中の音を探る。

防音結界でも張つとるんかわからんけど、ほとんど聞こえへん。でも、微かにやけど話し声が聞こえるな……。

1人はネギで間違いないけど、もう1人は……。

『……こちらも首尾は上々ネ』

『超さん、そろそろタカミチ達も来ると思うので、早く逃げた方がいいですよ?』

……あ、それやそれ。超鈴音やったか? この大会の主催者。ここにいてもおかしゅうないけど、何でネギがここにおるんやろ。

『ならネギ坊主、すぐにハカセを連れてこの場を去た方がいいネ』  
『超さんはどうするんですか?』

ん? なんかな臭い感じがするな。

昔、何度も感じとつたいやゝな感じがビンビン来とるんやけど……。

『私は残る』

『それだと捕まっちゃいませんか?』

『大会主催者が決勝戦を見届けない訳にはいかないヨ。大丈夫、心配いらないネ。計画は予定通り』

計画？

ダメや、俺ごちやごちや考えるの向いとらんし……とりあえず、適当な魔法先生にでもこの事伝えて……。

『それより……ネギ坊主、扉に張り付いてる狗を掃除してくれない力？』

ちっ、気づかれた！

俺がその場から飛び退くとほぼ同時に、扉が粉碎された。その向こうに立つとったのは……ネギ！

「コタロー君、どうして……」

「ネギ！ お前、何のつもりや……」

こないな所で魔法使って……俺やから良かったけど、一般人やったら怪我しとるで！

……ん？ なんや、今のネギ……どこがおかしいか？ 目が濁ってる言うか、気配が妙に大きい言うか……。

「……コタロー君も、僕の邪魔をするんだね……」

「ッ！？」

瞬間、ネギの身体から魔力が膨れあがった。

な、なんなんや！？ この前までのネギの魔力とは全く違う……殺気混じりやないか！

「『魔法の射手・雷の43矢』……」

ネギが撃ってくる無数の魔法の矢を躲しつつ、曲がり角の影に隠れる。

こないな狭い所じゃうまく戦えへんし……下手したら、魔法で滅多打ちにされる。

(……よう考えたら、俺ネギとここでやり合う意味あるんか?)

確かに、個人的には戦いたいと思うとるけど、何もこんな所でやり合う事は無い。

こんな一般人が来てもおかしい所で戦ったたら、他のヤツ巻き込みかねんし……。

……よし、逃げよう。

「遅いよ、コタロー君」

「なっ!?!」

気づいた時、俺の後ろにネギがおった。

ど、どという事や!?! さっきまで向こうおったはずなのに……。

「『白い雷』!」

「ぐっ!?!」

零距离で攻撃魔法を受けて、思わず片膝をつく。

か、身体が痺れる……京都で受けた時と同じヤツやな……。

「ゴメンね、コタロー君。だけど、コタロー君が悪いんだよ?」

「な、なんやて……」

「僕たちの邪魔されたら困るから……少し、眠っていてもらっよ」

ネギの手が俺に迫る。

こうなったら、無理矢理獣化して……。

「お前達、そこで何をしている!!」

その声と共に、無数の針が俺たちの足下へ突き刺さった。  
なんや、この針……妖力で強化されたものみたいやけど……。

「こんなところで魔法使用……何を考えている!」

り、陸斗さん!

いや、俺もよう分からのやけど、いきなりネギが魔法で攻撃してきて……。

そ、そうや! なんや分からんけど、超とネギが話したんや。  
計画がどうか。

「何?」

陸斗さんの視線が厳しいものになり、ネギの方へと向く。

「……ネギ坊主、ちょっと職員室まで来てもらおうか」  
「くっ!」

ネギが懷から時計を取り出すと、そのスイッチを押す。  
瞬間、ネギの姿が消えた。今は……転移魔法か?

「いや、魔法を使った形跡は無い。魔法陣も展開されなかったし、  
おそらくあの時計のようなものの力だろう」

陸斗さんが近づいてきて、俺の腕を掴んで身体を起こす。

それにしても……ネギ、さっきの行動といい、いつものお前とどこかおかしいで。

……お前、何考えとるんや。

[Side Out]

[Side Asuna]

「はあ、はあ、はあ………」

「……し、しぶといですね」

そ、それはこっちの台詞よ。

私もレイヤちゃんも、これまでの猛攻で体力は限界に近い。

レイヤちゃんは怒濤のラッシュでインファイトしかけてくるし、かく言う私も攻撃を最低限防御しながら撃ち込み続ける。

……ぶっちゃけると、ガチな殴り合い。

「……時間ももうすぐ15分ですし、そろそろ終わりにしましょうか」

レイヤちゃんの身体に、これまで以上の魔力が収束する。

……そうね。これが最後の勝負になるんだから、私もそれ相応の一撃で迎えないと。

ハリセンを捨てて、全身に咸卦の気を巡らせる。

『こ、これは両者睨み合って……凄まじい緊迫感です……！』

おそらく、勝負は一瞬で付く。

私もレイヤちゃんも、体力は限界に近い。一撃受ければそれで沈む。私の蹴りが決まってレイヤちゃんが倒れるか、レイヤちゃんの一撃を受けて私が倒れるか。それ以外に、この勝負の結末は無い。

そして、2人同時に地を蹴り、互いに拳を振り抜く。

私の撃ち込んだ拳がレイヤちゃんの左頬を掠め、頬がかなり深く裂けて鮮血が飛び散る。

外した。だけど終わりじゃない。

私が右脚から蹴りを放とうとした瞬間、懐に深く鈍い痛みが走った。見れば、レイヤちゃんの右肘が叩き込まれていた。

(ッ……………!?)

身体が、ちよつとぐらつく。

「……八極拳・左右硬開門。実戦で使ったのは、初めてです」

……なるほど、カウンターか。

「……やっぱり強いね、レイヤちゃん」

「アスナ、さん………」

……うん、でもまだまだ。

言い訳っぽく聞こえるかもだけど、私もレイヤちゃんも、こんな場所では本気は出せない。

今度やる時は、本当に本気で戦いたいな。

「ま、今回は……負けっただけで事にしといてあげる」

1番言いたかった事を言い残して、私はリングに倒れ込んだ。そして、そのまま意識を手放した。あゝ、疲れた……。

[Side Out]

「Side Cha o」

……ようやく決勝戦力。

レイヤさんと、あのクウネル・サンダーズなる人がどんな戦いを繰り広げるかにはさほど興味は無い。

せいぜい派手にやってくれるなら、それはそれで嬉しいネ。

「…………さて」

ネギ坊主とハカセもうまく逃げたし、後は私だけ。

表彰式が終わったらとっとカシオペアで過去へ飛ぶので、問題無い。

ログを見たところ、レイヤさんはアレを全く使っていないようだが…

……まあ、身につけているようなので、今のところは大丈夫ネ。

「今のところの不確定要素は、あの3人」

レイヤ・スプリングフィールドに風峰陸斗、そして近衛凜音。

この時代に来て、あの3人の存在を知ってから、必死で切り崩すだけの情報を集めた。

その中でも、風峰先生に関する過去は興味深いものがあつたネ。それこそ、取り戻したいであろう“過去”がある事も。

「…………まあ、引き込める可能性は低いガ、それでも心を乱せば充分ネ」

かつて愛した女性を取り戻したいかと聞かれ、動揺しない者はいない。

例え願がなくとも、心は揺れる。揺れて揺れて、そして乱れる。

さあ、そろそろ行かせてもらおうか。

### 第63話：意地の張り合い、せめぎ合い（後書き）

#### 質問

魔法世界の人間って、旧世界に来る事が可能なんでしょうか？

よく他の方の二次小説を見ていると、魔法世界の人間が旧世界に来ているのを見ます。

フェイトが「魔法世界が消えたら彼らも消える」と言っていますし、彼らが魔法世界から出ることが出来るのかどうか疑問です。

皆さんの意見を聞かせてください。

第64話：Extra Passage（前書き）

タイトルに特に深い意味はありません。

## 第64話：Extra Passage

〔Side Reimu〕

私はちゃんと巫女をしている。巫女をしている。……大事な事なので2度言いました。

まあ、それはともかくとして……こうやって神社内の整理も巫女の仕事の1つ。

……あんまり整理してないから、ごちゃごちゃしてるけど。

「霊夢、こっちの本もらっていいか？」

「持ってたらはっ倒すから」

バカ言う魔理沙に釘を刺し、再び整理に戻る。

私は別に構わないんだけど……まず紫が怒る。滅多に帰って来ない神主様もきつと怒る。

真面目に手伝ってくれたら、お茶ぐらいならご馳走してあげるから。

「……ん？ なんだこれ」

「どうしたのよ」

何だか妙な声を出した魔理沙の方へ近寄る。

持ってるのは……写真？ 相当古いわね……。

「あ、これこの前来てた陸斗ってヤツじゃないか？」

「…………ホントだ」

赤ん坊を抱きかかえた白襦袢に袴姿の女性と、同じく赤ん坊を抱いたあの陸斗って人が映ってる。場所は……ここ？

紫の話だと、うちの家系に関わりのある人で、私とも面識があるみたいだけど……うーん、覚えがない。  
小さい頃の記憶って消えやすいからね。

「そういえば、霊夢の家系ってどんなのなんだ？」  
「私だって詳しく知らないわよ。……ただ」

幻想郷が出来るずっと昔、退魔師……ようするに妖怪退治をしていた一族だったって聞いている。  
でも、色々あって一族が滅んで、その数少ない生き残りが幻想郷へやってきた……だったかな。  
そんなような事をむかし教わった気がする。

「じゃあ、一族が残ってたら霊夢も貧乏な暮らししなくて済んだかもな」

「……………そうね」

何で滅んじやったのかしら。勿体ない。

「お、裏に何か書いてあるぜ」

ぴらっと写真を裏返した魔理沙が、何か言ってる。  
何て書いてあるのよ。

「……………陸斗と瑪瑙、娘たちと」  
「……………え？」

[Side Out]

「Side Leiya」

ついに決勝戦、ですか。

これに勝てば一千万円……負けても、格段と下がるとはいえ一応賞金が出る。

だとしても勝ちたい。そして1千万円獲得を目指したい！

『ではいよいよ、達人達の頂点に立った2人に入場して頂きましょう！ まずはクウネル………』

「もう来てますよ」

『うおっと！？』

いつの間にか、クウネルさんは朝倉さんの隣にいた。

なんと言いますか……本当に謎な人ですね。

『出ました、クウネル・サンダース選手！ 口元には余裕の笑みを浮かべている！ 確かにここに至るまで、傷らしい傷も負っていない

いようだ！ フードすら脱げた事のないその素顔は未だに不明！  
流派も全く不明！ まさに正体不明、謎の無敵魔人だ！」

私としては、そのふざけた名前になりますけどね。

チキンを食べて名付けた名前か、それとも「食って寝る」から来ているのか……。

『さあ対するは……わずか10歳でこの達人達の間を勝ち上がってきた天才少女！ 10歳の飛び級中学生！ 中国拳法の使い手……』

さあ、行きましょうか。

リングへと続く道を、1歩1歩踏みしめて進む。

『レイヤ……スプリングフィールド選手——ッ！！』

リングへと上がり、クウネルさんに向かい合う形で立つ。

小太郎さんや楓さんとの試合では、重力魔法を多用していた……  
気を抜けば、一瞬で潰されかねない。

『それでは決勝戦……Fight!!』

その声と同時に、クウネルさんの周囲に無数の本が出現する。

おそらくはアーティファクト。……楓さんとの試合でも使っていたが、これはいったい……。

「よくぞ決勝までたどり着けましたね、レイヤさん」

「……………」

そういえば、まともにクウネルさんと話すのはこれが初めてですね。

アスナさんは何か話していたようですけど……………。

「我が名はアルビレオ・イマ。千の呪文の男……………ナギ・スプリング  
フィールドの友人です」

「ッ！？」

と、父様の友人！？

そうか、この人どこかで見た覚えがあると思ったたら……………京都の別荘  
で見た、父様が写ってた写真にいた人！

最強クラスの人間とは思いましたが、まさか“アラルブラ紅き翼”の人間とは  
……………。

「が、しかし……………私の事はこれまで通り、クウネル・サンダースと  
お呼びください」

気に入ってますので、と続けて不敵な笑みを浮かべたアル……………クウ  
ネルさんに思わず啞然としてしまう。

……………気に入ってたんですか、その名前。

「それでは、決勝までたどり着けた貴女に、1つご褒美を差し上げ  
ましょう」

「え？」

と、クウネルさんが浮いていた本の1冊を左手で取り、その本に右  
手の槲を挟む。

「そしてこれで……………私も10年来の友との約束を果たす事が出来ま  
す」

そして、挟んだ槲を引き抜く。

そう、これは楓さんとの試合でも行われたアクション……これがアーティファクトの効果を発動させるための手順。  
栞からは魔力があふれ出し、それが光を放ち、私たちの目を眩ませる。

『おおっ！？ これはいったい何の光だ——！？』

とりあえず……朝倉さん、下がっての方がいいですよ？

光が収まると、そこには煙が立ちこめており、その中には人影が見える。

フードが脱げているようですが……あれ？

『い、意外にもかなり洪めのオッサン……失礼、オジ様だったとは……これがクウネル選手の素顔なのか！？』

そこにいたのは、明らかにクウネルさんとは別人のダンディなおじ様。  
タカハタさんと似たような白スーツに身を包み、両手はズボンのポケットに入れられている。

……この人、確かあの写真に写っていた人ですよ？ まさか、クウネルさんのアーティファクトの能力って……。

呆然していると、突然クウネルさん（？）が両手を合掌させ、瞬間で上空へと移動し、無数の無音拳でリング周囲の水面を撃った。

「ぶはっ！？」

思わず舞い上がった水を吸い込んでしまい、咽せる。

しかし、水煙でリングが隠されている。……なるほど、狙いはこれですか。

「……さすがはガトウです。素晴らしい威力ですね」

と、元通りの姿でクウネルさんが私の背後に立っていた。  
その手には3枚の槲が握られている。

「他者に変身する能力……それがあなたのアーティファクトの能力  
ですか？」

「まあ、そんなところです。正確に言うならば……私のアーティフ  
アクト「イノチノシヘン」の能力は……」

再び、クウネルさんの姿が変化する。

今度は詠春さん……それも、おそらく最盛期だったと思われる若い  
頃の姿に。

「特定人物の身体能力と、外見的特徴の再生です」

つまり、その人物の固有能力や技法も全てコピーできる……という  
わけですね。

楓さんとの試合では父様、さっきは「ガトウ」なる人を再生し、技  
を再現した……。

「しかし、この能力は自分より優れた人物の再生はわずか数分しか  
出来ず、あまり使える能力ではありません。それに大抵の人間は私  
より弱いので、再生する意味も無いですしね」

それも……そうですね。

かなりレアなアーティファクトでしょうけど、術者の強さ故に意味  
が無くなるとは……哀れな。

また、クウネルさんの姿が別の人へと変わる。……今度はネカネさ  
んですか。

「私の趣味は他者の人生の収集……この魔法書一冊一冊にそれぞれ、1人分の半生が記されています」

……悪趣味ですね、それ。

「そして……我がアーティファクトのもう1つの能力は……」

今度は今よりも数歳幼いアーニヤさん。

……それにしても、どうやってアーニヤさんやネカネさんに接触したんでしょう？

「この『半生の書』を作成した時点での、特定人物の性格、記憶、感情、全てを含めての……『全人格の完全再生<sup>リプレイ</sup>』」

……完全、再生。

「尤も再生時間はわずか10分間……。魔法書も魔力を失って、ただの『人生録』になってしまったため、これまたあまり使えない能力です」

能力はすつごくレアなんですけどねえ。

「まあ、使えんとすれば『動く遺言』として……といったところでしょうか」

……遺言？

さつきから妙に引つかかる単語ばかりなんですけど。

「……いかがです？　ここまではわかり頂けましたか？」

「まあ、だいたいは」

そもそも、あなたは何をしに大会に参加したんです？

どうも、賞金が目的のようにには思えませんし、となると考えられるのは私やアスナさんくらいですが。

既に水煙は晴れつつあり、観客の視線も私たちへと集中している。

「……では、本題です。10年前、我が友の1人からある頼みを承りました。『自分にもし何かあった時、まだ見ぬ子供達に何か言葉を残したい』と……」

……なるほど、そう言う事ですか。

あのバカ父は10年前、既に『何か起こる事』を予期していたわけですね……。

「心の準備はよろしいですか？ 時間は10分、再生は1度限りです」

クウネルさんの手にある半生の書には、しっかりと「ナギ・スプリングフィールド」と書かれている。

ふ、ふふふ……ふふふふふふ……ふはははははははははは！  
！！

「では……ってレイヤさん、どうかなさいましたか？」

「……私、ずっと昔から決めていた事があるんです」

につこりと笑って、光に包まれつつあるクウネルさんに言い放つ。

「うちのバカ父に会ったら、とりあえず殴り飛ばす、と」

私の言葉を聞いて、クウネルさんは一瞬固まったように見えたが……すぐにあの不敵な笑みを浮かべた。  
……何故でしょう。すごく誰かに同情しているような笑みに見えたのは。

『ま、また光った——！？』

光が収まり、その中心点からは何羽もの鳥が飛び立つ。  
そこにいるのは、ローブに身を包んだクウネルさんではなく、20代ぐらいの赤毛の男性……。

「よお、お前は……レイヤか？」

不敵に笑いながら、私にそう問いかける。

……ふつ、この時を……どんなに待ちかねた事が……！

「父様——！」

顔は見せずに、素振りからまるで泣いているように見せ、そのまま駆け出す。

気づかれぬよう、右手には王家の魔力を集中させる。

そして、まるで父の胸に飛び込む娘のように、地を蹴る。だけでも演出通りに事を進めるつもりはない。

「せいっ、やあああああああああああああつっ  
！——！」

王家の魔力に10年分の恨み辛みを込めて、思いつき父様の顔に拳を叩き込んだ。

「ろもぺぎのめすこつ!？」

まさか娘がこう来るとは思っていなかったらしく、驚いたような顔で派手に吹っ飛び……水柱を立てた。

……なかなかすつきりしましたね。

「ちょ……レイヤ、お前何しやる!」

……ちつ、さすが腐つても英雄。

王家の魔力を込めたとはいえ、私程度の一撃ではK・O出来ませんか。

「今まで放っておかれた分、10年間にも渡る恨み辛みに王家の魔力を混ぜ込んで叩き込ませて頂きました」

「いや、それはホントに悪いと……ちょ、ちょっと待てお前! 今なんて……」

ああ、王家の魔力って言いましたよ。

私の血筋の事ならちゃんと知ってます。何と言っても私、母様そっくりですからね。

「……そうか。さっきの一撃といい、確かにアイツにそっくりだな」

くしゃくしゃ、と頭を撫でられた。

……何故でしょう、何だか……とても嬉しい。

「さて、時間も無い。改まって喋ったりするのは……何っーか、苦手だしよ。せつかくこんな舞台が用意されてる事だし……」

すっと、父様が構えを取る。

「稽古を付けてやるぜ、レイヤ」

……確かに、10分間ただ喋ってるより……こっちの方がずっと私たち向きです。

私も何も言わずに構えを取る。それに……。

「私の10年にも及ぶ恨み辛みは、まだ完全に解消されていませんからね。……思う存分ストレス発散させてもらいますよ、バカ親父」  
「ハッ。……いい度胸じゃねーか、来な」

こうして10分近くにも及ぶ、壮絶な親子喧嘩が始まった。

[Side Out]

[Side Rikuto]

うわあ……アイツ、私怨ぶつけまくりだな。  
衣玖もそれに苦笑いを浮かべているが、心情的にはレイヤの味方らしい。

「無理ないですよ。何せ、10年間ほったらかしだったんですよ？」  
「……………だよな」

聞けば、レイヤとネギ坊主はほとんど育児放棄に近い形で育ったという。

ナギの兄貴の家で育ったらしいが、家の離れを間借りしており、ほとんど1人暮らしに近い。

……完全に育児放棄で訴えられるぞ、それ。

「そういえば、レイヤさんのお母様は？」

あゝ、言われてみれば……どうなったんだろう。

大戦終わってから、正直なところ俺、アイツらに会ってないんだよ。式典出ずに幻想郷に戻ったからさ。

10年前にタカミチとアスナ助けに行つて……それぐらいだし。

「だから、アリカがどうなったかとか知らないんだよ」

レイヤ達が生まれているんだし、少なくとも10年前までは生存確定なんだろうけど……。

今現在、生きているのか死んでいるのか……正直、分からない。

「そう、なんですか？」

「残念ながら、な」

レイヤにも1度聞かれたが、同じ言葉を返してある。

……結構残念がってたっけな。どうもアイツは、父親よりも母親の方に惹かれてるみたいだし。  
やっぱり、ネギ坊主とは正反対だな。

「……お、そろそろ終わるかな」

そしてもう1度、リングの方へと視線を向けた。

試合終わったらとりあえず、殴りに行こう。主にネギ坊主の事とかの分を叩き込みに。

[Side Out]

[Side Leiya]

結果？ 負けましたよ、完膚無きまでに。

さすが、腐っても英雄です。私の攻撃もほとんど当たりませんでしたし、有効打になったのは2、3発でした。

「……よく、頑張ったな。レイヤ」

何故、でしょうか。

父様なんて別にどうでもいいと思ってたはずなんですが………嬉しい。

やっぱり、これが家族というものなのでしょうか？

「浮遊術と虚空瞬動、しっかり出来てたじゃないか。……ま、俺もお前くらいの頃には完璧だったかな」

「……頑張りましたから」

むすつと、そっぽ向く。

父様は苦笑しつつ、私に手を伸ばす。

既にカウントは進んでいるが、私には気にならない。どうせ勝敗は決まっていますから

「………今度は」

「ん？」

「今度は絶対、負けませんから」

そう言って、父様の手を取った。

『カウント10！ クウネル・サンダース選手優勝——ッ！——』

……1千万、欲しかったなあ。

## 第65話：火炎少女と時の列車

「Side Leiya」

傷はそれほど深くないですけど、やっぱり痛みますね……。早めに手当てしないと、残っちゃうかもしれません。

「腕、後でアルに治してもらえよ。アイツ、治癒うめーから」  
「あ、はい」

……傷つけた本人がそれ言いますか？  
まあ、真剣勝負だったのだから、とやかく言いませんけど。

「ん」……ここでこうやってお前と話してるって事は、俺は死んだっつー事だな……」「え？」

……いえ、まだ死んでないはずですよ。  
あのバカが父様に助けられたと言っていましたし……。

「悪いな。お前達には何もしてやれなくて」

ズキツと……心が痛んだ。

「こんな事言えた義理じゃねえが……元気に育ちな。……じゃあな」

もうすぐ再生時間が尽きる。

目の前にいる父様は、記録に過ぎない幻。

……それは、分かっているんですけど……。

「……まあ、まだ残ってる文句は本物のあなたに叩き込みに行きますよ」

「何？」

私の言葉に一瞬固まる父様。

そして、そこへ……………。

「又アアアアアアギイイイイイイイイイ！！」

「え？」

その声と共に飛んできた何かによって、父様が大きく吹っ飛んだ。私がやった時よりもずっと吹っ飛びましたね。

……あれ、誰かと思えば風峰先生じゃないですか。

「り、陸斗！？ お前、何でここに……………」

「黙れ。とりあえず殴らせろ」

「はあっ！？」

いや、仕方ありませんって。

ネギがバカやらかした後始末、全部風峰先生が片付けてるんですから。

……よくよく考えてみると、この人かアスナさんが1番被害を被ってる気が……………。

「いや、もう時間ねえって！」

「ちっ……………仕方ない。なら本体を殴りに行くか」

ええ、存分にお願ひします。私もまだ殴り足りませんし。

……やっぱり、その内探しに行きましようかね。

「……お、時間みたいだな」

父様の身体が発光し始め、光に包まれていく。

「レイヤ、お前が今までどう生きてきて、お前に何があったのか……俺のその後に何があったのか。……幻に過ぎない今の俺には分からない」

「……………」

「けど、お前の姿を見て安心した。アイツにそっくりだからな」

そんなに似てるんでしょうか？ 私と母様。

風峰先生に視線を向けてみると、無言で頷かれた。

「いつか……………」

「？」

「いつか、あなた達を殴りに行きます。首洗って待っててください」

ぐつと拳を握りしめてそう言い放つ。

父様は一瞬呆気にとられていたみたいだが、ふつと表情を崩す。

「……………じゃあな」

光が天へと上つていき、消えた。

残ったのは、再びフードを被ったクウネルさん。

………ちよつとだけ、悲しいかもしれませんが、立ち止まるつもりはありません。

私はただ、前へ進みましょう。

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

大会は終わった。

レイヤ達本戦出場者はしばらくの間、取材陣に付きまといられる事になるだろうが……まあ、その辺りは仕方ない。

……さて、お仕事の時間だ。

“ 風峰先生、超鈴音を捕捉しました ”

“ わかった。すぐに行く ”

後方に控えていたタカミチ達と顔を見合わせ、頷き合う。

既に会場を魔法先生達を取り囲んでいる。……そう簡単には抜け出せない。

とはいえ、相手は『麻帆良の最強頭脳』。どんな隠し技を持っているか分からない。油断は禁物だ。

……いた。

「超、ちょっと職員室まで来てもらおうか」

「何の罪で、カナ？」

俺の呼びかけに、超は不敵な笑みを崩さぬまま答える。

いや、とりあえず事情聴取だ。罪になるかどうかはその後で判断させてもらう。

「とはいえ、魔法をバラそうとしているんだ。MMだったら即座に極刑に処せられるだろうがな」

「フフ……古今東西、児童小説や漫画でも、魔法使いはその存在を世間に対し秘密にしている……というお話は多いネ。何故カナ？」

「……………何が言いたい？」

飛びかかるうとするガンドルフィーニを手で制して、逆に問いかける。

「私から逆に聞こう。何故君たちは……その存在を世界に対し隠しているのかナ？ 例えば……今大会のように、強大な力を持つ個人が存在する事を秘密にしておく事は、人間社会にとって危険ではない力？」

ふむ、まあそれも考え方の1つではあるな。

何故かって聞かれると、やはり大多数の魔法使いがそれを望んでいるからだな。かく言う俺も秘匿希望者だ。

魔法の存在が明らかとなれば、それだけ危険度が増す事だってあり得る。そーゆー面倒な事は嫌いなんだね。

それに、幻想郷にも火の粉が降りかかる事になりかねないからな。

「……………どうやら、話は平行線になりそうネ」

「ああ。話しても無駄なようだな」

すっと右手を挙げると同時に、周囲の魔法先生達が一斉に飛びかかる。

いくら超でも、あれは躲せない。俺も懷から針を取り出し、超目がけて……。

「フ…… 3日目にまた会おう。魔法使いの諸君」

そう言つて、超が消えた。

空間転移か？ いや、魔法具が使われた形跡は無かつたし、魔法でも無い。今は……。

「トレースは？」

「…… 出来ません。完全に見失いました」

…… 逃げられた、か。

少なくとも、あれだけ自信満々にこちらと接していたんだ。今から搜索しても見つかりはしないだろう。

しかし、あれは何だったんだ？ …… まあ、考えるのは後でいいな。

「1度戻るぞ。超鈴音は危険だ。何としても止めるぞ」

「「「はい！」「」」

[Side Out]

「Side Leiya」

どうも、またまた私です。

あの後、クウネルさんが表彰式でさっさと逃げちゃったので、本戦出場者である私たちにも取材陣がしつこく迫ってきたので、逃げ回っています。

……まあその道中、クウネルさんに腕と頬の傷を治してもらいましたが。

そして現在、同じ様に追われていた高音さん、愛衣さん（名前で呼んで欲しいと言われたので）と合流し、警備に戻っています。

「しかし、ここまで反響が酷いとは……」

思わず頭を抱えている高音さん。

……まあ、気持ちは分かりますよ。私だってこんなの想定外ですし。

「……それにしても、超さんは何考えてるんでしょうね」

合流してからしばらくして、学園側から緊急連絡が入った。

内容は、「超鈴音が魔法を世界にバラそうとしている事」。そして

「超鈴音の捕縛命令」も下された。

おそらくは、あの大会もそのための仕込みの1つ、だったんでしょ  
うね。

おまけに……何ですか、この妙なガセネタは。

「レイヤさん、本当にあの人、“千の呪文の男”じゃないんですよ  
ね？」

「違いますよ。そのお仲間さんです」

愛衣さんが手にしたケータイには、大会の情報サイトが。

そしてそこには、『ウワサの天才少女、涙の極秘プロフィール』と  
ある。あと、私が出場を決めたのは修行の一環およびお金のため  
です。

……本当にプライバシーも何もないですね。本気で訴えてあげまし  
ょうか？ 確実に勝てますよ？

「最後のアレはアーティファクト。10分間だけ特定人物に変身出  
来るゝみたいなヤツです」

「なるほど……」

まあ、その話はもうやめにしましょう。

ところで、どうしました？ 愛衣さん。何だか真剣な顔のままです  
けど。

「……あの、レイヤさん」

「はい」

「レイヤさんはどうやってそこまで強くなったんですか？」

………はい？

「だって高畑先生やお姉様だって倒しちゃいましたし、あんなに強い神楽坂さんにも勝っちゃったじゃないですか！」

「確かに、私も気になりますね」

興味津々という顔で2人が私に尋ねてくる。

「どうやって強くなつたと言つても……エヴァンジェリンさんにシゴかれたからとしか言い様が無いんですけど。」

「エヴァンジェリンって……“闇の福音”ですか？」

「ええ」

まあ、名前だけ聞けば怖いかもしれませんが、そうでもないですよ？結構気さくで面倒見のいい人ですし、なんだかんだで木乃香さんやアスナさんの修行の面倒も見てくれてるみたいです。

調子に乗りやすいところもあつて、前に煽てられていい気になった事もありましたね。

「へ……何だか意外ですね」

まあ、ウワサや風評で人を判断してはいけないって事ですよ。

いくら600万\$の賞金首で極悪非道の悪の魔法使いなのが事実でも、それはあくまで一部分でしか無い。

もっと本質を見なくてはならないって事なんですよね……。

「……そう、ですね。魔法使い云々を抜きにしても、私たちは情報に踊らされていますから」

自嘲するようにそう言う高音さん。

うーん……私は気にしてないんですけどね。

[Side Out]

[Side Arnya]

「えっと……時間がちょうどピッタリになったら乗り込め、だったっけ？」

師匠からもらったチケットを手に、私はケータイで時刻を確認していた。

現在時刻は4時3分54秒。……あと少しね。

……5, 4, 3, 2, 1, よし！

「……………つて」

扉を開けたそこは、さっきまでの部屋の光景ではなかった。  
そこに広がっていたのは一面砂浜。そして私の目の前には列車が停

車している。

……これが、師匠の言ってた「時を超える列車」？ 完全に眉唾物だったんだけど……。

「魔力反応や魔法の感じは全然しないし……」

いや、あの人と関わつてると、魔法とかそーゆーのとは関係なしに物事が見えてくるようになったから。

もう何があっても不思議じゃないし。未来から孫が来たとか言われても不思議じゃないわね。

……いや、それはこの前あったか。あの時は半信半疑だったけど……。

「えつと……どこから乗ればいいのかなつと……」

どこかに乗り込み口があると思うんだけど、どこ？

そつやつてきよろきよろしていると、突然車体の一部が横にスライドして開いた。

えつと乗務員さん、かな？ それっぽい女の人がそこに立っていた。髪に赤いメッシュの入った女の人で、かなりの美人さん。

その人は、にっこり微笑んで私に尋ねてくる。

「チケット拝見します」

「あ、これ……ですか？」

師匠からもらったチケットを見せる。

それを見ると、その人はちよつと驚いたような顔になったけど、すぐに列車に乗せてくれた。

へへ……中は意外と普通なんだ。でも、そこにいる人達がちよつと気になった。

デミューレン  
(……巫人……じゃないわよね?)

まず、目に引いたのは赤い鬼。明らかに、昔話に出てくるような鬼にしか見えない。

次に視界に飛び込んで来たのは、青い甲羅のような装飾の人。体格がどっしりした金色の熊っぽい人は、いびきかいて寝ている。子供みたいにお絵かきしてるのは、紫色でロングコートのような竜っぽい人。

な、何なのよこの人達!?

「失礼。もう1度チケットを見せて頂いてもよろしいですか?」

と、固まっていた私に声をかけてきたのは、黒服タキシードでオルバツクの、紳士風な男の人。

えっと、チケットってこれですね? さっき見せたんですけど……。

「……確かに。ゆちる君のチケットで間違いありません」

師匠の名前が出た瞬間、他の人達が比喩表現無しに凍り付いた。え、ちょ、ちょっと……これどういう事?

「これを持っているという事は……ゆちる君の弟子で間違いありませんか?」

「あ、はい。アンナ・ユーリエウナ・ココロウア……アーニヤです。間違いなんです」

と、そこへ紫色の竜っぽい人がこっちに近づいてきて……。

「ねえねえ、ゆちるお姉ちゃんの弟子って本当？」

「え？ ほ、本当ですけど……」

……ところで、さつきから赤い人が「世にも恐ろしいもの」を見るような目でこつちを見てくるのが気になるんですが。うちの師匠、いったい何をやらかしたんですか？

「ん、色々？」

「……それは本当にごめんなさい」

それだけでも、師匠が目茶苦茶やらかしたんだと分かってしまう自分がいる。

念のために言っておきますけど、私を師匠と一緒にしないでくださいよねっ！？

私、あんな「蹴りだけで大呪文斬ったり」、「悪の秘密組織を灰燼に帰す」ような化物じゃありませんから！

「え、出来ないの？」

「出来ませんッ！！むしろ、出来てたまるかッ！！」

確かに強くなりたい事はなりたいたいけど、あそこまで超人チートレベルになりたいわけじゃない。

最近、あの人ガチでMMとかヘラスとか壊滅できるんじゃないかなって思い出したところなんだけど。

……で、しばらくの間すったもんだで混乱してたけど、ようやく納得してもらえた。

「要するによ、ダチが困ってるからその……ま、毬藻って街に行きたいんだろ？」

「先輩、毬藻じゃなくて麻帆良だって。『ま』しか合っていないし、

そもそも僕ら行った事あるじゃない」

そう私に確認してくるのは赤い鬼…モモタロスで、訂正したのは青い亀の人…ウラタロス。

なお、タメ口でいいと言ってくれたので、遠慮無くタメ口で話させてもらっている。

「うるせえっ！ 似たようなもんだろ！」

「いや、全然似てないし。……でも、行った事があるって？」

「ああ、僕ら1度、麻帆良に行った事あるんだよ。君たちの時間上で言うと……6年ぐらい前かな」

デシリナーは時の中を走っているから、時間の概念が曖昧になりがち。

今は乗ってないけど、この人達の仲間だっという野上良太郎さんは、私たちの時代より未来……2007年の人らしい。

つまり、私の時間では6年前だけど、この人達にとってはそんなに前じゃなくて……うーん、何て言えばいいんだろ。

「1997年の麻帆良でイマジンが大量発生した事があってね、それでゆちるさんの協力を得て、麻帆良に行ったってわけ」

「あれ楽しかったよね、もう1回刑事やったけど」

懐かしそうに話すのは紫の竜っぱい人…リュウタロス。

あ、イマジンって言うのは、未来から2007年にやって来た人間の精神体が、人間のイメージ…つまり記憶によって怪人としての肉体を得た姿……らしい。

イマジンとは過去を改竄する事によって、現在や未来を変える事が目的だとか。

「ところでオーナー、私の事なんですけど……」  
「彼女から前もって話は聞いています」

さっきの紳士……この人がデンライナーのオーナー。

何でも、何日か前に師匠から『その内自分の弟子が来ると思うから、その子を「2003年6月21日」の麻帆良へ連れて行つて欲しい』と言われたとか。

つまり、今日の麻帆良よね。

よく分からないんだけど、レイヤが相当なトラブルに巻き込まれてるって話だし……これは私が行かなきゃダメよね。

「それにしても、そのネギちゅう坊主、相当ぶっ飛んでるなあ」

そう意見を口にしたのは、金色の熊のような人……キンタロス。

うん、それは私も全面的に同意する。だって、ねえ？

「初対面の女の子にいきなり『失恋の相が出てますよ』って……これ、さすがの先輩でも言わないでしょ」

「おう……って、それどういう意味だコラア!!」

いやいや、少なくともネギ以上だって評価されてるんだからいいじゃない。

尤も、ネギ以下になるヤツなんているのかどうか怪しいけど。

とはいえ、私もネギの悪行を全部聞いてるわけじゃない。

中にはきつと、レイヤが気を遣って口にしなかった事柄があるはず。……正直なところ、あまり聞きたくはないけどね。

と、これまで相当な速度を出していたデンライナーが減速し、止まった。他に乘ってくる人でもいるのかな？

## 第6話：Startup that time

〔Side Callim〕

アリアドネー MM大使館・大使執務室

いつも通り書類を整理し、午後のお茶を楽しんでいた時、MMのクルトから連絡が入った。

何やら慌てていたようだったけど……彼の話を聞いて私は納得した。同時に、頭を抱えた。

「……まさか、そこまで話が進んでいたとは……」

『完全に。こちらの見通しが甘かったとしか言い様が無い』

クルトも私同様に顔色が悪い。

それについては無理も無い。私だって完全に想定外だったもの。

「ネギ少年の悪ぎよ……問題行動がそこまで酷かったとは」

陸斗によると、『魔法の暴発で衣服を吹き飛ばす（この辺りには女性として同情を禁じ得ない）』、『授業を放棄して勉強合宿』、『相棒のオコジヨ妖精の悪行を止められず、生徒と仮契約』、などなど。

その辺りは麻帆良学園の学園長がうまく隠蔽していたけれど、ちょっと前にレイヤさんが人を殺すという事件が起きた。

もちろんこちらでも取り上げられたけど、それ自体は「正当防衛」だという判断が下されたため、お咎め無しという事になった。

しかし、ここで1つの疑問が浮かんた。

これまで『スプリングフィールド兄妹の問題行動について、全く報告が挙げられていない事』について。

いくら“立派な魔法使い”候補生とはいえ、10歳の子供なのだから、問題行為の1つや2つ、挙がってこなければおかしい。

それは元老院全体に蔓延した疑問であり、秘密裏に彼らの修行風景について調査が行われた。その結果は……言わなくても分かるはず。

そして、さらにその上で浮かんだ疑問というのが……

『麻帆良学園は、ネギ・スプリングフィールドが“立派な魔法使い”として修行に勤しむ場所として相応しいのか？』

……である。

私はアリアドネー在住のため、その事については知る由も無かったのだが、既に本国ではそれに関する問題で荒れるに荒れているとかもしも、これで『ネギ・スプリングフィールドの修業先をMMに変更する』のように正式な命令が出されれば……私やクルトが元老院議員だからといって、それを覆す事は出来ない。

つまり、その時点でネギ少年の運命は決まったも同然。

『彼もアリカ様の血を引く者。つまり、ウェスペタルティア王家の人間。……あの老害共にとってしてみれば、この上なく使い勝手のいい手駒は無いだろう』

……確かに。

おまけに“英雄”ナギ・スプリングフィールドの子供でもある。世界を救った英雄と亡国の女王の間に生まれた子供……この世界に

とつては、恐ろしいほどに力を発揮する存在となり得る。

「唯一の救いは、レイヤ・スプリングフィールドに干渉が無い事ね」  
『何せ、彼女はアリカ様に似すぎている。……そう下手に手出しは出来ないはずだ』

『災厄の女王』という汚名を着せられてはいるものの、オスティア出身者の大多数は今なお、アリカ様を慕っている。

ここで重要となってくるのが、ウェスペタルティア王国の王位継承権が未だ生きている事。

王国その物は滅んだけれど、その仕組みや王権その物は宙ぶらりん……つまり、王家の血統の者がいれば、即座にその者が即位する形になっている。

現在、アリカ様が表向きは刑死されている事で、王の座は空位となっている。

問題はそこなのよね……………。

『まあ、ネギ君がこれ以上、問題行為を重ねなければ……大丈夫じゃないかな』

それもそうね。

今現在、その辺の判断は極めてギリギリなところにある。

これでもし、超弩級の問題行為が発生したら……それこそアウトね。

「でもこうして話してる内に……もしも、とてつもない問題行為に手を染めてたらどうする？」

『ふむ。……例えば？』

うーん、そうね……………。

「魔法を全世界に向けてバラすとか？」

『……いや、さすがにそれは無いだろう。いくらネギ君とはいえ、さすがにそこまで馬鹿な事はしないだろうし』

「それもそうよね」

……しかし、この時点で私は失念していた。

私自身がアーティファクトで作成したあの予言の事を。

[Side Out]

[Side Rikuto]

現在、俺は警備をしつつ学祭デートに勤しんでいる。

……告白生徒もそうだが、別れようとしている生徒も止めなければならない。

何故か、だと？ 考えてみる、世界樹の魔力は告白……人の心に作

用するわけだ。

1日目のネギ坊主の一件から、「キスして欲しい」のように幅広い定義に当てはまる事が判明した。……だったら逆の事も言えるわけだ。

要するに、「告白すれば120%成就する」のだから、その逆「フッたら120%別れられる」事になる。

「それにしても、龍宮さんには驚きましたね」  
「ああ」

龍宮なんて、告白阻止に麻酔弾を使っている。

ついさつき告白生徒を阻止しようとしたら、いきなりズドンだぞ？  
あれはビビる。

……俺？ 麻酔薬を塗った特殊素材の針で……。

「反応ありました。2時の方向、距離30です」  
「ほいつ」

ぷすっ

告白しようとしていた男子生徒は、首筋に針を受け、その場に倒れる。

一応、急所は外してあるし、針自体も刺さったらすぐ消える特別仕様。もちろん人体に影響は無い。

「……それにしても、多すぎだろ」

これでちょうど20人目。

あくまで俺たちが阻止した生徒の数なので、他の魔法先生や魔法生徒が阻止した数を加えれば、間違いなく3桁はいく。

「あまり世界樹伝説は関係ないのかもしれませんが」

「と言うと？」

「学祭だから、ですよ。こういったイベントだと、男女間の距離は自然と縮まるものですから」

衣玖の言葉に、確かにそうかもと納得する。

これまで阻止したヤツの中には、もしかしたら伝説を知らずに告白しようとしていたヤツもいたかもしれない。

……まあ、どちらにせよ告白は阻止するから関係ないんだが。

「それで、超さんが魔法をバラすという事ですが、いったいどうやって？」

問題はそこ、なんだよな。

これまで、魔法をバラそうとしたヤツは何人もいた。だが、ただ公表したとしても、それは完全にシャットアウトされるし、記憶操作や情報操作によって完全に隠蔽される。

魔法秘匿は魔法使い達の義務であり、専門の組織だって、世界各地に設置されてるくらいだ。

「ただ、超が考えなしに魔法をバラすって事は到底思えない」

少なくとも、超鈴音は“天才”だ。俺たちが想像も付かない策を用意しているに違いない。

タカミチによると、「本来は1年後に行うはずだったが、世界樹大発光が早まったため、急遽準備を早めた」らしい。

……つまり、世界樹を何らかの形で用いるという事か？

「文が送ってきたコレもよく分からないし」

そう言い、ケータイの写真を映し出す。まほら武道会の開催中、文から送られてきたものだ。  
多分、機械化された鬼神兵……だと思う。これを何のために使うかも不明だし。

「ですが、麻帆良内で召喚魔などを用いる事は不可能では？」  
「……そうだな」

常時、麻帆良全域にわたって展開されている学園結界には、認識障害や侵入感知の他に、麻帆良内での召喚行使を封ずる効力がある。つまり、学園結界がある限り、地下のマシン鬼神兵も喚び出せないはず。

……しかし、相手は“麻帆良の最強頭脳”こと超鈴音。何をしでかすが全く分からない上、不可能を可能にしそうで正直怖い。

「……………世界樹、か」

ふと、麻帆良の中心にそびえ立つ、巨大な神木を見上げる。  
何百、何千年近い時間ここに在り続け、麻帆良という街が生まれ、育つていくのを見つめ続けてきた存在。  
それこそ、永遠に近い時間……………。

—— 永遠なんて、無いわ。

脳裏に、アイツの言葉が蘇る。  
紅い月の夜、空のように鮮やかな水色の髪を翻し、見惚れるような笑みを浮かべて……………。

「陸斗？」

衣玖が心配そうに俺の顔を覗き込む。

……ちよつと、昔の事を思い出したただけだ。

「……瑪瑙さんの事、ですか？」

「ああ」

そう言つと、納得したような表情になった。

……衣玖は瑪瑙の事は知っている。というより、紫や閻魔様達からフルボッコにされた後、俺からきちんと説明した。

俺たちの関係が進展しなかった原因として、俺が未練がましく瑪瑙の事を想っていた事がある。

正直に言つと、衣玖が俺に好意を持っていた事に気づいていたし、衣玖に心惹かれていた自分がいる事も自覚していた。

……だが、衣玖の想いに応える事は、瑪瑙の事を裏切るんじゃないか。そんな考えが頭の中を巡り、肝心な一步を踏み出せずにいた。

（俺も、バカだったんだよな）

衣玖を受け入れる事＝瑪瑙を忘れる事には繋がらない。

そんな当たり前の事に気づけずにいて、衣玖の想いから目をそらし続け、ずっと傷つけ続けた。

で、衣玖に押し倒されて（多分、紫辺りに唆されたんだと思う）、俺が現実逃避してて女性陣にフルボッコにされて……それからきちんと今へと繋がっている、と。

「……私は別に、瑪瑙さんの事を忘れて欲しいわけでも、彼女に勝ちたいわけでもありません」

ぎゅっと腕に抱きついて、上目遣いでそう言ってくる衣玖。

……ちよつとこれは、反則じゃないかな？　かなりビビッと来てるんだが。

「彼女を愛しているところ込みの陸斗が好きですから」

「……ありがとな」

「まあ、それとゆちるさんの事は別問題ですが」

それは……本気で悪いと思ってる。

瑠璃が逝ってから、ゆちるも滅多に幻想郷に帰って来なくなったが、衣玖と一緒にになった事は説明してなかったから……。

……うん、稗田の家で土下座して「この事だけは記録しないでくれ」って頼んだくらいだから。

「それでも、普通に伝説となっているようですけど」  
「……………」

人の口に戸は立てられない、と言っが……。誰にだって忘れたい過去はあるんだよ。『黒歴史』って過去がな……。

[Side Out]

「Side Konoka」

えー、単刀直入に言います。

ネギ君が夕映とハルナとパクテオーしました。パクテオーしました。

……大事な事なので2度言いました。

何でこうなったを話すと長くなるんやけど……夕映がネギ君好きって事をのどかが知ってしまって、それでしっちゃんかめっちゃんになって……。

……まあ、なんやかんやでこうなった、と。

「……端折りすぎです、お嬢様」

いや、ホンマに“なんやかんや”は“なんやかんや”なんや。

「それはともかく、せっちゃんはウチとパクテオーせえへんの？」

「え」

……なんや、その濁音が付いたような声は。

「あ、お、お嬢様……どうしてまた、その……仮契約など？」

「いや、夕映やハルナがパクテオーしとるの見て、せっちゃんもしたいな〜思ってた」

南の島でもレイヤちゃんに聞いたやん。キス以外でもパクテオーって出来へんかって。

ウチは別にキスでもええんやけど、せつちゃんが「女の子同士はちよつと……」みたいやから、キス以外の方法も探してみたわけや。

『まあ、魔法陣の上でキスっていうのが1番簡単な方法なだけですからね』

と、レイヤちゃんも言ってた。

レイヤちゃんによると、『専用の書類に名前を書いて、仮契約の魔法を使う』とか『宝石に血液を垂らす』とか、色んな方法があるらしい。

……やっぱり痛いのは嫌やし、キスがええんやけど。

「そ、その話とはかく！ ネギ先生はどうされたんですか？」

……せつちゃん、逃げたな。

まあ、ちゃーんと後でその話するからええけど。

「それがな、ハルナと仮契約したらどっか行ってしまったんや」

「そうなんですか？」

そうなんや。それもカモ君と一緒に。

後で陸斗さんと合流する言ったら、なんや顔色悪うしとった気するけど……。

リンちゃんが言ってた「告白阻止」の仕事に戻ったんかな？

「り、リンちゃん！？」

うん、リンちゃん。

ひいひいおじいちゃんって呼んだら、「その呼び方やめて」って言われたから、こう呼ぶ事にしたんや。

……ふつーにあのビジュアルで「おじいちゃん」は無いし。

「私も凜音様のお姿を初めて拝見した際、思わず『いつ髪を染められたのですか！？』と詰め寄ってしまいましたし……」

あはは。リンちゃん、ウチとそっくりやしな。

……いや、逆や。ウチがリンちゃんにそっくりなんやな。

「ただな、リンちゃんって相当吹っ飛んだ人なんや」

「そ、そうなんですか？」

そうなんですかって……せつちゃん、知らんの？

神鳴流剣士の後輩の、月詠ちゃんは知ってたで？

「いや、その……修行に打ち込みすぎて、そういった事はあまり……」

……」

せつちゃん、生真面目やからな。

でな、月詠ちゃんに言わせると“空に坐す者”……つまり、陸斗さんとは何度も殺し合った仲なんやて。

それこそ、お父様がレイヤちゃんのお父さん達と20年くらい前に暴れたゆー、スクナって鬼神と戦った時とは比べものにならない規模で。

「……空を支配した大妖怪“ざから”、ですか」

あ、それは知ってたんやな。

いや、ウチもまほーの事は知らなかったけど、ざからの事はお母様

が聞かせてくれた昔話で聞いた事あったし。

早く寝ないと、ざからに食べられてしまうよう、って。

……ホンマに実在したとは思ってなかったけど。しかもふつーに先生しとるって……。

「……………そういえば、ウチら陸斗さんの事、何も知らんのやな」  
「言われてみれば……………」

何でリンちゃんと戦ったりしたとか。

麻帆良で先生しとるのは、アスナがおるからみたいな事言っただけど……。

[Side Out]

[Side cufi]

うーん、困たアル。

超の様子がおかしかたから、何かと聞いてみたら……学校を辞めるとは。

それで『退学届』なんてものを預かったが、うーん……。

「とりあえず、陸斗先生に連絡するアル」

何というか……嫌な予感がするアルネ。

このまま超を放っておいたら、とんでもない事になるといつか……。それこそ、後悔しそうで嫌アル。

……だけど、私はまだ気づいてなかった。

既に、超は戻れないところにいて、避けられない報いが迫りつつある事に。

そして私は超の苦悩や罪を知らずにいて……。

私がそれを思い知るのは、全部終わった後だったアル……。

## 第67話：Endless Nightmare

〔Side Rikuto〕

……午後11時。

俺はある人物を待っている。……その人物とは……。

「風峰先生、一対一でのお話とは何かナ？ 進路相談力？」

そう、普段と変わらぬ超鈴音の姿が、そこにあった。  
俺は表情を崩さぬまま、静かに問いかける。

「古から退学届は預かっている。一応、学祭中だから受理されるのは学祭後になる」

「ほほう、そう力そう力」

「で、帰る故郷ってのは……火星の事か？」

少し語尾を強調し、超を睨むようにして問いかける。

火星から来た未来人。リンが茶々丸から得た情報。それが意味しているのは……。

「そう言えば、あなたは“紅き翼”の一員だナ。それなら知っていても不思議では無い力」

「……否定はしないのか？」

「うむ。おそらく、風峰先生の想像通りネ」

超の返答に、思わず歯を噛み締める。

ならば、超の目的も自ずと分かってしまう。つまり……。

「世界は滅ぶ。それも、遠くない内に」

「それで、お前は何をしに来たんだ。滅び行く世界を救いにでも来たのか？」

「……まあ、結果的にはそうなるネ。ただ、いくつか気になる事があるのも事実」

気になる事、だと？

眉を顰めた俺に、超はにやりと笑って続ける。

「私の知る歴史に……風峰先生、あなたの存在は全く無かたネ」

「何………？」

「あなただけでは無い。レイヤさんも、近衛凜音なる名も歴史には記されていないかた……」

俺たちが歴史に存在していない？

俺とレイヤ、そしてリン……何となく想像がついてしまうのが嫌だな。

俺たち兄妹は元々、この世界に転生した存在。そしてリンは……俺、というか紫が原因で表舞台に立つことになった存在だ。これも一種のバタフライ効果なのかもしれない。

……まあ、そんな事はどうでもいい。

「俺がやる事はただ1つ……超鈴音、お前を止めさせてもらっ」

「フフ……出来るかな？」

一歩踏み出そうとした瞬間、世界樹が光り出した。

そういえば、そろそろ最終日だったな。22年に1度の大発光……。

「これで私を止める事は、かなり難しくなたネ」

「世迷い言を……！」

無数の針を超目がけて投擲する。

昼間、告白阻止のために使用したものと違い、戦闘用の針。しかも、俺の妖力が込めてあるので貫通力は充分だ。しかし直撃の瞬間、超の姿が消えた。

「この世に正義も悪もない」

「!？」

気づいた瞬間、超は俺の背後にいた。

馬鹿な……俺が全く気配を感じずに背後を取られただ！？

「ただ、勝た者が正義で、負けた者が悪になる。……それを判断するのは後世の者ネ」

超の繰り出した上段蹴りをガードし、近接戦闘にもつれ込む。

この動き……古菲とは流派が違うが、確か……北派少林拳だったか？ 昔、美鈴が使っていたのを覚えている。

確かに強い。気も魔力も使用されていないが、それでも充分に達人の域にある。

だが……。

「年季が違っんだよ」

攻撃を繰り出した超を逆に捕え、関節を締め上げる。

俺の使う体術は実戦で鍛え上げたもの。

我流だからこそ、軌道が読めないし、読まずつもりもない。

「……さすがは大戦の英雄。空を支配せし大妖怪“ざから”と呼ばれただけはあるネ」

どうでもいい事だ。

このまま意識を刈り取って…………。

「しかし、残念だたネ」

「なっ!？」

気づいた時、関節を決めていた超の姿はそこには無く、再び背後を取られていた。

馬鹿な……… いったいどうやって!？

「ほあっ ちゃあっ!!」

「ぐっ!!」

背後から電撃を纏った強烈な一撃を受け、俺の身体は吹き飛ばされた。

咄嗟に妖力流して防御したとはいえ、かなり効いたな……………ここま  
でモロに喰らったのは、20年ぶりか？

「今のは……… なんだ？」

「素直に答えると思った力？」

不適な笑顔を浮かべ、そう返す超。

空間転移か？ いや違う、超自身から魔力は全く感じない。魔法の  
類じゃない。だとするといったい…………。

「さて、計画に1番邪魔になりそうなあなたには、ちょっと退場し  
てもらっネ」

そう言うと、再び構えを取る超。

やむを得ない。ここでスペルカードは出したくなかったが……………。

「背後がお留守ですよ」

その声と共に、超の身体が大きく吹き飛ぶ。  
そこには俺のよく見知った姿があった。

「レイヤ！」

「私たちもいます」

と、俺の周囲に降り立つ影が2つ……………。

「刹那、それに長瀬……………」

「遅くなつて申し訳ありません」

「助太刀するでござる」

正直助かる。あーゆー得体の知れない相手はどうにも苦手だ。

「気をつける。よく分からん転移みたいのを使ってくるぞ」

「はい！」

構えを取るレイヤ達。

しかし、対する超は不敵な笑みを崩さぬまま……………。

「……………ふむ、さすがに少し分が悪いかな？」

そう言つと、高く跳躍して距離を取る。

逃げるつもりか？

「さて、1つ取引しないか？ 風峰先生」

[Side Out]

[Side Setsuna]

陸斗さんが超さん呼び出し、「少し話してくる」と言っ出て行ったのだが……。

やはり気になったので、その後を追跡。少し遅くなってしまったが、どうにか間に合ったらしい。

しかし……この期に及んで取引だと？

「何のつもりだ？」

「風峰先生、あなたには……変えたい過去など無いのカナ？」

変えたい、過去。

超さんが未来人であるならば、何らかの手段を用いてこの時代へと

やってきた事になる。

確かに、その手段を用いれば……過去を変えることが出来るかもしれない。

「変えたい過去は……取り戻したい過去は無いのかな？」  
「下らん」

超さんの言葉を、風峰先生はそう一蹴する。

「過去を否定するつもりは無い。どんなに辛い時間であっても、それは掛け替えのないものだ」

変えたい過去……確かに、私にだって幾つも存在する。

鳥族のハーフとして生まれた事。迫害を受けた事。……とても辛い記憶ばかりだ。

だけど、その積み重ねがあつて私はみんなと……このちゃんと出会えた。否定するつもりは無い。

「ほんとうにそうカナ？ 例えば……博麗瑪瑙の事」

その名前が出た瞬間、凍り付いた。

否、私やレイヤさん、楓じゃない。風峰先生が一瞬、凍った。

「……………何故その名前を知っている」  
「火星人のテクノロジー、舐めてもらては困るヨ。それくらいの事は調べればすぐに分かる」

風峰先生の視線は、これまで見た事も無いほど冷たい。  
怖い。そう、「怖い」だ。初めて見た時とは違う、別次元の恐怖を感じる。

「博麗瑪瑙の死。それはちょっと注意すれば、簡単に防ぐ事は出来る……今の技術なら彼女を救う事だって容易い事」

「……………何が言いたい」

「単刀直入に言わせてもらうネ。博麗瑪瑙を救いたくない力？」

今の話の流れから、その博麗瑪瑙なる人物が風峰先生の大切な人物だったのは分かる。

……私だったらどうだ？ 例えば、このちゃんが死んで………それを取り戻したくないかと言われて………。

ズガアンッ！！

轟音と共に、超さんの後方地点が大きく陥没した。

まるで、何かに削り取られたように。

「……………次は、外さない」

「……………」

「今の一撃は、教師と生徒の関係に対するケジメだ。………無礼<sup>なめ</sup>るなよ、小娘」

陸斗さんの身体から、殺気が膨れあがる。

マズイ。本気で、超さんを殺すつもりだ。

「……………ふ、残念ネ」

その言葉が放たれた瞬間、陸斗さんの容赦ない一撃が超さんを捉え………。

「学祭最終日にまた会おう」

なかった。

触れる瞬間に超さんの身体は既に消えており、その言葉だけが残された。

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

1度状況を整理し、その上で話し合うため、私たちはエヴァンジェリンさんの別荘へと来ている。

……ただ、超さんの言葉が、未だに私の脳裏にこびり付いている。

『あなただけでは無い。レイヤさんも、近衛凜音なる名も歴史には記されていなかった……』

その言葉を聞いた時、刹那さん達はまだ来ていなかった。

そしてそれが耳に入り、私は凍り付いた。  
歴史に記されていないのなら、私は誰なんだ……と。

「レイヤ、どうかしたのか？」

心配そうな顔で、風峰先生が私を覗き込んでいる。

「いえ、何でもありません」

慌てて、首を振ってそれを否定する。

……私や風峰先生が、未来人である超さんにとってのイレギュラーである理由。

それはもしかしたら……私に前世の記憶がある事と、何か関係があるのかもしれない。

気のせいかもしれないけれど、風峰先生と記憶の中にある“兄さん”が、重なって見えるようになってきた。

……どんな名前だったかも、顔すらも思い出せない。

（だけど……）

あの日、千草さんを殺してしまったあの日。

強く抱きしめられたあの感じが、とても“兄さん”に似ていた。

確かめる事はそれほど難しくない。風峰先生に「あなたは私の兄さんですか」と尋ねればいい。

違うなら違うと言うだろうし、そうならそうだと肯定する……もしくは、曖昧に語尾を濁すだろう。

（……………それでも、聞けない）

聞いてしまったら、これまでの全部が崩れてしまう気がして。



[Side Out]

[Side Rikuto]

それから、別荘内にいた全員を集めて、超に関する事を話した。  
超鈴音が未来から来た火星人である事。

未来を変えるため、何らかの手段を用いて過去へとやってきた事。  
その超が、秘匿されている魔法を全世界にバラそうとしている事。

……もちろん、魔法世界の滅亡とかそーゆー事は話していないが。

「……………それマジ？」

青い顔のアスナがそう確認してくる。

ああ、残念ながらマジだ。

「それにしてもそりゃ凄い！ 麻帆良の最強頭脳、学園No.1の

超天才、しかしてその正体は！ 我々の歴史を改竄せんとする未来からの謎の侵略者！ ああつ、私たちのクラスメートがそんな悪の黒幕だったなんて、なんとゆー悲劇……………」

いや、本気でシャレにならないんだよ。

「こりやもう倒すしかないねー！」

「倒すアルか！？」

「クラスメートやのに！？」

……………まあ、どのみち倒すんだが。

早乙女がここにいる事については深くツツコまない。それよりも、今は戦力になるかが重要だ。

……………正直なところ、超がどのくらいの戦力を保有しているか分からない。

学園側の魔法先生や魔法生徒だけでは足りないかもしれないし、そうなったら長瀬や古菲達にも手伝ってもらおう事になる。

どうも話を聞く限り、早乙女も綾瀬もネギ坊主と仮契約したらしいし……………。

「おまけに超自身、得体の知れない技を使ってくる」

「完全に捕えていた」にも関わらず、「いつの間にか背後を取られていた」。

何を言っているか分からないかも知れないが、俺も何をされたのかわからなかった。

似たような技ならこれまで見た事はあるが、そのどれとも当てはまらない。予備動作すら無い。

「……………」

と、俺の話を聞いたレイヤが何か考え込むような表情になる。  
どうかしたのか？

「確か、世界樹大発光が始まってから、超さんが『私に勝つのは難しくなた』って言ったんですね？」

ああ、攻撃を仕掛けたのもその後だったし……。

「……もしかしたら、分かったかもしれない。超さんのトリックが」

「本当か!？」

「まだ確証はありません。ちょっと試してみたい事もありますし……」

[Side Out]

〔Side Asuna〕

別荘での打ち合わせを終えて、私たちがエヴァちゃんの家を後にしようとしていた時、異変は起きた。

突然、レイヤちゃんの懐から光が漏れ始めた。

「これは……!？」

レイヤちゃんが慌てて、自分の懐に手を入れる。

取り出したのは超さんからもらったと言う懐中時計。その針がすごい勢いで回っていた。

……ちよつと待って。まさか超さんから？

「レイヤちゃん、それを早く投げて！」

「は、はい！」

すぐさま、レイヤちゃんが懐中時計を投げ捨てようとする。だけど、その懐中時計が突然、音を立てて砕けた。

「え？」

次の瞬間、レイヤちゃんが存在が、消えた。

## 第68話：時を駆けるレイヤ

〔Side Cha o〕

風峰先生達を無力化出来なかつたのは残念だが、それでも目的は果たせた。

モニターに映し出された光景を見て、思わずほくそ笑む。

「超、今のはいったい……………」

おお、そう言えば茶々丸には説明してなかつたネ。

私がレイヤさんに渡したカシオペアには、ちよつとした細工がしてあただけヨ。

ネギ坊主に渡した黒いカシオペア。あれにも1つ追加機能があつて…………それを操作すればレイヤさんのカシオペアが稼働する。

「では、レイヤさんは過去へ？」

「いや、未来へ飛んでもらたヨ」

目標の座標は1週間後。既に世界樹大発光は終了しており、カシオペアで戻ってくる事は出来ない。

しかし、ただ飛ばしただけでは、世界樹地下の魔力を使って戻て来る可能性がある。

だからこそ、もう1枚のカードを切つたネ。

「レイヤさんのカシオペアを狙撃したのは、ネギ先生ですか？」

「稼働中のカシオペアが破損した場合、目標座標へは飛ばされるが、カシオペア自身が負荷に耐えきれず、破壊される」

要するに、カシオペアが使えなくなる。

これでレイヤさんがこっちへ戻てくる事は不可能。  
それを聞いた茶々丸が、あからさまにショックを受けたような顔になる。

「……………」

「安心するネ。殺したわけでも無い。ただ飛ばしただけヨ。1週間経てばちゃんと再会出来るネ」

ここで完全に排除してしまう事も考えたが、彼女を排除した場合、何が起るか分からない。

私の知る歴史に存在しないイレギュラー、それもネギ坊主の双子の妹……下手に排除したら、それこそ歴史が大幅に狂いかねない。  
だから、敢えて無力化する手段を執たネ。

「不服力ナ？」

「……………いえ、特には」

まあ、レイヤさん達と接するようになって、茶々丸も随分と人間くさくなった。

言葉でそうは言っているも、内心納得していないのが丸わかりネ。

「とにかく、手はず通り頼むヨ？」

「……………はい」

〔Side Out〕

「Side Rikuto」

突然、目の前でレイヤが消えた事に焦りを覚えた俺は、すぐさまリンへと連絡を取った。

リン自身、その事態を想定していたらしく、電話では冷静に対応していた。

が、実際に校舎で顔を合わせると、真剣な顔で頭を下げられた。

「……ゴメン、これ完全にボクミスだ」

……怒っているような声でそう言うリン。

カシオペアに問題無しの判断を出したのはコイツだからな……。となると、コイツが今キレてるのは……自分の迂闊さについてか。

「で、ここから真面目な話だけど……超の行動、かなりマズイよ」  
「……マジか？」

「マジ。ほら、文うちと一緒にいた君の生徒のパパラッチ2号、あの子の情報からいくつか分かって、それでオーナーにも相談したんだけど……」

ああ、朝倉の事が。

文から連絡が来た時には驚いたが……まさかスパイ目的で潜り込むとはな。

「ぶつちやけると、この世界の未来で“何か”が起きるのは確か。そして超はそれを回避するためにこの時代にやってきた……でも、それ自体はそれほど問題は無かったんだ」

「どついう事だ？」

「超がいて初めて、この時代が安定してる。つまり、あの子が過去へ来る事自体はある種の予定調和だったって事だよ」

つまり、超がこの時代に来た事は問題ないって事か。

……だとすると、アイツの何が問題なんだ？ 過去に来た時、既に未来を変えるための行動は始めていたはずだし……そこにも問題が無くなるんじゃないか……。

「問題は、レイヤちゃん達をボク達のいる時間から排除した事だよ」

「何……？」

「その結果、本来進むはずじゃなかった未来に。……つまり『魔法がバラされた未来』が生まれ、レイヤちゃん達はそこへ送られてしまった」

……ちよつと待て、それってぶつちぎりやばい事じゃないのか？  
つまり、超の計画は失敗する。それが全ての行き着く予定調和。

だが、レイヤ達をこの時間から排除し、それで『魔法のバラされた時間』が生まれる。それが……それこそが、超の『時の流れを乱した』罪。

「今回ボクらが、新しく発生した未来からレイヤちゃん達を連れ帰る事も問題はあるみたいだけど……その時間においてはならない者が

混ざり込んだため、って事でどうかOKが出た。レイヤちゃん達も巻き込まれたわけだから、罪には問われない。だけど……」

「それを仕組んだ超はそうも行かない……か」

……そればかりは仕方ない事だ。時の流れを乱した事は、決して許されない。

とにかく、丁度いい時間だ。リンはある教室の前に立つと扉に手をかける。

そのまま開けると、そこは砂浜。そして、俺たちの目の前に白い電車が止まった。時刻は、5時5分55秒。

「とにかく、詳しい話はオーナーも交えた上で……中で話すよ」  
「……ああ」

そうして俺たちは足を踏み入れた。  
時を走る列車……デンライナーの中へと。

〔Side Out〕

「Side Leiya」

う……ここは、どこでしょうか？

確か、カシオペアがいきなり稼働し始めて、投げ捨てようとしたらパリンって……。

「ッ！ カシオペアは！？」

すぐに手に握ったままだったカシオペアを確認する。

……砕けていた。それも思いつきり。

考えられるのは、誰かがカシオペアを狙撃した。弾丸の痕跡ではないところから、魔法による攻撃。おそらくは……。

「……………ネギ」

風峰先生の話では、超さんの側に付いたそうですが……あのバカはカシオペアが稼働して、そこに魔法の射手でも撃ち込み、カシオペアが暴走……私は過去か未来に飛ばされた、というところでしょう。少なくとも学祭時の賑やかさでは無いですし、飛ばされたのは数日後ほど未来でしょうか？

……いえ、ちょっと待ってください。カシオペアがこんな様子じゃ、私は……。

「ッ……………やってくれるじゃないですか」

カシオペアが使えないのだから、元の時間へは戻れない。つまり、超さんは最初からこれを想定して、私にカシオペアを渡し

た。……私を排除するために。

どれだけ舐めた真似をしてくれるんですか、あの人達は………！

「………とりあえず、今の状況を確認しなければなりませんね」

懷からケータイを取り出し、TVを起動させる。

映し出されたのは………何故かリポーターに追いかけられる愛衣さん。これは……まさか。

『佐倉さん、貴女が魔法使いだというウワサの真偽について、何かコメントを！』

『わ、私何も知りません——！！』

何も言わず、ケータイを仕舞う。

おそらくこの世界は、超さんの計画が成就し、何らかの形で魔法の存在がバラされた世界。

完全に、やられた………！

「しかし、どうすれば………」

このまま学園側と合流しても、決して+にはならない。

世界中が混乱しているのだから、逃げたとしても大して意味は無い。思案にふけっていると、ふと複数の気配を感じた。振り向くとそこには………。

「ッ！？」

た、確か田中さんでしたっけ？ それに無数の多脚式戦車っぽいのが……。

今更聞くまでもないでしょうけど、狙いは私？

「レイヤ・スプリングフィールド確認。捕縛シマス」  
「やっぱり!？」

一列に並んだ田中さんが、私にロケットパンチを打ち出してくる。  
その攻撃を躲しながら、今までの情報を整理する。  
私の捕縛が目的なら、おそらくは超さんが仕掛けたもの。私にそこまで動いてもらいたくないって事ですか、あの人は！  
1体1体は大した事ないですけど、これだけ数がいたら私でも……  
…。

「神鳴流奥義、斬空閃！」

と、放たれた斬撃によって、田中さんの1体が両断。爆散した。  
それだけじゃない。次々と斬撃のようなものが飛んできて、田中さん達を両断していく。  
今の技、まさか……………。

「刀子先生、神多羅木先生！」

そこには、野太刀を構えた刀子先生と、いつも通りサングラスに煙草の神多羅木先生の姿があった。

「レイヤさん、すぐに学園長室へ向かってください！」

「え？ し、しかし……………」

「早く！ この事態を逆転する秘策があると、学園長が言っていました！」

この事態を逆転って…………… いったいどうやって？  
戸惑う私に、刀子先生はさらに続ける。

「さあ、早く！」

「……分かりました、ありがとうございます！」

交戦する2人に頭を下げ、すぐさま学校に向かって走り出す。

カシオペアは破壊され使い物にならない。元の時間へ戻る方法はない。だけど、事態を逆転させる秘策がある。……行ってみるしかないですね。

その道中、道行く人達から写真を撮られたり、インタビューされそうになりましたが……全部無視です。

と、そこへ再び、田中さんが現れた。しかもガトリング装備って何ですかコレ！！

「しつこいッ……！」

一旦立ち止まって撃ち落とそうとしたが、田中さん目がけて魔法の射手が直撃した。

魔法の射手が放たれた方向を見ると、そこには瀬流彦先生の姿が……。

「レイヤちゃん、行くんだ！」

「はい！」

校舎へ入り、授業の事などお構いなしに廊下を走り抜ける。

階段を上り、廊下を駆け抜け、迷わず学園長室へと向かい、その扉へと手をかけた。

「学園長先生……！」

部屋の中には、いつもと変わらぬ様子で学園長先生が佇んでいた。

私が扉を開けた瞬間、目がキランって光った気がしましたけど……。

「ふおおおお……待っておったぞ、レイヤちゃん」

「お、遅くなつてすみません。それより、事態を逆転させる秘策つて……」

「うむ。それについてじゃが……これを」

そう、机に置かれていた分厚い封筒を私に手渡す。

「それには超君が学祭最終日に決行した計画について、今日に至るまで儂らが調べ上げた全てが書き記されておる」

「調べ上げた全てって……いや、そんな事してていいんですか!？」

魔法が世界にバラされたのなら、学園長は本国へ飛んで事態の収拾に当たっていなくてはならないはず。

そもそも、どうしてここでのほほんと私を待ったりなんて。

「聞いておらんか？ レイヤちゃん、君自身が全て引ッ繰り返す切<sup>ジ</sup>り札<sup>ヨーカー</sup>なんじゃよ」

「私が、切り札……?」

ですが、既に事が終わった後の現在、何をしろって言ってます。

カシオペアは見ての通り壊されてしまいましたし、過去へは……。

「大丈夫じゃ。……そろそろかの」

「え?」

どういう意味かと尋ねようとした瞬間、学園長室の扉が開いた。そこに立っていたのは、日本にいるはずもない、真っ赤な髪が印象

的な私の幼なじみ。

「あ、アーニヤさん！？ どうしてここに……」

「アンタを連れ戻しに来たのよ！ 2003年6月21日、つまり  
！ 麻帆良祭最終日にね！」

いや、連れ戻しに来たってどういう……。

「詳しい話は後！ それより早く乗って！ もう出ちゃうから！」  
「え、え、え？」

未だに事態が呑み込めずにいるにも関わらず、アーニヤさんに引  
張られるままに学園長室から出る……って。  
学園長室から出たそこは、見知った廊下ではなく、周囲一面砂浜だ  
った。

そして私たちの目の前に停まっているのは……列車？ はて、この  
列車どこかで……。

「ほら、早く！」

「は、はい」

そう促されるがままに、その列車に乗り込む。

乗り込んだ瞬間、列車は走り出した。……あ、あの、これっていつ  
たい……。

「私も完全に呑み込めてないから、とりあえずあの人達に聞いて」  
「え？」

視線を向けた先には……か、風峰先生に凜音さん！？

「レイヤ、無事だったか！」

ええ、見ての通り無事です。

……って、そうじゃなく！ これっていったい何なんですか！？  
説明してください！

「わ、分かってる。じゃあ、どこから説明する？」

凜音さんにそう質問する風峰先生。

不適に微笑みながら、凜音さんはその言葉に応える。

「そうだね……とりあえず、6年前の事から説明しよっか」  
「だな」

「………というわけだ」

「………」

ま、待ってください。

あまりの出来事に、思わず目眩と頭痛と混乱が。

「信じられないか？」

「いえ、この場に先生達がいる事から、それは間違いないんですよ」

「……なんだ、妙に物わかりいいじゃねえか」

こちらら魔法使いです。今更、イマジンとか時の列車とか言われても驚きませんよ、モモタロスさん。

それに、ついこの前、火星から来たとかゆー未来人やタイムマシンを目の当たりにしてますから。

「そちらの話は分かりました。アーニヤさんはどうして？」

「助っ人に来たのよ。うちの師匠からチケット借りて、ね」

アーニヤさんの師匠……どんな方でしょうか。

相当スパルタな方で、風峰先生達の知り合いというのは、話の流れから分かりますけど。

「それに、あのバカネギが暴走してるんでしょ？　一発ぶん殴りに来たのよ！」

「そ、そうですか………」

意気込むアーニヤさんに、思わず苦笑する。

まあ、よくよく考えてみると、麻帆良に来たばかりの頃から暴走しっぱなしのような気がしますけど。

「さて、事情説明は終わった事だし、そろそろ本題に入ろう。……  
どうだ、リン」

先生が凜音さんに声をかける。

凜音さんは、私が学園長先生から渡された、超さんの計画について書かれたファイルを読んでいる。……相当顔色が悪いように思えま

すけど……大丈夫ですか？

「……確かに、これだけ情報があれば対策は立てられる。けど、問題は一般人をどうするかだよ」

確かに、そうですね。

超さんの計画は学祭最終日に行われる。学祭最終日のイベントは「学園全体かくれんぼ」。最後のイベントだけあって、参加する一般人は極めて多い。

そんな一般人に隠れながら、超さんと戦うのは……極めて難しい。

「学祭を中止して一般人を避難させる……ダメだね、時間が足りないし、素直に従うとも思えない」

「麻帆良全体に結界を張るにしても、持続時間の問題もある」

麻帆良全体を覆う人払いの結界を展開するとなると、数十人規模での魔法使いによる体勢が必要になる。

それこそ、長時間の展開も不可能でしょうし……うーん。

「あー、面倒くせえな！ そのチーズとか言うヤツをぶっ飛ばしやいいんだろ？ もっと堂々とやれねえのかよ!？」

「先輩、魔法が秘匿されてるって忘れてるでしょ。それにチーズじゃなくて超だから、超鈴音」

無茶苦茶な事を言うモモタロスさんに、ウラタロスさんがツッコむ。

……あ、そうですね。堂々とやっちゃえばいいんですよ。

「堂々として……いや、それが出来ないから」

「いえ、少し見方を変えればいいんですよ」

そう、ちょっと見方と方向性を変えてやればいい。  
せつかくの学祭なんですし、ちょっとくらいイベントを派手にして  
もいいですよね？

## 第69話：たった1つの冴えないやり方

〔Side Rikuto〕

レイヤの口から語られた作戦内容に、俺たちは固まった。旗の刺さった炒飯食べてたオーナーもスプーンが止まってるし、珈琲煎れようとしていたナオミちゃんも固まってる。

「……娘っ子、それ本気か？」

1番早くフリーズから回復したキンタロスが、レイヤにそう尋ねる。いや、俺だってそれは聞きたい。

「ええ、本気です」

「うわゝ、それ面白そう！ 僕も参加したい！」

リュウタが「はい」と手を上げながらそう言う。いやいや、お前らが参加したらかなりカオスになるから。

「いいですよ、思いつ切り暴れてください」

「わゝい！！」

いやいやいや！ コイツらは参加させちゃダメだろ！？ 完全に魔法公表とか以上の問題になりかねないぞ。

「使えるものは梃子でも使います。……それに、カシオペア無しで超さんに勝つには、この人達の協力は不可欠です。オーナー、どうでしょうか？」

レイヤの問いかけに対し、オーナーは……………。

「……………確かに可能でしょう。多少時間はかかるでしょうが……………あるいは」

「なら早急にお願いします。事態は一刻を争うので」

そう言いきったレイヤの目は……………完全に据わっていた。

……………ああ、そうだったな。コイツはお前らの娘だったよな……………ナギ、アリカ。

[Side Out]

[Side Asuna]

「ネギ先生のためなら、例え火の中水の中、湖の水だって飲み干して差し上げますわ〜!」

おお、とゆるなやまきちゃん達がくるくる回ってるいいんちよに拍手を送る。

うーん、やっぱり罪悪感が…………。

と言うより、今回は完璧にネギ向こう側だし、いいんちよに言った事も全部嘘なだけだね。

「それにしても、レイヤもとんでもない作戦思いつくアルな」

うん、それは私も思ってる。

未来へ飛ばされたレイヤちゃんを連れ帰ってきた陸斗達だったけど、レイヤちゃんがデンライナーの中で打ち立てたという作戦。

それを聞いて、私たちも思わず度肝を抜かれた。

……それにしても、こんな作戦立てるくらいなもの。レイヤちゃんも相当キレてるって事よね。

『アスナさんはあやかさんの説得をお願いします』

『いいんちよか…………でも、頼んでも聞いてくれるとは思えないんだけど』

『だったら、「ネギの頼みだ」とでも言ってください。今回の作戦、あやかさんの協力無しでは決して成立しませんから』

ここへ来る前にレイヤちゃんと交わした会話が蘇る。完全になりふり構わず、だもの。

うう、罪悪感がずっしりと来るな…………。

「そういえば、学園長のところへは誰が行ったアル？」

「木乃香と刹那さん、それと夕映ちゃんが行くって」

学園長先生を動かすとなると、やっぱり木乃香や刹那さんぐらいじ

やないと無理だし。

あと、夕映ちゃんは「学園長に用意させたいものがあるので」と、レイヤちゃんは何か言っていたけど……。

……あ、夕映ちゃんの事で思い出した。本屋ちゃんがちょっと不安定なのよ。

「本屋がどうかしたアルか？」

「ほら、ネギが超さんの側に付いてるから……」

本屋ちゃんがネギの事好きってのは、みんな知ってるでしょ？

でも、本屋ちゃんもバカじゃないから、今回ばかりは超さんがやるうとしての事が世界規模で大きな混乱を生むって事も分かってる。

だから、その2つの間で揺れ動いている。……さすがにネギのころへ行かないと思うけど……。

「要するに、本屋が迷ってるって事アルか？」

「……ま、そーゆー事よ」

そーゆー所につけ込まれたら、完全にアウトね。

本屋ちゃんのアーティファクト、あれ使われたら作戦丸わかりだし。

[Side Out]

「Side Leiya」

「こつち終わつたよ〜!」

ありがとうございます、ハルナさん。  
私の方の仕込みもほぼ完了していますし、後は開始時刻を待つだけです。

「……………」

それにしても……問題はこつちでしょうかね。  
ネギと敵対する事になってしまい、のどかさんは相当落ち込んでいます。

好きな相手が向こうにいる。けれど、超さん達がやろうとしている事は間違っている。その板挟みになって動けない……ですか。

……まあ、向こうに着かないだけマシですけど。

「のどかさん」

私が声をかけると、ビクツと身体を震わせた。  
そんなに怖がることないじゃないですか。別に取って食ったりしたりしません。

「迷う事は悪い事じゃありません」

「え……………」

「迷って迷って迷い抜いて、悩んで悩んで悩み切ったその先に、自分だけの答えがある」

思えば、私も迷ったり悩んだりしましたっけね。

「あなたは今、何がしたいんですか？」

「私は……………」

「今1番したい事…………それをよく考えてみてください」

その結果、ネギに着くのなら、別に構いません。  
あなたが本当に考えて、その上で出した結論ですから。別に責めたりしません。

…………ちょっと酷な質問だったかもしれませんがね。  
ま、さっきまでの思い詰めてたような顔よりは数段マシになりましたけど。

「レイヤちゃん、ちょっとこっち来て〜！」

「あ、はい！」

[Side Out]

「Side Aya」

「ほうほう……では今回、あなたは動かないと？」

ちよつと意外ですね。

今回の事件、下手をすれば幻想郷にも飛び火する恐れがある。

それにも関わらず、あなたが動かないとは……… とういう企みですか？

「そんなのじゃないわ。……ただ、超鈴音を殺しかねないから」

……あ、あの、何だか怒ってます？

思えば、姿を見かけた時から、いつもと違った印象を受けていましたけど……。

「……超鈴音の正体は知ってるわね？」

「え、ええ。未来から来た火星人と言っていたそうです」

これは和美から聞いた事なのでほぼ間違いない。

あの子も相当驚いていたけど、「あり得なくない」とか言ってますね。

「超鈴音が陸斗を引き込もうとしたのよ」

「はあ？」

「まあ、成功するとは思って無かったみたいだけどね」

いや、そりゃそうでしょう。

あの人はそーゆー事に手を貸したりするタイプじゃないですし、何より幻想郷に被害が及ぶような事をするはずがない。

それに対して怒っている……わけでもなさそうですね。いったい何があっただんです？

「その時の交渉で、瑪瑙の名前を出したのよ。『博麗瑪瑙を救いたくないか』って」

「なっ!？」

それはつまり、過去へ行つて瑪瑙さんを助ける事？

なんと言つことを……. よりにもよつて瑪瑙さんを助ける!？

「……. 瑪瑙さんに対する冒瀆です。人間を、命をなんだと思つてるんですか!！」

何故、陸斗さんが瑪瑙さんを救わなかつたのか。

その事を陸斗さんがどれだけ苦しんで、どれだけ悩んでその結論に至つたのか。何も知らないくせに、上から目線で……. 神にでもなつたつもりですか!？

「当たり前ですけど、陸斗さんは…….」

「蹴つたに決まつてるじゃない。……. もちろん、久しぶりにマジギレ寸前だつたけど」

「ま、マジギレですか?」

ちよつとそれを聞くと、同情せざるを得ないと言いますか…….。

いや、だってあのマジギレしたら消えますよ？ 跡形残りませんよ？

リンさんと殺り合った時も、相当酷い事になりましたし。

「……でも、本当ならあなただって殴りに行きたいでしょう？」

そりゃあ、もちろん。

瑪瑙さんの事を気に入っていたの、あなただってそうじゃないですか。

「いいのよ。私も閻魔様も、向こうが出してくる人形相手に暴れる事にしたの」

あ、私もそうしましょうかね。

さすがに今回ばかりは結構頭に来てますし。

〔Side Out〕

[Side Konoe mon]

「全世界に対する強制認識魔法……こんな作戦を立てているとは」

未来へ飛ばされたレイヤちゃんが、未来の儂から受け取ったという作戦概要。

未来の儂からの手紙にもそれらしい事が書いてあったし、ほぼ間違いないじやろつ。

もちろん、他の者には「未来云々」は説明しておらんがな。

「6箇所の魔力溜まりをロボット兵器群で占拠し、全世界に対して強制認識魔法を使い、魔法の存在を認識させる……何という計画だ」  
「しかし学園長、計画を阻止するに当たり、何よりも一般人への魔法秘匿。これが問題となつてきますよ」

確かに尤もな質問じやな、明石君。

この計画を全力で阻止するにしても、我ら魔法使いは魔法を使わざるを得ない。

しかし、下手をすれば一般人にも魔法を見られてしまい、いくら認識障害が働いているとはいえ、魔法の存在が発覚しかねない。

それを踏まえて計画を立てたとしたら……恐るべき才覚じやな、超という娘は。

「その事なんじやが……皆に渡した3枚目の資料を見てもらいたい」

儂の言葉に従い、3枚目の資料に目を通す。

……全員、面白いぐらいに驚いておるのう。実際、レイヤちゃんが

立てたというこの計画、木乃香達に聞かされた時は僕も刀子君も凍り付いたし。

「……た、確かにこれなら、我々も気兼ねなく魔法を使えますが……」

「うちの生徒はなんだかんだで優秀なのもいますからね。しかし、こんな特殊な魔法具……いったいどこから？」

それも、企業秘密じゃ。

実際にはA組の綾瀬夕映。彼女のアーティファクトで大量に死蔵されておったのを見つけ出し、僕が本国と渡りを付けたのじゃがな。それにしても、レイヤちゃんもなりふり構わぬようになったのう。こついう所はナギに似てきたというべきか……。

「この、6体の巨大生体兵器というのは………？」

「どうやら学園地下に石化封印されていた無名の鬼神を、科学の力で使役するつもりようです。巨大魔法陣生成の魔力増幅装置としてつかうものと思われます」

「それが出てきたら、生徒は下がらせた方がいいでしょうな」

学園結界の中では、高位の魔物・妖怪の類は動けん。

しかし、例の資料によると、超君は学園警備システムのメインコンピュータにハッキングを仕掛け、学園結界を落としたという。かなり嚴重な防壁をセツトしてあるはずなんじゃがのう……。

「これ程の計画を進める超君の力を侮る事は出来ん。本国からの応援も間に合わんじやろう。心してかかるがよい、超君の計画を阻止できなくば世界が変わる」

それとじゃが、超君が使う弾丸には気をつけてくれ。

被弾者を3時間先へ転移させる特殊弾丸のようじゃな。

「諸君、全力でこの作戦に当たってくれ！」

「ハッ！！！！」

〔Side Out〕

〔Side Sayo〕

一般の人達に例の魔法具が配られて行くのを眺めつつ、私は朝倉さんの側にいた。

ここ最近、超さん達の近くにいて、向ここの情報を探ってみましたけど……それほど収穫はありませんでしたね。

収穫と言えば、特殊弾の“さんぷる”と何だかよく分からない資料だけ……。もちろん両方とも風峰先生に渡しました。

「…………なるほど、臨時戦力を陽動を兼ねた、無自覚の一般人による防衛作戦か」

アスナさんから渡された資料に目を通した朝倉さんが、そう呟く。話を聞いてみて、よく考えられてるな。って思いましたね。

だって、普通に魔法先生や魔法生徒の人達が超さんと戦っても、やっぱり魔法を見られる可能性がありますし。

「確かに、この作戦だったら「ゲームの演出の一環」として、魔法を使っても違和感を持たれない」

「でしょ？ レイヤちゃんからこれ聞いた時、思わず凍り付いちゃったけどさ」

「いや、それ無理ないって」

うんうん。私もそう思いますよ。

いいんちよさんに「ネギ先生の頼み」って嘘を吹き込んだり、無関係な一般の人を巻き込んだり………なんと言いますか、あくどい？

「で、今配られてる杖やら銃が、ゆえ吉のアーティファクトで探し出したっていう魔法具？」

「らしいわよ。何でも、非生命型の魔力駆動体……ようするに、魔力で動くゴーレムとかロボットに効果靚面の魔法具だって」

えっと、武道会にも出てた「田中さん」でしたっけ？

あの時は、大きなコンセントで動いてたと思いますけど……………。

「昨日のロボットは有線の電力供給で動いてたけど、今日のロボ軍団は無線式の魔力供給型で攻めてくるみたい。だから、この魔法具で迎撃出来るんだって」

「ふーん…………でもこの作戦、超りんが一般人に危害を加えない事

が大前提だよね？」

「ま、確かにそうね。もちろん、そうなったらすぐ引かせる事にな  
ってるけど」

「でも逆に、そんな小悪党なら与しやすい……学園長や魔法先生達  
はそう考えてる、か」

う、うーん………何だか、あくどい会話ですね。

「で、朝倉とさよちゃん。超さんの居場所、ほんとに分からないの  
？」

「残念ながらね」

私です。

どうも、私たちはそこまで信頼されてたわけじゃなく、事件の顛末  
の情報はもらえたんですけど、肝心なところは教えてもらってない  
んです。

超さん達が学祭最終日、どこでどんな風にして儀式を行うかとか、  
全く知らないんです。

「で、作戦の立案者、レイヤちゃんはどうしてるの？」

「隠れてる。今のところ、超さんはレイヤちゃんがこっちに戻って  
るとは、多分思っただろうから」

えっと、やっぱりカシオペアが壊されたから、ですか？

「うん。超さんの知っている方法で過去へ戻ってくる事は出来ない。  
……でも、戻ってくる事も考えに入れてる可能性が無いわけじゃな  
いから」

「相手は超りんだもんね………」

「だからレイヤちゃんは可能な限り、存在を隠し通すの。超さんを

油断させるために」

「なるほどね」

それにしても……………。

「ん、さよちゃんどしたの？」

「いえ、レイヤさん…………相当怒ってますよね、これ」

「…………ああ、そのルールを見たワケね。そりゃあ怒ってるわよ。未来に飛ばされた挙げ句、ロボ田中に追い回されたっていう話だし」

それは…………まあ、怒るのは分かるんですけど。

「いいじゃない。これくらいしたって」

「そ、そうですね」

私が覗き込んだルールには、こう書かれていた。

『火星ロボ軍団首領「超鈴音」を発見した者には金一封。さらに悪の組織幹部「ネギ・スプリングフィールド」を捕縛・撃退した者にも金一封』

第70話：時間を超えて、俺達参上！（前書き）

学校の休みやアルバイトなどが重なり、間が空いてしまいました。  
申し訳ありませんでした。

あと、ちょっとした質問……と言いますか、意見のようなものをお  
聞かせ頂きたいと思しますので、後書きをご覧ください。  
ただ、今回のご意見は東方に関するものなので、「東方なんて知ら  
ねーよ」という人はスルーして頂いても構いませんので。

## 第70話：時間を超えて、俺達参上！

〔Side Chaο〕

……なるほど、学園側も考えたみたいネ。

確かに「田中さん」や戦車は、あの魔法具が効果的。あれを使われれば、ロボ軍団も苦戦するに違いない。

しかし……こんな大胆な作戦、魔法先生達が思いつくとは思えないネ。いったい誰が……。

「……………まさか、ネ」

レイヤさんが未来から戻ってきている？

そんなはずは無い。彼女のカシオペアは確実に破損しているはず。

……いや、それでも万が一という可能性がある。何らかの形で戻ってきたとしたら、私に対抗できる唯一の存在となり得るかもしれない。

「ハカセ、ちょっと早いガ、ロボ軍団を出すヨ」

『え？ 確かに学園側があんな対策を立ててくるとは思いませんでしたか……』

うむ、完全に予想外だたネ。

まさか一般人を避難させるのではなく、ゲームとして参加させてくるとは思わなかつたヨ。

「ロボ軍団の『脱げビーム』は万全力？」

『武装解除光線の事ですか？ ええ、大丈夫ですよ』

「よし、ならロボ軍団出撃ネ！」

こっちはよし……………次は。

「龍宮隊長。聞こえるカナ？」

『……………聞こえているよ。どうしたんだい？』

「計画をちよつと早めるネ。準備を頼むヨ」

例の弾丸も補充してあるし、既に準備は出来ているだろうけど。  
うむ、彼女についても無問題ネ。後は……………。

「ネギ坊主、そっちは大丈夫力？」

『ど、どうにか……………近づこうとしたら、いきなり捕まりそうになりましたよ！？』

あゝ、例のルールの所為ネ。

レイヤさんでないにしても、風峰先生も相当怒てたし、その辺は無理ないヨ。

それより、計画を早めるネ。準備はいいカナ？

『はい。それより超さん、本当に大丈夫なんですよね？』

「大丈夫大丈夫。火星人嘘つかないネ」

……………子供は単純でいいネ。ちよつと吹き込めば、ころつと靡いてくれる。

この計画を完遂すれば、未来は救われる。ネギ坊主の思うとおり、もつと多くの人達が救われる。嘘は言つてないネ。

もちろん、しばらくは混乱が続くかもしれないが、その先には平和な世界が待っている。

「……………2年も待ったネ。今更邪魔はさせないヨ」

『超さん？』

「ああ、何でもないネ」

ネギ坊主には、まほら武道会の決勝での出来事は教えていない。

確かに教えた場合、ネギ坊主は元から持っているレイヤさんへの嫉妬心で、さらにパワーアップするかもしれない。

しかし、激しい感情は冷静さを失わせる。ネギ坊主はその傾向がただでさえ顕著ネ。

「さあ、始めるネ」

[Side Out]

[Side Leiya]

「刀子先生から全体連絡！ 超さんが動き出したそうです！」

愛衣さんの言葉に、室内がざわっとなる。  
可能性の1つとして想定していましたが、やはり裏をかいて計画を  
早めましたか。

「では、私も……」

「いえ、レイヤさんはここにいてください」

……何ですか、高音さん。

「詳しい事情は知りませんが、あなたは超鈴音に対する『切り札』  
なんでしょう？ 切り札が最初から出て行ってどうするんです」

た、確かにそうですけど……。

って皆さん、なんで「うんうん」って同意してるんです！

「愛衣、行きますよ」

「はい！」

高音さんと愛衣さん、さらに楓さんも部屋を後にしようとする。  
ちょ、何で楓さんまで行くんですか。

「真名に対抗できるのは、拙者ぐらいでござるっ？」

「……確かに、そうですね」

龍宮さんはおそらく、麻帆良学園でも上から数えた方が早い実力者  
魔法先生でも彼女には対抗できない可能性が高い。例の弾丸を使っ  
てくるのなら、やはり手札を知っている楓さんぐらいでなければ対  
抗できない。

「おそらく、もうそろそろ龍宮さんの狙撃が始まるはずです。阻害防止の呪符は忘れずに」

楓さんが持っているのは、通信妨害を防止する呪符。これを使えば普通に連絡を取り合う事が出来る。

狙撃が始まったらこれを使い、どの方向から狙撃が行われているかを調べ、その上で龍宮さんに接敵してください。

「うむ。わかったでござる」

「……皆さん、健闘を祈ります」

ぺこりと頭を下げる。

ふつと微笑み、会釈すると、高音さん達が部屋を出て行く。

さて、いつでも出られるように準備だけでもしておきましょうかね。

「あ、あのー、レイヤさん」

のどかさん、何ですか？

「レイヤさんも戦うんですね？」

「ええ、そうなります」

「ネギ先生とも……戦うんですね？」

「……まあ、その可能性は高いでしょう」

武道会での父様とのあれこれも、完璧にネギを刺激する材料になるでしょうから。

私を狙ってくる可能性は高い。もちろん潰しますけど。

「だったら、私も連れて行ってくれませんか？」

思わず、ぽかんとした。私だけでなく、アーニヤさんも。

……いや、連れて行つて……あなた、戦えないでしょう？　アーティファクトは確かに強力ですけど、ロボには通じませんし。

そもそも、ネギに会って何をするんです。向こうに着くんですか？

「違います。……確かめたいんです。ネギ先生、もしかしたら超さんに脅されたり操られたりしてるのかもしれないし……」

「……正気、ですか？」

ネギは自分の意志で向こうに着いているんですよ。

実際に応戦した小太郎さんや風峰先生の話しぶりでは、超さんに脅されたり操られてる可能性はほとんどありません。可能性にしても……1%に満たないでしょう。

『いどのえにつき《アーティファクト》』を使えば、それを確実に確かめられます。ですが、あなたが傷つく可能性の方が極めて高い。それでも、私と一緒に来るんですか？

「私はそれでも……その1%の可能性に賭けたいです」  
「……………」

……完全に覚悟を決めてる目ですね。  
のどかさんは、強い。心の強さで言えば、3-Aでも群を抜いて強い。

「いいじゃない。連れてってあげたら」

「アーニヤさん……………」

「出来るだけノドカは私が守るし、ネギも私が相手する。だから、あんたは超とかゆー火星人に集中しなさい」

こつちに来て、何故かアーニヤさんは夕映さんやのどかさんに好意

的です。何でも、「仲間」とかどうとか言っていましたけど……。  
それにしても、いいんですか？ お任せしても。

「いいのよ。こっち来た理由の半分はネギを殴るためだから。あの  
ボケは暴走して周囲に迷惑かけてばかりなんだから……！」

まあ、のどかさや夕映さんが心配してるにも関わらず、振り切つ  
てますからね。

全て振り切る事も、ちゃんと空気読みなさいって言ってやりたいで  
す。

「……わかりました。ですが、こちらで無理だと判断したらすぐに  
下がらせますからね」

「は、はい！」

基本的に、のどかさんっていい人なんですよ。

尽くすタイプと言うか、とことん一途と言いますか……ハッキリ  
言つてネギには勿体ない。

こないない人を悲しませて……まったく、しょうがないバカですね。

〔Side Out〕

「Side Rikuto」

「さっきから鬱陶しいんだよ!!」

針を投擲し、迫るロボ軍団を次々と沈黙させる。

俺の使う針はただの針じゃない。妖力によって構築されている、極めて破壊力の高いものだ。

並の魔法使いの障壁など、易々と撃ち貫く威力くらいはある。

「こいつら倒していいよね？ 答えは聞いてないけど！」

リュウタも手にした大型銃で、次々とロボを仕留めていく。

なお、リュウタだけじゃない。モモタロス達も近くで暴れている。

要するに、俺はコイツらのお目付役だ。……元々、やり過ぎないように見張っていてくれ、とハナちゃんから頼まれてるからな。6年前の時もそうだったし。

「おい！ 何かデカイのが出てきたぞ！」

「何？」

……学園結界が落ちたか。

遠目でも、鬼神が出てきたのは分かる。あれを放置しておくはずイ。

ああ、だからさっきから俺たちの方へロボ軍団が集中してるわけか。

よっぽどデカブツと戦って欲しくないらしい。

このまま時間を潰されるのも、特殊弾で戦線から引き離されるのもマズイ。……やむを得ないか。

「おい、俺の身体使え。貸してやる」

「使えって……いいのか？」

「緊急事態だ。ここ一帯を一掃するだけなら許可する」

万が一の時のため、オーナーから借りてきて正解だったな。

銀色のベルトを腰に巻き付かせる。バックルには既に赤い携帯電話が装着されている。

「なら、ありがたく使わせてもらっぜ！」

モモタロスが俺の身体へ吸い込まれた。

同時に、俺の身体が奪われる。……その気になれば取り返せるが、今回は身体を貸す事になっている。

俺の髪は逆立っており、さらに赤いメッシュが入っている。モモタロスに憑依されるとこうなる。

「お前ら、行くぜ！」

俺の口から放たれたモモタロスの声に従い、他の3人が次々と俺の身体へ吸い込まれる。

そしてモモタロスが、ベルトにパスをセタッチする。

「変身！」

【Climax Form】

その音声と共に、俺の身体がスーツに包まれた。

右肩には電王ロッドフォーム、左肩にはアックスフォーム、そして胸にはガンフォームの電仮面をそれぞれ模したものが装着される。そして、頭部の仮面が……そう、皮がむけた。そう形容するのが一番近い。

変身が終わり、親指で自分を指し示し……。

「……俺」

歌舞伎役者のように大きく見得を切った。

「参上!!」

もちろん、ロボにそれが通じるわけがない。……それにしても、相変わらず気持ち悪い……。

【き、キンちゃん押さないで】

【こっちかて狭いんや。もうちょいそっち詰めてくれ】

【ダメダメ！ 苦しい〜！】

【どうでもいいが、これ俺の身体だぞ】

「あゝ！ ごちゃごちゃうるせえっ!!」

あ、悪い悪い。

さてと、俺たちがここで電王に変身したのにも、きちんとした理由がある。

電王には一切、特殊弾のような時間関係の攻撃が効かない。詳しくは分からないが、パスの力によって守られる……らしい。

「言つとくがな、俺たちは最初から最後までクライマックスなんだよ!」

ああ、それについては全面的に同意する。  
とりあえず、暴れてやれ。

「行くぜ行くぜ行くぜええええええええええええええええええええええ！」

[Side Out]

[Side Leiyā]

「な、何ですかあのセンス皆無なのは……」

夕映さんがテレビを見て、そう呟く。

映し出されているのは、口才軍団相手に無双する電王。

「何言ってるんですか、あんなにカッコいいのに」

そう言つと部屋にいた全員から、すごく可哀想なものを見る目で見られた。

最初から最後までクライマックスなんですよ？ どこがセンス皆無なんですか。

「……………あれ？」

自分で言つておいて、ちょっと引つかかった。  
電王？ 何で私、あれの事を知つて……………。

「何て言うか、テレビの中のヒーローみたいよね」  
「言われてみればそんな感じがします」

テレビの中のヒーロー？  
そりゃあそうですよ。だって仮面ライダー電王は、日曜の朝8時から……………。

「ッ！？」

いつも兄さんと見てたんだから。

そう、あの日もそうだった。兄さんと一緒に買い物行つて、『超・電王』見に行こうとして……………。

（こ、これは……………）

違う。これは誰？ 私じゃない。いや、私だ。

次々と、私の頭の中に知らない光景が映し出されては消えてゆく。  
これはなに？ あそこにいるのは私？ 違う。あれはわたしと兄さん……………。

(にい、さん……………?)

『まったく……………お前、もうすぐ高校卒業だろ？ いい加減に兄離れしろ』

『そーゆーのは彼氏に頼め』

『少なくとも、見て見ぬ振りするってのは出来そうに無いんでな。それに……………お前だけを行かせると心配で眠れん』

思い出した。そう、思い出してしまった。  
私がどうして、前世の記憶を持っていたのか。そして、どうしてそれが封じられていたのか。  
そして同時に……………。

「……………風峰先生が、兄さん？」

## 第70話：時間を超えて、俺達参上！（後書き）

ちよつと気になる事があるんですが……ズバリ、アリスの事について。

旧作「東方怪綺談」に登場する彼女と、現行のwin版に登場する彼女は同一人物だとされており、よく関係が仄めかされています。ですが、気になったのが彼女の実年齢。win版の外見通りの年齢なのか、それとも魔法使いだからそれ以上を生きているのか……。皆さんのご意見を聞かせてください。もしかしたら、何かしらの反映が成されるかもしれません。

第71話：Climax W Jump【前編】（前書き）

イメージとしましては、「さらば電王」を思い浮かべてもらえば分かるかと。

→わかる人にだけわかる事。

## 第71話：Climax W Jump【前編】

〔Side Rikuto〕

【どうにかこの辺の口ボは一掃できたみたいだな】

「おう。……じゃ、身体返すぜ」

モモタロス達が俺の身体から出ていき、俺もベルトを取り外す。

ベルトが取り外されると同時に、身体に纏っていたアーマーが粒子状になって消えていく。

「で、あのデカイのはどうするんだ？」

「とりあえず先に用事済ませてからだな」

手に持ったままのデンオウベルトを見せる。

レイヤの見出した、超の能力。それはカシオペアによる限定的時間制御。

攻撃を受ける寸前に別時間へ時間跳躍すれば、完全に回避できる。

さらに、ほぼ同時時間・同空間への超高速連続時間跳躍を行う事で、擬似的な時間停止の効果も発生する。

……まあ、これは全部レイヤとオーナーが言っていた事なんだがな。

「だけどその超って子、相当ヤバイみたいだね。オーナー、珍しく怒ってたし」

……そこなんだよな。

破損したカシオペアを前に、レイヤとオーナーが何やら話してたんだが……両者に言えるのは、どちらも相当頭に来ていたという事だ。レイヤはともかく、オーナーも静かながらも怒っていたみたいだし

……。

「お前も相当頭に来てるんじゃないか？」

「……………まあな」

キンタロスの言うとおり、超に対して手加減するつもりは一切無い。寧ろ、完膚無きまでに叩きのめし、塵一つ残さず消滅させてやりたい気分だ。

向こうがカシオペアを持っている限り、俺の攻撃の大半は当たらないんだが。それこそ、時空間ごと消し飛ばす一撃で無ければ意味が無い。

……………もちろん、そんなもの使えば、余波で麻帆良も吹っ飛ぶ可能性が高いが。

「だから、吹っ飛ばすのはレイヤに任せた」

おそろくだが、カシオペアを使う超に対抗できるのは、現時点ではレイヤくらいだ。

紫がそれを封じれば充分に対抗できるかもしれないが……………アイツの場合、超を八つ裂きにしかねない。

俺も同じ気分なだけに止めるつもりは無いが、それでも衆人環視の中でそれをするのはやめて欲しい。

「とにかく、俺は一旦戻るぞ。そろそろ超も出てくる頃だからな」

さっさとレイヤにこれ渡しに行かないとな。

と言うか、お前らも1度デンライナーに戻れ。そろそろ人数分の用意も出来た頃だと思うし。

[Side Out]

[Side Leiya]

ど、どうしましょう。

全部思い出しました。前世の……霧がかかっていた部分も含めて全部。

まず、どうして私が記憶を失っていたかですが、それは私が「魔法先生ネギま！」という作品についての原作知識を持っていたから。

……ああ、言っておきますけど、原作知識はすっぱり抜け落ちてます。

つまり、この世界が作品世界の並行世界のようなものだという事は分かっていても、それに関する深い情報までは分からないって事です。

（多分、転生する前に消されちゃったんでしょうね）

それはそれでありがたいと思います。

何せ、原作知識があつたら、完全に他の人を色眼鏡で見ていたでしょうから。……いえ、今も見てるかもですけど。

（いえ、それはとりあえず置いておきましょう）

今すべき事はそう、モモタロスさん達にサインをもらわないと。もちろん、良太郎さんとハナさんにも……。

……おっと、それは事が済んでからでしたっけ。

「とにかく、計画通りにするしかありません」

現在、超さんに対抗できる魔法使いはいない。

こちらにカシオペアがあれば、超さんと同じ戦法を使って拮抗できるかもしれない。

しかし、カシオペアは破損しており、凜音さんでも修復するのは一苦労だという。少なくともすぐに直るようなものじゃない。

だからこそ、電王の力が必要になる。

『フフハハハハハハ！！ 苦戦しているようネ、魔法使いの諸君  
！』

突然聞こえてきたその声に、窓から外を見る。

すると、空には巨大な超さんの姿があつた。……立体映像でしょうか？

『私が、この火星ロボ軍団の首領にして悪のラスボス、超鈴音ネ』

……あれ、冗談のつもりだったんですけど。

まさかノリノリになって乗ってくるとは……。

『前半の君たちの快進撃は見事だた。さすがは麻帆良生ネ。やられても復活アリのルールは、有能な君たちには少々優しすぎたようダ。……そこで、新ルールを用意したヨ』

新ルール？

…… ああ、例の特殊弾ですね。3時間後へ強制転移させる特殊弾頭……。

案の定、超さんは例の弾丸を取り出し、説明を始める。確かに麻帆良生にとっては、強制就寝で過ごす方が大きいペナルティでしょうね。

『ちなみに！ 君たちの頼りの綱のヒーローユニットは、既に私の部下がほぼ始末した！』

超さんのその言葉に、私はパソコンを取り出して状況を確認する。ヒーローユニットは全員、GPS機能を介して現在地が分かるようになっている。

…… やられましたね。特殊弾に気をつけるよう言っただけですが、向こうの方が上手だったという事ですか。

残っているヒーローユニットは……私やかざ……兄さんを含めても、10人ちよつと。

「アーニヤさん、そろそろ行きますよ」

「オッケー！」

可能な限り、ロボとは遭遇しないルートを通って……まずは兄さんと合流しましょう。

兄さんが持っている「あるもの」を預かり、その上で超さんに挑まなければ、まず勝てない。

……問題はネギですね。あれ、間違いなく邪魔してくるでしょうし……。

「ネギは私が相手するから、あんたはラスボスの方に行きなさい」

「分かっているとは思いますが、ネギもまずカシオペアを使つて来ます。対策は？」

「大丈夫！ その辺はちゃんと裏技があるから！」

でも、相手はネギです。出来る限り短期決戦を考えてください。

無駄に頭がいいですから、長引けば対策を構築される可能性が高いですからね。

「分かっている。そのカシオペアつてのをぶつ壊せばいいんでしょう？」

ええ。壊してさえしまえば、時間跳躍は使えません。

おそらく、ネギの地力はアーニヤさんには及ばないでしょうから。

「のどかさんも……分かっていますね？」

「は、はい」

ネギの真意を確かめるのは勝手です。

ですが、決して私たちの邪魔だけはしないでください。なお、敵に回ったら容赦しませんから。

[Side Out]

〔Side Iku〕

こちらのロボ軍団もあらかた破壊しましたかね。

しかし、助かりました。私の動きは鈍重ですから、あの弾丸は防げませんし。

「いえいえ、今回は私もやる気入ってますから」

文さんの風なら、弾丸の軌道を完全にズラす事が出来る。

それこそ、やろうと思えば、攻防一体の巨大な竜巻を作り出すほどですから。おかげで助かりました。

「しかし、問題はあの鬼神ですね」

ロボ軍団はあくまで陽動。

本命は機械化された無名の鬼神。あれが魔力溜まりに到達すれば、それこそ超鈴音の目論み通り、世界に魔法をバラす「強制認識魔法」が発動する。

……既に5ヶ所、制圧されてしまったようですし……。

「そろそろ八雲様も動く頃でしょう。それに陸斗も……」

陸斗は「超を倒すのはレイヤの役目」だと言っていました。本当なら自分が殴りに行きたいはずでしょう。まあ、私もかなり腹に据えかねていますが。

……よりによって瑪瑙さんを引き合いに出してくるとは。

「さて、私たちも行きましょうか？」

「ええ」

最後に残った防衛拠点は、世界樹前広場。

そこを鬼神に制圧されれば……私たちの負けが確定する。

制圧される前に、「超鈴音を倒して儀式を止める」、「6体の鬼神を再封印する」などの条件を満たさなければならぬ。

私たちに今出来るのは、あの鬼神の動きを止める事。

「……あなたの好きにはさせませんよ」

空を見上げると、1つの光が駆け上っていくのが見える。それはそう、列車のように見えた。

[Side Out]

「Side Yuna」

『マズイ！ これは非常にマズイ！ 最悪の状況ですッ！』

あー、朝倉！ そこまでマズイマズイ連呼しなくても分かるってば！  
他の防衛ポイントは全部占拠されちゃったし、残ってるのはここ……  
…世界樹前広場だけ。

『このまま我らが学園防衛魔法騎士団は、火星ロボ軍団の軍門に降  
つてしまうのでしょうか！？ やはり新ルールは少し厳しかったか  
！？ 学祭最終イベントは勝者なしのしょんぼりな結果に終わって  
しまうのか！？』

へっ、何言ってるんの朝倉。

ここロボはあらかた制圧したっての！

他のみんなだってやる気充分だし、残ってるのはあの巨大ロボだけ！

『ですが希望を捨ててはいけません。この状況を挽回するチャンス  
はまだあります！ 世界樹前広場が占拠されてしまう前に敵の首領  
……超鈴音を発見し、捕獲するのです！』

とはいえ、今更超りんを探しに行くのはリスクがでかいし……。  
そもそも、学園内の広大なエリアから見つけ出すのはまず不可能。

……うん。やっぱり私らに出来るのは、あの巨大ロボをここで倒す事。それしかない！

「来た来た来たよー！ デカイの来た——ッ！」

柿崎達がこっち向かってくるさらに向こう側に……うわ、来た！ズシンズシン言って巨大ロボ来てるし！！ こりゃホントにデカイッ！

「よおしッ、追撃——！」

銃を構え、照準にいれて……。

「ヤクレイトゥル敵を撃て！」

「烈空拳！」

「漢魂！」

次々と光弾が巨大ロボに当たっていくけど……全然効いてないし！何発当てれば倒れるわけ！？ ゲームバランス悪すぎでしょ！！ハッ……さては超りん、賞金出さないつもりなんじゃ……。

「や、ヤバイヤバイ逃げて——」

巨大ロボを見ると……げ、何か来る！？

逃げようとしたけど、ビームが来た。痛くは無いけど……うっ、武装脱がされた。

「上の広場まで撤退——ッ！」

その声に従い、上の広場から再び撃ちまくる。

けどやっぱり効いてない！？ おまけに攻撃弾かれて……。うう、ダメか……………。

ズダアアアアアアン

「……………へ？」

い、今のつて……………夢とかじゃない、よね？

巨大ロボが、な、殴り飛ばされた！？

「あ…あれは！」

巨大ロボの前、そこに浮いていたのは私たちも見知った顔。  
とゆーか、3-A<sup>わたしたち</sup>の担任教師！

「風峰先生！！」

[Side Out]

「Side Rikuto」

………どうにか間に合ったか。  
途中で色々あつて焦ったが、危なかった。

「風峰先生！ 今の何！？ どーして空飛んでるの！？」  
「その辺はあれだ。………そう、禁則事項だ」

便利だな、この言葉。

「さて、と」

たった今、殴り飛ばした巨大ロボを見据える。  
機械化で制御されているため、ノーマルの状態に比べたらまだマシンだ。

………リンと閻魔様の準備はまだかかる。それまで時間稼がないとな。

「げっ！ ろ、ロボ軍団復活！？」

鳴滝姉のその声に倒れているロボ軍団を見ると………うげ。

魔法具で活動停止したはずのロボ軍団が、いつの間にか再起動しているし。

あー、魔法先生や魔法生徒達とは違って、魔法具だから破壊には至ってないからか。

………いや、それだけじゃない。多分、超か葉加瀬が遠隔操作で再起動させたのかもしれない。

この様子だと、そろそろ集まってくるか？

「お前達はロボ軍団の相手頼む」

「いや、でもあれだけの数はさすがに……」

「安心しろ。ちゃんと援軍は呼んである」

そう言った次の瞬間、地面から道路標識が突き出てロボ軍団が串刺しになり、どこからともなく墓石が降り注ぐ。

……おい、これはさすがにやりすぎじゃないか？ 「何故に墓石！？」って混乱起きてるし。

「あら、せっかくのお祭りだからいいじゃない」

「いや、でもな」

そう、俺の隣に出現したスキマから現れたのは紫。

戦意が充分に高いところから、どうやらあっちこっちでバトってき  
たらしい。

「そうですよ。向こうだってバカみたいに暴れてるんですし、少  
くらい暴れてもいいじゃないですか」

「まったくです」

と、上空から舞い降りたのは、文と衣玖。

……そう言ってお前達も暴れに來たわけか。充分暴れてただろうに。

『風峰せんせー！ 超は世界樹直上4000mの飛行船の上にいる  
つて！』

「ああ、それなら大丈夫だ！」

もうちゃんと、アイツがそっちに向かっ  
てるからな。

……うちのバカ妹が、な。

「俺たちを忘れてもらっちゃ困るぜ！」

……ようやく来たか。

と言うより、レイヤと入れ替わる形で下車したのに……どうして俺より登場遅いんだ？

「1人だけ空飛んでくから、置いてけぼりにされたんだよ!!」

「そうそう。僕たち、一生懸命走ってきたんだけど」

あー……それは、悪い。

今回のイベントだと、「危ないから」って理由で、バイクやら車は使用不可になってるからな。

……その割には、飛行機やら飛行船がその辺に見えるけど。

「せ、先生！ 何なんですか、この人達！」

ああ、それは一応味方だ。

だから明石、銃向けるな。なお、ヒーローユニットじゃなくて一般参加って形になってるから、賞金持つて行かれるから気をつける。

実際にはヒーローだが、ヒーローユニットじゃないとはこれ如何に？

「クライマックスはまだ終わってないんでな、俺たちも思う存分暴れさせてもらうぜ！」

既に4人の腰部にはベルトが巻かれている。そしてその手にはパスが。

オーナーが人数分用意したベルトとパス。それがあれば、モモタロス達が単体でも電王に変身出来る。

とはいえ、無駄に変身して暴れたりしないように、普段は良太郎君

のみがベルトとパスを持っている。……今回は特別だ。

「……変身!」

【Sword Form】

【Rod Form】

【Ax Form】

【Gun Form】

それぞれの身体が光に包まれ、そして弾ける。

まず、リュウタを包むのは紫と銀を基調としたアーマー。頭部には紫の竜を模した仮面が装着される。

キンタロスを包んだのは、4人の中で最も分厚い金色のアーマー。そして斧を模した形状の仮面が特徴的だ。

次にウラタロスを包み込むのは、亀の甲羅のような青いアーマー。仮面は角付きで青いそれ。

「俺、再び参上!!」

歌舞伎役者のように大きく見栄を切り、言い放つモモタロス。

「お前達、僕に釣られてみる?」

ウラタロスも、右手の指を弄りながらそう言い放つ。

「俺の強さに、お前が泣いた!」

キンタロスは右手で顎を動かし、首を鳴らす。

「お前達、倒すけどいいよね?」

リユウタは身体を一回転させ……。

「答えは聞いてない!!」

ビシッとロボ軍団を指差して言い放った。

何て言うか……アレだ。劇場版並みにデラックスでコンプリートで  
てんこ盛りだ。

いや、今現在俺たちが対面しているコレについても、充分劇場版に  
匹敵するポリュームだし……。

「さて、と」

眼下のロボ軍団および巨大ロボを見据える。

超をぶっ飛ばせない鬱憤は、こっちで晴らさせてもらおうか。

「さあ、お前達の罪を数えろ!!」

## 第72話：Climax W Jump【中の前編】

「Side Leiya」

部屋を出て、私とアーニヤさん、夕映さんとのどかさんはこそそ隠れながら、兄さんとの合流へ向かっていた。

ヒーローユニットの現在地はGPSで探知出来るので、兄さんがここに近づいているのは分かる。

……問題は、そろそろアレと鉢合わせる可能性が高いというだけですけど。

「…………アーニヤさん」

「来たみたいね」

咄嗟に、私のどかさんを、アーニヤさんが夕映さんを抱きかかえ、横へ大きく飛ぶ。

瞬間、私たちがいた地点に大きく黒い球体が爆ぜる。

やはり、特殊弾ですか！　ここまであからさまに来るという事は……。

「なりふり構わず、という事ですか。…………ネギ」

屋根の上に立つネギを、そう睨み付ける。その手には魔法銃が握られている。

今の射撃、明らかにのどかさんや夕映さんを巻き込むつもりだった。

「…………レイヤ、未来へ行つたんじゃないの？」

「お生憎ですが、時を走る列車で帰ってきました」

本当の事を言っただけですが、どうやらおちよくられたのだと勘違いしたらしく、ネギの顔は怒りで染まる。

……やれやれ、直情径行なものにも困ったものです。

「ネギ先生！ あなたは、自分が何をしているのか分かっているのですか！？」

「分かっています。魔法が世界にバレれば、もっと多くの人が救われるんです」

「そんな事をすれば、どれだけの混乱が生まれるのか、どれだけの人達が悲劇に襲われるかも分かった上で言っているのですか！？」

「大丈夫ですよ。超さんの言うとおりにすれば、きっと」

夕映さんの言葉は正論だ。

もちろん、私も考えには充分に至っているし、それは超さんも同じだろう。

だけど……。

「……………ダメだよ、ゆえ」  
「のどか？」

アーティファクトを手にしたのどかさんの顔色は、悪い。

表層意識を探る『いどのえにつき』。……………今、それに書かれている内容は、言われなくなっただけに分かる。

「ネギせんせーには……………もう」

ぼろぼろと涙をこぼしながら膝を突くのどかさん。

もう、言葉は通じない。……………夕映さんの言葉を聞いても、アレですからね。

……乙女心が分からないバカというのは、本当に殴り飛ばしたくな

る。

「ほら、あれの相手は私がするから、先行って」

「アーニヤさん」

私が1歩踏み出そうとするのを、アーニヤさんが手で制する。

「あんた、ここに何しに来たわけ？ ネギを殴りに？ 違うでしょ。超とかゆー火星人を倒しに来たわけでしょ」

「……………ええ」

「だったら、あんな中ボスに気を取られてないでラスボスのトコ行きなさい」

……………そう、ですね。

そつと夕映さんの方を見る。

「行ってください。のどかは大丈夫です」

「……………分かりました」

ぺこりと一礼すると、目標地点へ向けて走り出す。

途中、何発か特殊弾らしきものが撃たれたが、全てアーニヤさんの放った魔法の矢によって撃ち落とされる。

今私が優先すべき事は、まず兄さんとの合流。そして超さんを殴り飛ばす事。

〔Side Out〕

「Side Arnya」

特殊弾とやらを相殺する中、ネギに握られていた魔法銃を弾き飛ばす。

……これで、ネギは特殊弾を撃ち出せなくなった。

「……アーニヤ、どうしてここに」

「決まってるでしょ。レイヤを助けに……それと、あんたをぶん殴りに来たのよ」

ユエとノドカは……下がったみたいね。

私が本気でやったら、2人を巻き込まないとは言えないし……うん。

「アーニヤ、邪魔しないで。過去を変えればみんな助かるんだよ。

アーニヤのお母さんだって……」

「ふざけんじゃないわよッ!!」

そう怒鳴ると、ネギの身体がビクッと震えた。こいつは何も分かってない。

過去を変える？　それでお母さんが助かる？

確かにそうかもしれない。村が襲われた事が「無かった事」になれば、お母さんも石になる事は無かった。

「それで都合の悪い事起きる度に、そうやって全部「無かった事」にするつもり？　そうやって卑怯して何になるって言うのよ！」

「ち、違うよ！　卑怯なんかじゃ……………」

「あんた、いつまで目を背けるつもり？　そうやって目を背けたって、何の解決にもなりはしないのよ！」

だからここで、こいつは叩きのめす。

過去だけじゃなく、自分の罪からも目を背け続けているネギを、今ここで。

「僕は…………　卑怯な事なんてしてない！！」

その声と同時に、屋根の上にいたネギが消える。

だけでも、後方に現れたネギの手を掴み、そのまま放り投げる。

…………　知覚出来たのか分からないって顔してるわね。ま、これ師匠から教わった裏技使ってるから。

「くっ！」

再びネギの姿が消えるけど…………　無駄。

現れた瞬間、姿を見ずにそのまま肘打ちを叩き込み、地面へ叩き付ける。

「そんな、どうして……………」

「どうして反応出来るのか、でしょ？」

確かに、カシオペアを使った時空間移動戦術……並大抵の魔法使いは太刀打ち出来ない。

だけど、超絶的なベテランとか、本当に“最強”の魔法使いならば、そんな小細工は通用しない。

消えた瞬間に現れるのだから、そこにタイムラグは存在しない。つまり、通常なら反応する事は出来ない。

例えば知覚出来たとしても、それに追従するだけの反応速度は人間には無い。

だけど私は、裏技を使ってそれを実現している。

「このっ!!」

ネギが激しい拳打を繰り出してくる。

完全に頭に血が上っているのか、動きが直線的で見え見えだ。

腕を絡み取り、巴投げの要領で上空へと高く投げ飛ばす。同時に私も地を蹴りつつ、既に魔力を変換していく。

「アーニヤ・フレイムバスター……」

右脚に炎の魔力を思う存分込め、飛び回し蹴りの要領でネギ目がけて叩き出す。

狙うのは、ネギの手に握られているカシオペア。

「キイイイイック!!」

私の狙いに気づいて、慌てて時間跳躍しようとするネギ。だけど、もう遅い。

「チエエエエストオオオオオオオ!!」

ネギの姿が消える事無く、また時間も止められる事なく、私の蹴りが炸裂し、ネギが吹き飛ぶ。

同時に、ネギの手に握られていたカシオペアも音を立てて碎けた。これで圧倒的優位性は無くなった。というより、今までネギが私に追従できたのはカシオペアがあつたからが大きい。つまり……………。

「これで、あんたの勝ちは無くなったわ。諦めて降参しなさい」

「ま、まだまだ……………」

よろめきながらも立ち上がろうとするネギ。

……………なら、キツイー撃入れてノックアウトするしか無いみたいね。

「フォルティス・ラ・ティウス・リリス・リリオス！」

「ラ・ステル・マ・スキル・マギステル！」

互いに、ほぼ同時に詠唱を始める。

ネギが使うのは『雷の暴風』。ネギが使える魔法では最強の威力を持つもの。そして私が使うのは……………。

「契約に従い、我に従え炎の霸王！」

「ッ！？ 来れ雷精、風の精！」

どうやら、私の詠唱を聞いて「何を使うか」分かつたらしい。

正面からの撃ち合いなら、私が圧倒的に有利。だけど詠唱はネギの方が早い。……………詠唱の速さか、それとも威力か……………。

「来れ浄火の炎、燃え盛る大剣！ ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄！」

「雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！」

「罪ありし者を死の塵に！！」

「あああああッ！！」

詠唱はネギの方が早く終わり、発動も早い。  
だけど、その数コンマ遅れて私の方の呪文も完成する。

「『雷の暴風』！！」

「『燃える天空』！！」

2つの大呪文がぶつかり合い、相乗効果で膨れあがり、私たちを巻き込んで大きく爆ぜた。

〔Side Out〕

〔Side Chaos〕

「……地球上12ヶ所の聖地および月との同期完了です。後は残る

世界樹前広場の占拠を待つのみですが……………」

皆まで言うナ、ハカセ。

確かに、風峰先生やその仲間さん達が頑張っている以上、世界樹広場を使うのは難しいかもしれないネ。  
最悪、広場は抜きで進めるしかないヨ。

「ですが、その場合だと成功率は50%を切ることになります。危険ですよ？」

「…………だが、何もしないよりはずっとマシヨ」

そう、私はこのためだけにこの時代にやてきた。  
この計画のために2年の歳月と全ての労力を費やした。…………今更止める事など出来ないネ。

「…………む？」

何か音が聞こえた。

そう、電車のホーン音のような…………甲高い音。

…………いや、ここは上空4000m。電車なんて来るハズが…………。

「ちゃ、超さん！ あれを…………！」

珍しく、ハカセの狼狽する声。

それに従い指差した方へ視線を向けると…………何と、電車がこちらへと向かって来ていた。

あ、あり得ないヨ！？ この時代の科学力では空を走る電車など作れるはずが無いネ！

電車はそのまま、飛行船を横断するように通り過ぎていき…………通り過ぎたそこには、見知った顔の少女が1人、佇んでいた。

「…………なるほど、全てあなたの仕業だたか、レイヤさん」

「ええ、言いませんでしたっけ？ 全力で邪魔するって」

いや、それは聞いてないと思うヨ。

しかしどうやって、カシオペアを失った状態で、未来から戻ってきたの力ナ？

「禁則事項です。敵に情報を渡すような真似はしませんよ」

「……ふ、確かにその通りネ」

向かい合うレイヤさん。

だがまあ、風峰先生じゃ無かたのは良かったネ。レイヤさんならまだ、話を通じる。

「レイヤさん、本当は分かってるんじゃない力？ 私の計画が成功すれば、間違いなく多くの人々が救われる事は」

「……………」

ネギ坊主はやや直情径行的なところがあるとはいえ、ネギ坊主もレイヤさんも年齢に似合わない高い頭脳を持つ。

だからこそ、本当は分かっている。

私の計画で魔法がバラされれば、最終的により多くの人々が救われるという事は。

「私の同士にならない力？ 悪を行い世界に対し、僅かながらの正義を成そう」

さあ、どう答える力…………。

「話になりませんね」

ほう、即答とは……ネギ坊主なら間違いなくうんうん悩むところだ  
ガ。

「あなたの計画は所詮、結果論に過ぎません。最終的に多くの人達  
が救われるにしても、それに至るまでどれだけの人達が犠牲になる  
んです？」

「……大局的な平和には、犠牲は付き物ね」

「計画が成功すれば、麻帆良学園の魔法先生や魔法生徒達は責任を  
取らされ、もれなくオコジョ付きで魔法の国へ島流しです」

……まあ、そうなるだろうネ。

「魔法先生の家族には、一般人出身の人だっています。そうなれば、  
別れざるを得なくなる。その悲劇はどんどん繋がっていく……」

「レイヤさん、いったい何が言いたいネ？」

「……あなたの計画はただ、悲しみの連鎖を無駄に肥大化させるだ  
けのものです。そこに意味はありません」

なるほど、それが答え力。

私の計画を否定し、自分の意志を貫くと？ ……大した度胸ネ。

「それにあなたは本当に分かっていますか？ 過去を変える。時の  
運行を乱す事が、どれだけ大きな罪なのか」

「罪？ 私はただ、未来で起きるであろう悲劇を回避するだけネ。  
それにそれが罪だとしても、今後世界が安定するまで責任を持って  
コントロールしていく。……それが私の罪の償い方ネ」

そのための根回しは既に済んでいる。

高畑先生にも言ったが、私はうまくやる。……そう、間違えたりなどしないヨ。

「いえ、あなたは既に間違えている。……罪は消えない。ましてや、そんなに容易く償ったりなど出来やしない」

ふむ、妙な事を言うネ。

罪は消えないというのなら、それはどうするべきなのカナ？

「罪は一生をかけて背負って行くもの。一生をかけて向き合っていくもの。それが私なりに見つけた、罪の数え方。だから……」

レイヤさんがずっと私に人差し指を向けて言い放つ。

「あなたの罪を、数えなさい」

[Side Out]

〔Side Rin〕

みんな頑張ってるみたいだね。

え？ ボクは何してるかって？ ちゃんと自分のお仕事してます。でもまあ、もうちょっと時間かかるかな。

もちろん、クライマックスには間に合わせるようにするけどね。

「建前は分かりました。それで、本音は？」

「だって、ボクだけのけ者ってつまんないじゃん」

ボクだって、思いっきり暴れたいし！

最初から最後までクライマックスで变身したいし！ …… まあ、この辺りは特異点じゃないから諦めたけど。

でも陸斗は羨ましいよね。特異点だから变身出来るし、レイヤちゃんだって……。

「ズレてますよ。それより、まだかかるんですか？」

「……最低でも数分は」

閻魔様のサポートがあるからって、それでも6体纏めてだと結構手間がかかる。

ま、世界樹の魔力が麻帆良内に満ちている今日だからこそ、ここまでの時間短縮が望めたんだけど。

「む…………… 始まったようですね」

遙か空の上、天才と天才がぶつかり合う、か。

予言の「賢しき愚者」。もしかしたらネギ・スプリングフィールド

ではなく、超鈴音の事を指し示していたのかもしれない。  
ま、どちらにせよ変わりないんだろうけど。

「それにしても、とてつもない作戦を思いつきますね……彼女」  
「……確かに」

閻魔様のその言葉に、ボクも思わず同意する。

電王に変身するために用いるライダーパス。

メインはベルトかと思いつつも、パスの方もかなり重要。

変身やフルチャージに用いるだけでなく、デンライナーもパスを用いる事によって、指定の時間へ走る事が出来る。

今回、レイヤちゃんはパスの力……というか、特異点の力をパスで引き出す事によって、特殊弾の無効化を可能にした。

超との決戦に向かったのだから、レイヤちゃんはもう受け取っていると見ていい。

「見せてもらうよ。レイヤちゃんのクライマックスってやつを」

もちろん、ボクなりのクライマックスもその先には待ってるけどね。

### 第73話：Climax W Jump【中の後編】

「Side Leiya」

ネギの事はアーニヤさんに任せ、私は兄さんとの合流に向けて走っていた。

おそらく、この辺りで落ち合えるはずですが…………。

「レイヤ！」

その声と共に、兄さんがこっちへ駆け寄ってきた。

どうやら既に一戦交えた後らしく、ところどころ煤けてる部分が見られる。

「大丈夫だったか？」

「ええ。さっきバカネギと遭遇しましたが、アーニヤさんにお任せしてこっちに来ました」

ああ、もちろんアーニヤさんなら大丈夫ですよ。

詳しくは分かりませんが、実力はかなり高いでしょうし、ネギ程度の相手ならどうにでも出来ます。

「……………そうか。それより……………」

と、兄さんが差し出したのは…………ライダーパス。

カシオペアが無い以上、超さんの特殊弾と時間跳躍を防ぐにはこれしか無い。

「しかし、大丈夫なのか？ オーナーの話だと、本当に1度切りな

んだろう?」

それも本当に短い時間……おそらく、一撃叩き込めるかどうかの時間でしょう。

その時間で、超さんを倒す。

……全く無かった可能性が少しでも出てきたんですから、もっとプラス思考で行きたいところです。

「悪いな。本当は俺がアイツをぶん殴りに行くはずなんだが……」

いえ、だってあなたがやったら消し飛びかねませんし。

どのみち、世界樹前広場の防衛……あそこを守り抜かなくてはならない。

凜音さんの準備が終わるまで、何があってもそこへの鬼神の侵入を許してはいけない。だからこそ、あなた達を信じるしかありません。

「間違いなく、前線力を投入してくるだろう。だが……俺に衣玖、紫に閻魔様に文で、逆にぶっ潰してやるさ」

兄さんがそう言ったのと同時に、甲高いホーン音が鳴り響く。

空から線路が延び、デンライナーが私たちの前で停車する。……間違いなく超さんは空にも警戒網を張っているはず。

ならば、安全かつ確実に飛行船へ乗り込むには、デンライナーを使うしか無い。幸いオーナーも今回の事には協力してくれるみたいですし……。

「……………学祭が終わったら」

「うん?」

「学祭が終わったら、話したい事がたくさんあります。それこそ、積もるに積もってますから」

私の言葉に、怪訝そうな顔になる兄さん。

「だから……行ってきます、兄さん」

「ッ！？ お前、まさか記憶……」

ああ、やっぱり兄さんは記憶無くしてなかったんですね。

私が「玲夜」だって気づいていて、その上で何も言わずに見守っていてくれた。……やっぱり、兄さんです。

「……ああ。俺の代わりに、超に罪を数えさせる。バカ妹」

「はい！！」

そう言うと、私はデンライナーに乗り込んだ。

そして現在。どうにか持ち堪えている……と言ったところでしょう

か。

カシオペアによる連続時間跳躍。さらに変則的な攻撃と組み合わせ、特殊弾の連続射出…………。

戦法が分かっているだけに、どうにか反応出来ていますが…………。

「圧倒的な戦力差がありながら、ここまで粘るとは…………さすがネ、レイヤさん」

自分も相当動いているはずなのに、息一つ切らずにそう言い放つ超さん。

お生憎ですが、私は最初から最後までクライマックスなんです。この程度でへこたれてちゃ、デンライナーのノリには追従出来ませんよ。

「だがレイヤさん、分かっているはずネ。いくら手の内が分かって、それに対抗する手段が無ければ全く意味が無い事は」

「……………」

「カシオペアを持たぬ以上、レイヤさんの勝ち目は無い。…………いい加減、諦めた方がいいと思うヨ？」

しつこいですよ。それに…………対抗手段はちゃんとあります。

ですが今、その切り札を切ってしまったら、それこそ持ち時間が全て没収されてしまいます。

いつどのタイミングで切り札を切るか。切り札をどのように切るか

…………それも1つの勝負なんです。

…………ただでさえ、アレは持続時間はそこまで無いですから。

「…………む、どうやら煩いのが来たみたいネ」

超さんが周囲の様子を気にしている。

どうやら、飛行船周囲に敷かれていた防衛網が、何者かと戦闘を開始したようです……なるほど、アスナさん達ですね。  
アスナさん達が今のタイミングで攻め込んで来たのなら……。

「…………切り札を使うのは、今というわけですか」  
「何？」

私のコレは、アーニヤさんのと比べて持続時間が短い。

何せ、私は「魔法使い」タイプですし、そこまで強固に鍛える必要もありませんでしたからね。

だからこそ、全ての仕込みが終わった状態でこの人を倒さなければ……それこそ、時間切れになる可能性もあった。

「……………行きます」

そう言うと思い切り踏み込み、超さんへと接敵する。

私の姿を見て超さんがほくそ笑む。……正面から向かってくるなんて無謀ネ、とても思ってるんでしょうね。  
ですが、その慢心こそが敗北を呼ぶ。

「残念ネ、レイヤさん」

正面から特殊弾が放たれ、私の身体を黒い球体が包み込む……………しかし。

「なっ!？」

それは一瞬にしてひび割れ、私を捕えるどころか動きを鈍らせる事も出来ない。

そう、それは最初から分かっていた。パスの力によって特殊弾を無

効化。それが第1の秘策。

だけど、これだけでは超さんは捉えられない。早くから使っても、それこそ戦闘中に対策を考えられる可能性もあった。だからこそ、もう1つの切り札と組み合わせる必要があった。

「特殊弾を無効化したのは驚いたが……無駄ネ！」

超さんの姿がかき消える。

刹那、私はただ本能のままに腕を背後に向けて振るう。

背後に出現した超さんはその攻撃に対処出来ず、後方へと吹き飛ばされた。その表情は驚愕以外の何者でもない。

……そりゃあ、驚きますよね。今までの絶対的優位が覆されたのですから。

「……………こういうカラクリなのか、気になるヨ」

「手品の種は、バレてしまつてはつまらないでしょう？」

下手に情報を漏らして、ここで対策を立てられては元も子もない。このまま一気に押し通す！

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

進撃しようとする鬼神を蹴り飛ばし、迫り来るロボ軍団を蹴散らしながら、空中に浮かぶモニターをチェックする。

（……どうやら、切り札を切ったみたいだな）

レイヤの切り札。それはライダーパスによる特殊弾無効化と、自分に向けて放たれる催眠による自己暗示。

動体視力や感覚に完全に追従するだけの反応速度は人間には無い。

それこそ、人間の限界を超えなければならない。

だがレイヤは、それを何らかの外的処理によって強化できないかと考え、麻帆良に来る前からアーニヤちゃんと一緒に研究していたとか。

そして最終的に至った結論が、自己暗示による感覚強化だった。

（全く持って、我が妹ながら末恐ろしい）

超もネギ坊主も、カシオペアによって時間跳躍できるとは言っても消えて現れるまで、次の行動に移るまでのタイムラグが存在する。

それこそ、完全無欠にラグを無くするのであれば、レイヤ達のように反応速度を極限にまで高めなければならない。

……もしも、そこまで考えが至っていたのであれば、手も足も出ない。それこそ、レイヤ達の作戦は通用しなかった。

「龍符「龍魚ドリル」!!」

衣玖の羽衣がまるでドリルのように腕に巻き付き、それが迫るロボを確実に粉碎していく。

……あれ、ほんとシャレにならないくらい痛いんだよなあ……。

「おらおらおらおらッ!!」

モモタロスは剣を振るい、ロボを切り刻む。

その軌跡はデタラメで乱暴……だからこそ、攻撃の軌道が読めない。

「相変わらず乱暴だなあ、先輩は」

ウラタロスもそう言いながら、器用に竿を振るってロボ軍団を薙ぎ払う。

「桃の字が無茶苦茶なんは、いつもの事や!」

キンタロスもまた、攻撃を諸ともせずには斧を振るって両断していく。

「そうそう」

踊るようにして攻撃を躲し、銃を乱射するリュウタ。

対ロボ軍団用の魔法具とは違い、フリーエネルギーの弾丸のため、物理的破壊力も抜群だ。

「……レイヤさんはもしかして、この状況を想定していたのでは?」

風でロボ軍団を吹き飛ばしながら、文がそう尋ねてくる。

「ああ、まさしくその通りだ」

魔法具で魔力を断ち、機能停止させても、また外部から何かしらの手段で復活する可能性。レイヤはその辺りも考慮していた。だからこそ物理的攻撃……つまり、魔法具以外の攻撃手段を持つ魔法使いや俺たち。さらにモモタロス達を1番当てにしていた。ロボ軍団を完全に破壊し、撃ち倒すために。

「二重三重に策を講じる……大した策士ね、あの子も」

紫の言葉に、全面的に同意する。誰に似たんだか。

アリカも王族に生まれたため、どちらかと言うと政治家向きの気質だったが……これは明らかにアリカを上回っている。

「それで、リンの方はまだかかるの？」

「ああ、まだだ」

何せ、対象が機械化で完全にコントロールされている。

生身の状態ならともかく、あの状態だったら掌握するのにも一苦労だ。おまけに未来の技術が使われていると見て間違いない。

いくらリンが最高位の陰陽師で、閻魔様のサポート+世界樹の魔力があるからと言って、時間はかかる。

「最悪の場合、お前がどうにかしてくれ」

「……あまり気は進まないけどね」

紫はあまり乗り気ではない様子。

それも無理は無い。紫の力は俺の力と同様に“強すぎ”る。

その気になれば、世界樹の魔力を完全に封印し、超の計画を破綻さ

せる事が可能だ。

だが、その場合だとその後で生じるリスクの事も考えなければなら  
ない。

下手をすれば、世界が歪む。そしてその影響は……幻想郷にも行き  
着く。

「ま、その心配は無いと思うがな」

口ボ田中から放たれる特殊弾を撃ち落としつつ、そう答える。

「あの子を信じている、という事かしら？」

「ああ」

……いや、別にレイヤ限定で信じているわけじゃない。

お前達もそうだし、麻帆良って街全体を信じている。

全てを無かった事になって出来ない。いや、出来るはずが無い。

それはただの「逃げ」だ。抗う事を辞めて、ただ都合良く世界を改  
竄しようとするだけ。

そんな世界で満足か？ ……俺は嫌だね、そんな世界。

「それじゃ、私もあの子に賭けてみようかしら。……一掃するわよ」

「……………あいよ」

紫のその言葉に、狙いを定める。

狙いは……巨大口ボおよび口ボ軍団。

「幻巢……」

「砲火……」

これまで積み積みもった恨み辛みを込めて……。



あの巨大口ボ、か。

確か、既にアスナ達も“仕込み”を終えていたんだよね？

「ええ。当のアスナさん達も飛行船の警備網と戦闘しています」

……なら、こっちの仕込みも終えておかないとな。

「文、サポートしてくれ。あれを潰す」

「はい」

衣玖、頼むからそのつや消しの目で睨まないでくれ。

あれの動きを止めるのには、文のスペルの方が便利なんだ。

完全には納得していないようだが、とにかく今はこっちの方が最優先だ。待機中のリンに念話を繋ぐ。

「リン、今から6体目潰すから、うまく抑え込んでくれ」

『りょーかい！ こっちでうまくライン確保するから、手加減無しでよろしく！』

「ああ」

強く地を蹴り、高く飛び立つ。

「竜巻「天孫降臨の道しるべ」！」

文のその声と同時に、巨大口ボの周囲に竜巻が巻き起こり、その動きを束縛する。

しかし、いくら文とは言え、あそこまでの質量の対象をいつまでも束縛しておけるものじゃない。

どちらにせよ、長引かせるつもりは無い。一撃で沈める。

「…………禁呪」

放たれるのは、全てを包み込む漆黒の帳。  
虚無の王の3つの禁呪の1つ。

「「混濁のネグロアタード」！！」

次の瞬間、巨大口を黒い長方形が包み込んだ。全てを撃ち貫け、  
虚無の刃！！

ズガン、ドゴ、バギイイイイイイン！！

低く鈍い轟音が響き渡り、竜巻と共に黒い長方形が消え去る。  
機械化された部分がほとんど破壊され、素体となった鬼神だけが残  
されていた。

「全員下がれ！」

魔法具を撃ち続けていた参加者達も、俺の声に従って上の広場へ退  
却し始める。

頭部も破壊したから、暴れ出すぞ。…………まあ、そろそろ来るだろう  
が。

何かが地面を這い、暴れだそうとしていた鬼神へと巻き付く。

「あれは…………鎖？」

そう、巻き付いたのは銀色の鎖。それもただの鎖じゃあない。  
鬼神はその束縛から逃れようともがくが、鎖はまったくびくともし  
ない。

『どう？ うまく行った？』

リンのとぼけた念話が届き、思わずふっと表情を崩す。  
うまく行くも何も、お前の術はいつも完璧だろうに。

「残るはあれだけ、か」

遙か空の上に浮かぶ、飛行船を見上げる。

なお現在、レイヤと超の戦闘の様子は空中に浮かぶ立体ウィンドウに映し出されている。

これで鬼神の方は心配なくていいし、後はゆっくり観賞させてもらう事にしよう。

## 第74話：Climax W Jump【後編】

「Side Chaos」

禁忌を犯し、制止する友人達を振り払い、その上で私は過去へとやってきた。

そのために私が行ってきたのは、未来の技術や知識を流用し、数々の発明品を世に送り出した事。

それにより資本を確立し、今後の私の計画をよりよく進めていくため。

全ては未来を、私たちの世界を平和なそれへと変えるため。  
なのに……今のこれは何だ？

「てりやああああっ！！！」

「くっ！」

私に肉薄するレイヤさん。一撃一撃が  
どうなっているネ！ 何故、特殊弾が効果を持たない！？

「アイテムなんて、使ってんじゃねえええええええええええ！！！」

最早意味不明な事を叫びながら、問答無用とばかりに斬り掛かってくる。

切り札とやらの力なのか？ いや、そんな事はどうでもいい。

ここまで来て……ここまで計画が進んでいて、今更諦めるなんて出来るはずないネ！！

「そこネ！！！」

カシオペアで時間跳躍を行い、レイヤさんの背後に転移する。  
これなら躲せない。それに手加減無用、完全に殺すつもりの一撃でやるネ！！

「ハアアツ！！」

最大まで強化された渾身の一撃が、レイヤさんへと吸い込まれる。  
そう、私は取り戻す！ 本来、私たちが迎えるはずだった未来を！

「……確かに、世界はこんなはずじゃなかった事ばかりですからね」  
「ッ！？」

ば、バカな……！

今の一撃を受けてびくともしていないだと！？  
見れば、私の拳はレイヤさんの突き出した手によって受け止められており、完璧に防御されていた。

「未来からの情報によると、あなたはネギの子孫だそうですね？  
納得しました。世界の事を見据えているように思えて、実は自分の  
事しか考えていない」

「な……！？」

「あなたはとても哀れな人。……ただ自分が可愛いだけの、とても  
哀れな人」

ち、違う！

私は未来を……未来を変えるために、過去へ……。

「あなたの罪、私が数えさせましょう」

〔Side Out〕

「Side Leiya」

「私の……罪、だと？」

「あなたの罪は、自分の都合のいいように世界を思い通りにしようとした事」

すつと超さんを指さし、そう指摘する。

さつきも言いましたが「世界はこんなはずじゃなかった事」で溢れている。これは某真つ黒クロスケ執務官の名台詞ですが。

そもそも、当然のことは分かっているんですか？

「あなたが未来を変える事は、それまでの全てを否定する事と同じ……つまり、その時代の全てを捨てる事になる」

「そ、それがどうした！」

「……やはりあなた、ネギにそっくりですよ。頭でっかちで何も見

えていない。自分だけを大切にしている」

本当に分らないんですか？

…… 某運命の夜に登場する騎士王と同じく、「やり直し」を望む事は許されない。

私は、あなたが何故未来を変えようとしているのかは知りません。もしかしたらその先に、地球滅亡のような危機的状況が待っているのかもしれない。

そうだとしても、他に方法があったはず。こんな強引な手を持ち出す事は無かった。だから……。

「あなたの罪を、数えなさい」

右腕に全ての魔力を込め、超さん目がけて駆け出す。

単なる突撃技。確かにこのままではカシオペアの時間跳躍によって躲される。

…… カシオペアが使えるならば、ですが。

「そんなもの……」

苦々しげに私を睨み付けていた超さんは、すぐさま驚愕のそれへと染まる。

あなたの絶対的自信は、カシオペアによって確立する優位性。ならば、それを無効化してしまえば……？

「な、何故動かない！」

1週間後から戻ってくる際、私はオーナーに1つの提案をした。それは、超さんのカシオペアを使用不可能に出来ないかどうか。

タイムマシンなんてものが出回れば、それこそ時の運行が大幅に乱れてしまう。

私の持っていたカシオペアも、破損しているとはいえ、所持しているは何らかの影響が出る可能性もある。そのため、下車する前にカーナーに渡しました。

……本当に賭けに近かった。間に合うかどうか分かりませんでしたし……。

「私、勝ち目のない戦いはしない主義なので」

につこり微笑んでそう言ってあげる。

「あり得ない……私のカシオペアは外部からのアクセスを完全に遮断している！ 如何なる手段を使たとしても、干渉する事は不可能！」

「“あり得ないなんてあり得ない”」

そう、静かに言い放つ。某強欲のホームンクルスの代名詞です。り得ない。常に現実を疑う姿勢が大事なのだから。

「さあ、クライマックスはここからです！」

ただ、叩き込む。それだけを頭に超さん目がけて飛び込む。超さんもカシオペアが使い物にならないと分かったらしく、すぐさま私の攻撃を回避するために地を蹴ろうとする。

しかし、動けない。そこでこれまで以上の驚愕に染まった。戦いの中で何かしらの仕掛けを施すのは基本中の基本です。例えば、攻撃を防御するフリをしつつ、足下に拘束用の魔法陣をこっそり描く……とか。

「まさか、最初から……………」

分かりましたか？ 天才・超鈴音。

麻帆良祭3日目、このイベントにおいてあなたは、常に私の掌の上で踊っていたという事ですよ。

「でやああああああああああああつ！！！！」

私の一撃を正面から受け、超さんは飛行船の甲板へと叩き付けられた。

手加減無し、真正銘本気の一撃です。

……防御に気を回していたとはいえ、今を受けては立ち上がれないでしょう。

「ぐ……………」

おや、まだ意識がありましたか。あれを受けて意識を失わないとは……。

カシオペアは今の一撃で破壊されていますし、さっきほどの優位性はもう無い。ですが、念には念を入れて……。

「ふんっ」

ちよつと力を込めて、超さんの腰の部分を踏みつけた。

「あぐっ……………！？」

奇声を上げて、立ち上がろうとしていた超さんは、再び倒れ込む。いえ、骨を砕いたりしてませんよ。ちよつと骨を外しただけです。

……とはいえ、外したのは背骨。骨を元に戻さない限り、立ち上がる事は出来ないでしょうけど。

「あなたの負けです、超さん」

まず、もう超さんには戦闘するだけの余力は残されていない。ハカセさんは非戦闘要員で、こっちにも戦闘力は無い。

茶々丸さんはネットワークの方を担当しているため、私たちの方へは来られない。ロボ軍団はほぼ殲滅されているし、鬼神に関しては凜音さんが抑えている。

……そう、既に勝敗は決している。

「まだネ……まだ、私は負けていない！ ハカセ！」

「は、はい！」

超さんの声に従い、ハカセさんが何かを行使する。

その瞬間、ハカセさんを中心とした魔法陣から光が打ち上がり、同時に世界樹からも魔力が吸い上げられていく。

「強制認識魔法……しかし、鬼神はまだ」

「そう……本来、6体の鬼神を既定位置に据えて、魔力を増幅。その上で行うはずだが……この際、仕方ないネ」

上空1万8千mにまで打ち上げられた大魔法は、世界樹の魔力を吸い上げ、数分後には世界12ヶ所の聖地と共鳴する力を得る……です。

これが終了した瞬間、世界は魔法を強制認識する。最初はほんの小さなカケラだとしても、時間が経てば、それが当たり前だと認識するようになる。

全て、超さんの計画通りに。

「私を倒しても、ハカセを止めねば魔法は発動する。最後の最後で詰めが甘かたみたいだナ。……これがほんとの、クライマックスというヤツネ」

これがクライマックス？ そんなはず無いじゃないですか。  
クライマックスはまだまだ終わりません。でしょう？ 凜音さん。

『その通り！！ 待ってたよ、この瞬間をつ！！』

[Side Out]

[Side Rin]

そう、全てはこの時のためにあつた。  
ボク存在はあくまでも保険。レイヤちゃんが超を倒しても、強制

認識魔法が発動してしまった時のための保険。

……まあ、ボクとしてはクライマックスに行きたいところだったから、出番欲しかったけどね。

「何をぶつぶつ言っているんですか、リン」

あ、失礼しました。閻魔様。

じゃ、早速始めるとしますか！

「では、私も始めるとしましょう」

ボクと閻魔様はそれぞれ、世界樹を中心とした6ヶ所の鬼神にアクセスする。

レイヤちゃんの指示通りに、6ヶ所の魔力溜まりには予め細工をしておいた。

『これだけ魔力が溢れてるんですし、どうせだから利用しちゃいましょう』

その言葉に従い、ボクはいくつか印を刻んでおいた。

超の作った魔法陣を逆に利用し、鬼神達の再封印に使用する封印陣にするための印を。

いくら機械化されてコントロールされているとはいえ、1度それから解き放つてしまえば問題無い。そうすれば、ボクからの干渉が容易くなる。

その辺は、アスナちゃん達に前もって頼んでおいた。『鬼神達の機械化のある程度破壊して欲しい』と。

破壊された後で、ボクがさっきやったように呪縛の法で拘束しておいた。

「…………眠れ、お前達は休んでいいんだ」

そう静かに、鬼神達へと語りかける。

本来、あの子達は眠り続けるだけの存在。今回は超に兵器として利用されただけ。

……正直、その辺りでも結構頭に来ている。

「だから、おやすみ」

その眩きと共に、6隊の鬼神達は再び眠りに就く。

誰かが呼び出さない限り、あの子達が目覚める事は無い。……後できっちり封印の様子見に行かないと。

「…………終わった、かな」

「いえ、まだ終わっていませんよ」

閻魔様のその言葉に、思わず身を振るわせた。

静かに、だけでもその内面では激しい怒りが渦巻いている。……あ

あ、そうだったね。1番重要なところがまだ終わってなかった。

オーナーの話によると、もうちょっとだし……フルボッコは無理だとしても、文句の1つや2つ、言ってやりたい。

どちらにせよ、もうすぐ報いを受けるのだから。

[Side Out]

「Side Arnya」

「あー、終わったみたいね」

屋根の上で、まるで花火のように魔力が弾ける様を見て、思わずそう呟く。

……なお、私の右手にはグルグル巻きにされたネギが掴まれている。あと、下着ドロで手配中だったカモとかいうオコジョ妖精も。

2人とも不満げな顔で私を睨み付けてくるけど、正直何の意味もない。猿轡を噛ませてあるから、喋れないし。

「言つとくけどネギ、あんたは今回“やっちゃいけない事”をした」

真剣な目でネギを見つめ、そうハッキリと言い放つ。

魔法が秘匿されているのは、世界に大きな混乱を引き起こさないためであり、それを大多数の魔法使い達が望んでいるため。

もちろん、魔法公表を望む魔法使いもいるけど、それは本当にごく僅か。私も魔法秘匿には賛成している。

だけど今回、魔法を全世界にバラそうとしたのだから、これはもう単なるお祭り騒ぎでは済まされない。もう既にテロの域。

「ネカネお姉ちゃんはアンタに甘いから、何としても庇うだろうけど、私たちは絶対に助けない」

そう、間違いなくネカネお姉ちゃんはネギを庇う。

多分そこまでは、6年前の村の事があるからだろうけど、それにしても異常すぎる。レイヤも怒りを通り越して呆れていたし……。

どちらにせよ、私やレイヤは庇うつもりはない。むしろ、このバカを糾弾する側に回る。

「こんな事件は表沙汰にはならないだろうけど、何のお咎め無しって事にはならないわ」

本当なら、本国とかに報告しなくちゃならない。

でも、生徒の1人が大規模テロを起こそうとしてましたなんて言えるはずがない。

多分だけど、ネギに関しても学園側が何らかの処分を下すんじゃないかしら？ 例えば……修行停止とか。

「……………！？」

修行停止ってところを言葉にした瞬間、ネギが涙目で真っ青になった。

……何を今更。あんた、本当に何も分かって無かったのね。

「……どーせ『どうして』とか『酷い』とか思ってるんでしょーけど、私の方がよっぽど『どうして』よ」

何でこんな馬鹿な事に手を貸したのか……本当に呆れる。

さて、とりあえずこのバカ共を誰かしら魔法先生にでも引き渡しに

行きますか。

[Side Out]

[Side Rikuto]

……いや、レイヤが勝利した事とか、リンが頑張ったトコとかはいいんだ。

それよりも今現在、俺は史上最大の敵と相見えている。それは……。

「さて陸斗。きりきり白状してもらいましょうか？」

俺の目の前には“コワイ”笑みを浮かべた衣玖が立っている。そして、俺の首にはその象徴とも言える羽衣が巻き付いており、その気になれば絞め殺される。

なお、紫たちはにやにやしながら俺たちの様子を眺めている。……  
後で覚えとけ。

「いや、白状するも何も……………」

「電王に変身前、女の子を助けたと聞きました」

ああ、助けた。

イベント参加者だと思うが、暴走した口ボ田中が襲いかかったから、蹴り飛ばした。

「ええ、助けた事についてはどうこう言いません。ですが……………その女の子を、お姫様抱っこで安全な場所に連れて行った事に関して、色々言いたい事があります」

「……………え？」

……………確かに、連れて行った。とりあえず世界樹広場のみんな集まってる場所に置いてきた。

あゝ……………だから、お冠なわけか。

「いや、だってその場に残したら危ないし……………」

「可愛い子だったそうですね？」

……………はい、可愛かったです。

緑色の髪で、ちょっと変わった髪飾り着けていて、意外にも着やせるタイプでした。

抱きかかえた瞬間、すぐ分かりましたです。はい。

そう口に出した時、周囲の空気が明らかに変わった。

俺たちの様子を眺めていたほぼ全員が「あゝあゝ」みたいな顔になっている。てか助けるよ、おい。

「…………まあ、後で百回殺すからいいとして」

「またそれかよ！」

「それよりも…………まず麻帆良祭を終わらせに行きましょう」

麻帆良祭を終わらせに？

…………ああ、アイツの事か。確かに、このまま放置は出来ないな。

「私としても、瑪瑙さんの生き様を愚弄されてまで、黙って見てるだけというのは出来そうにありませんから」

衣玖の言葉に、紫たちも頷く。

確かに、このまま放置しておいたら…………やる事も出来なくなる。

もう少ししたら、アレが来る。その瞬間、超鈴音は報いを受けるのだから。

## 第75話：変わりゆく日々

「Side other」

「お邪魔するわよ」

その屋敷に、彼女は足を踏み入れた。

日傘を手に、チェック柄のカーデイガンに袖を通した女性。短く切りそろえた緑髪と相まって、その端正な顔立ちからは、どこか怪しげな雰囲気漂っている。

「ああ、いらつしゃい」

そんな彼女を出迎えたのは、割烹着姿の金髪の女性。

1番印象的なのが、お尻の辺りからもここの9本の尻尾が生えている事だろう。

料理中だったのか、その手にはお玉が握られている。

「紫は？」

「3日ほど前から外出中。多分、陸斗のところじゃないかな？」

緑髪の女性…風見幽香は納得した。

そう言えば、今の時期だった。陸斗が現在生活している、麻帆良という街で街全体を巻き込んだ祭が開催されるのは。

「どうせだから、ちょっと上がって行くかい？ お茶ぐらいなら出すよ」

「……それじゃあ、お言葉に甘えようかしら」

9本の尻尾を生やした女性、八雲藍の言葉に、幽香は靴を脱いで屋敷に上がる。

八雲邸は、建築の際に紫が境界を弄っているため、無駄に広い。藍の式である橙<sup>ちえん</sup>はもちろん、長い付き合いである藍でさえ、屋敷のどこに何があるか、その全ては把握出来ていない。

……まあ、そうした張本人である紫自身も、屋敷の全てを把握しているかは怪しいところがあるが。

幽香が通されたのは、普段から使われている客間の1つだった。

「……………」

そんな幽香自身、それほど多くこの屋敷に入ったわけではない。そのため、この客間に入るのも初めてであり、思わず部屋中を見渡ししてしまう。

ふと、棚に飾られた1枚の写真が目に入った。……100年近く昔に撮られた、あの頃の写真。

「……懐かしいわね」

「ああ、確かに」

その写真に写されているのは、幻想郷が出来て間もない頃の光景。柔らかな微笑みを浮かべている水色の髪の女性と、ぶっきらぼうながら頬を赤く染めている陸斗。そして2人の前には10歳前後の少女が2人立っていた。

「よくよく考えてみれば、霊夢は陸斗似ね。瑪瑙にはあんまり似てないわ」

「確かに」

赤貧巫女の様子を思い浮かべ、思わず揃って苦笑する。

お淑やかで落ち着いた物腰の博麗瑪瑙と、お賽銭を気にする赤貧巫女の博麗靈夢。

そう考えてみると、敵と認識した相手に対する容赦のなさは、陸斗譲りなのかもしれない。

「靈夢は知らないんでしょ？ 自分が陸斗の血を引いているって」  
「ああ、知らないはずだ」

博麗大結界創建に携わった、初代“博麗の巫女”博麗瑪瑙。

博麗一族は古くから退魔を生業としてきた一族だったが、他の勢力との権力争いに敗れ、時の流れに滅びた。

瑪瑙はそんな一族の流れを組む人間であり、江戸時代末期に陸斗が旧友の伝手を使って連れ帰ってきた。

「ちょっと前に神社に寄ってきたんだけど、どうも陸斗と瑪瑙の写真を見つけたみたいなのよ」

「あ……………」

それだけで藍は察した。そして思った。

……………そう遠くない内に、紫さまに詰め寄るだろうな、と。

先の異変の時まで、靈夢は紫の事を知らなかったとはいえ、紫自身はずっと博麗の巫女を見守り続けてきた。靈夢の事も、彼女が生まれた時からずっと。

「ま、私は巻き込まれる前に“向こう”へ行くけど」  
「……………ああ、そう言えばそんな時期だったな」

幽香は数年ほど前から、紫に頼んである場所を訪れている。

幻想郷だけでは飽きたらず、他の場所でも暴れるために。

向こう側はそーゆー世界なので、妖怪である幽香でも思う存分暴れ

られるのだ。

「……………お願いだから、周りを巻き込まないで欲しいな」

藍のそんな呟きは幽香にも聞こえていたが、彼女は何も言わずにお茶をすすった。

[Side Out]

[Side Leiya]

「すみません、取り逃がしました」

くっ……………完全に失念していました。

まさか超さんがもう1つ、カシオペアを隠し持っていたとは……………。  
思えば、破損するかも知れない大切なものを、予備として持ってい

ないはずがない。

「いや、大丈夫だ。既に超の居場所は探知出来ている」

兄さんはそう言ってくれますけど……。

超さんを取り逃がしてしまったのは私の責任ですから、さすがに心は晴れない。

「……そう落ち込むな。お前が喜びそうな話として、俺たちとデリライナーが関わった最初の事件について、後で話してやるから」

「！ 本当ですか？ 絶対ですよ！」

それは気になっていました。

兄さん達がどういう形で、良太郎さんやモモタロスさん達と接触したのか。

まあ、それはそれとして、後でサインもらっておかないと……。

「時間は……23時55分、か」

懐からケータイを取り出し、時刻確認をする兄さん。

……あと5分、ですか。

「……………いたぞ」

兄さんの視線の先には、既に取り囲まれた超さんの姿があった。どうにか、間に合ったみたいですね。

[Side Out]

「Side Yukari」

「……………無様ね」

四つん這いになりながら、必死で逃れようとしている彼女を見て、  
そう吐き捨てる。

レイヤちゃんはすっかり取り逃がしちゃったみたいだけど、最初からトレースしておいて正解だったわね。

……………なお、予備のカシオペアは発動できないよう、既に境界を弄つてある。

「あなたのような輩に好き勝手されると、私たちとしても非常に迷惑なの。……………ただでさえ、結界が揺らいでた時だって言うのに」

「な、何を……………」

「ええ、あなたは何も分からないでしょうね」

けど、わたし幻想郷に生きる者達は、世界が揺らぐ事を許さない。

あなたの計画は、私たちの世界が大きく揺らぐ可能性があった。だからこそ、私たちはあなたを許さない。

「正直なところ、ここで八つ裂きにしてやりたいわ」

私の隣にいる衣玖や閻魔様達も同意見のはず。さつきから殺気が凄  
いから。

でも、それをするまでも無い。否、する価値も無い。

この女はもうすぐ、未来を変えようとした……過去を変えた報いを受けるのだから。

「その辺りは同感だ」

あら、主役のご登場かしら。

レイヤちゃんを抱きかかえた状態で、陸斗がようやく姿を現す。

……でもあなた、さつき見知らぬ女の子をお姫様抱っこした事で衣玖に相当絞られたって言うのに、懲りてないの？ 衣玖の殺気が物凄  
い事になってるから。

「……23時59分45秒」

陸斗の呟きに、怪訝そうな顔になる超。

ああ、もうそんな時間だったの。……それなら、もういいわね。

「9 / 8 / 7 / 6……」

カウントダウンを始める陸斗とレイヤちゃん。

これから先起きるであろう出来事に、思わず顔が綻ぶ。

「5 / 4 / 3 / 2 / 1 / ……」

……ゼ口。

0時0分0秒を迎えた瞬間、超の身体に異変が起き始める。  
彼女の身体から砂がこぼれ始めている。そう……砂が。

「こ、これは……！？」

「……超鈴音。時の運行を乱したその罪、あなた自身の時間で以て対価を払っていただきます」

レイヤちゃんの、静かにだけでも響き渡る声によって、そう告げられる。

こぼれ落ちる砂一粒一粒が、彼女の時間。彼女の“これまで”と“これから”が、ゆっくりとこぼれ落ちていく。

「あなたは“無かった事”にしたかったんでしょう？ よかったじゃないですか、自分自身を“無かった事”に出来るのだから」

につこりと微笑んでレイヤちゃんが言い放つ。……どこまでも残酷でどこまでも美しく。

そんなレイヤちゃんの言葉に、超は驚愕でその顔を染める。

……タイムパラドクス。例えば、自分の先祖を殺した場合、自分自身の存在も消える……というより“無かった事”になる。

もしもこれを、特異点が行った場合、計り知れないエネルギーが働き、生者と死者の時間が入れ替わるかもしれないという。

今回、彼女は自分でそれに近い行いをした。……因果応報とも言うべきかもしれない。自分勝手な理由で時間を改変しようとしたのだから。

「だから、さようなら。超鈴音」

「ッ！？」

最悪なほど美しく微笑んだレイヤちゃんがそう言い放つと同時に、  
超の身体から完全に砂が落ちきった。  
瞬間、彼女の存在はこの時間から永久に消え失せた。

[Side Out]

[Side Rikuto]

「……なるほど、その所為でいくつか腑に落ちない部分があるわけ  
ですか」

麻帆良祭終了後、俺と衣玖は図書館島深部にあるアル……クウネル  
の別荘を訪れていた。

曰く、10年前からずっと療養中だったようで、ここ数年は麻帆良  
祭にも出てきていたとか。……だったら早く言えっつーの。

おまけにクウネルって名前がよっぽど気に入っているらしく、アルと呼びかけても全く反応しない。

「それで、どの程度の変化が起きているのですか？」

「それなんだが……まず、超が携わった全てが消えた」

これは、麻帆大の工学部とかそーゆートコだな。

完全に『超鈴音』という存在が無くなったため、彼女が関わった全てが“無かった事”になった。

……四葉五月がコックを務めていた『超包子』も無かった事にされたのは、結構残念ではある。

ここで意外だったのが、茶々丸が消えなかった事。これは既に茶々丸が、“分岐点”であるレイヤの存在に、深く食い込んでいたため……らしい。

「あと、一部を除いて超鈴音って人間がいた記憶も消えた」

「ふむ……その一部というのは、あなたのような“特異点”の事ですな」

そうなる。後はあの場に居合わせた面々と、デンライナーのチケットを所有していたアーニャと、その側にいたネギ坊主とエロガモ。さらにロボットの茶々丸。

アーニャちゃんが所有していたのはゆちるのチケットだが、ゆちるはアーニャちゃんと共有する設定にしていた。だから彼女の記憶も守られ、余計だが側で拘束されていたネギ坊主とエロガモの記憶も守られてしまった。……消えていてくれた方が楽だったのに。

大半の魔法先生達の記憶からも、超の存在は消えていた。……だからこそ、極めて厄介な事態に陥ってしまったわけなんだが。

「と、言いますと？」

「……………例の最終日イベント、あれを企画したのがネギ坊主って事になっていて、レイヤが飛行船の上でバトったのもネギ坊主って事になってる」

これだけ言えば、お前も俺が言いたいことは分かるだろ？

“紅き翼”でも数少ない頭脳労働者だったんだから。

「それは……………」

案の定、クウネルも頭を抱えだした。

……………今現在、学園側を悩ませているのは超一派……………もとい、ネギ坊主一派の処遇についてだ。

当初、学園長は「最終日に少々派手なイベント」があったという記録だけで、本国に事のあらましを全て報告するつもりは無かった。

もしも、馬鹿正直に包み隠さず報告すれば、それこそ麻帆良学園を揺るがす一大事に発展しかねない。

もちろん、ネギ坊主達を無罪で済ますという事は無い。何かしらの罰則を与えるつもりであった。

……………そのつもり、だったのだが……………。

「問題は、麻帆良内部にMMの密偵が潜り込んでいた事、です」

そう、それが完全な誤算だった。

先の事件……………レイヤの正当防衛で疑念を抱かれたらしく、そこで密偵が放たれていたのだ。

これは学園長も全く知らされておらず、学祭後に明かされた時には、珍しく顔を真っ赤にして激怒していた。

……………つまり、ネギ坊主達の処遇を外に漏らさずにさっさと決めよう、という案は成立しなくなってしまうたわけだ。

「では、MMはどのような動きを？」

クウネルのそんな問いに、俺たちは思わず顔を見合わせた。

……ぶっちゃけると、「ネギ・スプリングフィールドの修業先変更」だ。

「おまけに新しい修業先は、メガロメセンブリアです」

「何ですって……！？」

普通に考えて、誰だって分かる。

ネギ坊主を、自分達の思い通りの傀儡に仕立て上げようとしている事に。

もちろん、魔法先生の大半は反対したんだが……。

「いえ、言わなくても分かります。独立しているとはいえ、麻帆良はあくまでMMの下部組織ですからね……」

たかが魔法先生や学園長が叫ぼうが、MM元老院の決定は覆せない。向こう側にいるクルトやカリムも尽力してくれたらしい（冗談で魔法公表を語り合っていたらしく、気の毒になるほど青い顔をしていた）が、それでも決定は覆せなかった。

おそらく数日中に、ネギ坊主はMMへと移送される。

「その割には、あなたはそれほど落ち込んでいないようですが」

「……だって、なあ？」

「ええ」

いや、正直いなくなってくれた方が平和になるし。

少なくとも、ネギ坊主がいなくなるといふ事をレイヤは喜んでいた。曰く「百害あって一利なしですし」とか。

MMも、正当なるウエスペタルティア王家の血統の者を手に入れられたとはいえ、ネギ坊主は表向き『災厄の女王』の汚名を着せられて処刑されたアリカの子供。

ネギ坊主の出自を明らかにして表に出す事は、自分達の悪行を公表する事へと繋がりがねない。……つまり、使い所が難しいわけだ。

「どのみち、世界が滅ぶまでその時間は残されていない」

俺の言葉に、2人は暗い顔になる。

超のいた未来では、魔法世界は崩壊した可能性が高い。……とゆーか、本人が崩壊の事実を肯定していた。

アイツの時間と俺たちのいる時間は繋がっていないので、必ずしも崩壊するという事はあり得ない。だが同時に、繋がり得る可能性も捨てきれない。

路線が崩壊へと繋がるか、救済へと繋がるか……そればかりは、今後の俺たちの行動にかかっていると云っても過言ではない。

「ところで、レイヤさん達は？」

「うちのクラスに捕まってる。あの様子だと、現在進行形で焼き肉タイムじゃないのか？」

エヴァはうまく逃げたみたいだが、レイヤやアスナ達は捕まっていた。

何でも、最終日のイベントで明石が上位に食い込んだらしく、40枚近い食券を手にしたとか。……まあ、打ち上げでその大半は消える事になるんだろうが。

ちなみに、大暴れしたモモタロス達もランキング上位に食い込んでおり、デンライナーに大量の食券が運ばれる事となった。多分、その内食べにでも来るんじゃないか？

「ま、明け方には解放されるだろうし、もう暫くしたら来るんじゃないか？ 招待状も送ったんだろ？」

「ええ」

こいつの招待状が無ければ、扉の前のドラゴンが敵として認識する。今のレイヤなら、ドラゴン如きは一捻り出来るかも知れないが、それでも場所が場所だ。地下で暴れるわけにもいかない。

それでレイヤを招待した理由は……例の遺言か？

「はい。……アリカ女王より、レイヤさんを身罷る前にお預かりしたものです」

アリカの遺言、か。

前にも言ったかもしれないが、俺は10年前から今日に至るまで、アリカがどうなったのかは全く知らない。

……アレは簡単に死ぬような女じゃないから、生きているとは思うがな。

「どちらにせよ、俺はそろそろ失礼する」

実際、問題は山積みだ。

メルディアナからは抗議文が届いているし、あっちこっちの混乱が全て治まったわけでもない。

「大変ですね、事後処理も」

「そう思うなら手伝えよ。責任の一角」

## 第76話：少女来訪中

〔Side Yukari〕

陸斗がこれまで「本気で死ぬかと思った事」に、衣玖を怒らせた事がある。

私から見ても文句の付けようが無いほどの女性だけれど、彼女はとも嫉妬深い。

それこそ、見知らぬ女性と陸斗が親しくしているだけで、機嫌が悪くなるほどに。

（あの時は酷かったものねえ……………）

これまで、私も思わず身震いするほどの怒気を衣玖が放った事が2度ある。

結千流…………ゆちるの事。ずっと旅に出ていたあの子が帰ってきて、衣玖と一悶着起こした。ちなみに、現在進行形である2人は仲が悪い（私から言わせてもらえば、似たもの同士だと思うけど）。

そしてもう1つ、十何年か前に発覚した“隠し子”騒動。あの時は酷かった。

「何て言うか、本当に凄い人なのね……………」

麻帆良から帰ってきた私を出迎えたのは、にっこり微笑む霊夢だった。

…………ただし、その手には昔の陸斗と瑪瑙の写真を持って。

仕方ないからありのままに事情を説明し、稗田の家から抹消された事実も全て記載されている『裏幻想郷縁起』を持ってきて読ませた。陸斗が土下座して「頼むから記録しないでくれ」と頼み込んだ、あ

の珍事も記録されている。

「てゆうか、これ本当なの？」

「阿求はまだこれに手を付けていないけど、陸斗が帰ってきたら続きが書かれるでしょうね」

これに書かれている大半が、陸斗の引き起こした珍騒動だもの。

「……………あの人、一応私のご先祖様なんですよ？」

「ええ、そうよ。初代“博麗の巫女”博麗瑪瑙の伴侶だもの」

とはいえ、霊夢には妖怪としての部分は全く無い。

陸斗と瑪瑙の間に生まれたのは、「人間として生まれた」霊夜と、妖怪として生まれた「ゆちる」。

それぞれ両親の形質を二分して生まれてきた。

「そっくりだと思うけれど？ 敵と認識した相手に対して、容赦ないところは特に」

身に覚えがあるのか、顔を顰める霊夢。

元々、霊夢が使ってる封魔針も、陸斗が使っているものを参考にし  
て編み出された技法だし…………。

尤も、陸斗の器用さは、別の子が全部受け継いだみたいだね。

「で、その当の本人は何してるわけ？」

「今頃、後始末に追われてるんじゃないかしら？」

あの困ったちゃん達が引き起こした騒動は、まだ完全に収まったわけじゃないし。

[Side Out]

[Side Rikuto]

大変だった。そりゃあもう、気が滅入るほどに。  
リンがいてくれなかったら、ホント長引いてただろうな。

「お疲れ様です、風峰さん」

瀬流彦が差し出す缶コーヒーを受け取り、片手で開けて口に運ぶ。  
仄かな甘みと苦みが、疲れ切っていた身体に染み渡っていく…………。  
…………どうやら瀬流彦も相当疲れているらしく、顔色は悪い。

「…………関西の方はまだマシですよ。西の長がうまく取り纏めてく  
れているので、それほどやかく問い質して来たりはしませんでし  
た」

例の修学旅行の一件以来、詠春もすっかり西を治めているようだ。あれで何も変わらなかったら……本気で殴りに行こうかとも思ってたぞ。

まあ、関西が落ち着いているならまだいい。問題は……。

「メルディアナの方、ですか？」

「ああ」

そう言い、溜め込んだ息を吐く。

元々、こっちの学園長と共謀して、修業先をMMから麻帆良へと変更したのだ。

それもあって、今回の件でネギ坊主の修業先が再びMMへと変更された事について、相当しつこく追求してきている。

……でも、なあ？

「ネギ坊主が魔法の存在をバラそうとしたのは事実なんだがな」

「……………そうなんですよねえ」

ネギ坊主が麻帆良祭の騒ぎに乗じて、全世界に対し魔法の存在を公表しようとした。

……時の流れの中へ超鈴音が消え去り、時間の修正力が働いた事によつて、一部を除く魔法関係者の認識はそうなっている。

もちろん、メルディアナにもそーゆー風に事情は説明してあるんだが、どうしても納得しない輩がいる。

例を挙げると、ネギ坊主とレイヤの従姉とか、英雄を盲信するバカ教師とか。……校長が苦い顔をしつつも納得していたのは良かったが。

「リンがいなかったら間違いなく、あのまま平行線だっただろうな」

魔法先生達のまとめ役として就任したリンこと、近衛凜音だが……  
アイツはああ見えて長生きしており、その分色々知っている。  
今現在、世界各地の魔法学校で重鎮となっているジジイ共の弱味や  
ら、いろいろだ（遠回しにそれをつつくのを見て、麻帆良側でも顔  
が青くなっていた）。

そのおかげで、さらにカオスになる事だけは防がれた。

「……………ネギ君の事、どうにかならなかったんでしょうか？」  
「どうにもならん」

瀬流彦の言葉を一言で切って捨てる。

アーニヤちゃんが簀巻きにネギ坊主を引き渡してから、何度も取り  
調べは行った。

……………だがなあ。取り調べを担当したガンドルフィーニも、タカミ  
チも呆れてたぞ。何でも「僕は悪くありません」って叫ぶばかりで  
反省の態度を見せているならまだしも、あれだとうしようもない  
し。

MM行きにも、それほど困惑しているようには見えなかった。やは  
り、ネギ坊主にとって大事なのは「修行」であって「教職」では無  
いらしい。

「そつえば、レイヤちゃんはどうしてるんです？」  
「のびのびしてるぞ」

[Side Out]

「Side Asuna」

レイヤちゃん、楽しそうね……。

「ええ、そりゃあもう！ 平和だし、安全だし、ネギいないし！ 静かだし、安穩だし、ネギいないし！ 最高ですよ！」

「そこなの？ 今までどんだけ不満だったのよ」

ネギがいなくなって、ずっとこの調子。

そりゃあ、レイヤちゃんのストレスの原因だったのは知ってたけど……ここまでとは。

「そう言えばさ、アリカ姉様の遺言の事……アルから聞いてたんでしょ？」

「ええ」

「……遺言、聞かなくてよかったの？」

アルに託された、アリカ姉様の遺言。

ナギと同じ様にして、レイヤちゃん宛てに遺されたもの。……普通

なら、聞いた方がいいと思うけど。

「今の私では、母様の言葉は重すぎますから」

悲しげな表情で微笑むレイヤちゃん。

……重すぎる、かあ。まあ、分からない事はないけど。

「それより、今後の予定としてはどうするわけ？」

「とりあえず修行です。……武道会もそうでしたけど、まだまだ未熟なところがあると分かりましたから」

そうは言っているけど、むしろ善戦した方だと思う。

手加減しているとは言えタカミチにだって勝ったし、超さんにだって勝てた。

……あ、私って“分岐点”とか言う存在らしくて、他の人は超さんの事忘れてるけど、私やレイヤちゃんは覚えてるから。

戦闘力だって、麻帆良学園でも上から数えた方が間違いなく早い。

……もちろん、レイヤちゃんが言う未熟っていう部分も、分らないくはない。私だって未熟なところはあるし……。

「ですから、凜音さんが準備してくれている修行……受けてみようと思うんです」

「リンの修行って、精霊魔法を扱う事を前提とした修行でしょ？」

エヴァちゃんもそれには賛成みたいだけど、嫌な予感しかない。

だって、リンの修行よ？ 絶対碌な目に遭わないと思う。ゆちるよりはマシだと思うけど……。

「どちらにせよ、今のままでは通用しません。……魔法世界では」

……アルの話を聞いて、レイヤちゃんは魔法世界へ行く事を決めている。

自分のルーツを探りたいとか、色々考えてるみたいだけど、やっぱり根底には超さんの事がある。

超さんが何のために過去を変えようとしたのか。……私や陸斗は、まあ事情を知ってるから分からなく無いんだけど、やっぱりレイヤちゃんも疑問には思ってるみたい。

あまり根を詰めすぎなければいいんだけど……。

[Side Out]

[Side Arnya]

「何度も言ってるでしょ？ 今回の事はネギの自業自得だって」  
『でも……ネギがそんな事するはず無いわ』

電話の相手はネカネお姉ちゃん。  
要件は勿論、ネギの事について。……今更だけど、過保護にも程があるでしょ。

『ネギは優しくて真面目な子なのよ？　きっと、誰かに騙されたり操られていただけよ』

（あゝ……まあ、半分はそこに付け込まれた様なものだけど）

超なんとかって奴は、よく分かんないけど消えちゃったし……公式の記録とかだと、ネギが学祭で騒ぎを起こした張本人って事になる。

時間の帳尻を合わせたっていうのか、そっちもよく分からない。まあ、どのみちこうなっちゃってるし。

『だからネギは悪くないわ。レイヤだって、きちんとネギの事を見てくださいね……』

「お姉ちゃん、いい加減にして。……私、怒るわよ？」

私の言葉に、お姉ちゃんが息を呑むのが分かる。

私がお姉ちゃんと喧嘩する事になるなんて思ってたけど、さすがにこればかりは放っておけない。

結構力チンと来たし、レイヤの姉貴分として物申させてもらう。

「お姉ちゃんの言い方だと、レイヤが悪いつて聞こえる。ネギが悪い事したのはレイヤが見てくれなかったから。そんなにレイヤに責任転嫁したいの？」

『ち、違うわ。そんなつもりじゃ………』

ううん、そんなつもりだった。

何よりお姉ちゃんは、ネギを甘やかしすぎている。昔からバカして

も叱らずに、ただやんわりとしか注意しない。

『ネギはいい子なのよ？ あんな子が悪い事をするはず無いわ』

「…………お姉ちゃんの言う“いい子”って、自分の言う事を何でも聞いてくれる、人形のような従順な子の事？」

『え……………？』

前から疑問に思ってた。ネギには優しく接する一方で、レイヤにはどこか一線引いたようにして接していた事に。

ネギも、そんなお姉ちゃんには甘えていて、何でも言う事は聞いていた。

だけどレイヤは違う。ネギを甘やかすお姉ちゃんとは一歩下がって接しており、お姉ちゃんもレイヤとは一線を引いていた。

…………そう、私はこれまで「レイヤが拒んでる」から「お姉ちゃんも拒んでる」んだと思ってた。

けど、それが逆だったら？ 本当は「お姉ちゃんが拒んでる」から「レイヤも拒んでる」としたら？

「ねえ、お姉ちゃん。…………ネギはナギ・スプリングフィールドじゃないのよ？」

そう言うと、電話の向こうでお姉ちゃんが凍り付いたのが伝わった。周りの大人がほとんどそうだったように、お姉ちゃんもネギを通して“英雄”<sup>ナギ</sup>を見ている。

そして、それと同じ様にレイヤを通して別の誰かを見ているとしたら…………？

「はつきり言うわ。ネギはナギ・スプリングフィールドにはなれない。レイヤも、同じよ」

レイヤは自分で「母親似」だと言っていた。  
……自然に考えて、レイヤを通して誰を見てるかって言えば、  
2 人の母親になる。

『ち、違っ……私は、別にそんな………!』

「……もう1度言うわね。ネギがMM行きになったのは自業自得だし、私もそれにどうこう言うつもりは無い。だけど」

語尾を強めて、一気に言い放つ。

「もし、レイヤを悪く言うつもりなら………本気で許さない」

それだけ言うと、通話を一方的に断ち切り、ため息をつく。

少なくとも、言いたい事は全部言った。もちろん、向こうは納得していないようだけど。

それにしても………ねえ？

(ここまで酷いとは思って無かった………)

ネギのMM行きで文句言ってくるのは分かってたけど、まさかレイヤを非難するとは。

レイヤは夏に魔法世界へ行く予定だから、同じ様に里帰りする事になる。……ややこしい事にならなければいいんだけど。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

や、やっと終わった……………。

疲労の溜まった身体を引きずりつつ、教員寮へと戻る。  
自分の部屋の前までたどり着くと、鍵を差し込み……………。

「……………ん？」

ふと、気づいた。……………開いてる。

この部屋の鍵を持つてるのは、寮の管理人と衣玖だけ。紫はスキマで部屋の中に入るだろうし、鍵を開けることはない。

衣玖も今の時間は女子寮の方だし、だとしたら誰が？

そつと扉を開けるとそこには……………。

「お帰りなさいませ、お父様。ご飯になさいますか？ お風呂になさいますか？ それとも……………わ・た・し？」

「…………………………」

見なかった事にしよう。

無言でそのまま扉を閉め……………。

「お待ちください」

ようとしたが、片手でそれを止められた。

ああ、そう言えばそうだったな。お前、俺以上に怪力だったよな！

「ていうか、何でお前がここにいる」

質素なメイド服に身を包み、水色の髪を結った美少女。

我が娘、風峰結千流。……現在は結崎ゆちるを名乗った上で放浪しており、何でもアーニャちゃんを弟子に取ったとか取らなかったとか。

「嫌ですわ。私が誰だかお忘れになったのですか？ ……お父様の

ためならば命をも賭ける、情熱的な女ですもの」

「いい加減別の相手探せ。一応実の父親だぞ」

そんなんだから、衣玖に色々言われるんだ。

最初に遭遇した時、本気で死ぬかと思ったぞ。

「積もる話もあるでしょうし、とりあえず入りませんか？」

「……………わかったよ」

コイツの場合、ちょっとしたでも気を抜くと命取りになる。

例えば、食べ物飲み物に薬を仕込んでいたり、寝ている間に布団に潜り込んできたり……………。

これがレイヤくらいの年齢ならまだいいが、さすがに20歳近い外見のコイツにやられると、俺としてもヤバイ。

……………なお、衣玖との間に勃発した激戦の引き金は、布団に潜り込んでいたゆちるを見つけた事である。

さすがに麻帆良でアレ規模はシャレにならない。

「それでお風呂からでしょうか？ お背中流させていただきますわ」  
「…………断固として遠慮させてもらっ」

## 第77話：過去への入り口

「Side Takamichi」

……本当に、頭が痛くなってくる。

確かに僕らにも責任の一端はある。だけど、ここまで歪んでしまっていたとは……。

「ネギ君、君は本当に分かっているのかい？ 魔法を世界にバラす事の危険さが」

「分かっているよ、タカミチ。だけど、魔法が大っぴらに使えるようになれば、もっと多くの人達を助けてあげられるんだよ」

思わず、黙って話を聞いていた学園長と顔を見合わせる。

やはり彼は何も分かっている。分かっている上で、こんな計画を押し進めていたとは……。

「魔法の存在がバレれば、混乱が起きる。それでさらに多くの人達が犠牲となる。……そうなってしまったら、救う救わないの問題じゃなくなるんだ」

「それは……でも、僕たちが頑張って、その人達も助ければ……」

……

「そこまで、じゃよ」

と、話の成り行きを見守っていた学園長が、会話を中断させた。

これ以上不毛な会話を続けていたら、僕の方も冷静でいられる自信が無かったので助かった。

僕に代わってネギ君と向かい合った学園長が、口を開く。

「ネギ君、そもそも何故魔法が秘匿されているか、考えた事はあるかね？」

「……………いえ、ありません」

「それはの。かつて、魔法使い達が受けた迫害から来たものじゃ」

学園長の言葉に、ネギ君が息を呑んだのが分かる。

少し歴史を紐解けば、この旧世界で魔法使い達が迫害されていた事はすぐに分かる。……………魔法学校でも、その辺りの歴史はきちんと学んでいるはずだ。

例を挙げれば、中世ヨーロッパで行われた“魔女狩り”。もちろん、悪事を働いた者もいただろうけど、中には魔法使いでも何でもない一般人も含まれていた。

多くの魔法使いだけでなく、何の罪もない一般人も巻き添えとなり、その事件は魔法使い達に表舞台から姿を消す事を決意させる。

「自分とは違うものが存在すれば、人はそれを恐れる。……………それは人の性<sup>サガ</sup>じゃ。自分とは違うものを恐れ、追い出そうとする。吸血鬼であるエヴァも、その被害者じゃよ」

「エヴァンジェリンさんも……………」

「儂ら魔法使いもまた、その被害を受けてきた。だからこそ、魔法使いにも一般人にも被害を出さないため、魔法の存在は秘匿されて来たのじゃ」

「もしも、ナギだったならば……………その計画に賛同していたかも知れない（深く考えない人だったから）。

結果的に、多くの人達が救われる事になるのは事実だ。……………もちろん、師匠や詠春さんが身体を張ってそれを止めただろうけど。

「『多くの人達が助けられる』。……………それは全て結果論じゃ。その結果に行き着くまでの課程には、より多くの人々の犠牲があるの

は間違いない」

「で、でも……………」

「……………ネギ君、君は何がしたかったのかのう？」

学園長の質問に、ネギ君は俯いたまま何も答えない。

「魔法は命を救い、命を守る力じゃ。その反面、命を奪う凶器ともなりかねん。……………もう少し、よく考える事じゃ」

そう言うつと、学園長は取調室を後にした。

僕もしばらくの間、ネギ君を見つめていたけど、彼の様子は変わらずに俯いたままだった。

……………彼がこうなってしまった事には、僕にも責任がある。

『お前の罪を数えろ』

何年か前から使っている、陸斗さん達の口癖が脳裏に蘇る。

そう、ネギ君の暴走を阻止できなかった事。ネギ君を理解出来ていなかった事。それが僕の数えるべき罪。

「……………ネギ君、君は君の罪を数えるんだ。僕は、僕自身の罪を数える」

それだけ言うつと、取調室を後にした。

繰り返しちゃいけない。同じ轍を踏むわけには……………同じ罪を数えるわけにはいかない。

自分の罪を数える。……………こんなにも難しい事があったなんてね。

[Side Out]

〔Side Rikuto〕

タカミチが自分の罪を数えた翌日

ネギ坊主のMMへと旅立ち、俺はA組の生徒達にネギ坊主が故郷へ帰った事を告げた。

……まあ、さすがに魔法云々は話せないので、実家やらその他諸々の事情でいなくなった事を説明した。

「ネギ先生……………」

未だに真っ白な灰となっている雪広。……どうやらダメージが相当大きかったらしい。

いつもは騒がしいA組だが、ネギ坊主がいなくなった事で若干沈んでいる。

……レイヤを含む一部だけはいつも通り………というか、レイヤは相当嬉しそうでもあるが。

（まあ、分からないでもないが）

何せ、ネギ坊主の引き起こす珍騒動。その被害を被っていたのは主に俺とレイヤだ。

レイヤが来日する前から起きていた想像（くしゃみとか惚れ薬とか期末テストとか）の事を知り、被害者に土下座していたのも記憶に新しい。

それにしても……………。

「……………」

にこやかに授業を聞きつつ、ノートを纏めている我が妹を見やる。どうやら、電王を見た事がきっかけで前世の記憶を取り戻したらしいのだが……………。

（どうしたものかな）

記憶を取り戻してから、やけに甘えるようになった。

何というか、長い間会えなかった事による反動？ それに近く、さすがに人目のある所ではきちんと分別を弁えているが、それ以外だとやたら甘えてくる。

いや、これが15歳前後だったら、衣玖のドリルがギューンギューンとなってるだろうけど、幸いにもレイヤは10歳だ。

……………これで手を出したら、俺犯罪者だぞ？

「風峰先生、どうかしたんですか？」

「……………いや、何でもない」

その言葉に再び授業に集中するも、今度は別の事が気になっていた。

……宮崎の危うさ、だ。

どうやらネギ坊主の表層意識を「いどのえにつき」で覗いたらしく、それ以来様子がおかしい。

少なくとも、こうやって……。

「のどか、34ページの例題ですが、これはどの公式を使えば……」

「あ、それはこっちのページの公式に当てはめるんだよー」

「ありがとうございます」

常日頃の様子を見る限り、特に変化は見られない。

……だが、それがおかしい。

宮崎のどかは俺の知る限り、あのように感情を押し殺したり出来るタイプじゃない。ネギ坊主がいなくなった事にシヨックを隠しきれないはず。

木乃香もその事に不安を覚え、俺に相談してきたのだが……。

（もしかしたら、相当ヤバイかも）

雪広のように落ち込むならともかく、あんな状態だとすると相当溜め込んでいる可能性が高い。

それが何かのきっかけで爆発したら……下手をすれば、宮崎のどかという人格が吹っ飛びかねない。

おまけに彼女は精神感応系アーティファクトを所持している。それがどんな影響を与えるかが分からない。

（……何も起きなければいいんだが）

近い内に、しずな先生辺りにでも相談しておこう。

自分よりも同性の彼女の方が話しやすいはずだ。

[Side Out]

[Side Arnya]

とりあえず、聞きたい事は山ほどありますけど……何でいるんです？  
そう、堂々と表から“別荘”に入ってきた我が師匠にそう問いかけた。

「いえいえ、とりあえずお父様が帰ってくるのを待っていたんですが、さすがに暇なので、ついでに弟子の様子でも見ておこうと思つて」

「私ついで扱い！？」

いや、まあそれはいいんですけど……。  
それより、師匠が別荘入ってきてから、なんか衣玖さんの様子がおかしいんですが。

妙に殺氣立つてると言うか……表情こそ笑顔だけど、目が笑ってないって言うか。

「あら、お久しぶりですね。お義母様」

気づいているのかいないのか。多分、師匠の事だから気づいているんだろうけど。

それが分かった上で、衣玖さんにそう話しかける。

……衣玖さんの殺氣がさらに強まったのは、きっと気のせいじゃない。

「……ええ。結千流さん、お久しぶりです。いつこちらに？」

「昨日です。……昨晩はお父様のところへ泊めて頂きました」

ぴきいいいいいいいいいん

何かが凍り付いた音が、しっかりと聞こえた。

……ヤバイ。本能が叫んでいる。今すぐここから逃げろって。

「お背中をお流ししようかと思ったのですが、どうにもガードが堅くて……」

「そうでしょうね。私ならともかく、実の娘に手を出すほど鬼畜ではありませんから」

うわあ。衣玖さんの言葉にも棘がある。

師匠も衣玖さんにはムツとしてるみたいだし……。

「……何を仰りたいのでしょうか？」

「特に何もありませんよ。……ただ、陸斗が女として愛しているのは私、というだけです」

「……………ほっ」

師匠の目が怖い。顔は笑ってるけど、目が笑っていない。

ここにいたら、間違いなく巻き込まれる。

出来ればさっさとこの場を離れたいのだけど……………足が動かない。

「一昨日もそうでしたね。学祭が終わって、頑張った分愛してくれて……………」

師匠じゃないけど、これはイラッと来る。……………完全に惚気だもの。普通に美男美女のカップルだから絵にはなるけど、それでもムカつくものはムカつく。

……………師匠は普通に、こめかみに青筋入ってるし。

(……………これでもし、この場にレイヤが来たら)

いや、想像したくない。

間違いなくカオスになる。それこそ、世界が停止しかねない規模で。幸い今は授業中だから、話の当人もレイヤも学校に行ってるけど。

……………あ、あれ？ ちょっとレイヤの事考えてる内に、2人の間のオーラが禍々しいものになってると言うか……………。

何て言うか、ムードが最悪になってない？

「表に出なさい、小娘」

「望むところです」

ちょ……………師匠も衣玖さんも！ ここ、人の家ですからね！？  
いくら魔法球の中だからって、好き勝手暴れちゃダメですよ！！

すると師匠は、とってもいい笑顔で諭すように教えてくれた。

「ご存じですか？ 世界は自分を中心に回っていると考ええると楽しい。だから、私が正しいのです」

「……………誰から聞いたんです、そんな自己中理論」

「天の道を征き、総てを司る方のお祖母様が言っておられた言葉だそうです。お父様から昔、教えていただきました」

よし、次に顔合わせたらあの人は殴ろう。

英雄とかそーゆーの関係無しで、そんな無茶苦茶な言葉教えてどうすんですかって。

……………それ以前に、人様の庭で暴れたらダメですって！

「確かに。彼女は少々、常識というものを弁えていないようですよ」

「あら、胸ばかりに栄養が行っている方に言われたくありませんね。このクソババア」

だ、だから師匠も変に挑発したりしないでくださいって！ いくらなんでもクソババアは無いですって！

確かに衣玖さんのそれは羨ましいな〜って思ったりしてましたけど……………。

衣玖さんも、バチバチ電気光ってますから！！ 羽衣が凶器に見えるんですけど！？

「では、そろそろ始めましょうか？ 減らず口ばかり叩くファザコン娘に、礼儀というものを叩き込んであげます」

「それはこちらの台詞ですよ、お・か・あ・さ・ま？」

「……………上等です。その減らず口、無理矢理にでも閉じさせてあげましょうー！！」

[illegible]

私の叫びは虚しく木霊し、義母と義娘の意地の張り合いは始まったのだった。

……いや、これ私の責任じゃないわよね？ 後で真祖にくびられるの嫌なだけ。

[Side Out]

[Side Rikutō]

俺たちは凍り付いていた。……画面の向こうの君たちは、想像出来るだろうか？

本来、術者によって完全管理されているダイオラマ魔法球で、起きるはずのない嵐や雷雲が巻き起こっている光景が。

別荘に足を踏み入れて……後悔した。

「……………さ、帰ろうか」

「はい」

「いや、1日経ってないのに帰れるわけありませんから！！　そもそも何なんですかアレ！？」

刹那、空気読もうな？　せつかくレイヤは読んでくれたのに。

「人を空気読めてないみたいと言わないでください！　だから、何なんですかアレは！」

「知るかッ！！　大方、衣玖とゆちるの不毛な親子喧嘩だろ！」

俺はあれに巻き込まれるのだけはご免だ！！

数十年前、規模こそあれには劣るけれど、かつての親子喧嘩に巻き込まれたのは記憶に新しい。

幻想郷に多大な被害をもたらし、半ば同情されるような生暖かい視線に晒された気持ちだが、お前達に分かるか！？

「分かりませんッ！！　なら、先生がアレ止めてきてくださいよ！」

「せやな、あのままにしといたら別荘メチャメチャになってしまうし」

木乃香の言葉には全面的に同意するが、正直アレを止める自信は無い。

あの状態の衣玖は恐ろしく強いし、ゆちるなんて本気で殺る気で行かないと、こっちが痛い目を見る。

1番いいのは見て見ぬ振りをする事。……………まあ、1日経たなきゃ出られないんだし、どのみち無理なんだろうけど。

「……………とりあえず、この状況下で1番マトモなのを探して事情聞こうか」

多分、止めきれなくてあんなったんだろうし。

レイヤ達が俺の言葉に頷くと、喧嘩に巻き込まれないよう気をつけつつ、彼女を探した。

……………おお、いたいた。全身ボロボロだけれど、致命傷だけは避けていたらしい。

その「マトモな」アーニヤちゃんは俺たちの姿を確認すると、涙目で駆け寄って来て……………殴られた。……………痛い。

「……………何するんだ」

「何で師匠に無茶苦茶な持論吹き込んだんですか！ おかげでなんですよ！？」

そう、未だ巻き起こる竜巻や稲光を指差す。

（兄さん、何吹き込んだんです？）

こそこそ尋ねてくるレイヤ。いや、ちょっとカブト語録を教えただけだぞ？

小さい頃のゆちるって引つ込み思案だったから、もっと自分を出していけるよう、天の道を征き、総てを司る男のお祖母さんの名言をちよつと。

そう答えると、明らかに呆れた顔をされた。……………いや、あれを最初俺に吹き込んだのお前だし。

「……………それはそれ、これはこれです」

どこか釈然としないが、それは由としよう。

「それより、アレどうするんです？ 放置しておいたら、後でエヴァンジェリンさんが煩いですよ？」

レイヤが指差したのは、不毛な親子喧嘩。

……とりあえず、あれは放置しよう。

俺は知らん。大元は俺なのかもしれんが、俺は知らん。……頼むから知らないと言わせてくれ。

……その後、騒ぎを聞きつけた閻魔様（休暇延長でまだこっちにいた）によつて喧嘩は治められ、その後俺も含めてお説教が下つた。てゆうか、何で俺まで……。

「あなたが喧嘩の原因だから、仕方ないでしょう？」

呆れた様な顔で閻魔様にそう言われてしまう。

……いや、確かに原因は俺かもしれないけど、それでも喧嘩に発展させたのはあの2人で……。

「言い訳無用！ そもそも、あなたがしっかりしていないから喧嘩になるんでしょうが！」

「……はい、すいませんでした」

なお、前の喧嘩の時もこのように治められたのは言うまでもない。  
ボロボロになった衣玖とゆちるも、俺と同じ様に閻魔様の前で正座  
しているが、まだ互いに睨み合っている。

「あのー、えーきさん。ちょっとええ？」  
「何でしょうか？」

そんな2人に挟まれた俺の心境など知らず、木乃香がいつもの調子  
で閻魔様に質問をぶつける。

「衣玖さんとゆちるさんって、どーしてそんな仲悪いん？」

あらゆる意味で核心を突く質問だな。

2人も居心地が悪そうに顔をそらしているし…………正直、俺も上手  
く説明できない。

…………やっぱり、アイツの存在が…………。

「…………2人の不仲には、ある女性の存在が密接に絡んでいます」  
「！ 閻魔様！」

「いい機会でしょうか？ 大方、あなたは彼女の存在をこの子達に教  
えていないと思いますし」

それは…………まあ、事実だが。  
だがアイツの事を話すとすると、絶対に衣玖との事も話さなくちゃ  
ならなくなるわけで…………。

「多少、こっちのバカカップルの馴れ初め話に含まれますが、お話し  
する事にしましょう」

ああ、こっち無視で話進めるつもりですか！。

こうなったらもう制止しても無駄なので、成り行きに任せる事によろ。

「全ての始まりは……あの日、陸斗がある巫女を幻想郷に連れ帰ってきた事から始まりました」

## 第77話：過去への入り口（後書き）

というわけで、次回から過去編へ入ります。

基本的に幻想郷編なので、登場するのは大半が東方キャラです。

## 第78話：瑪瑙（前書き）

というわけで、過去編へ突入します。  
今回ちょっと捏造が混じりますのでご注意ください。

## 第78話：瑪瑙

〔Side Other〕

—— 136年前、1867年11月

中庭では、一心不乱に素振りを行う若い男性の姿が見られ、黒衣に身を包んだ青年がそれを眺めていた。

素振りにさしたる意味は無い。それでも、身体を動かさなければ気が紛らわせない。

その事は両者共に分かっている。男性が気が済むまで素振りを行い、木刀の動きが止まったのを見越して、青年は声をかけた。

「……で、気は済んだか？ 慶喜」

「既に心は決まっている。それに……最初から分かっていた」

苦々しくも、納得したような顔で男性は言い放つ。

「民衆は徳川の世を望んでいない。このまま徹底抗戦したところで、結果はたかが知れている」

「……ああ」

明日、政権は朝廷へと返される。

それはつまり、200年余り続いた徳川の天下が終わる事を意味している。

彼にとって、それは正直どうでもいい事だった。

新政府が自分達にとって害悪を為す存在であるなら、容赦なく潰せばいい。

「風峰、1つ頼みがある」

「俺に頼みとは……珍しいな。何だ？」

「会津に1人、巫女が匿われている。その巫女を守って欲しい」

慶喜のその言葉に、陸斗は眉をひそめた。

彼の性格はよく知っている。たかが女1人のため、自分に頼むとは考えにくい。

「何者だ？」

「……博麗一族の末裔、そういえば分かるだろう」

そう言う事か、と陸斗は内心呟いた。

現在、日本全国の呪術師達を統括している陰陽師の一門「近衛」。かつて、その近衛一族と長きにわたり頂点を競い合ったもう1つの一族。

極めて強い霊力を宿し、退魔にその力を発揮した「陰陽の博麗一族」。

半世紀以上も前に近衛との権力争いに敗れ、歴史から姿を消したとされていたが……。

「生き残りがいたのか？」

「らしい」

「らしいって……」

「俺も実際に顔を見たわけではない。博麗の力の恐ろしさは、“人に非ず身”であるお前がよく知っているだろう？」

慶喜の問いかけに対し、陸斗は無言で以て「是」と応えた。

博麗の力の恐ろしさは、何よりも人外存在への攻撃力にある。

陸斗自身、何度か博麗の霊力者と戦った経験はあるだけに、その恐ろしさは身を以て知っていた。

その力を利用しようと企み、数少ない生き残りを匿う者がいてもお

かしくない。

「……………てか、何で俺なんだ？ そりゃあ、お前が駄目なのは分かるが」

これからの慶喜に待っているのは、新政府の監視下に置かれる生活だ。

並の人間以上の生活は送れるだろうが、間違いなく終生に渡って監視される。

もしも、新政府の中に「博麗」を利用しようとする輩がいれば、まずアウトだ。

「お前達の“隠れ里”なら守れるだろう？」

「……………まあ、確かに」

そこはある意味、別の世界だと形容してもいい。

幻想が消えつつある今世の中、滅びる事無く幻想に生きる者達が根付いている。

それこそが“幻想郷”。妖怪である陸斗はもちろん、人とは相容れぬ者達にとっての、最後の楽園であった。

「これはお前の友人<sup>とも</sup>としての、最初で最後の頼みだ。……………彼女を守って欲しい」

「……………」

陸斗は少し、迷っていた。

数少ない“人間”の友人の頼みは聞き届けたい。目の前の男はそれだけ希有な存在である事は常々承知している。

しかし、それ以上に「博麗」の恐ろしさは身を以て知っていた。

その最後の生き残りやらが、自分達に害悪をもたらす存在であっ

たら……………？

「……………まずはその巫女とやらに会ってからだ」

それから陸斗の行動は素早かった。

夜が明ける前に会津へと飛び、2時間後には匿われているという屋敷へと潜入していた。

いくら幕府側とはいえ、陸斗は幕府に属しているわけではない。出来る限り見つからぬように動く必要があった。

そして、誰かが囚われていると思わしき、座敷牢にまでたどり着いた。

「……………どなた、かしら？」

座敷牢の中にいたのは、白装束に身を包んだ少女だった。

青空のように鮮やかな空色の髪に、艶やかな漆黒の瞳。思わず、その姿を目の当たりにした陸斗は息を呑んだ。

「1つ聞きたい。君は「博麗」か？」

「ええ。確かに私は「博麗」よ。それでそんな私に何の様かしら？  
妖怪さん」

柔和な笑みを浮かべながら、彼女はそう答えた。

姿形は人間と相違ない。妖力もほとんど抑えており、並の人間には決して気づかれない。

しかし、相手は博麗の人間。少なくとも並の人間ではない。

「……………」

最初は、様子を見るだけだった。

(……………美しい)

だが陸斗は、彼女に一目で心奪われていた。彼女を見た瞬間、既に彼の行動は決定され、その言葉を紡ぎ出す。

「旧友の頼みで、君を迎えに来た」

「あら、私を？」

ふと、陸斗の脳裏に閃くイメージがあった。ちょうどこれと同じ光景で、自分の行動にもそれほど相違ない。

「……………いや、君を盗みに来た」

そう告げると、彼女は意地悪な笑みを浮かべた。

「じゃあ、あなたは泥棒さんなのかしら？」

「ああ。……………どうかお嬢さん、この泥棒に盗まれてやってはくれませんか？」

すつと膝を突き、そう請う陸斗。

……………少女は少しの間考えていたようだったが、徐ろに座敷牢から自ら出てくる。

自分で出られるのか、と陸斗は内心呟いた。

「それでお嬢さん、お名前は？」

「瑪瑙よ。博麗瑪瑙」

[Side Out]

[Side Rikuto]

「陰陽の博麗一族。……その名の由来は、一族に伝わる秘法『陰陽玉』にある」

幻想郷の外れに新しく建てられた神社……その名も「博麗神社」。元々幻想郷には神社が無く、その内必要になるとは思っていたが、今回瑪瑙を連れ帰った事がきっかけで建設された。

……建設者が人間で良かった。鬼だったら後で酒盛りに付き合わないといかん。

「陰陽玉は、博麗一族でも限られた者にしか扱えない。それ故に、一族内でも争いは絶えず、そこを近衛家に突かれた……だったか？」  
「まあ、そんなところかしら」

炬燵で身体を温めながら、帳簿を纏めていた瑪瑙がそう答える。

陰陽玉に秘められた力は凄まじいの一言に尽きる。俺も何度か陰陽玉の力を目の当たりにした事はあるが……正直、もう2度と相手にしたくない。

とにかく、今言えるのは既に博麗一族は滅びている事と、生き残りは瑪瑙しかない事。そしてその陰陽玉が現在、俺の手の中にある事だ。

……まあ、俺が触ってもうんともすんとも言わないんだが。

「当然よ。正当な博麗の血を引く者でなければ、それは扱えない。それも、極めて強い霊力を持つ者でしか、ね。だからほら」

すっと瑪瑙が指を動かすと、俺の手から陰陽玉が浮かび上がり、自在に宙を舞う。

「……とは言っても、私でも陰陽玉の力は完全には引き出せないんだけど」

苦笑しつつ、そう教えてくれる瑪瑙。

……そんな彼女が、とても愛おしかった。

運命だったのかもしれない。

人と妖怪。退治する者と退治される者。守られる者と守る者。

相反する存在でありながら、俺たちは自然と気が合い、気がつくお互いに側にいた。

そして、自然と愛し合っていた。

「あら可愛い」

「なんだ、今頃来たのか」

突然、空間を裂いて現れたのは紫。

……お前、ここ数年どこ行ってたんだ。

「女には色々あるものなのよ。……抱かせてもらってもいいかしら？」

「…………ほら、気をつけろよ」

そつと、自分が抱えていたそれを、紫へと丁寧に抱かせる。

……この子は瑪瑙の形質を受け継いでいる。

俺の能力は一切受け継がず、瑪瑙の“博麗”としての力をそのまま受け継いで生まれてきた。……髪だけは俺と同じだが。

「この子の名前は？」

「靈夜。博麗靈夜、だ」

今はもう、どこにいるのか分からない……たった1人の妹の名前。

この子の名前は、俺が付けた。

「あら、八雲様。ご無沙汰してます」

と、襖を開けて瑠璃が部屋に戻ってきた。

その腕には、もう1人……赤ん坊が抱かれている。

それを見て紫は、ちよつと驚いたような顔になった。

「双子、だったの？」

「はい。……この子は結千流と申します」

霊夜が“人間”であるのに対し、ゆちるは“妖怪”の力を濃く引いて生まれてきた。

瞳は俺と同じで、髪の毛は母親譲り。将来、どちらに似てくれるか不安だが。

……で、お前何しに来たんだ？

「例の計画、もう少ししたら進めようと思って」

「……大結界計画、か」

現在、幻想郷は「幻と実体の境界」によってバランスを保つと同時に、外から不用意なものが入り込まないように守られている。

しかし近年、所謂神隠しなどでこちら側に迷い込む者達が多発している。運が悪ければたれ死んだり、妖怪に喰われたりして死んでしまつが、運が良ければ俺たちに発見され、外へと送り返される。

……正直、後始末が面倒くさくて仕方ない。

そこで提案されたのが、幻想郷全体に結界を展開する案。

外の世界と幻想郷の「常識」と「非常識」とを分け、外の世界の「常識」を幻想郷の「非常識」に、外の世界の「非常識」を幻想郷の「常識」の側に置くというもの。

幻想郷を守るための、強い結界だ。

「だが、あれはまだ机上の空論。こちら側おれたちの者達だけじゃ、あんなの作り出せない」

「……………近衛の力が借りられるかもしれない、と言ったら？」

ぴくり、と瑪瑙の表情に反応が出た。

しかしそれは一瞬だけの事で、すぐにいつも通りのそれへと戻る。

「分家の人間だけど、極めて強い霊力を持って生まれた子供がいるのよ。おまけに両親はいない」

要するにその子供をうまく育てて、こちらに協力させようって事があわよくば、近衛家の当主……………西の長の座に据える事も想定してるんだらう。

「……………相変わらずえげつないな」

「あら、効率のいい方法を考えてると言ってくれない？」

……………言い方って便利だな。

「それで、その子の名前は？」

「凜音よ、近衛凜音」

それを聞いて、瑪瑙と顔を見合わせる。

彼女としても心中複雑だらう。……………何せ、自分の仇である一族の人間の力を借りる事になるのだから。

「……………私は、構いませんよ。幻想郷のためですから」  
「だとさ」

俺としても、瑪瑙がこう言うのだから反対する理由も無い。  
紫の計画とやらに乗る事にした。

[Side Out]

[Side Setsuna]

風峰先生の……奥方。

永江さんを迎える前に、前妻がおられたとは。

「無理ありませんね。……この子、そついった事は普段、あまり  
口にしませんから」

「言われてみれば……」

奥方がいる事が発覚した際も、生徒からの質問に答えた時だったか。

そういった浮ついた噂とも無縁の様だし、生徒もあまり質問出来ないのかもしれない。

（人と妖怪の子供……）

ふと、ゆちるさんの方を見た。

私と同じく、人でないモノの血を引く存在。

「師匠の、お母さん……」

アーニヤさんも感慨深く、呟いている。

……母親の記憶は私には無い。物心つく前に両親はこの世を去り、私は烏族の里で幼少期を過ごし……その後、長に拾われた。だから私は、両親というものがよく分からない。

「随分と、懐かしそうに話すんですね」

「……もう、100年以上も昔の話ですから」

悲しそうにそう語る閻魔様。

そうか、ならば瑪瑙なる女性ももうこの世にはいない。

……確か以前、永江さんが馴れ初めのような事を語ってくれた事があったな。

右も左も分からぬ幼い頃、頭を撫でてもらった……と。

「大結界が作られ、幻想郷は時折異変が起きつつも、平穏に満ちていました。……そんな時でしたね、博麗瑪瑙が病に倒れ、この世を去ったのは」

「……………！？」

悲痛な顔でそれを告げる閻魔様。風峰先生の表情も、重い。

「…………その気になれば、彼女は生き延びる事が出来ました」

「なら、どうして…………」

「生き延びる方法はただ1つ。人間を捨て、妖怪としての転生です」

その言葉に、私は凍り付いた。

「では、瑪瑙さんは…………」

「彼女は人間のまま、死を迎える事を選びました」

その言葉に、どこか納得したような表情になるレイヤさん。

「なお、それからしばらくの間、陸斗は落ち込み状態に陥りました」

「…………もう、忘れてくれ。その時期の事は」

どうも、風峰先生にとっては忘れたい過去らしく、明後日の方向を向いている。

…………永江さんから聞いた話を総合すると、その時期のはずだったか？ 2人が再会したのは。

「2人が急速に惹かれ合うきっかけとなったのが……………今から50年ほど前に起きた、ある事件がきっかけでした」

そうして、再び閻魔様は語り始めた。

1人の少女が罪を背負った、ある悲しい事件の事を……………。

## 第79話：紅に染まる明日

〔Side Rikuto〕

「…………泣いているのか？」

俺は静かに、そう尋ねた。

震える衣玖をそっと制止し、目の前に立つ少女に視線を向ける。

…………彩色豊かなその衣服と、桃を乗せたその帽子も、今はただ赤に塗れている。

「…………どうして、そう思うの？」

「なんとなくだ」

そう、深く考えたわけじゃない。

ただ無言で、無表情で、自分が斬り殺したモノ達を見下ろしている姿が、俺の目には痛々しく映った。

だから、自然とその質問が俺の口から飛び出していた。

「泣いてないわ。…………泣いてるとすれば、それはあなたの心だと思っ  
思う」

「そうか」

それなら、いい。

「…………何故、ですか」

青い顔で震えながら、衣玖はその言葉を搾り出そうとしていた。

…………彼女の事を想うと、感情が暗く落ち込む。

衣玖にとってしてみれば、理解出来ないだろう。彼女がここまでする事は無かった、と。

確かにそれは正論だろうが、それでも天子にとってしてみれば、やはり我慢ならない事だったのかもしれない。自分と完全に無関係、とは言えないのだから。

「衣玖が気に病む事無いわ。これは、天人の問題だから」

「ッ！ ですが……！」

「だからね」

無理矢理に、天子は衣玖の言葉を遮った。

「これは、私が背負うべき罪よ」

そう言つて、天子は微笑んだ。

その笑みは、俺たちがこれまで見てきた彼女の笑顔の中で、最も美しく思えた。

[Side Out]

—— 1 週間前

〔Side Iku〕

「はあ……肩凝った」

「お疲れ様です、天子様」

今日の分の勉強を終え、ぐっつと背伸びする天子様。

ちよつと前まではサボりがちだったけれど、最近はいっさり勉強に身を入れてくれるようになってくれた。

お目付役であるこの私、永江衣玖としても喜ばしい事です。

「しかし、何故」

「……まあ、色々あるのよ」

私の問いかけに、ちよつとだけ沈んだ声で答える天子様。

この方がそうなった理由には、私も心当たりがある。

……ここ最近、総領様……天子様のお父様を含む、天界上層部の怠慢が目立ち始めている。

今現在、天界はどうか持ち堪えている、という状態だが、今のままが続けば今後どうなるかが分からない。

だからこそ、天子様も心を痛めているのでしょう。

「ねえ、今日の分はこれで終わりなのよね？」

「ええ」

「じゃあ、いつも通り地上に降りない？」

地上に……………ですか？

ですが、総領様にも止められておりますし……………。

「無視よ無視。それに衣玖だつて行きたいんじゃない？」

「と言いますと？」

「私が地上に降りる名目で、陸斗に会いに行きたいんでしょ？」

な、ななななななななな！？

何故！ そ、そこで陸斗様の名前が出てくるのですか！！

「だってあなた、陸斗にホの字じゃない」

そんな事ありません！！ わ、私はそんな……………り、陸斗様になど、恐れ多くて……………！

「……………普段クールなのに、陸斗絡みになると冷静さが吹っ飛んじやうのよねえ……………衣玖って」

天子様は何か言っているが、まったく聞こえない。

……………風峰陸斗様。幻想郷でも数少ない最高クラスの妖怪で、博麗大結界創建にも携わったという賢者の１人。

私にとつて、遙か雲の上のお方。ほほ、ほ惚れるなんて、そんな……………。

「まあ、嫌っていうんなら無理強いはいしなけれど……………」

「天子様お１人で行かせるわけにはいきません。私もご同行させていただきます」

「……………ほらね」

[Side Out]

[Side Yukari]

博麗神社の裏にある、とある墓石の前。

そこで私は1人、佇んでいた。

目の前の墓の中で眠っているのは、かつて陸斗が最も愛した相手。

彼女がいたからこそ、今日の幻想郷が在る。……私たちが最も感謝しなければならぬ相手。

「…………でもね、瑪瑙」

あなたが逝ってから、もう半世紀近くが経つけれど……未だに陸斗はあなたに囚われている。

あなたとの愛が大きすぎたからこそ、陸斗は未来を歩く事が出来ずにいる。

……極めつけに、死ぬ間際がアレだったからね。

『私の事は、忘れてください』

そう言い遣し、あなたは人間を捨てずに人間のまま逝った。

あなたの事だから、本当に自分の事は忘れて幸せになって欲しい。  
だから陸斗にそう言ったんだろうけど……。

普通、あんな言い方されたら逆に忘れられないと思うわよ？

「実際、未だに引きずり続けてるからねえ……」

半世紀。妖怪である私たちにとってしてみれば、それほど大した事の無い時間。

……それでも、陸斗はあなたを忘れる事が出来ず、あなたに囚われたまま、この半世紀を過ごしてきている。

“委員会”もあの手この手でアタックしているけど……効果は薄い。

むしろ、陸斗本人も気づいてはいるんでしょう。気づいていてスル―するのは、さらにタチが悪いと思うけどね。

「母親としては新しい恋を受け入れて欲しいんだけど」

いや、あなただっただけであれを見ていたら同じ事を考えると思うわよ？  
もどかしいったらありやしない。……どうにかしてあげたいけど、  
陸斗があんな調子だから……。

「じゃ、またその内愚痴りに来るから」

近頃だと、藍も式の世話に付きつきりで愚痴の1つも聞いてくれない。

幽々子も新しい庭師が来たばかりだから、てんやわんや……。あなたぐらいしかないのよ、私の愚痴を聞いてくれるのは。言いたい事を言って神社に戻ると、そこにはいつも通りの面々が揃っていた。

「ちょっと待つてろ。今、茶淹れるから」  
「お、おおお構いなく！」

いつも通りの陸斗に、真つ赤な顔になってしどろもどろに対応する竜宮の遣い……。永江衣玖。  
……。いやあ、やっぱり春ねえ……。

「今は秋でしょ。それも冷え込み始めてるし」  
「そういう意味で言っただけじゃ無いわよ」

少しは空気読みなさいよ、この不良天人。

「ま、それはいいんだけどさ。……どう思う？ あの人」  
「どうって……」

まあ、衣玖は完全にアレでしょ？ 問題は陸斗よ。  
私はあの子とは長い付き合いだから分かるんだけど、あの子も衣玖の事は悪く思っただけ……。寧ろ、好意に値する相手だと思ってるんじゃないかしらね。  
もちろん、陸斗は瑪瑙の事もあるから踏み出せずにいる。……それはいつもの事だけ。

「陸斗ってほら……。結構押しに弱そうだし、酒の勢いで迫ったら受け入れてくれそうだけど」  
「前にどこぞの天狗がそれで迫ったけど、酔い潰れて看病されてた

わね」

お酒で弱るのを見計らってたんだろうけど、逆に潰れてちゃ世話無いと思うわ。

……………そもそも衣玖って、そこまでお酒強いのかしら？

どちらにせよ、陸斗はそーゆー事で靡いたりしないと思うわ。

「……………てゆーかさ、いつもあんな調子で女の子の好意スルーしてるんでしょ？　なんか腹立つんだけど」

「奇遇ね。私も母親として、あの子のヘタレ具合には溜まってるものがあるものよ」

「嘔吐きなさい。あんだ、陸斗の世話は自分に任せっぱなしだったって、この前あんだの式が言ってたわよ」

……………藍、帰ったらモップの刑。

「それはさておき、本当にどうにかした方がいいんじゃない？　あの調子じゃ、もう100年経っても憑かず離れずの関係が続きそうで嫌なんだけど」

それもそうなのよねえ。

とはいえ、こればかりは私たちがどうこう言っても、本人達の心の問題だし……………。

多分、納得は出来ていても理解は出来ていない。そんな状態なのよ、あの子。

「陸斗も衣玖の事は憎からず想っている。あの様子から、丸わかりでしょ？」

陸斗からお茶を受け取ろうとして、滑って頭からお茶を被る衣玖。

慌ててそれを拭こうとして目が合い、頬を赤らめて視線をそらす人。

「……………確かに」

でも、陸斗は決してその1歩を踏み出そうとはしない。

衣玖もそれは同じ。……………瑪瑙という最愛の相手がいた事を、彼女は知っているから。

「……………ヤマアラシのジレンマ」

「何ソレ」

「ヤマアラシは身体に針が生えている。身体を寄り添おうとしても針が邪魔で寄り添えない。……………だから針が刺さらない、絶妙の位置を探している」

あの2人も、お互いが傷つかない微妙な距離をとり続けているのかもしれない。

それ故に、2人の恋は始まらないし、決して終わりを迎える事は無い。

何かきっかけさえあれば、爆発的に加速すると思うんだけど……………。

「きっかけ、ねえ……………」

こうして天人や陸斗達と過ごす時間が、何よりも楽しい時間だった。

……………思えばこの時、既に事態は動き始めていたのかもしれない。

あの悲しくも残酷な結末を迎える事件。……………それこそが、陸斗と衣玖にとつての“ビギンズナイト”とも呼べる、きっかけだったのだろう。

それが始まりを告げたのは、彼女達が帰っていった後、私と陸斗が閻魔様に呼び出された時だった。

[Side Out]

[Side Tenshi]

やっぱりいいわね、地上は。

陸斗のお茶は美味しいし、神社ものどかし……天界とは大違い。  
衣玖だって、陸斗と会えたから機嫌いいし。

「て、天子様！ 何を仰っているのです！」

「見たままの事を正直に言っているだけけど？」

もっと素直になればいいのに、ねえ？

衣玖が陸斗に心底惚れてるって事は、幻想郷の誰もが知ってるわよ。  
この前、天狗の新聞にも載ってたし。悪意8割増しで。

「私は……そんな」

「本気で好きなんでしょ？ 陸斗の事」

「……………」

衣玖が陸斗と初めて出会った頃の事は、前に聞いた事がある。

まだ衣玖が小さかった頃、親と一緒に雲の中を飛んでいて、たまたま飛んでいた陸斗と遭遇した。

この頃、陸斗はまだ奥さんとは結婚していなくて、自由気ままな暮らしをしていたとかしていなかったとか。

そして次に出会ったのが、忘れもしない。その時は私も隣にいた。私が天界に上がってからしばらくして、世話役選ばれた衣玖に我儘言つて、無理矢理地上に連れて行ってもらった。

どうしても天界の暮らしには馴染めずに、思い出の詰まった地上を一目でいいから見たい、と。

そして……あれを見た。

『ほらほらほら、早く避けないと押し潰されちゃうわよ？』

『うつさい！ だったらこんな大量に花びら出してくるな！ 圧死させるつもりか！』

そんな物騒な会話とは裏腹に、その光景はとても綺麗だった。

飛び交い、弾ける弾幕。とても儚げで……今も脳裏に焼き付いている。

それからなんだかんだで付き合いが始まって、私たちは仲良くなつて、衣玖が陸斗に急速に惚れて……。

「……………怖い、のかもしれない」

「え？」

「ぬるま湯に浸かっているかのように、心地良い今の時間が、何か

の拍子で壊れてしまうのが……私は恐れているのかもしれませんが」

……まあ、想いを口にすれば、関係は間違いなく変わる。

それこそ、昨日までの関係ではいられない。

でもさ、ずっと永遠に友達なんて虚しすぎると思うんだけど？

「分かっています。分かっては………いるんです。でも………」

博麗神社の方を見つめて、ぽつりと呟く。

「私がいくら足掻いても、博麗瑪瑙の遺した愛には勝てないじゃないでしょうか？」

「衣玖………」

[Side Out]

〔Side Eiki〕

これは、どういう事でしょうか？

いつものように書類を整理していると、どうにも帳尻が合わない。単刀直入に分かりやすく言うと、報告に挙げられている魂の数と、実際の数が合わない。

（……………小町の悪い癖でしょうか？）

完全に否定出来ないのが、私としても悲しいところです。

あの子の悪い癖、それはサボリ魔だという事。

もっとスピーディに三途の川を渡してくれれば、効率よく裁けるんですけどねえ…………。

近頃じゃ陸斗から「サボタージユの泰斗」なんて呼ばれてるようですし。…………最初に見た時は、もっと真面目な子だと思ってたんですが。

（いえ、小町じゃありませんね）

確かにサボリ癖があるのは否定出来ないけれど、あの子はいい加減に仕事をするような子じゃない。

時間はかかっているけど、しっかりと与えられた仕事はこなしている。……………もっと真面目にやってくればいいのに。

だとすると、何故合わないのでしょうか？

「少し、調べてみる必要があるようですね……………」

とはいえ、私はここから動けませんし、死神に調査を頼むわけにもいかない。

となると……………自ずと頼める相手というのも限られて来るわけです。

……彼らにしますか。

「誰か、八雲紫と風峰陸斗を呼んでください」

多分、今の時間なら2人とも神社にいると思うので。

そんな私の言葉に従い、死神が1人冥界から飛んでいった。

……嫌な予感が、します。

言葉では言い表せないけれども、どことなく嫌な予感が私の本能を刺激している。

出来る限り早く、あの2人に調査をお願いする事にしましょう。

……そう、もしかしたらこの時、私は選択を誤っていたのかもしれない。

陸斗に調査を頼まなければ、彼女が罪を背負う事にもならなかっただろうし、悲しい結末を迎える事も無かった。

けれど、それが巡り巡って“今”の時間へと繋がっている。

この選択が正しかったのか……その答えは、誰も知らない。

## 第80話：ピギンスナイト（前書き）

なんだかんだで80話突破です。

これも皆さんの応援あつての事……ありがとうございます。

過去編はあと2、3話くらい続くのでよろしくお願いします。

## 第80話：ピギンズナイト

「Side Rikuto」

閻魔様から調査依頼を受け、調べ始めた俺たち。

とはいえ、紫は頭脳派（自称）らしく、実際には動くのは俺だけ。まあ、そんな感じで調べ始めたわけなんだが……。

「……確かに、おかしいわね」

俺の調べた結果を見つつ、そう呟く紫。

閻魔様も言っていた通り、書類上の魂の数と、実際に冥界へ来ている魂の数が合わない。

具体的に言つと、書類に記載されている数よりも幾分か多い。しかし………いったい何故？

「単なる数え違いって言うのは」

「あり得ないわ。細かい数なら分からなくはないけど、これは異常よ」

確かに、なあ。

今回は明らかに数値以上の誤差が出ている。だとすると、原因はいったい何なんだ？

「魂の数………死神が無関係とは言えないかもしれないわね」  
「死神、か」

確かに魂を刈り取り、それを冥界まで運搬するのは死神の役目だ。………あまりいい予感はないが、調べてみるか。

「ところで陸斗、ちょっといいかしら？」

「なんだ？」

「……………衣玖の事よ」

そう言われて、一瞬心臓が鷲掴みにされたような感覚を感じた。

「あの子、本当にいい子よ。あなたの事をいつも真っ直ぐ見つめて  
いる」

「……………何が言いたい」

「あなただって、分かっているんでしょ？ あの子があなたを慕っ  
てる事くらい」

……………ああ。

その好意がLikeじゃなく、Loveである事くらい、いくら鈍  
感な俺にだって分かってている。

だが、俺は彼女の気持ちに応える事は出来ない。

「やっぱり、瑠璃の事かしら？」

「……………」

そう、なるのかもしれない。

もしもここで衣玖の事を受け入れれば、それは瑠璃を裏切った事にな  
る。

いや、瑠璃はそんな事を裏切りとは思わないかもしれない。あれは  
限りなく優しい女だった。

……………それこそ「現地妻」を名乗る天狗や厄神を、にこにこ微笑みな  
がら受け入れるほどに（その辺りはやめて欲しかった）。

だが、俺はやはり彼女を受け入れられないと思う。

「受け入れたら、忘れてしまふかもしれないから」

人と妖怪の運命。それはいずれ、寿命によって別たれる事が決められている事。

俺たちの別れも最初から決まっていた。そして瑪瑙は、最初からそれを受け入れていた。受け入れて、その上で俺と共に歩んでくれた。……それを忘れてしまいそうで、怖いんだ。

「仮定の話をしてもし方がないでしょ？ それ以上に、彼女の想いを蔑ろにするつもり？」

「分かっちゃ、いるさ。……でも」

やっぱり俺は、自分からは踏み出せないと思う。  
500年以上生きてきて、情けないものだよな。

「……まあ、気持ちは分からないでもないけど」

事実、目の前のスキマ妖怪は俺よりもさらに年上だ。  
前に泥酔した際、「幽々子とは、あの子が生きてた頃から知り合いなのよ」とかボヤいていたので、少なくとも1000歳は超えているはず。

俺の2倍以上生きているのだから、俺以上に出会いや別れも経験しているだろうし、恋の1つや2つもしてるだろう。

……まあ、あまり聞きたいとは思わないが。

「あら、どうして？」

「お前の話に信憑性は無い」

幻想郷で最も信用出来ない妖怪といったら、お前が上位に食い込むのは間違いない。

以前、口先三寸で俺を騙して、月へ突貫させたのを忘れたのか？  
兎に追われるわ、月のお姫様とはガチで殺り合っわ、碌な目に遭わ  
なかった。

そう言つてやると、明後日の方を向いた拳げ匂に扇で顔を隠す。

「……………そんな事あつたかしら？」

忘れたならそれでいい。つーか、思い出させるな。  
俺はもう2度と、月には行かんぞ。

……………なお、再び紫の口先三寸で月へ飛ばされ、巫女達だけでなく、  
うちの妹や時の列車を巻き込んだ珍騒動を繰り広げる事になるのは、  
50年以上も先の話だ。

[Side Out]

[Side Yukari]

……これは、よろしくないわね。

陸斗も衣玖も肝心な1歩を踏み出せずにいるし、これだと本当に100年経つても憑かず離れずかも。

（まあ、大きな原因は陸斗がヘタレなただけだけど）

ほら、衣玖ってばスタイル抜群で、胸だって私より大きいし、ウエストだっていい具合にくびれて……。

普通の男だったら、間違いなく前屈みになってもおかしくない。

それでもあんまり靡かないのが、陸斗らしいと言えば陸斗らしいのだけどねえ……。

「……………いつそのこと、押し倒せて助言しようかしら」

「なんか言ったか？」

「何でもないわ」

何気なく言葉にしたけど、これいいかもしれない。

もちろんお酒は無し。想いのままにぶつかれて言えば突進するでしょ。

でも、陸斗の事だから押し倒されても行動に移らなかつたりして。

（……………いや、考えてて何だけど、あり得るのが怖い）

え、もしそうになったら？

とりあえず、閻魔様や藍も引き連れて、陸斗はフルボッコね。

[Side Out]

〔Side Leiya〕

こ、これまたぶっ飛んでたんですね…………。

ああ、そう言えば温泉でフルボッコにされてたとかどうとか言っていましたっけ。

「…………それからしばらくして、陸斗達は真実を探り出しました」  
「真実……………」

確か衣玖さんの話では、天界の不祥事…………とか。  
魂と天界。言葉にしても、関係があるように思えないのですか？

「天人は、決して死が訪れないというわけではありません。死期が近づく度に死神が魂を刈り取りに訪れますが、天人達はそれを撃退し、死をはね除けています」

「な、何て言うか…………嫌われそうですね、それ」

「ええ、実際に死神達は天人を嫌っています」

普通に考えて、私だったら嫌です。

「調査の結果、発覚したのは天界上層部と一部の死神達との裏取引。……死を見逃す代わりに、他者の魂を差し出すというものでした」  
「なっ……………!？」

これには私だけでなく、刹那さんや木乃香さんでさえもが驚愕する。じ、実力で死神を追い払うならともかく、他の人を犠牲にして生き長らえるなんて……………!

「犠牲となっていたのは、本来死ぬはずの無かった下界の人々。……陸斗達も相次いでいた不審死に気づき、ようやくそれにたどり着いたのです」

当事者である兄さん達の顔は暗い。

話をこうして聞いている私たちとは違い、実際にその渦中にいたのだから、どうしてもやるせない想いがあるのでしょうか？

「……………話を元に戻しましょう。陸斗達から報告を受け取った私は、すぐさま裏取引に関わっていた死神達を処罰し、天界にもそれに関して抗議……………しようと思いました」  
「しようとして、した？」

何故だろう、今の閻魔様の言葉のニュアンスからは、不吉な響きが感じられたのは。

天界に抗議しようとして、何かが起きた？

……………何か、嫌な予感がする。

「死神達の処罰に追われ、私も陸斗達も失念していたのです。……

…事態発覚に気づいた天界側から、比那名居天子に事態が伝わっていた事に、私たちは気づけませんでした」

天子さんにも、伝わった…………。

ちよつと待つてください。その裏取引に天子さんは？

「関わっていません。…………あくまで彼女自身は、ですが」

今の言い方からするに、天子さんに近い方。家族や親戚が関わっていたのかもしれない。

それを天子さんが知ったとしたら、どんな行動に出るのか。

私だったならば…………もしも、私が天子さんの立場だったならば、きつと許せない。

「…………まさか」

「そのまさか、です」

真実を知った天子さんの行動。それは…………。

「そして、あの夜へと繋がったのです」

[Side Out]

「Side Tenshi」

……私の足下には、物言わぬ肉の塊が転がっている。  
身体中には赤い液体が跳ねているけど、今日はそれほど気にならない。  
蔵から持ち出した秘宝……緋想の剣を一振るいし、刀身に付いた血を払う。

「……………これで、よかったのよ」

おそらく、冥界の下すであろう判断も似たようなものだったから。  
他者に処断を任せるくらいならば、私が全ての幕を引いた方がずつとマシ。

色々「不良天人」とか呼ばれてるけど、それでも天人である事には誇りがある。……………これでよかった。というより、私はこうしなければならなかった。

……………この恥知らず共を処断するのは、同じ天人である私の役目だから。

「天子！」

そう言って屋敷に入ってきたのは、陸斗だった。その後ろからは衣玖の姿も見えた。

血にまみれた私の姿を見て、衣玖の表情が青白いものへと変わる。  
……また、心配かけちゃったかも、ね。

「……………泣いているのか？」

……………どうして、そう思うの？

少なくとも、自分が泣いているとは思っていないのだけど。

「なんとなくだ」

どうかしらね。確かに、お父様を斬った時は悲しかったのかもしれない。泣いていたかもしれない。

でも、他の人達も斬っていく内に、そんな心はどこかへ吹き飛んでしまった。悲しくも何ともなかったから。

だから私は泣いていない。涙を流す資格なんて、私には無いのだから。

「泣いてないわ。……………泣いてるとすれば、それはあなたの心だと思っ」

そう言うと、陸斗はどこか納得したような表情を浮かべる。

「そうか」

「……………何故、ですか」

青い顔で震えながら、衣玖がその言葉をひねり出す。  
陸斗はともかく、あなたは納得出来ないでしょうね。

……………心配や迷惑ばかりかけてごめんなさい。思えば、あなたが世話役になってから苦勞をかけたっぱなしだったっけ。

でも、こればかりは譲るつもりは無かったし、止まるつもりもさら

さら無かった。

「衣玖が気に病む事無いわ。これは、天人の問題だから」

「ッ！ ですが……！」

「だからね」

無理矢理にでも、微笑む。

「これは、私が背負うべき罪よ」

[Side Out]

[Side Iku]

目の前が真っ暗になった。まるで、地獄に突き落とされたかのように。

……嘘だと、思いたかった。

だけど、天子様はそれを肯定して、ただ微笑んで……。

呆然となった私を、陸斗様は神社に引っ張って、それからずっと

「……閻魔様から。天子は向こうで大人しくしてるって」

天子様はあの後、冥界から来た者達によって拘束され、連れて行かれた。

如何なる理由があつたにしても、裁かれるはずだった者達を殺し、それで無罪で済むはずが無い。

古の時代、親殺しは禁忌中の禁忌とされた。今の時代、そんな事は無い……と、思いたい。

「天子様は、どうなるのですか？」

「分からない。今、冥界でも判断が真つ二つに割れているらしい」

おそらくは、天子様を肯定する派と否定する派。

肯定派が勝れば、そこまで重い罪にはならないはず。けれど、否定派が勝れば……それこそ極刑もあり得るかもしれない。

どうしても納得出来ない。天子様があのような行動を取った事が、どうしても納得出来ない。

何故、のですか。何故ご自分だけでそんな事を……。

「決まってる。お前を巻き込まないためだ」

「え………？」

「もしも、お前が天子と一緒に天人を殺してみろ。天子はともかく、お前は間違いなく重罪に処せられる。それこそ、数百年単位での収監は間違いない。……下手をすれば、極刑も考えられる」

むしろ、同族である天子様だからこそ、軽く済むのかもしれない。

竜宮りゅうぐうの遣いである私と、天人とでは位が違いすぎる。それこそ、天と地ほどに。

もし、私が天人を害したとなれば、陸斗様の仰る通りの刑罰が下されたかもしれない。

「それでも、私は……………」

あの方に全てを背負わせてしまうくらいならば、私が……………！

「私だけが……………何故っ！！」

刑罰が下される事ぐらい、構わなかった。

例え、その事で命が奪われようとも構わなかった。

天子様が笑っていてくれるなら、あの方が自由でいられるならば、それでよかった。

世話役として共に在り続けて、命を捨てるくらいの覚悟はとうの昔に出来ていた。

この身を盾にしても、この方なら守れるだろう、と。

そう決めていたのに。そう覚悟していたのに。なのに、どうして……………。

「……………きっとアイツも、同じだったんじゃないかな」

陸斗様は、そう言って私を抱きしめる。

この方の優しさが、温もりが、そこからすうっと伝わってくる。

「お前と同じ様に考えて、その上で……………自分で全ての罪を背負ったんだ。他の天人の罪も全部纏めて」

「……」

「泣きたいなら、泣けばいい。全部、受け止めるから」

……ああ、この方は優しすぎる。

優しすぎるから、どうしても耐えられない。もう、限界だった。

「う……あ、ああ……あああ」

涙が、あふれ出る。

もう止まらない。止めるつもりもない。

陸斗様は何も言わない。ただ、抱きしめる力が一掃強まった。

「ああ、あああ……うああああ……！！」

私は、泣き続けた。

最も愛しく人の腕の中で、陸斗様の優しさに包まれて、ただ泣き続けた。

番外編：転生兄妹IFその1「ゼロの使い魔」（前書き）

というわけで、過去編の続きを期待していた人はごめんなさい。  
前々から暖めていたアイディアの1つを公開したいと思います。

もしもあの兄妹が、「ゼロの使い魔」の世界へ転生していたら……  
…？

## 番外編：転生兄妹IFその1「ゼロの使い魔」

「……………どうしてこうなった」

青い髪の少女は、頭を抱えていた。

やや抑えめなドレスを身につけ、普段は可憐であろうその顔は、今は混乱に染まっている。

「レイヤ叔母様、どうかされましたか？」

そう問いかけたのは、彼女とそう変わらぬ年頃の少女。

「叔母様」と呼ばれた事に、レイヤはさらに顔を顰める。

「何でもありませんよ、イザベラ。……………それより叔母様はやめてください。あなたより1歳年上なだけですから」

「分かりました、レイヤ姉様」

しかし、レイヤの頭痛は止まらなかった。

この世界に生まれ落ちて10年。前世の記憶は数年前に取り戻し、その上で“神”を名乗る相手からの指令を受け取ったのだが……………。

「……………どうして私がガリア王家……………それもジョゼフ王の妹なんですか！　どんだけ無茶ぶりされてるんです！？」

レイヤ・エルリア・ド・ガリアは現国王の娘として生を受けた。彼女の上には2人の年の離れた兄があり、長兄ジョゼフと次兄シャルルの後継者争いが水面下で行われている。

とは言っても、ジョゼフはそれほど王位に興味は無いらしく、人望や魔法の才豊かなシャルルが次期国王に有望視されている。

しかし、レイヤは知っていた。シャルルが誰よりもジョゼフを高く評価しており、そんな彼に勝つために幾つもの手段を講じて、その上で王位を狙っている事を。

事実、原作でも彼は貴族に賄賂をバラ卷いていた。……………それでも王位を手に入れる事は出来なかったわけだが。

「……………とりあえず、我が兄上とohanaashiでもしますかね」

どちらもなまじ頭がいいだけに、生半可な言葉では不興を買っただけだろう。

それでも、彼女としては2人の仲違いは防ぎたい。……………このままではいずれ、自分の姪達も悲しいすれ違いを続ける事になるだろうから。

「……………なるほど。この世界についてはだいたい理解した」

分厚い書物を棚に戻し、俺は書庫を後にした。

時代としては中世ヨーロッパに近い。王侯貴族が幅を利かせており、平民が貴族の下に付いている。

……近代地球での記憶がある自分としては、どうしてもそれには疑問詞が浮かぶが。

（とはいえ、あまり下手に動くわけにも行かないか）

平民に親しみを持って接する事は、決して悪い事では無い。

しかし、あまり親しくしすぎると、それはそれで不具合が起きる。いわゆる、「調子に乗る」というヤツだ。

その辺りは上に立つ者として、うまく「飴と鞭」を使い分けていく必要がある。

（まあ、ゲルマニアやガリア辺りはそーゆー風潮があるらしいが）

風の噂だから、そこまで詳しいわけでは無い。

ゲルマニアは比較的新しい国のため、この国……トリスティンのように、腐った部分がそこまで広がっていない。

さらに新たに即位したというアルフレビト3世もなかなかのやり手だという。

それに引き替え、この国は……。

「どのみち、長くないな」

現国王は病に伏せていて、そう長くない。

王妃マリアンヌもその事に悲観していて、あの調子では喪に服したまま王位を放棄しそうな勢いだ。

王女アンリエッタも……お世辞にも政治家向きとは言えない。

今この国は、鶏の骨と擲掄されるマザリーニ枢機卿が頑張って、ど

うにか形を保てているようなものだ。

「あまりそう言った事を口に出すものではありませんよ、リクト」

「……………失礼しました、母上」

いつの間にか、自分の後ろには母が立っていた。

自分、リクト・セルベリア・フォーエンブルグの母、リアエルス・ミリエラ・フォーエンブルグ。

自分ですら、この人には畏敬の感情を抱かずにはいられない。

「今はただ、待てばいいのです。この国が墮落しきる、その時を」

我がフォーエンブルグ伯爵家は、かのヴァリエール公爵家と同じく、王の庶子。

充分に大貴族と言っているレベルではあるが、さすがに随一とは言えない。

ならば、充分に王位を継げる可能性はあり得る。

「もし仮に、アンリエッタ王女が何らかの事情で王位継承権を放棄した場合、新たに継承権が発生するのはヴァリエール家。……………年齢的に言えば、長女のエレオノールでしょうか？」

現在、ヴァリエール家には3人の娘がいる。

長女エレオノール。次女カトレア。三女ルイズ。

長女のエレオノールとは何度か顔を合わせた事があるが……………正直、あれと付き合えと言われたら嫌だ。婚約破棄を申し出た男たちには拍手したい。

次女のカトレア。母親や姉妹とは似ても似つかぬ穏やかな性格をしており、唯一難病に冒されている点を除けば、最高の女性とも言える。

そして三女のルイズ。……………彼女について、あまりいい噂を聞かない。

曰く、「魔法を使えない」らしく、かなり肩身の狭い想いをしているとか。

しかし、俺たちは彼女こそを危険視している。何故ならば……………。

「あの子同様に虚無である可能性は？」

「高いでしょうね。一切使えないんじゃない、魔法が全て爆発する。

……………<sup>エクスプロージョン</sup>虚無の呪文に、爆発と呼ばれる呪文があると聞きます」

フォーエンブルグ家の養子として迎え入れた少女、ティファニア。

彼女はエルフの愛妾を困ったとされて肅正された、モード大公の実の娘で、彼女もまた“虚無”の系統に目覚めた者でもある。

本来、アルビオン王家の血筋である彼女だが、この世界では忌み嫌われるエルフの血を引くために、迫害を受ける立場にある。

当初はアルビオン王家の人間を保護しておけば、後で色々交渉に使えるかも、という認識だったが……………まさか虚無だったとはな。

（そのおかげで、虚無についても分かった事があるわけだが）

もしも、ルイズが虚無の系統に目覚めてしまった場合、それは最悪の状況だ。

フォーエンブルグ家が永きに渡って推し進めてきた計画が全て決壊し、始祖の正当なる血統があるとバカ共が言い出すかもしれない。

これが普通の貴族なら、暗殺という手が通用するが、相手は大貴族の子女。……………やはり兼ねてからのプランで行くしかないか。

「では、学校への入学も？」

「あまり気は進みませんが、ね」

「レイヤ、どう思う？」

「“神の左手” ガンダールウ………間違いないかと」

俺たちは現在、激痛にのたまる現代少年を傍観している。

なおつい先ほど、召喚の儀が全て終わったところだ。………例のルイズが召喚したのは、見るからに人間。

しかもルーンはガンダールウ。………これだと、虚無確定か。

「とはいえ、私の持つてる知識がどこまで通用するか分かりませんよ？ 私自身が相当暴れ回ってますし」

みたいだな。

レイヤが生まれたのはガリア王家。現在、ジョゼフ王が王位に就いている。宰相は実弟のシャルル公。

こいつがガリア王家の人間だというのは周知の事実であり、国家間の交換留学生という立場で、シャルル公の娘、シャルロット姫共々

ここに来ているわけだが。

「じゃあ、俺たち以外のイレギュラーは？」

これが1番懸念すべき事だ。

俺はともかく、表向きに堂々とこっちに来ているレイヤは、間違いなくイレギュラーに目を付けられているに違いない。

「いますよ。………“爆発”のルイズの兄君です」

ずっとルイズの側に佇む、金髪の青年に目を向ける。

アーサー・リューミラー・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。…

……本来、この世界にはいないはずの存在。

1年前、カトレアの病が完治したという噂は聞いていたが……まさか、転生者が絡んでいたとはな。

「彼女の2つ名は「魔法が使えない」事から“ゼロ”のルイズでし  
たし、そもそもカトレアの病は治っていません。さらに言えば、私  
の“識る”ヴァリエール家には子息なんていませんし」  
「なるほどな」

何でも、ティファニアは1度会った事があるとか。

ヴァリエール公爵がアルビオンを訪れた際に付いてきたらしく、た  
またまモード大公の屋敷に忍び込んで来て、その時に遭遇したとか。  
あの天然200%に「何だか変な感じがして嫌だった」と言わしめ  
るほどだが………納得した。

「で、どうする？」

「明日、ギーシュとの決闘騒ぎが起きます。それからしばらくして、  
フーケが“破壊の杖”を盗む事件が起きますが………」

「ああ、フーケ、ね……………」

レイヤの視線を感じつつ、視線を明後日の方向へと向ける。

フーケこと、ミス・ロングビル……本名マチルダ・オブ・サウルゴ  
ーダは、ティファニアの“姉”である。

彼女を保護した際、一緒に保護したわけだが、それから色々表でも裏でも仕事を手伝ってもらっている。

現在、俺の補佐をしてもらうため、学園長の秘書という肩書きで学校に潜り込んでいる。確かに“破壊の杖”には興味はあったが、ロケットランチャーとなると……………。

「よし、あの手で行こう」

「あの手？」

「完璧なアリバイを作るのさ。その上で、彼女がフーケではあり得ないという状況を作る。……………アーサーがぐうの音も言えない状況を、な」

マチルダはフォーエンブルグ家にとって必要不可欠な人材だ。

もしもここでフーケとして逮捕されれば、例の計画にも大きく響いてくる。

ここでリタイアされるわけには行かないからな。

「バカですか、あなた」

これには呆れた。……いや、まさか原作通りにここまでバカやらかしてくれるとは。

私のバカ呼ばわりに、当の本人はもちろん、ピンク髪の爆発娘も憤慨している。使い魔？ ああ、いましたっけね。そんなのも。

「バカってあんた……姫様に何て事言うのよ!!」

「バカにバカと言って何が悪いんです？ ……では、ガリア王家の人間として、アンリエッタ王女に言わせてもらいます」

少しだけ真剣な目でバカ王女を見つめると、萎縮したようにビクツと震える。

……こんな事で怯んでいては、うちの国では生きていけませんよ？  
ガリア

「あなたは、戦争を起こしたいのですか？」

「なっ……わ、私はそんなつもりは……」

「現在、アルビオンはレコン・キスタとの内乱中。それも相当分が悪い。当然、治安も悪いでしょうね」

原作では全てうまくいった。だが、ハッキリ言ってそれは奇跡に等しい確率だ。

もしもウェールズ王子に発見されなかったら？ もしもレコン・キスタに捕まっていたら？

アルビオンへ行く道も自ずと限られるだろうし、内乱中の国だから検問が敷かれているのは間違いない。

「そんな国へ公爵子女を送り込み……………もし、何かあったらどうするつもりですか？」

「な、何かって……………」

「もしも彼女がアルビオンで死んだ場合、まず学生である彼女が何故アルビオンにいたのかという問題が発生します」

それはいずれ、アンリエッタ王女の“個人的なお願い”へと行き着くでしょう。

そうなれば、娘を溺愛しているヴァリエール公爵の事です。「姫様を思う娘の心」につけ込んだとして、王家を許さない。

それこそ、アルビオンに引き続き、トリステインでも内乱が起きる可能性がある。ヴァリエール公爵家は大貴族ですからね。国が真つ二つに割れますよ。

……………いえ、下手をすればアルビオンとの戦争にも発展しかねません。

（とはいえ、レコン・キスタを放置しておくのも……………ねえ）

元々、うちの兄上が“若気の至り”で小心者のオリヴァー・クロムウェルを唆したのがきっかけですから（話を聞いて、思わず殴った私は悪くない）。

どうにか和解させる事に成功させてからは、そっちの方はノータッチだったそうですけど……………レコン・キスタが内乱を起こしたと聞いて、あの人飲んでたワイン嘔き出していましたからね（事実、私もすっかり忘れてた）。

「あなたがトリステインを戦乱に巻き込んでまで、その恋文とやら

を取り戻したいのであれば……私は何も言いません。元から余所の国の事情ですし」

「……………」

「ただ1つ。そうなった場合に、常に命を落とすのは罪無き民です。無為に彼らの命を失われる事になったら……………」

本気でアンリエッタ王女を睨み付け、言い放つ。

「同じ始祖ブリミルの血を引く者として、あなたを許しません」

この人は、民の命を預かる王族という立場でありながら、想い人の仇討ちを優先させた色ボケですから。

『国は王でも土地でも無い。人だよ』と、某反逆の第二皇子も言うておられるように、私たち王族には民を守る義務が存在している。その民を危険に晒さない事こそが、我らがすべき事。

（とはいえ、どうせ行っちゃうんでしょうけどね）

アルビオンもどうせ保ちそうに無いですし、今からどうこうしても手遅れでしょう。

しかし、クロムウェルが水の精霊から盗んだ「アントバリの指輪」、王家所有の「風のルビー」と「始祖のオルゴール」は惜しい。

あの巨乳エロフ……失礼、ティファニアは今のところ「忘却」しか使えませんが、どうにかして手に入れたい。

混乱のどさくさに紛れて2つは手に入れられるかもしれませんが、指輪は難しいでしょうか。

……ま、兄さんが何かしら策は講じてあるんでしょうけどね。

番外編：転生兄妹IFその1「ゼロの使い魔」（後書き）

というわけで、IFシリーズをお送りしました。

どちらにせよアンチ成分は含まれる事になるわけですが。

なお、これ以外にもIFシリーズは書き溜めしており「コードギアス」「なのは」などがあります。

他にも見たいという人がいれば、他のも投稿しますけど……まあ、気が向いたらになるかもです。

番外編：転生兄妹IFその2「魔法少女リリカルなのは」（前書き）

と言うことで、性懲りもなく第2弾です。

今回は「もしも、陸斗たちの世界が「ネギま」ではなく「なのは」とクロスしていたら……？」という設定です。

本来の「幻想に生きる者」は「ネギまと東方」のクロスですが、こっちは「なのはと東方」のクロスです。

ちよつとばかりアンチ成分を含み、さらにえげつない所も含みますのでご注意を。

番外編：転生兄妹IFその2「魔法少女リリカルなのは」

「…………よし、引っ越し準備完了」

荷物を運び終え、陸斗はぐつと背を伸ばす。

同時に少しだけ眼を細めて街の方を見る。

…………常人には感知できないだろうが、街全体を極めて強力な力が走っている。

だからこそ、かもしれない。昔からこの街で奇妙な事件が多発しているのは。

「陸斗、準備出来ましたよ」

と、家の中からいつもの羽衣姿では無く、シックな服装に身を包んだ衣玖が出てくる。

今回、仕事のために幻想郷の外へ出る事になった際、当初は陸斗が単身赴任する予定だったのだが、彼女が必死で食い下がった。

曰く「妻である私が夫の側にいなくてどうなのですか」と。

危険があるかもしれない仕事なので、陸斗は反対したのだが…………

何故か、紫と映姫が衣玖の意見に賛成したため、こうなった。

「ああ、悪いな。…………しかし、お前まで付いてこなくて良かったのに」

「いいじゃないですか。私はあなたと一緒にならどこでもいいんです」

くすり、と笑って、寄り添う衣玖。

これで半世紀近く夫婦を続けてきた。互いに考えてる事くらいは、言葉にしなくても分かる。

「重霊地、でしたか？ この街は」

衣玖の問いかけに、無言で頷く陸斗。

陸斗の加護を受けているために、彼女もまた並の妖怪を遙かに凌駕する力を持っており、それ故に気づいていた。

この街の……海鳴市の異常性に。

「霊脈が異常なほど集中……さらに常時活性化している。ここまで見事な代物は何度も見られるものじゃない」

「過去、この街で起きていた事件もそれに関係しているのでしょうか？」

おそらく、と陸斗は呟く。

ここに来る前、彼らはいくつか過去の事件を調べていた。

まず……これは数年前になるが、何十人も人間が“吸血鬼”に血を吸われ、操られるという事件が起きた。

既に解決したとはいえ、これが陸斗がこの街へ来ることになったきっかけでもある。

ここまで事件が起きたのも、全ては偶然ではなく必然なのかもしれない。

「“夜の一族”……レミリアさんやフランドールさんとは違い、あくまで人間ベースの吸血鬼」

「亜種、とも呼べるかもしれない」

レミリア・スカーレットやフランドール・スカーレットは純粋な吸血鬼。

この両者は人間のカテゴリを大きく外れ、妖怪にカテゴライズされる。

だが、月村家を始めとする“夜の一族”はそうでもない。彼らはあ

くまでも人間であり、吸血鬼能力はそこからの延長線上に過ぎない。………とはいえ陸斗に与えられた仕事は、彼らの危険性故のものだ  
が。

「ま、お前が来てくれたのは心強い。1人だけでは対応仕切れなかったかもしれないからな」

「なら、私で無くとも………例えば、アリスさんや早苗さんでも良かったのでは？」

「…………それは極めて困る」

特に後者は困る。非常に困る。

陸斗が既婚者だと知りつつも、「不倫？それがどうした」とばかりにアタックをかけてくる。

この前なんて夜這いを掛け、それで衣玖と一悶着あったところだ。

「冗談ですよ。まあ、アリスさんなら許しますが」

どうだろうな、と心の中で陸斗は呟く。

あれはあれでどう接していいか分からない所がある。まあ、自分の自業自得なのかもしれないが。

「玲夜ちゃん、どうしたの？」

「……………何でもありません。それより、授業が始まるからさっさと戻ったらどうです？」

自分に話しかけてくる少女を、そうぶつきらばうに突き放す。

彼女は少女、高町なのはが苦手だった。

“姪”の友人だからと、わざわざクラスの違う自分にまで話しかけて来る。もう1人の友人はちゃんと段階を踏んでいるというのに。

そもそも彼女は人付き合いが苦手な方で、おまけに「美少女」に当てはまる容姿もあり、クラスから浮いた存在だった。

とはいえ、そんな事は彼女にとって些細な事であり、全く違うところへ思考は働いている。

(……………兄さん、どこにいるんですか)

少女、綺堂玲夜には前世の記憶がある。

それほど多くを覚えていたわけではないのだが、誰よりも大切な兄がいた事だけは覚えている。

……………無論、今の自分にも家族はいる。

両親は勿論、10歳以上年の離れた姉・さくら。今は大学院生で、多忙な日々を送っている。

多少、特殊な血族に生まれた自分が頼ることの出来る、数少ない相手とも言える。

(まあ、それはそれですね)

現在、玲夜は綺堂家とは親戚筋に当たる、月村家に預けられている。これは、月村家には玲夜と同年代で、血縁上では姪に当たるすががいる事からである。

特殊な家柄で生まれたため、玲夜にはほとんど友人がいなかった。

それを考慮した上で、さくら達が彼女を月村家へと預けたのである。

……まあ、月村家との付き合いはそこそこ……すずかとも上手くやれていると言ったところだろう。

「はあ………」

彼女が“兄”と再会するのは、もうちょっとだけ後の話……。

陸斗は手の中にある青い宝石に目を落としつつ、目の前で武器を突きつける少女に対し、口を開く。

「つまり、これは君らの言う「ジュエルシード」とやらで、これを集めている……というわけか」

「そうです。だから……」

「断る」

金髪の少女と大型犬の目が敵意に満ちたそれへ変わり、陸斗を睨み付け始める。

……600年近い時間を生きる陸斗にとって、10歳そこらの子供の敵意など、あつてないようなものだった。

「俺の仕事は、ここ最近この近辺でバカやらかしてる連中を引っ捕らえる事と、同時期に落ちてきたとかゆー危険物の回収だ。……君らがこんな危険物を集めて何しようとしてるかは知らんが、理由も知らずに「はいそーですか」と言うわけにはいかんのさ」

「なら、力尽くでも……！」

手にした斧を振りかぶり、陸斗に向けて振り下ろす。

しかし、陸斗はそれを避ける事なく、さらに指1つ動かす事なく、身の回りに展開している障壁によって受け止めた。

「なっ………!？」

少女は自分の攻撃が容易く防御された事に驚きを隠せない。

陸斗はそのまま、軽く妖力を解放し、少女を後方へと吹き飛ばした。吹き飛ばされた少女はビルの方へとめり込む。結界は張られているので、おそらく大丈夫だろう。

「よくもフェイトを……！」

主人を傷つけられ、怒りに染まった犬が陸斗目掛けて襲いかかる。

……どうやら主人と同じく、直情径行らしい。

陸斗は内心、そうため息をつきつつも、同じ様にして攻撃を受け止め、吹き飛ばす。

同じ犬でも、これなら椋の方が数倍強い。多分2人同時に相手しても、圧倒できるんじゃないか？

「子供を虐待する趣味は無い。大人しくしてくれれば、怪我をさせずに済むんだが？」

しかし、陸斗のその言葉に耳を貸す事無く、少女と犬は再び襲いかかる。

……数分後、命辛々戦闘区域を脱出する少女たちの姿があった。

「やれやれ。……ま、これだけでも手に入ったからいい事にするか」

「ジュエルシードを渡してくださいー!!」

「……またかよ」

フェレットを肩に乗せた新たな少女の出現に、陸斗は再度ため息をついた。

「玲夜ちゃんの様子は……………」

心配そうに尋ねてくるすずかの頭をそつと撫でる。

子供相手には、まず安心させる事が大切だ。……………何故か衣玖は今もこれが通用する。

「大丈夫だ。俺の妖力を分け与えたから、後は自前の生命力で何とかなる」

「よかった……………」

ほつと肩をなで下ろすすずか。

…………… 昨晚、帰宅途中の玲夜を何者かが襲撃し、妖力を根こそぎ奪い取っていった。

玲夜も突然の事に動揺していたようだが、咄嗟に相手に手傷を負わせる事に成功したらしく、右手の爪には細胞組織と血らしきものが付着していた。

現在、腕の立つ薬師にそれについて調べてもらっている。後は警察犬の到着を待つだけだ。

「警察犬？」

「ああ。白狼天狗の犬走つてのがいてな、えらく目と鼻が利く。今回、特別に頼んで来てもらえる事になっている」

玲夜が誰に襲われたか、どんな理由で襲われたかには興味は無い。だが、襲った何者かが存在するのは変えようのない事実であり、誰

であろうと、許すつもりは無い。

何故、玲夜から妖力を奪っていったか。……………何かに妖力を注ぎ込むつもりなのか？

「明日には目を覚ますだろうし、そうすれば詳しい話も聞ける。……………君はどうする？」

「私は……………」

「多分、戦闘になる。あまり付いてくるのはオススメできないが、な」

玲夜共々、“力”の使い方を叩き込んでいるとはいえ、この子は元々の気性が優しすぎる。戦いには向かないタイプだ。

むしろこの子は、敵を倒す事よりも、味方を守る事に真価を発揮する。……………かつての瑪瑙と同じ様に。

「それでも、何で玲夜ちゃんが襲われたのかが知りたいです」

「誰かと戦う事になってもか？」

「私は戦いません。その辺は、陸斗さんをお願いします」

これには呆気にとられた。

まさか、戦闘関係を全部俺に丸投げで来るとは……………。

ま、強かと言えばそうだな。それはそれで充分面白いし、俺としても構わない。

「いい度胸だ。いったい誰に似たんだか」

「多分、お姉ちゃんか玲夜ちゃんにじゃないですか？」

違いない。

と、そんな話を話している内に、どうやら“警察犬”が到着したようだ。

「陸斗さんお待ちせしました！ 犬走椋、只今到着いたしました！」  
「よし。早速で悪いが、追ってもらいたい臭いがある。頼むぞ」  
「はい！」

既に細胞組織から臭いの成分は抽出済みだ。

椋の嗅覚でそれを特定し、千里眼で目標を捕捉。……後は俺が完全に仕留める。

撃つていいのは撃たれる覚悟のあるヤツだけ。うちの妹を傷つけた以上、自分もやり返される覚悟くらい出来てるだろうし。

……やられたら100倍にしてやり返す。それが俺の流儀だ。

「無様、だな」

俺の目の前には、ボロボロになった守護騎士達が佇んでいる。また、  
白黒の魔法少女2名は衣玖の羽衣で拘束されており、身動きが取れ

ヴォルケンリッター

ない。

どうやら戦意だけは消えていないらしく、敵意に満ちた目で俺を睨み付けてくる。

……まあ、戦意喪失されるよりはずっと殺し甲斐はあるんだが。

「ここで一気にトドメ刺してもいいんだが、まずは元凶から片付けた方がいいか」

「元凶、だと？」

リーダー格と見受ける、シグナムという名前の女騎士がそう呟く。

ああ。玲夜が襲われる原因ともなった、闇の書とか言う魔導書の主……確か、八神はやてと言ったか？

名前を口に出すと、4人の顔色が一気に青ざめる。どうやら「片付ける」と言った俺の意図が読めたらしい。

「テメエ……はやてに何するつもりだ!!」

「殺す」

単刀直入に言つてやると、赤ロリのヴィータがハンマーを振りかざし、一気に振り下ろす。

だから、それは効かない。リーチが違いすぎるって言ってるだろ？  
カウンター気味に右脚で蹴りを叩き込み、はね飛ばす。……今の  
感触からして、骨が何本か逝ったと思うんだが。

「玲夜だけじゃない。お前達はただ1人を生き長らえさせるためだけに、無関係な者達を無差別に襲い、命を奪ってきた」

その魔法少女の話によると、異世界の魔法生物にも被害が出てい  
るとかいけないとか。

……まあ、そっちはどうでもいい。

俺が許せないのは玲夜の件ともう1つ。あの祟り狐……久遠と、衣玖を狙った事。

幸い衣玖は奴らよりも数段強く、逆に蹴散らした。まあ、それでも衣玖を襲った事も含めて許せない。

「それは、お前達の主も同罪だ」

「主はやては我らの所業を何一つご存じ無い！ これは全て、我らの罪だ！」

「随分とふざけた事を言うんですね、あなた達は」

くすくす、と衣玖が面白そうに笑う。

……ある意味、こっちの方が俺よりも数倍タチが悪い。

久遠が襲われた事に相当腹を立てていたから、俺が鎮めてなかったら間違いなく殴り込みに行ってただろう。

「立派に罪があるじゃないですか。『あなた達を止めなかった』という」

「だ、けどはやてちゃんは、私たちの事は知らなくて……」

「それならさらに罪状プラスですね。『騎士達の行動を探ろうともしなかった』」

相変わらず、えげつない。

どうも俺たちの会話に、拘束されっぱなしの魔法少女達も言いたい事があるらしい。

衣玖、口を覆ってるヤツだけ外してくれ。

「どうしてそんな酷い事が言えるんですか！？ 殺す、だなんて……」

「随分と甘い考えだな、魔法少女」

白い方の魔法少女に、そう言い放つ。

常に戦場を支配するのは「弱肉強食の摂理」。強い者が生き、弱い者が死ぬ。それが全てだ。

コイツらは弱いから負けて、俺たちは強かったから勝った。で、敵を倒すのは当然の事だろう？

「ま、出来るだけ苦しまずに逝かせてやるさ。闇の書はまあ……どうするかな」

主を殺しても転生するのだから、あまり意味が無い。

俺の能力なら完全に消し去る事も出来るだろうけど、骨董品としての価値は相当だ。出来れば欲しい。

うん、殺す前に拘束して、その上で紫にでも預けておくか。アイツなら何とか出来るだろうし。

「と言うわけだ。子供はさっさと家に帰って寝ろ」

今日はクリスマスだし、子供は家族とでも過ごしてるのが1番だ。しかし、2人はさらに俺を強く睨み付ける。……やれやれ、聞き分けのない子供は苦手なんだがな。

「じゃあ何だ？ 闇の書はこのまま放置。そうすれば蒐集完了して世界終了のお知らせ。……そうしろって？」

「ち、違います！」

「今、私たちの仲間が闇の書について調べています。そうすれば、壊れた部分の修復だって……」

「無理だな」

一言でそう切って捨てる。

そう、あまり詳しく無い俺にだって分かる。それは無理だ、と。

「闇の書は……お前らが言う“古代遺失物”とか言うオーパーツみたいなものなんだろう？ それを作る技術は既に失われている。違うか？」

「それは……………」

「それに関する技術が失われていて、どうやって修復するって言うんだ？」

もしもそれが実在するとしても、それが見つかるまでの間、闇の書が暴走しないとは限らない。

不確かな可能性に賭けるより、俺は現実的な可能性を取る。

「お願いします！ 私たちを信じてください！！」

「それこそ無理だな。俺たちを信じてもない相手を、どうやって信じられるって言うんだ？」

八神はやては殺す。これは既に決定事項だ。

……………とは言え、さっきからこつちを覗き見ている猫がいるみたいだし……………。

「その2人は俺が捕まえておく。……………掃除を頼む」

「はい」

番外編：転生兄妹IFその2「魔法少女リリカルなのは」(後書き)

まあ、どっちにせよ、はやては殺せないんですがね(笑)

この後、原作通りに事が進んでいきますが、闇の書の闇戦ではなのは達では無く、陸斗率いる幻想郷メンバーが戦う事になります。

原作以上のフルボッコタイムになるでしょうね。

それから諸々あって、夜天の書「リインフォースは、陸斗のものになる……と。

これ、絶対に衣玖に殺されるでしょうね。違う意味だったとしても、手に入れようとしたわけですし。

ま、そんな感じでA、S編は終了ですかね。

StS編は、一応イメージとしてはあるので、気が向いたら書いてみます。

番外編：転生兄妹IFその3「魔法先生ネギま！」（前書き）

と言っわけで第3弾です。

今回は「陸斗と玲夜の立ち位置が逆だったら？」というIF。

本編ですと、「陸斗は教師」で「玲夜は英雄の娘」という立ち位置ですが、これが正反対。

要するに「陸斗が英雄の息子」で「玲夜が教師」という立ち位置になります。

ま、どちらにせよ厳しくなるのに違いありませんが、それでも多少の変化が現れるのは間違いないでしょう。

さて、IFの番外編は今回までにして、次回からは通常通り本編投稿に戻ります。

また暇な時がありましたらIFを投稿しますので、気長にお待ちください。

P・S・あとがきにてアンケートを行いますので、気が向いたら参加してください。

番外編：転生兄妹IFその3「魔法先生ネギま！」

「さて学園長。とりあえず、納得いくご説明をお願いします」

「そ、そう怒らんで欲しいのじゃがな」

あら、失礼な。怒ってなんていませんよ？

……まあ、これについて黙っていた事に関しては………少し腹を立てているかもしれませんが。

そう伝えてあげると、傍らのタカミチ君に困った様な視線を向けるが、彼は苦笑するだけ。

「まあ、だいたい事情は理解しています。その英雄の息子達を守るため、でしょう？」

「………そうなんじゃよ」

サウザンドマスター

来週、こっちへ来るといふ我が戦友“千の術の男”こと、ナギ・スプリングフィールドの息子達。

双子の兄弟で、その兄の名は新旧両世界でも広く知られている。10歳という若さにして、異端の天才児として扱われているのだから弟は……正直、あまりいい噂は聞かない。兄に劣らず優秀だというが、所々で致命的にボロを出しているとかいないとか。

……さすがに、「くしゃみで武装解除」は無いと思いますけど。

「ここ麻帆良は、MMの下部組織ではあるけれども、ある意味独立した存在ですからね。彼らに事情は？」

「無論伝えてある。リクト君は歳に似合わず大人びておるからの。

………ただ、ネギ君はイマイチ理解しておらんようじゃが」

ま、それは無理無いでしょうね。

10歳の子供に非常に高度な政治的思考を理解しろというのに無理がありますし。

それを理解しているのですから、さすがは兄さんです。

「で、教員寮は準備出来ているんですか？」

「それがのう……1つしか空きが取れなかったのじゃ」

1つだけ、ですか。

聞くところによると、兄弟仲はあまり良くないとの事。

ならば、1つの部屋に2人を押し込むのは、精神衛生的によろしくないでしょう。

「なら、私がそのリクト君を預かりましょう」

「……………いいのかの？」

「ええ。子供1人ぐらいなら、私も充分にお世話出来ますし」

ふふふ、この世界に生まれ出て早くも600年。

ようやく……ようやく兄さんと再会出来ます！これが嬉しくないはずが無いでしょうが！！

「えらくハイテンションなのね、玲夜」

そんな学園長室を後にした私に、語りかけてくる存在が1つ。

ぬうつと空間の裂け目から姿を現したのは、我が恩師。名前は八雲紫。

「何を言ってるんです。やっと兄さんに会えるんですから、テンション上げ上げなのは当たり前じゃないですか」

「そ、そう」

10歳の兄さんですか。私より年下なのに兄さん……。そんな私を見て、紫がドン引きしているとは、気づいていなかった。

「……………何なんだ、このクラス」

玲夜から受け取った名簿を見て……………思わず啞然となった。

朝方、我が愚弟が「女難の相」だと判断した（失礼にも程がある）女子生徒はともかくとして。

まず……………このエヴァンジェリンって、アレだろ？ 闇の福音。

「ええ。“千の呪文の男”に敗れ、この地に封じられている悪の大魔法使いです」

「それが何でこんな所で生徒やって……………ああ、うちのバカ父が変な呪いかけたんだろうな、きっと」

スタンジーさんから聞く話によると、相当ぶっ飛んだバカだったら

しく、あんちよこ片手に呪文唱えてたとか。  
けちゅんけちゅんにした吸血鬼に、バカ魔力でテキトーに呪いかけ  
る……いかん、リアルに想像出来る。

「思い切り、名簿に「神鳴流」とか「忍」とか書いてあるんだが。  
あと、何だよこの幽霊」

「タカミチ君なりの注意だと思いますよ？ でも、エヴァンジェリ  
ンさんに「相談するよう」ってのはやめた方がいいと思います。下  
手に接触して捕まったら、致死量の血液を吸われますよ」

「それは……嫌だな」

確かに、呪いをかけた術者の血液を大量に飲用すれば、吸血鬼なら  
地力で呪いを解けるかもしれない。

うちの愚父の愚行の被害者なので、本当なら詫びに行かなければな  
らないだろうが、血を吸われるのはゴメンだ。

……もちろん、敵対するかもしれない相手の呪いを解くなんて馬  
鹿な事をする気もない。

「いつその事、頼んで吸血鬼にしてもらったらどうです？ そつす  
れば、私といつまでも一緒にいられますし」

「日光に弱くて流水を渡れないなんてゴメンだ。それくらいなら自  
分で「魔法使い」になつてやる」

………何、呆けた顔してる。

お前みたいな危険人物、見張っておかないと余所で悪さしそうで怖  
い。

「ほら行くぞ。念のために言っておくが、俺はあくまで教育実習生  
で、お前は2-Aの担任だ。接し方には気をつけるよ」

「ええ、分かっていますよ。……よろしくお願いします、リクト・

スプリングフィールド実習生」

「で、お前らは何をしてたんだ？ ああ？」

兄さんがちよつとばかり……いえ、かなり怒気を露わにして、バカ生徒達を睨み付ける。

いくら10歳だと言っても、その怒りは相当なものだと肌で感じているらしく、バカレンジャーズは萎縮するばかり。

……ああ、今回ばかりは私も助けませんよ？ テスト前に授業放棄するバカ共なんて、初めて見ましたからねえ……。

「そ、その……頭が良くなるっていう、魔法の本を探して……」  
「それで図書館島の立ち入り禁止区域に？ テスト前だったのにテスト勉強もせずに？」

「バカなの？ 死ぬの？」と言わんばかりに兄さんが追求する。

なおも言い逃れしようとしているが、さすがに私たちが本気で怒っている事は気づいているらしく、口を閉ざす。  
ちよっと私もいくつか言っておきたい事はある。……………八つ当たりみたいなものですが、言わずにはいられない。

「……………図書館島で行方不明になったと聞いて、心臓が止まりそうになりました」

「ッ!？」

「クラスの中には、思わず倒れそうになった人達だっていました。雪広さんなんて泣いてましたよ?」

桜咲さんも「お嬢様」が行方不明になって、今にも切腹しそうな顔色でしたし（さすがに切腹は見たくないのか、龍宮さんが抑えていましたが）。

まあ、あれは護衛対象から離れていた自業自得です。本当なら彼女が近衛さんを止めなければならなかったんですから。

「それでも、今回のテストには両実習生の正式採用がかかっていると聞いて、必死に頑張ってくれました。その甲斐あって見事な結果を残しました……………が、分かっていますね?」

兄さんはそれほど気にしていないみたいですが、さすがにネギ君は気にしている模様。

「まず、リクト・スプリングフィールド実習生、およびネギ・スプリングフィールド実習生。あなた達は今回、生徒達が図書館島へ忍び込むのを止められなかったため、教員への正式採用は見送ります」  
「ちょ……………ネギは、まあ分からなくないですけど、何でリクトまで!?!」

神楽坂さんが言う通り、兄さんの処遇については会議で何度も話し合われた。

最終的に、兄さんだけが正式採用という流れで落ち着きそうだったが、それを当の本人が辞退した。

『彼女達が行動を起こす事を察知出来ず、さらに止められなかった。自分が彼女達と確固たる信頼関係を築けていれば、今回の事は十分に防げた。自分も同罪だ』と。

その事を聞き、かなりのショックを受けている面々。……完全に無関係だって兄さんにも被害が及びましたからね。

「あなた達2人は、おそらく春休み中にでも正式採用のための新たな試験について、通知が来るはずです。以後はそれに従うように」

「はい」

「……………は、はい」

さて、次は……………こっちのバカ生徒達ですか。

「あなたたちには原稿用紙10枚を配布しますので、2000字程度の反省文を1週間後の午後6時までに新田先生のところへ提出するように。あと、敢えて回りくどい表現を用いて字数を稼ごうなんて思わないように」

これは前に、綾瀬さんが使ったテクニクです。

難しい哲学や専門用語を使い、実に半分以上を埋めてきました。

もちろん、前に提出された時は弾きましたよ？ それに今回の提出先は新田先生ですから、そーゆー事したら雷落ちますからね。

「あと、春休み中の部活動は禁止。アルバイトも同様です。春休み中は赤点だった生徒のために補習授業を行う予定ですが、あなた達もそれに参加するように」

「で、でも私たち期末では……………」

ええ。私も頑張ったと思いますよ？

……………しかし、素行が問題視されているのは事実です。それに春休み中にだらけるのは目に見えていますから。

そう懇切丁寧に説明してあげると、「うつ」と呻いて顔をそらす5人が。

「それと……………これから半年間、図書館探検部は行動を完全に凍結。図書館島にも、司書を含む許可を受けた一部の人間以外の立ち入りを禁止します。なお、生徒は例外なく立ち入り禁止ですので」

「え、ええっ!？」

「な、何故ですか!! 何故そこまで……………!!」

その処分に納得いかなかったのか、綾瀬さんが立ち上がり、涙目で抗議してくる。

ええ、そう言いたい気持ちは分かりますよ。あなた達個人だけじゃなく、図書館探検部全体にも被害が広がりましたからね。

しかし、呆れたように兄さんが口を開く。

「図書館島が今回の騒ぎの原因だ。当たり前だろう」

「し、しかし! 私たちは……………」

「『図書館探検部だから』という言い訳は通用しない。夜間、それも禁止区域への侵入は立派に違法だ。……………それに、今回の件で図書館探検部の問題点が浮き彫りになった。例を挙げると、お前達が夜間に侵入した事から、鍵や地図などの管理体制に不備があるんじゃないか? とかな」

その言葉にさすがの綾瀬さんも反論できないのか、「うつ……………」と言う呻き声と共に俯く。

これまで、あまり図書館探検部について問題点が上がらなかったため、行動内容はもちろん、図書館島自体にもスルーされてきた。

しかし、今回の一件がある意味引き金となり、溜まるに溜まった問題が一気に溢れ出た。「仕掛けられた罠は危険じゃないか？」とか

「書物の窃盗などに対して、本当に大丈夫なのか？」とか。

……いや、だって普通に矢とか飛んでくるし。ねえ？

「あなた達の考え無しの行動で、全く無関係な人達にも迷惑が及びます。……連帯責任、という言葉覚えてなさい」

「何をしているんですか、スプリングフィールド実習生」

魔法の射手を放とうとしていた薬味（もう薬味で充分です）に蹴りを入れ、詠唱を中断させる。

単なるストーリーキングなら見逃しましたが、さすがにこれ以上は一教師として見逃せない。

「か、風峰先生！？ どうしてここに……………」

「教師が生徒を守るのは当然の事です。ああ絡繰さん、行つていいですよ」

「……………では、失礼します」

そう言うと、絡繰さんはジェット噴かせて飛び去って行つた。さてと、まだ問題を重ねるわけですか。このバカ共は……………。

「で、言い訳を聞きましょうか。どんな考えがあつて、あなたは自分の生徒を攻撃しようとしていたのか」

「そ、それは……………」

「あの茶々丸つてロボが、エヴァンジェリンの従者だからだよ！」

言い淀む薬味の代わりに、その肩の上にいたフェレット……………いえ、オコジョでしょうか？ とにかくソレが答えた。

なるほど。エヴァンジェリンさんが何やら暗躍しているかも〜という噂はありましたが、やはり彼らを狙っていたとは。

「ていうか、テメエ誰だよ！ エヴァンジェリンの仲間か！？」

「3-Aの担任教師、風峰玲夜。……………この学園都市において治安や風紀を守る、広域指導員の立場にいます。一言で言つなら、魔法先生です」

「え……………？」

兄と違って頭の回転が遅いですね。これで天才児とは……………やれやれ。

「あなたと同じ、魔法使いだと言う事です。ネギ・スプリングフィールド実習生」

とはいえ、厳密に言うなら私は魔法使いではありませんが。

「どちらにせよ、あなたが絡繰さんへ暴行を加えようとした事実は消えません。一緒に来てもらいますよ」

「ちょ、ちよつと待ってください！ ネギはエヴァンジェリンさんに狙われていて……」

「戦力を分断するために、従者が1人になるのを見計らって襲撃……ですか？」

なるほど、確かに効果的な戦法です。

格上の相手に対抗するためには、戦力を分断させるのは平方の基本中の基本。

しかし、こんな戦法を10歳の子供や14歳の女子中学生が思いつくとは思えない。となると……そのオコジョですか。

戦闘者としては評価しましょう。ですが、今のあなたは実習生とは言え、生徒を預かる身……教師です。教師として最悪の手を取ったと言えるでしょう。

「光属性の魔法の射手は、物理破壊効果を伴います。あれだけの本数ならば、確実に彼女を殺していたでしょうね」

「そ、それは……」

「おめでとうございます。これであなたは立派な犯罪者です。罪状は殺人未遂、でしょうか？」

そう言つてあげると、顔色が真っ青になり、今にも泣き出しそうになる。

おやおや、少し虐めすぎましたか？

……ま、絡繰さんはロボットですし、厳密には「殺人未遂」ではなく「器物損壊」になるのかもですが。

「神楽坂さん、あなたもです。あなたがどのような経緯で魔法の存在を知ったかは知りませんが、然るべき処置が下されるでしょう」

「し、然るべき処置？」

「魔法に関する記憶を全て消去。さらに仮契約を破棄し、普通の生活へ戻します」

薬味が持っていた仮契約カードを奪い取る。

スカカード…… 大方、ほつぺたにでもキスしたんでしょうかね。

「ま、待ってください！ でもコイツ、エヴァちゃんに狙われてて……」

「無論、エヴァンジェリンさんにもそれ相応の処罰が下されます。

とはいえ、確固たる証拠はありませんから、学園長から厳重注意くらいでしょうけど」

確かに吸血鬼の噂があるのは事実。

しかし、それをエヴァンジェリンさんとイコールで結べるかと言ったら、そうは出来ない。

子供や生徒、さらにオコジヨ妖精の証言だけでは弱い。彼女が関与しているという物的証拠が無ければ、彼女を追いつめられない。

要するに、「シラを切られたら意味が無い」というわけです。

「絡繰さんを襲撃した事は、エヴァンジェリンさんにもしっかり伝えておきます。もしかしくなくても怒るでしょうけど、せいぜい頑張ってくださいね」

そう言ってあげると、ついにぺたんと座り込む薬味。

仲間に手を出されたら、普通怒ります。私だって、友人や仲間を傷つけられた…… いえ、傷つけられそうになったら、当然報復行為に

移ります。

元同級生のタカミチ君の話によると、エヴァンジェリンさんはあえて沸点が低いそうですし、間違いなく怒るでしょう。

……ま、絡繰さんを殺していなくて良かったですね。そうなら、間違いなくブチギレてましたよ。

「これはあなたが招いた結果です。………期末試験の時にも言いましたが、自分の行った行動で何が起こるのか。もっと考えてから動きなさい」

「はい、そこまで」

そう声をかけ、今にも愚弟の血を吸おうとしていたエヴァンジェリンを止める。

なお、神楽坂は絡繰に抑え込まれており動けない。カモミール・アルペール 淫獣も同様だ（

こっちは踏みつけられているが)。

「リクト・スプリングフィールド……何の用だ。弟を助けにでも来たのか？」

「生憎、そのバカが死のうが生きようがどうでもいい。だが、お前がそれを殺すと厄介な事になるんでな」

「それ」呼ばわり、さらに生死はどうでもいい発言が突き刺さったのか、愚弟は涙目に、さらに神楽坂は暴れ出そうとする。  
ここでネギ・スプリングフィールドが死亡した場合、事実はどうであれ、「ネギ・スプリングフィールドは修行中に死亡した」とされる。

その場合に責任を追及されるのは麻帆良であり、行く行くは「犯罪者“闇の福音”の監督不行届」にまで及び、学園長以下の魔法先生達全ての首が飛ぶ。

そうなれば、俺や玲夜にも被害が及ぶ。……………それだけは避けたいところだ。

「それに、今お前に解呪されると困る」

「ほう……………」

例え、それが死なずに解呪されたとしても、それはそれで「危険な犯罪者であるエヴァンジェリンの放置」へと繋がる。

彼女を解放させたとして、やはり麻帆良学園の責任問題へと及ぶ。

……………とゆーか、元々の原因はあのバカ親父なんだよな。会ったらず蹴飛ばそう。

「そう言うわけで、とりあえず今日の所はお開きつて事にしてくれないか？」

「断る。お前の言葉を聞き入れる道理は私には無い」

…………ま、そうなんだよな。

話し合いで解決できるならそれで良かったんだが…………ま、仕方ないか。

それじゃあ、実力行使だ。

アテアット  
「来れ」

その言葉に応じ、俺の手に出現したのは1本の杖。

それも、魔法使いが扱うそれではなく、何て言うか…………低年齢向けの魔法少女が使うようなやつ。

能力は極めて強力だったのに、何でコレなんだ？

「…………何だそれは」

ああ、分かる。初めてコレを呼び出した瞬間、俺もそう思った。

ただどな。数分後にはそうも言っていられなくなるぞ、何と言ってもコレは…………。

『失礼ですね。この私をコレ呼ばわりとは！』

「……………は？」「……………」

その場にいた全員が、思わずそう言った。

ふつーはあり得ないからな。だが、コイツはそんじょそこらのアーティファクトを遙かに凌駕する凶悪性を発揮する。

「ルビー、無駄口を叩くな。さつさとやるぞ」

『あら？ 珍しいですね、あなたがノリノリで私を受け入れるだなんて』

「ノリノリじゃない。やむを得ず、だ」

ステッキを掴むと、目を閉じる。

羞恥心は捨て去った。……………後はただ暴れるのみ。

『さあ、行きますよー！』

「変身！！」

そう叫んだ瞬間、眩い光が周囲を包み込む。

しかし、それは一瞬の事であり、光が晴れるとそこにはさっきまでの俺の姿は無かった。

まず腋の部分が露出しており、全体的に赤を基調としたショートドレス。如何にも「魔法少女」らしさを全面的に押し出しているが、動きやすいように改良が重ねられている。

なお、全ての衣装には玲夜の手が加わっており、おそらくこれも玲夜の謹製であると思われる（腋巫女がどうか言っていた）。

「はあい、お待たせみんな！ 愛と正義の執行者、カレイドルビーのプリズムメイクが始まるわよ！」

カレイドステッキをビシッと振るい、名乗りを上げる。

3人＋1匹はぼーんとしており、声を発さない。

……………ああ、分かってたさ。分かってたさ！ 俺だってなあ、好きでこんな格好してるわけじゃないんだよ！ こーゆー仕様だから仕方ないだろうが！！

「とりあえずお前、大人しく倒されろ！！」

無詠唱で1発、魔法の射手をエヴァンジェリン目がけて打ち込む。避けるまでも無いと判断したらしく、1歩も動かないが、軽々と障壁を貫通し、顔のすぐ横を通り抜けて明後日の方向へと飛んでいく。

「な…………わ、私の障壁を抜いただと……………?」

『チツ、外しちゃいましたか』

「そう思うならしつかり捕捉頼む」

威力が段違いになつてゐる反面、扱いづらいところがあるんだ。

『なら改めまして…………マジ狩る　トルネード!!』

軽くステッキを一振りすると、凄まじい竜巻が巻き起こる。

それを見たエヴァンジェリンの顔が引き攣る。いや、これは俺もやり過ぎかもしれないと思つた。

竜巻がエヴァンジェリンへと向かうが、強引に受け止め、それをねじ伏せる。…………なんちゅう力技だ。

「…………なるほど。それが貴様のアーティファクトの能力と言うわけか。魔法能力の大幅な強化。確かに恐るべき代物だ」

…………残念、それだけじゃ20点だ。

このアーティファクト『千の自分の可能性』カレイドステッキの能力は、単なる強化だけでは推し量れない。

その真価が発揮されるのは、これからだ。

「ルビー、対吸血鬼戦闘を想定したものを頼む」

『ほうほう。では、退魔剣士で行きましょう』

データによると、エヴァンジェリンの戦闘スタイルは火力で敵を圧倒する砲台タイプ。

ならば、呪文を唱える隙を与えなければいい。退魔剣士で一気に攻めきる。

プリズムトランス  
『多元転身！！』

再び光が俺を包み込み、魔法少女から退魔剣士のそれへと姿を変える。

白襦袢に袴。そして手にはステッキでは無く、二刀の小太刀が握られており、その一本の鍔にはカレイドステッキのトレードマークとも言つべき」のマークが浮かんでいる。

「カレイドルビー・サムライフォーム……かな」  
「ほざけ！！」

襲いかかるエヴァンジェリン。確かにいつもの俺なら反応出来なかっただろう。

しかし、今の俺は「退魔剣士」。さらにエヴァンジェリンは、俺をまだ見くびっている。

「……………神鳴流奥義」

小太刀が閃き、エヴァンジェリンの身体と交差する。

「百烈桜花斬」

無数の花卉のように、気によって強化された斬撃がエヴァンジェリンを襲う。

峰で斬っていない。しっかりと刃で斬っているが、それでもK・Oされないのは流石だ。

だが、まだ俺の攻撃は終わっていない。……………今度はこっちが圧倒させてもらつ。

「ぐっ……………神鳴流、だと……………？」

傷口が再生を始めているが、完全に再生される前に攻める。  
相手が本気になる前に、こっちを舐めきっている状態で倒しきる。

「秘剣……………」

「何っ!？」

慌てて障壁を展開するが、遅い。……………障壁ごと斬り伏せる。

「一瞬千撃・式刀五月雨斬り!!」

千の斬撃にも匹敵するそれは、障壁を容易く斬り裂き、同様に身体  
中が切り刻まれ血が噴き出る。そして容赦なく、橋の上へと再び蹴  
り飛ばす。

……………しかし、俺の身体は小さく軽い。その分威力も落ちるし、傷  
も浅い。

再生力の強い吸血鬼（それも今晚は満月）ならば、すぐに癒えてし  
まう。

「ガキが……………この私を」

「うっさい、黙れ」

再生し、再び立ち上がるうとしたそれを再び蹴り飛ばす。……………位  
置的にはちょうどいいな。

ルビーで無い方の小太刀を投げ、地面にエヴァンジェリンを縫い付  
ける。小太刀はエヴァンジェリンの右腕に突き刺さっている。

「こんな物で私を封じたつもりか？ 舐めるなよ、ガキが……………!」  
「ああ。何百年も生きてる吸血鬼を封じるんだ。……………これくらい

しないと、な」

パチン、と指を鳴らす。

刹那、エヴァンジェリンの足下に描かれた魔法陣が再起動し、無数の光の帯が彼女の身体へ結びつき、拘束する。

「これは、ぼーやの……！」

「ああ。お前を捕まえるために仕掛けた捕縛結界。もう1度使わせてもらった」

お前は結界の機能を解除しただけで、結界を壊したわけじゃない。だから、ちよつと術式を弄れば再利用可能。限りある資源は大切に使わないとな。

『おまけに私の力で強化済みですからね。いくら最先端の結界解除プログラムといえど、それを破る事は難しいですよ？』

破れない事は無いかもしれないが、それでも現在の絡繰は神楽坂を拘束している。

まず、そう簡単には動けない。さらに、今の俺は手加減するつもりは無い。

「それに時間切れだ」

街の方を見ると、街に再び光が戻りつつあった。

停電の終了。それは、エヴァンジェリンを縛り付ける学園結界が復活する事を意味している。

もしもこの状況下、エヴァンジェリンが完全に封じられ、再びただの10歳児に戻ったらどうなるか？

「くっ……………！」

悔しげな顔で俺を睨み付けるエヴァンジェリン。……………彼女にはもう、俺に対抗するだけの力はない。  
何も言わずに俺は、彼女に小太刀ルビを突きつける。

「俺の勝ちだ」

番外編：転生兄妹IFその3「魔法先生ネギま！」（後書き）

というわけで、ネギま編のIFをお送りしました。

いえ、とりあえずシリ阿斯さとネタに走った結果、こうなってしまうたわけで……。

玲夜が陸斗のポジションに立つと、自然とこういう流れになります。

彼女の場合、陸斗と違う点は「定期的に里帰りしている」ぐらいです。

あと、そこまで“紅き翼”と仲がいいわけでもなく、戦場で共闘したぐらいでしょう。タカミチに関しては、麻帆良で色々と指導しているぐらいです。

また、こつちだとアスナ達も含めて厳しくなるかもなので、ご注意ください。

風峰玲夜

性別：女

年齢：不明（最低でも600年は生きている）

容姿：澄んだ水色の髪を後ろ手に纏めている。紫の瞳。

能力：光を操る程度の能力

麻帆良学園女子中等部2-A、および3-Aの担任教師。担当科目は国語（古文）。燃え担当。

600年以上を生きる大妖怪であり、博麗大結界の創建にも携わったとされる“妖怪の賢者”の1人。八雲紫とは長い付き合いらしい。大戦の影響が幻想郷に飛び火しないよう、大分裂戦争の早期終結を目論む。その際、色々あって“紅き翼”と共闘する事（なお、彼

女は裏方に徹していたため、あまり表舞台では知られていない）。その能力は「光を操る程度の能力」。光線による攻撃だけでなく、自身の肉体を光に変化させる事により、文字通り光速での行動はもちろん、相手の攻撃の大半を無効化する事が可能。かつてはその能力によって、“紅き翼”を壊滅一步手前にまで追い込んだ（イメージは「ONE PIECE」の黄猿）。

穏やかで誰からも慕われる人格者だが、何よりも“兄”を優先するため、兄のためならば全世界を敵に回す事も吝かではない。兄の敵に回った者は、生徒であろうと誰であろうと容赦はしない。

イメージC、V ゆかなさん

「コードギアス 反逆のルルーシュ」のC・C・

「魔法少女リリカルなのはStrikerS」のリインフォース？など

リクト・スプリングフィールド

性別：男

年齢：10歳（数えなので、実年齢は9歳）

容姿：金髪ポニー。光彩異色。

ネギ・スプリングフィールドの双子の兄。萌え担当。担当科目は数学。

「100年に1人の天才」と称され、10歳という若さにして幾つもの新呪文の開発、論文の発表などを行ってきた天才児（“雷化”の実用化にも至っている）。今回、「日本で先生をすること」という試験を引き当て、来日する。なお、彼は試験確定後、イギリスの学校で教員養成カリキュラムを消化しており、正式に実習生と認定

されている。

ネギとの仲は最悪で、本人曰く「アイツとの縁は6年前に途絶えている」と宣言しており、公私共に厳しく接している。生徒達にも厳しく接しており、10歳には珍しく、厳格なオーラを纏っているという。しかし、生徒の教育には熱心なので、彼の個別指導を受けて成績が上がる生徒も少なくない。

戦闘スタイルは、典型的な後衛火力重視タイプ。身体能力はそこまで高くは無いが、アーティファクトによって様々な“自分”のスキルをDLし、それを行使する事によって、最強クラスの相手とも互角に渡り合う事が可能。

アーティファクトは「千の自分の可能性（詳細は後述）」。

イメージC、V 平野綾さん

「涼宮ハルヒの憂鬱」の涼宮ハルヒ

「らき すた」の泉こなたなど

カレイドステッキ

千の自分の可能性

契約の力によって、風峰玲夜の従者、リクト・スプリングフィールドへ与えられるアーティファクト。

プリズムトランス

能力は多元転身。使用者に並行世界の使用者のスキルをダウンロードすることが可能。例えば剣術は素人のリクトに、並行世界の「剣術の達人」であるリクトからそのスキルをダウンロードして同じ能力を持たせることができる。だが決まりごと（欠点）があり、多元転身した場合にはそれに相応しい服装になる。たとえば紅茶を淹れるならメイド服、歌が上手になるならアイドル服など。なお、その際の服装は全て玲夜のお手製で、基本ベースとなる魔法少女服も玲夜の手が入っている。

また、能力の管制役としてステッキには人工天然精霊「マジカルルビー（イメージC、V 高野直子）」が宿っている。基本的に「自

分が楽しければ他はどうでもいい」という傍迷惑な性格で、一応サポートはしてくれるのだが、ぶっちゃけトラブルしか起こさない。極めて稀少かつ強力なアーティファクトだが、フェイトをして「黒歴史」と言わしめる物騒な代物らしい。

さて、アンケートです。

今回続けて投稿したIFの中で、もしも次回作として読むならばどれを希望しますか？

1 ゼロの使い魔（ただし、作者はもとに原作を読んでいません）  
2 リリカルなのは（ただし、作者はSとSを途中で見るのをやめました）

3 魔法先生ネギま！（立場入れ替え）

次回以降も時折、番外編を投稿しますし、その折にもアンケートを採りたいと思います。

本当に書くかどうかは分かりませんが、参考にしたいと思っています。

現在想定している他のIFは「コードギアス」、「恋姫無双（ただし、作者はやった事無いです）」、「ガンダムSEED（アンチ有り。OO成分が含まれるかと）」です。

第81話：「かつて」と「これから」【前編】（前書き）

というわけで、本編に戻ります。

ちよい短くてggggかもですが、ご了承ください。

## 第81話：「かつて」と「これから」【前編】

〔Side Yukari〕

比那名居天子が肅正を行ってから1週間。

彼女は今も冥界で拘束されているけど、そう遠くない内に解放されるはず。

少なくとも彼女の今回の行動は、私欲のためで無く、寧ろ私欲に支配された者達を己が手で処断したもの。  
その部分だけでも、充分評価に値する。

「ま、それは置いといて……………」

神社の縁側に腰掛けて、相変わらずな2人を見る。

陸斗の前ではあわふたおるおる。当の本人も何だか気恥ずかしげに見える。

……………少しは距離が縮まったのかしら、ね。

「私的にはそれほど変わっていないように見えるけど」

「あなたはもう少し、恋心というものを理解した方がいいと思うわよ」

私の隣でお茶をすする花の妖怪にそう言ってやる。

そもそもあなた、男に恋した事あるの？

「あるに決まってるじゃない。こっに見えても経験豊富よ」

「ふん……………」

少なくとも、そうは見えない。

だつてあなた、陸斗とだつて…………。

「忘れなさい。あれは黒歴史よ」

思いだそうとしていた矢先、首筋に傘が当てられていた。

………… ええ、忘れる事にするわ。どちみち、あまり気持ちのいいものじゃないし。

まあ、それは置いておくとして………… あれ、どうする？

「どうもこうも、あの2人の問題でしょ？ 私たちが口出しする筋合い無いわよ」

「それは………… そうだけど」

「もちろん、明確に好意を告げられて、それでうじうじしてるって言うんなら…………」

スツと傘を構える幽香。

ええ、言いたい事は分かるわ。その辺りは私も同じ想いだから。

そんな状況でスルーするつもりなら、問答無用でお仕置きね。わかりやすく言つとO H A N A S H I？

「とりあえず、2人きりにしてあげる？」

「そうでしょうか」

人目が無くなれば、少しは積極的な行動にも出られるかもだし。

………… まあ、昼間っから盛るのだけはやめて欲しいけど。

〔Side Out〕

「Side Iku」

うう……恥ずかしくて、マトモに顔が見られません。  
あの時、その……思い切り、抱きついてたんですね？  
いえ、向こうから抱きしめられたわけなんですけど、それでも私も抱き返してましたし……。

「衣玖、どうかしたのか？」

「あ、い、いい、いえ、なななんでもありません!!」

気のせい……でしょうか？

何だか陸斗様も顔が赤いように見えますが、気のせいでしょうね。  
気がつけば、八雲様もいませんし……って、これ2人きり!？

（おおおおお、落ち着きなさい私!）

2人きりになる事なんて、この前だってあったじゃないですか!!  
そう言えば、この前は抱きつかれたわけで……。

「……………天子の事だが、そう重い罪にはならないそうだ」

ぼつりと陸斗様が溢した言葉に、思わずハツとなる。

天子様は今も、冥界に拘留されている。

少なくとも……………何らかの罪状だけは避けられない。

そう思うと、あの時感じた悲壮感が蘇る。何も出来なかった自分の無力感が……………。

「ほら、また悪い顔になってる」

ぼん、と頭に陸斗様の手が乗せられ、わしゃわしゃと撫でられる。

……………あの時と変わらない。初めて出会ったあの日、幼い私に微笑んでくれた陸斗様。

思えばあの日から、私はこの方に惹かれていたのかもしれない。それが脳裏に蘇り、私は自然と微笑みを浮かべていた。さすがに少々恥ずかしいけれど。

「まあ、短期間の無償奉仕とかそーゆーのだと思うぞ？」

「そうなんですか？」

「今回は特別な事情もあったし、冥界でも天子の行動を悪く見られていない。……………多分な」

天界でも相当な混乱はあったけれど、今は落ち着きつつある。

そして皆、天子様の帰りを待っている。天子様が帰ってきてくだされば、天界も完全に落ち着きを取り戻すはず。

「きっと少ししたら帰ってくる。だからそれまで待てばいい。面会だってその内許されるだろうし……………」

そう言ってくださる陸斗様に、ふと気づいた。  
もしかしたら、私を氣遣ってくれているのでは………？

（この方は、誰にでも優しいから………）

そう思うと、心が痛んだ。

私に向けられている優しさも、所詮は誰にでも向けられているそれと同じもの。

私だけに向けられているのではない。

（………私は、この方の愛を独占優しさしたいと、思っている）

だが私は未だ、この方に想いを打ち明けられずにいる。

それが出来なくては、陸斗様を独占したいなどは………否、独  
占したいと願う事自体が間違っている。

ただ単純に、この方が好きだから。

（想いを………打ち明ける）

そう、大切なのは………1歩前へ踏み出す勇氣。  
息を大きく吸い込んで………よし、行こう。

「り、陸斗様！ よろしいでしょうか!？」

〔Side Out〕

〔Side Yukari〕

適当に時間を潰してから幽香と別れ、私はそのまま神社へと戻ってきた。

これだけ時間をかけたのだから、少しは進展してるでしょうと思って。

……しかし、そこには衣玖の姿は見あたらず、陸斗1人だけだった。

おまけに何だか沈んでいるみたいだし……これ、何かあったのかしら？

「陸斗、何かあったの？」

「……ちよつと、な」

明らかにいつもよりトーンが幾分か低い。

嫌な予感はあるけれど、とりあえず聞いてみる。

を踏み出す気分なのは否めないわね。

それであな、何をしたの？

……地雷原に足

「バカ言っな。俺は何も……いや、俺の所為、だな」

「……………衣玖の事ね」

単刀直入にそう尋ねると、陸斗はこくりと頷いた。  
この状況と様子から察するに、陸斗が自分から行動に移したとは思  
いにくい。

となると……………衣玖が意を決して陸斗に想いを打ち明けたってこ  
ろかしら？　で、陸斗が致命的にバカやらかした、と。

「衣玖に『あなたが好きです』って言われたんだ」

（わあ……………）

予想は正しかった。

ここまで立て続けに事態が起きたのだから、衣玖も心中穏やかでは  
いらなかったでしょうね。

……………何せ、幼い頃からずっと世話をしてきた相手が、人を殺して  
冥界に連れて行かれたのだから。

むしろ乱れに乱れて、何かしら陸斗に甘えてしまった。その勢いで  
……………かしら。

（……………良くない傾向ね）

そもそも、そんな衣玖に陸斗が何をしたのか。

私が言うのも何だけど、陸斗は極めて不器用な子。

それこそ正面から「好き」という言葉を言えなかったり、好意をう  
まく表せなかったり……………。

多分、衣玖に対する行動にも陸斗なりに好意を……………不器用なりには  
表していたかもしれないけど。

「もしかしてだけど陸斗、あなた落ち込んでる衣玖を抱きしめたり  
したとか……………無いわよね？」

念のために聞いてみると、面白いくらいに顔色が変わる。

そんな陸斗の反応に思わず、額に手をやって天を仰ぐ。

……ここまで来ると、もはや拍手したい気分になってきたわ。

「陸斗、あなただつて分かつてるでしょ？ 衣玖はあなたの事を真剣に愛してる。」

「分かつてる。だが……」

……辛いのは、分かるわ。

衣玖に対して恋愛感情を抱いていないなら、ここまで話が拗れる事は無かった。

それこそ、「ごめん」の一言でばつさり斬つてるでしょうから。

でも、陸斗も衣玖の事を……。だからこそ、ここまで強く悩んでる。

ここで衣玖を受け入れれば、それこそ瑪瑙を忘れてしまうかもしれない。だけど、陸斗が愛を受け入れない理由は他の1つある。

「あなたは何より、彼女を失う事を恐れている」

風峰陸斗は博麗瑪瑙を愛し、そして失った。

だからこそ、愛した存在を失う事を恐れる。……衣玖を失う事を、何よりも陸斗は恐れている。

無くしたくないからこそ、愛する事を拒む。

気持ちは分からなく無いけれども、それは完全に“逃げ”の思考よ。

「とにかく、衣玖探して謝って来なさい。あなたが優柔不断な態度取ったの悪いから」

「……いや、それだけじゃ無いんだ」

………は？

衣玖に想い告げられただけじゃない？

「その、押し倒されてキスされて……それで好きって言われて……」

………何だか腹が立ってきたわね。

そこまでされて、何で据え膳喰らおうとしないのかしら？

おっと、そうじゃなく………そこまでされたのだから、しっかりと想いに答える義務が生じている。

例え気持ちの整理が付かなくても、その場で何らかの言葉を返さなければならなかった。

何も言わなかったから、衣玖がどうか行っちゃったんだろうし………

（とりあえず、ヘタレたバカにお仕置きはしておかないと）

これ、本当に呼んだ方がいいかしらね？

スキマを開けて連絡開始………と。ああ、繋がった繋がった。

「紫、何をしてるんだ？」

そう尋ねてくる女の敵を無視して、一部始終を掻い摘んで説明。

………おお、怒ってる怒ってる。珍しい事に。この分だと、数分しない内に全員こっち来るかも。

「………お前、誰に連絡したんだ？ 嫌な予感がするんだが………」  
「鴉天狗よ。事の次第を説明したら、『女の敵に天誅を』って、凄  
い勢いで怒り狂ってたわ」

あの勢いだと、全員集まるのに数分からないわね。  
陸斗の顔も物凄い勢いで青ざめていくけど、こればかりは自業自得だもの。というより私も相当怒ってる。

「さて陸斗、ちょっとOHANASHIしましょうか？」

[Side Out]

[Side Aya]

……いや、本当にバカでしょう？ この人。  
とりあえず集まれる人だけが集まり、集まった瞬間にフルボッコが始まった。

いやゝ、結構久しぶりにスカッとしましたね。ただでさえ、バカ上司の所為でストレス溜まってましたし。

「あれ、生きてるわよね？」

「大丈夫ですよ。腕切り落とされても即座に再生する、バケモノ級の生命力の持ち主ですから」

心配そうに尋ねてくる厄神様にそう返すと、もう1度足下に転がって女の敵に視線を向ける。

いくら何でも、今回の対応だけは無い。

しっかり告白されて、何も答えないっていうのは正直あり得ない。告白した側も凄く傷つく。

……そこまでバカじゃないと思うんですけどねえ、この人。

「とりあえず、言う事は言った方がいいと思いますよ？」

まだうじうじ悩んでた陸斗さんに、これだけは言っておく。

……瑠璃さんが逝ってから、この人はとても痛々しい程になってしまった。

だけど、それが変わりつつある。……逝ったばかりだったら、こ

れ以上のバカをやらかしてたと思うから。

私たちが半世紀近くかけても出来なかった事を、あの人はたった数年で成し遂げようとしている。

……それは、少しだけ羨ましくも、悔しくも思いますがね。

「言いたい事が言えなかったら、きっと後悔すると思います」

伝わらない事よりも、伝えられない事の方がずっと辛い。これは、私の経験談です。

私は、この人の2倍近く生きてるし、中には言えなかった事だってある。

「それと……あなたが他の誰かを選んだとしても、私はあなたが好

きです。きつと、あなただけを想い続けますから」

ほら、私だってこうやって何度も「好き」って言い続けてますよ。それでも衣玖さんみたいな反応はしません。いつも軽くあしらわれてしまう。

やっぱり「好き」のベクトルが違うんですかねえ…………。

しばらくの間、当の本人は私を意外そうな顔で見つけていましたが、いきなりふつと表情を切り替えた。そして、

「……………ありがとうな」

そう返すと、ボロボロの状態のまま、陸斗さんが立ち上がる。カッコつけてもその状態だと締まらないですよ。紫さんや幽香さんだって必死に笑い堪えてますし。

「ちよつと行ってくる」

それだけ言つと、陸斗さんは飛び立っていく。

……………本当に世話が焼けますねえ。

「さてと、ヘタレがようやく飛んでいきましたし……………どうしまし  
ようか？」

「とりあえず飲みましょう。カップル誕生でも祝ってあげましょ」

そう言つと、いくつもスキマを開き、中から酒瓶を取り出す紫さん。  
ええ、こうなったら飲まなきゃやってられませんし。

……………あの2人、うまく行ってくれるといいんですがね。

[Side Out]

番外編：転生兄妹IFその3 IF      ラスボス編（前書き）

いや、ホントは書くつもり無かったんですが………つい、勢いと言いますか。

感想やら見ている内に「あ、こうしたらよくね？」みたいな考えが浮かんで来まして、勢いで書き上げました。

ズバリ、「もしも玲夜がラスボスだったら………？」

「はい、そこまで」

その声と共に、今にもデユナミスへ襲いかかるうとしていたネギに、何か巻き付き、そのまま拘束する。

突然すぎる事態に、暴走状態にあるネギはもちろんの事、楓たちも反応出来ずにいた。

「まったく………こんなのが私の末裔なんて、世も末ですね」

場違いにも程がある言葉が聞こえつつ、ゆっくりと彼女は階段を降りてきた。

その姿を見て、思わず息を呑む面々。何故ならば……。

「玲夜先生………？」

魔法世界へ来る前、イギリスで別れた担任教師、風峰玲夜だった。彼女は魔法世界へ来る事は無く、そのまま旧世界へ残ったはずだった。

それなのに………何故ここに？

呆然とする自分の生徒達を見る事なく、彼女はそのまま満身創痍のデユナミスへと近寄っていき、ため息を一つ……。

「油断しすぎですよ、デユナミス。王家の魔力を持ち、私の力に通じているとはいえ、あんな子供に追い込まれるとは」

「……………面目ない」

その次は、不甲斐ない少女たちの番だった。

「あなた達もです。相手を侮って、その結果がコレです」

「「「す、すみません……………」」」

やれやれと言わんばかりに、玲夜は肩を竦める。

相手が戦闘訓練もろくに受けていない一般人と言っても、あの学園長がネギのために揃えたクラスの一員だ。

アーティファクトさえあれば、即戦力にもなり得る。その代表例がアスナだ。

「ま、思ったより楽しめましたし、由としましょう。…………あー、栞さん。お仕事ご苦労様でした」

「は、はい」

彼女の役目は、儀式の時間稼ぎを行う事と、ここへネギ達を連れてくる事。

アーティファクト故に託された危険な任務だったが、それでも彼女はやり遂げた。しっかり労ってあげなくては。

「あなた達もご苦労様でした。…………さ、帰っていいですよ？」

「ふ、ふざけないでくださいー!!」

そう怒りを露わにするのは、術式兵装が解除され、暴走状態から解放されたネギ。

拘束されたままだが、彼の目は真っ直ぐに玲夜を睨み付けている。そしてそんな時だった。彼らのところへ、何かが飛んできたのは。

「ぐっ……………」

「せつちゃん!!」

それは全身を切り刻まれ、血まみれになった刹那だった。まさに満身創痍と言っても過言ではなく、既に戦える状態で無い事は確かだった。

「センパイ、いくら予想外の事が起きたからって、油断したらあきまへん」

くつくつと嗤いながら、月詠も降りてくる。

彼女を治療するために木乃香が近づこうとするが、玲夜がその前に立ちはだかる。

「れ、玲夜先生………？」

「放っておいても死にはしません」

彼女の口から放たれた言葉に、木乃香は信じられないものを見るかのような目で、玲夜を見つめる。

自分達の知る玲夜はそんな事を言う人間じゃ無い。

常に自分達の事を思いやってくれている、優しい女性のはずだ。

「玲夜殿、これはどういう事でござるか？」

常に冷静な楓でさえも、この事態に相当の驚愕を覚えていた。

風峰玲夜。確かに彼女は得体の知れない何かがあった。

しかし、修学旅行の時も、麻帆良祭の時も常に自分達の味方だった。

「……………ま、ここまで来たらちょうどいいでしょうし、ネタバレしちゃいましょうか」

くすくすと笑いながら、玲夜はそう言ったのけた。

既に事態は最終局面にまで進んでいる。別働隊もいるようだけれど、

それも些細な事。

「まず、私は別に裏切ったりなんかしてませんよ？」

「はあ!？」

「でも、明らかにそっちのオジサンと親しそうに話してたし、玲夜先生裏切ったんでしょ!？」

玲夜の発言に、ゆうなとまき絵がそう問い質す。

後者は普段バカなのに、どうしてこーゆう時だけ頭が回るんだろうか。

玲夜にはそれが不思議でならない。

「いいえ、裏切ったりなんてしてませんよ。だって……私は最初から、こちら側でしたし」

「……なっ………!？」

確かに、それならば裏切りようがない。

1度も仲間になっていないし、最初から敵だった。そう、最初からだ。

「修学旅行の時は焦りましたね。まさかあの子が、敵に回るとは思ってたんですけどし」

フェイトの目的は元々、近衛詠春の現在と、サウザンドマスターの息子達を見るためだけのものだった。

しかし、かつてのサムライマスターは見るも無惨に衰え、英雄の子供は使い物にならない。

唯一の収穫といえば、リクトの才覚が本物であった事が確認できたくらいだろう。

「まったく、20年前にも邪魔されるわ、儀式には“黄昏の姫巫女”が必要だっていうのに、あのバカに連れて行かれるわ……………こっちの苦労も分かってくさいよ、まったく。おまけにタカミチとゲール**の**バカには風潰しに狩られるわ……………何ですか？ “紅き翼”は私たちの疫病神ですか？」

「まったくもってその通りだと思うがな」

デユナミスのその言葉に、「うんうん」と頷き、同意する暦たち。20年前からずっと厄介事しか引き起こさない。ハッキリ言って、疫病神以外の何者でもない。

「ま、壊滅状態から頑張つて、20年でここまで出来たのは我ながら頑張つたと思いますよ？ 最初の時は普通に100年単位でしたからねえ」

「……………最初の、時？」

その瞬間、ネギは嫌な予感が身体を通り抜けるのを感じた。そう、初めて玲夜と会った時も、微かにだがそんな感じがしていた。しかし些細な事なので気にしていなかったのだが……………ついさつき、彼女がここに現れた瞬間にもそれは強まりつつあったのだ。

……………その答えは今、目の前にある。

「ええ、最初の時です。私が“完全なる世界”を作った時ですから、もう1000年以上も昔の話ですかね」

「作った……………？」

“完全なる世界”を作った。

そう、それはすなわち……………つまり、彼女の正体は……………。

「では、改めまして自己紹介しましょうか」

玲夜がパチンと指を鳴らすと、その瞬間彼女の姿は変化した。いつも通りのスーツ姿ではなく、あの映画でも見たローブ姿。しかし、動きやすいように改良が重ねられており、より女性らしさが見て取れるように。

また、フードも被っておらず、その顔は露わとなっている。

「私は“造物主”<sup>ライフメイカー</sup>。万象遍くこの世界の創造者であり、“始まりの魔法使い”<sup>らくえん</sup>。……わかりやすく言うと、ラスボスです」  
「……なっ！？」

玲夜が名乗ったその名前に、ネギ達は凍り付いた。  
造物主。それは、完全なる世界の盟主で、20年前にこの世界から消えたはずの存在。

「う、嘘です！ だって……造物主は20年前、父さんに負けて……」  
「たかが人間に、“始まりの魔法使い”が敗れるわけ無いでしょうに」

少し考えれば分かる事だ。

決して勝てるはずの無い相手に勝つ。それはあり得ない。

……アルビレオ・イマは「アレに勝てるものはいない」とまで断言し、ジャック・ラカンでさえもが「勝てねえ」と思った相手だ。

「満身創痍のくせに私に挑んでくるバカの相手なんて、赤子の手を捻るよりも容易い事でしたよ」

1度致命傷を与えたが、それでもなお立ち向かってくる。  
熱血溢れる「少年漫画」のような展開は、傍から見ている分にはい

いが、自分がそれに対応すればそれはそれで面白くない。  
儀式も終わっていたし、長引かせるつもりも無かったので、さくつと終わらせたのだ。

「ま、私が勝ってそれで終わり〜だと面白くないですし、ちよつとだけ夢を見させてあげたんですよ」

今後、道化を演じてくれる愚か者達に“英雄”という名の夢を。  
手を下したナギ・スプリングフィールドに仮初の命を与え、自分が倒されたように演じ、囚われのお姫様を救わせ、そして子供達を生ませた。

そして10年前、貸し与えた命を返してもらい、ナギ・スプリングフィールドはようやく死を迎えたのだ。

……遊びで死んだふりした所為で、立て直すのが大変だったが。

「なかなか大変でしたよ？ 気づかれぬように仮契約カードに細工を施すのは」

「……まさか、クウネルさんやラカンさんのカードは……」

ちよつと魔力供給のラインを弄れば、カードは死なない。

仮にも“始まりの魔法使い”だ。……それくらいの事は容易い。

「ちよ、ちよつと待ってください。でもネギ先生は6年前にお父さんに助けられて……」

のどかの言葉に、玲夜は嗤った。

とても愉快そうに、とても哀れだと言わんばかりに。

そして口を開き、聞こえた声は彼女のそれでは無かった。

「『そうか、お前がネギか。大きくなつたな』」

「！！」

「『そうだ、この杖をやるう。俺の形見だ』」

とても愉快そうに、その言葉を紡ぐ。

「『こんな事言えた義理じゃねえが……元気で育て、幸せにな』」

「ま、さか……………」

「……………少しでも疑わなかったんですか？ あれは、ナギ・スプリングフィールドじゃないって」

最初から全て定められていたのだ。

そう、ネギ達でさえもが、生まれる前から彼女の掌の上で踊っていた。

「なかなか見物でしたよ？ 10歳の子供先生が過去のトラウマを抱えつつ、仲間を増やして父親の行方を追う。……………この上ない喜劇でした」

「あ、あなたという人は……………！！」

許せない。

怒りに燃えるネギは、無理矢理その拘束を引きちぎろうとするが、びくともしない。

「さて、そろそろ儀式も終わる頃でしょうかね」

ふと思い出したように呟く玲夜。

だが、ネギは心の中で安堵していた。

“造物主の掟”とアスナの奪還には小太郎達が向かっている。彼らが奪還に成功すれば、まだ猶予は……………。

「『小太郎君達がアスナさんと鍵を奪取すれば、まだ勝機はある』。

……本気でそう思ってます？」

「なっ……………！？」

「あなたが考える事なんて、容易に想像が付きます。まさか、一番重要な場所にテルティウムと調さんだけだと本気で思っているんですか？」

切り札というのは、最後まで取っておくから切り札と言うのだ。

各地に散らばっていたアーウェルンクスシリーズは、既に呼び戻して待機させてある。さらに向こうには“彼”がいる。

「どうせだから、見せてあげましょうか」

再び指を鳴らすと、そこにウィンドウが展開される。

そこには、祭壇のような場所が映し出されており、変わり果てた仲間達の姿もそこにはあった。

「！ 小太郎君！」

壁に腕を槍で縫い付けられ、まるで貼り付けのような形でぐったりとしている小太郎。

その側には、血溜まりに伏せる夕映と朝倉。さらに氷柱の中に閉じ込められたベアトリクスとさよ……………。

そして彼らの前には、返り血を浴びたリクトの姿があった。

「ど、どうしてリクトが……………」

そしてその隣には、フェイトに似た風貌の少女の姿もある。  
セクストウム

“6番目”。水のアーウェルンクスを拝命する少女だ。

「決まってるじゃないですか。彼もまた、私の同士です」

ネギとリクトの兄弟仲が既に壊れきっている事は、周知の事実である。

元々、6年前のあの日から断絶しており、それは麻帆良祭で決定的になった。

『……………ん？　なんだ、玲夜。見てたのか？』

「いいえ、今繋いだところです。……………殺したんですか、それ」

『いや、殺してない』

その言葉に、ひとまず胸をなで下ろすネギ達。

しかし、次に放たれた言葉でさらに凍り付く事になる。

『ああ、そうそう。フェイトから伝言「儀式は終わった。発動のタ  
イミングは君の任意で」』

「了解しました。……………では」

何が起きるのか分かった。

何も言わずとも、楓や古菲は玲夜目がけて飛びかかる。しかし、遅い。

玲夜はその場を1歩も動かず、見向きもしない。楓たちは見えない壁に阻まれたかのように停止し、そのままはね飛ばされる。

「リライト」

その呟きと共に、世界が虹色の光で包まれた。

しかし、それは一瞬のことであり、思わず目を瞑ったネギ達でさえも何が起こったのか分からなかった。

リライトが発動したのならば、自分達は“完全なる世界”に封じら

れるはずではないのか。

そんな彼らを待っていたのは、玲夜の冷たい目差しだった。

「……………まさか、未だに魔法世界が崩壊する原因が“魔法力の枯渇”だなんて、くだらないデマを信じてるんじゃないでしょうね？」  
「え……………？」

どうやら図星らしい。

これには玲夜だけでなく、デユナミスもため息を吐いた。

「……………よく考えてみるがいい。魔法力が枯渇するなら、何で魔法世界よりも長く続いている地球の魔法力は枯渇しない？」

「……………言われて、みれば」

「魔法力は常に循環してゐるんです。だから、決して枯渇する事は無い。……………まあ、精巧な作り物ですから、何百年も経てば綻びが目立ってきますが」

その綻びを補修するのが“世界の終わりと始まりの魔法”リライト。強制的に綻びを“終わら”せて“始ま”らせる。それによって補修を行っている。

もちろん、魔法世界全体を覆うほどのリライトには、“黄昏の姫巫女”は必要不可欠なわけなのだが。

「じゃあ、僕たちがやってきた事は……………」

壮大な茶番劇。全て、玲夜の作り上げた脚本に従って動く、万丈の駒に過ぎない。

まさか、20年前にちよつと手を加えただけで、ここまで動いてくれるとは……………そこまでは想像していなかったけれど。

……………そう、ただ1人を除いて。

（兄さんだけは、違いますけどね）

修学旅行の後、麻帆良に戻ってから問い詰められた。

「お前は何を考えているんだ？」と。

最初はシラを切るつもりだったけれど、リクトが口にした推論は核心を突いており、思わず拍手してしまいそうになった。

……さすがは兄さんだ、と。

「そう言えば、まだ入ってきたのがいましたっけね」

ふと、思い出した。

彼らは飛行艇で“墓守り人の宮殿”へと突入してきた。

結構な損害を与えていたみたいだし、おそらくは修理に当たっているのとその防衛に専念している別動組がいるはずだ。

「それならば問題無い。既に4番目と5番目クゥアルトゥム クゥイントゥムを向かわせてある」

「あら、根回しがいいんですね」

そこそこやるようだけれど、さすがにあの2人を相手にしては渡り合えない。

たかが人間如きが、稼働状態にあるアーウェルンクスシリーズに敵う道理は無いのだから。

「では、そろそろ幕引きにしましょうか？」

……いや、とりあえずごめんなさい。

感想で“完全なる世界”が味方だったらとか、そーゆー意見があったので考えてたら浮かんなんです。

いくつか捏造設定を書き加えてあります。魔法力の循環とか。まず、大まかな流れとしては……。

#### 大戦期

1 ‘玲夜、度々“リライト”で魔法世界の修復を行っている。

2 ‘“紅き翼”が曲解し「魔法世界を滅ぼそうとしている」と認識。

3 ‘ナギ、玲夜に敗北。そのまま死亡したが、玲夜の“気まぐれ”で仮初の命を与えられ、「造物主に勝利した」事になる。

4 ‘フエイトの核をデュナミスが回収。人形師の術を用いて復活させる。

……こうして見てみると、こっちのネタじゃ“紅き翼”は道化以外の何者でもありませんね。

で、原作開始前までを並べてみると……。

1 ‘10年前にアスナを連れた“紅き翼”とフエイト（2番目）達が交戦。その際、玲夜はナギに与えた“命”を取り返しており、それによってナギ死亡。

2 ‘ナギの死体を弄って、仮契約カードへの魔力供給を利用し、ナギ生存を誤認させる。

3 ‘同時期にネギとリクト誕生。

4 ‘6年前、悪魔襲来。玲夜はナギに化けて悪魔を撃退し、ネギは偽ナギに出会う。なおリクトはこの時、偽ナギに違和感を覚えている。

5 悪魔襲来について兄弟喧嘩勃発。2人の仲は険悪状態に。

そして原作突入なわけですが………基本的に原作に沿って行われました。

これは完全にネタです。まさか書いてしまつとは思ってませんでした。

………これからもネタを書くかもですが、ご了承ください。

第82話：「かつて」と「これから」【後編】

「Side Aya」

「……………」と、私が知ってるのはこのくらいですね」

霊夢さんに私の知りうる限りの、あの2人の馴れ初めを話し終えた。

「へ……………」そんな事があったんだ。で、その後は？」

いや、実際あの後どんな会話だったか私も知らないんですよ。

とりあえずフルボッコにして発破かけて送り出してから、私たちずつと飲んでましたし……………」

しばらくして2人が帰ってきて、その様子からうまく行ったんだろぅな〜と思って。

だから2人がどんな話をして、それで纏まったのかは知りませんので。

「まあ、そこまで長時間じゃありませんでしたし、そこまで過激な事はしてないと思いますけどね」

「か、過激って……………」

あらあら、霊夢さん。何を想像したんですか？ 顔真っ赤ですよ。そりゃあ霊夢さんだってお年頃ですし、そーゆー事に興味を持つのはわかりますけどねえ。

そう口に出した瞬間、殴られた。……………何するんです。

「うつさい！ー！」

おお、こわいこわい。

[Side Out]

[Side In]

過去暴露が終わり、それぞれが好き勝手する中で、私は陸斗にそつと寄り添っていた。

さすがの陸斗も、あの後何があつたかまでは話せなかったみたいですね。

……まあ、陸斗からしてみれば、あれを人前で話すのは躊躇われるでしょう。

私だって、さらさら話すつもりはありませんし。

「覚えていますか？」

そう尋ねると、驚いたような顔で陸斗が私を見つめてくる。  
ちよつとだけ……………そう、ちよつとだけ懐かしくなっただけです。  
人外である私たちにとって、50年なんてそれほど大した時間じゃない。だけど、それでも人と共に過ごせば、それが長く感じる事だ  
つてある。

……………だから、ちよつとだけ昔を思い出ただけですよ。

「あの時、一方的に私が押し倒して想いを告げて、それで戸惑ってたあなたを見て、それで早合点して逃げてしまつて……………」

本当に後悔した。死んでしまいたいほどに後悔していた。

自分の行いは単なる一方通行の独りよがりだと。それでまた私は泣いて……………。

それからそう時間が経たぬ内に、ボロボロになった陸斗が私の所へやってきた。

……………最初は、呆氣にとられてしまったっけね。何でボロボロなの  
かって。

「私たち、似た者同士なのかもしれませんね」

何よりも“失う”事を恐れている。

だからこそ、私たちはなかなかお互いに触れる事が出来なかった。  
触れる事が出来ずに、進む事が出来ずに、どっちつかずなままで停  
滞していた。

そつと、陸斗の顔に触れる。……………手を伸ばせば、こんなにも近く  
にいたのに。私たちはそれに気づけなかった。

「んっ……………」

啄むようなキスをする。

この人は所謂「草食系」だから、私からしっかり踏み込んでいかないと。

「…………あの時も、こんな風にキスされたっけな」

「あう……………」

い、いえ…………あの時はその、まだへたくそだったので。

歯をぶつけてしまったし、後でその事も思い出して凹んでしまいまして…………うう。

「…………ん」

今度は、陸斗から。

さつきよりも深く、強く。

こうして互いに存在を確かめられる。愛が存在していると感じられる。それだけで、充分に幸せ。

「私たちの始まりも、あなたからのキスでしたっけ」

あの時の事を思い出して、くすりと笑う。

ボロボロの陸斗が突然現れて呆氣にとられていると、いきなり掴まれてキスされて…………。

いえ、あの時は何がなんだか分からずに、パンクしてしまいそうでしたね。

「『好きな相手にキスしたいと思うのはダメなのか?』…………我ながら、こっ恥ずかしい言葉を言ったもんだな」

「ふふふ」

目を閉じると、あの光景が蘇る。

いきなりキスされて、そう言われて……何が起きたか分からず呆然としていて、それで陸斗様がさらに畳みかけるように口を開いた。

「俺も、お前の事が好きだ」

「ッ!？」

目を見開き、陸斗様を見つめる。

今まで見た事も無いような、真剣な顔で私をじっと見つめている。

「ただ、過去きつうにばかり気を取られてて、未来あしたを見ようとしていなかった。こんなにも近くに、答えはあったのにな」

そつと私の手を取り、ぎゅっと握りしめる。

陸斗様の温もりが、そこから伝わってくる。

「ごめんな。自分の事ばかり考えていて、お前の事を見ようとしなかった。……さつき説教されるまで、自分が最低なバカだって事にも気づけなかった」

違います。私だって陸斗様の気持ちを無視していた。

一方的に押しつけて、それで勝手に悩んで……陸斗様だけが悪いんじゃない。私だって同罪です。

ぼろぼろ泣きながら、ぎゅっと陸斗様の胸に顔を押しつけて、ただその温もりに甘えていた。

「ありがとう。……俺を愛してくれて。俺に未来あしたを教えてくれて」「りくと、さま……」

「だから、その明日をお前と一緒に歩いて行きたい」

その言葉に、まるで弾かれたように顔を上げて陸斗様を見る。

……照れくさそうに顔を背けている。

あ、あの……今の言葉ってその、つまり……。

「と、とりあえず！ この話はこれで終わり！！ ほら、神社戻るぞ！」

顔を真っ赤にして、私の手を握ったまま、歩き出す。

その気になればもっと早く歩けるだろうけど、私を気遣ってくれているのか、ゆっくりと歩いている。

「紫たちから根掘り葉掘り聞かれるだろうけど、そのくらい覚悟しておいてくれ」

それはそれは……大変ですね。

でも、今の幸せに比べたら大した事じゃあない。そのくらいの事なら大丈夫ですよ。

涙を拭い、そのまま陸斗様と一緒に歩き始める。

……その手を繋いだまま。

あの後が大変でしたっけね。

神社に戻ったら、完全に出来上がった面々を相手に悪戦苦闘しましたし。

八雲様には絡まれるわ、雛さんは脱ぐわ、天狗はそれを煽るわで……まあ、それもそれでいい思い出ですが。

「あれから、本当に色々ありましたっけね」

天子様の罪も、それほど重くならずには済んだ。

天界へ戻り、全ての事後処理と滞っていた行政の回復。全ての状況を安定させる事が、天子様へ下された判決だった。

……何よりも混乱していたのは天界の民。

それを理解した上で、閻魔様はあのような判決を出したのでしょう。

「天子が戻って来てからしばらくして、祝言を挙げたんだっけな」

まあ祝言と言っても、簡単に「結婚しました」と報告しただけですが。

後はいつも通り、神社で宴会。……いつも通りなのが、とても嬉しかったです。

……えと、あの……その後でまあ、色々初めて致したわけでした……ええ。

「衣玖さ、もしかしてだけど……………瑪瑙に嫉妬、してたのか？」  
「……………」

この人って、どうしてこういう時に鋭くなるんでしょうか。  
瑪瑙さんに嫉妬してる部分は、無いとは言えませんが……………ただ  
でさえ、負けてるところがありますし。

「瑪瑙さんとは、結婚して数年で子供が出来たんですね」  
「ん？ ああ、確かにそうだったな」

私とは結婚して50年近く経ちますが、子供が出る兆しがありませんし。

陸斗がかなり特殊な妖怪で、私とは相性云々の問題があるのかもしれませんが、それでも結構悔しいと思います。  
……………だから、ゆちるさんと顔を合わせると、どうしても嗟み合い  
になっちゃうのかもしれないね。

「子供、か」  
「陸斗も忙しいですし、あまり無理は言えませんがね」

一応、夫婦のコミュニケーションは取っていますけど、そこまで綿  
密にやってるわけでもありませんし。  
女として、好きな男の子供が欲しいと思うのは当然です。

「……………夏休みに入ったら、レイヤ達を連れて魔法世界へ行く」  
「え？」

「魔法世界の滅亡。……………超の事もあって分かったが、それほど時  
間が無い。MMがネギ坊主を手に入れて油断してる隙に、俺たちも  
魔法世界へ入る」

全ての決着を付ける……と。

ですが、何らかの方法は見つかったのですか？

「まだだ。だが、ただ無為に夏休みを過ごすより、向こうで何かしらの行動を起こした方が見えてくるものもある」

そう、この人は優しすぎる。

背負わなくていい余計なものまで背負い込んで、それでさらに何とかしようとする。

……そーゆーところが好きなんですけどね。

「レイヤさん達は連れて行くんですね？」

「ああ。まだそこまで詳しく話していないが、それでも自分の目で見たいものがあると言っていた」

では、夏休みはイギリス旅行ですね。

水着は……いりませんね。色々と準備をしておかなければ。

「……………」

「あら、『付いてくるのか？』と聞かないのですか？」

「答えが分かり切ってる事を、わざわざ聞くほどバカじゃない」

ええ、ぶっちゃけると「答えは聞いてない！」ですし。

イギリス旅行、楽しみですね。

「……………アスナ達が中学を卒業したら、教職は辞める予定だ」

「え？」

「元々、死んだガトウへの誓いだったからな。アスナの成長を見届けるってのは。それが終わったら、一緒に幻想郷へ帰ろう」

……ええ。

陸斗の手を握りしめたまま、もう1度キスをした。

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

……それ、本当ですか？

「残念ながら、本当です」

私同様に、困惑した表情の高音さんがそう答える。

いや、何でそんなに複雑な事になってるんです。学祭は終わったっていつのに。

「記憶処理と仮契約破棄を行うのも吝かではない。……………これが学園側の見解です」

……………そこまで追い詰められていたとは。

ええ、正直に話すとですね。のどかさんが自殺を図ったわけですから、幸い発見が早かったので大事には至らなかったのですが、どうも精神が危うい状態にあるらしい。

「彼女はアーティファクトは危険ですから、それも無理は無いのかもしれませんが」

「一応、風峰先生にもお伝えください。担任はあの人ですから」  
「わかりました」

原因は十中八九、あのバカネギでしょう。

まったく、いなくなつた後も問題を残していく……………どこまでも厄介事しか引き起こさないんですから。

どちらにせよ、彼女はこちらの事を識りすぎていますし、アーティファクトも強力。ならば記憶処理も已む無し、か。

「……………所詮、戯言に過ぎませんね」

ま、これでこちら側との繋がりは断たれるでしょうし、私としては気が楽になります。

[Side Out]

「Side Other」

宮崎のどかが手首を切り、自殺を図った数時間後。

幸いにも発見が早かったために、そこまで深い傷にはならず済んだが、大事を取って1日入院する事となった。

そんな彼女の病室には現在、親友である綾瀬夕映の姿があった。

「のどか……………」

ベッドの上で安らかに眠る親友の姿を見る。

その手には包帯が巻かれており、その無地には赤い何かが滲んでいる。

どうしてこうなったのか。…………それはやはり、かの少年がいなくなった事があるだろう。

おまけに彼女は、その少年の心を読んだ。それで深いダメージを負ったのかも知れない。

「私は、どうすれば」

あの時、無理矢理にでも彼女を制止していれば、こんな事にはなら

なかったかもしれない。

何がいけなかったのだろう。何故、ネギ・スプリングフィールドはあんな馬鹿げた事件を起こしたのだろう。

そんな答えの出ない疑問に悩まされている中で、携帯が鳴り響いた。夕映は自分の携帯を探るが、自分のものではない。

「……………？」

まさかと思い、のどかの制服を探り、中から彼女の携帯を取り出す。液晶には「ネギ・スプリングフィールド」の名前が浮かんでいる。慌てて夕映は着信ボタンを押すと、その電話に出る。

「も、もしもし！？」

『初めまして。ネギの携帯からかけているのだけど……………あなたは？』

「あ、わ、私は綾瀬夕映と言いまして、ネギ先生の生徒です」

聞いた事のない声だ。

しかし、ネギの携帯電話からかけているという事は、“向こう側”の関係者である可能性は高い。

心の奥で燦っていた好奇心がほんの少しだが強まり、その通話を続ける。

「あの、あなたは……………？」

『ああ、ごめんなさい。私、ネギの姉のネカネ・スプリングフィールドと言います』

聞いた事のある名前だ。

確かネギの従姉で、彼から「お姉ちゃん」と呼び慕われているはずの女性。

何故そんな人がどこかに電話を……と思いつつ、夕映はさらに尋ねる。

「それより、のどかに何の用事でしょうか？」

『……そこに、宮崎のどかさんはいないのかしら？』

「えっと……今、ちょっと電話に出る事は出来ません」

今はまだ眠っている。

無理矢理起こすのはちょっとマズイかもしれない。

『あなたは、ネギの味方がしら？』

「え………」

夕映は言葉に詰まった。

自分は彼の味方なのだろうか？

宮崎のどかの味方で在りたいとは思っている。ならば、自然とネギ・スプリングフィールドの味方にもなり得るのかもしれない。

だから、夕映は自然にそうだと答えていた。

『なら話が早いわ』

「え？」

『ネギを助けて欲しいの。……あなた達の力が必要なのよ』

### 第83話：君が知らない物語

〔Side Rikuto〕

学祭が終わり、1週間が経過した。

慌ただしかった日々もすっかりなりを潜め、いつも通りの麻帆良が帰ってきた。

……まあ、麻帆良が慌ただしいのはいつもの事だが……その辺はツツコまないでもらえると嬉しい。

「気を抜くな！ 魔力行使20セット連続で行くぞ！」

「はい！！！」

俺は現在、修行を見ている。……これでも教師だ。物事を教え導くのは慣れている。

相手は高音・D・グッドマンと佐倉愛衣。

何でも、学祭中にレイヤと仲良くなったらしく、レイヤ経由で修行を見て欲しいと頼んできた。

特に断る理由も無いし、時間もあるからこうして相手をしている。

（こうして見てみるとだが、2人とも優秀だな）

まず、佐倉愛衣。彼女はアメリカのジョンソン魔法学校の演習で、オールAの成績を残した秀才という情報がある。

攻撃魔法よりも、索敵や結界などの補助魔法の能力に突出している。どちらかと言えば補助向き魔法使い……RPGで言えば僧侶だな。

高音・D・グッドマンは影使い……操影術の使い手だ。

これはかなり習得の難しい技法の1つで、攻守共に優れた性能を発揮する。特に物理攻撃に対しては極めて高い防御力を見せる。

「まずは基礎を固めてもらう。可能な限り実戦を想定した訓練も取り入れていくから、覚悟しておくように」

「は、はい！！」

そう言うと、準備をするため塔の中へと戻る。

……鍛える、か。

随分と久しぶりだな。最後に面倒見たのは……アスナだったか？

「…………随分楽しそうだな」

「エヴァ」

なんだ、いたのか。

「ここは私の別荘だ。それより、あの2人の面倒を見ていたんだろ  
う？」

くい、と視線で指すのは、言われた通りに魔力行使の自己練習を行う2人。

まあ、レイヤに頼まれたところは大きいが、そう無事に扱う事に出  
来ないしな。断る理由も無いし。

「それにしては随分、楽しそうにしていたのでな」

「…………まあな」

戦闘の師匠として、最初に誰かを鍛えたのは…………カリムだったか  
な。

魔法という物騒なものがある分、あつちは治安が悪いし、危険も多  
い。

色々あって、最低限自分の身を守るだけの实力は身につかせた。

……極めつけは、ゆちるのアレだった。

「そう言えば、魔法世界に行くらしいな」

一応、な。

8月初頭、イギリスゲートを使って入るのを予定している。

メンバーは……俺、衣玖、レイヤ、アスナ、このか、刹那、月詠……ぐらいだな。

あそこの2人と、春日とココネっていう魔法生徒も同じので行くが、向こうはMMに駐留するらしい。

俺たちはまあ、各地を巡りつつ、最後はオスティア……かな。

「お前は来ないのか？」

「まほーの国”の観光など、ご免だ」

まあ、呪いが解けていると言っても、一応コイツ賞金首だし。

MM辺りに入り込むのは無謀にも程がある。……元から観光に興味無いだろうし。

と、そんな風に話していると、塔の中に高音が入ってきた。

おいおい、慌ただしいがどうしたんだ？

「か、風峰先生！　それが、宮崎のどかさんがいなくなったと！」

学園から入ったという緊急連絡を受けて、俺たちは文字通りぶっ飛んだのであった。

そして、これこそが魔法世界の存亡を賭けた、俺たちの最後の戦いへの始まりとも言える事に……俺はまだ気づいていなかった。

〔Side Out〕

〔Side Takamichi〕

……これは、いったい何が。

病室から宮崎君がいなくなった事に看護師が気づき、すぐさま搜索が開始されたのたが……。

「もっと迅速に行動を起こすべきだったかもしれない、ね」

リンさんも苦い顔をしている。

ネギ君の件で、彼女の精神状態は極めて危ない状態にあったと言っている。先日の自殺未遂がそれを表している。

こんな事ならば、もっと監視を強めておくべきだったかもしれない。

「で、いなくなったの彼女だけじゃないんでしょう？」

「……………ええ」

そう。姿を消したのは宮崎君だけじゃない。

彼女の親友である夕映君もまた、姿を消している。学校にも姿を見せない。

2人のルームメイトの早乙女君も、2人がどこへ行ったのかは知らないという。

「麻帆良を通常の手段で出ようとしたら、まず警戒網に引っかかる」  
「しかし、それに引っかかっていないという事は……………」

「何者かが失踪に関与している可能性が高い」

自発的な失踪ならまだマシだ。

最悪、何者かによって誘拐された恐れもある。

宮崎君のアーティファクト「いどのえにつき」は、極めて強力な能力を有している。

表層意識が読めるのだから、どんな人間だって欲しがるはずだ。…

……狙われる可能性だって否めない。

……こんな事ならば、京都から帰ってきてすぐに仮契約を破棄させておけばよかった。

「過ぎた事を悔やんでいても始まらないよ。…………タカミチ、近衛右門への連絡よろしく。ボクは西の方へ話付けるから」

「…………はい」

彼が動くのであれば、西はどうにかなる。

これでそう遠くない内に居場所は割り出せる。…………宮崎君や夕映君が、「国内にいるのであれば」の話だけでも。

彼女達が既に国外へ出ていたとしたら、それはもう僕たちの手には終えない。

2人とも、無事でいてくれ…………。

[Side Out]

[Side Leiya]

……… どうか、ここまで形になりましたね。

しかし、思った以上に反動が大きい。これでは使い物にはならない。

「まだまだ改良が必要です」

「こおおおおおおあああああああああああ！！！」

「ねめすぽろめぬけっ！？」

走ってきたアスナさんの跳び蹴りが、的確に私の頭部を捉え、吹っ飛ばした。

い、痛いじゃないですか…… 何するんです！

「何するんです、じゃないわよ！！！」

「私たちを殺すつもりですか!？」

刹那さんまで……………そんな大げさな。

威力だつてそれなりにカットしてましたし、せいぜいちょっと意識飛ぶくらいですよ。

……………まあ、さすがにやりすぎたかなとは思ってましたけど。

「それにしても、とんでもない威力やな」

「うんうん、ホンマにそうすな」

「月詠ちゃんもそう思う？」

「ね」と笑顔で頷き合う2人。……………仲いいですね。

私もちよつと、術の余波で吹き飛んだ部分に目を当てる。

……………まあ、まさか根こそぎ全てを吹き飛ばすとは思ってませんでしたけど。

「ですが、まだ未完成です。攻撃はともかく、防御に使えないのは……………」

おそらく、兄さんクラスの实力者となると、あれですら無効化して攻撃してくるでしょう。

魔法世界へ行く前に、ある程度形にしくは……………。

「精霊魔法の習得、ですか？」

「ええ」

現在私はエヴァンジェリンさんに、精霊魔法の習得を前提とした修行を付けてもらっている。

習得にはやはり、精霊王との契約は必要不可欠。彼らと会うためには、魔法世界へ行く必要がある。

というのも、旧世界よりも向こうで召喚する方が、精霊側にとっても都合がいいとか。

「契約を結ぶにおいて、精霊王との戦闘になる可能性もあります。……相手は私たちの常識を凌駕した存在。おそらく、生半可な力や技では渡り合えない」

だからこそ、これを完成させる必要がある。これが無ければ、私は彼らと戦う事も出来ないでしょう。

「……確かに、私から見ても凄いやつわよ？ でも、そこまでする必要があるの？」

まあ、アスナさんの疑問ももつともです。強すぎる力は恐怖を呼び、それがまた争いへと繋がっていく。……ちよつとばかり威力を高めすぎましたし、後できちんと調整しますよ？

ですが、私には強くなる必要があります。

「アスナさんは、兄さ……風峰先生とは付き合いは長いんですね？」

「ん……もう、かれこれ10年以上かな」

「では、私の母についてはご存じですか？」

そう尋ねると、アスナさんは驚いたような目で私を見つめる。この反応からするに、おそらくは知っていると見て間違いない。

「魔法世界へ行くとなると、最初に降り立つのはMMになります。……これだけ言えば、分かりますよね？」

「……ああ、そういう事」

頭の回転が速くて助かります。

麻帆良学園を離れ、魔法世界へと赴くことから、いつどんな形で彼らが干渉してくるかは分からない。

入国するのだから、必ずしも向こうに動きが伝わってしまう。……

…そればかりは仕方ない事です。

「だから、最低限自分の身は守れるぐらい強くならなくてはいけません」

今の私では、最強と呼ばれる者達には太刀打ち出来ない。

強くならなくては、ならない。それこそ、兄さんの隣に立てるくらいには。

「この技は、そのための第1歩です」

さすがにやり過ぎという事は否認ませんが、「大は小を兼ねる」とも言います。

備えあれば憂いなし。……ま、どうにでもなりますよ。

[Side Out]

「Side Rikuto」

「調査結果ですが、国内の交通機関を宮崎のどか、綾瀬夕映両名が使用した形跡はありませんでした」

葛葉がすらすらと報告書を読み上げる。

その顔にはうつすらと汗が浮かんでおり、相当彼女も緊張している事が伺える。

……いや、それは俺たちも皆同じだな。

「西からの報告だけど、それらしき人物が西の領域へ入ったという様子は無い、だってさ」

「むっ……」

リンの言葉を聞いて、学園長が唸る。

ここまでの事を纏めると、宮崎も綾瀬も「西へは行っていない」。

さらに「国内の交通機関は使っていない」事が判明した。

交通機関……つまりタクシーや飛行機を使っていないにも関わらず、2人は国外を脱出したと考えられる。

……やはり、何者かに連れ去られた可能性が高いか。

「もしくは、何者かが2人に手を貸した………そういう可能性も考えられるね」

俺の推測を捕捉するかのようにつけ加えたリンに、全員の視線が集中する。

そう、今の推論は「2人が自分の意志で麻帆良から姿を消した」事になる。…………それを否定するだけの材料は俺たちには無い。もちろん、肯定する材料も無いが。

「でも彼女達のきつかけになったのは間違いなく……………」

「…………ネギ君、じゃな」

学園長の言葉にこくりと頷き、全員は揃ってため息を吐く。

愛はパワー…………否、愛は盲目とも言うが、ここまでの行動力を与えるとは。

思えば宮崎は、京都でもネギ坊主絡みの事ではいつもでは考えられない行動力を見せていたな。…………告白とかラブラブキスとか無間鳥居とか。

綾瀬も、どうやらネギ坊主に惹かれていたらしいし……………本当に厄介事しか引き起こさず、さらには残していかないな。

「学園長、他国の魔法協会には？」

「あまり仰々しく動けん。…………ネギ君の事を表に出すわけにはいかんしのう」

完全に不祥事だからな、アレ。

渡りを付けられる所として…………せいぜい、イギリスの魔法協会ぐらいだろう。

「ところで学園長、1つ気になった事があるのですが」

と、手を挙げて発言する瀬流彦。

おそらく、それはお前以外の全員もそう思っていたはずだ。

「何かの？」

「何故、北山先生がいないのでしょうか？」

.....  
.....。

.....嫌な沈黙が、しばらく続いた。

何だか学園長も嫌な汗を流しているようだし、すごく居たたまれない。

「その.....実はの、朝から姿が見えんらしいのじゃ」

この瞬間、俺たちの心の声は1つになった。

.....犯人、そいつじゃね？

[Side Out]

〔Side Kitayama〕

な〜んか、麻帆良祭も妙に食い違う感じで終わったんだよな。

てか、何でラスボスが薬味だったんだ？ 何か違う気がするんだが、よく分かんねえけど、薬味と淫獣が麻帆良からいなくなってるし。

………… いや、それはいい。薬味がいなくなれば、俺の壮大なる計画だって大幅に早まるし。

（やっぱり、まずは幻想郷だよな！）

麻帆良祭でもスキマBBAやあやや、さらには山田までいたんだ。間違いなく幻想郷は存在する！！

風峰のヤローが衣玖さんと結婚してるってのには気に入らねえけどな。

（ま、とりあえずは中に入らないとな）

麻帆良の事は後回しだ。物語としては、夏休みに魔法世界へ行けばいい。

俺の10つのチート能力の1つ、「絶対遵守のギアス」を使えば……  
ぐふふふ。

「さあ、待ってるよ幻想郷！ いざ行かん、我がハーレムを目指して！」

「………… 幻想郷は全てを受け入れる。それはとても残酷な事ですわ」

俺はその言葉に足を止めた。

その台詞………… まさか、いや間違いない。

「こんな下種までもを受け入れてしまうのだから」

何もかもを凍て付かせるような冷たい言葉に、振り向く。

氷点下とも言うべき目で、俺を見下す八雲紫の姿がそこにはあった。へっ、出やがったな！ スキマババアめ！！

「……………初対面の女性に向かってその口の利き様……………死にたいよ  
うね」

「は！ こちとら世界最強のオリ主“ミリオンマスター”の北山士郎様だ！」

殺せるもんなら殺してみろよ！

こちとら、10のチート能力の1つ「<sup>ゴットハンド</sup>十二の試練」で無敵無類だ。

いや、殺すのはダメだ。スキマババアの能力は使える。……………同人のこーりんよろしく、性奴隷に仕立て上げるか。

俺のこの「絶対遵守のギアス」によって！！

「さあ八雲紫！ 俺の奴隷になれ！！」

ふはははは、さあ這いつくばって「イエス、ユアハインス」と言え！

「……………」

だけど、向けられるのはさっきまでの冷たい視線で……………え？  
お、おいどうなってるんだ？ ほ、ほら「奴隷になれ」って！

「……………妄想癖もあるようね。本当に救われないわ」  
「うっ、うるさいー！！」

俺はオリ主なんだ！ この世界を救うために選ばれた転生者だ！

あの風峰とは違う。そうだ、あんな女誑しのクソヤローとは違うんだ！！

「さあ、お前の罪を数えやがれ！ 竜破斬！！」  
ドラグ・スレイフ

俺の手から放たれた赤い力の奔流が、スキマババアを包み込む。手加減無しの一撃だが、この程度でくたばったりはしないだろ。さあ、今度こそ「絶対遵守」で奴隷にして……………。

「黙りなさい、低脳」

ずぶつ……………。

嫌な音と同時に、俺の胸にも嫌な感触が伝わってくる。見ると、そこには腕が生えていて……………。

「あなた如きがその言葉を口にしないでちょうだい」

う、動けない……………！

コイツ、いったい俺の身体に何しやがつた！！

「……………かなり特殊な構造の身体してるのね。心臓を貫いたのに死なないなんて」

腕が引き抜かれ、俺の胸から血があふれ出す。く、くそっ！ こんな傷、すぐに治して……………。

「……………なら、死ぬまで殺してあげる」

スキマババアが指を鳴らすと、俺の足下にスキマが開く。咄嗟にその淵を掴んで、落下だけは避けたが……………スキマの中から

は腕のようなものが無数に伸びてきて、俺の身体を掴み、引きずり込もうとしている。

う、嘘だ……俺は、最強オリ主なんだ。こんなところで、こんなところで死ぬわけがねえ。

「私の息子を愚弄した事、万死……いえ、億死に値するわ」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の手はスキマババアに踏み砕かれ、思わず手放す。

そして、俺の意識はそこで完全に途絶えた。

### 第83話：君が知らない物語（後書き）

あ、一応これで北山は退場です。

……まあ、復活するかもしれませんがね。何せチート（笑）ですし。

なお、紫にギアスが通用しなかった理由は「彼女が妖怪だから」です。

ルルーシュも人間以外にギアスを使う場面が見られなかったところから、おそらく人間にしか通用しないものだと思われます。

## 第84話：People with no name

〔Side Rikuto〕

……瀬流彦、大丈夫か？

「え、ええ……何とか」

そうは言っているが、とてもその顔は大丈夫そうには見えない。いつもよりも数段青いし、口元押さえてるだろ？

無理せず吐いてこい。他の若いのだって、トイレに駆け込んだぞ。

「で、では、お言葉に甘えて」

そう言い残すと、口元を押さえたままトイレへと走っていく。

……あの光景を見たんじゃない？無理は無い。俺や学園長辺りはまだ耐性があるから良かったが。

とりあえず、北山を重要参考人として指名手配しようとしていた矢先、突然会議室にごろごろと何かが落ちてきた。

当初は呆然としていたが、冷静になってそれを見ると、それは今現在話をしていた北山の身体で……。

「……………紫、いるんだろ？」

そう呼びかけると、渋々と言った様子でスキマから姿を現す紫。やっぱり、コイツの仕業か。

「何があつたんだ？」

「……………ちよつとね」

「ちょっと何かあったぐらいで、普通人間を八つ裂きにしたりはしない」

そう言つてやると、あからさまに顔を顰めてそっぽ向く。  
紫の沸点は極めて高い。生半可な事でキレたりはしない。……それがキレたというのなら、相当な事があつたはずだ。  
例えば「北山が幻想郷に悪意を持って入り込もうとした」とか。

「……………」

………図星か。

いや、何となく想像は付いてたし。

普段から「ハーレム」とか「奴隷」とか口にしてたから、危ないヤツとは分かつていたから。

そう考えると、北山が何をしようとしていたのかも想像が付く。紫がブチギレてああするほどだ。

「だが、わざわざ会議室に落とす事無いだろうが」

俺たちみたいに色々と経験積んでるのはともかく、中にはさっきの瀬流彦みたいに耐性無いヤツだっているんだから。

「……………悪かったとは、思ってるわよ」

ぷいっとそっぽ向いたままそう謝る紫。

……………やれやれ、こーゆーところは昔から変わっていない。  
しかし、北山の正体から考えるとだが、あそこまでやっても蘇生しそうで嫌だな。

「スキマの中に永遠に封印……………は、やめとくか」

さすがにそれは紫が可哀想過ぎる。  
とりあえず、焼却処分の後に麻帆良湾にでもバラまいておくか。さすがにそれなら復活しないだろうし。

〔Side Out〕

〔Side Leiya〕

のどかさんと夕映さんが行方不明になって、さらに数日経った。  
最初は「すぐに帰ってくる」という認識だったみたいですが、さすがにクラスの雰囲気も沈み始めていた。  
こんな感じで、本当に大丈夫なんでしょうか？ …… 期末テスト。

「そっちなのか？」

「生徒としては、そっちの方が心配です」

ただでさえ、2人いないんですから平均点下がっちゃいますよ。  
それよりアーニヤさん、あなたイギリスに戻らなくていいんですか？

「ん、ちゃんと許可は下りてるから大丈夫よ。あと、私も魔法世界行くから」

「……………本当に大丈夫なんですか？」

モーマンタイ  
「無問題」

中国語で答えないでください。

「てゆうかさ、心配じゃないの？ あの人」

……………正直、何で私が心配しなくてならないのかって話です。

前にも言ったことがあるかもですが、私はあの2人がどうなろうと知った事じゃない。

そもそも、のどかさんが行方不明になった原因はネギにあると聞きました。

私はこれでも、のどかさんに対しては一目置いていたんですよ？  
普段気弱な反面、その意外にも高い行動力には特に。

「ですが、それを振り切れなかった」

超さんの存在が抹消され、都合良く記憶にも調整が行っているでしょうけど、それでも彼女の心には深い傷が残った。

どんな風に彼女が受け取ったかは……………私も知りません。  
だから麻帆良祭で、ネギの事を完全に振り切れなかった。

「誰かに連れ去られたにしても、彼女がのたれ死んでいようと、知った事じゃありません」

「相変わらずクールねえ……………」

褒め言葉ですね、ありがとうございます。

……………ま、アーティファクトやネギ関連で連れ去られて、私たちの障害になるというのであれば容赦はしません。

兄さんは“教師”という立場上、2人を守ろうとするでしょうが、そんな事知りません。

私の……………兄さんの障害になるのならば、私が確実に消す。

「……………あんたも相当なブラコンね。風峰さんにぞっこんなんですよ」

「ええ、それこそ最高の褒め言葉です」

アーニヤさんも含め、他の誰も「兄さん」の言葉の意味を正しく理解していないでしょう。

まさか、600年近く誤差が出てしまったとは思ってもいませんでした。

しかしここで喜ぶべき事は、実の兄妹に転生しなかった事です。それなら近親相姦にはなりませんからね（それでも気にせず、ヨス。ノソラみたいにするかもですが）。

……………もちろん、兄さんの1番は衣玖……………義姉さんですし、私は2番目で我慢しましょう。

母様もなかなか我儘なボデイの持ち主でしたし、あと5年も経てば私もそれなりに成長するはず。

「さすがに今のままでは犯罪ですし」

「あんたいきなり何言ってんのよ」

いえいえ、さすがに10歳では……………不都合がありますし。

兄さんも異性として認識しないでしょうし、やっぱり後5年は。

「だからあんた、何の話してんのよッ!!」

「いえ、ですからどうやったら兄さんを誘惑できるかと考えていて」  
「10歳児に欲情したら完全に変態じゃない! お願いだから、あんたもうちよい憤み持ちなさいよ! どうしてそんなバカ思考になっちゃったのよ!？」

失礼な。私のどこがバカなんです。

バカなのは、あのネギだけで充分ですから。

〔Side Out〕

〔Side Rikutō〕

期末テストはレイヤ達が頑張った事もあって、どうにか3位という結果に終わった。

ネギ坊主がいなくなった事で、精神的にダメージを受けていた雪広達もようやく持ち直してきて、ついに夏休みを迎えた。

……まあ、宮崎と綾瀬がいなくなった事は、未だに情報ゼロなんだが。

「……………なるほど、魔法世界に」

「ああ。詳しい事は言えないが、ちよいと野暮用でな」

現在、学園長相手に交渉中だ。

基本的に、魔法先生は夏休み中も麻帆良にいてはならない。

それをどうにかしなければならいからこそ、こうして交渉しているわけだ。

「そう言えばついさっき、アスナちゃんがこんなものを持って来ての」

「……………新クラブ設立申請書？」

「英国文化研究倶楽部と言っておったが……………アスナちゃんも狙いは別にあるようじゃがな」

なるほど、そういう事か。

要は、経費でイギリスに行くのが目的なんだろう。

既に魔法世界へ短期派遣される事が決定している高音達とは違い、今のままだとアスナ達は自費負担で旅費を出さなくてはならない。

さすがにイギリスまでの旅費となると、相当なものになる。中学生のお小遣いではどうにもならない。

だから、こうやって新しいクラブを立ち上げようとしているわけだ。

「どうせじゃから、風峰君が顧問やってくれんか？」

「俺？」

「ちようどええじゃろ？ 目的同じなんじゃし」

まあ、それもそうなんだが。

じゃあ1つだけ……学外の名誉顧問を1人認定して欲しいんだが。

「ふむ……なるほど、そう言う事か」

「そう言う事だ。で、どうだ？」

「あい、わかった。認可じゃ！」

ぼん、と書類に判子を押す。

これで正式に「英国文化研究倶楽部」の申請が認められた。さつさと教えてやらないとな。

……そう言えば、アイツら何やってるんだろ。

「今頃、エヴァにシゴかれとる所じゃよ。さつき電話で『久々に血肉湧き踊る』とか言っておったしの」

……アイツ、ノリノリじゃないか。ガラじゃないとかどうとか言っただくせに。

「……それと風峰君、宮崎君と綾瀬君の失踪についてじゃが」

「何か情報が？」

この1ヶ月近く、全く情報が入ってこない。

女子中学生2人だから、何かしら目撃情報が入ってきてもおかしくないはずだが、こうなるとやはり、何者かの関与が疑わしくなってくる。

「数日ほど前、2人によく似た風貌の少女がイスタンブールのゲート近くで確認されたらしい」

「何だと……？」

そうすると、2人は魔法世界へ向かったという事か？

いや、それこそ不可能だ。MMではしっかりと入国審査も行われているし、ただの中学生が簡単に入れる場所では無い。

宮崎と綾瀬のアーティファクトは、そういった事には役に立たない。なら何故……………。

「それと関係あるか分からんが、ネギ君とレイヤちゃんの従姉、ネカネ・スプリングフィールド君が姿を消したそうじゃ」

「ネギ坊主の？」

ネカネ・スプリングフィールドに関して、俺はそれほど詳しく無い。面識も無いし、レイヤもあまり話したからない。どうも、ネギ坊主を甘やかしていた原因という話らしいが……………。

失踪中の2人との共通点は、ネギ坊主。……………嫌な予感がするな。

（まさか、アイツらも魔法世界にいるのか？）

なら丁度いい。

向こうに行ったら、胸ぐら掴んでも引っ張ってこっち連れ帰ってやる。

[Side Out]

「Side Iku」

……お疲れのようですね、刹那さん。

「え、ええ……その、月詠がしつこくて」  
「はあ……」

まあ、分からなくはない。

月詠さんの剣の技量は、おそらく刹那さんを上回る。

彼女の素性は知らないけれども、本家にしか継承が許されない奥義を幾つも使ってくる。

しかし、その欠点としてとにかくセクハラが酷い（胸を揉まれたので、羽衣で締め付けておきました）。あと、とにかく斬りたがる（私と陸斗は防ぎました）。

「あれはもう、敵です。天敵です！」

「天敵、ですか」

私にとっての天敵は、やはりゆちるさんでしょう。

……いえ、もう1人いますね。あの女郎蜘蛛が。

「女郎蜘蛛？」

「ええ。恐ろしく厄介な蜘蛛で、何度陸斗を付け狙った事か……！」

「……ま、もう30年ぐらい昔の話ですけどね。  
結局、決着は付かずどこかへ行ってしまったわけですが。」

「まあ、その話はまた今度という事にしましょう」

正直なところ、あまり気持ちのいい話でも無いですし。  
とりあえず、忘れてください。

「ところで……迷いは晴れましたか？」  
「……いえ」

過去バレをしてから1ヶ月以上が経っていますが、未だに刹那さんの迷いは晴れない。

まあ、無理も無いでしょうね。彼女にとって、生まれてからずっと向き合ってきた問題なのだから。

「私の存在が、お嬢様達に受け入れられている事は分かっています。  
ですが……」

「……人間と妖怪の混血。」

ゆちるさんは幻想郷という特殊な場所で育ったため、迫害を受けた事は特になかった。

幻想郷を出てからも、世界中あちこち回っていたそうですし……  
これ、人選ミスでしょうか。

「まあ、振り切れないなら振り切らなくていいと思いますよ？」

私の言葉に「え？」という顔になる刹那さん。  
そういう考え方もあり、という事です。絶対に切り離せないものだ  
つてあるわけですし。

「誰でも、振り切れないものはあるんです」

陸斗にとつての博麗瑪瑙がそれに当たる。

50年前、陸斗と私は結ばれたわけですけど、結ばれてすぐに今の  
状態になったというわけではありません。

口論の1つや2つしましたし、瑪瑙さんに対しても相当嫉妬を隠せ  
ていませんでしたね。

……今は割合抑えられていますけど、やっぱりゆちるさんを見る  
度にそんな感情がふつふつと……。

「な、永江さん。顔が怖いです顔が」

「あら、失礼」

その辺はさておき、どうしても振り切れないなら……抱え込んで  
しまえばいい。

抱え込んで、迷いきって、その上で進めばいい。

ま、言葉でなら何とでも言えますけど、これがなかなか難しい。

（私もゆちるさんとはアレですからねえ……）

少しでも改善していくようにしないと。

うん、とりあえず一緒にお茶でも飲んでみますか。

[Side Out]

「Side Yue」

い、今の話は本当ですか？

「残念だけど、本当よ」

ネカネさんの話を聞き終え、私は大きく深呼吸した。

では、本来進むべきだった時間では、ネギ先生は“英雄”になるはずだった……？

それが変わってしまったのは……。

「風峰先生と、レイヤさんの所為……。」

「そうよ。あの方によると、あの2人は本来、この世界に存在しないはずのモノ。いてはいけないモノなのよ」

あの2人がいなければ、ネギ先生は立派な魔法使いになれていた。あの2人がいなければ、のどかも傷つかずに幸せになれていた。

あの2人がいなければ……………！！

「でもね、まだチャンスはあるのよ」

そう言つてネカネさんが微笑む。

「この話は、もうのどかちゃんにはしてあるわ。彼女は協力してくれると言ってくれた」

最初は、のどかの心を安定させるために、ネカネさんの話に乗ったつもりでした。

「ネギ先生は騙されて、その上で麻帆良を追放された。そんな彼を助ける」。

少しでも心の拠り所さえあれば、のどかの心は安定する。落ち着きを取り戻す。

……………ですが、ネカネさんの話した「本来進むべきはずだった道程」は……………！！

「どんな話でしょうか？」

「ネギを英雄にするの。ナギと同じ……………いえ、それ以上の……………世界を救う英雄に」

ネギ先生が英雄になれば、のどかは幸せになれる。私だつてきつと……………。

そう。これは全部、のどかのため。

「あの2人はどうなるですか？」

「そうね……………淒く邪魔よ。ネギの邪魔ばかりしてくるから。特にレイヤは……………」

確かに。彼女がいなければ、エヴァンジェリンさんもネギ先生を弟子にしていたはずです。

彼女がいなければ、ネギ先生はまほら武道会でも本戦出場を果たしていたはず。

彼女がいなければ………麻帆良祭であんな事にもならなかった。

「だから、ネギを英雄にするのよ。そうすれば、あの子なんていないもの」

ええ、その通りです。

レイヤ・スプリングフィールドなんて、いない。

のどかを傷つけ、ネギ先生を追い出した彼女なんて………いない。

「だからね、あなたにはちょっとやってもらいたい事があるのよ」

番外編：転生兄弟IFその4「コードギアス」（前書き）

というわけで、性懲りもなく再び番外編です。  
今回はコードギアスです。

あ、それともう1度アンケートというか、ご意見を窺いたいので後書きを見てください。

## 番外編：転生兄弟IFその4「コードギアス」

『世界は、我ら黒の騎士団が裁く！』

「……………茶番ですね」

そう言つて、モニターの電源を切る。

……………とりあえず、ここまでの流れで大きな変化は見られない。

私も兄さんも「コードギアス」の物語は知っている。クロヴィスの死からするに、ルルーシュは無事にギアスを得たと考えていい。…

……………まあ、気になる点はあるが。

そして今回、黒の騎士団がカワグチ湖のホテルジャックに介入し、堂々と名乗りを上げた。

「さて、これからどうしましょうかね……………」

進行を妨げる大きな変化は無い。しかし、細かい変化は見られている。

まず、ランスロットについて。シンジユクでの戦闘は、ブリタニア軍の映像記録にも残されていた。

そこに映っていたのはランスロットだけでなく、そのランスロットと戦う青い機体。

データによると、ランスロットの前身となった試作機「ランスロット・クラブ」とかいう機体らしい。既に破棄されたはずだったが…

……………？

「そして、今回のホテルジャック」

本来の歴史では、首謀者である草薙はギアスによって切腹自殺したはずだった。

しかし、人質が脱出した後に逃亡したという情報が上がってきている。これだけ食い違いが存在していると……。

（やはり、転生者の存在でしょうか？）

この世界に生まれ落ちる前、彼らから教えられた事。

先に転生した者達がいる。

…… 私たちの邪魔をしないのなら、無為に干渉するつもりはなかったのですが。

（現時点で怪しい存在と言えば……）

既にアッシュフォード学園については調べさせてある。

もちろん、ルルーシュとナナリーの存在を他者に知られるのはマズイので、しっかりと私の信頼のおける口の堅い者に探りを入れさせた。

するとどう考えてもおかしい存在が、アッシュフォード学園生徒会に見られた。

マーク・モルツァー。アッシュフォード学園高等部2年。……ルルーシュやリヴァル達のクラスメイトだ。

「美形、成績優秀、身体能力高し、さらにはKMFの操縦センスは抜群」

去年、学園で行われた「世界一のピザ作り」というイベントでは、彼がガニメデでピザ作りを行ったらしい。

ここまであからさまだと、もうツッコむ気にもなれない。

この男が黒の騎士団に関わっている可能性も充分にあり得る。

（となると、原作のこれからでも介入する可能性がありますね）

今までは目立った動きは無かったけれど、これからは充分にあり得る。

例えば、ナリタ連山の日本解放戦線殲滅戦。これはコーネリアに肉薄し、そのまま捕虜に出来る可能性がある。

向こうがこちらの動きを完全に読めていれば、そうなってしまつかもしれない。

「……………これは、私も出なければならぬかもしれないかもしれませんね」

ランスロットだけでは厳しいでしょう。

相手が1人増えるのであれば、こちらも1人増えればいいだけの事。そんな事を考えていた矢先、端末に着信が入った。相手は……ユーフェミア。

「ユーフェミア様、如何なさいましたか？」

「2人きりの電話です。もっと普通に話してくれても構いませんよ？」

あら、そうですか？ ならお言葉に甘えて…………。

「どうかしましたか、ユフィ」

「…………ゼロの事で、少し」

ああ、そう言えば…………ゼロ《ルルーシユ》がうつかりで、正体にまつわる言葉を漏らしてしまったんでしたっけ？  
不用意に「昔からそうだった」みたいな事を言っちゃうから、無駄に怪しまれるっていうのに。

「ゼロの正体が分かったかもしれない、とか？」

「！！ さすが、レイヤですね……………」

いえいえ、これでも長い付き合いですからね（嘘）。

ま、伊達にあなたの専任騎士やってませんよ。

「その、ゼロと少し話す機会があったのですが、その時に私と昔会った事があるような事を言っていて……………」

「ふむ、それで我が姫様は思い当たる人物がいる、と？」

『…………ルルーシュ、では無いかと』

わお、それ正解。

やはりこの時点から目を付けていたわけですか。

「ルルーシュ……………今は亡きマリアンヌ后妃が長子、第17皇子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア殿下の事ですか？」

『ええ。ゼロの戦略センス、それに彼の言動や行動から考えると、そうじゃないかと思うんです』

一応、ユフィには原作での悲劇を回避させるため、ある程度の勉強はさせてある。

汚いものを見せたがらないコーネリアには「皇族として最低限のたしなみ」と言いくるめておいた。

おそらく、これで行政特区のようなぶっ飛んだ行動は取らないでしょう。

「ルルーシュ殿下はこの地で亡くなられた。その報告をしてきたのはアッシュフォード家。…………アッシュフォードと言えば、かつてのヴィ家の後援でしたっけ」

『…………アッシュフォードが匿っていたと？』

「可能性の話です。ですが、ゼロ〃ルルーシュ殿下だとすると、自然とそういう図式が出来上がるのも事実です」

私の言葉に、無言になるユフィ。どうやら、何か考え込んでいるよ

うだ。

さすがに今のユフィは、考え無しにアッシュフォード学園へ行ったりしないとは思っけれど…………。

『……………何とか、ならない？』

「難しいですね。コーネリア総督ならば、無理矢理にでも何らかの手段を用いるかもしれません」

ルルーシュとナナリーが隠れている理由は、自分達は利用されたくないため。

彼が危惧している通り、皇族に見つかれば間違いなく、政治の道具として利用されるのは目に見えています。

例えば、政略結婚…………とか。あの2人、見た目はいいですね。

『では、私には何も出来ないのでしょうか……………』

「今の我々がすべき事は、この地を平定する事。荒事はコーネリア総督に任せ、あなたは政治に専念してください。…………そうすれば、彼らも安心できるでしょう」

いざとなれば、私がつまい事逃がしますから。

そんな感じでユフィとの連絡を終わらせると、ふうとため息を吐いた。

「とゆーか、兄さんどこにいらっしゃるんでしょうね……………」

敢えて危険な事に首を突っ込んだりしないはず。兄さんの思考パターンからするに、上手いこと避けて動くはずです。多分無事とは思うんですが………それにもう一つ、気になる事がある。

「……………Ｃ・Ｃの痕跡がどこにも見あたらない」

クロヴィスが死んだ後、バトラー將軍は本国へ戻されている。私もこっちへ来てからすぐにクロヴィスの研究について調査してみたが………全くそれらしきものが見あたらなかった。

まだ撤収されていないはずのナリタの研究施設。それも存在しなかった。

さらに、Ｃ・Ｃが拘束されていた毒ガスカプセル。確かに毒ガスが奪われたという事件はあったが、イレヴン虐殺は起きていない。

（まるで、最初からクロヴィスが研究をしていなかったかのようです）

もしかして、兄さんがＣ・Ｃ助けていたりして。

いやいや、さすがにそれは………無いと言い切れないのが恐ろしい。

「ふえつくしよんっ!!」

「どうした、風邪か？」

「いや……そんな感じじゃ無かったが」

トレーラーを運転しつつ、俺は助手席で呑気にピザを頬張るC・C・  
にそう返した。

何でこうなったか言い訳させてもらえるなら、原因はただ1つ。  
……クロヴィスの親衛隊に連れて行かれそうになっていたC・C・  
を助けたところだろう。

あの状況、原作を知る俺ならば分かる。あそこで放置しなければ、  
ルルーシュはギアスを得る事は出来ない、と。

だが、女の子が目の前で連れ去られる場面に遭遇したのだ。さすが  
に見てみぬ振りは出来なかった。

（今思えば、何て無謀な事を……）

相手が少数であった事と、完全に意識がC・C・の方へと向いてい

る事から、腰の銃を奪い取り、それを発砲。

……初めて人を殺した感覚は、何とも形容しがたいものだった。  
某鷹の目も「手に感覚が残らない」と言っていたが、まさしくそう  
だ。ただ引き金を引くだけなのだから。

「おい、ちゃんと前見て運転しろ」

「わかってる」

それから、なんやかんやで2人でこうして逃避行を続けている。

その……男女が一緒に行動しているわけだから、色々あったわけ  
だ。色々……うん。

そうなってしまうては一蓮托生なので、現在ブリタニアから逃げて  
いる。クロヴィスは死んだが、あの皇帝やV・VはC・Cを未  
だに探し続けている。

皇帝はともかく、V・Vはどこから出てくるか分からない。普通  
にアヴァロンの中にもどうやって入ってきたか分からないし。

（レイヤと合流する、という手も無くは無いが……）

我が前世での妹、玲夜ことレイヤ・フォーエンブルグは現在、ユー  
フェミア・リ・ブリタニアの専任騎士の座に就いている。

原作では枢木スザクがその座に就くはずだったが、アイツが既にそ  
の座に就いているのならばそれは無い。

……記憶がある可能性は充分にあり得る。

（だが、下手をしたら皇帝に見つかる）

いくら第3皇女の専任騎士とはいえ、所詮は皇帝の臣下。

あのロールケーキがその気になれば首が飛ぶ。さらに俺たちも捕まる可能性が無いとは言い切れない。

だから、アイツと合流するのは諸刃の剣ともなりかねない。

「しばらくは、このままの状態を続けるしかないな」

「ん？ 私は別に構わんぞ。お前とピザがあるならな」

「……………そーかい」

俺はピザと同格なのか？ 何気にショックなんだが。

と、恒例になりつつある受け答えをしていると、車内に取り付けたレーダーがこちらへ近づく機影をキャッチした。

移動速度と形状からするに、グラスゴー……………いや、無頼だな。

「となると、黒の騎士団……………いや違うな、日本解放戦線か」

ゼロがわざわざこんな無駄な事をするとは思えない。

無意味に一般人を攻撃すれば、それこそ民衆の支持は得られないと考えているはずだ。

しかし、日本解放戦線は違う。彼らにとって、ブリタニア全てが“悪”で、自分達こそが“正義”という認識となっている。

俺たちが乗ってるトレーラーも、KMFを輸送するためのものだ。おそらく、武装を奪いにでも来たのだろう。

「C・C、運転頼む」

「ん？ アレを使う気か？」

「ああ。……………蹴散らしてくる」

C・Cを運転席に座らせると、そのまま後部のコンテナへと移る。  
コンテナに搭載してあるのは、ちよつとばかり借りてきた試作機。  
……………漆黒の身体が鎮座している。

「さあ、行こうか？ 益荒男」

「やれやれ、私がこんな場所に担ぎ込まれるとは」

KMFコクピット内で、そう呟く。

私はあくまで、ユフィの騎士だ。もちろん軍人ではある。しかし、命令系統はコーネリアではなくユーフェミアにある。

……………まあ、ユフィ自身がそれを承諾してしまったのだから仕方ないが。

「とりあえず、我が姫様のお守りはあつちに任せましょう」

G-1ベースの後方には、特派が陣取っている。

少なくとも力量は本物なので、彼に任せておけば問題無いでしょ。

私の前には、5機のKMF相手に奮戦するグロースターとサザールンド数機の姿が。

グロースターが親衛隊用のマントを装着しているところから、おそらくはギルフォード卿。そして相手は……………藤堂と四聖剣ですか。

『フォーエンブルグ卿！？ 何故ここに……………』

「我が姫の命令です。ギルフォード卿、あなたは総督の救援に向かってください。彼らの相手は私が」

無頼改の1機が、私に向かって回転刃刀を振るう。

しかし受け止めず、最低限の動きでそれを躲す。回転刃刀はチェーンスターの原理であり、受け止めればそのまま食い込むからだ。

動きは確かに雑兵以上、そこらのパイロットでは相手にならないでしょう。……………ですが。

「機体性能が違ふんですよ……」

動きを予測し、側面から蹴りを叩き込む。

私の“ベティヴィエール”は直接戦闘を想定していないため、ランスロットほどの戦闘力はない。しかし、この程度は容易い。

「さあ、早く！」

『感謝します！』

グロースターが真っ直ぐ、コーネリアが足止めされるであろう地点へと向かう。

おそらく、間に合わなければユフィがランスロットを出すだろう。間に合えば、どうにでもなる。

ゼロもコーネリアとギルフォード卿の2人を同時に敵に回す余裕は無いはず。少しでも狂いが生じれば撤退命令を出すに違いない。

「と言うわけで、あなたの相手は私ですよ。藤堂鏡士郎！」

ブレードトンファを展開し、白い無頼改に向け、叩き下ろす。

回転刃刀で受け止められるが、ブレードトンファは西洋剣と同じく“重さ”で叩き斬る武装。簡単に受け止められると思わないでください――！

「ちょいさあつ――！」

『くうっ！』

この武器の最大の利点は、腕に握っているのでは無いというところ。つまり、トンファを使っている最中は腕が自由になる。さらに言えば、この機体のスラッシュハーケン……。

「指に付いてるんですよ――！」

手首を回転させ、人差し指に当たる部分を射出させる。直前に身を捻ってコクピットへの直撃は回避されたが、それでも右肩に突き刺さる。

「つ・か・ま・え・た」

その瞬間、不吉な予感を感じたのか、それとも拘束されたままを避けるためか、無頼改が右腕を自切する。

……だが、遅い。

距離を取ろうと後退しようとするが、突然機体がある場に崩れ落ちる。

「な、何だこれは!？」

さつきも言いましたけど、ベティヴィエールは直接戦闘タイプのKMFじゃない。だから一撃一撃の破壊力は小さい。

あくまでも、テストターだった私が専任騎士になったので、そのために戦闘力を付与したようなものですから。

ならば元々、何のために造られたKMFなのか。その答えはこれです。

「敵を殺すことなく、捕獲するためのKMFです」

ああ、脱出しようとしても無駄ですよ。

今スラッシュハーケンから流し込んだのは、KMFのシステムその物を完全に破壊するえげつないヤツですから。

「藤堂鏡士郎。あなたを国家反逆罪の容疑で逮捕します」

「卑怯な……!」

「戦争に汚いもクソありませんよ。それは軍人であるあなたもご存じのほうでは?」

……どうやら、四聖剣には逃げられてしまったようですが。

ま、これもある程度は原作通りです。ちよっとばかり展開が早まっ

てしまったけですけどね。

風峰陸斗

転生者の兄。20歳。

キョウト六家に流れを組む家系の出身らしいが詳細不明。家を出る際に「手切れ金」代わりに「不知火」を持って来た（曰く「盗んだんじゃない、借りただけだ。死んだら返す」）。

相手に「己の意志であるかのように疑似体験させる」ギアスを保有する。ギアスをかけられた相手は操られている事にも気づけない。使用制約はルルーシュ同様に「相手の目を直接見なければ発動しない」事などが挙げられるが、ギアスをかけられた相手は「人形」にならない、同じ対象に何度でも使用可能という優位性が存在している。

現在はC・C.と行動を共にしており、エリア11を逃げ回る生活を送っている。

搭乗KMFは「不知火」。

レイヤ・フォーエンブルグ

転生者の妹。第3皇女ユーフェミアの専任騎士。14歳。

ブリタニアの一般家庭出身だが、実力で専任騎士にまで上り詰めた才女。“閃光のマリアンヌ”の再来とも噂されるが、本人は至って興味無し。

アーニヤ・アールストレイムとは同期で、ダウンナー系な彼女と意思疎通が可能な数少ない人物。  
搭乗KMFは「ベティヴィエール」

#### 益荒男

紅蓮とは異なるコンセプトで開発された、試作型KMF。  
そのため、機体形状は日本製KMFの特徴的な流線型ではなく、ブリタニア製KMFに近いそれとなっており、コクピットもブリタニア製と同様である。  
製造途中で放置されていたものを陸斗が回収。自らギアスを用いて完成させた。

陸斗が「マスラオ」をイメージし、開発コンセプト「最高のスピードと最高の剣」に基づき、格闘特化型の機体に仕上げた。鎧武者風の装甲形状と後頭部のエネルギーケーブルが特徴。また、エナジーファイラーは胴体ではなく、両腰部のサイドバインダーにそれぞれ1基ずつ搭載されている。

長短の日本刀型MVSを装備。射撃兵装を装備しておらず、全て格闘兵装のみである。

#### ベティヴィエール

ユーフェミア・リ・ブリタニアの専任騎士、レイヤ・フォーエンブルグ卿専用機。

分類上、第六世代と第七世代の中間に当たる。当初は特派とは別の研究機関が開発していた試作機だったが、テストーとして選ばれた

レイヤが専任騎士に選ばれたため、実質彼女の専用機となった。敵KMF捕獲に特化した機体であり、直接的な戦闘を構想しておらず、武装の大半は後付けである。しかし、ランスロットに迫る機動性を持ち、レイヤの高い技量も相まって高い戦闘力を発揮する。主武装はスタントンファの代わりに搭載されたブレードトンファ（イメージはガンダムシュピーゲル）。スラッシュハーケンにはガウエイン同様に指に5基ずつ装備。また、このスラッシュハーケンは破壊力は小さいが、損傷箇所から操縦系にエラーを発生させるウィルスを流し込む事が可能。

名前の由来は、エクスカリバーを湖の貴婦人に返却したとされる、円卓の騎士の1人ベディヴィア卿。

番外編：転生兄弟IFその4「コードギアス」（後書き）

さて、ちょっとした意見調査です。

現在、IFの「リリカルなのは」の草案みたいのを書いてるんですが、主人公の能力は東方にすべきか、それともなのはの魔導士にすべきか、どっちがいいと思います？

どっちにすべきかで迷っているので、ご意見お願いします。

## 第85話：遙かなる異国の地へ（前書き）

投稿が遅くなつてしまいました。私は無事です。

ちよつと今回はgggg感が否めないかもしれませんが……よろしく願います。

## 第85話：遙かなる異国の地へ

「Side Leiya」

どうも、私です。

イギリス………もとい、魔法世界へ行くために設立された新部活「英国文化研究倶楽部」もとい、“アラ・アルパ白き翼”がようやく発足しました。この名称自体は「俺たちの辿った道を征くのだから、俺たちを超える勢いで行け」と、兄さんが言い出したのをきっかけに、エヴァンジェリンさん達がそれに乗っかって命名したとか。

「でも、このバッジ可愛いわよね」

「ええ」

今日は夏祭りという事で、私もアーニヤさんも浴衣姿です。

どこから調達したのかは分かりませんが、衣玖さんが私たちの分を仕立ててくれました。………本当に凄いですよね、あの人。

それで私たちの手元には、エヴァンジェリンさんが用意したという「部活の証」であるバッジ………白い翼の形状のものがある。

「それにしても、何故「無くしたら失格」なんて変なルールがあるんでしょうか？」

それだけがどうしても腑に落ちない。

茶々丸さんがバッジを持って来てくれた時、エヴァンジェリンさんからの伝言と一緒に持って来た。

「部活の証なのだから、出発までに無くしたら失格」と。

「さあね。それにしても随分甘いと思うわよ」

「どういう事です？」

「うちの師匠なんて、物を無くしたら即座に半殺しだもの」

前に指輪無くして本気で蹴り飛ばされたっけ、と青い顔で語るアーニヤさん。

……ああ、やっぱり兄さんの娘なんですネ、ゆちるさんって。でもそう考えると、確かに部員失格なのは緩いかもれません。何て言うか、何かありそうナ……。

「よーよー、その嬢ちゃん達よお！ いいバッジ持ってんじゃねえかー！」

「へ？」

場違いにも程がある陽気な声に、思わず振り向く。

そこには、何だか変なお面を付けた浴衣姿の女の子……てゆーか、そんなカツコで何してるんです、ゆーなさん。

「何い、この変装を見破るだなんて……さすがはレイヤちゃ」

「とえーいつー！」

「ぐふうっ！？」

何か言いかけたゆーなさんは、どこからともなく現れたまき絵さんによつて吹っ飛んだ。

……いくらお祭だからといって、あまりにはっちゃけ過ぎるのは良くないと思いますよ？

「なし！ 今のなしネ。忘れて！」

「あ、あゝ……2人ともかわええバッジしとるな。ソレ、何のバッジ？ ちょい見せてくれへん？」

亜子さんがそう、私たちのバッジに視線を向けている。  
そこでちらつと、アーニヤさんと視線を交わす。

（あれ、怪しいですね？）

（うん、怪しい）

アイコンタクト成立。この間、わずか0・1秒。

明らかに強引すぎる。とりあえず、適当に相手して離れる事にしましょう。

「ううん、手にとって見てみたいな。ほら、この白くて羽根っぱいところとかたまにやい……………」

「残念ですが、これ面白い物なので」

ひよい、とバッジに手を伸ばそうとしていたまき絵さんを制し、懐にしまい込む。

……………もしかしてこれ、エヴァンジェリンさんの差し金？

だとすると、「無くしたら強制退部」というイミフなルールにも納得出来てしまう。……………大方、こっやって困つてるところを見て楽しもうとも思ってるんでしょね。

（とりあえず、後あのエターナルロリータは殴るとして）

まずは、目の前の困ったさん達をどうにかしなければなりませんね。いくら「まほら武道会」の猛者とはいえ、10歳の子供相手ならどうにでも出来るとでも思ってたんでしょうか？

……………とりあえず、私を舐めてくれたお礼はたっぷり返してあげる事にしましょう。

「にゃ、にゃんで!？」

「いくら何でも怪しすぎです。大方、エヴァンジェリンさんに唆されたか何かでしょう」

そう指摘してみると、思わず拍手してしまいたくなるほど見事に真っ白になった。

あゝ……………やっぱりそうでしたか。

「ええい、ひつとらえい！」

ゆーさんの声に従い、アキラさんと亜子さんが私たちを捕まえようとすけれども、私たちの行動の方が早かった。

素早く身を屈めて2人の手から逃れ、身を翻して逃走開始。

「ま、までー！！」

む、さすがは運動部。身体強化していないとはいえ、私たちにぴったりに追従してくるとは……………。

「どうする？ 相手、一応一般人でしょ？」

まあ、手荒な真似は出来ませんよね。

ゆーさんは明石教授の娘さんで、魔法使いの素質がありそうですけど……………うーん。

それでも、あの人達なら大丈夫な気がするんですよ。何ででしょう？

「とりあえず、あれを振り切って他の人達と合流しましょう。話はそれからです」

ゆーさんがアレだと、他の人もバッジを狙っていきそうです。例えば、ハルナさんとかハルナさんとかハルナさんとかハルナさん

とか。

……あれ、どうしてでしょう。あの人が1番危険人物のように思えてきました。

「てか、あの人大丈夫なの？ 友達2人いなくなっただんでしょ？」

大丈夫だと思いますよ。

ある意味、信じてるみたいですし。「あの2人なら大丈夫だ」って私もそうだと思います。どうせ、嫌でも私たちの前に立ち塞がる事になりそうですし。

（でも、この様子だと諦めそうに無いですね）

ま、兄さんが強く言えば何とかなるでしょう。

……そう思っていた時期が私にもありました。

まさか、彼女達があそこまでバカな事をしでかすとは……。

そんな風に思わず呆然とするのは、私たちが魔法世界へと渡った後でした。

〔Side Out〕

「Side Haruna」

それ、やっぱり間違いないっぽい？

「多分ね。先生達の話だと、こっちの世界にはいないっぽいよ」

さすが朝倉。さよちゃんの協力の下、先生達の話盗聴するとは……。

でもそれだと、2人はどこに行っちゃったわけ？

「可能性が高いのはほら、魔法世界だって」

「まほーの国、か……」

聞くところによると、ネギ君もそっちに島流しにされちゃったみたいだし……。

どうにか、向こうへは行けないかな？ 例のバッジ争奪にも失敗しちゃったし。

「難しいんじゃない？ やっぱり厳重警備とかあるだろうし」

「うーん…… 風峰先生にこっそり付いていくってのは？」

「あの人だと、尾行してるのに気づきそうだけど」

……だよね。

でもやっぱし、このまま人任せにはしたくない。

イギリス行きは……まあ、いいんちよが何とかしてくれそうかな。

「どうにか向こうに行つて、それから考えるしかないわね」

〔Side Out〕

〔Side Rikuto〕

イギリスへ渡るのを明日に控えた俺は、ちょっとだけ紫に頼み、こつそり幻想郷へと戻つて来ていた。

宴会の時にちよつとだけ手をあわせに来たとはいえ、今回はかなりの大事になりそうだから、しっかりと報告をしておきたい。

「というわけで、またちよつとばかり世界を救う事になりそうだ」

苦笑しつつも、そう瑪瑙の墓前に報告する。我ながら、本当に良太

郎君の運の悪さを笑えない。

これで世界の危機とやらに関わるの何度目だろう？

俺としてはさっさと後陣に後を譲って隠居したいんだがな。

「衣玖とも……………まあ、うまくやってる」

魔法世界にも一緒に行ってくる。

俺としては、幻想郷の方でじっとしていて欲しいんだが……………さすがに無理だろう。

それなら一緒にいた方がいい。手の届く範囲でなら守ってみせる。

「それじゃあ、行ってくる」

そう言い遣し、墓前に背を向ける。

境内へ戻るとそこには紫が待っていた。

「終わったの？」

「ああ」

もちろん、全部終わったわけじゃない。

帰ってきたら色々やる事がある。墓石の掃除とか補修とか……………20年近くほったらかしだったから、しっかり綺麗にしないと。

「それじゃあ戻してくれ。戻らないと心配される」

「……………いいの？」

何がだ？

「あの子達に会って行かなくて」

そう言つて、紫は神社の方へと視線を向ける。  
明かりが灯っていないところから、おそらく霊夢は留守にしている  
んだろう。

「……………いや、いい」

わざわざ捜してまで、会う理由は無い。  
今度帰ってきてからまた、宴会で顔を合わせればいい。

「いや、そつちじゃなくてね……………」

何だか言いにくそうに困つた様な表情を浮かべる紫。  
何だ？ まだ何かあるのか？  
霊夢以外に会う相手なんて、他にいないと思うんだが。

「……………アリスよ」

……………。  
すまん、もう1度名前を言ってくれないか？

「アリス・マーガトロイド、あなたも知ってるでしょう？」

「……………いる、のか？」

「いるのよ」

紫の言葉に、思わず顔が引き攣る。  
衣玖の話でも「人形師」がいるとは聞いた事があつたが……………まさ  
か。

「会つてみたいんじゃない？ “父親”としては」

「…………………………」

もう、何十年も昔の話だ。……………今更どんな顔をして会えと？

「あの子はその事を知らない。自分が他の魔界人のように、魔界神に“創られた”存在ではなく、魔界神と妖怪との間に“生まれた”混血種である事を」

1つだけ言っておく……………というか、言わせて欲しい。

別に俺は浮気したわけじゃない。と言うより、関係を持ったのは衣玖……………というか、瑪瑙と一緒にになる前に1度だけ。

それを神綺が後で勝手に色々していたらしく、隠し子疑惑がわき上がった時はとにかく大変だった。

「もちろん、どこぞの歩くハーレム製造器が自分の父親とも、ね」  
「その呼び方やメロ」

なお、誤解のないように言っておくが、別に俺は自分から作っているわけじゃない。

苦しい言い訳かもしれないが、勝手に周囲が作るだけだ。

……………まあ、説得力がないのは俺が1番分かっているけども。

「……………会うにしても、今はやめておく」  
「あら、いいの？」

それこそ、帰ってきてからだ。

すっかり終わらせて、それから話したい事を話せばいい。

もちろん、父親だと名乗り出るつもりはない。その事について神綺が話していないのだから、俺が喋るわけにも行かないし。

……………1度魔界に行く必要があるのかも。

「衣玖に絞め殺されたりしないようにね？」

……善処する。

「魔界に行った」というだけで、普通に神綺の事まで探り当てるかな……。

[Side Out]

[Side ????]

ふ……ふ、  
ふ ふ ふ ふ  
は は は は は は は は は は !!

危なかったぜ……まさか、スキマババアにギアスが通用しないと  
は思ってたからな。

しかし、アイツも俺が真祖クラスの再生力があるとは思ってなかっただろう。……再生はしんどいし、気力削るからイヤだけど。

「このミリオンマスターの北山史郎様を舐めんじゃねえぜ!」

さすがに、灰になった状態からの再生だからな。結構苦労したぜ……。

ただぶつ切り状態だけなら、再生するのに時間かからないってのに

…… 風峰の野郎。

だがこれで確信した。風峰は転生者だ。トリッパ

「おっと、そろそろ魔法世界編が始まる頃だったか？」

薬味がないからどんな風に進むかわかんねえが、とりあえずアレだろ。魔法世界崩壊。

それ食い止めればハッピーエンドだし、後は“完全なる世界”倒せばいいんだし。

フェイトとかデユナミスとか強そうだけど、俺にかければあんな連中……。

「まあ、力がいくら強くても、それを操るだけの技能が無ければ意味はないけど」

「あ？」

その声に振り向くと、そこに立っていたのは……。

あ、あんた、まさか……。

「久しぶりね、北山史郎」

「あ、ああ、久しぶりだな」

けど、何であんたがここに……。

「ちょっと野暮用だね。それより、あなたがまさか復活していたと

は」

「ふつ、この“ミリオンマスター”を甘く見るなよ？」

何度殺されようが無敵無類。最強無敵のチートオリ主だ。  
あんなスキマババアにやられるほど、俺は弱くねえ。

「……………とんだ道化ね」

「何だと？」

「ただ力があるだけじゃダメなのよ。その証拠にこれまで何も出来ていない。あなたに対しては全部マイナスだもの」

このアマツ！！俺を怒らせるとどうなるか分かってるのか！？  
エクスカリバーでぶった切ってやろうと思っていた矢先に、コイツはさらに口を開く。

「それでも大切な資源だから、こうやって回収しに来たわけだけど」  
「は？」

何言ってやがる。わけ分かんねえ。

けど、そいつが俺の肩に触れたその瞬間、俺は立っていられなくなり、その場に崩れ落ちた。

な、なんだこれ……………お前、何しやがった……………！？

「あなたに与えたものを返してもらったのよ。要するに、転生させる前に与えた“チート能力”ってヤツを」

「な、何だと……………！？」

「ああ、安心して。あなたにはちゃんと代わりのものをあげるから  
そう言うそいつの手にはどす黒く光る、血の塊のようなものが乗っ  
ていて……………」

お、おい、何するつもりだ。や、やめろ……。。

「思う存分暴れて来なさい。もう1つの世界でね」

## 第85話：遙かなる異国の地へ（後書き）

と言うわけで、これで転生者・北山史郎は完全に退場です（断言します）。

果たして何が残されるのか……。

なお、次回から魔法世界編に突入します。

もしかしたら番外編をちょこちょこ投下するかもしれませんので。

## 第86話：軋む齒車（前書き）

活動報告にも書きましたが、ここ数日間、パソコンの調子が悪くてアクセス出来ませんでした。

ですが、どうにか直り、こうして次話を投稿する事が出来ました。本当にお待たせいたしました。

それとですが……あとがきにて、今後についてと次回作に関するお知らせがありますので、一読お願いします。

## 第86話：軋む齒車

「Side Rikuto」

どうしてこうなった。

俺たちの心の中はその思いで埋め尽くされていた。

「……………なあ、衣玖」

「はい？」

「幻想郷に腕のいい医者がいるって話、前にしてたよな？」

俺がいない間に、幻想郷も随分と様変わりしたらしい。

いつの間にか博麗神社も「妖怪神社」と有名になったらしいし、家計も火の車らしいし（これについては真剣に考えていかなければ）。その中でも気になったのが、迷いの竹林に診療所が出来たとか出来てないとか。

「ええ。正確には医者では無く、薬師ですが」

「帰ったら紹介してくれ。胃薬が欲しい」

ネギ坊主がいなくなっただけでようやく解放されたと思っていた胃痛がぶり返してきた。

いっそのこと、もう何もかも投げ出して幻想郷に帰ろうかな……………？

「くらくらくら！ 現実逃避するな！」

夢の世界へと旅立とうとしていた俺を、アスナのその声が引き留める。

……………頼むから、引き留めないで欲しかったな。

「だって、これだぞ!？」

俺が指差したのは、ついさっき発行されたばかりの手配書。賞金額はそこそこ高い方で、おそらく「数年は遊んで暮らせる額」というやつだろう。

だが問題はそこじゃない。手配書の写真だ。

「あの人達、何やってんですか……………」

ぐったりした表情でレイヤがそう力ない声を絞り出す。比較的良識派である彼女や高音達は似たような表情をしている。手配書にはしっかりと、明石達を筆頭に俺の生徒達が写っていた。しかも本名で。

「『ゲートポート破壊テロの容疑者』……………しかも証拠映像まで押えられてるんじゃ、下手に手出し出来ないぞ」

本当に、どうしてこうなった。

イギリスまでやってきたアイツらを、無理矢理にでも帰国させておくべきだったか。

いや、旅行自体は雪広が手配したものだから、俺がどうこう言う筋合いは無いのだけでも。

もちろん、一般人のアイツらがこんな大それた事をしでかすはずがない。何者かが後ろで手を引いているのは間違いない。

「……………やる事が増えたな」

どこにいるのか分からない生徒達を探し出し、保護する。帰る手段については……………まあ、紫を当てにしよう。

「月詠、アイツらと連絡を取りたい」

「ええですけど、少しお時間かかりますよ？」

「構わない」

“完全なる世界”ならば、何らかの情報を掴んでいるかもしれない。今回の事についてはもちろん、いなくなった綾瀬達についても、だ。俺たちよりも魔法世界については詳しいからな。

「よし、今後の俺たちの行動について説明する。集まってくれ」

まず、当初の予定通りに“完全なる世界”と連携を取りつつ、最優先目的を遂行する。

これについてはまた、説明の機会を設ける。……さすがにこの場で「魔法世界崩壊」について話すわけには行かない。しかし、同時進行で明石達を探さなければならない。それも広大な魔法世界に散らばっているであろう7人を。

それを全部成し遂げるとなると、さすがに時間が足りない。

「だから、ここでチームを2つに分けようと思う」

1つは、完全なる世界と合流。こつちには俺と月詠が付く事になる。そしてもう1つが明石達の捜索を行う。これは探查能力の高い衣玖が率いる形になる。後、レイヤもだな。

可能な限り、お前達の意見を聞きたいんだが……どうだ？

「ゆーな達、怪我してるかもしれへんし……うち、みんなを探す方に行きたいんやけど」

「私はお嬢様の護衛ですので………」

木乃香と刹那は搜索班に参加、と。  
アスナとアーニヤちゃんは どうする？

「あー、私も搜索かな。ちょっとアイツらとは顔合わせづらいとい  
うか……………」

まあ、アスナの言いたい事も分かる。

かつての大戦では、利用する側と利用される側だったのだから。微  
妙な感情がそこにあるだろう。

ならアスナも搜索班だな。で、アーニヤちゃんは？

「私はレイヤのお目付役だから、一緒に行きたいです」

「ふむ、その心は？」

「こいつ、目を離したら絶対無茶すると思いますから」

…………… まあ、それは否定出来ない。

こっち魔法世界に来る前も、危険な自己流魔法作ってたし。あんな恐ろし  
いもの見た事無いぞ。

あんなの、俺でも追従出来ん。

「高音達はMMに残るんだったな？」

「ええ。私たちはあくまで、麻帆良学園からの短期留学なので」

あまり下手にMMを離れられない、か。

そこまで遠出出来る身分じゃない。せいぜい、オスティア辺りが関  
の山…………… かな。

よし、くれぐれも「マズイ」と思ったら逃げる事だけを考える。い  
いな？

「…………… はい！！」「……………」

さてと、俺達がまず向かうべきは…………。

[Side Out]

[Side Iku]

MMで陸斗達と別れ、私たちは小型艇を借り受け、行方不明になった人達の搜索に入った。

…………しかし、わざわざすみません。面倒な手続きを全て押しつけてしまって。

『いえ、構いませんよ。一大事というのは分かっていますからね』

目の前に浮かぶモニターには、眼鏡姿の男性の姿が。

クルト・ゲーデル。元“紅き翼”の一員で、現在はMM元老院議員

とオステイア総督を兼任されている方。  
私にも以前、陸斗を通じて面識があります。

「ところで、彼女達が指名手配された経緯について教えていただけませんか？」

「わかりました。そもその始まりは昨晚の事でした」

私たちがMMに到着したのは早朝。

ゲートポートで陸斗に群がる輩を蹴散らしつつ、全ての手続きを終えてホテルに到着したのが2時間後。

その日は軽く市内の観光をして、翌日から本格的に動くはずだったんですが……そう思っていた矢先にあの事件です。

『昨晚、ゲートポートが突然起動し、警備の者が駆けつけるとそこに数名の少女がいたそうです』

「突然起動した？　ですが、ゲートは」

『ええ。向こうから操作する事は不可能です。なので、それについては調査中です。彼女達は混乱していて、とりあえず連れて行くこうとしていた時、いきなり攻撃を受けて気を失った……と、警備員は語っています』

その状況、確かに彼女達が圧倒的に怪しいですね。

聞くところによると、映像が決定的な証拠になったそうですが？

『しっかりと映っていましたよ。彼女達が破壊行為を行う様子が。

……百聞は一見にしかず。どうせなら見てみますか？』

「……………お願いします」

あまりいい予感はないけれども、その映像を見せてもらおう事にした。

……確かに、裕奈さん達ですね。うわ、思い切り暴れてますよ目茶苦茶に。

裕奈さんなんて銃乱射してますし、まき絵さんはリボンで滅多打ち……これ、怖いですね。

「…………捏造の疑いは？」

『当然、その可能性も考慮しました。ですが、それらしき痕跡は皆無です』

とはいえ、彼女達が自発的に行動するとは思えない。

何せ、平和な島国の女子中学生です。こんな魔法の世界のゲートポートを破壊する理由も能力も持っていない。

そうなると、考えられるのは何者かに操られていた可能性ですが……。

『それを確かめる術はなし、ですね』

当事者がここにいるならともかく、いないのであれば痕跡を調べる事は不可能。

この映像があるのならば、容疑者を特定して指名手配をかけるのは難しくないでしょう。

と言うより、今現在そんな状況になっているわけですが。

「情報ありがとうございます。また何かありましたら、ご連絡をお願いします」

『ええ。…………では、道中お気を付けて』

ふう、まさかあの少年がここまでのやり手に成長するとは…………。

モニター越しとはいえ、ちょっと緊張してしまいました。

通信機の電源を切ってから、甲板に出る。そこには魔法世界の広大

な大地が伺える。

アスナさん達も既に甲板に出ており、私の姿を見ると近づいてきた。

「衣玖さん、どうでしたか？」

「彼女達が『操られていたかも知れない』という可能性が浮上しました。しかし、現時点で断定は出来ません」

「そっか……………」

あくまでも、彼女達が破壊行為を行った事に変わりはない。

だから、いくらクルトさんといえど、指名手配を取り消す事は出来ない。それが現状です。

賞金稼ぎに狙われる前に、一刻も早く保護しなければ……………。

「なあなあ、アスナ」

「ん？ どうしたの」

「アスナって……………まほーの国に来た事あるん？」

あー、色々と手慣れていましたしね。

普通に疑問に思ったりするのも当然でしょう。

「来た事あるって言うより、こっちの出身なの」

「そ、そうなん！？」

「……………ずっと昔の話よ」

ふっと懐かしそうな顔でそう呟くアスナさん。

もう10年近く昔になりますね。それからずっとこっちには来ていないようです……………。

考えてみると、私もその辺りの事情はそこまで詳しいわけじゃありませんし……………それに。

（彼女もあまり話したがらないようですし）

陸斗の話によると、長い間辛い目に遭ってきたようですし。辛い記憶とそうでない記憶が複雑に絡み合っているのかもしれない。

「では、とりあえずおさらいしましょうか」

現在、この魔法世界に散らばっているとされる3 - Aの生徒は全部で7人。

裕奈さん、まき絵さん、亜子さん、アキラさん、和美さん、ハルナさん、そして……さよさんです。

私たちは世界各地を回りつつ、彼女達を探します。

「でも、どうやって探すんです？　ただ闇雲に探すだけではダメだと思つのですが……」

「そこは私にお任せを」

私の「空気を読む程度の能力」ならば、ある程度の距離があっても感知する事が可能です。

何せ、これでも女子寮の管理人でしたから、彼女達の独特の“空気”は既に覚えています。

……と言うより、アレは忘れようが無いと思いますが。

「まあ、彼女達もかなり強かですし、危険も潜り抜けているとは思いますが」

「た、確かに。パルなんて逆に儲けていそう……」

あの人、無駄に根性ありますからね。

案外、隠された才能が開花して、大儲けしていそうです。

……と、そう言えば、陸斗達はどうしているんでしょう。  
最初に行きたい場所があるとか言っていましたけど……。

[Side Out]

[Side Rikuto]

MMを出立して4時間ちよつと。

月詠によると、現在“完全なる世界”は例のラストダンジョン『墓  
守り人の宮殿』に仁を構えているらしい。

つまり、アイツらと会うためにはオスティアまで行かなければなら  
ない。

だが、その前にちよつと行かなきゃならない場所があり、会わなく  
ちやならない相手がいる。それは……。

「それで兄さん、いったい何処へ行くつもりなんです？」

「着いてくればわかる」

俺たちが今いるのは、自由交易都市グラニクス。

辺境の方ではかなり栄えている街で、規模が大きい分治安が悪いところもある。

「ところで、いったい誰に会って言うんですか？」

「ん〜……20年前にちよつと世話をしたヤツでな」

あの頃はまだ場末の酒場で下働きしていたガキだったんだが、大戦後の混乱でめきめき頭角を現し、今やこの町の名士の1人。

さつき見てきた闘技場も、そいつが経営しているって話だ。

……まあ、色々あって助けられた事もあるし、逆に世話をした事もあって、前々から「是非尋ねてきて欲しい」と言われていた。

この地方に誰かがいる可能性というのもゼロではないので、辺境の方ではそいつに頼んだ方が情報も手に入りやすいだろう。

どちらにせよ、1度顔を見ておきたい事もあるし。

「……………つと、ここだな」

目の前にそびえ立つ巨大な建物。さつきから荒くれっぽい男達の姿も伺える。

……………闘技場を経営しているのだから、拳闘士団を抱えていても不思議じゃないか。

「……………あれ？」

「どうした、レイヤ」

「いえ、聞き覚えのある声が……………」

レイヤに言われた通り、耳を澄ませてみる。

あ、言われてみれば確かに……って、この声まさか。

俺たちは無言で顔を見合わせ、そのまま中へと踏み入る。不法侵入じゃないぞ、予め連絡はしておいた。

そして、そのまま進んでいくと、そこには見覚えのある娘達の姿が……。

「…………お前ら、何やってんの？」

そう声をかけると、ハツとしたように顔を上げて俺たちの方を見る2人。

大河内と和泉…………その服装は給仕のそれで、首には鍵付きの首輪が。って、その首輪まさか…………。

「…か、風峰先生！」

「ああ、久しぶり。と言ってもこの前イギリスで会ったばかりだが」

それにしても和泉、大丈夫か？

何か顔色が悪いし、熱っぽく見える。何というか、病み上がり？

いや、それは置いておくにしても、お前ら何があった。どうしてその首輪を…………。

(…………これ、もしかすると相当厄介な事になっているのかもしれないな)

とりあえず、責任者に話を聞く事にしよう。

[Side Out]

「Side Yue」

……どうやら、ネカネさんがうまく動いてくれたようですね。ですが、何故ハルナやまき絵さん達がこうなっているのですか。

「ユエ、どうかしたの？」

「いいえ、何でもありませんよ」

同室のコレット・ファランドールにそう返す。

……なお、ここでの私は「ユエ・ファランドール」。表向きはコレットの従姉妹という立場になっています。

それにしてもネカネさん、いきなりアリアドネーに転送するとは……しっかり防御してなかったら、本当に記憶喪失になってるところでした。

まあ「記憶喪失のフリをしろ」と言われていたので、そのように行動していたら、コレットが世話を焼いてくれたので結果オーライでしょう。

「それ、こないだ発表されたばかりの手配書だよね？ ゲートポ―ト破壊犯人の」

「え、ええ」

「何でも旧世界の人間だって話だけど、物騒な話だよね」

………… ネカネさんは、ネギ先生を英雄にするために行動している。ですがハルナはともかく、こちら側には無関係の裕奈さんやまき絵さん達まで巻き込むのは些か…………。いえ、これこそが最善の道。ネギ先生にとっても、のどかにとっても、そして………… 私にとっても。

(………… そう、正しいのは私たちです)

間違っているのは、風峰先生やレイヤさんなのだから。きっと、最終的にハルナ達だって幸せになれるはずです。

## 第86話：軋む齒車（後書き）

お知らせですが……………ここ最近、私自身の多忙さが際立ってきた事と、モチベーションの低下などから、更新スピードがガタ落ちになるかもしれません。

1週間に1回更新できればいい方……………だと思います。

なお、その一方で次回作の構想も進めており、読者の皆さんの意見なども参考にした結果、現在更新凍結中となっている「リリカルワールドの破壊者たち」を再構成した上で、再び書き直す事を考えております。

とはいえ、まだ未定ですのでこの先どうなるかは分かりません。もしかししたら、気が向いた時に話を投稿するかもしれませんので、ご了承ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8675o/>

---

魔法先生ネギま ～ 幻想に生きる者

2011年3月23日22時53分発行